

首都大学東京 博士（考古学）論文

紀元前 4 千年紀ナカダ文化墓制から見た先史社会構造の検討

：エジプト・ナカダ遺跡の事例研究

黒沼 太一





## 目次

1.	はじめに	1
1.1.	紀元前4千年紀のナイル河下流域とナカダ文化の研究	1
1.2.	研究の視点と目的	3
1.2.1.	ナカダ文化の墓地研究と階層化の研究の現状	3
1.2.2.	本論文の目的と意義	4
1.2.3.	本論文における地域名と時代名の諸設定	4
1.2.4.	本論文の構成	5
2.	ナカダ文化期の土器分類、および相対編年・絶対編年	6
2.1.	土器の分類	6
2.1.1.	ピートリーによる分類案	6
2.1.2.	ピートとドループによる分類案	9
2.1.3.	マイヤースによる分類案	10
2.1.4.	フェーダーンによる分類案	10
2.1.5.	胎土分類	11
2.1.6.	ハートマンによる土器分類	13
2.1.7.	まとめ	13
2.2.	相対編年	14
2.2.1.	継起年代	14
2.2.2.	段階編年	18
2.2.3.	ヘンドリクス編年	19
2.2.4.	アビュドス編年	20
2.2.5.	コンピューターによるセリエーションとその結果を用いた時期分割案	23
2.2.6.	ナカダ文化の相対編年研究の総括と本論文で基準とする相対編年	25
2.3.	絶対年代	25
2.3.1.	ナカダ文化研究への放射性炭素年代測定の導入	26
2.3.2.	1980年代以降に行われた、放射性炭素年代測定と相対編年との関連性の検討	26
2.3.3.	ナカダ文化研究における絶対年代のまとめと問題点	28
2.4.	まとめ	29
3.	研究史：社会構造の埋葬考古学的研究	31

3.1.	考古学一般における墓地資料を用いた社会構造の研究史	31
3.1.1.	葬送行為の人類学的研究	31
3.1.2.	葬送行為の考古学的研究	33
3.1.3.	墓地資料から社会構造の検討を試みた事例に関する研究史のまとめ	41
3.2.	ナカダ文化墓制に関わる先行研究の概要	41
3.2.1.	ナカダ文化研究における墓制研究の概要	41
3.2.2.	ナカダ文化墓地研究の問題点	46
3.3.	分析の目的と着眼点の設定	48
4.	ナカダ遺跡とナカダ地域の概要	49
4.1.	ナカダ遺跡の地理的環境	49
4.1.1.	前4千年紀における上エジプトの気候と景観	49
4.1.2.	ナカダ遺跡の所在地とナカダ地域の主要な集落	49
4.1.3.	ナカダ遺跡の立地と周辺の地形	50
4.2.	ナカダ遺跡における調査史	52
4.2.1.	ナカダ地域の歴史的環境と主な王朝時代遺跡の調査	52
4.2.2.	本論文で対象とするナカダ遺跡を構成する諸地点とその所在地	53
4.2.3.	ナカダ地域中核部に所在するナカダ文化期遺跡の調査史	56
4.2.4.	ナカダ遺跡における調査史のまとめ	70
4.3.	ナカダ遺跡周辺遺跡での考古学的調査	70
4.4.	ナカダ地域とその周辺の考古遺跡のまとめ	73
5.	資料と方法	74
5.1.	資料：ナカダ遺跡出土資料の基本情報	74
5.1.1.	未公刊記録とその特徴	74
5.1.2.	分析対象の墓地と墓の数	75
5.1.3.	定量的な分析のため副葬品の区分とその点数	75
5.2.	方法	76
5.2.1.	分析対象属性の設定	76
5.2.2.	分析の手順と方法	79
5.2.3.	大墓地東地区と同西地区におけるグリッドの設定	82
6.	ナカダ遺跡から得られる埋葬属性の通時的分析	84

6.1.	はじめに	84
6.2.	遺構としての墓に関する属性の分析	84
6.2.1.	墓の規模 (m <sup>2</sup> ) の分析	84
6.2.2.	墓の平面形状の分析	91
6.2.3.	墓の構造の分析	95
6.2.4.	遺構としての墓の特徴に関する分析のまとめ	98
6.3.	出土遺体に関する属性の分析	99
6.3.1.	墓 1 基あたりの被葬者の人数の分析	99
6.3.2.	被葬者の性別と年齢の分析	102
6.3.3.	出土遺体に関する属性の分析のまとめ	105
6.4.	埋葬様式に関する属性の分析	105
6.4.1.	埋葬様式に関する検討	105
6.4.2.	遺体の加工に関する検討	107
6.4.3.	埋葬様式に関する属性の分析のまとめ	110
6.5.	副葬品に関する属性の定量的な分析	110
6.5.1.	副葬品の総点数の分析	110
6.5.2.	副葬品の種類数の分析	117
6.6.	ナカダ遺跡から得られる埋葬属性の通時的分析のまとめ	125
7.	クラスター分析	127
7.1.	分析結果	127
7.1.1.	大墓地東地区	127
7.1.2.	大墓地西地区	143
7.1.3.	大墓地南地区	158
7.1.4.	T 墓地	164
7.1.5.	B 墓地	172
7.2.	まとめ：クラスター分析から見たナカダ遺跡の社会構造の複雑化と単純化	181
8.	希少品とクラスターとの関連性の検討	185
8.1.	希少品の定義と種類	185
8.2.	希少品の概要	186
8.2.1.	搬入品	186
8.2.2.	精製品	194

8.3.	資料と方法	195
8.4.	分析結果	196
8.4.1.	ナイル河下流域内からの搬入品	196
8.4.2.	ナイル河下流域外からの搬入品	209
8.5.	ナカダ遺跡における希少品と上エジプトにおける供給	211
8.6.	まとめ	214
9.	上位クラスター構成墓の空間的分析	215
9.1.	はじめに	215
9.2.	墓地の空間的分析に関する先行研究	215
9.2.1.	概要	215
9.2.2.	問題点	217
9.2.3.	解決策と資料、分析方法の設定	219
9.3.	ナカダ遺跡の各墓地の拡大過程	219
9.3.1.	大墓地東地区	220
9.3.2.	大墓地西地区	222
9.3.3.	大墓地南地区	228
9.3.4.	T 墓地	228
9.3.5.	B 墓地	230
9.4.	各墓地における上位クラスター構成墓の分布	232
9.4.1.	大墓地東地区	232
9.4.2.	大墓地西地区	235
9.4.3.	大墓地南地区	238
9.4.4.	T 墓地	239
9.4.5.	B 墓地	241
9.5.	ナカダ遺跡各墓地における上位クラスター墓の分布のまとめ	243
10.	ナカダ文化期におけるナカダ遺跡	246
10.1.	ヒエラコンポリス遺跡の概要	246
10.2.	アビュドス遺跡の概要	248
10.3.	ナカダ遺跡・ヒエラコンポリス遺跡・アビュドス遺跡の同時代的比較	250
10.3.1.	ナカダ I 期	250
10.3.2.	ナカダ II 期前半	251

10.3.3.	ナカダⅡ期後半	252
10.3.4.	ナカダⅢ期	253
10.4.	ヒエラコンボリス遺跡・アビュドス遺跡と比較した際のナカダ遺跡の特色	254
11.	結論	256
11.1.	まとめ	256
11.1.1.	属性分析に基づく墓地の序列化	257
11.1.2.	クラスタリング	259
11.1.3.	希少品の占有	260
11.1.4.	墓地内における特定の墓の偏在	261
11.1.5.	ナカダ遺跡の上エジプト地域における位置づけ	262
11.2.	今後の課題	263
11.2.1.	遺物研究の組み込み	263
11.2.2.	未公開記録を用いた研究の限界点と可能性	264
11.3.	結語	265
	引用文献	268
付編 1.	博物館所蔵資料コードの一覧	293
付編 2.	副葬品・面積・大墓地東西エリア細分段階・基本段階・ノート記載事項の墓別一覧	297
付編 3.	被葬者人数・性別別人数・基本段階・ノート記載事項の墓別一覧	309
付編 4.	クラスター構成墓の詳細	321
	2変数によるクラスタリング	321
	3変数によるクラスタリング	327
付編 5.	博物館などで所蔵が確認できたナカダ遺跡出土遺物の墓別一覧	335
	大墓地南地区	335
	大墓地西地区	337
	大墓地東地区	363
	B 墓地	408
	T 墓地	410
	G 墓地	413

## 図表目次

図 1.1. ナイル河下流域とその周辺地域の現代の都市と遺跡の所在地 (Moeller 2016: Fig. 4.1.改変・加筆)	2
図 2.1. ピートリーによる 9 種類の土器分類と各分類の主要な土器型式 (Petrie and Mace 1901: Front piece)	7
図 2.2. S.D.編年構築用短冊原本の一例 (Courtesy of the Petrie Museum of Egyptian Archaeology, UCL)	17
図 2.3. 絶対年代と S.D.、段階、ヘンドリクス、アビュドス編年の対応関係 (Hartmann 2016: Abb. 87 改変)	21
図 2.4. ナカダ文化の相対編年の対応関係 (Hartmann 2016: Abb. 49 改変)	30
図 2.5. 本論文で使用する時間軸、絶対年代および主要な相対編年案の対応関係 (Hartmann 2016: Abb. 87 改変)	30
図 4.1. ナカダ地域周辺の地形 (■は現代の都市または集落を示す)	51
図 4.2. ナカダ地域の中核部を除く主要遺跡 (数字) と現代の都市 (アルファベット) の所在地	52
図 4.3. ナカダ地域の中核部における主要遺跡の所在地 (Kaiser 1961: Abb. 3 改変・加筆)	53
図 4.4. ピートリーによる大墓地東地区・同西地区・同南地区・B 墓地・T 墓地の墓坑分布図 (Petrie and Quibell 1896: pl. LXXXVI トレース・加筆)	57
図 4.5. ピートリーによって発掘されたサウスタウン地区の建築遺構 (Petrie and Quibell 1896: pl. LXXXV 加筆)	58
図 4.6. ド・モルガンによるマスタバ墓の外観 (縮尺不明) (de Morgan 1897: Fig. 521)	60
図 4.7. ZWE 地区における遺構検出状況 (di Pietro 2017: Fig. 2 改変・トーンほか加筆)	63
図 4.8. サウスタウン地区における各隊の調査区・発見遺構 (Hassan et al. 2017a: Fig. 5 加筆)	66
図 4.9. 大墓地東地区・同西地区・サウスタウン地区で発見された遺構の分布 (Hassan et al. 2017a: Fig. 8; Petrie and Quibell 1896: pl. LXXXVI トレース・加筆)	69
図 5.1. 大墓地東地区・同西地区のグリッド配置 (Petrie and Quibell 1896: pl. LXXXVI トレース・加筆)	83
図 6.1. 墓地別に示した面積の箱ひげ図 (y 軸: $m^2$ )	85
図 6.2. 墓地別に示した面積別の墓の数とその累積度数分布 (第 1 軸: 墓の数、第 2 軸: 累積度数)	86
図 6.3. 墓地別に示した各基本段階の平均面積 (y 軸: 面積 ( $m^2$ ))	87
図 6.4. 各墓地の墓の形状の割合	92
図 6.5. 各墓地における墓の形状の割合の通時的な変遷	93
図 6.6. 5ヶ所の対象墓地における単葬墓と合葬墓の割合	100
図 6.7. 5ヶ所の対象墓地とそれらの合計時の遺体性別の割合	104
図 6.8. 各墓地における副葬品総点数の箱ひげ図 (y 軸の単位: 個)	111
図 6.9. 各墓地における副葬品総点数の度数分布と累積度数 (y 軸の単位: 個)	112
図 6.10. 各墓地における副葬品総点数の平均とその推移 (y 軸の単位: 点)	114
図 6.11. 各墓地における副葬品種類数の箱ひげ図 (y 軸の単位: 種類)	118

図 6.12. 各墓地における副葬品種類数の度数分布と累積度数 (y 軸の単位: 種類)	120
図 6.13. 各墓地における副葬品種類数の平均とその推移 (y 軸の単位: 個)	121
図 7.1. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地東地区・全時期・2 変数)	128
図 7.2. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地東地区・全時期・3 変数)	129
図 7.3. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地東地区・Ia1-Ia3 段階・2 変数)	131
図 7.4. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地東地区・Ia1-Ia3 段階・3 変数)	132
図 7.5. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地東地区・Ib1-Ib2 段階・2 変数)	134
図 7.6. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地東地区・Ib1-Ib2 段階・3 変数)	135
図 7.7. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地東地区・IIa1-IIa2 段階・2 変数)	136
図 7.8. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地東地区・IIa1-IIa2 段階・3 変数)	138
図 7.9. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地東地区・IIb 段階・2 変数)	139
図 7.10. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地東地区・IIb 段階・3 変数)	140
図 7.11. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地東地区・IIIa1-IIIa2 段階・2 変数)	142
図 7.12. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地西地区・全時期・2 変数)	144
図 7.13. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地西地区・全時期・3 変数)	145
図 7.14. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地西地区・Ia1-Ia3 段階・2 変数)	147
図 7.15. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地西地区・Ia1-Ia3 段階・3 変数)	148
図 7.16. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地西地区・Ib1-Ib2 段階・2 変数)	149
図 7.17. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地西地区・Ib1-Ib2 段階・3 変数)	150
図 7.18. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地西地区・IIa1-IIa2 段階・2 変数)	151
図 7.19. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地西地区・IIa1-IIa2 段階・3 変数)	152
図 7.20. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地西地区・IIb 段階・2 変数)	153
図 7.21. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地西地区・IIb 段階・3 変数)	154
図 7.22. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地西地区・IIIa1-IIIa2 段階・2 変数)	155
図 7.23. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地西地区・IIIa1-IIIa2 段階・3 変数)	156
図 7.24. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地南地区・全時期・2 変数)	159
図 7.25. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地南地区・全時期・3 変数)	160
図 7.26. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地南地区・IIa1-IIa2 段階・2 変数)	161
図 7.27. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地南地区・IIa1-IIa2 段階・3 変数)	162
図 7.28. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地南地区・全時期・2 変数)	165
図 7.29. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地南地区・全時期・3 変数)	166
図 7.30. クラスタリング結果を示した散布図 (T 墓地・IIa1-IIa2 段階・2 変数)	168
図 7.31. クラスタリング結果を示した対散布図 (T 墓地・IIa1-IIa2 段階・3 変数)	169

図 7.32. クラスタリング結果を示した散布図 (T 墓地・IIIa1-IIIa2 段階・2 変数)	170
図 7.33. クラスタリング結果を示した対散布図 (T 墓地・IIIa1-IIIa2 段階・3 変数)	171
図 7.34. クラスタリング結果を示した散布図 (B 墓地・全時期・2 変数)	173
図 7.35. クラスタリング結果を示した散布図 (B 墓地・全時期・3 変数)	174
図 7.35. クラスタリング結果を示した散布図 (B 墓地・Ib1-Ib2 段階・2 変数)	177
図 7.36. クラスタリング結果を示した散布図 (B 墓地・Ib1-Ib2 段階・3 変数)	178
図 7.37. クラスタリング結果を示した散布図 (B 墓地・IIa1-IIa2 段階・2 変数)	179
図 7.38. クラスタリング結果を示した対散布図 (B 墓地・IIa1-IIa2 段階・3 変数)	180
図 8.1. 東部砂漠・シナイ半島・アカバ周辺の資源分布 (Moeller 2016: Fig. 4.1. 改変・加筆)	189
図 8.2. 東部砂漠・シナイ半島・アカバ周辺の主な原産地 (Moeller 2016: Fig. 4.1. 改変・加筆)	190
図 9.1. ヒエラコンポリス遺跡 HK43-44 地点墓坑分布図 (Friedman 2004: 4 加筆)	216
図 9.2. ヒエラコンポリス遺跡 HK6 地点墓坑分布図 (Friedman et al. 2017: Fig. 1 改変・トーンほか加筆)	217
図 9.3. 大墓地東地区 Ia1-Ia3 段階～IIa1-IIa2 段階における墓坑分布	221
図 9.4. 大墓地東地区 IIb 段階～IIIb 段階における墓坑分布	222
図 9.5. 大墓地西地区 Ia1-Ia3 段階～IIa1-IIa2 段階における墓坑分布	226
図 9.6. 大墓地西地区 IIb 段階～IIIb 段階における墓坑分布	226
図 9.7. 大墓地南地区における墓坑分布	228
図 9.8. T 墓地における墓坑分布	229
図 9.9. B 墓地における墓坑分布	231
図 9.10. 大墓地東地区 Ia1-Ia3 段階における上位クラスター構成墓の分布	233
図 9.11. 大墓地東地区 Ib1-Ib2 段階における上位クラスター構成墓の分布	233
図 9.12. 大墓地東地区 IIa1-IIa2 段階における上位クラスター構成墓の分布	233
図 9.13. 大墓地東地区 IIb 段階における上位クラスター構成墓の分布	234
図 9.14. 大墓地東地区 IIIa1-IIIa2 段階における上位クラスター構成墓の分布	234
図 9.15. 大墓地東地区 IIIb 段階における上位クラスター構成墓の分布	234
図 9.16. 大墓地西地区 Ia1-Ia3 段階における上位クラスター構成墓の分布	236
図 9.17. 大墓地西地区 Ib1-Ib2 段階における上位クラスター構成墓の分布	236
図 9.18. 大墓地西地区 IIa1-IIa2 段階における上位クラスター構成墓の分布	236
図 9.19. 大墓地西地区 IIb 段階における上位クラスター構成墓の分布	237
図 9.20. 大墓地西地区 IIIb 段階における上位クラスター構成墓の分布	237
図 9.21. 大墓地南地区各基本段階における上位クラスター構成墓の分布	239
図 9.22. T 墓地地区各基本段階における上位クラスター構成墓の分布	241
図 9.23. B 墓地地区各基本段階における上位クラスター構成墓の分布	242



図 10.1. ヒエラコンポリス遺跡における主な地点位置図 (Adams Fig.1; Friedman 2008b Fig.1 加筆・修正)	248
図 10.2. アビュドス遺跡における主な地点位置図 (Hartung 2014/15 Abb.1 加筆・修正)	249
表 2.1. フリードマン・ウィーンシステム・ピートリーの胎土分類の対応関係	13
表 2.2. Dee et al. 2013 の研究結果を反映したバダリ・ナカダ文期の推定期間 (Stevenson 2016: Table 2 改変)	27
表 4.1. ナカダ地域の中核部を除く主要遺跡の詳細 (Hendrickx and van den Brink 2002: Tables 23.1-2 加筆)	55
表 4.2. ナカダ地域に所在する現代の集落名	55
表 5.1. ナカダ遺跡大墓地東地区・西地区・南地区の構成墓番号と墓数 (cf. Bard 1994; van Wetering 2017: 523)	75
表 6.1. 各墓地における面積の諸元	84
表 6.2. 大墓地東地区の墓の面積に関する諸元	87
表 6.3. 大墓地西地区の墓の面積に関する諸元	88
表 6.4. 大墓地南地区の墓の面積に関する諸元	89
表 6.5. T 墓地の墓の面積に関する諸元	89
表 6.6. B 墓地の墓の面積に関する諸元	90
表 6.7. 対象の 5 墓地における墓の平均面積の基本段階別比較	91
表 6.8. 各墓地の墓の形状の数と割合	92
表 6.9. 大墓地東地区における墓の形状別の数の通時的な変遷	93
表 6.10. 大墓地西地区における墓の形状別の数の通時的な変遷	94
表 6.11. 大墓地南地区における墓の形状別の数の通時的な変遷	94
表 6.12. T 墓地における墓の形状別の数の通時的な変遷	94
表 6.13. B 墓地における墓の形状別の数の通時的な変遷	95
表 6.14. 各墓地における墓の構造別の数と割合	96
表 6.15. 4 ヶ所の対象墓地における単葬墓と合葬墓の数	97
表 6.16. 5 ヶ所の対象墓地における遺体数別の墓数	101
表 6.17. 合葬墓が検出された 4 ヶ所の対象墓地における遺体数別/基本段階別の墓数	101
表 6.18. 5 ヶ所の対象墓地における性別別の被葬者数	103
表 6.19. 5 ヶ所の対象墓地における性別別/時期別の被葬者数	104
表 6.20. ナカダ遺跡で確認できた例外的な埋葬の墓とその種類の一覧	106
表 6.21. 各墓地における副葬品総点数の詳細	107
表 6.22. 大墓地東地区における副葬品総点数の基本段階別詳細	113
表 6.23. 大墓地西地区における副葬品総点数の基本段階別詳細	115
表 6.24. 大墓地南地区における副葬品総点数の基本段階別詳細	115
表 6.25. T 墓地における副葬品総点数の基本段階別詳細	116

表 6.26. B 墓地における副葬品総点数の基本段階別詳細	117
表 6.27. 各墓地における副葬品種類数の詳細	119
表 6.28. 大墓地東地区における副葬品種類数の基本段階別詳細	120
表 6.29. 大墓地西地区における副葬品種類数の基本段階別詳細	122
表 6.30. 大墓地南地区における副葬品種類数の基本段階別詳細	122
表 6.31. T 墓地における副葬品種類数の基本段階別詳細	123
表 6.32. B 墓地における副葬品種類数の基本段階別詳細	124
表 7.1. 各クラスターの値 (大墓地東地区・全時期・2 変数)	128
表 7.2. 各クラスターの値 (大墓地東地区・全時期・3 変数)	128
表 7.3. 各クラスターの値 (大墓地東地区・Ia1-Ia3 段階・2 変数)	131
表 7.4. 各クラスターの値 (大墓地東地区・Ia1-Ia3 段階・3 変数)	131
表 7.5. 各クラスターの値 (大墓地東地区・Ib1-Ib2 段階・2 変数)	134
表 7.6. 各クラスターの値 (大墓地東地区・Ib1-Ib2 段階・3 変数)	134
表 7.7. 各クラスターの値 (大墓地東地区・IIa1-IIa2 段階・2 変数)	136
表 7.8. 各クラスターの値 (大墓地東地区・IIa1-IIa2 段階・3 変数)	137
表 7.9. 各クラスターの値 (大墓地東地区・IIb 段階・2 変数)	139
表 7.10. 各クラスターの値 (大墓地東地区・IIb 段階・3 変数)	140
表 7.11. 各クラスターの値 (大墓地東地区・IIIa1-IIIa2 段階・2 変数)	141
表 7.12. 各クラスターの値 (大墓地東地区・IIIa1-IIIa2 段階・3 変数)	141
表 7.13. 各クラスターの値 (大墓地西地区・全時期・2 変数)	144
表 7.14. 各クラスターの値 (大墓地西地区・全時期・3 変数)	145
表 7.15. 各クラスターの値 (大墓地西地区・Ia1-Ia3 段階・2 変数)	146
表 7.16. 各クラスターの値 (大墓地西地区・Ia1-Ia3 段階・3 変数)	146
表 7.17. 各クラスターの値 (大墓地西地区・Ib1-Ib2 段階・2 変数)	149
表 7.18. 各クラスターの値 (大墓地西地区・Ib1-Ib2 段階・3 変数)	149
表 7.19. 各クラスターの値 (大墓地西地区・IIa1-IIa2 段階・2 変数)	151
表 7.20. 各クラスターの値 (大墓地西地区・IIa1-IIa2 段階・3 変数)	152
表 7.21. 各クラスターの値 (大墓地西地区・IIb 段階・2 変数)	153
表 7.22. 各クラスターの値 (大墓地西地区・IIb 段階・3 変数)	154
表 7.23. 各クラスターの値 (大墓地西地区・IIIa1-IIIa2 段階・2 変数)	155
表 7.24. 各クラスターの値 (大墓地西地区・IIIa1-IIIa2 段階・3 変数)	156
表 7.25. 各クラスターの値 (大墓地南地区・全時期・2 変数)	158
表 7.26. 各クラスターの値 (大墓地南地区・全時期・3 変数)	160

表 7.27. 各クラスターの値 (大墓地南地区・IIa1-IIa2 段階・2 変数)	161
表 7.28. 各クラスターの値 (大墓地南地区・IIa1-IIa2 段階・3 変数)	162
表 7.29. 各クラスターの値 (T 墓地・全時期・2 変数)	164
表 7.30. 各クラスターの値 (T 墓地・全時期・3 変数)	165
表 7.31. 各クラスターの値 (T 墓地・IIa1-IIa2 段階・2 変数)	167
表 7.32. 各クラスターの値 (T 墓地・IIa1-IIa2 段階・3 変数)	168
表 7.33. 各クラスターの値 (T 墓地・IIIa1-IIIa2 段階・2 変数)	170
表 7.34. 各クラスターの値 (T 墓地・IIIa1-IIIa2 段階・3 変数)	171
表 7.35. 各クラスターの値 (B 墓地・全時期・2 変数)	173
表 7.36. 各クラスターの値 (B 墓地・全時期・3 変数)	174
表 7.37. 各クラスターの値 (B 墓地・Ia1-Ia3 段階・3 変数)	175
表 7.38. 各クラスターの値 (B 墓地・Ib1-Ib2 段階・2 変数)	176
表 7.39. 各クラスターの値 (B 墓地・Ib1-Ib2 段階・3 変数)	177
表 7.40. 各クラスターの値 (B 墓地・IIa1-IIa2 段階・2 変数)	179
表 7.41. 各クラスターの値 (B 墓地・IIa1-IIa2 段階・3 変数)	180
表 8.1. 希少品の種類と交易距離、出土点数、出土母数、およびクラスタリング対象墓数	196



## 1. はじめに

### 1.1. 紀元前4千年紀のナイル河下流域とナカダ文化の研究

アフリカ大陸の北東部に今日位置するエジプト・アラブ共和国は、南北を貫流するナイル河の下流域に所在する。このナイル河下流域では、紀元前4千年紀に世界史で最初期の国家の1つである第1王朝が成立した。そのため、ナイル河下流域における紀元前4千年紀は国家形成期とも称され (e.g. 高宮 2003)、人類社会がそれまで未知な複雑な構造へと変化した貴重な事例として注目されてきた (cf. Trigger 1993; 2003)。この時期には、社会の階層化と王の出現 (Baines 1995; Bard 1994)、都市化 (Moeller 2016)、専門化 (Hendrickx 2011)、文字の発明と使用 (Baines 1989; Dreyer 1998; Wengrow 2011) など、社会の構成員を分節して効率的に運用するための体制が出来上がった。こうした変化に伴い、いわゆる王朝時代 (Dynastic period) に続く様々な慣習の原型が形成された (cf. Baines 2013)。したがって、古代エジプト文明を研究するいわゆるエジプト学 (Egyptology) の視点に立てば、この時期は先王朝時代 (Predynastic period) と呼称され、文明の基盤が形成された時期として捉えられてきた (e.g. Baumgartel 1955; Kemp 2006; Midant-Reynes 2003; Petrie 1920)。一方で、先史考古学の視点に立てば、特に紀元前4千年紀の前半は続旧石器時代 (Epipalaeolithic)、新石器時代と続いた先史時代の最終段階と捉えられてきた (Hendrickx and Huyge 2014; Hoffman 1979)。ナイル河下流域における紀元前4千年紀とは、先史時代と歴史時代の間である原史時代 (Protohistoric) と呼称可能な過渡期にあたると言える。

この紀元前4千年紀には、2つの考古文化が存在した。1つ目はナイル河の最も下流のデルタ地帯に存在した下エジプト (Lower Egyptian) 文化で、2つ目は今日のエジプトの中部から南部に存在したナカダ (Naqada) 文化である (図 1.1.)。考古学的にはどちらの文化も金石併用-銅器時代に当たる。このうち、紀元前3800-2867年に存続したナカダ文化からは第1王朝が輩出されたため、ナイル河下流域の歴史で重要な役割を担ったと言える (e.g. Hoffman 1979; Midant-Reynes 2000a)。上記した社会の階層化と王の出現、都市化、専門化、文字の発明と使用は、すべてナカダ文化で生じた現象である。これらのうち、社会の階層化や都市化、専門化はナカダ文化期の当初から緩やかに進んでいたものの、紀元前3300年ころを境に加速した (e.g. Bard 1994)。その後紀元前3150年ころに最初期の文字と王が出現し、紀元前3050年ころに第1王朝が出現した。紀元前3300年ころの変化は、遺物の面では今日のエジプトの中部から南部に所在した諸遺跡で見つかるローカル土器型式や石器製作技術の消失と標準化や規格化に見られ (e.g. Friedman 2000; Holmes 1989a; 1989b)、遺構の面では墓の規模や副葬品の格差の顕在化 (Castillos 1982) や、ヒエラコンポリス (Hierakonpolis) 遺跡などでのより築造に労力をかけた日乾レンガ使用墓の出現 (Case and Payne 1962; Kemp 1973) などから捉えられた。

またナカダ文化は、初期にはエジプトの中部から南部のみを分布範囲としていたが、徐々にナイル河に沿いに南北に分布を広げ (cf. Kaiser 1956)、紀元前3300年ころにはエジプトの北部に到達した。この到達により、それまで存在した下エジプト文化が消滅し、ナイル河下流域全体がナカダ文化圏に組み込まれた。ナイル河河口部のデルタ地帯に位置するブト (Buto) 遺跡やテル・エル=ファルカ (Tell el-Farkha) 遺跡などでは、ナカダ文化への置換が短期間で起こった痕跡がこの時期の層位から検出された (Ciałowicz 2011; von der Way 1997)。この拡大と文化的な統合の背景には上記のナカダ文化における構造的な変化が関連しているとされ、例えば次第に台頭した支

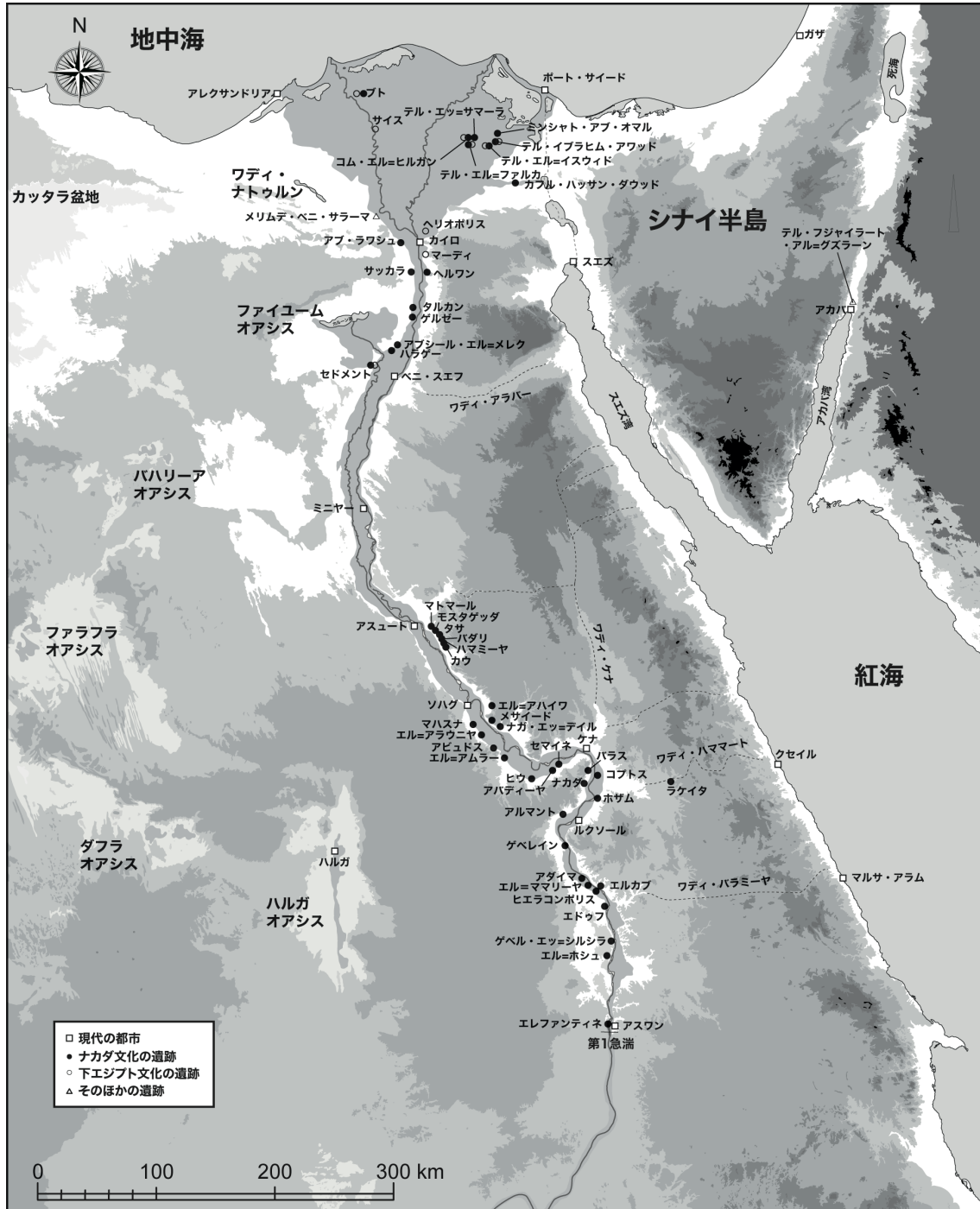


図 1.1. ナイル河下流域とその周辺地域の現代の都市と遺跡の所在地 (Moeller 2016: Fig. 4.1. 改変・加筆)

配階層が今日のパレスティナ方面からの物資の流通を統制するためにその経路を確保したことが一因として考えられた (e.g. Hartung 2001; 2014)。今日ではこの文化的統一に続き、第1王朝による政治的な統一が起こったと考えられている (Midant-Reynes 2000a; 2003)。

国家形成の過程に関する理論的な観点からは、こうした大きな歴史上の流れの背景には上エジプトで台頭した

複数の中心地遺跡の競合と政治的な単一化があるとする説が提示され (Kemp 1989; 2006; Wilkinson 2000)、今日のナカダ文化研究で一定の支持を集めた。この理論によれば、ナカダ文化期の初期の上エジプトではアビュドス (Abydos)、アバディーヤ (Abadiya)、ナカダ、ゲベレイン (Gebelein)、ヒエラコンポリスの5つの中心地が競合関係にあったが、アバディーヤ、ゲベレイン、ナカダの順に競合から脱落して隣接する中心地の支配域に組み込まれ、ナイル河下流域の南部に支配域を持つヒエラコンポリスと、中部から北部に支配域を持つアビュドスの2強体制になったのちに、アビュドスがナイル河下流域全体の政治的主導権を握ったとする。この理論は、中心地とされた遺跡で発見された考古学的証拠に基づいて提唱され、それまで適用が試みられた大規模灌漑事業に基づく水力社会論 (Hydraulic society theory) (Wittfogel 1957) や、地理的環境によって隔絶された土地から得られる資源の収奪による支配体制の形成を説いた限定理論 (Circumscription theory) (Carneiro 1970) などに代わって支持を集めた。この競合理論は、C. レンフリー (Renfrew) の対等的政体の相互交渉と社会-政治的变化 (Peer polity interaction and socio-political change) の理論 (cf. Renfrew 1986) の影響を受けて考案された。また直接的な引用はないものの、M.H. フリード (Fried) による階層社会論 (Fried 1967) などから影響を受けたと考えられる。近年は競合理論と類似した派閥競合理論 (Factional competition theory) (Brumfiel 1989) を、取り入れる動きも出ている (e.g. Anderson 2006)。こうした理論的背景のなかで、ナカダ文化期の研究では、社会の階層化や専門化などの国家の形成に至る社会の変化を解明することが大きな目標となってきた。

## 1.2. 研究の視点と目的

### 1.2.1. ナカダ文化の墓地研究と階層化の研究の現状

ナカダ文化における階層化を検討するため、これまで墓地遺跡が研究の主要な対象となってきた。これは、1980年代以降にナイル河河口部のデルタ地帯で遺丘型遺跡の調査が本格化する以前は、調査が可能な対象がナイル河氾濫原沿いの高地である低位砂漠に所在する墓地遺跡に限られてきたことによる。またナカダ文化の墓地遺跡は、1950年代までに今日知られている遺跡のおよそ2/3が調査された (Hendrickx and van den Brink 2002) ため、発掘報告書などに分析可能な情報が公表されており、研究しやすい対象であった。墓地資料は、墓に納められる副葬品や墓の構造などの点で、被葬者の間に差異が見出しやすく、ある遺跡の社会における構成員の区別を判断しやすい着眼点であるため、階層化を検討するのに適した対象でもあった。したがって墓地を対象とした階層化に関する先行研究は厚く蓄積されてきた (e.g. Atzler 1981; Bard 1994)。ただし、多くの遺跡の調査年次が古いため、分析に堪える情報が掲載された発掘報告書は限られた。そのため結果として多数の遺跡が調査された一方で、階層化に関する有力な見解が得られた遺跡はアルマント (Armant) 遺跡やナカダ遺跡、タルカン (Tarkhan) 遺跡などの少数の遺跡に留まった。これらの研究からは、ナカダ文化期中盤における中心地遺跡の社会階層の多層化や中心地以外での単純な社会階層構造の継続などが明らかにされてきた。

一方で、近年は新規の発掘調査が進み、例えばヒエラコンポリス遺跡 HK6 地点では、紀元前 3500 年ころの墓と付属の埋葬施設から構成される埋葬複合体が検出され、階層化がそれまでの見解よりも早い時期に起こった可能性が指摘された (e.g. Friedman 2008a; Friedman et al. 2011; 2017)。またアビュドス遺跡ウナム・エル=カアブ

(Umm el-Qaab: UeQ) 地区 U 墓地では紀元前 3150 年ころの遺構として最初期の王墓が検出・発掘され (Dreyer 1998; Hartung 2001)、初期の王権の成立に関わる具体的な考古学的証拠が得られた。これらの新発見は従来の見解を塗り替えた近年のナカダ文化期研究の大きな進展である。しかし、こうした近年の発見は、個別の遺跡単位では新たな見解を提示した一方で、それを同時代の遺跡全体に敷衍するには至っていない。よりナカダ文化の研究全体で統合的に理解するためには、新しい知見をもとに初期に調査された遺跡を再検討する必要がある。したがって、現状では旧来の階層化に関する研究は見解の修正と再検討が必要である。

## 1.2.2. 本論文の目的と意義

以上から、本研究ではこうした旧来の階層化に関する研究で得られた見解の修正と再検討を目的とする。より具体的には、階層化が最も進展したと考えられる中心地遺跡の一つであるナカダ遺跡を対象に、社会階層がどの程度存在し、それがどの時点でどの程度変化するかを、それまで不十分に活用されていた未公開の調査資料を活用して見出し、それが近年の発掘調査での成果とどのように整合できるかを検討することにある。ナカダ遺跡は 1894-5 年の調査 (Petrie and Quibell 1896) 以降、すでに複数の研究の対象となってきたが (Bard 1989; 1994; Castillos 1982; Kemp 1973)、検討された着眼点が一部にとどまることや、現存する資料のすべてが活用されているわけではないなどの点で、改善の余地が残されている。また未公開の記録を扱うことで、従来公開情報だけでは限定されていた基礎資料を拡充できる余地も残されている。さらに、ナカダ遺跡はナカダ文化の遺跡の中でも最も大規模な遺跡の一つであり、集落と墓地の両方を持つ (Hassan et al. 2017; Petrie and Quibell 1896)。なおかつ中心地遺跡の一つとして特に物流面で重要な役割を担っていたことが指摘され (e.g. Cox 2012; Fattovich et al. 2007)、近年調査の進展が著しいヒエラコンポリス遺跡と比肩し得る稀有な遺跡である。このナカダ遺跡の墓地資料から階層化を再検討することで、近年再び進展し始めたナイル河下流域南部におけるナカダ文化遺跡の研究に新たな情報を提示可能な意義を持つと考えられる。また本研究で未公開の発掘調査の記録を活用して従来の見解に新たな視点を添えることで、博物館などに収蔵されたアーカイブ記録を扱って研究することの有効性を提示できる意義も持つと考えられる。

## 1.2.3. 本論文における地域名と時代名の諸設定

### 1.2.3.1. 地域名の設定

本論文では、以下の地理的な名称を用いる。まず、今日のエジプト・アラブ共和国の領土に相当するナイル河沿いの地域を「ナイル河下流域」と呼称する。このナイル河下流域を、慣例に基づいてさらに、「下エジプト地域 (Lower Egypt)」、「上エジプト地域 (Upper Egypt)」、「下ヌビア地域 (Lower Nubia)」、の 3 つに細分した。下エジプト地域は今日の首都であるカイロ (Cairo) から地中海までのナイル河デルタ地帯を含む地理的範囲を指す。上エジプト地域はカイロから今日のアスワン (Aswan) までのナイル河流域を含む地理的範囲を指す。下ヌビア地域はアスワンから今日のスーダン共和国の北部までの地理的範囲を指す。これらの現代都市の位置に関しては、図 1.1.を参照されたい。またこのナイル河下流域に加えて、兩岸の砂漠地帯をそれぞれ「西部砂漠」と「東部砂



漠」と呼称する。このほかに、ナイル河下流域と関連が深い今日のパレスティナ・イスラエルに相当する地域を「カナーン地域 (Canaan)」と呼称する。

#### 1.2.3.2. 時代名の設定

本論文では、紀元前4千年紀のナカダ文化が存続した期間を一貫して「ナカダ文化期 (Naqada Period)」と呼称する。ナイル河下流域における紀元前4千年紀は、エジプト学の立場からは王朝時代に先行するという面を重視して「先王朝時代 (Predynastic period)」と呼称されることが通例である。しかし、先王朝時代は純粋に考古学における文化期とは対応せず、例えば下エジプト文化や紀元前5千年紀の上エジプト地域に存続したバダリ (Badari) 文化期にも適用されることがあり (e.g. Hassan 1988)、的確ではない。したがって本論文では考古学的な議論により一般的な「文化期」の名称を用いることとする。

#### 1.2.4. 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。まず、第2章では、本論文で用いる年代に関する概要を記述する。ナカダ文化の相対編年を規定する土器型式に関する概要を踏まえ、過去の相対編年案を瞥見して本論文で用いるアビュドス編年を核とした時間軸の設定を提示する。第3章では埋葬から社会を考察した先行研究を記載する。人類学・考古学一般における理論の発展と、ナカダ文化の墓地を対象にした先行研究の成果と問題点を提示し、本論文で解決を目指す階層化の3つの視点を提示する。第4章では本論文で対象とするナカダ遺跡の地理的・歴史的環境を提示する。ナカダ遺跡を含む周辺地域の風土を記載するとともに、ナカダ遺跡における過去の調査と周辺の遺跡を提示する。第5章では本論文で行う分析の資料と方法、それに関連した諸設定を記述する。第3章で提示した問題点を解決するための資料・方法を提示し、資料の限界・問題点に関しても提示する。第6章では第5章で提示した資料である埋葬属性別に分析を実施する。各埋葬属性の通時的な消長を把握し、文化的要素の変遷を看取する。第7章では副葬品の総点数・種類数、墓の規模の3つの埋葬属性を対象にした k-means++法によるクラスター分析を実施する。これら3つの埋葬属性から区分できる墓のまとまりを捉え、序列化して提示する。第8章では希少品の占有を議論する。副葬品の質的な差異と墓のまとまりの序列の関連を調べ、ナカダ遺跡における差異の詳細を提示する。第9章ではクラスター分析で得られた上位クラスターを構成する墓とその墓地内での分布を調べ、空間的な限定性に関して議論する。第10章ではそれまでの分析で得られたナカダ遺跡の見解と、そのほかの同時期の中心地遺跡であるアビュドス遺跡・ヒエラコンポリス遺跡との間での相違点・類似点を検討する。その後、第11章でナカダ文化期におけるナカダ遺跡の社会と階層化を総括して結論とする。

## 2. ナカダ文化期の土器分類、および相対編年・絶対年代

本章では、ナカダ文化期を研究する上で基本的な時間的枠組みとなる相対編年とそれに関連した土器の分類および絶対年代の概要を提示する。一般的に層位に恵まれない上エジプト地域に所在するナカダ文化の遺跡において、相対編年は遺構や遺物の時期を決定するために極めて重要である。そして相対編年の構築のために、土器の型式分類が重要視され、多くの先行研究が蓄積されてきた。また絶対年代に関しても、遺構や遺物の年代の理化学的な測定が盛んに試みられてきた (Hendrickx 1999: 33-81)。特に放射性炭素年代測定法に関しては W. リビー (Libby) による開発時から、その妥当性を示す試料としてナカダ文化の遺物が用いられており (Libby 1955)、ナカダ文化の研究と密接な関係にある。

本論文の第 4 章で示す通り、本論文では R. ハートマン (Hartmann) によるアビュドス編年を基本的な時間軸として採用しつつ、アビュドス編年が包括していない部分を S. ヘンドリクス (Hendrickx) による編年案の知見を加えることで、これまでに提示された墓の時期を改訂し、分析のための時間軸を指定する。こうした時間軸設定の経緯を明らかにするために、以下ではこれまでに提示されたナカダ文化の土器型式分類を概括し、その上で相対編年と絶対年代の諸案の概要を記述してそれぞれの問題点を示すこととする。特に相対年代に関しては基準となった土器の分類案も密接に関連するため、合わせて分類に関しても逐次言及する。

### 2.1. 土器の分類

#### 2.1.1. ピートリーによる分類案

##### 2.1.1.1. 概要

W.M.F. ピートリー (Petrie) は、初めてナカダ文化の土器の体系的な分類を試みた。彼の分類は、2.2.1.で後述する継起年代 (Sequence dating: S.D.) と密接に関連する。ピートリーは、自身が行ったナカダ遺跡、バラス (Ballas) 遺跡、アバディーヤ遺跡、ヒウ (Hiw) 遺跡、セマイナ (Semaina) 遺跡の 5 ヶ所の墓地から出土した土器を分類した。分類の結果、彼は土器を大きく 9 種類を設定した。この 9 種類とは、黒頂土器 (Black-topped Ware: B 土器)、赤色磨研土器 (Polished-red Ware: P 土器)、異形土器 (Fancy Ware: F 土器)、白色線文土器 (White cross-lined Ware: C 土器)、装飾土器 (Decorated Ware: D 土器)、黒色線刻土器 (Nubian Black-incised Ware: N 土器)、波状把手土器 (Wavy-handled Ware: W 土器)、粗製土器 (Rough Ware: R 土器)、後期土器 (Late Ware: L 土器) である。ピートリーは土器の分類名にウェア (ware) を用いているが (e.g. Petrie 1920; 1921)、このウェアは今日の土器学 (ceramology) で用いられ、土器の胎土を指すウェアとは意味が異なり、今日という型式 (type) の概念とほぼ同義である。ピートリーはこの 9 タイプの土器に対して、1-99 の番号を設定し、若い番号に浅く開いた器形の坏などの土器を置き、番号が大きい方に器高が高く、口縁部が閉じた形状の壺形の土器を置き、固有の型式番号を定めた (図 2.1.)。なお、どの土器タイプでも基本的にはこの配列で型式が設定されているものの、D 土器の一部には異形土器や無装飾土器が、F 土器の一部には黒色磨研 (Black polished) 土器が、L 土器には脚台が含まれるなどの例外がある。そしてそれぞれの固有の型式番号に当てはまる中で、微妙な形態上の違いを持つ亜種が存在する場合は、アルファベットで細分を行った。例えば、彼が出版した土器のカタログでは、B 土器の 1b 型は浅い坏であり、99 型は無

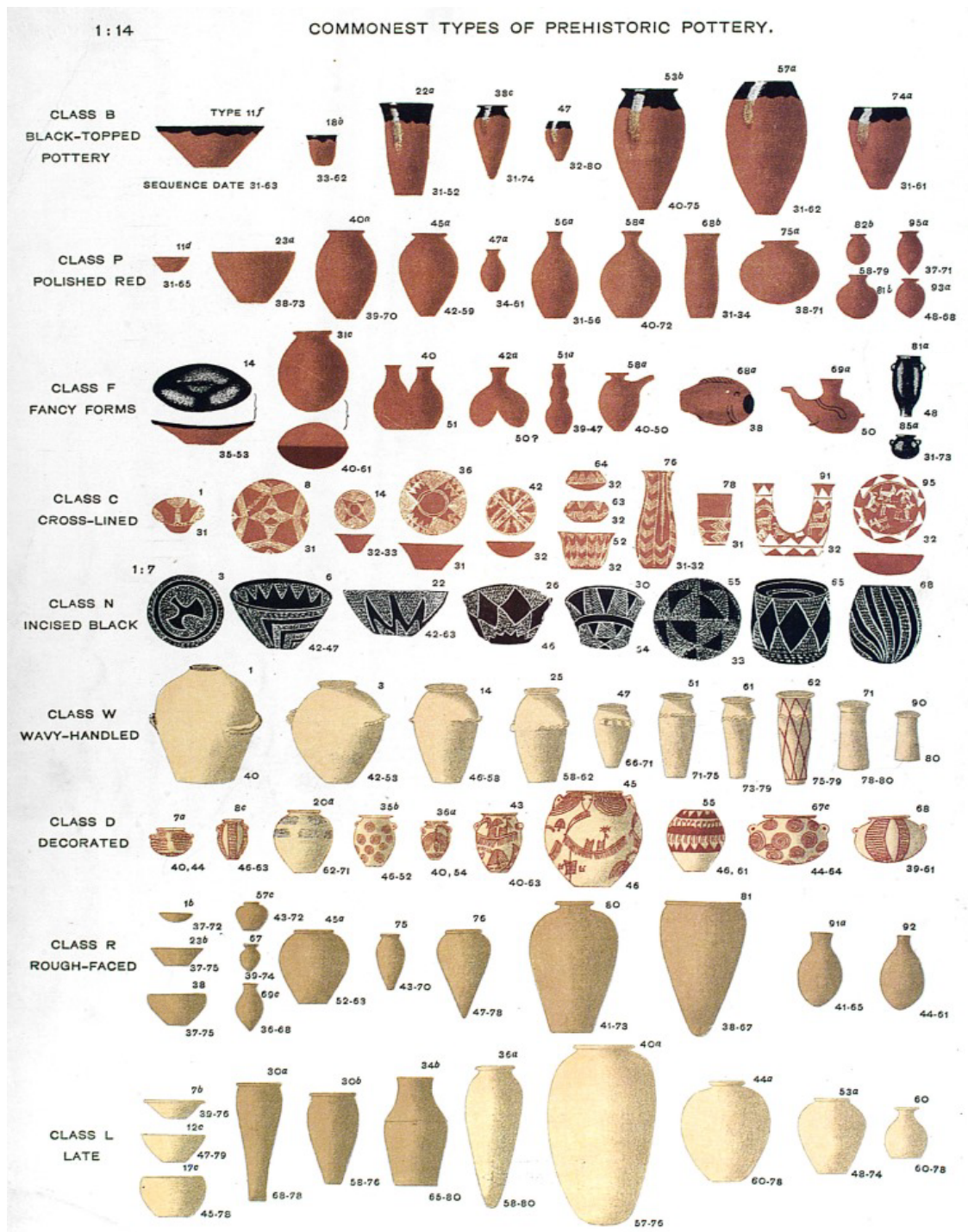


図 2.1. ピートリーによる 9 種類の土器分類と各分類の主要な土器型式 (Petrie and Mace 1901: Front piece)

頸の胴張壺である (Petrie 1920: pl. I, VIII)。ただしこの配列に関しては例外もあり、坏や埴が存在しない W 土器や D 土器は、器形そのものではなく、把手の形状や装飾の意匠などが配列の基準になっている。ピートリーは固有の型式番号を定めた上で、各墓から出土した土器の型式番号を、墓単位で表としてまとめた (Stevenson 2015; 2016)。この土器分類はカタログとして体系的に公表されたため、おもに英国隊を中心にした調査で適用された。

のちにピートリーは、王朝開始以後の土器の分類と形式の設定も試みた (Petrie 1914; 1953a; Petrie et al. 1913) が、旧来の土器分類とは異なり、これらの土器型式には、R や L といった土器分類は設定していない。この分類の基準はほぼ形態のみであり、若い番号に浅く開いた器形の坏などの土器を置いて番号が大きい方に器高が高く口縁部が閉じた形状の壺形の土器を置くとともに固有の型式番号を定めた枠組みの面のみはそれまでの土器分類と共通する (Petrie 1953a)。この王朝開始後の S.D.の構築に、ピートリーは主にタルカン (Tarkhan) 遺跡からの出土土器を用い、885 型式に分類した。それまでの分類における最新の時期に属する型式に関しては、新しい分類と部分的に重複しており、L 土器の一部や W 土器の一部が、新しい分類の型式番号で呼称し直されている。例えば、鉢型土器の L10 は 3m に、W 土器の最も新しい型式である円筒形土器の W90 は 50d-g に設定し直されている (Hendrickx 1996: Table 6; 2006: Table II.1.5.)。

#### 2.1.1.2. 問題点

ピートリーの編年の前提となった土器の分類の最大の問題点は、分類基準が不統一なことにある。例えば、W 土器や F 土器は形態的な特性から設定されている一方で、C 土器や D 土器、N 土器は装飾があることを理由に設定され、R 土器と L 土器は胎土の違いから型式設定されている。B 土器と P 土器は、赤色のスリップを有する点は共通しているが、B 土器は口縁部から体部上位が黒色であることから P 土器から分けて型式分類されており、土器分類の基準は製作技法または外観によっている。これらの分類から明らかなように、9 種類の土器分類の基準は一定ではない (Hendrickx 1996)。また各土器分類を構成する個別の土器型式は大まかには妥当であるが、一部には疑念が生じていることも否定しえない。特にピートリーの細かな土器型式の設定は基本的に土器の形態を重視したと見られるが、形態と密接に関わる成型の面でもナカダ文化の土器特有の問題がある。ナカダ文化の土器の製作には基本的にロクロなどは用いられず、手捏ねか輪轆みによって整形されるため、同一の型式であっても個体差が存在する場合や遺跡によって固有な土器型式が存在することが想定され、ピートリーが設定した型式分類に影響を与える可能性がある。この成型上の問題は、例えば E. ナヴィーユ (Neville) によって研究史の早い段階に指摘された (Neville 1914: XI)。

また、元来分類の対象となった遺跡以外にもこの型式が適用・拡張されたことで土器型式が多様化した点も問題となる。ここでは便宜的に、ピートリーによる、1896 年のナカダ遺跡とバラス遺跡の報告書と、アバディーヤ遺跡、ヒウ遺跡、セマイナ遺跡の報告書に掲載された土器の一覧を第 1 次カタログ、1920 年と 1921 年に出版された土器とその他の遺物のカタログを第 2 次カタログと呼称する。第 2 次カタログにおいて、ピートリーは、時期を与えることができる墓の S.D.を一覧表で出版しているが (Petrie 1920: pls. LI, LII)、この一覧表の中に編年構築に用いた墓は含まれているものの全てではなく、また元々対象とされた 5 ヶ所以外の遺跡で検出された墓の時期も記されているため、元来の編年構築に用いられた墓を復元することはできなかった。この問題点は、1900 年のアバディーヤ遺跡、ヒウ遺跡、セマイナ遺跡の発掘調査ののち、ナイル河下流域の各地で多数の墓地遺跡が発掘されたが、そこで出土した遺物が、ピートリーらの第 1 次カタログと形態的に類似していた場合、独自にアルファベットで細分がなされたため、調査者間で統一した見解がない状態で型式が細分されていった。この多岐に

分かれた土器型式の細分を一度整理した文献が第2次カタログである。土器型式の整理と改訂を経たため、第2次カタログと第1次カタログの土器型式とでは、掲載された土器の型式が、同一の土器であっても若干の違いがあり、元来の土器型式の追跡を試みる場合、複雑な様相を呈している。特に、マハスナ遺跡 (Mahasna) H 墓地やエル=アムラー (el-Amrah) 遺跡 a 墓地、同 b 墓地の発掘報告書で新たに設定された土器型式は、第2次カタログでは型式番号自体が変更された場合もある。したがって、ピートリーの行った土器分類は、ほかの遺跡での調査の進展とともに、元来のものとは異なる内容に変化した。ただし幸いにも、本論文の対象であるナカダ遺跡やバラス遺跡の出土土器型式に関しては、アルファベットの枝番で表される亜種レベルでの違いに留まり、大きな変更はない (cf. Hendrickx 1989: 33)。この亜種レベルの違いについても、例えば B81 が B81a に、P65 が P65a になるといったように、ある土器型式の標識を示す a のアルファベットの枝番を付与されるに留まる。こうした第2次カタログの構築に当たって変更された土器型式番号と元来のものの詳しい対応関係に関しては、後にヘンドリクスによってまとめられた (Hendrickx 1989)。

しかしこうした分類上の問題点の一方で、この土器の9分類は、後述するピートリー以後の編年体系においても、基本的に踏襲されて今日に至っている。なぜならば、ナカダ文化の主要な墓地遺跡が20世紀中ごろまでに発掘され、出土土器が概ねピートリーの分類に則って報告されたためにすでにナカダ文化の型式・編年の根幹となっているからであり、より実際的にはこれまでの研究史の中でピートリーの設定した土器型式ほど具体的かつ体系的に公表された事例がないからである。後述するカイザー編年やヘンドリクス編年も基本的にピートリーの分類に則って構築されており、公表以後非常に大きな影響を与えている。

### 2.1.2. ピートとドループによる分類案

T.E. ピート (Peet) と J.P. ドループ (Droop) は、ピートリーの9種類への土器分類が一律の分類基準に基づいていないことを指摘し、改良版の土器分類案を提示した (Peet 1914: 10-13; 1933: 62)。彼らは自身が発掘したアビュドス遺跡の集落遺跡と E 墓地と U 墓地から出土した土器を対象に、大きく4つに土器を分類した。その分類とは、A、B、C、D である。分類の基準は、土器表面の調整のみとされた。分類 A は赤色鈹 (ヘマタイト) を用いた赤色のスリップがかけられた土器で A1 から A6 の6つに細分される。ピートリーの分類とは、分類 A2 には P 土器が、分類 A3 には B 土器が、分類 A4 には C 土器が、分類 A5 には L 土器の浅鉢が、分類 A6 には P 土器の一部と L 土器の一部が、それぞれ対応する (Peet 1914: 11)。分類 B は表面にミガキがかけられ、白色で充填された刻文を持つ土器で、ピートリー分類の N 土器と F 土器の一部を含む。細分は存在しない (Peet 1914: 11-2)。分類 C は表面にミガキがかけられ、粘土のスリップがかけられた主に茶色-灰色の色調を持つ土器で C1 から A3 の3つに細分される。ピートリーの分類とは、分類 C1 には D 土器が、分類 C2 には D 土器の一部と W 土器が、分類 C3 には L 土器と R 土器の一部が、それぞれ対応する (Peet 1914: 12)。分類 D は粗製の土器でスリップを持たない土器であり、ピートリーの分類の R 土器と L 土器の一部が対応する。ピートリーによる分類は一貫した分類基準に則っており、ピートリーによる分類よりも明快であるが、アビュドス遺跡で出土した資料で限定的に適用されただけで広くは採用されなかった。墓地と集落の双方から出土した資料を対象としていることが特徴だが、集落

出土の土器の研究が進んだ現在では、居住コンテキストと埋葬コンテキストでは出土する土器に違いがあることが指摘されている (Friedman 1994) ため、今日では同一の分類基準で議論することは難しい。だが、ピートらの分類の意義は1つの分類基準に則って土器の分類を実践し、ピートリーの土器分類の持つ問題点を指摘した点にあると言える。

### 2.1.3. マイヤースによる分類案

O.H. マイヤース (Myers) は自身の発掘したアルマント (Armant) 遺跡の発掘報告書で、ナカダ文化期の土器の新しい分類案を提示した (Mond and Myers 1937: 49-58)。彼は、ピートらと同じくピートリーの分類における基準の不備を指摘した上で、土器の胎土に基づいた分類を提案した。マイヤースの分類は4つの土器からなり、それらは1. ナイル泥ウェア (Nile Mud Ware)、2. デザートウェア (Desert Ware)、3. チャフウェア (Chaff Ware)、4. グリットウェア (Grit Ware) である。ナイル泥ウェアはナイル河の沖積土を胎土にした、赤色系色調をもつミガキ調整が見られる土器で、ピートリー分類の B・P・C・N・F 土器と対応する。デザートウェアは低位砂漠由来の砂を胎土に用いて高温で焼き上げた土器で、ピートリー分類の D・W 土器と L 土器の大半と対応する。チャフウェアはその名通り植物を切り刻んだスサを混和材として多く含んだ粗製の土器で、ピートリー分類の R 土器と L 土器の一部と対応する。グリットウェアは貝片や粗い砂を混和材とし、高温で焼成され空隙が多い土器で、ピートリー分類の R 土器の一部と対応する。この分類もピートらの事例と同じく、1つの分類基準に則って土器の分類案を提示したことが特徴である。ところが、マイヤースはこの分類案を墓の出土品一覧に適用しておらず、実際にはピートリーの分類を踏襲した (Mond and Myers 1937: 101-7)。2.1.5.および2.1.6.で述べるように、胎土に基づいた分類は今日の集落・生産址の研究で特に重要視されており、マイヤースの着眼点は先見に富むが、実際に適用されることはなかった。

### 2.1.4. フェーダーンによる分類案

W. フェーダーン (Federn) は、アメリカ合衆国のブルックリン美術館 (Brooklyn Museum) に収蔵されているナカダ文化期の遺物の整理のため、ピートリーの土器分類を修正した新たな土器分類を考案した。フェーダーン自身はこの分類を公表しなかったが、彼の死後 W. ニードラー (Needler) は分類の概要を紹介した (Needler 1981)。フェーダーンの問題意識は、ピートやマイヤースと同じくピートリー分類において基準が複数ある点に向けられた。彼は、分類基準を整理し、主に土器の調整方法に基いてピートリーの分類を部分的に修正し12種類の土器分類を定めた。それらの詳細は、1. B 土器、2. B1 土器、3. B-P 土器、4. P 土器、5. C 土器、6. R 土器、7. S 土器、8. D 土器、9. W 土器、10. P1 土器、11. P2 土器、12. N 土器、である。このうち、C・D・N・P・W 土器はそれぞれ同名のピートリーの分類と対応する。一方で、改良が施された分類は以下の通りである。B 土器はピートリーの B 土器の大部分と対応するが、一部が B1 土器と B-P 土器に分割された。B1 土器にはピートリーの B 土器のうち内面が黒色で外面が赤色の坏や埴が該当する。また同様の特徴を持つピートリーの F 土器の一部もこの分類に加えている。B-P 土器には、ピートリーの B 土器のうち器面全体が黒色な型式が該当し、ピートリーの F 土器の一

部も含まれる。R 土器もピートリーの R 土器と対応するが、L 土器の一部も含む。S 土器はフェーダーンによって設定された新しい分類である。S はナデ (smooth) を意味し、ピートリーの L 土器の大部分が対応する。1-6 までのナイルシルトを胎土とする土器ではなく、涸れ川の入り口の堆積から採取できるマールクレイ (marl clay) を主体とした硬質土器である。入念なナデ調整を施す一方で、ミガキ調整を行わない点を特徴とする。P1 土器はピートリーの L 土器の一部が対応する。P2 土器にもピートリーの L 土器の一部が対応し、内面と外面上部にミガキが施され外面下部はナデのみの調整上の特徴を有する土器が、この分類に含まれている。

この土器分類が適用された事例は少ないが、著名な事例としてブルックリン美術館が収蔵しているエジプトの先史時代遺物のカタログが挙げられる (Needler 1984)。同美術館のコレクションの大部分を占める H. ド・モルガン (de Morgan) が発掘したアダイマ (Adaïma) 遺跡、エル=ママリーヤ (el-Mamariya) 遺跡などからの出土資料はこの分類で記載された。

ただし、フェーダーンの土器分類は、ピートリーやカイザーの事例と同じく、詳細が明らかでない。ピートリーの土器分類を踏襲しつつ、基準を整理した分類を行った一方で、ピートリーの土器分類のどの型式が、フェーダーンの土器分類と対応するのかが明らかでない。したがって個別の土器型式がどの程度存続するのかが明かされていないため、画期の認識が不明瞭となっている。このためにフェーダーンの土器分類は広範な適用が難しいが、器面調整に基づいてピートリーの土器分類に準拠しつつ細かく新たな分類を提示した点は意義深い。

## 2.1.5. 胎土分類

### 2.1.5.1. ウィーンシステム

ウィーンシステム (Vienna System) とは、エジプトにおける土器胎土に関する共通認識をもち、胎土の分類基準を明確化するために 1980 年にウィーンで開催された国際会議で策定された土器胎土群のことを指す。対象の時期はナカダ文化期などの先史時代から新王国時代などの歴史時代を含む広い範囲に及び、主に中王国時代や新王国時代の土器が議論の対象となった (Nordström and Bourriau 1993a)。ナカダ文化期の胎土は、対象となったサンプル数が少なく博物館資料が主なために網羅的ではないが、会議の企図した通り一定の分類基準として今日でも活用されている。

ウィーンシステムでは、胎土の種類はナイルシルトとマールクレイに 2 分される。ナイルシルトはナイル河の沖積土から採取される一方で、マールクレイは低位砂漠のワディの堆積から採取され、両者の由来は全く異なる。ナイルシルトは含有する砂と裁断した植物片であるスサの量と大きさを基準に Nile A・B・C・D・E に分類され、細分が設定される場合もある。マールクレイは含有する石灰岩を主体とする鉱物の量と質を基準に Marl A・B・C・D・E に分類され、同じく細分が設定される場合がある (Nordström and Bourriau 1993b)。こうした胎土の判定は、磨耗していない新鮮な破断面を対象に 30 倍の倍率のもと顕微鏡で観察して行われる。観察では、胎土の含有物、多孔率、硬性を基準に胎土が判定される。含有物はさらに大きさと量に分けられ、大きさに関しては「細 (fine)」・「中 (medium)」・「粗 (coarse)」に 3 分される。含有物の大きさの基準は、鉱物の場合、細は 60-250 μm、中は 250-500 μm、粗は 500 μm 以上で、植物を裁断したスサの場合は、細は 2 mm 以下、中は 2-5 mm、粗は 5 mm

以上である。含有物の量は「まれ (scarce)」、「並 (common)」、「豊富 (abundant)」に分けられる。

上記の合計 10 種類の胎土のうち、ナカダ文化期の土器に用いられる胎土は、基本的にナイルシルト 3 種類 4 細分 (Nile A・B1・B2・C)、1 種類 3 細分 (Marl A1・A2・A4) に分けられる。ナイルシルト E 製の土器などの少数の例外 (e.g. Hartmann 2016) はあるが、概ねこれら 4 種類 7 細分が網羅的である。本論文の目的は土器の分析ではないため、各胎土の詳細は先行研究 (Nordström and Bourriau 1993a; 1993b; 馬場 2013: 41–2) に譲るが、ナカダ遺跡の土器を検討する上で重要なピートリーの土器分類との対応は次の通りとなる。まずナイルシルト A は B・C・P 土器のうちスサを含まないかほとんど含まない事例と対応する。ナイルシルト B1 は B・C・P 土器のうち、スサが含まれる事例と対応する。ナイルシルト B2 は R 土器と対応する。ナイルシルト C は同じく R 土器と対応する。マルクレイ A1 は D・W 土器、および L 土器の一部と対応する。マルクレイ A2 も D・W 土器、および L 土器の一部と対応する。マルクレイ A1 との差がほとんどないとされる (馬場 2013: 42)。またマルクレイ A4 についても D・W 土器、および L 土器の一部と対応する。ナイルシルトはナカダ文化期に通時的に利用された一方で、マルクレイはナカダ II 期以降の主に埋葬用の精製土器に用いられた。

#### 2.1.5.2. フリードマンによる胎土分類

ウィーンシステムと並んで今日のナカダ文化研究で参照される土器胎土の分類案は、R.F. フリードマン (Friedman) によって構築された (Friedman 1994)。彼女の胎土分類はナカダ文化期の土器に特化しており、自身が調査に携わったヒエラコンポリス遺跡、ナカダ遺跡、ハマミーヤ (Hammamiya) 遺跡の集落址から出土した資料を対象として、すでにヒエラコンポリス遺跡で試みられていた分類 (Hoffman and Berger 1982) を発展させて構築された。上エジプト地域に所在し、ある程度地理的に離れた遺跡を対象としている点が特徴的である。彼女は、胎土と器形の両方を分類したが、ここでは胎土の分類のみを扱う。

フリードマンは胎土の種類と混和材を主要な基準とし、色調や焼成の程度、多孔率、硬性を観察して合計で 16 の分類を設定した (Friedman 1994)。これらの分類はまず混和材の種類で大きく 7 種類に分けられる。1 つ目は主だった混和材を含まない胎土で、分類 2 と 22 の 2 つが該当する。2 つ目は有機質を混和材に含む胎土で、分類 1・4・11・21・26 の 5 つが該当する。3 つ目は破碎した土器を混和材に含む胎土で、分類 7・27 の 2 つが該当する。4 つ目は頁岩を混和材に含む胎土で、分類 3 のみが該当する。5 つ目は砂を混和材に含む胎土で、分類 9 のみが該当する。6 つ目は炭酸カルシウムを混和材に含む胎土で、分類 5・8・12 のみが該当する。7 つ目は今日のパレスティナに当たるカナーン地域から搬入された土器で、分類 100 が該当する。またそのほかの少数の胎土も一括された。これらの中でウィーンシステムにおいて定義されなかった胎土が多くあり、分類 3・4・6・7・9・21・27・100 が挙げられる (Friedman 1994: Table 4.1)。各胎土の詳細は先行研究 (Friedman 1994) に譲るが、ピートリーの土器分類との対応は次の通りとなる。分類 1 は R 土器と対応する。分類 2 は B・C・P 土器と対応する。分類 5・9・12 は、すべて D・W・L 土器の一部と対応する。分類 9 は L 土器と対応する。分類 26 は P・R 土器と対応する。フリードマンの分類とウィーンシステム・ピートリーの分類の対応は表 2.1 も参照されたい。胎土のフリードマンの研究は集落址を対象としているため、墓地出土の土器にはない胎土が多数含まれている。フリー



表 2.1. フリードマン・ウィーンシステム・ピートリの胎土分類の対応関係

	フリードマン*	胎土	ウィーンシステム	ピートリ
無混和材胎土	分類22	精製ナイルシルト胎土	ナイルシルトA	B, C, F, P
	分類2	精製ナイルシルト胎土	ナイルシルトA-B1	B, C, F, P
有機質混胎土	分類1	スサ混粗製ナイルシルト胎土	ナイルシルトB2-C	R
	分類4	スサ・石混粗製ナイルシルト胎土	-	-
	分類11	糞混ナイルシルト胎土	ナイルシルトB2?	-
	分類21	有機質混粗製ナイルシルト胎土	-	-
頁岩混胎土	分類26	有機質混精製ナイルシルト胎土	ナイルシルトB1-2	P, R
	分類3	頁岩混粗製ナイルシルト胎土	-	-
炭酸カルシウム混胎土	分類5	炭酸カルシウム混ナイルシルト胎土	マールクレイA1	D, WおよびLの一部
	分類8	砂質マール胎土	マールクレイA4	D, WおよびLの一部
	分類12	マール・ナイルシルト混合胎土	マールクレイA2?	D, WおよびLの一部
砂混胎土	分類9	砂混ナイルシルト胎土	-	-
土器細片混胎土	分類7	土器細片混ナイルシルト胎土	-	-
	分類27	土器細片・有機物混粗製ナイルシルト胎土	-	-
搬入・そのほかの胎土	分類6	不明胎土	-	-
	分類100	パレスティナ製胎土	-	Fの一部?

\* Friedman 1994: Table 4.1を改変。邦語名称は馬場 2013を一部参照。

ドマンの研究は、体系的に集落出土土器を分類した事例として、今日重要視されている。

#### 2.1.6. ハートマンによる土器分類

ハートマンは自身が発掘に携わったアビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地から出土したナカダ I-IIID2 期の土器を対象に胎土・形態を分類した。この分類は 2.2.4. で後述するアビュドス編年の基盤となった。まず胎土に関しては、ナイルシルトとマールクレイ、さらに搬入品に使用された胎土の 3 種類に分類した。さらに混和材の有無や種類・色調などを基準に、ナイルシルトは 9 種類 (N0a・N0b・N1a・B1b・N1c・N2・N3・N4・N5)、マールクレイは 4 種類 (M0・M1・M2a・M2b)、搬入品の胎土は 2 種類 (F1・F2) に分けた (Hartmann 2016: 53-62)。また表面調整や装飾の分類とそれらの胎土との相関も検討した (Hartmann 2016: 63-71)。

ハートマンの土器分類で重要な点は、相対編年の構築と密接に関連する土器の形態に基づく分類である。彼女は、土器全体の外形に加えて口縁部や底部の分類を行い、最終的に鉢形・壺型・脚台・動物形象土器などの合計で 23 の形態上の分類を設定した (Hartmann 2016: 79-110)。詳細な形態の数は合計で 326 種類になり、各々に個別の型式番号を振った。さらにハートマンは、この形態を用いてセリエーションを実施し、相対編年を構築するために、表面調整の分類としてピートリの分類に準拠した B・C・D・N・P・R・W に加えて、BP・HB・HP・BG・PG・Gr・Pf・F・Fr・M・Mr・I の分類コードを設定し、型式番号の頭にこのコード付け加えることで、表面調整と形態の両方を表す土器型式番号を作成した (Hartmann 2016: 138)。ハートマンはこの型式をもとにセリエーションを実施した。この分類はハートマンが独自に設定したものだが、重要な点は彼女が既存のピートリの土器型式 (Petrie 1921) との対応関係を明記したことにある (Hartmann 2016: 361-5)。これにより、U 墓地以外の調査で出土した土器に対しても、2.2.4. で後述するアビュドス編年を適用することが可能となった。

#### 2.1.7. まとめ

以上、ナカダ文化の土器に関する主な分類案を記述した。ピートリーによる最初の体系的な土器分類が公表されたのち、その不備を指摘したいくつかの代替の分類案が提示されたものの、1990年代までに関しては結果としてそれらは広く採用されることはなかった。状況が変わったのは、集落遺跡の発掘調査が進み始めた1980年代以降で、胎土による分類の重要性が提起された。それらの集落出土資料は、それまで多数を占めていた墓地とは異なるコンテキストから出土したがゆえに、墓地のみを典拠としたピートリーの分類の不足面が明らかになった。一方で、近年のアビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地の調査ではピートリーの分類を部分的に継承しつつ、独自の型式分類を設定して相対編年の構築に用いる研究が行われた。まとまった数の墓地出土資料を体型的に議論した研究としてはアダイマ遺跡の事例を除けば近年でも珍しく、ピートリーの分類との対応関係も明示したことでほかの遺跡への適用の余地が格段に広がり、新たな研究の展開が見込める土壌が整備された。

## 2.2. 相対編年

本節では、これまで提示されてきたナカダ文化の相対編年体系の概要を述べる。取り扱う体系は、継起年代、段階編年、ヘンドリクス編年、アビュドス編年、コンピューターを用いたセリエーションによる時期区分である。

### 2.2.1. 継起年代

#### 2.2.1.1. 概要

継起年代 (Sequence dating: S.D.) は、ピートリーによって創出された土器を対象とする相対編年で、2.1.1.で記した土器の型式分類と不可分の関係にある。すでに土器型式に関する節で記したように、ピートリーが S.D. を組みきっかけとなったのは、彼によるナカダ遺跡とバラス遺跡の発掘調査である。1894-5年に彼がこの2つの遺跡で発見した遺物は、それまでのエジプト考古学では未知のものであった。第4章で後述するように、ナカダ遺跡は表土層の主体が風成土からなる低位砂漠に位置しているために堆積がほとんどなく、また墓同士が切り合うことがほとんどないため、各墓が帰属する先後関係を層位に基づいて判断することが難しい。ピートリーはこの遺跡の特徴を踏まえ、墓に納められた副葬品のみを依拠し、各墓の相対的な時期差を明らかにすることを試みた (Petrie 1899; 1920; 1921; Petrie and Mace 1901; Petrie and Quibell 1896)。その前段階として彼は9種類の土器型式を分類・設定し、その分類を踏まえた S.D. の構築を以下の手順で試みた。すなわち、土器の形態差によるセリエーション (seriation) と、それに基づいた墓の相対的な時期の決定、細かな細分時期の決定の3段階である。まずセリエーションの前提として、ピートリーは土器の形態や意匠が時期を経るごとに徐々に変化するという仮説を立てた。そしてピートリーは、ナカダ・バラス・アバディーヤ・ヒウ・セマイナの5ヶ所の遺跡から、5つ以上の土器型式を含んだ墓を900基抽出し、それぞれの墓から出土した土器の型式を 3/8 × 7 in (約 0.95 × 17.78 cm) の短冊状の様式にまとめた。短冊状の様式は、1枚ごとにある1つの墓から出土した全ての土器型式の番号を記している。ピートリーはこの短冊を並び替えることで抽出した墓の序列を見出そうとした。その際、時間軸状の先後関係を定める基準となる土器型式が必要となるが、この基準資料としてピートリーは W 土器に着目した。W 土器は体部に波状の把手を有する土器型式であり、今日のパレスティナ地域で金石併用時代から使用されていた

同様に波状の把手を有する土器に形態上の起源を有するとされる (cf. Kantor 1942; 1952; 1992)。この W 土器の範疇には、胴張で明瞭な把手を持つ型式 (e.g. W3)、円筒形または台形で波状の装飾のみが存在する型式 (e.g. W71a, W80)、波状装飾が完全に消滅した円筒形の型式 (e.g. W90)、それらの中間的な特徴を有する型式などが含まれている。ピートリーは胴張で明瞭な把手を持つ個体を W 土器の初源的な形態とし、円筒形または台形で波状の装飾のみが存在する個体を最終末の形態と仮定して、W 土器が出土した墓の短冊を並び替えた。その次に、ピートリーは W 土器を含んでいる墓に副葬された別のタイプの土器に着眼し、その土器と同一または近い器形の土器を有する墓の短冊を選び出して、すでに組んでいた W 土器を有する墓の短冊列の間に挿入して、ピートリーが分類した 9 つの土器種類を包括するように 900 基の墓の先後関係を並び替えて時間軸を指定した。

次にピートリーは、この 900 基の墓を、18 基の墓を 1 つの単位として合計で 50 のまとまりに時系列に沿って等分し、時間軸上に乗った各墓の時期を表しやすくするために、30-80 の時期を表す連番号を墓に付した。29 以下の番号が存在しない理由は、30 の時期よりも古い特徴を持つ遺物が将来的に見つかった場合に備えて、ピートリーが意図的に空けたためである。番号は大きくなるごとに、その墓の時期が下ることを示している。この番号は、各墓の時期の順序 (シーケンス) を示していることから、ピートリーによって Sequence dating と名付けられ、S.D. と略称された。この番号を用いて、例えばナカダ遺跡 1775 号墓は S.D. 31、同遺跡 113 号墓は S.D. 79 (Petrie 1920: pl. LI)、といったかたちで各墓の時期が示された。同時に、各土器型式が S.D. 上で存続する期間もその土器形式が存在する墓の S.D. から導き出された。例えば、P56a は S.D. 31-56 の時期に入る墓から出土するため、その期間に使用された (Petrie 1921: pl. XII)、といったかたちで、特定の土器型式の存続時期が示されていた。S.D. 上の墓の時期と各土器型式が使用された時期は相補的な関係にあり、墓の時期はその墓から出土した土器型式の種類が多ければ多いほどより特定され、逆に出土した土器型式の種類が少なければ S.D. 上での墓の時期はある程度の時間幅を持つことになる。例えば、S.D. 31-46 の間に位置付けられる土器形式と S.D. 38-55 の間に位置付けられる土器形式の 2 種類がある 1 つの墓から出土した場合、その墓の時期は S.D. 38-46 の間と、時間幅がある状態で示される。

この編年の最大の利点は、ピートリーのカタログ (Petrie and Mace 1901) 上に掲載されている土器そのもの、またはそれに非常に近い土器が、S.D. の構築に利用された上記の 4 ヶ所の遺跡以外の遺跡で見つかった場合でも、その土器が出土した墓の年代を S.D. 上で推定することが可能となったことにある。この利点は、19 世紀末から 1950 年代まで非常に多くの遺跡地点が発掘されていく中で、特にイギリス隊によって調査された遺跡の時期を決定する際の基準として効果的に作用した (e.g. Petrie 1920: pls. LI, LII)。

ピートリーは、この S.D. の時間軸を、その内容を組成する土器などの考古学的特徴から 3 つの「文化期」に分割した (Petrie 1920)。この「文化期」は、アムラー期 (Amrasian)、ゲルゼー期 (Gerzean)、セマイナ期 (Semainean) であり、S.D. 上ではそれぞれ 30-37、38-60、60 以降が相当する。これらの名称は、それぞれの文化期の特徴がよく観察できたエル=アムラー遺跡、ゲルゼー (Gerzeh) 遺跡、セマイナ遺跡に由来した。各文化期を構成する土器に関しては、アムラー期には B・P・C 土器が見られるが、ゲルゼー期にはそれらがなくなるか少量になり、代わりに D 土器や W 土器・R 土器・L 土器に徐々に置き換わり、セマイナ期へと至るといふ推移が提示された (Petrie

and Mace 1901: pl. II)。この3つの時期区分により、各遺跡の帰属時期を大まかに表すことが可能となった。

なお、後年ピートリーはそれまで S.D.を設定しなかった 80 以降を含んだ、第 1 王朝開始後の S.D.を構築した (Petrie 1914; 1953a; Petrie et al. 1913)。2.1.1.で記した通り、この土器型式の分類は S.D. 79 以前のものとは異なるため、番号上では S.D.が延長されたことになるがその内実は同じ構築作業の枠組みに則ったものではない。ピートリーは、この土器型式をもとに、王朝開始以後の 76 から 87 に至る S.D.を構築した。ピートリーは、S.D. 87 を古王国時代最初の王朝である第 3 王朝の開始期に合わせて設定しているが、タルカン遺跡の利用終了時期は遅くとも第 2 王朝期の初期になるため資料の空白が生じた。この空白を埋めるため、ピートリーは、S.D. 83-87 に関してはアビュドス遺跡の第 2 王朝期の王墓や上エジプト地域の上流に南接する下ヌビア地域の諸遺跡から出土した土器資料も補足的に用いて古王国時代に至る編年を完成させた (Petrie 1953a)。

#### 2.2.1.2. 問題点

まず、S.D.の構築に、地理的に離れた地域の複数の遺跡が対象とされたことが問題である。また同じ土器型式であっても、異なる遺跡で使用時期に差が存在する可能性も否定しえない。地理的に離れた地域の複数の遺跡を一つの体系にまとめた際にこの点も問題となる。対象とされた遺跡のうち、ナカダ遺跡とバラス遺跡はおおよそ 9 km の位置関係にあり、またアバディーヤ遺跡、ヒウ遺跡、セマイナ遺跡はおおよそ 12 km の位置関係にあって、それぞれナカダ地域とアバディーヤ地域と呼称できる一つのローカルなまとまりとして捉えられる。しかし、ナカダ地域とアバディーヤ地域は、直線距離でおおよそ 35 km、ナイル河流域に沿って測れば 60 km 近く離れており、同じ S.D.に含まれる墓と土器型式であっても、実際にそれが同時期に使用されたかは不明な部分がある。さらに、ナカダ地域やアバディーヤ地域から離れた場所に所在するナカダ文化期の遺跡に S.D.が適用できるかについても疑義が呈された。この問題は、例えばピートリーが使用した資料が出土した上エジプト地域中部からは離れた、下エジプト地域に近いアブシール・エル=メレク (Abusir el-Meleq) 遺跡の発掘報告書を公刊した A. シャルッフ (Scharff) などによって早い段階で提起した (e.g. Legge 1913; Peet 1933; Scharff 1927)。

さらに S.D.の最大の問題点は、ピートリーによって、編年を構築する際に対象とされた墓の詳細が不明な点にあった。5ヶ所の遺跡で発掘された合計で 4000 基以上に及ぶ墓のうちどの墓を対象に選んだかが不明であり、またそれらの墓にどの土器型式が含まれていたかも明らかでなかった。したがって、ピートリーによって S.D.の完成形が提示されたものの、その構築過程を検証することが困難だった。S.D.の実態を明らかにするためには、構築に用いられた墓とそこから出土した土器型式を把握することが必要不可欠だったが、S.D.の構築に用いた短冊群は長年散逸したと考えられていた。しかし、近年ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンのピートリー博物館 (Petrie Museum, University College London) において、オリジナルの短冊群が見つかり (e.g. Stevenson 2015: Fig. 2) (図 2.2.)、S.D.に用いられた各墓の土器型式組成の検証が可能となった。さらに、ナカダ遺跡大墓地・B 墓地・T 墓地とバラス遺跡に関しては、S.D.の構築に対象としたすべての墓の土器型式が墓ごとにまとめられた一覧表がピートリー博物館にて見つかり (Stevenson 2017; in prep.)、どの墓が対象とされどの土器型式が編年の構築に使用されたかが不明という問題点に関しては、解決の道筋が立った。この一覧表は必ずしも博物館などで所蔵が確



図 2.2. S.D.編年構築用短冊原本の一例 (Courtesy of the Petrie Museum of Egyptian Archaeology, UCL)

認された実資料と対応するわけではないが、墓の時期を知るためには極めて有用な資料である。これら 2 種類の記録の発見は、今後 S.D.の再評価が推進されることが期待される。

一方で、S.D. 80 以後すなわち第 1 王朝開始以後は、型式学的分類の基準が異なるため、原則的には両者を結びつけることは難しい点が問題となる。王朝開始以後の時期の遺跡の事例が乏しかった 1950 年代までの状況を考慮する必要があるが、S.D. 76 以降の社会で中階層から低階層に相当する人々が葬られたとされるタルカン遺跡の資料を主体にしつつ、アビュドス遺跡の王墓地から出土した資料も用いて補うなど、遺跡の性格を除外した型式体系の構成も問題があると考えられる。

S.D.はその体系的な特徴の一方で、多くの疑義も提示されてきたが、1950 年代にカイザー編年が提示されるま

で主要な編年案であり続けた。本論文で扱う、ナカダ遺跡はまさに S.D.の構築するために対象となった遺跡であり、ピートリーが与えた S.D.を踏まえることが重要となる。

## 2.2.2. 段階編年

### 2.2.2.1. 概要

段階編年 (Stufen Chronologie) は、ドイツの W. カイザー (Kaiser) によって考案された編年体系である (Kaiser 1956; 1957)。カイザーは、ピートリーによって考案された継起年代には複数の遺跡地点を対象にした点と、検証不可能な部分があった点を踏まえ、対象の遺跡を 1ヶ所に限定した上で相対編年の構築を試みた。彼によって対象とされた遺跡はアルマント遺跡の 1400–1500 地点である。この地点は、マイヤースによって 1931–2 年に発掘調査され、合計で 169 基の墓が検出された (Mond and Myers 1937)。同時代に発掘調査が行われた他の遺跡とは異なり、各墓の規模、出土遺物、被葬者、各墓の墓域内における平面分布などの情報が発掘報告書に記載されている点が最大の特徴となる。

カイザーの編年体系で最も特徴的な点は、墓域内での墓の平面分布に着眼した点にある。カイザーはピートリーと同じく土器に着眼し、ピートリーの 9つの土器分類に準拠した。土器型式も問題点を含むことは認識しながらもピートリーのカタログ (Petrie 1921) に準拠している。その上で、墓の平面分布の中で、各墓に納められた土器の中でどの種類の土器が主体的であるかを調べた。その結果、それぞれの土器分類のうち、B 土器、R 土器、L 土器が、それぞれ副葬された土器の主体をなす 3つの区域をカイザーは見出すことができた (Kaiser 1957: Tafeln 15–20)。カイザーは、この 3つの区域は墓域が拡大した段階を表していると捉え、ピートリーが行った 3つの時期区分を踏襲しつつ、ナカダ I、II、III の 3つの時期的な段階 (Stufe (ドイツ語で段階)) を設定し、さらにそれぞれの区域に存在する墓から出土した副葬品をそれぞれの組成から、細分時期を設定した。その上でカイザーは、各細分時期に特徴的な土器型式と関連するパレットや石器などの遺物を、各細分時期を代表する遺物群のセットとして例示した (Kaiser 1957: Tafeln 21–24)。さらにカイザーは、これらの遺物群を構成する遺物をもとに、アルマント遺跡以外の、ナカダ遺跡やエル=アムラー遺跡、マハスナ遺跡、ナガ・エツ=デイル (Naga ed-Dêr) 遺跡といった上エジプトに存在するナカダ文化の墓地から検出された、相対編年の構築に十分な副葬品の情報を有する墓へと、自身が考案した年代観を適用した。様々な遺跡に適用した背景には、アルマント遺跡 1400–1500 地点は、構成墓数がナカダ文化の墓地としては、中規模よりも劣る程度で利用期間が短いためにナカダ文化期を包括するには至っておらず、単独では通時的な編年を構築できなかったためである。この点に鑑みて、カイザーは上エジプトに所在する各墓地遺跡へと自身の段階編年の枠組みを適用することで、ナカダ文化期を包括することを試みた。この結果カイザーは、3つの段階に合計で 11 の細分段階を設定した。元来カイザーは第 I 段階 (Stufe I)、第 II 段階 (Stufe II) といった呼称の仕方を行っているが、この段階は、ナカダ I 期、ナカダ II 期といったかたちで読み替えられることが多い。各段階を構成する細分段階は、ナカダ I 期が Ia、Ib、Ic、ナカダ II 期が IIa、IIb、IIc、IId1、IId2、ナカダ III 期が IIIa1、IIIa2、IIIb である。このうち、元々の分析の対象となったアルマント遺跡 1400–1500 地点は、Ic から IIIa2 までであり、それ以外の段階は、他の遺跡の事例をもとに設定された。この 3つの段

階区分は、ピートリーによる3つの「文化期」区分と数では同じものの、若干画期が降る。

のちにカイザーは王朝開始以後のナカダ文化期に関しても、段階編年の延長を試みた (Kaiser 1990)。この延長の際に手がかりとした史資料は、セレク (serekh) と呼ばれる王名とそれが陰刻された土器である。カイザーは王朝開始以前のナカダ文化期で行った時とは異なり、文献で継承順が明確な王名を基準に物質文化の段階を組んだ。その結果、カイザーは、第1王朝・第2王朝を含む期間として、IIIb、IIIc1、IIIc2、IIIc3を設定している。結果としてカイザーの段階編年では、3期14細分段階へとナカダ文化期は拡大・分割された。

カイザーの編年の特色は、公刊情報に恵まれた遺跡の記録上の特性を有効に活用した点、1つの墓域のみに着眼した点、墓域から出土した土器のセリエーションだけでなく墓域がいかに拡大・形成されたかを視野に入れた墓の平面分布に着眼した点を挙げることができる。構成墓数が少なく、かつ出土品の情報に恵まれた遺跡を対象としたからこそ可能な研究成果であったとも言える。

#### 2.2.2.2. 問題点

段階編年の最大の問題点は、1ヶ所の遺跡での編年を他の遺跡へと適用した点にある。アルマント遺跡 1400–1500 地点で構築された各段階を構成する資料を、広い地理的範囲に点在する遺跡の時期判定に適用した結果、土器やその他の遺物の地域性は捨象されることとなった (Hendrickx 1996)。またこの目的のために独自にセリエーションを実施したわけではないため、ピートリーの S.D. に依拠せざるを得ず、各土器型式が段階編年上で持つ連続時期などが不明であり、新たに発見された墓への適用が困難を伴う場合も存在した。アルマント遺跡から出土した土器の種類は、ピートリーがカタログに収録したもののうちのごく一部に過ぎず、カイザーが他の遺跡に適用した段階編年の時期は仮説的な面を多く含んでいる可能性は否定しえない。さらに、彼がのちに追加した第1王朝・第2王朝に相当する IIIc1–IIIb の設定に関しては、IIIb までの段階設定とは扱った資料の種類や編年の構築方法に根本的な違いが存在するため、連続した段階として統合することは原則的に不可能となっている。この点は、ピートリーの S.D. と同様に資料の制約が大きく関わっていると考えられる。これらの問題点は編年構築の手続きが公開されていれば検証が可能だが、かつてのピートリーの場合と同じく、カイザーもまた彼が行った編年構築作業の詳細を出版しなかった。そのため、今日においても紙数の限られた数本の文献 (Kaiser 1956; 1957; 1990) から彼の編年構築作業の過程を推測せざるをえず、作業の全容に接近することは難しい。

#### 2.2.3. ヘンドリクス編年

##### 2.2.3.1. 概要

ヘンドリクス (Hendrickx) 編年は、S. ヘンドリクスによって構築された編年である (Hendrickx 1989; 1996; 1999; 2006)。まずヘンドリクスは、カイザーと同じく墓域内で出土した土器の分布に着眼したが、カイザーの場合よりも対象遺跡をさらに拡大して王朝開始以前の時期の遺跡と王朝開始以後の遺跡の双方を検討した。対象とした王朝開始以前の遺跡は、合計で 10 遺跡 12 地点である。具体的には、マトマール (Matmar) 遺跡 2600–2700 地点、バダリ (Badari) 遺跡 3700 地点、同 3800 地点、ハマミーヤ遺跡 1500–1800 地点、カウ (Qau) 遺跡 100 地点、エ



ル=サルマニー (el-Salmany) 遺跡、ナカダ遺跡大墓地、アルマント遺跡 1300 地点、同 1400–1500 地点、ヒエラコンボリス遺跡 HK27 地点、エルカブ (Elkab) 遺跡第 24 地点、エル=クッバーニヤ (el-Kubbaniya) 南遺跡である。また王朝開始以後の遺跡としては、アブ・ロアシュ (Abu Roash) 遺跡 0 地点、同 300 地点、同 400–500 地点、同 800–900 地点、同 M 地点、サッカラ (Saqqara) 遺跡 R. マクラマラー (Macramallah) 発掘地点、トゥラ (Turah) 遺跡、タルカン遺跡 A 地点、同 F 地点、同 G 地点、同 H 地点、同 J 地点、同 Q 地点が対象となり、合計で 4 遺跡 13 地点が分析された。ヘンドリクスは、ピートリーの土器分類を採用した上で、各遺跡の墓域内での土器型式がどこに分布するかを観察した。その結果、ヘンドリクスは 3 期を基本とし 14 に細分される時期区分を設定した。この時期区分は、I 期 (IA、IB、IC)、II 期 (IIA、IIB、IIC、IID1、IID2)、III 期 (IIIA1、IIIA2、IIIB、IIIC1、IIIC2、IIID)、である。特に画期に関しては、特にカイザーの IId2 段階と IIIa1 段階を IID2 段階に統合し、II 期と III 期の境をカイザー編年の IIIa2 段階に相当する年代に押し上げている。ヘンドリクスの編年は、ピートリーの土器分類に準拠しつつ、カイザーの方法を取り入れ、かつ複数の遺跡を別個に検討した上で最終的に結果を総合しており、南北に細長く分布するナカダ文化の遺跡を統一した基準で検討した点で意義が大きい。ヘンドリクスが、自身の分析で対象とした遺跡の墓の時期を根拠となった土器型式番号とともに公表していること (Hendrickx 1989) も、それまでの編年体系とは異なる。こうした情報公開によりピートリーの土器型式ごとに検証しやすいためか、ヘンドリクスの編年体系は、発表されて以降、それまで多く使用されていたカイザーの段階編年に代わり、今日の多くのナカダ文化の研究で採用される傾向にある。

#### 2.2.3.2. 問題点

ヘンドリクス編年の問題は、ナカダ IIC 期以降の時期に関しては、詳細に設定された一方で、ナカダ IA 期から IIB 期の時期設定に関しては、不明瞭であることにある。この問題は、ナカダ文化の遺跡の数は文化圏がナイル河の下流域にまで拡大したナカダ IID 期以降に増加するが、ナカダ IA 期から II 期中盤の上エジプトでは、分析が可能な遺跡の数は少ないことに起因する。上エジプトでは、ナカダ文化初期に推定される多くの遺跡が発掘・踏査されているが、報告書が刊行された遺跡は限定される。この事情がナカダ IA 期から II 期中盤の時期設定に影響している。ヘンドリクス自身も、地域によって土器の様相に地域差があることは述べており (Hendrickx 1996; 2006)、特に彼が設定したナカダ IA、IB、IC 期に関しては、複数の遺跡で一様な画期を経ているとは限らない。ナカダ I 期をめぐる彼の時期設定には改善の余地が存在することに関しては、ヘンドリクス氏本人からも私信を頂いている。その一方で、ヘンドリクス編年はナイル河流域の諸遺跡で出土した土器の製作技法と型式の地域差が画一化されるナカダ IIC 期以降 (Friedman 2000; 馬場 2013) の時期に関してはより効果的に作用すると見られる。ナカダ遺跡やアビュドス遺跡など、ナカダ文化初期から存続している遺跡で発見された墓の時期を決定するためには注意を払う必要があるものの、今日の公表されているものの中ではヘンドリクス編年は時期が降れば降るほど有効性が増す編年案である。

#### 2.2.4. アビュドス編年



#### 2.2.4.1. 概要

アビュドス編年は、ドイツ考古学研究所カイロ支部 (Deutsches Archäologisches Institut, Abteilung Kairo: DAIK) によって、1985 年以降 2001 年まで行われたアビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地での発掘調査の成果に基づく土器編年である。長らく報告書は未公開だったが、2016 年に U 墓地で検出されたナカダ IID2 期までの墓から出土した土器に関する報告書が刊行された (Hartmann 2016)。同墓地では、DAIK によって発掘された墓のおよそ 80% が、I-II B 期に帰属し、その中には IA 期や IB 期の墓が多く確認されたとされる (Hartmann 2011a: 24)。2.1.6. で記したように土器の分析を担当したハートマンは、IA 期から IID2 期の土器を、それまでの研究のようにピートリの分類に完全に準拠するのではなく、参照しつつ独自の型式分類を設定した上で、コンピューターを用いてセリエーションを行い、合計で 9 つの段階 (Phase) を設定した (Hartmann 2011a; 2011b; 2016)。ここではこの 9 つ段階を便宜的に細分段階と呼称する。セリエーションの結果、まずハートマンは U 墓地の存続期間を 1. IA-II B 段階、2. IIC-IID2 段階の 2 つの大きな段階に分割し、IA-II B 段階と IIC-IID2 段階の間には、移行期 I-II 段階を設定した。次にハートマンは、1. IA-II B 段階を、時期が古い方をさらに Ia 段階、新しい方を Ib 段階に分け、2. IIC-IID2 段階を、時期が古い方を IIa 段階、新しい方を IIb 段階に分けた。さらに細分段階として、Ia 段階は Ia1・Ia2・Ia3 段階に、Ib 段階は Ib1・Ib2 段階に、IIa 段階は IIa1・IIa2 段階に、IIb 段階は IIb1 段階として細分した (図 2.3.)。

絶対年代 cal. BC	S.D. 編年	段階編年	ヘンドリクス編年	アビュドス編年
	S.D. 30			Ia1 段階
		Ia 段階	ナカダ IA	Ia2
	31-33	Ib	IB	Ia3
約4000/3900-3600年		Ic	IC	Ib1
	33-38	IIa	IIA	Ib2
	38-47	IIb	II B	I/II 前半-後半
		IIc	II C	IIa1
約3600-3350年	47-58	II d1	IID1	IIa2
		II d2	IID2	IIb1
		IIIa1		
		IIIa2	III A1	
約3350-3150年	58-80	IIIb	III A2	
		IIIc1	III B	
約3150-3000年		IIIc2	III C1	
約3000-2920年		IIIc3	III C2	

図 2.3. 絶対年代と S.D.、段階、ヘンドリクス、アビュドス編年の対応関係 (Hartmann 2016: Abb. 87 改変)

ハートマンのアビュドス編年の意義は、ナカダ I 期の土器様相の理解へ大きな貢献をしたことにある。2.2.3.で言及したように、ナカダ文化初期から存続した墓地は限定されている。その中で U 墓地は最も活発に利用された時期が I-II B 期に当たる稀有な事例である。さらに、1980 年代以降に、現代の考古学調査の水準を以って、副葬品の出土しなかった墓も含めた 676 基にのぼる墓を発掘した事例は、U 墓地以外にはない。1ヶ所の墓域に焦点を当てて編年を構築した点ではカイザーの段階編年と同様だが、対象とされたアルマント遺跡 1400-1500 地点は、ナカダ文化 IA-IB 期の最初期の段階では利用以前だったため、カイザーは他の遺跡で検出された墓の事例を流用して段階編年を構築せざるを得なかった。また、アルマント遺跡は小規模な墓地であったため、出土した土器型式の種類は、ナカダ遺跡などの大規模な墓地で出土していた土器型式の種類よりも少なく、この点でも編年を構築するに足る条件を十分に満たしているとは言い難い点があった。実際にハートマンによれば、カイザーが概報時に段階 Ia と Ib に設定した U 墓地の墓には、アビュドス編年では同じ Ia2 段階に含まれる事例があったという (Hartmann 2011a: 27)。ハートマンの研究は、カイザーの段階編年が有していた問題点に回答し、なおかつそれまで詳細が不明であったナカダ I 期を細分し直した点、U 墓地の発掘調査で出土した土器資料を図版とともに公表し、カイザーの段階編年やヘンドリクス編年との対照関係を示した点に大きな意義を持つ。また、自身の土器分類とピートリーの土器分類の対応関係を明示し、U 墓地以外の遺跡で検出された墓の類似資料に、アビュドス編年上の時期を与えることを可能にした点は非常に意義高い。ハートマン自身も U 墓地に加えて、同じアビュドス地域のエル=アムラー遺跡やマハスナ遺跡、U 墓地から見てさらに遠隔に所在するナガ・エツ=デイル遺跡、ナカダ遺跡、バラス遺跡、アルマント遺跡などで検出された墓の年代をアビュドス編年に基づいて提示している点も、ナカダ文化初期の編年の理解に対する大きな貢献である (Hartmann 2016: 287-339, 353-365)。

#### 2.2.4.2. 問題点

ハートマンの編年の問題点は、公表からまだ年数が経っておらず他の遺跡への適用が十分に進んでいない点にある。またヘンドリクス編年のナカダ IIIA1 期以降に相当する時期の土器を扱っていない点も問題となる。IIIA1 期以降が欠如している点は、U 墓地では IIIA1 期以降は墓の構造が根本的に変わり、支配者層に占有された墓域へと墓地の位置付けが変わるので、ハートマンは無理に整合させることはしていない。他の遺跡へのアビュドス編年の適用に関しては、ハートマンによっても行われてはいるが、U 墓地の土器編年構築の延長線で部分的に行われたのみであり、それぞれの遺跡で、アビュドス編年への適用を個別に検討する必要がある。また、特にナカダ I-II B 期の事例に関しては、遺跡ごとにローカルな土器型式が存在しており、そうしたアビュドス編年の土器体系にはない事例をどのように組み入れるかは、個別に検討する中で発生する課題点である。この課題点は、ピートリーの S.D. 以来の古くから存在する問題点でもある。したがって必ずしもアビュドス編年で定められた画期がどの遺跡でも齊一的に起こったとは限らない点も考慮する必要がある。この点に注意を払う必要性は、ハートマン自身も同様の趣旨のことを述べており (Hartmann 2011a:)、やはり遺跡単位で各墓から出土した土器型式を検討することが本来的には望ましいと言える。

ヘンドリクス編年のナカダ IIIA1 期以降の土器編年がアビュドス編年に欠落している点も問題だが、幸いへん

ドリクスが墓単位で IIIA1 以降に属する土器の型式を開示している（Hendrickx 1989）、アビュドス編年の最後に当たる IIb1 段階を構成する土器型式との対応関係を把握すれば一応の接合が可能と言える。ナカダ IIIA1-III B 期は、原王朝または第 0 王朝とも称される最初期の国家体制が出現した時期であり、社会の構図が大きく変化した時期とも捉えられる。UeQ 地区 U 墓地は最初期の王墓地とされており、まさに社会体制の変化自体を体現した墓地と言える。その意味では、アビュドス編年の最終段階の設定は当時の社会体制の変化と非常に整合的である。なおかつ、ヘンドリクス編年の IIID2 期に相当する IIb1 に置かれている点も、区切りが良いと言える。

## 2.2.5. コンピューターによるセリエーションとその結果を用いた時期分割案

### 2.2.5.1. 概要

ピートリーの S.D. は手作業によるセリエーションだったが、カイザーの段階編年で示されたように、ピートリーが示したアムラー期・ゲルゼー期・第 1 王朝の画期と、カイザーが示した I・II・III の各段階の画期との間には、小さいながらも乖離が生じていた。S.D. の画期がなぜ段階編年の画期と乖離しているのかを検討するために、コンピューターのセリエーションプログラムの有用性の検討が、B.J. ケンプ (Kemp) によって行われた (Kemp 1982)。ケンプは、ケンブリッジ大学で開発された多次元尺度構成法を用いた多変量解析プログラムを用いて、土器の構成の近似度を測り、その結果を順列させた。分析の対象とした遺物は土器であり、アルマント遺跡 1400-1500 地点、エル=アムラー遺跡 a 墓地、同遺跡 b 墓地、マハスナ遺跡 H 地点、エル=サルマニー遺跡を分析で取り扱った。論文では、ケンプはこれらの遺跡のうち、エル=アムラー遺跡 b 墓地とマハスナ遺跡 H 地点の資料の分析結果を提示している。分析に先立ちケンプは、エル=アムラー遺跡 b 墓地で報告されているピートリーの土器型式を、43 にまとめた。その上で、土器型式を 2 種類か 3 種類以上含んでいる 70 基の墓を分析対象にした。一方でマハスナ遺跡 H 地点に関しては、38 の土器型式と、98 基の墓を分析対象とした。その結果、両遺跡の土器構成は、3 つのグループに分割することができたという。特にマハスナ遺跡の土器は、グループ I と II の間を明確に分割することができたという。ケンプは、自身の研究をコンピュータープログラムの有用性を示すためであって、詳細な分期とナカダ文化の他の遺跡への一般化をするものではないとしているが、ピートリー自身の土器セリエーションを用いても、彼が設定したアムラー期とゲルゼー期の画期よりは若干新しい時期にグループ I と II の画期が位置付けられること、ピートリーがセマイネ期とした遺物は、おそらく第 1 王朝の時期に位置付けられるという大まかな見解を示した (Kemp 1982: 13, 15)。ケンプの作業の意義は、ピートリーのセリエーションと S.D. に手作業ゆえの主観に起因する画期の線引きの誤りが含まれている点を指摘した一方で、ピートリーの作業自体には大きな誤りがなく概ね正しいことを示した点にある。また、コンピューターによるセリエーションがナカダ文化期の土器の編年を研究する際に有効であることを示した点でも、意義を有するといえる。

T.A.H. ウィルキンソン (Wilkinson) もまたコンピュータープログラムを用いたナカダ文化墓地遺跡の画期の設定を、国家形成過程の復元の過程で試みた (Wilkinson 1995)。ウィルキンソンは研究目的を、1. ナカダ文化期の編年の改良、2. ナカダ文化社会での社会的・経済的変化の探求、の 2 つに定めた。この目的のため、ウィルキンソンの研究では、ケンプの研究とは異なり、王朝開始以後の遺跡も含めた 7 遺跡 9 地点が分析の対象とされた。

7 遺跡 9 地点の詳細は、トゥラ遺跡、タルカン遺跡丘地区 (Hill Cemeteries)、マトマール遺跡 200 地点、同 3000 地点、同 5100 地点、モスタゲッダ遺跡 1600-1800 地点、マハスナ遺跡 H 地点、アルマント遺跡 1400-1500 地点、ヒエラコンポリス遺跡 HK27 地点、である。セリエーションに先立ち、ウィルキンソンは、土器の形状と装飾の有無を分類の基準に選び、対象の 7ヶ所の遺跡で確認できた 1542 種類のタイプのうちの 1420 種類を、合計で 141 のグループにまとめた。これらのグループのセリエーションを対象の遺跡ごとに実施したところ、ピートリーやカイザー、ケンプらと同じく、ナカダ文化期を 3 つに区分することができた。ウィルキンソンは、最初の画期はカイザーの段階編年の IIa と IIb の間にあり、2 つ目の画期は段階編年の IIIa1 と IIIa2 の間にあると主張した (Wilkinson 1995: 63)。つまり、カイザー編年によって示された時期よりもやや後ろに画期を提示した。

ウィルキンソンのコンピュータープログラムを用いたセリエーションによる画期の意義は、ケンプの分析よりも多くの遺跡を分析したことにある。アルマント遺跡やマハスナ遺跡は、ケンプの分析でも対象となったが、セリエーションの前提となる土器編年を変えてもほぼ同様な結果を得られた点は、ピートリーの設定したアムラー期とゲルゼー期、ゲルゼー期とセマイネ期の画期は、実際に想定される画期よりも早い段階に設定されていることの証左と言える。

#### 2.2.5.2. 問題点

コンピューターを使ったセリエーションは、画期を見出すために極めて有用であることを示した一方で、前提となる土器型式の分類の妥当性については、批判が向けられている。ケンプとウィルキンソンは双方ともにピートリーによる土器分類を基に、セリエーションを容易にするためにまとまりを形成した上で画期を求めたが、複数の土器型式のまとめ方について疑義が生じている。特にウィルキンソンの土器の分類案 (グループ) に関しては、ヘンドリクスによって、1 つのグループ内に著しく異なる様相の土器が包括されていたり、本来 1 つのグループにまとめられるべきグループが 2 つに分けられている事例が存在したりする点などが指摘されている (Hendrickx 2006: 67)。ただし、ヘンドリクスはこれらの分類上の問題点が、ウィルキンソンのセリエーション結果に決定的な問題を起こすほどでもないことも同時に述べている (Hendrickx 2006: 67)。ウィルキンソンのセリエーションが抱える問題の要諦は、複数の遺跡で出土した土器を包括した上で分類し直した点であり、無理に共通の斉一的な分類基準を設定するのではなく、土器型式の大部分を共通させつつ、特定の遺跡でのみ報告されている土器型式を加え、遺跡ごとにセリエーションを行えば、ヘンドリクスの指摘する点は回避することができたと思われる。ただしそれでもウィルキンソンの研究では胎土を考慮してはいない点は、彼の分類上の問題として残る。実際、2.2.4.1. で触れたように、ハートマンは独自の基準で土器を分類してコンピューターセリエーションを行うことで画期の策定のための良好な結果を得ている (Hartmann 2011a; 2011b; 2016)。コンピュータープログラムを用いたセリエーションは、1ヶ所の遺跡での分析に親和的であり、良好な資料数に裏打ちされた分析がなされれば、結果の確度も向上すると考えられる。

ケンプの研究のもう 1 つの問題点は、S.D. が構築されたナカダ遺跡を含む 5ヶ所の墓地資料を用いていない点である。ケンプの分析が行われた当時には資料がまだ再発見されていなかったために、ナカダ遺跡などは分析が

できないという事情は考慮される必要がある。しかし、S.D.の画期を確認するのであれば、本来であればナカダ遺跡など、構築そのものの対象となった遺跡の分析が必要である。ただし、2.2.1.2.で述べたように、S.D.の構築に用いられた原本やその典拠である墓ごとに出土した土器型式番号をまとめた一覧表が近年相次いで見つかることから、ナカダ遺跡などがコンピュータープログラムによるセリエーションの余地は生じている。

#### 2.2.6. ナカダ文化の相対編年研究の総括と本論文で基準とする相対編年

以上、2.2.1.-2.2.4.で取り扱った様々な相対編年の構築には、概ね共通する手続きが存在した。すなわち、土器の分類、セリエーション、墓域内分布の検討、である。このうち、土器分類に関しては、ピートリーが整備したカタログ上の型式が、どの編年案においても基準となっていた。調査によっては、独自の土器編年は存在していたが (e.g. トウラ遺跡 (Junker 1912)、下ヌビアの遺跡群 (Reisner 1910)、エルカブ遺跡 (Hendrickx 1994a))、1950年代までに行われた遺跡の調査ではほぼピートリーの土器体系が採用されたことが、セリエーションにピートリーの土器分類が多用された背景にある。一方で、カイザー以降の編年では、ピートリーの土器型式の墓域内での分布が、相対編年の検討の対象として加わった。土器の形態的だけでなく、墓域の形成過程も着眼されるようになった。そしてコンピュータープログラムを用いたセリエーションにより、ナカダ文化期は、3つの期間に分けられることも確認された。一方、多くのセリエーションが場合ピートリーの土器分類を基に分類を試みていることから、画期の再検討は軽微な修正に留まり、ピートリーの定立した大まかな枠組みを超えてるものではなかった。器形と並んで、分類に用いることができる土器の情報である胎土の分類基準 (e.g. Friedman 1994; Nordström and Bourriau 1993b) が整備されていった一方で、初期の発掘で得られた資料は出土品自体へのアクセスが難しいことが影響し、良くも悪くも発掘者の分類に依らざるを得なかった。抜本的な修正は、独自の分類基準で十分な量の資料を基に試みられたアビュドス編年であり、ナカダ I 期に帰属する土器型式の設定が進み、ピートリーの分類との対照も付けられた。

以上のナカダ文化の相対編年に関わる先行研究を踏まえて、本論文では、アビュドス編年を基にしつつ、ナカダ IIIA1 期以降に関してはヘンドリクス編年を接合した時間軸設定する。アビュドス編年が発表されたにも関わらず、ヘンドリクス編年を採用する理由は、本論文で対象とするナカダ遺跡の存続期間がアビュドス編年の終了段階である IID2 段階を超え、IIIc1 段階まで続いているからである。ヘンドリクスがナカダ遺跡の墓の時期を詳細に明らかにしていること (Hendrickx 1989: 317-78) も III 期の検討に役立つ。以上の枠組みを基に設定した本論文で分析の対象とするナカダ遺跡の各墓の時期は、付編 2 と 3 の一覧に組み込んで示している。

### 2.3. 絶対年代

放射性炭素による年代測定法を初めて発表したりビーが、自身の分析で得られた年代の整合性を検証するための試料の一部を、天文現象から年代が算定可能な古代エジプトの資料から得たことは著名である (Libby 1955)。彼は王朝時代のもののみならず、ナカダ文化期の遺物も対象とした。以後、ナカダ文化期の遺跡研究では、特に遺構や層位の年代を算定するために、放射性炭素年代測定法が用いられてきた。ただし、半減期や測定方法・較

正曲線の違いにより、年代測定の結果が一様であるとは言い難い。また近年ではベイズ統計 (Bayesian statistics) を利用した新しい絶対年代の結果が提示されている。本稿では、これまでにナカダ文化遺跡の出土資料から測定された絶対年代と、土器などの考古資料から得られている画期との関係を概括する。

### 2.3.1. ナカダ文化研究への放射性炭素年代測定の導入

ナカダ文化が絶対年代でどの時間幅に収まるのか、という点についての関心はすでにナカダ文化研究の初期から存在した。初めてナカダ文化の遺跡を本格的に発掘調査したピートリー自身も絶対年代の推定を行っており、ナカダ文化期を含む先史時代を紀元前 8000 年から 6000 年の間に求めている (Petrie 1920: 5-6)。ピートリーの推定は、ナイル河の両岸に存在する段丘の侵食速度に関する当時の見解を援用しつつ提示された。この年代は、リビーによる放射性炭素年代測定法による結果によって否定されるに至ったが、相対年代のみならず絶対年代の推定にも挑んだという点で、ピートリーの言及は学史上の意義が大きい。

放射性炭素年代測定法が一般的になる以前に、すでに多くのナカダ文化の墓地遺跡が発掘され、型式学的観点から相対編年の整理が行われていた一方で、絶対年代を推定することも課題の一つだった。リビーは古代エジプトの資料を複数扱ったが、ナカダ文化のものに関しては、ナカダ遺跡から得られた 5 つ (試料番号 C-810、C-811、C-814、C-812、C-813) の年代測定の結果が公表されている (Libby 1955)。試料 C-810 は 1487・1562・1592・1816 号墓から、試料 C-811 は 1401・1410・1729・1863 号墓から、試料 C-812 は T56 号墓から、試料 C-813 は 733・1349 号墓から、試料 C-814 は 1609 号墓から採取された。試料の種類は、皮膚を採取した C-814 を除き、すべて遺体から採取した髪である。これらの試料から、C-810 が  $5744 \pm 300$  B.C.、C-811 が  $5619 \pm 280$  B.C.、C-812 が  $5020 \pm 290$  B.C.、C-813 が  $4720 \pm 310$  B.C.、C-814 が  $5577 \pm 300$  B.C. の未校正年代が提示された。校正年代に関しては、68.2%の有意水準で、C-810 は 4950-4250 cal. B.C.、C-811 は 4800-4050 cal. B.C.、C-812 は 4250-3350 cal. B.C.、C-813 は 3900-2900 cal. B.C.、C-814 は 4800-4000 cal. B.C. が提示された。最初期の測定事例とのこともあり、推定期間が非常に長い。95.4%の有意水準で考えた場合はさらに推定期間が長くなる。

### 2.3.2. 1980 年代以降に行われた、放射性炭素年代測定と相対編年との関連性の検討

1980 年代以降は、各所で行われた発掘調査で試料の採取と年代の測定が実施されている。この中でも特筆すべきは、F.A. ハッサン (Hassan) の研究である。リビーの年代測定の結果を受けて、ハッサンは自身が発掘調査したナカダ地域の集落遺跡であるカッタラ第 1・3A・3B・3C・6 地点で得た試料の年代を測定した。その結果、ナカダ I 期は紀元前  $3760 \pm 40$  年を中間点とし、95%の有意水準で推定期間は 3840-3680 cal B.C.、ナカダ II 期の年代に関して、紀元前  $3440 \pm 70$  年を中間点とし、95%の有意水準で推定期間は 3600-3300 cal B.C. とした (Hassan 1984: 683)。

また、ヒエラコンボリス遺跡の調査でも年代測定が実施され、HK6・11A・11C・14・29 の 5 地点から採取された 14 点の試料が対象となった (Hoffman 1982: 139-40)。調査者の M.A. ホフマン (Hoffman) は、ヒエラコンボリス遺跡では概ねナカダ I 期は 3800-3500 B.C. に、ナカダ II 期は 3500-3200 B.C. に、ナカダ III 期は 3200-3100 B.C.

に、それぞれ年代を位置付けることができるとした (Hoffman 1982: 139-40)。

上記の事例はいずれも新規発掘で得られた試料であるが、既存の考古資料から試料を抽出し、年代測定を試みた事例も存在する。1950年代半ばまでの著しい発掘調査で得られた遺物は、イギリス・アメリカをはじめとする欧米の博物館には多数の墓地出土資料が収蔵されるに至った。そうした遺物、特に土器の中には、内容物を残した事例や、炭化物が付着した事例があり、それらを試料とした年代測定が行われ、型式学的な知見との対照が行われた。例えば、ナガ・エツ=デイル遺跡 N7000 墓地から採取された試料 16 点を対象にした年代測定が実施された (Savage 1998)。

博物館所蔵資料を基に、放射性炭素年代測定を実施する流れは近年でも続いており、得られた未較正年代に、ベイズ統計を利用したウィグルマッチング (wiggle matching) 法を適用することで、較正年代を求める事例が見られる。例えば、M. デー (Dee) らは先王朝時代・初期王朝時代の各時期の存続期間を再検討するために年代の測定を実施し、表 2.2. に示した結果を得た。(Dee et al. 2013; Wengrow et al. 2014; Stevenson 2016)。この測定では、

表 2.2. Dee et al. 2013 の研究結果を反映したバダリ・ナカダ文期の推定期間 (Stevenson 2016: Table 2 改変)

時期	推定期間 (B.C.)
バダリ文化期	4400-3800
ナカダIA-III期	3800/3750(?) - 3450
ナカダIIC-D期	3450-3325
ナカダIIIA-IIIB期	3325-3085
ナカダIIIC-IIID期 / 第1王朝	3085-2867

バダリ文化期からナカダ文化期の時期の試料 186 点が対象となった。186 点のうち、74 点は新規に年代の測定と較正が行われた試料で、残りの 112 点はすでに未較正年代が公表されているものでデーらが新たに較正を行った試料である。新規に年代の測定と較正を行った試料は、ヒトの髪や骨、あるいは種子やカゴ材のアシ、リネンの断片といった短寿命な植物 (short-lived plant) 由来の試料で、パレスティナのガザ (Gaza) に所在するテル・エツ=サカン (Tell es-Sakan) 遺跡の発掘調査で採取した 5 点を除き、全て欧州と北米の博物館に所蔵された考古試料から採取された (Dee et al. 2013: 2)。年代の測定の前に、全ての試料には酸-塩基-酸 (Acid-Base-Acid: ABA) 前処理法が行われた。較正のみを行った試料は、48 点が短寿命の植物と動物遺体で、47 点は木片、16 点は炭化物、1 点は貝であったという (Dee et al. 2013: 2)。これらの試料の分析の結果として、デーらはナカダ IB 期と IC 期の画期の推定期間を、68%の有意水準では 3690-3605 B.C.に、95%の有意水準では 3731-3550 B.C.とし、IIB 期と IIC 期の画期は、68%の有意水準では 3498-3413 B.C.に、95%の有意水準では 3562-3367 B.C.に、IID 期と IIIA 期の画期は、68%の有意水準では 3352-3297 B.C.に、95%の有意水準では 3377-3238 B.C.として、IA 期から IIIB 期までの先王朝時代のナカダ文化期全体の推定期間を、68%の有意水準では最長 730 年間で最短 563 年間に、95%の有意水準では最長 825 年間で最短 477 年間、という値を提示した (Dee et al. 2013: Table 1)。なお IIIC1 期以降の初期王朝時代に関しては、各王の継承年の推定を行っているため、IIIB 期までの物質文化上の画期とは一致しない。この中でデーらは IIIC1-IIIC2 期におおよそ相当するアハ (Aha) からカア (Qa'a) に亘る合計で 8 代の

王たちからなる第1王朝の存続期間として、68%の有意水準では最長270年間で最短170年間に、95%の有意水準では最長375年間で最短153年間、という値を提示した (Dee et al. 2013: Table 1)。

また、A. フッド (Hood) らは、相対編年が明らかな墓から出土した、型式学的にも相対編年案に明確に位置付けられる6点の時を対象にした年代測定を行った (Hood et al. 2017)。この研究で対象となった土器の出土地と点数は、ナカダ遺跡 T5 号墓 (AM 1895.525)・バラス遺跡 588 号墓 (AM 1895.533) 各1点、アビュドス遺跡 O 号墓4点 (AM E. 3158、AM E. 4034、AM E. 4065、AM E. 4066) であり、すべてイギリスのオクスフォード大学付属アシュモレアン (Ashmolean) 博物館所蔵資料から採取された。分析では、土器自体の製作時期を求めるために光ルミネッセンス (Optically Stimulated Luminescence: OSL) 年代測定法が、土器の内容物の年代を測るために OSL 法と放射性炭素年代測定法の2つがそれぞれ採用された。結果として、ナカダ遺跡とバラス遺跡の試料は年代測定に失敗したか混入が疑われる若い年代 ( $400 \pm 920$  cal. B.C.) が得られたために不調に終わった一方で、アビュドス遺跡の試料で内容物の測定を行った3点のうち、2点ではそれぞれ  $3490 \pm 720$  cal. B.C. および  $3480 \pm 270$  cal. B.C. という遺構の時期とおおむね整合する測定結果を得ることができた (Hood et al. 2017: Table 2)。続いて、フッドらは OSL 法で年代測定を試みたが、この測定方法では有意な年代測定の結果が得られなかった (Hood et al. 2017: 649)。放射性炭素年代測定法では、酸—塩基—酸 (Acid-Base-Acid: ABA) 法と、クロロホルム (chloroform: CHCl<sub>3</sub>) 法による前処理を行った2種の試料を、各土器資料に用意した。これらの試料の較正年代を ABA、CHCl<sub>3</sub> の順に記すと、AM 1895.525 は  $3498\text{--}3106$  cal. B.C. と  $3366\text{--}3103$  cal. B.C.、AM 1895.533 は  $3515\text{--}3349$  cal. B.C. と  $3498\text{--}3119$  cal. B.C.、の年代を得ることができ、ABA の場合のみ得られたアビュドス遺跡出土資料に関しては、AM E.4034 は  $3081\text{--}2896$  cal. B.C.、AM E.4065 は  $3014\text{--}2884$  cal. B.C.、AM E.4066 は  $3097\text{--}2917$  cal. B.C. であった (Hood et al. 2017: Table 3)。E.3158 は測定に失敗した。フッドらの年代測定の意義は同一資料へ複数の分析手法を適用することで、より多くのデータを引き出すことを試みた点にある。土器自体の年代は、概ね型式学的知見に立った時期と整合的であり、博物館に収蔵されている資料が採取された遺跡の墓自体の時期や類似土器資料の時期推定のための方法として一定の有効性が示されたと捉えられる。

### 2.3.3. ナカダ文化研究における絶対年代のまとめと問題点

以上から、ナカダ文化の遺物と絶対年代の測定は、放射性炭素年代測定法の開発時から密接な関係にあった。特に上エジプト地域のナカダ文化遺跡の多くは、低位砂漠上に位置しているために良好な堆積が望めない環境にあるが、放射性炭素年代測定法などは、遺物やそれが出土した遺構へピンポイントで絶対年代を与えることができ、相対編年を暦年代上に布置することができる有用な手段であった。一方で、放射性炭素年代測定法は日進月歩であり、1950~1980年代以降に公表された年代は、ディーらによって再較正された試料を除き、較正年代に大きなズレが生じている。これまで公表された年代の一覧が数度公表されているが (Hassan 1985; Hendrickx 1999)、これらに記された年代は大まかな時期を把握するための手掛かりとはなるものの、測定方法や測定時期、コンテクストなどに注意を払うべきである。この中で、ディーらが行った、ベイズ統計を利用したウィグルマッチング (wiggle matching) 法の適用は、ナカダ文化期の画期を考える上で、現段階では最新の年代測定であると言える。



ディーらはナカダ遺跡を含む複数の遺跡を分析の対象にしており、本論文の対象のナカダ遺跡の墓の絶対年代を示す値として有用である。2.1.で触れたように、遺跡間で遺物の組成などに若干の地域差が存在しており (e.g. Hartmann 2011a)、実際にヒエラコンボリス遺跡やナカダ遺跡などでは有意水準 68 %で数十年程度の違いが提示されている (Dee et al. 2013: Table S3)。この点でもディーらが提示したデータは重要性を持ってくる。また、フッドらの分析はナカダ遺跡や近隣のバラス遺跡で得られた遺物を年代測定の対象に用いていることもあり、ナカダ遺跡の墓の絶対年代の検討に有用であろう。

#### 2.4. まとめ

本章では、これまでナカダ文化の研究で行われてきた型式学的分類研究、相対編年の構築、絶対年代の算出に関して、その概要と問題点を取り扱った。最後に図 2.4.に現在のナカダ文化の研究でこれまでに提示された主な相対編年の対応関係を示す。本論文では、2.2.6.で記した通り、相対編年はアビュドス編年を基本にナカダ IIIA1~IIIC1 期に関してはヘンドリクス編年を適用した時間軸を用いる。この時間軸と絶対年代、ビートリー・カイザー・ヘンドリクス・アビュドス編年との対応関係を図 2.5.に示した。本論文ではこの時間軸の各期を「段階」と呼称する。また分析にあたっては、Ia1-Ia3・Ib1-Ib2・IIa1-IIa2・IIb・IIIa1-IIIa2・IIIb・IIIc を「基本段階」とし、各基本段階を構成する細かな段階に関しては「細分段階」と呼称する。細分段階の表記法は、アビュドス編年と同じく、Ia1・IIa2・IIIa2 のように基本段階を示すローマ数字と細分段階を示す小文字のアルファベットおよび数字を組み合わせた。この時間軸上の枠組みに則って、各種の分析を行うこととする。この相対編年上の画期を暦年代に位置づけるため、ディーらのベイズ統計を用いたウィグルマッピング法を適用した較正年代を基準として考える。特にナカダ遺跡の墓で、ディーらの研究で較正年代が提示された事例 (Dee et al. 2013: Table S1) に関しても考慮した。

ピートリー*	シャルフ**	ケンブ***		ハンサン****	ウィルキンソン*****	カイザー*****	ヘンドリクス*****
S.D. 30-34 アムラー期前期	ナカダI	エル=アムラー 遺跡 第1グループ過 渡期	マハスナ遺跡 第1グループ	中期先王朝時代	マハスナ遺跡 1a	段階Ia	ナカダIA
S.D. 34-37 アムラー期後期					マハスナ遺跡 1b モスタゲッダ遺跡 1 マトマル遺跡 1 アルマント遺跡 1	Ib Ic	IB IC
S.D. 38-44 ゲルゼー期前期	ナカダII	第2グループ過 渡期	第2グループ	後期先王朝時代	マハスナ遺跡 2a モスタゲッダ遺跡 2a マトマル遺跡 2a アルマント遺跡 2a マハスナ遺跡 2b アルマント遺跡 2b マトマル遺跡 2b マトマル遺跡 2cd	IIa IIb IIc IIId1 IIId2	IIA IIB IIC IID1 IID2
S.D. 45-60 ゲルゼー期後期							
S.D. 61/63-78/79 セマイナ期	原王朝時代	第3グループ過 渡期	第3グループ	最終期先王朝時代	マハスナ遺跡 3 モスタゲッダ遺跡 3 マトマル遺跡 3 アルマント遺跡 3	IIIa1 IIIa2 IIIb1 IIIb2 IIIc1 IIIc2	IIIA1 IIIA2 IIIB IIIC1 IIIC2
初期王朝時代	初期王朝時代						

\* Petrie 1920: 1939      \*\*\*\*\* Wilkinson 1995  
\*\* Scharff 1931            \*\*\*\*\* Kaiser 1957: 1990  
\*\*\* Kemp 1982            \*\*\*\*\* Hendrickx 1996: 2006  
\*\*\*\* Hassan 1988

図 2.4. ナカダ文化の相対編年の対応関係 (Hartmann 2016: Abb. 49 改変)

絶対年代 cal. BC	S.D. 編年	段階編年	ヘンドリクス編年	アビュドス編年	本論文の編年
	S.D. 30			Ia1 段階	Ia1 段階
		Ia 段階	ナカダIA	Ia2	Ia2
	31-33	Ib	IB	Ia3	Ia3
約4000/3900-3600年		Ic	IC	Ib1	Ib1
	33-38	IIa	IIA	Ib2	Ib2
	38-47	IIb	IIB	I/II 前半-後半	I/II 前半-後半
		IIc	IIC	IIa1	IIa1
約3600-3350年	47-58	IIId1	IID1	IIa2	IIa2
		IIId2	IID2	IIb1	IIb
		IIIa1			
		IIIa2	IIIA1		IIIA1
約3350-3150年	58-80	IIIb	IIIA2		IIIA2
		IIIc1	IIIB		IIIB
約3150-3000年		IIIc2	IIIC1		IIIC
約3000-2920年		IIIc3	IIIC2		

図 2.5. 本論文で使用する時間軸、絶対年代および主要な相対編年案の対応関係 (Hartmann 2016: Abb. 87 改変)

### 3. 研究史：社会構造の埋葬考古学的研究

過去の社会の検討を試みる時、墓は様々な研究の着眼点を提供する有用な対象の1つである。墓自体が有している最も基本的な機能は死者の格納だが、実際にはその基本的な機能に社会の様々な規制や概念が加わり、その時代・集団に特有な墓制が形成される。考古学的手法による場合、規制や概念などが含まれる観念に関わる領野の解明は最も難易度が高いとされるが (Hawkes 1954; 横山 1985)、埋葬考古学ではこの様々な規制や概念は墓から得られる埋葬属性 (mortuary attribute) を検討することで、過去の社会の一端を復元することが目指される。墓の特性は、葬儀が行われた時点の遺体や副葬品などを組み合わせた考古学的コンテキストがある程度残されている点にあり、社会構造を解明するために有用な対象の一つとして着眼されてきた (e.g. Binford 1971)。

本章では、墓から社会構造の解明を試みた研究の歴史を、考古学と、文化人類学などの隣接分野における研究事例を取りまとめる。3.1.では、考古学一般において墓から社会構造の解明を試みた代表的な研究を整理する。3.2.ではナカダ文化の墓地資料を用いた社会構造の代表的な研究事例を、3.1.で示した考古学全体の流れの中に位置付けて述べる。3.3.では、3.1.と 3.2.を受けて、特に階層などの社会構成員の序列に関する社会構造を解明するための着眼点を提示する。

#### 3.1. 考古学一般における墓地資料を用いた社会構造の研究史

墓地から得られる資料から社会構造の解明を試みた本格的な研究は、L.R. ビンフォード (Binford) による研究 (Binford 1971) に端を発する。しかし、彼の研究に至るまで、墓地は過去の社会の一端を解明するための対象として様々な視点から研究されてきた。一方で、考古学が対象とする過去の社会に限らず、どの人間社会であって死という事象を発端に何らかの社会的な意味を伴う反応が起こり、その反応も社会によって様々なことが特に文化人類学的研究から蓄積されてきた (Metcalf and Huntington 1991)。人類学的知見からは死にまつわる社会の規制は、考古資料から得られる知見以上に複雑なことが得られ、考古学にも影響を与えた。葬送行為の人類学的な研究に関する枠組みは、考古学的な研究への還元の有効に働く面を多く持つと見込まれる。そこで以下では墓地研究の発展を人類学的な研究も含めて言及する。

##### 3.1.1. 葬送行為の人類学的研究

葬送行為の研究は19世紀後半から本格化した。この時期には、死とそれにまつわる信仰という宗教的側面が研究者の主要な関心を集めており (Bartel 1982: 33-7)、初期には社会構造と絡めた研究は薄かった。この時期の最も代表的な研究はE.B. タイラー (Tylor) によるアニミズム (animism) 論で、彼は民族事例を参照して来世は身体と靈魂の二元構造と関連し、死者への供物は祖先崇拝に基づく犠牲の原型に当たると説いた (e.g. Tylor 1865)。一方で、社会構造を想定した研究も実証主義的な歴史学の立場には存在し、葬送行為が親族構造と密接に関連することを説いた研究もあった (Fustel de Coulanges 1864)。この時期の研究では、葬送行為の根源には死者による生者への危害がないように儀礼を行うことで慰霊するという観念の存在が推測されていた。

タイラーのアニミズム論はのちに H. スпенサー (Spencer) によって社会進化論の立場から整理され (e.g.

Spencer 1876)、宗教体系の複雑さは社会の複雑さに比例し、その宗教体系の一部に組み込まれる葬送観念の複雑さも社会の複雑さと比例するという、社会構造との関連が持たされ始める。また同時期にモーガンは社会進化論的視点に立った社会構造の発展を論じた (Morgan 1877)。アニミズム論は、C. トムセン (Thomsen) が考案した 3 時代法の提示以降、物質文化が段階的に発展するという考古学の思想と親和的で同時代の J. ラボック (Lubbock) などの考古学者へも影響を与えた。例えば、ラボックはデンマークの青銅器時代の墳墓での副葬品埋葬を、靈魂が不滅であり、死後においてもものが存在するという観念が存在したことの傍証として捉えた (Lubbock 1865)。彼はブリテン島の墳墓を対象に、墓の種類や遺体の方向、副葬品などの属性を対象にした統計的な分析も行った (Lubbock 1865)。属性の分析を通じた墓制の検討は今日に至る埋葬研究の根幹であり、最初期に実践された事例と言える。またラボックは墓の記念碑的性格 (monumentality) や、物質的な富裕さ、墓の造営にかかる時間と労力などの視点に着眼しており、いずれも墓地内の墓の差異を抽出するために重要な視点である (Lubbock 1865)。

こうした 19 世紀におけるイギリスのタイラーらの説は、20 世紀に入りフランスの人類学者たちによって批判的に検討された。フランス系の人類学で著名な人々は、E. デュルケーム (Durkheim)、R. エルツ (Hertz)、A. ヴァン・ジュネップ (van Gennep)、M. モース (Mauss) である。タイラーらのアニミズム論が身体と靈魂の二元構造に基づく祖先崇拜として葬送行為を捉えたのに対し、デュルケームらはある社会に存在する葬送を含む宗教的観念やそれに基づく行動を、社会システム全体を構成する他の要素と関連させて解釈することを重視した。例えばエルツは、ボルネオ島のダヤク (Dayak) 族に見られる、仮埋葬と改葬の 2 段階の過程を踏む埋葬 (double burial) の方法は、経済活動や被葬者の地位、親族組織に起因する義務などに関連し、年齢や性別、地位などの社会内の差異も埋葬方法を定める要素として関連することを説いた (Hertz 1905)。また、ヴァン・ジュネップは『通過儀礼 (Les rites de passage)』の中で、社会に見られる儀礼には「分離 (séparation)」・「移行 (marge)」・「統合 (agrégation)」という過程が見られるとし、この文脈で人間の生の帰結である死を発端に生じる葬送儀礼と行動、その意味を検討した (van Gennep 1909: 209-36)。葬送儀礼は「分離」の過程に含まれ、彼はヘルツと同じく被葬者の性別や年齢、社会的地位などに規定される来世観などの社会内的要因によって様々な様相を呈するとし、葬送儀礼後の服喪は生者にとって「分離」の過程から再び「統合」に至る「移行」の過程にあたるとした。彼の説の意義は、葬送儀礼が一社会構成員の死という個別的事象を超え、社会全体で死がいかにか受容されていくかを示したことにある。このように、フランス系の人類学における埋葬研究の特徴は、社会システムに存在する様々な要素と絡めて社会の構成員にとって葬送儀礼が持つ意味の理論的に説明を試みた点にある (Chapman 2003)。一方で、エルツやヴァン・ジュネップらの研究は少数の民族事例研究によっており、ほかの民族事例への適用が難しいという難点も抱えていた (Bartel 1982: 39)。しかし、民族事例と比べて圧倒的に限られた情報に依拠して埋葬を検討せざるを得ない考古学的研究に対しては、今日でも有用な考察のための理論的枠組みとなると期待される。

A. ラドクリフ=ブラウン (Radcliff-Brown) や B. マリノフスキー (Malinowski) らに代表される機能主義的・構造主義的見地に立った 1920 年代のイギリス文化人類学は、フランス系の人類学の考え方を受け継いだ。この構造的・機能主義的人類学が、今日の考古学的な葬送研究に直接影響しているとされる (Bartel 1982: 39)。ラドクリフ=ブラウンは葬送儀礼の要因を検討し、ある社会の構成員の死によって社会集団が被る損失への対処と捉え、タイ

ラー初期の人類学にあった遺体への本能的な恐怖という考え方を否定した。ラドクリフ=ブラウンは、インド洋のアンダマン（Andaman）諸島の民族事例を元に、社会のある地位にある人物が死を迎えると、当人とそれまであった社会的な繋がりや人的ネットワークが断絶して社会の紐帯の一部が欠落することになるので、その欠落を補い、再生するための対処が必要になると説いた（Radcliff-Brown 1922）。ラドクリフ=ブラウンは、埋葬儀礼を、既存の社会的紐帯を乱す事象への集約的・儀礼的反応であるとし、ヴァン・ジュネップが述べた埋葬儀礼の「分離」と再「統合」の性格を強調している（Radcliff-Brown 1922: 287）。一方で人間の作り出す文化を人間が持つ生物としての需要への対処とするマリノフスキーは、埋葬儀礼によって儀礼の参加者にもたらされる生理的な欲求や感情的側面が重要性を持つと説き、ラドクリフ=ブラウンとは異なりより個々人の埋葬に対する感受的側面を重視した（Malinowski 1944）。マリノフスキーは遺体や死への恐怖といった心理的側面を否定しておらず、むしろ葬送儀礼は人々の間に心的な影響を与える場とした。両者のうち、特にラドクリフ=ブラウンの機能主義的な観点は、その後の考古学的・人類学的な埋葬儀礼の研究に大きな影響をもたらした。

C. レヴィ=ストロース（Lévi-Strauss）に代表される構造主義人類学では、人間を自然の一部として考え、人間の無意識的行動が自然によって規定されている点を重視し、特に神話や宗教体系の研究に力が注がれてきた。神話や宗教体系が埋葬儀礼と密接に関連している点は、タイラー以来の人類学的埋葬研究で明らかとなったので、構造主義的な研究が埋葬研究にもたらす潜在性は重要である。構造主義的な見地に立つ埋葬の研究では、ラドクリフ=ブラウンらの機能主義的な見地に立った埋葬研究が、社会構造を解明するために、当該社会の人々が果たした役割や機能を社会構造と直結させて標準化させていると批判する。構造主義人類学では、異なる宗教体系や社会組織の中にある共通性を見出すことに重きを置いており、個々の事例から帰納的に埋葬を考察するよりも、ある共通の理論的な枠組みの中で、個々の事例を検討することを重視した。例えば、レヴィ=ストロースは、北米の先史時代の考古遺跡数例を対象に、社会組織を検討した（Lévi-Strauss 1958）。この中で、重要なのは墓地遺跡だけでなく、集落遺跡も踏まえて考察した点で、集落に見られる施設の空間配置と墓地の空間構造との対応や、そこから推定できる社会構造を検討した。考古学的な視点から捉えれば、遺構の空間配置とそのほかの属性に焦点を当てることの重要性が示されたと評価することもできる。

### 3.1.2. 葬送行為の考古学的研究

こうした人類学における成果を背景に、墓地資料を対象に過去の社会の階層や親族組織などの社会構造の考古学的な研究は1960年代以降に本格化する。その前段階には、民族事例を検討した人類学的埋葬によって様々な形態を持ち、同じ形態の埋葬であっても文化や民族によって葬られる対象が異なることから、埋葬形態から普遍的な見解を明らかにすることは難しい、とする見解があった。例えばA. クローバー（Kroeber）は南米やアフリカなどの民族事例を集成して上記の結論を得た（Kroeber 1927）。またP. アッコー（Ucko）は、民族事例と考古学調査で得られた事例を比較しながら同様の趣旨の発言を述べ、遺体の埋葬や副葬品の存在が必ずしも来世観念の存在を示しているとは限らない点や、埋葬に関連する遺物や遺構から被葬者の経済的・地位的優劣を必ずしも推定できるとも限らない点、葬送方法の変化が葬送観念の変化を必ずしも示すのではなく、一つの社会にも複数の葬

送方法がある点、葬送方法の決定が考古学者の想像が及ばないような理由に依っている可能性がある点を挙げた (Ucko 1969: 265-6)。そして考古資料に依拠した葬送行為の復元には大きな困難が伴うとし、「考古学者の悪夢 (Archaeologist's nightmare)」という言葉を残した (Ucko 1969: 273)。

この見解からの脱却を試みたのが、ビンフォードと、A. サックス (Saxe) である。まずビンフォードは民族考古学的視点に立ち、中範囲理論 (middle range theory) に則って先史社会の社会構造を民族事例の墓制から検討することを試み、民族事例の集成から生業の種類ごとに埋葬の事例を抽出して埋葬に見られる普遍的な法則の検討を試みた (Binford 1971)。彼はまず、ある個人が持つ「社会的な人格 (social personae)」が社会の中でどのような役目を果たすかという点に立脚した。社会的な人格とは、ある個人の一生の中で維持される様々な社会的アイデンティティ (social identity) の複合である (Goodenough 1965: 2-4)。社会的アイデンティティとは、ある人物が社会の中で自分と他人とを区別する「立場 (position)」である。1人の人間は社会的アイデンティティを複数持ち、場面によって使い分けている。そしてその立場にはある社会の中でもつ地位 (status) も含む。地位はそれを示す地位シンボル (status symbol) によって、社会の中で各構成員が果たす役割が明示的に区別される。ビンフォードは埋葬にも被葬者の地位が反映されており、社会的な人格が埋葬方法の差異に重要な役割を果たすと想定した。しかし、埋葬の形態が社会や地域によって様々なことはそれまでの人類学的研究から提起されてきたので、ビンフォードはどのような墓制が存在するのかではなく、埋葬に見られる被葬者の地位シンボルの種類に着眼した。彼はイェール大学が運営・編纂する「地域別人間関係資料 (Human Relations Area File: HRAF)」内に記された、計40の国家体制ではない社会 (non-state organized societies) を対象にした。HRAFによれば、これら40の事例は、その生業形態から、1. 狩猟採集民 (hunter-gatherers)、2. 遊動農耕民 (shifting agriculturalists)、3. 定住農耕民 (settled agriculturalists)、4. 牧畜民 (pastoralists) に分類される。その上で彼は葬送方法の基準となる要素 (dimensional distinction) を計量した。この基準は、「死に方 (condition of death)」、「死んだ場所 (location of death)」、「死者の年齢 (age)」、「死者の性別 (sex)」、「死者の社会的地位 (social status)」、「死者の帰属 (social affiliation)」の6種類である。この結果、狩猟採集民、遊動農耕民、牧畜民の事例と比べ、定住農耕民の事例では葬送方法の基準の数と種類に大きな違いがあることが明らかになった (Binford 1971: Tables 2, 3)。なお定住農耕民の事例と比べてそのほかの3つの事例では互いに顕著な事例が見られなかった。特徴的な点は、「死者の性別」はどの生業形態の社会でも共通して多く見られる一方、定住農耕民社会では「死者の性別」に加えて「死者の社会的地位」や「死者の帰属」も多く見られた点である。したがって、社会構造が発達した定住農耕民社会では、「死者の社会的地位」や「死者の帰属」もまた葬送方法を決定する際の基準として重要なことが示された。またビンフォードは、特に定住農耕民社会では「社会的地位」に関連した葬送方法の差異が、墓の位置や、副葬品の種類や量またはその両方に顕著に表れることを明らかにした (Binford 1971: Table 4)。

以上から、ビンフォードは葬送方法の複雑さと社会文化システム内の地位システムの複雑さには直接的な相関が存在し (Binford 1971: 18)、またいかなる社会の葬送行為を特徴付ける形態と構造は、その社会の組織的な特徴の複雑さによって決定される (Binford 1971: 23) という一般論を述べた。ここから、副葬品の種類や量、埋葬方法や埋葬場所に違いがあるとき、その違いの基準が主に被葬者の性別や年齢によるのならば、地位分化が著しく

ない社会、すなわち平等または平等に近い社会であり、被葬者の性別や年齢に加えて被葬者の地位や帰属を基準として葬送方法が異なっているのならば、その社会が平等ではない社会の構成員間に地位的な差異が存在する社会（例えばランク社会（Fried 1967））であることが、一般論として示されたと言える。

サックスはビンフォードと同様に民族事例を用いたが、異なる方向から議論を進めた（Saxe 1970）。サックスの研究は、西アフリカのアシャンティ（Ashanti）族、ニューギニアのカパウク（Kapauku）族、フィリピンのイゴロット（Igorot）族、ボントク（Bontoc）部族の3つの民族事例を対象に、埋葬に関わる一般法則の仮説を定め、それらの適用可能性を検定する論理的・思考実験的な方向性を持っていた。彼は、ビンフォードと同様に、ある個人の社会的な人格が集団の中でどのように位置付けられ、それが埋葬や社会構造をどのように関わるかを検討する8つの仮説を立てた（Saxe 1970: 64-121; cf. Parker Pearson 1999: 29-30）。この8つの仮説は、個人と社会の繋がり、構築法、被葬者の地位の高低、埋葬属性同士の関連度、社会の複雑さとシンボルの関係、葬法の程度、埋葬地、と様々な視点を持つが、多くは限定的か棄却、または検定されなかった。サックスによって適用可能性が確認された仮説で重要なものは、8番目の仮説である。この仮説は、「ある集団が重要だが限られた資源を使用する権利を直系の先祖との繋がりによって獲得・正当化するのならば、その集団は自身の占有的な埋葬区域を持ち、そうでないなら占有的な埋葬区域は持たない（‘To the degree that corporate group rights to use and/or control crucial but restricted resources are attained and/or legitimized by means of lineal descent from the dead, such groups will maintain formal disposal areas for the exclusive disposal of their dead, and conversely.’）」（Saxe 1970: 119）というものである。ここでいう資源とは、物質的なものだけでなく、社会の中で構成員間を区別する要素を含む。利用可能な資源の多寡が、人々と先祖などの死者とのつながりの程度を決定し、葬送儀礼の差異に関連することを指摘した点でこの説は重要性を有する（Parker Pearson 1999: 30）。サックスの8番目の仮説は、L. ゴールドSTEIN（Goldstein）によって30の民族事例を対象に再検討され、支持された（Goldstein 1981; Parker Pearson 1999: 30）。ゴールドSTEINは、永続的かつ特殊で閉鎖的な埋葬区域または墓域は、ある集団が限られた資源を占有する権利を模索する一環としてとる手段の一つだと述べた（Goldstein 1981）。つまり占有的な墓域の存在は、その社会にある種の資源を占有する集団があり、逆にそのような墓域がなければそのような集団もまた社会にないことを意味するとした（Goldstein 1981; Parker Pearson 1999: 30）。サックスの8番目の仮説は、今日でも基本的に支持されており（Brown 1995; Morris 1991）、ゴールドSTEINによる検証と合わせて、墓地を検討する視点として重要である。

ビンフォードやサックスの研究の後、それらをもとにした墓地資料から社会構造を解明するための研究はさらに進展した。J.A. テインター（Tainter）は、対象となる社会の発達を簡便に記すために便宜的にフリードの平等社会やランク社会（Fried 1967）といった用語を使用し、この2つのいずれかに分類される社会における副葬品の差異を検討した（Tainter 1978）。彼によれば、平等社会では、副葬品の差異は量的な側面にしか現れず、副葬品の種類数の差異は顕著でないのに対して、ランク社会では副葬品の量的な差異に加えて種類数の上でも差異が表れる。ここから彼は、平等社会では被葬者が生前獲得した獲得的地位が副葬品の量の差異と関連する一方で社会内での地位自体は複雑でないことから地位を示す特定の副葬品の種類数への需要が起きないと考えられ、一方でランク社会では地位体系が複雑で地位を表すための特定の副葬品の種類が多いゆえに副葬品の種類数が豊

富になるとした。ランク社会では副葬品の量的差異よりも副葬品の種類数の差異が、地位的な差異を示すために重要なことを意味する。ただし、副葬品量の多寡自体も地位的な差異を表すための役割をもち、付加的に副葬品の種類に立脚した地位の表象を強化している場合があると考えることができるとする。しかしテインターは副葬品の持つ重要性を述べる一方、考古学者が発掘できる副葬品以外に、儀礼などで消費されたり意図的に破壊されたりした副葬品もあるため、副葬品のみで依拠した分析は地位の差異を示すために十分とは言えないとも述べた。

この問題に対処しつつ考古学的に埋葬を検討するため、テインターは分析の対象となる集団の構造を、「縦の次元 (vertical dimension)」と「横の次元 (horizontal dimension)」に分割することを提起し、この2つを念頭に墓地から得られる属性の効果的な分析を試みた。縦の次元は階層や階級などの序列を、横の次元は出自集団や、血縁など集団の横の広がりを目指す。この枠組みでは、平等社会に属する人々は集団内におけるそれぞれの立場を親族などの横の次元に関わる基準に持っていき、なおかつ相互に顕著で恒久的な序列は見られない一方、ランク社会であればこれらに加えて縦の次元が明確に規定されて地位が序列化されることになる。実際には平等社会でも序列は見られるが、あくまで一時的・一代限りで恒久的ではないため、ランク社会の序列とは異なる。テインターは、墓地資料から縦の次元に関する社会構造を検討するならば墓の造営に投じられたエネルギー量に、横の次元に関する社会構造を検討するならば埋葬に関連する遺物や遺構の分布に注目すべきとした (Tainter 1978: 122)。横の次元の検討で重要な分布としてサクソやゴールドステインの8番目の仮説の有効性をテインターは支持しており、明確に分化した墓域が確認されればその墓域を形成した社会には分化した集団が存在し、その集団には先祖との血縁上の繋がりが存在するとの説もテインターは承継した (Tainter 1978: 123)。一方でテインターは、「横の次元」と「縦の次元」のうち、考古学的には「縦の次元」に関わるデータの方がより読み取りやすいことを述べた (Tainter 1978: 124)。この点は、テインターが「縦の次元」の検討の基準となる墓の造営に投じられたエネルギー量が、例えば墓の規模などの基本的なデータから得やすいことによる。テインターは103件の民族事例を対象に、墓の造営に関わるエネルギー量の指標に遺体の処理にかかる手間、埋葬施設の造営にかかる手間と造営場所、埋葬行為の規模と期間の3点を設定して検討した結果、ある人物のランクが高ければ高いほど、投じられるエネルギー量も増大することを示し、この説の一般性を主張した (Tainter 1978: 125)。しかし問題はテインターがビンフォードと同じく情報が豊富な民族事例をもとに分析した点で、実際に考古資料にエネルギー量の視点を導入することは容易ではない。例えば先史時代の葬送儀礼はその規模や期間の把握が極めて難しい。遺体の処理にかかる手間も同様である。また投じられたエネルギー量の違いにどのような意味があるのかについて、考古学的な解釈が不可欠で、エネルギー量が具体的に数値化できる訳でもないことも問題である。また、民族事例を扱った I. ホダー (Hodder) や M. パーカー=ピアソン (Parker Pearson) は、墓の造営にエネルギーを多数投じたからといって、それが被葬者のランクを反映しているとは限らない点を述べた (Hodder 1982; Parker Pearson 1982)。少なくともエネルギー量に立脚するのならば、得られたデータをもとに対象とする考古文化に特有なコンテキストを見極めつつ、データの指す意味やランクの有無を検討することが不可欠となる。しかしながら、テインターの研究は、社会を「縦の次元」と「横の次元」に分けて、副葬品の分析の有用性と限界性を同時に示し、なおかつ埋葬に投じられたエネルギー量という視点を導入した点で、重要な意味を持つと言える。墓の造営に投じたエネ



ルギーの差異は、遺構という比較的失われにくい痕跡から推測が可能であり、被葬者の社会的な差異を検討するための手がかりとなる。また考古資料からある社会におけるランクの有無とその内容を考察するために定量的な分析の可能性を提示した点も重要性が高い。

テインターと同じく、J.A. ブラウン (Brown) も墓地資料を用いた、世襲的な不平等 (hereditary inequality) や、ランクの存在を考古学的に推測する研究を行った (Brown 1981)。ブラウンは、ランクの程度は社会システムの規模や複雑さを図るための指標であり、世襲的な不平等の発生は支配者の出現や社会システムの複雑化とともに起こるので、先史社会の世襲的な不平等を検討すれば、その社会における社会システムが検討できるとした。ブラウン自身は言明していないものの、彼は社会的な不平等を背景とするランクがある社会から社会的な不平等に加えて経済的な不平等も存在する社会階層がある社会への発展を考えたフリードの社会発展モデルに則っており、経済的な不平等に先立つ社会的な不平等の看取を目指したとされる (白井 1998: 75)。ブラウンは、埋葬行為に関連する考古資料からランクを推定するための理論的枠組みとして、社会的地位と社会の発展段階を結びつける一般的な理論、物質文化と社会を結びつける理論、考古資料から得られる静的な痕跡からパターン化された人間行動のモデルを作る言説、の3つを挙げた。社会的地位と社会の発展段階の関連性に関して、ブラウンは例えば小規模な社会にはランクがありながらも政治的な指導者が存在しない事例もあるため、ランクの存在が即、フリードの首長制社会と直結できるとは限らないとし、過去の社会を人類学的な社会段階に当てはめるよりも、あくまで考古資料からランクの分化度合いやその構成を評価し、ランクが形成される自然的・社会的条件に注目する必要性を述べた。この点は、個々の内容が異なる考古文化とその社会における社会構造の発展を観察する上で、重要な言説である。物質文化と社会を結びつける理論に関連してブラウンはランク社会と考えることが可能な埋葬に子どもの厚葬墓を挙げた。子どもの埋葬はランク社会における個人の社会内での地位の種類と大きく関連する。なぜならビンフォード (Binford 1971) も述べたように、埋葬方法の差異は被葬者の年齢や性別、社会内での地位や人格によって左右され、社会内での地位は死者が生前に自身で獲得した獲得的地位 (achieved status) と、親や直系の先祖から与えられた属性的地位 (ascribed status) があるからである。属性的地位は子どもが所与のものとして保有している一方で獲得的地位は持っていないので、仮に手厚く葬られた子供の厚葬が確認できれば、物質的に優劣が生じるほどの属性的地位の存在を示し、その社会がランク社会である可能性が高くなる (Brown 1981: 28)。さらにブラウンは、考古資料から得られる静的な痕跡からパターン化された人間行動のモデルを作る言説に必要な視点として、墓へのエネルギー量、権威を示すシンボル、埋葬の生物学的割合を挙げた。エネルギー量はテインターが提示した概念で、埋葬に投じられたエネルギーが各埋葬で異なるのならば、その社会にはランクの存在が示唆される (Brown 1981: 29)。権威を示すシンボルは、その役割を果たす特定の物品があり、それが被葬者の年齢や性別、個人の能力に関わらず副葬されていれば属性的地位が存在し、その社会にランクが存在する可能性が示唆される (Brown 1981: 29-30)。埋葬の生物学的割合に関しては、ある社会にランクが存在して排他的な墓域が形成されるのならば、そこに葬られた被葬者の性別比や年齢比には偏りが生じるとする。これは、例えば出生時などの人間の性別比は元来概ね半々であり、ある墓域における被葬者の性別比や年齢比に特定の偏りがあるのならば、墓域への被葬者の埋葬が何らかの規則に基づいていたことを示す可能性があるからで、序列の存在によって被葬

者の選択が起こると考えた (Brown 1981: 30)。この点は子どもの厚葬と関連し、ランクの存在を読み解くために有力な手がかりとなる。ブラウンの研究は、考古学的資料を用いて社会内の序列を検討するための理論的枠組みを提示した点で意義高い。特に、単純に人類学的な社会発展の図式に事例をはめ込むのではなく、序列の分化の度合いやその構成を解明することと、分化の形成に至る経緯の探索を重要視した点は注目される。国家形成期の研究では分化の初出とその拡大過程を通時的に把握することが重要なので、ブラウンの視点は注目される。ブラウンが第一にあげた子供の厚葬や権威を示すシンボルに加え、ランクの分化を反映する考古学的証拠を、埋葬コンテキストから可能な限り多く抽出できれば、社会の分化度合いや分化の過程をトレース可能になると考えられる。

以上に記した、ビンフォードの研究以降の社会構造を墓地資料から検討するための整理は、1980年代前半に一旦総括されており、ビンフォード以来の研究では、社会構造を検討するための材料を墓地資料から抽出するための技術的側面に関する理論と、埋葬方法を決定する環境的側面はよく検討されてきた一方で、ある社会で元となる葬送観念自体や、宗教的信仰への検討が足りないという批判された (Bartel 1982; Chapman and Randsborg 1981)。こうした課題点は、3.1.1.で上記したラドクリフ=ブラウンやマリノフスキーなどのイギリス機能主義人類学、エルツやヴァン・ジュネップなどのフランス人類学など、人類学の分野ですでに実践されてきた部分を含んでおり、人類学的知見を取り入れる必要性が述べられている (Bartel 1982)。ビンフォードなどのいわゆるプロセス考古学の研究は、複数の民族事例の比較研究を通じて、どの文化にも共通する理論的枠組みを模索・構築することを目指しており、中範囲理論として、考古資料から得られる情報を最大限に活用した社会構造の推定方法を提示してきた。そこでは、考古資料という可視的な情報を重視せざるを得なかった点は首肯できる一方、反面こうした不可視な部分を加味すべきという批判を受ける要因にもなったと捉えることができる。

この批判点で述べられている観念など考古学的資料に残らない部分に関する諸課題を、民族事例を自身の目で観察し、記録・検討することで解決することを目指したのがホダーである (Hodder 1982)。ホダーの研究の最大の特徴は、HRAFなどの二次資料を用いたビンフォードらの手法とは異なり、自ら民族事例の調査に赴いて、考古学者の視点で観察した点にある。ホダーは、1970年代に今日のスーダン南部コルドファン (Kordofan) 地域に居住するヌバ (Nuba) 族のもとで民族考古学的調査を実施した (Hodder 1982)。ホダーの調査は埋葬に特化していたわけではないが、埋葬に関しては同じ生業形態で物質文化にも共通性がある隣接する部族間でも、墓の造営方法や副葬品の種類や量、遺体の処理方法などの細部に違いがあることを報告した。ホダーは、細部が異なる一方で埋葬や宗教観念の大要は共通していても細部では異なり、社会構造と埋葬行為の間に共通の関係性があるとは限らない点を示し、通文化的特徴の看取を目指したビンフォードらの研究手法とは逆の立場をとる。社会状況がそのまま埋葬に関連するとは限らない点が示されたが、これはアッコーが指摘した埋葬方法の決定には考古学者が想像できないような理由が存在するという点 (Ucko 1969) の延長線上にある。

ホダーの言説は、歴史考古学的な視点からも実践され、パーカー=ピアソンは20世紀中盤の英国の墓地を対象にした墓地研究を行った (Parker Pearson 1982)。彼は、いわゆるジプシー (Gypsy) などの一般的に社会的に低い立場にある人々が、経済的基盤や職種、人種などの点で社会的に高い位置にある人たちよりも、造墓や葬式を含めた葬儀にかかる費用をより多く掛けている点を述べた。また一方、土葬と火葬の事例をもとに、低い社会的立

場にある人たちの埋葬に関する伝統は比較的長く存続する一方、高い社会的立場にある人たちは埋葬も簡潔なものになるとの傾向も述べた。彼の研究は、現代に極めて近い事例を対象としているため先史時代とは全く異なるが、重要な点は埋葬がそのまま実社会における関係性を反映するわけでは必ずしもなく、むしろ死者に残された側の生者が、自身の理想の社会像を埋葬に付託していると述べた点にある (Parker Pearson 1982)。

ただし、ホダーらはプロセス考古学的な墓制の研究手法を否定しているわけではない点は留意する必要がある。入手が可能な考古学的情報に基づいた研究手法は有用である点は変わりなく、むしろ個別の文化が持つ独自性にも注意を払い、それぞれの社会における埋葬に関連する宗教的・観念的な理由をよく理解した上で分析と解釈を試みる必要性をホダーらは示したと言える。

こうしたビンフォード以来の埋葬研究を総括してホダーの提起も受けつつ、J.M. オシェイ (O'Shea) は墓地から得られる資料から明らかにできる過去の社会の組織やその働きを再検討した (O'Shea 1981; 1984)。彼は、それまでの研究にあった過去の社会に存在した差異が埋葬にも表れている前提に疑問を投げ掛け、埋葬に現れる差異を検討するための首尾一貫した理論がなお不十分と批判した。オシェイは、そうした理論を形成・検討するために、考古遺跡から得られる埋葬関連資料 (墓地資料) が現在に到るまでいかに残存するかという墓地の遺跡形成過程を研究した。彼は、理論的検討ののちに、北米のポーニー (Pawnee) 族、アリカラ (Arikara) 族、オマハ (Omaha) 族の事例と考古遺跡の事例研究を実施し、民族事例と残存した考古資料の対応を検討して、墓地資料が遺跡形成過程による変質により、実際の社会構造と対応しない事例を検討した。この研究で、彼は墓地資料が現代に至るまでに様々な人為的な変換を受けており、墓地資料には完全に消失したものや部分的にしか残らないものがあり、元来は墓地資料でないものが墓地から発見される混入の事例も確認した。オシェイは、考古学者が手許にある墓地資料から社会構造の復元を試みるならば、本来あったはずの埋葬行為の全体を可能な限り把握し、遺跡には何が遺され、何が遺っていないかを考慮した上で、述べる事が可能な限度を見極めることが必要であることを述べた。事例研究を通じて、オシェイはテインターの述べた社会構造の縦の次元は墓地遺跡から得られる墓の規模や構造、副葬品の量や種類などから把握可能なことを追認した一方で、横の次元に関しては儀礼などの人間の行動に関わる領野や遺体の処置方法、有機質の遺物の副葬といった遺跡環境次第では腐朽してしまう事項などの考古学的に認識不可能な部分に多く見られることを指摘し、横の次元を考古資料から看取することの難しさを示した (O'Shea 1981; 1984)。オシェイの研究は、民族事例と考古資料の両方を検討してホダーらが述べた宗教的・観念的分野が埋葬儀礼にいかに関わるかを提示することに成功したと言える。実際に横の次元に関しては、儀礼などの宗教的・観念的分野に裏打ちされた人間の行動が差異を示す基準となることを提示した。墓地資料のみに頼った過去の社会構造を検討することの限界性を、事例を以って警句的に提示した点は意義深い。反面、彼の研究は民族事例と墓地遺跡の対応を確認できるがゆえに実現できたとも言える。民族誌上の現在から時間的に隔絶した先史社会の墓地を対象にした研究に対し、オシェイはホダーと同じく重要な資料が欠落している可能性や解釈の重要性を述べているが、具体的に有効な研究の枠組みは提示してはいない点も考慮する必要がある。

1980年代以後しばらくの間は、プロセス考古学に見られる埋葬に関する通文化的な法則を検討する研究の方向性と、ポスト・プロセス考古学に見られる個別の事例で見られる埋葬を宗教的・観念的側面を含めて検討する研

究の方向性との間には、互いを橋渡しするような積極的かつ建設的な意見交換はなされなかった（白井 1998: 79; Morris 1991）。この葬送研究の流れは、1990年代半ばに C. カー（Carr）の研究によっても総括された（Carr 1995）。カーは、葬送行為とその関連遺物を研究し解釈するにあたって観念的-宗教的信仰に関する本質を確認することを第一かつ中心的な目的とし、それまでの研究で社会組織を考古学的に復元するために考古学者が作業の前提としてきた枠組みを、HRAF を用いて大規模に横断的に検証することを二次的な目的とした。彼はそれまでに提示されている先行研究への賛同または否定自体は目的としておらず、むしろ葬送行為やその様式とそれらに直結する社会的または観念的-宗教的といった要因との間に共通して起こるある種の関係を目録化し、機能的に一般化することを企図した（Carr 1995: 107）。カーによれば、葬送行為には様々な要因が複雑に混交してはいるが、社会的要因（被葬者の社会における縦と横の次元）、観念的-宗教的要因（世界観・来世観・信仰）、肉体的要因（被葬者の年齢・性別）、状況的要因（死に場所・死に方）に大別できるといえる。HRAF を用いた横断的な情報の収集から、カーは社会的要因と観念的-宗教的要因が葬送行為を決めるために最も重要な要因であり、肉体的要因と状況的要因はそれに次いで重要な要因であるとしている。カーは、社会的要因と観念的-宗教的要因が葬送行為を決めるために非常に強力に作用しており、肉体的要因と状況的要因はあくまで副次的なものに過ぎないとした（Carr 1995: 189）。観念的-宗教的要因には様々な概念が含まれるが、葬送行為を決めるためには宇宙秩序（universal orders）に関する信仰が特に重要な要因と観察した（Carr 1995: 190）。この点は、ホダーが述べた観念的側面への留意（Hodder 1982）がどの民族事例への研究であっても重要なことを追認していると言える。カーは、観念的-宗教的要因と同じく重要性を有する社会的要因については、被葬者の社会における縦と横の次元などの地位に関しては、テインターが言う（Tainter 1978）ように埋葬方法を決定するために重要な要因であることを述べる。しかし、こうした地位の埋葬への反映も、実社会で存在した関係がそのまま埋葬に反映されるのではなく、その社会特有の信仰や来世観、世界観などの様式に則って埋葬に表現されるとした。またカーは埋葬行為自体も宇宙秩序などの観念に従って形成されているとも述べた。ここで注目すべきは、ビンフォードやテインターによって述べられてきた埋葬方法の決定要因とホダーの述べる留意点が整合的に組み合わせられている点である。埋葬を形成する要因は、構成やそれらの上位-下位序列などの構造的な問題も含め、非常に複雑に成り立っていることが示されたと言える。これは反面、考古資料のみに依拠した社会構造の推定に慎重であるべきと説くオシェイの言説（O'Shea 1981; 1984）を支持するものでもある。カーは、墓地資料から社会組織を復元するために有用な変数として、社会的要因に関わるものではエネルギー量や葬送方法の種類などを、観念的-宗教的要因に関わるものでは遺体の向きや副葬品の配置などを挙げている。これらはいずれもビンフォードやテインター、ブラウンらによって挙げられてきた着眼点ではあるが、より整理された枠組みの中で提示した点で、カーの研究の意義は大きい。カーは、縦の次元に関わる社会的地位を示す考古学的な証拠として、遺体の処置を含む墓の造営に投じられたエネルギー量が有用であり、一方で副葬品の数は必ずしも有用でない、と言うテインターの言説を概ね支持している。サククスが述べた墓域の限定性に関する議論も、ある限定的な資源を占有する集団によって特定の墓域が形成されると言う意見も概ね支持されているが、ホダーの留意点にあった観念的な理由に基づいた墓地や埋葬場所の選定など、他の要因が介在する可能性も同時に述べた。また横の次元に関わる証拠が考古資料からは見取しがたいという意見も支

持した。カーの研究の重要性は、それまでの墓地研究の理論的枠組みの発展的な統合であり、なおかつ個別の事例に沿った柔軟な埋葬方法の検討が必要なことを提示した点にある。これは、ともすれば個別の考古文化の研究に没頭してより俯瞰的な視点に立った埋葬の検討ができなかったり、あるいは一般法則性を提示することに注力しすぎてしまい勢い個々の考古文化の持つ独自性から乖離した埋葬の検討となったりしてしまうといった研究の陥穽に落ちることを戒め、柔軟な埋葬の検討の可能性を提示する枠組みと評価できる (cf. 溝口 2004)。

### 3.1.3. 墓地資料から社会構造の検討を試みた事例に関する研究史のまとめ

以上、人類学や考古学における葬送研究の概要を社会構造に関する検討の立場からの概要に触れつつ提示してきた。考古学的に墓地資料を用いて社会構造を解明することを試みた場合には、カーが総括したように直接的に関わりがある社会的要因だけでなく、観念的-宗教的要因、肉体的要因、状況的要因にも着眼することが望ましい。しかし、実際に遺跡から得られる情報には民族事例とは異なり、調査方法、遺跡形成、資料の遺存状況などの様々な制約が課せられ、結果として十分とは言えない情報の中から目的的社会構造の推定を行う必要がある。得られる情報から有効な着眼点を複数設定し、それが民族事例で得られている知見とどのように対応するかを検討することで、これまで培われてきた埋葬考古学的な視点に立脚した墓地研究が可能になると考えられる。それでは、ナカダ文化の墓地研究からはどのような着眼点を設定できるだろうか。以下では、ナカダ文化の墓地研究史を特に社会構造の検討事例を中心に振り返り、問題点と改善点を検討する。

## 3.2. ナカダ文化墓制に関わる先行研究の概要

### 3.2.1. ナカダ文化研究における墓制研究の概要

#### 3.2.1.1. 1950年代までの墓制研究

1894年にナカダ文化の遺跡として初めて発掘されたナカダ遺跡の調査 (Petrie and Quibell 1896) 以降、1950年代までは上エジプトに所在するナカダ文化の墓地遺跡が調査の主体だった。集落址の発掘調査も行われたが、この時期にはナカダ遺跡やハマミーヤ遺跡 (Brunton and Caton-Thompson 1928)、ヒエラコンポリス遺跡 (Quibell and Green 1902) やアビュドス遺跡 (Peet and Loat 1913) などの一部に留まっていた。この時期に、現在までに既知の墓地遺跡のおよそ2/3が調査され、15,000基以上の墓が発掘された (Stevenson 2009b: 170)。この時期の集中的な発掘調査によって、ナカダ文化の標準的な埋葬様式が把握され、出土した多量の副葬品のうち土器は、第2章で取り扱った型式学的研究や、相対編年の構築のための基準資料となった。しかし、この時期に刊行された報告書では、全ての墓のデータを提示するという報告の仕方が一般的でなく、発掘者によって重要とされた墓や、注目に値する (notable, remarkable) 墓など、全体の中のごく一部の墓が報告されるに留まった。これは、3.1.2.で触れたように、墓地から遺跡を残した人々の社会の構造や葬送観念を解明することを目指した場合、その分析の元となる必要な基本的情報が限定されることに繋がった。1950年代以前の事例で、例外的な事例は、アルマント遺跡の報告書で、1300墓地と1400-1500墓地の報告は各墓の基本的なデータが表形式でまとめられており (Mond and Myers 1937: 49-58) 各墓の属性の把握が可能である。これらのデータは、墓地から社会構造を検討する際に重要

な資料となり、特に 1400–1500 墓地のデータは、3.2.1.2. で後述するように、ナカダ文化期における階層化の研究の中で代表的な事例の分析対象となった。ただし、出版された埋葬事例は限定的であった一方で、特にピートリーら英国の発掘者らは比較的詳細な各墓の記録を残しており、その一端が墓制の説明の中で明かされている。これらの部分的で良好な保存状態の墓の記録が、この時期にナカダ文化の標準的な埋葬様式が把握の基礎となった。

またこの時期には、発掘された記録としての埋葬様式の把握に加えて、葬送観念の検討もすでに試みられた。考古学的証拠だけでなく文献の面でも情報が豊富だった王朝時代の墓制と、J. フレイザー (Frazer) などによってまとめられていた呪術や信仰に関する集成 (Frazer 1890) などからナカダ文化期の墓制を類推することも試みられており、例えば古王国時代から新王国時代までの墓は一般に貴族や王族に限られることから、ナカダ文化の墓制でも一般の人々の墓はあまり造られず、従って墓に納められた人々は何らかの社会的身分または特権を持っていたと推定した事例も存在した (e.g. Murray 1956: 86–7)。発掘調査で出土した墓地遺跡の考古学的証拠から、バダリ文化とナカダ文化の墓制に関しては、1950 年代に一度総括がなされている (Murray 1956)。例えば M.A. マレイ (Murray) は、ナカダ文化の墓では被葬者の顔の向きが西を向くことが多い点をあげ、この背景には太陽の動きと関連した信仰があり、西側への死者の靈魂の旅立ちと日の出による再生という観念がすでにバダリ文化期にあった可能性を指摘した (Murray 1956)。ナカダ文化期に後続する古王国時代には、その後も継続する太陽が沈む西方は死者の国が存在するという葬送観念が存在しており (cf. Bárta 2011)、この観念との関連が考えられた。この文脈から、逆に典型的な顔を西に向けた埋葬とは異なる東向きの埋葬に関しては、日の出に関わる太陽信仰を有していた集団の墓か、あるいは外部から来た人々の墓との可能性を推定した。

墓に納められた遺物も葬送観念の検討の対象となり、バダリ文化やナカダ文化の墓から出土する女性像の形態に着眼し、豊穡祈願に関する信仰が存在した可能性が推定された (Murray 1934; 1956: 89)。特にナカダ I 期 (アムラー期) の女性像に脂髯の特徴が見られることを大きな根拠としている。また両手をあげた大型の土製人物像に関しては、王朝時代のハトホル女神の原型と推定し、すでにのちの信仰の基盤が醸成され始めていたことを指摘した。ハトホル女神は、死者を冥界に導く神格として王朝時代に信仰された。ゲルゼー遺跡 59 号墓 (IIC-IIID 2 期) で出土した粘板岩製パレットには両手をあげた人物の意匠が見られ、埋葬コンテクストから王朝時代の葬送観念との繋がりを示唆する断片的な痕跡がほかにも得られている。大型壺の内容物としてしばしば発見される植物質の脂肪分 (vegetable fat) は王朝時代の「7つの聖油 (seven sacred oil)」の祖型とされ、ピートリー分類の W 土器から発見される芳香する脂肪分 (aromatic fat) は聖刻文字に見られる香油の祖型とも推定された (Murray 1956)。また II 期からは副葬品が機能に則したかたちで配置されることが多くなることから (Petrie 1939)、副葬品がもともとの機能を果たして靈魂の活動に不可欠な必需品を供給するという観念が形成され、ナカダ文化期の段階で墓を死者の靈根 (カー (ka)) の家とする王朝時代の葬送観念の祖型が形成されたとする見方も提示された (Reisner 1936: 1–2)。

また、遺体への処置に着眼した言及もなされた。ナカダ文化の墓に見られる頭蓋骨の切断と分離は、祖先崇拜との関連が指摘された (Petrie and Quibell 1896) ほか、そうした処置が施された被葬者は生前に超自然的な力が備わっていて、生前の行いの良悪によって、祖先崇拜の対象として埋葬から持ち去られたり、あるいは自然な埋葬

から逸脱したかたちで墓に放置されたりしたという意見も示された (Murray 1956)。明言されていないが、この超自然的な力を持った人物とは、いわゆるシャーマンなどの役割を持った人物を指すと思われる。また、ピートリーは、ナカダ遺跡などで自身が発掘した改葬墓から検出された遺骨の痕跡を議論し、儀礼の一環として食人行為などが行われていた可能性を指摘した (Petrie and Quibell 1896: 32)。ほかにも、またナカダ I 期のイヌの埋葬から、すでにこの段階で王朝時代に見られたイヌを祀る埋葬観念が存在した可能性も指摘された (cf. Flores 2003)。II 期には遺体がマットで包まれて遺体を被覆するようになることから、棺利用の祖型として考えられ、実際に木製の棺もこの時期から出現し始めるとした。

従って、1950 年代までに行われた主なナカダ文化の墓制の研究は、各遺跡で検出される埋葬事例の蓄積と、それに伴うナカダ文化の埋葬の基本的な特徴の把握と整理にあったと言える。反面、墓地から当時の葬送観念や社会構造を具体的に解明しようとした研究は、ごく一部に限られていた。ただし、少数ながらナカダ文化の墓制で見られた事象から当時の葬送観念を検討した事例も存在した。例えば、先に挙げた M.A. マレイ (Murray) は、それまでの発掘で得られた発見物を時系列で整理してその発展と王朝時代との関連を述べた点で意義深い。彼女は、今日では否定されているピートリーが唱えた王朝民族侵略説に則った社会進化論的な立場でナカダ文化期の墓制をまとめたが、特に王朝時代の神格に関する信仰の原型を推定した点は、葬送観念の研究の観点から見ても重要である。彼女はバダリ文化、ナカダ文化の埋葬の一般的な特徴をまとめた上で、王朝時代の埋葬事例と対比しつつ、副葬品の多寡や墓構造の複雑さ、あるいは墓の規模の大きさに、当該社会での被葬者の地位が反映されているとの見通しもすでに述べている。そして、被葬者の地位の墓への反映が、S.D.で規定された時期であるゲルゼー期以降から見られ始めると指摘している。ただし、この指摘は、それまでに刊行された報告書に基づいた経験則から導き出されたものであって、定量的なデータに基づいた言明ではない。1950 年代までは発掘された出土品の研究が盛んだった一方で、当時の社会構造を探ろうとした研究は限定された。この期間は、発掘事例の蓄積による埋葬様式の理解が進んだ時期として位置付けられる。

### 3.2.1.2. 縦の社会構造に関する研究

こうした研究の方向性を超えて、墓から得られるデータを用いて本格的にナカダ文化社会の構造を研究する試みが現れるのは、1980 年代以降である。この時期以降に社会構造の研究が増加した背景には、3.1.2.で述べたように、特に 1960 年代半ば以降に、北米などの事例を中心に墓から得られる情報を用いて社会の構造を看取・復元するための理論的基盤が整備され、世界各地で実践され始めたことと無関係ではない。一般に古代エジプトを対象にした研究では、古代エジプトの枠組みの中で研究が進み、考古学的・人類学的な研究手法の進展が反映され難いとされているが (e.g. O'Connor 1997; Trigger 1979; 白井 1999)、ナカダ文化を含む先史時代の研究に関しては、北米の先史考古学の教育的バックグラウンドを持ち、人類学に明るい K.A. バード (Bard) や M.A. ホフマン (Hoffman) などが 1970-90 年代の学界を主導しており、考古学一般での最新の知見が、王朝時代の研究と比較して反映されやすかったという。彼らは自身でフィールド調査を実施して新しいデータの採取を試みるとともに、1950 年代までに刊行された発掘報告書のデータを再考し、ナカダ文化期における社会構造を解明しようと企図し

た。

### 3.2.1.2.1. 1950年代までに刊行された発掘報告書のデータを用いた縦の社会構造の研究

3.2.1.で簡潔に触れたように、定量的に墓の間に差異を見出すために必要なデータは、1950年代までに刊行された多くの発掘報告書には含まれていなかった。こうしたデータの欠落の具体例としては、発掘されたすべての墓のうち、報告された遺物は一部であることや、副葬品の量や種類が墓ごとに報告されていない、墓の規模や構造が不明、被葬者の年齢や性別の同定精度が不安定 (Mann 1989) などの場合が挙げられる。こうしたデータに恵まれた遺跡は、アルマント遺跡 1400–1500 地点などごく一部に留まった。したがって分析が実行可能な遺跡は限られ、ナカダ遺跡 (Bard 1989; 1994)、アルマント遺跡 (Bard 1988; Endesfelder 1990, Griswold 1992a; 1992b)、ナガ・エツ=デイル遺跡 (Savage 1995; Delrue 2001)、タルカン遺跡 (Seidlmayer 1988; Ellis 1992; 1996; Janßen 2015)、ゲルゼー遺跡 (Stevenson 2009a) などに限られる。また限定的なデータの遺跡も含めた複数の遺跡の横断的な研究も実施された (Atzler 1981; Castillos 1982; Wilkinson 1995)。

これらの墓地遺跡を対象とした定量的な研究では、概ね墓の規模や副葬品の数や種類がこれまで分析の対象となってきた。例えばアルマント遺跡 1400–1500 地点の場合、土器などの遺物の量 (Bard 1988; 1994; Endesfelder 1990) や、墓の規模 ( $m^3$ ) (Griswold 1992a; 1992b)、副葬品全てと墓の規模 ( $m^2$ ) (Castillos 1982) などが着眼された。中でも、墓地で見られる墓の差異を検討した事例として、バードによるアルマント遺跡とナカダ遺跡を構成する 4ヶ所の墓地の合計 5ヶ所を対象に行った研究が特筆される (Bard 1988; 1994)。アルマント遺跡は 140 基程度の墓で構成される小規模墓地、ナカダ遺跡は合計で 2000 基を超える墓が存在する大規模墓地である。バードは墓の差異を観察するために、土器と墓の規模、土器以外の遺物を対象に選んだ。土器以外の遺物には、石製容器やビーズ、その他頻度が少ない遺物が該当するが、バードはこれらの遺物を「NewMaterials (NM)」と一括し、頻度別に 5 から 6 等級に分けた。これらの対象要素から、各墓が帰属するカイザーの段階編年を I、II、III の 3 段階に分け、その段階ごとに k-means 法による非階層型クラスター分析を実施し、上記の遺物を変数にした場合に墓に優劣を反映したまとまりが形成されるか観察した。その結果バードは、アルマント遺跡 1400–1500 墓地の場合は利用開始段階である Ic 段階から、副葬品や墓の規模に優れるまとまりと劣るまとまりの二つが存在し、さらにこの二つのまとまりが、墓域が廃絶する IIIa1 段階まで維持されることを見出した。またバードは、ナカダ遺跡では利用開始段階である I 段階にどの墓地でも 2 つのまとまりを見出せ、II 段階には特に大墓地西地区で 4 つのまとまりが見出せるなど、副葬品を対象とした場合にはアルマント遺跡よりも複雑な様相を呈することを提示した。またバードは複数のまとまりが 2ヶ所の遺跡で通時的に存在する構図の中で、副葬品の量や質自体は、双方のまとまりで増加することも観察している。バードの研究の意義は、国家形成に向けてナカダ文化の社会が発展していく歴史的文脈の中で、それまで一部の遺構や遺物から想定されていた類推に、墓地分析を通じて具体的な発展、特に物質的な質と量の増加の過程、を提示した点にある。もう一つの意義は、アルマント遺跡を残した小規模な集団では、社会内での優劣関係が複雑化する現象が観察し難いという点を提示し、一方でナカダ遺跡では社会内での優劣関係が顕著であることを示した点にある (Bard 1989; 1994)。つまり地域の中心とされる大規模な遺跡では、



社会構造が複雑化したことをバードは提示した。第1章で言及したように、今日のナカダ文化研究では、複数の地域的な中心が出現し、それらの勢力が収斂することで複雑な縦の社会構造を持つ国家が形成されていったとする説が述べられたが (Kemp 2006; Wilkinson 2000)、バードの結果はこの発展の図式と整合する。

またバードの研究とは別に、S. サヴェージ (Savage) はナガ・エツ=デイル遺跡 N7000 墓地を対象に、同墓地における社会集団の競合と発展を議論している (Savage 1995; 1997)。サヴェージは、E. ブラムフィールド (Brumfiel) が提唱した国家形成モデルである派閥競合モデル (Brumfiel 1989) をもとに、墓地遺跡を遺した集団内での系統関係を背景としたグループ間競合を見出すため、墓の墓域内での平面分布を検討した。その結果、ピートリーの S.D. を適用した場合に墓域内の墓の分布を、母集落内の別々の集団を出自とする 6 つのまとまりに分けられるとした。彼はそのまとまりを単位に墓地の空間的分析を行い、最終的にそれぞれが出自集団を背景とする異なる物質文化上の特徴を有していたと論じた (Savage 1995)。サヴェージの研究は、モデルの検証という点で、ナガ・エツ=デイル遺跡 N7000 墓地で発見された考古学的知見を上手く説明することに成功しているが、一方で、前提となる相対編年に問題点の多い S.D. を採用していたため、ひとたびそこに矛盾があれば、すべての分析の前提となる 6 つのまとまりへの墓域内の分割案が瓦解する恐れを有していた。この点をデルリュウ (Delrue) は批判し、S.D. の画期がより適当なカイザーの段階編年と異なることを問題とした。彼は段階編年を各墓の時期に適用した上で、副葬品や墓の規模の定量的な分析と分布の分析を行い、サヴェージの唱えた 6 つの集団による墓域の形成を論じた説を否定した (Delrue 2001)。また複数の墓地を横断的に扱い、発掘報告書などに記載されたデータをもとに、墓地内の墓をいくつかの優劣に分類した研究も行われた (Castillos 1982)。より近年では、定量的な分析を定性的な分析と組み合わせ、多面的に墓地で行われた葬送儀礼を理解しようとする研究も表れた。例えば、A. ステューヴンソン (Stevenson) はゲルゼー遺跡を対象に、墓地から得られるデータを定量的に分析して、被葬者の性別や年齢の違いによる納められる副葬品の種類の違いなどを論じた (Stevenson 2009a)。

1950 年代までに刊行された発掘報告書のデータを用いた縦の社会構造の研究では、発掘報告書から得られる情報を制限に留意しつつ利用し、墓の間に数値上の差異を見いだすことで社会構造の発展の検討を試みた点が特徴的であると言える。

### 3.2.1.2.2. 1980 年代以降に行われた発掘で得られたデータを用いた縦の社会構造の研究

1950 年代以降 1970 年代までは低調だったものの、1980 年代以降今日までは、ナイル河下流域の各所でナカダ文化の遺跡の発掘が再度活発に行われ始めた。従来の上エジプト地域に加えて、下エジプト地域のナイル・デルタ地帯に所在する遺跡の調査が活発になったことが特徴である。1950 年代までの発掘調査とは異なり、現代の水準の発掘が行われているため、墓域内に存在する墓が全て完掘された事例は限定されるが、上エジプト地域に所在するエルカブ (Elkab) 遺跡 24 地点 (Site 24)、下エジプト地域に所在するミンシャト・アブ・オマル (Minshat Abu Omar) 遺跡、カフル・ハッサン・ダウッド (Kafir Hassan Dawood) 遺跡は、墓地資料から墓を遺した人々の社会に存在した序列を看取しようとする定量的な研究を試みた事例として挙げられる。特に下エジプト地域に所在する遺跡群に関してはある程度の分析が試みられた。ミンシャト・アブ・オマル遺跡に関しては、発掘報告書の刊

行が一部に留まっているため検証は難しいものの、発掘者である K. クレーパー (Kroeper) によって、墓の規模、副葬品の種類別の量、被葬者の人数、性別と年齢、を対象に墓間の差異の検討された (Kroeper 2004)。カフル・ハッサン・ダウッド遺跡に関しては、発掘報告書自体が出版されていないものの、調査者の一人である J.M. ローランド (Rowland) が自身の博士論文の中で墓間の差異の検討を行っている (Rowland 2003a; 2003b) ほか、富裕な墓の墓域内での分布などについての言及がなされており (Rowland and Hassan 2003)、議論が進んでいる。また上エジプト地域に所在するエルカブ遺跡 24 地点に関しては、ナカダ III 期の上エジプト地域の非中心地遺跡において、社会が辺境化する過程を捉えられる点で、意義が大きい (Hendrickx 1994a)。

一方で、考古学的発見から階層化の痕跡が見出された事例も存在する。ヒエラコンポリス遺跡 HK6 地点では、ナカダ IC-IIA 期に比定される時期の、大型の墓坑と複数のヒトや動物を埋葬した付属墓や多数の柱穴を持つ建築物の遺構が検出され、遺物としては土器製のマスクや押圧剥離によって丁寧に形作られた動物形石器・多量の埋葬用の土器やその他の遺物が出土した。建築物群に関しては、葬送複合体 (mortuary complex) を形成しているとの説が提示されている (Adams 2000; Friedman 2008a; Friedman et al. 2011; 2017; Hoffman 1982)。またこの HK6 地点における発見は、遺構・遺物、立地などの面から、ナカダ文化期の初期からエリート層が存在し、彼らのための墓域が形成されていたことが発掘者によって示唆されている。またアビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地では、IIIA1 期の日乾レンガを使用した大規模な墓が複数検出され、最初期の王墓とされた (Dreyer 1998; Hartung 2001; 2014/15)。

この時期の研究は、分析を行った研究者自身が発掘者であり、墓地資料から社会構造を読み取ることが視野にデータが取得されているため、1950 年代までの事例とは異なり、より多面的な指標が分析の差異に利用されている。考古学に関連する分野の研究者たちが調査隊に参加した学際的な発掘調査であることもデータ種類の豊富さを後押ししている。しかしこの利点は精密な発掘調査に支えられており、1 基の墓の完掘にかかる速度は 19 世紀末から 1950 年代までの調査と比較すれば長く、結果として墓域全体の調査終了が長期間化することにつながる。1980 年代以降に調査が行われた遺跡は大半の事例で発掘が継続中か報告書の編集段階にあり、墓域全体の墓のデータを要する社会構造の検討に至っていない。例えば、ヒエラコンポリス遺跡 HK6 地点は現在も発掘調査中であり、アビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地は一部刊行された巻号もあるものの発掘報告の多くの部分が刊行に向けた作業段階にあり、既往の定量的研究による結果との対応がうまく取れていない。

### 3.2.2. ナカダ文化墓地研究の問題点

これまでのナカダ文化の墓地研究では、墓域で検出された墓の情報に恵まれた遺跡が、階層構造などの縦の社会構造を看取するために分析されてきた。こうした墓地研究には、3 つの問題点があげられる。1 つ目は共通した分析視点に立った比較研究が行われていない点、2 つ目はナカダ文化初期の階層構造の研究が不足している点である。3 つ目は、墓域の空間的な意義を念頭に置いた分析の希薄さである。1 つ目の問題点に関しては、カスティヨースが行った複数の遺跡の分析 (Castillos 1982) に見られるように、分析で基準とする時間軸、方法、資料などが、必ずしも全ての対象の遺跡で画一されたわけではない。個別の遺跡や墓域レベルでは、社会構造の複雑化

に関する議論が行われている一方で、ナカダ文化圏を包括する遺跡間レベルで横断的に比較看取することが不可能となっている (cf. 高宮 2003)。また、社会の複雑化が王朝の開始に向けて進展するというストーリーを遺跡単位で検討することができても、遺跡間で時間軸を合わせた比較ができていないので、いつどのように何を契機にして複雑化が進んだのかを精密に捕捉することができていない。こうした状況の根幹には、ナカダ文化研究の初期に行われた発掘調査では、報告書に記載されるべき基本的なデータセットが確立されていなかったため、ある遺跡の報告書では記載されているデータが、別の遺跡の事例では記載されておらず、横断的な分析の障壁となっている状況がある。そのため、即時に共通した分析視点に立った墓地の比較研究を行える状況にはない。なぜならば、この状況を改善し、分析の余地を広げるためには、未公開されていない一次データの取りまとめと、現在アクセスできる博物館所蔵資料からのデータ抽出が必要となる一方で、この作業は多くの時間と人的・経済的リソースが必要だからである。従って、この問題を解決するための最も現実的な道りは、遺跡ごとにデータの拡充を行うことにある。各遺跡で分析を行うことができるデータセットが拡充されるのならば、将来的には横断的な分析も可能になると見込まれる。現状では、遺跡単位での作業が求められる。

2つ目の問題点は、最終的に国家体制へと変化するナカダ文化期の社会構造の出発点が不明であるため、ナカダ文化期を通じた社会構造の変化の推移が不明な研究上の現状へとつながる。第2章で述べた通り、これまでの相対編年案では、ナカダ文化期前半までに一応の細分は設定されているものの、基準となる資料や墓の少なさから、曖昧な部分を少なからず抱えてきた。この状況は社会構造の研究にも影響を与えており、例えば分析のもっとも根幹となる相対編年がアビュドス編年などの最新の知見を踏まえられておらず、S.D.など初期の相対編年に基づいた見解に留まっているため、物質資料から大まかな差異は看取できている一方で、細かな様態は不明である。こうしたこれまでの経緯の一方で、2.2.4.で述べた通り、アビュドス編年はヘンドリクス編年では不明部分が多かったナカダI期からII期前半の画期がどこに設定できるかについて案を提示しており、ナカダ文化前半における墓間の差異を看取することが可能となることが見込まれる。W. アンダーソン (Anderson) によれば、バダリ文化期の墓地においても墓が2つのまとまりに分けられるとされており (Anderson 1992)、その様なまとまりがある構図がナカダ文化期に移行してからも存続するの可否かを、ナカダ文化期前半にどの様に変化するか、あるいは変化しないのかを検討する余地が導かれる。この検討がなされるのならば、ナカダ文化初期から後半の国家形成に至る社会構造の変化を連続的に提示することができると考えられる。そしてこの作業は、一つ目の問題点と連動して対処される必要があり、遺跡単位での検討が求められる。これらの問題意識が、本論文では、複数の遺跡を包括的に検討するのではなく、ナカダ遺跡を個別に取り扱うことの動機として挙げられる。

3つ目の問題点である墓地空間に着眼した研究の希薄さに関しては、サヴェージによるナガ・エツ＝デイル遺跡 N7000 墓地を対象とした研究 (Savage 1995; 1997) などの少数の事例に限定される。3.1.2.で記述したように、考古学一般では、墓地では、その墓地を遺した社会に存在した集団の違いに基づく社会構造の痕跡は、副葬品の質や量、埋葬施設の大小や複雑さにだけでなく、墓が造営される墓域内での位置も現れることが述べられている (cf. Binford 1962; 1971; Brown 1981; Goldstein 1981; Saxe 1970; Tainter 1978)。王朝時代の古代エジプトでは、例えば王や王族の墓地、または高官の墓地が、一般層の墓地とは異なる場所に置かれることは、今日のルクソール西岸地

区やアブシール (Abusir) –サッカラ–ダハシュール (Dahshur) 地区の事例のように、一般的に見られた事象であった。ナカダ III C1 期以降の初期王朝時代においても、例えばアビュドス遺跡 UeQ 地区 B 墓地は、王や王族・高官墓として存在したことが知られている。ナカダ III B 期以前の先王朝時代においても、上記したヒエラコンポリス遺跡 HK6 地点の埋葬複合体が存在する一方、HK43–44 地点などの同時代かやや後発する時期に属する一般層の墓域が所在する低位砂漠縁辺部からは離れた地点に位置していることから、墓域社会内の序列による墓域の区別が明瞭に存在していた。ナカダ遺跡に関しても、バードが T 墓地と大墓地との間に、階層による墓域の分化が存在していたと指摘している (Bard 1989; 1994)。アビュドス遺跡 U 墓地も、アビュドス地域におけるいわゆるエリート層の墓地として考えられている。ナカダ文化の初期を精密に時期区分できるようになったアビュドス編年を適用することで、分布に関する検討でも新しい展開が得られると想定できる。

### 3.3. 分析の目的と着眼点の設定

以上から、本論文ではナカダ文化期の中心地遺跡の 1 つであるナカダ遺跡の墓地を対象に、新しい相対編年案を適用し、近年のほかの遺跡での成果も踏まえて、バードによって提示された社会構造の変遷を再検討することを分析の目的とする。墓地に現れる差異がいつ起こり、どのように展開するかを明らかにすることが目標となる。

そこで、埋葬考古学一般で得られた以下の着眼点を設定することでナカダ遺跡における社会構造の変化を検討する。

- 被葬者の地位を示す副葬品と墓の規模の定量的な変遷。ビンフォードやテインターによって述べられた副葬品の種類と量、および墓の規模をクラスター分析などによって定量的に分析し、被葬者の地位との関わりを検討し、明確な差異が見出せるか否かを検討する。特に副葬品に関しては、特定の副葬品とクラスターの関わりにも着眼する。
- 墓地の形成と発展の過程。サククスやゴールドステイン、テインターによって述べられた隔絶された墓地または区域が出現する否かを検討する。
- 新しい相対編年の適用。アビュドス編年を基にした精密な土器相対編年案の適用による墓の時期を設定し、その上で遺物と遺構の定量的な分析を実施する。
- 記録の拡充。バードによって組み込まれなかった記録を統合して、再度分析を実施する。また遺物の計数方法などを見直して、再現性を高める。

以上の着眼点と方針をもとに、ナカダ遺跡の分析を試みる。

#### 4. ナカダ遺跡とナカダ地域の概要

本論文で中心的に取り扱うこととなるナカダ遺跡は 1894-5 年にイギリスのピートリーによって調査された。本章ではこの遺跡の基本情報として、周辺地域を含む地理的・歴史的環境、調査史、これまで調査で明らかにされてきた点を記述する。以下、本論文ではナイル河西岸のナカダ遺跡を中心に、南北にそれぞれ 10 km のおよそ 20 km の地理的な空間を「ナカダ地域」と呼称する。

##### 4.1. ナカダ遺跡の地理的環境

###### 4.1.1. 前 4 千年紀における上エジプトの気候と景観

今日のナイル河下流域の気候は極めて乾燥した砂漠気候である。冬季の気候は温暖だが、一年の半分の気温は極めて高く、夏季には 1 日の最高気温が 42-50°C になる。南北に長いナイル河下流域では、年間降水量はところによって大きく変化し、地中海沿岸では 100-200 mm 程度な一方で、内陸部は著しく少なくなり今日の首都であるカイロでは 25 mm、さらに南の地域や西部砂漠、東部砂漠の内陸部では数 mm に満たない。一方で、紅海に面した東部砂漠の山岳地帯の気候は湿った空気が滞留するためにやや湿潤である (Butzer 1999a: 227-8)。

しかしナカダ文化期が存続した前 4 千年紀の気候は今日とは異なる。後期旧石器時代(紀元前 21000-12000 年)からナカダ文化期にかけての気候は、乾燥化と湿潤化の繰り返しだった。低温で極度に乾燥していた後期旧石器時代の気候は、終末期に当たる紀元前 12000 年ころから湿潤化した。この湿潤化は、それまで赤道付近に停滞していたモンスーンに伴う降雨帯が北上したことによる。その結果、上エジプト地域南部以南には夏季に年間 200-300 mm 程度の降水がもたらされた (Hassan 1988: 146)。同時にこの降雨帯の北上により、ナイル河の流量が増加し、それまで低かったナイル河の水位が急激に上昇した。この気候の変化は砂漠の景観と植生に変化をもたらし、降雨後の低地には一時的な滞水が生じて灌木類が生育可能な環境ができた。その後、湿潤化した気候は紀元前 7000 年ころを境に局所的な乾燥期を挟みつつ徐々に乾燥化し、紀元前 4800 年ころから乾燥化が加速した。そして紀元前 3800 年には今日に近い乾燥した気候になった (Butzer 1999b: 231)。降水量に増減はあるものの、ハッサンは西部砂漠のバハリヤ・オアシス (Baharia Oasis) に所在するプラヤ (playa) の堆積土から、ナカダ文化期には平均して 50-100 mm 程度の年間降水量を推定した (Hassan 1981; Hassan 1988: 146)。気候の湿潤化と乾燥化の繰り返しは、ナイル河の水位にも影響を与えた。この痕跡はナイル河から流入があるファイユーム (Fayum) 地方のカルーン (Qarun) 湖では湖水面の上昇と下降が確認された (Hassan 1988: 145; Hassan 1997: 58, Figure 1)。例えば、紀元前 5500-4900 年や同 4700-3500 年には流入量が増加した一方で、紀元前 6000 年や同 3300 年、同 2900 年ころには湖が完全に干上がるほどにナイル河からの流入が減少した。こうした流入量の増減は、ナイル河の流路変更ももたらした。このようにナイル河の流量や降水量の増減はあったものの、ナカダ文化期には低位砂漠も含めて現在よりは湿潤で植生なども存在したことが推定された (Butzer 1976: 14)。

###### 4.1.2. ナカダ遺跡の所在地とナカダ地域の主要な集落

ナカダ遺跡は、カイロから南南東におよそ 480 km、ルクソールから北北東におよそ 25 km のナイル河西岸に所在する(図 1.1.)。遺跡の名前は 19 世紀末に周辺で最も大きな集落であったナカダ(Naqada または Nakada: نَقَادَة)から取られた。ナカダの元々の名称はアラビア語であるため、ラテン語アルファベットでは言語によって発音や表記に揺らぎがあり、Nagada・Nagadeh・Naqadeh・Negadeh などの表現が先行研究で使われているが、本論では英語論文で今日最も一般的な「ナカダ(Naqada)」の名称を用いる。ナカダ遺跡に関連する現在の地名は複数あり、主だった現代集落では、最も南に所在するナカダから北に向かって、エル=ハッタラ(el-Khattara)、コム・エル=ビラル(Kom el-Bilal)、トゥーク(Tukh)、アツ=ザワイダー(Az-Zawaydah)、バラス(Ballas)が存在する。ナカダ遺跡の名称はナカダに由来するが、図 4.2.に示した通り今日ではむしろアツ=ザワイダーとコム・エル=ビラルの方が遺跡に近い位置に所在している。煩雑になるが、アツ=ザワイダー自体もナカダ文化期の遺跡名にこれまで 2 度用いられた。1 度目はクィベルらにより後述する集落・墓地遺跡「ノースタウン(North Town)」に用いられ、2 度目は集落遺跡「サウスタウン(South Town)」を発掘したイタリア隊によって用いられた。同じ地名でも指示される遺跡は異なり、注意が必要である。

またナカダの北方約 2 km に所在するエル=ハッタラもナカダ文化期の遺跡と関連して重要な地名である。エル=ハッタラの名称は、後述するアメリカ隊の調査で遺跡の命名コード「Kh」に取り入れられ、最も近接する遺跡地点の Kh.1 を中心に南北 15 km の範囲で確認された別々の地点に使用された。これらの地点名も Kh.1 を除けば、必ずしも近接する現代の集落から遺跡名がつけられておらず注意を要する。

#### 4.1.3. ナカダ遺跡の立地と周辺の地形

遺跡は、上エジプトにおける現存のナカダ文化墓地遺跡に一般的なナイル河氾濫原の外側に広がる低位砂漠に位置しており(図 4.1)、氾濫原とは画された河成段丘上に位置する。地形はカイザーらによって簡潔に記録された(Butzer 1959b; Kaiser 1961: 15)が、Y. ヤヒア(Yahia)らが 1970 年代にアメリカ隊によって行われたナカダ地域の踏査の一環で衛星写真を分析した結果を公表した(Yahia et al. 1982)。彼らによれば、ナカダ地域の地形は 6 つに大きく区分できるといふ。最も標高が高い位置を占める地形からナイル河に向かって記すと、1. テーベ台地(Thebaid Plateau)、2. 台地斜面(Plateau Footslopes)、3. 鮮新世テラスおよび第四紀テラス(Pliocene and Quaternary Terraces)、4. ナイル河氾濫原(Nile Flood Plain)、5. ナイル河(Nile Channel)、6. 水系パターン(Drainage Pattern)である。これらの地形の種類は基本的にナイル河の両岸で見られる。ここでは特にナカダ遺跡が所在する西岸の地形に着眼する。ヤヒアらが示したこれらの地形の特徴は以下の通りである(Yahia et al. 1982: 253-5)。

1. テーベ台地は始新世に形成された。テーベ台地自体はナイル河西岸の台地を示す名称だが、同じ時期に形成された台地は両岸に存在し、垂直的には標高 426-582 m を占める。台地の表面は硬質な石灰岩で覆われ、チャートも混在する。下記に述べる鮮新世・第四紀テラスすなわち低位砂漠に対して高位砂漠とも呼ばれる。

2. 台地斜面は、テーベ台地からナイル河に向かって東側に傾斜し、部分的に鮮新世から第四紀に形成されたテラスを含んでいる。台地斜面の上部は急峻な浸食崖である一方、下部はそこから崩落・流下した石灰岩やチャー

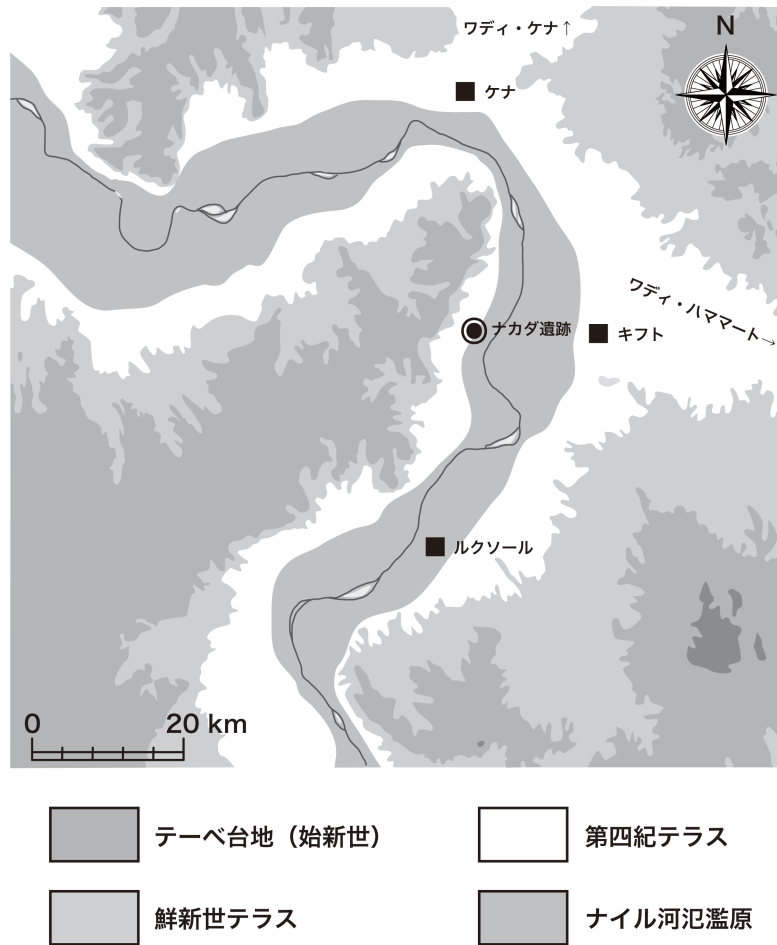


図 4.1. ナカダ地域周辺の地形 (■は現代の都市または集落を示す)

トなどの始新世の堆積物を中心とする堆積で覆われている。

3. 鮮新世・第四紀テラスは起伏が緩やかなテラスで、概ね標高 73–216 m の間に位置する。いわゆる低位砂漠に主に相当する。東側部分は台地斜面と画される一方、西側部分はナイル河氾濫原と画される。テラスは 2 つに分けられ、より上段に位置する鮮新世に形成されたテラスは埋積段丘であり、底部には茶色や緑色の湖成の石灰質堆積物やマール（泥灰土）が堆積する。鮮新世に形成されたテラスよりも下段に位置する第四紀に形成されたテラスは、ヤヒアらによって 1・2・3・4 に細分された。第四紀テラス 1 は標高 133–148 m ほどの範囲で、不揃いな中粒から粗粒の河成砂からなり、地表近くでは赤色の土壌を含む。第四紀テラス 2・3・4 はそれぞれ標高 116–129 m、106–112 m、84–100 m の範囲に位置し、いずれもエチオピア起源の河成シルト堆積物（ナイルシルト）からなり、これに鮮新世テラスなどからの流入土壌である石灰岩やチャートを主体にした砂礫が混じる。この鮮新世・第四紀テラスに最も多くの遺跡地点が所在し、特にナカダ地域では更新世後期に形成されたテラス上に概ね全てのナカダ文化期の遺跡が所在する。氾濫原と並んでナカダ文化期や歴史時代にも積極的に人類活動が営まれた地形である。より高位のテラスからは後期旧石器時代の遺物などが表採可能な地点が存在し（cf. Hendrickx

and Vermeersch 2000)、ピートリーからも採集遺物を報告した (Petrie and Quibell 1896: 55, pls. LXVIII-LXX)。

4. ナイル河氾濫原はナイル河沿いに拡がり、ナイル河の氾濫でもたらされた完新世の沖積堆積物からなる。この堆積物の基盤は更新世の砂礫層である (Butzer 1976: 15)。この砂礫層が更新世の終末期に侵食が著しく進んだ結果一度深い河谷が形成され (Hendrickx and Vermeersch 2000: 27)、その後の湿潤化に伴うナイル河の流量の増大で上流から運ばれたナイルシルトが堆積することで今日の氾濫原が形成された。この氾濫原では 1970 年のアスワン・ハイ・ダム completion までには毎年夏季の増水時に微高地を除き冠水した。古来より耕作地として利用されており、現在も同様な土地利用がされている。アメリカ隊の調査時には、ナイル河西岸の氾濫原の幅はナカダ地域では 0.5–5.4 km で、平均すると 2.69 km だった。起伏はほとんどなく概ね標高 72–74 m の範囲に収まる。わずかな起伏の微高地には集落が営まれた。氾濫原にはナカダ文化期にも集落や墓地が形成された可能性がある (cf. Butzer 1976) が、毎年の氾濫による埋没や破壊のためその痕跡は確認できない。なお氾濫原は、今日では耕作地の拡大により場所によっては第四紀テラスを大幅に削平して拡張された部分も存在しており、本地形の幅はヤヒアらが分析した 1970 年代から変更されていると思われる。ナカダ遺跡を含むテラス上の考古遺跡は、削平の影響を大きく受けている。

5. ナイル河はナカダ地域の最も低位かつ東端に位置し、ナカダ地域では平均 790 m ほどの河幅を持つ。流路内には島 (ゲジラ (gezira)) が複数存在する。今日見られるゲジラの形成時期はおそらく歴史時代以降である。

6. 水系パターンはナカダ地域の各地形全体を通じて確認できる。これらは、降雨時に出水する涸れ谷 (ワディ) かより小規模なガリー (gully) である。流路は概ね樹状だが、鮮新世・第四紀テラスではより変則的である。鮮新世以降の浸食作用で形成された涸れ谷もある一方、それよりも過去に形成された地形が第四紀になって再度水系として機能した可能性がある。この根拠は水系基底部の堆積物の岩石学的知見に基づく (Yahia et al. 1982: 255)。

これらのヤヒアらによって提示された地形に加えて、ナカダ地域は東部砂漠との連絡に適した地形が近在する。ナイル河の対岸にある今日のキフト (Qift) の西には涸れ谷のワディ・ハママート (Wadi Hammamat) が開口しており、東部砂漠 (Eastern Desert) を超えて紅海に面した今日のクセイル (Qusair) まで回廊が繋がっている。この回廊は紅海とナカダ地域周辺のナイル河流域を繋ぐ最短ルートで、今日では自動車用舗装道路が整備されている。ナカダ地域から北に 22 km のほどの東岸に所在する今日のケナ (Qena) の北には、同じく東部砂漠に通ずる涸れ谷のワディ・ケナが開口している。こちらは資源が豊富な山岳地帯へと通じている。このようにナカダ地域は、西側を比高差の高い断崖で区切られている一方で、南北に通ずるナイル河と東部に通ずる涸れ谷の結節点にある。

## 4.2. ナカダ遺跡における調査史

### 4.2.1. ナカダ地域の歴史的環境と主な王朝時代遺跡の調査

これまでナカダ遺跡周辺では、前期旧石器時代から歴史時代、そして近代に至るまでの遺跡が発見されている。特に王朝時代と呼ばれる歴史時代には、文献資料によるとナカダはオンボス (Ombos) またはヌベト (Nbt) つまり「金の町」と称されており、特に王朝時代にはワディ・ハママートを通じて搬入される東部砂漠産出の金を、



ナイル河流域の諸地域へ搬出するための場所として機能していたとされる (cf. Helck 1982)。この「ヌベト」は、後述するサウスタウンと呼ばれる集落遺跡周辺に比定され、実際に第 12 王朝期 (紀元前 1985–1773 年) の神殿址や古王国時代 (紀元前 2686–2181 年) のピラミッド (Petrie and Quibell 1896: 34, 65, pl. LXXXV) など王朝時代の遺構が発見または検出されている (Petrie and Quibell 1896)。サウスタウンでは、ナカダ文化期を主体とするが、第 12 王朝期や古王国時代の遺物も多く出土した。同じくナカダ地域にあり、北におよそ 4 km ほど北のバラス遺跡でも古王国時代や中王国時代 (紀元前 2025–1700 年)・新王国時代 (紀元前 1550–1069 年) の遺物が出土した。

#### 4.2.2. 本論文で対象とするナカダ遺跡を構成する諸地点とその所在地

ナカダ地域では、これまでに集落 13 ケ所、墓地 17 ケ所のナカダ文化期の遺跡が確認された。各地点の場所は図 4.2. と図 4.3.、詳細は表 4.1. と表 4.2. を参照されたい。

ナカダ遺跡は墓地遺跡と集落遺跡から構成される。墓地遺跡は合計で 6 ケ所の墓域が存在し、集落遺跡は合計で 4 ケ所の地区が推定される。墓地遺跡は、1. 大墓地東墓地、2. 同西墓地、3. 同南墓地、4. 北墓地、5. G 墓地、6. T 墓地である。北墓地を除く 5 ケ所の墓域と同時期にピートリーが発掘した B 墓地は、別集落 Kh.4 地点の墓域とされる (Kaiser 1961: 17; Hassan et al. 2017a; van Wetering 2017)。集落遺跡のサウスタウンは、サウスタウン地



図 4.2. ナカダ地域の中核部を除く主要遺跡 (数字) と現代の都市 (アルファベット) の所在地

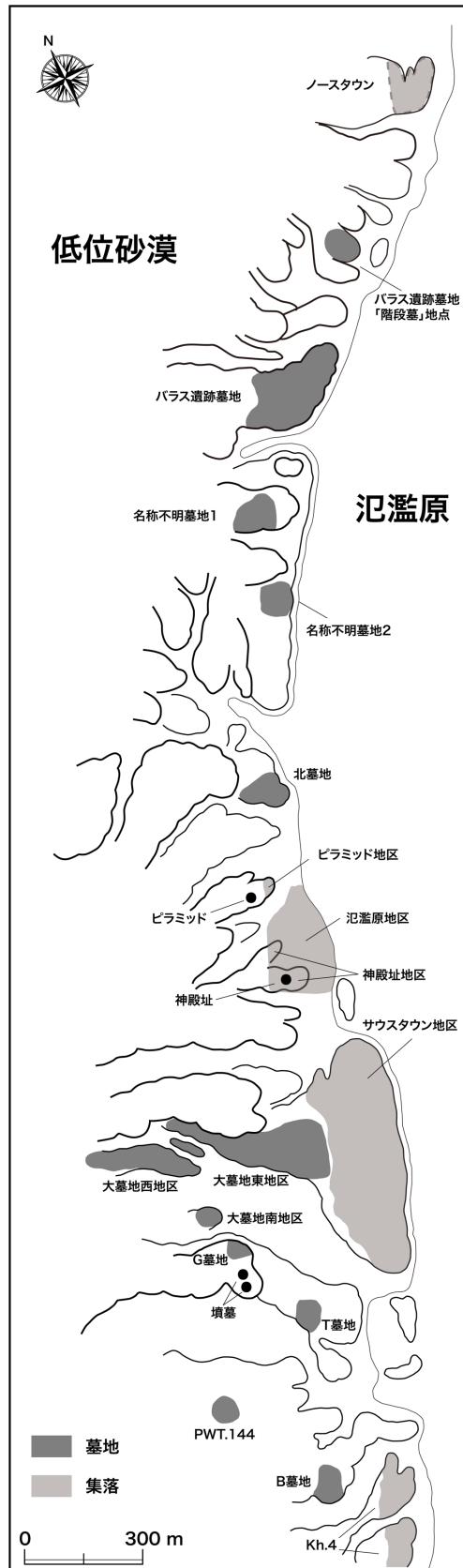


図 4.3. ナカダ地域の中核部における主要遺跡の所在地 (Kaiser 1961: Abb. 3 改変・加筆)

表 4.1. ナカダ地域の中核部を除く主要遺跡の詳細 (Hendrickx and van den Brink 2002: Tables 23.1-2 加筆)

図4.2内番号	遺跡名	遺跡種類	時期 (ナカダ)	規模	調査履歴	文献
1	Kh.5 (ハラス)	集落	I-II	不明	ヘイズ・ハッサン 1977 (踏査)	Holmes 1989b: 194 Tassie and van Wetering 2013/14
2	PWT.168	墓地	I-III	不明	ヘイズ・ハッサン 1977 (踏査)	Tassie and van Wetering 2013/14
3	Kh.1 (ハッタラ北)	集落	I-II	不明	ヘイズ・ハッサン 1977 (踏査)	Hassan and Matson 1989 Tassie and van Wetering 2013/14
4	Kh.6 (ナカダ)	集落	I-II	不明	ヘイズ・ハッサン 1977 (踏査)	Hassan and Matson 1989 Tassie and van Wetering 2013/14
5	E71C1	集落?	不明	不明	ウェンドルフ 1968 (踏査)	Wendorf and Schild 1976: 100
6	PWT.112	墓地	III C1?	200+基 マスタバ墓2基	ド・モルガン 1897 (発掘) ボルヒヤルト 1898 (発掘) ガースタンク 1904 (発掘) ハッサン 1981 (踏査)	de Morgan 1897 Borchardt 1898 Garstang 1907 van Wetering 2012
7	Kh.3 (メンキア)	集落・墓地	I-II	30000 m <sup>2</sup> ・墓1基	ヘイズ・ハッサン 1977 (踏査) ハッサン 1978, 1980-81 (発掘)	Hassan and Matson 1989 Holmes 1989 Friedman 1994
8	Kh.2 (ダンフィク北)	集落・墓地	III A1	不明	ヘイズ・ハッサン 1977 (踏査) ハッサン 1981? (発掘)	Hassan et al. 2017b Holmes 1989b: 189 Tassie and van Wetering 2013/14
9	PWT.101	集落・墓地	?	不明	ヘイズ・ハッサン 1977 (踏査)	Hassan et al. 2017a
10	Kh.7 (ダンフィク南)	集落	I-II	2100 m <sup>2</sup>	ヘイズ・ハッサン 1977 (踏査) ハッサン 1980 (発掘)	Hassan and Matson 1989 Holmes 1989b Friedman 1994
11	アバディーヤ第2地点	集落	I-II	1200 m <sup>2</sup>	ファーマアージュ et al. 1985 (踏査) ファーマアージュ et al. 2001 (踏査)	Vermeersch et al. 2000 Vermeersch et al. 2004
12	コプトス	集落	IIC-III D	詳細不明・大規模	ピートリー 1894 (発掘)	Adams 1986 Petrie 1896

表 4.2. ナカダ地域に所在する現代の集落名

図4.1内番号	現代集落名
A	ナカダ
B	エル=ハッタラ
C	トゥーク
D	コム・エル=ピラル
E	ザワイダー
F	ハラス
G	ダンフィーク
H	エル=アバディーヤ
I	クス
J	キフト

区、神殿地区、ピラミッド地区、氾濫原地区に分けられる。これらの地点の名称に関しては、ハッサンらの命名に準拠しており (Hassan et al. 2017a)、サウスタウン地区は、ピートリーによって名付けられた集落址のサウスタウン (Petrie and Quibell 1896) から、神殿地区は同時期にピートリーらによって調査された古王国時代から新王国時代の神殿から、ピラミッド地区は、古王国時代の小規模な階段ピラミッドから、氾濫原地区は低位砂漠の下段の氾濫原に範囲が推定されることから取られている。サウスタウンの名称は元来ピートリーの発掘した地区に限られるが、本論文ではその北側の3ヶ所を包括した集落遺跡名として用いる。

サウスタウン地区は今日のアツ=ザワイダーから西南西におよそ4 km、今日のコム・エル=ピラルから北北西におよそ2 kmの地点に位置する (図 4.3.)。サウスタウン地区を基準にすると、大墓地東地区の中心部は南西に300 m、同西地区の中心部は西南西におよそ700 mに存在する。大墓地南地区は同西地区の南端から南南西におよそ90 mの場所に位置する。またG墓地は大墓地西地区の南端から南南西におよそ180 mの場所に、T墓地はサウスタウン地区からおよそ南南西に800 mの場所に位置する。B墓地は、サウスタウン地区からおよそ南南西に1.6 kmの場所に位置し、北墓地はサウスタウン地区から北方に900 m付近の地点に位置した。サウスタウン地区以

外の集落は、北へ向かって神殿地区、氾濫原地区、ピラミッド地区の順にあり、神殿地区はサウスタウン地区から北におよそ 300 m、氾濫原地区は北におよそ 400–500 m、ピラミッド地区は北におよそ 600 m の場所に位置する。B 墓地の母集落である Kh.4 地点は、サウスタウン地区から南南西におよそ 1.8 km の場所に位置する。

#### 4.2.3. ナカダ地域中核部に所在するナカダ文化期遺跡の調査史

ナカダ地域には王朝時代の遺跡も存在するが最も重要な時代はナカダ文化期であり、ナカダ遺跡自体の調査も含めた周辺の遺跡地点が、様々な調査隊によって断続的に実施されてきた。従って、本論文でピートリーらによる 1894–5 年の調査内容を把握するため、これまでの調査とその成果、および各遺跡地点の特徴を瞥見・整理する必要がある。以下では、ナカダ文化期の遺跡を対象にした過去の調査の内容を概略する。

##### 4.2.3.1. 第 0 期: 調査以前

考古学的な調査以前の 19 世紀後半に、ナカダ文化期の遺物がモハメド・モハッシブ (Mohamed Mohassib) などのルクソールの古物商で散発的に流通していた。この中にはナカダ遺跡由来の遺物も含まれていた可能性がある。例えば、ピートリーは 1894 年または翌年にルクソールの古物商から円筒印章 (Be 15388) を購入したが、ナカダ遺跡に由来する可能性が指摘された (cf. Wilkinson 2002: 242)。またカイロ博物館の遺物目録には、ルクソール西岸のエルクルナ (el-Qurna) 村から多数押収されたナカダ文化期の遺物が掲載された (Quibell 1905)。これらは村の住人によってナカダ周辺の墓地遺跡から不法盗掘されたが、盗掘先の具体的な地点は不詳である。

##### 4.2.3.2. 第 1 期: イギリス隊による調査

当地域におけるナカダ文化期の遺跡を対象とした最初の考古学的調査は、1894–5 年の冬季にピートリーらによって行われた。この調査の対象はナカダ遺跡で、後述のバラス (Ballas) 遺跡も同時期に発掘された。この両遺跡の調査で、王朝時代の遺跡とともにそれまで未知な物質文化が確認されたため、ピートリーはそれを第 1 中間期 (紀元前 2160–2055 年) にナイル河流域の外側から侵略してきた異民族のものと考えた。そして彼はその異民族をニューレイス (New Race) と呼んだ。ナカダ遺跡ではこのニューレイスの遺跡としては、大ニューレイス (Great New Race) 墓地 (以下、大墓地)、B 墓地、T 墓地、G 墓地、集落址のサウスタウンなどが、バラス遺跡では墓地に加えて、集落址のノースタウンが発掘された。ノースタウンでは、域内に存在した複数の子供の墓を主体とする墓群も発掘された。発掘は 3 ヶ月間行われ、結果としてナカダ遺跡では大墓地で 1918 基、B 墓地で 135 基、T 墓地で 57 基、G 墓地で少なくとも 6 基の、合計で少なくとも 2116 基の墓が発掘された (図 4.4.)。このほかに、3.2.2. で記した北墓地での発掘も提起された (Hassan et al. 2017a) が定かではない。またバラス遺跡ではナカダ文化期の墓を主体に古王国時代への移行期や中王国時代の墓を含む 883 基の墓が発掘され、ノースタウンの墓を合わせるとおよそ 900 基の墓が発掘された。従って、ナカダ地域では合わせて 3000 基ほどの墓が発掘された。このうち、バラス遺跡には古王国時代から中王国時代に至る時期の墓も含まれているためナカダ文化期の墓の数は少

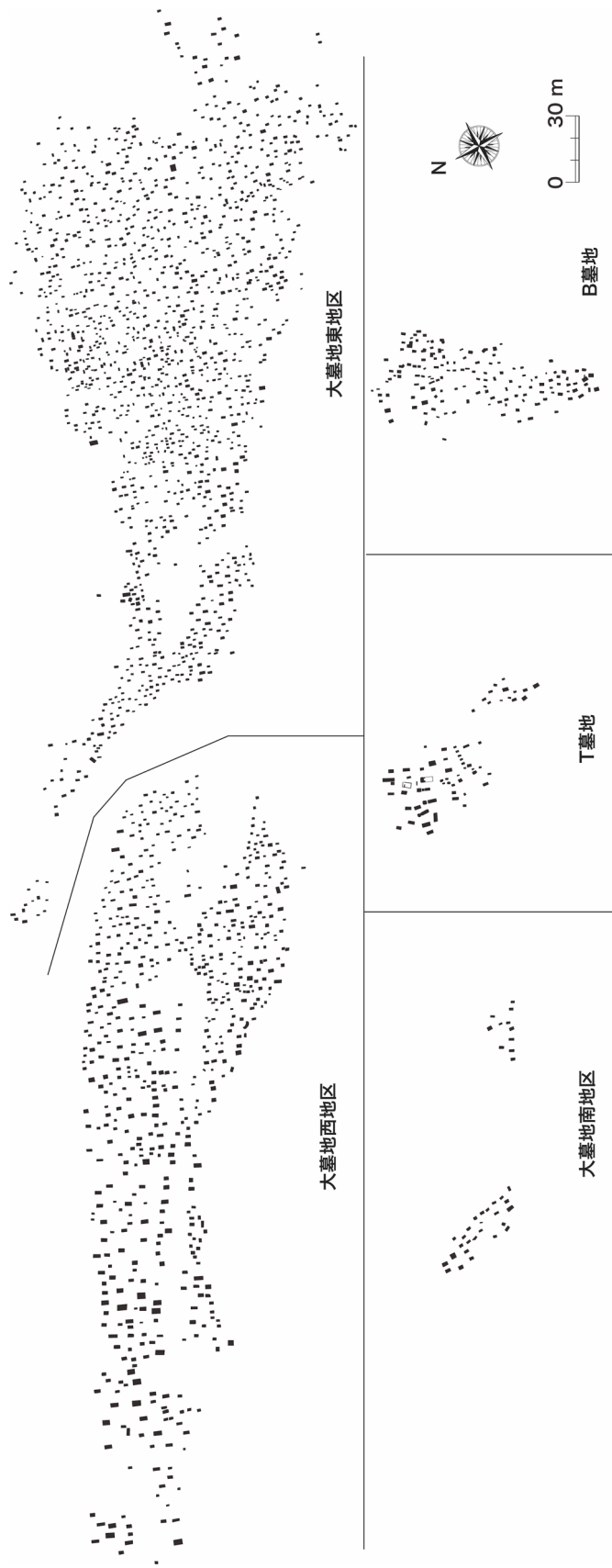


図 4.4. ピートリーによる大墓地東地区・同西地区・同南地区・B 墓地・T 墓地の墓坑分布図 (Petrie and Quibell 1896: pl. LXXXVI トレース・加筆)

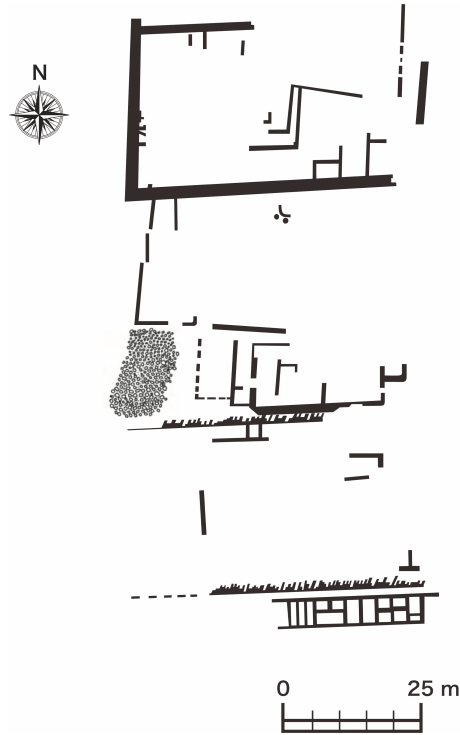


図 4.5. ピートリーによって発掘されたサウスタウン地区の建築遺構 (Petrie and Quibell 1896: pl. LXXXV 加筆)

なくなるが、2500 基以上の先王朝時代の墓が確実に発掘された。またサウスタウンでは、日乾煉瓦を壁体に用いた建築物址が発掘された (図 4.5.)。加えて、ピートリーは自身が「墳墓 (Tumuli)」と名付けた 2 基の遺構を発掘した。この「墳墓」は泥レンガが集積された性格不明の遺構で、正確な築造時期も不明だがナカダ III 期とする説が存在する (van Wetering 2017)。部分的に発掘したピートリーによれば、これらの「墳墓」はいずれもある程度崩壊が進んだ状態で、確認できた実際の規模は、北側の場合には最大幅 18.29 m (60 ft)、最大高 3 m (9 ft 10 in)、南側の場合には最大幅 19.3 m (63 ft 4 in)、最大高 3.59 m (10 ft 7 in)、だったという。ピートリーは両者の元来の高さをおよそ 4.27-4.57 m (およそ 14-15 in) と推定した (Petrie and Quibell 1896: 65-6)。

なおナカダ遺跡を構成する墓地の名前は以下の由来を持つ。大墓地は上記の通りニューレイスの大規模な墓地 (Great New Race Cemetery) に由来し、ここから N 墓地という呼称も用いられる (cf. Bard 1994) が、ニューレイスという用語自体がピートリーの持っていた優生思想を反映しているため使用を避けた。G 墓地はこの墓域の主たる発掘者であった B.P. グレンフェル (Grenfell) の名に由来する。B 墓地はこの墓域の近傍に所在する現代集落コム・エル=ビラル (Kom el-Bilal) のビラルに由来する。T 墓地の名は近傍の「墳墓 (Tumuli)」に由来する。

ナカダ遺跡の発掘報告書に明記されているように (Petrie and Quibell 1896)、ピートリーはナカダ遺跡で発見された新出の遺物・遺構の年代を先史時代とは認定できず、第 1 中間期のものと誤認した。文献資料から第 1 中間期は、古王国時代第 6 王朝終了後に伴って内政が混乱した時代とされており、こうした時代背景がピートリーらの誤認を招いたと思われる。ピートリーに先んじてナカダ遺跡などで発見された遺構や遺物の年代を先史時代に

帰属すると認識したのは次節で触れるフランスのJ.ド・モルガン (de Morgan) だったが、ピートリーがナカダ遺跡・バラス遺跡で得られた出土遺物に対して行った分類や相対編年は、今日まで至る先王朝時代研究の基礎となった点で、両遺跡の調査の学史上の意義は非常に大きい。また彼らが持ち帰った出土遺体の一部は形質人類学的な研究に貢献した (e.g. Johnson and Lovell 1994)。パードの階層化の研究もこの調査で得られた記録が基となった (Bard 1989; 1994)。ピートリーらの調査はナカダ文化研究の出発点と言える。

#### 4.2.3.3. 第2期: フランス隊による調査

ピートリーらイギリス隊の調査からおおよそ1年後にフランス人考古学者のJ.ド・モルガンがナカダを訪れた。彼はピートリーらが調査を行った遺跡地点周辺での踏査と小規模な発掘調査を行った。彼は、「Kjoekkenmoeddings de Toukh (=kitchen midden of Toukh)」と呼称した集落址と「Nécropole de Toukh」と呼称した墓地遺跡を発掘したが、これらはピートリーのサウスタウンと大墓地東地区に対応すると見られる。また大墓地に関しては西地区でも発掘調査を実施した可能性がある。このほかに彼は幾つかのナカダ文化初期の小規模な墓地や集落址を踏査したと見られるが、遺跡の位置や墓ごとの副葬品内容などの詳細は不明である (de Morgan 1896; 1897)。サウスタウンと大墓地で出土した遺物は、現在フランスのサン=ジェルマン=アン=レイ (Saint-Germain-en-Laye) に所在する国立考古学博物館 (Musée archéologie nationale) に所蔵されている (Lorre 2008)。

彼の最も特筆すべき活動は、大墓地から南におおよそ2kmの地点に存在したナカダ IIIc1 期 (第1王朝) のマスタバ墓の調査である (de Morgan 1897)。このマスタバ墓は、ピートリーらの調査時には未発見のもので、当時はほとんど発見例がない最初期の事例の1つだった。このマスタバ墓は、中心部に5部屋の主室をもち、その周囲に16部屋の副室を持つ構造と報告された (de Morgan 1897: 154-8) (図4.6)。またド・モルガンはこの墓の外壁に壁龕が確認できたとし、例えばサッカラに所在する第4王朝のジェセル王の階段ピラミッド複合体の付属施設に見られるような「パレス・ファサード (Palace façade)」と呼ばれる壁龕が確認できたとし、王名や王族名を記載した遺物も大量に出土したことからこの墓を王墓と推定した。ド・モルガン自身はこの墓を、第1王朝を開いたメネス (Menes) 王の墓と推定して一定の支持を得たが (Borchardt 1898; de Morgan 1897)、記銘遺物の数の多さから、のちに第1王朝の初代王であるナルメル (Narmer) 王の王妃であるネイトホテブ (Neith-hotep) 王妃の墓であるとの説も出た。現在ではナルメル王の息子の一人であるレキト (Rechit) 王子の墓との説もあり (van Wetering 2012: 111-3)、被葬者の実態は不明である。本墓からは遺物が多数出土し、カイロのエジプト博物館を中心に複数の博物館に収蔵され (e.g. Quibell 1905)、のちに再研究が行われた (Bagh 2004; Kahl and Engel 2001; Kahl et al. 2001)。ド・モルガンはこの本墓の南にもナカダ文化期の墓地を発見し調査したがこちらも詳細不明である (de Morgan 1897: 147-8, Fig. 513)。この調査の翌年にはドイツのL. ボルヒャルト (Borchardt) がこの地を訪れて1日だけ調査を実施し、残存部分を中心に墓の平面プランの確認と図面作成を行った。ボルヒャルトもこの調査で壁龕を確認できたとし、図面を出版した (Borchardt 1898)。また1904年にJ. ガースタング (Garstang) が本墓の小規模な発掘調査を実施したが、詳細はほとんど不明である (Garstang 1902a; 1902b; 1907)。ガースタングの調査以後、



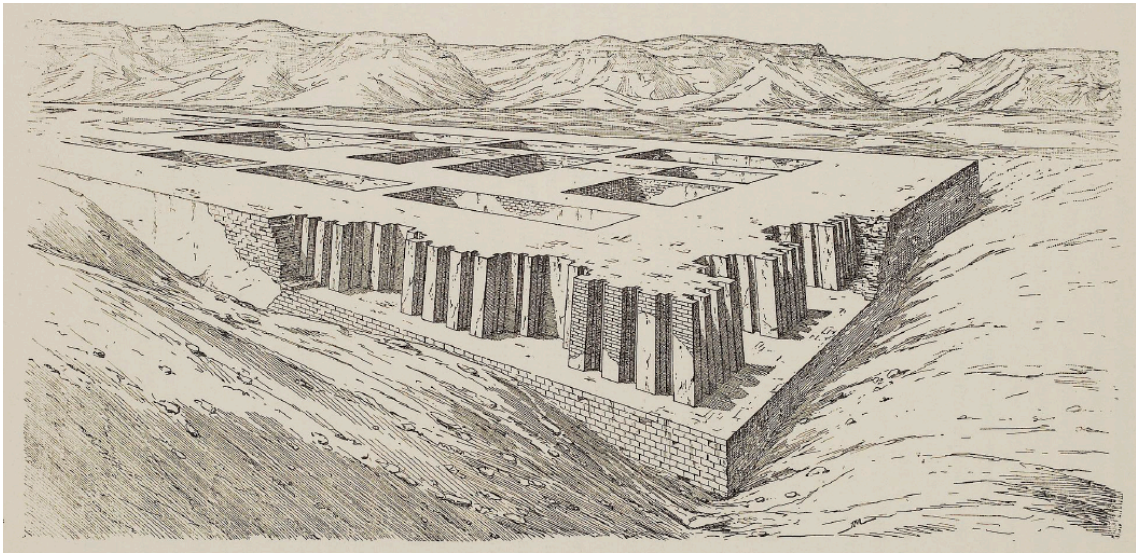


図 4.6. ド・モルガンによるマスタバ墓の外観（縮尺不明）（de Morgan 1897: Fig. 521）

本マスタバ墓の所在地は不明となり、4.2.6.にて後述するように 1980 年代に再発見されて PWT.112 地点として付番された。所在地が不明になったことにより、主に 1930 年代後半からサッカラ遺跡北地区で断続的に発掘された本墓に類似した構造のマスタバ墓群の研究に当たって（Emery 1949; 1952; 1954; 1958; 1962; 1966; Emery and Saad 1938; 1939; Quibell 1913; 1923）、それらと類似する本マスタバ墓の実地での再調査と比較が困難となった。

上記のように、ピートリーらはナカダ遺跡を当初は第 1 中間期のものと推定したが、ド・モルガンはこの見解を修正した。ド・モルガンはこのマスタバ墓の調査でピートリーの W 土器の最終形態である円筒形の壺を発掘し、さらに 1896 年に自身が実施したアビュドス地域での踏査で得た知見を踏まえ、ナカダ遺跡などで見つかった物質文化の年代を先史時代のものと規定した。ナカダ遺跡で出土した考古資料の時期を初めて正しく認識した点で、本マスタバ墓の調査は学史上の重要性を大きく有している。ただし、ピートリーとド・モルガンの間には学統的な理由に基づく確執があった（cf. Gran-Aymerich and Gran-Aymerich 1994; Sowada 1999）とされ、情報の共有は積極的に行われなかった。必然的に、両調査は同一遺跡地点を発掘していながら成果を有機的に連関させる機会を持たなかった。両調査の成果公表が不完全なことに加え、特にド・モルガンの調査は報告内容が極めて不良で遺物の出土コンテクストが不明なために復元が困難で、マスタバ墓の発掘成果も評価が難しい結果となった（cf. van Wetering 2012）。同一地点を調査した以上、ピートリーらが主に調査した大墓地の評価にも影響する可能性があるが、ド・モルガンの調査の実態が不明な以上、影響の程度を推量することは困難である。

#### 4.2.3.4. 第 3 期: ドイツ隊による調査

ド・モルガンによる調査から 50 年近くたった 1958 年 2 月に、ドイツ隊がナカダ遺跡を中心に南北 4 km の範囲を踏査した。この踏査は、1958 年 2 月 9 日から 4 月 10 日まで、カイザーと K. ブッツァー（Butzer）により行



われ、カイロ以南から南部の都市エドゥフ (Edfu) に至るナイル河両岸で行われた。この踏査の目的は、19世紀末から20世紀初期に調査された諸遺跡の所在地の再確認と現況の記録、およびそれらの立地の考古学的・地学的知見からの記載だった (Butzer 1959a; Kaiser 1961)。この調査では、既知の遺跡に加えてそれまで未知であった遺跡も確認された点も重要である。調査の対象時期は先史時代に限定していないが、ナカダ文化期の重要遺跡であるヒエラコンボリス遺跡やアビュドス遺跡に加え、ナカダ遺跡を含むナカダ地域の広範囲が踏査された (Kaiser 1961)。

ナカダ地域の踏査結果は以下の通りである。まず既知の遺跡地点に関しては、墓地はピートリーらが発掘したG墓地を除く3ヶ所を確認した。また、クィベルが発掘したバラス遺跡の墓地も確認した。集落では、サウスタウンにてピートリーが発掘した住居址の一部を確認したが、地元農民による土取りで遺存状況が著しく不良で、多数の攪乱ピットやB土器を主体とする土器片・骨片・フリント製石器の散乱も確認した (Kaiser 1961: 15)。サウスタウンに関しては、踏査の結果を踏まえて1500人ほどの人口が推計された (Butzer 1959b: 52)。またピートリーの2基の「塚」も確認し、互いの所在地の距離は15m以下なことも示された (Kaiser 1961: 17)。

加えて、新規に発見されたナカダ文化期の遺跡地点も提示された。彼らは、サウスタウンの北200mほどに王朝時代の集落とピートリーが発掘した王朝時代の神殿址を確認するとともに、ナカダ文化期のB土器などを低位砂漠や氾濫原への傾斜面で新たに発見し、今日の氾濫原にも集落址が存在した可能性を述べた。さらにピートリーのB墓地の東側には未知の集落址を確認した (Kaiser 1961: 17)。またこの地点から北に500mにナカダIII期の土器が表採可能な墓地を示し、そこから北に450mにもB土器や古王国時代の土器が表採可能な2ヶ所の墓地を示した (Kaiser 1961: 17)。これら3ヶ所の墓地の規模はおそらくピートリーのB墓地と同程度と想定される。

ドイツ隊の調査の考古学的意義は、1950年代後半時点での遺跡の現況を示して新たな遺跡の存在を提示したことにある。加えて、それまで地形学的・地質学的な観点により立脚して遺跡を踏査した点も意義高い。

#### 4.2.3.5. 第4期: イタリア・IUO隊による調査

ドイツ隊の調査後、1977年からイタリアのナポリ東洋大学 (かつての東洋大学研究所 (Istituto Universitario Orientale: IUO)) のC. バロカス (Barocas) らがサウスタウン地区の再発掘調査を始めた (Barocas 1986; 1989; Barocas et al. 1989; Fattovich 2001; Fattovich et al. 2007)。彼らの調査目的は上エジプトにおける初期の政体 (polity) の出現と発展に長距離交易が与えた影響の検討だった (Fattovich et al. 2007: 49)。彼らはワディ・ハママートと紅海を介したルートを交易の経路として推定し、その対岸に所在するナカダ遺跡に着目した。彼らはサウスタウン地区を便宜的にザワイダー (Zawaydah) と呼称した。IUO隊は1977-9・1981-4・1986年の3期8シーズン活動した。彼らはサウスタウン地区の南側部分に550m<sup>2</sup>の調査区を設定して踏査と遺物の表採を実施し、2基の試掘トレンチと複数の試掘ピットを設けて発掘した (Fattovich 2007)。彼らも遺跡の保存状況が不良なことを確認し、良好な堆積が期待できず出土物の時期を層位から検討することが困難と想定した。そこで、遺物の分布に着眼して集落の空間構造の解明を試みた。踏査を経て、最終的にザワイダー西地区 (ZWW) と同東地区 (ZWE) の2ヶ所の

発掘調査区を設定した (図 4.8.)。両地区で地表から深さ 10–50 cm ほどの基盤まで掘削し、スクリーニングも導入して人工遺物全てと、骨の回収と遺構の検出を試みた。また踏査では 1 m×2 m 単位の表面採集区を設けて土器の回収を試みた (Fattovich et al. 2007: 50)。顕著な発見があったのは ZWE 地区で、ナカダ文化期を主体とする遺構と遺物が多数確認された (図 4.7)。遺構は調査区の南西部で少なくとも 2 部屋を持つ長辺 4 m ほどの建築物が見つかり、ほかに少なくとも 1 棟の恐らく列柱構造の建築物を構成した柱穴痕が調査区の中央部や北西部から検出されたほか、調査区中心部では多数のピットや小規模な溝状遺構が検出された (di Pietro 2017: Fig. 2; 2011a: Fig. 1)。ピットは直径 4–41 cm、深さ 5–30 cm と様々なサイズで、平均的な直径は 26 cm で深さは 12.94 cm だった (Fattovich et al. 2007: 50; di Pietro 2017: 149)。ピットからは炭化物や炭化穀物が回収されたが、年代測定の有無は不明である。この結果、ピットの構造や組み合わせから複数の建築段階が存在した可能性が推定され、初めは小規模で内部に炉址を持つ矩形の建築物で、後には建築物がより大型化するとした。建築物は主に土壁造り (wattle and daub) と見られるが日乾レンガ片も回収された。列柱構造の建築物は 1 棟とした場合の規模は 11 m×8.8 m ほどで (di Pietro 2017: 149)、東西方向を主軸に構築された入り口と思われる構造も検出された (di Pietro 2017: 149)。ヒエラコンポリス遺跡 HK29A 地点 (Friedman 2009b) や HK25 地点 (Hikade 2011) といった他遺跡の大規模な列柱構造の類例から、後述の出土遺物を踏まえて ZWE 地区の事例も居住用以外の機能の可能性が提起された (di Pietro 2017: 149–51)。溝状遺構は長辺 1.15 m、短辺 1.10 m で深さ 0.2 m ほどで、一部は壁体の基礎の可能性もある (Fattovich et al. 2007: 50)。また炉址や日乾レンガの集積なども検出された (di Pietro 2017: 149)。

遺物に関しては、I–III 期に至る時期の土器が採集・発掘された (Barocas et al. 1989) ほか、石器などが多数出土・採集された。特に列柱構造の建築物と日乾レンガ製建物址が検出された付近から回収された破片を含む土器 1537 点が主要な分析対象となった (di Pietro 2016: 180)。このうちナカダ文化期の土器は 1352 点である (di Pietro 2016: 181)。土器はピートリーの R 土器に相当するナイルシルト C (Nordström and Bourriau 1993b: 173–4) またはフリードマンの分類 1 (Friedman 1994: 142–6) の胎土 (cf. 表 2.1.) が約 66% (892 点) を占めるなどナイルシルト製が主体だった。ピートリー分類の B 土器や P 土器、ナカダ II 期以降に埋葬用の精製土器に用いられたマールクレイ製の土器は少ない。結果としてナイルシルト 8 種類とマール 5 種類の胎土が確認された (di Pietro 2010: 112; 2016)。器形は鉢形・壺型双方が見られたが、胎土によって割合は異なる (di Pietro 2010: 112–3, Tav. 1; 2016: 183–5)。また ZWE 地区から出土した土器は幅広い時間幅を含むが、IIC-D 期と IIIA 期の土器を主体だった (di Pietro 2016: 185–6)。さらに R 土器は型の使用により規格性が高く、ZWE 地区で出土した土器の場合は世帯単位の土器生産を超えた組織的な生産体制が存在する可能性を述べた (di Pietro 2016: 185–6)。なお石器に関しては、出土点数や種類、位置などの情報が現時点では不明である。

ZWE 地区ではほかにも多種多様な小型遺物が、建築物の周辺から出土した (di Pietro 2007; 2009; 2010; 2011a; 2011b)。これらは行政用品 (administrative devices)、奉獻・信仰品 (votive/religious objects)、装飾品 (dress and personal ornaments)、穿孔の施された円盤状土器片 (perforated pottery discs)、道具・日用品 (tools and household implements) に分類され、点数の割合は、行政用品 34%、奉獻・信仰品 25%、装飾品 19%、円盤状土器片 13%、道具・日用

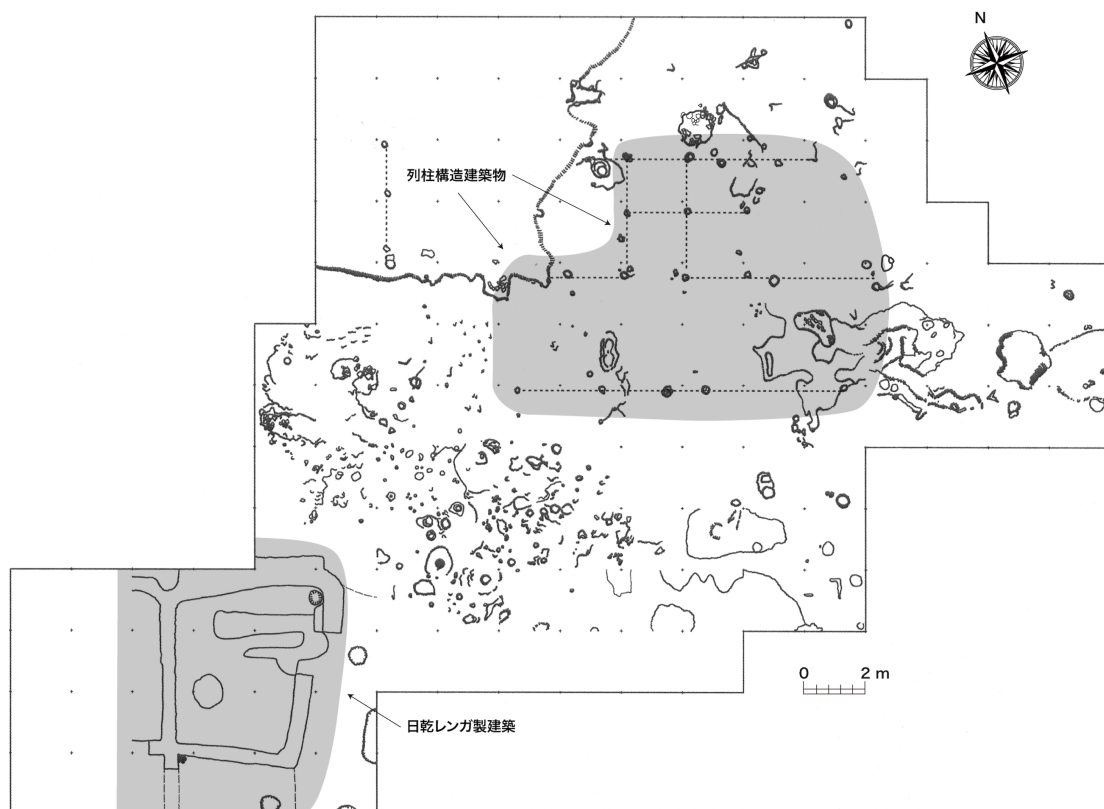


図 4.7. ZWE 地区における遺構検出状況 (di Pietro 2017: Fig. 2 改変・トーンほか加筆)

品 9 % だった (di Pietro 2007: Fig. 10)。行政用品には封泥や「トークン」と呼ばれる計量用の遺物が含まれ、奉獻・信仰品には小型の人物像や恐らく動物像・ミニチュア容器や土製のボートの模造品、パレット、パンの模造品 (bread model) の推定品が含まれる (di Pietro 2007; 2009; 2010; 2011a; 2011b)。また装飾品には骨・牙・貝製などの腕輪、石製・骨製ビーズや石製ペンダントが含まれ、道具・日用品には紡錘車・石器・骨器などの生産活動に用いる道具、骨・牙・貝製の腕輪といった装飾品などが含まれる。ビーズは 120 点、ペンダントは 24 点出土し、腕輪は少なくとも 20 片出土した (di Pietro 2009: 66)。また骨器は 4 点、象牙製の道具は 1 点出土した (di Pietro 2009: 66)。また紡錘車は少なくとも 30 点出土が報告された (di Pietro 2009: 66)。動物遺体や植物遺体も出土したが、詳細は不明である。

この中でも特に言及すべきは行政用品と奉獻・信仰品、および道具・日用品である。行政用品の封泥は、搬入品や貴金属などの貴重な物品が保管されている施設や収納を封印するための道具である。封泥は主に ZWE 地区から破片も含めて 264 点が発見され (di Maria 2007)、一部には縄の圧痕が確認され実際の使用が示唆される。ZWE 地区で出土した封泥は調査区の中央部を中心に南西部から南東部にかけて分布し、複数の建築物で封泥が用いられたと推定された。封泥には印影がある個体とない個体があり、前者は少数だった (di Maria 2007)。印影には、III 期の象牙製ナイフ把手の陽刻と類似した動物の意匠のものも見られた (Barocas et al. 1989: 301; di Maria 2007: 68)。また同じく行政用品の「トークン」も見つかり、物品の計量に用いられたとされる。「トークン」はほ

かの遺跡では下エジプト地域のテル・エル＝ファルカ遺跡の III 期のコンテクスト (Kołodziejczyk 2012) や上エジプト地域のヒエラコンポリス遺跡 HK11C 地点の IIC 期のコンテクスト (Baba et al. 2017) でも出土が報告されている。ZWE 地区で発見された「トークン」の種類は多様で、穿孔や点描が施された土製の円盤や、未焼成の土製円盤、刺突による点描が施された粘土製の球、石製の円盤、マッシュルームの形状に加工された礫、土製のペンダント状遺物、円筒形の牙製品封泥、木製の棒状製品、穿孔された円盤状の土器片などがある (Pirelli 2007)。ただし、発掘者らはこれらの封泥類を交易よりも貯蔵と関連付けた (Fattovich et al. 2007: 51; di Pietro 2017: 156)。これは封泥類が特に ZWE 地区では貯蔵用と思われる建築物址から出土したため、その理由として 1. 希少な交易品が ZWE 地区には見られないこと、2. ZWE 地区で出土する土器は食品加工用か、中期間の食料保存用と分配用なこと (di Pietro 2010; 2016)、3. アメリカ隊によるサウスタウン地区の調査で穀物などの大量の植物遺体が発見されたこと (Moens and Wetterstrom 1988: 164-6) をあげた (di Pietro 2017: 156)。

奉獻・信仰品はサウスタウン地区における奉獻や信仰の痕跡として注目される。粘土製の人物像 24 点以上や牛頭型やトリなどの動物像 14 点以上の破片など 100 点以上が出土したが、遺存状況は概ね不良だった (di Pietro 2011a: 64-9)。このうち人物像は両腕を上げたナカダ文化期に特徴的な形状が推定された (cf. Needler 1984: 336-41; Ucko 1968)。ヒエラコンポリス遺跡やマハスナ遺跡などの上エジプト地域のほかの集落址でも出土例があり (cf. Anderson 2006; 2007)、集落で行われた儀礼で用いられたと見られる。ミニチュア容器は基本的に低温の素焼き土器で、銅製の例外も含め少なくとも 54 点が出土した (di Pietro 2007: 83; 2011a: 66)。器形は概ね鉢形で、器高は 1.6-4.8 cm 程度だった。時期はナカダ IID2-III A2 期が推定された (di Pietro 2009: 67)。この用途は、IIIC 期以降の儀礼場からの廃棄されたミニチュア容器の出土例 (e.g. Kawai 2011) から推定される。ボートの模造品は破片も含めて 42 点以上が出土し、ほかの遺跡で出土事例から IIA-III D1 期が提示された (di Pietro 2011a: 65)。ただし 4.2.6. で後述するアメリカ隊の見解では IIA 期に関しては考慮が必要である。パンの模造品は土製で、少なくとも 42 点を確認されたが大多数は破片だった (di Pietro 2011a: 70)。時期はアビュドス遺跡ウム・エル＝カアブ地区 U 墓地などの出土事例から IID2-III A2 期が推定された (di Pietro 2011a: 70-1)。これらの奉獻・信仰品は ZWE 地区の南西部の日乾レンガ製の建築物と周辺から出土したが、この遺構と遺物の共伴は確実でない (di Pietro 2011a: 72)。IUO 隊のパレットもこの分類に含まれるが、ピートリーが「呪術用スレート (magic slate)」(Petrie 1920: 36-7) とした極めて小型のパレットは奉獻・信仰品に、それ以外は道具・日用品に分類できると考えられる。

道具・日用品は、ピンや錐、針類などの様々な銅製遺物が計 17 点出土し、銅鉱石 (恐らくマラカイト) 25 片 (di Pietro 2009: 66) や内部に銅が付着した坩堝も出土した。上述の銅製ミニチュア容器 (di Pietro 2007: 83) も含め、銅鉱石の流通を考える上で重要である。また坩堝はサウスタウン地区で銅の溶解と精製が行われた物的証拠で、墓地で出土する銅製遺物が母集落で製作された可能性を示す。ただし、坩堝自体の量は道具・日用品類 1% のみなので (di Pietro 2007: Fig. 1)、本格的な銅製品の生産体制が構築されていたかは不確定である。

サウスタウン地区の遺構や遺物に関しては、IUO 隊の調査以前は 1896 年にピートリーが若干報告した以外に詳細は不明だった。しかし IUO 隊は踏査と発掘調査によりナカダ I 期から III 期に至る時間幅の遺物を発見し、

ナカダ文化期を通じて居住者が存在した可能性を指摘した。特に利用時期に関しては、ZWW 地区でピートリーの B・C・P 土器などが発見された一方で、ZWE 地区では R 土器や L 土器が主体的なことから、サウスタウン地区の西側がより古く、東側がより新しい可能性を提起した (Barocas et al. 1989: 300)。この時期的変遷は 4.2.6. で後述するアメリカ隊の調査によっても部分的に確認された。また IUO 隊は人口規模の推定を提示しており、初期には 150–200 人ほど、中期には 500–600 人ほど、III 期にはそれ以下とした。これはブツァーの推計 (Butzer 1959b: 52) よりも時期を考慮した結果となった。IUO 隊の発掘成果の詳細は、現在も報告書刊行の準備が進行中なために不明な部分が多い。しかし、墓地との併行関係を捉える上で、出土遺物や検出遺構は集落活動の変遷を把握するための一助となった点で意義は大きい。特に、彼らの当初の目的であった長距離交易のうち、銅の流通に関しては一定の成果を挙げたと総括できる。一方で、彼らは封泥などの管理用の遺物を交易と関連させることに慎重だった。ZWE 地区で希少品が見出土なことなどを理由としたものの、墓地からは例えばラピスラズリ製品があるので、IUO 隊の調査地点では出土しなかった可能性もある。したがって、行政用品が必ずしも貯蔵用のみに用いられたとは限らないと言える。

#### 4.2.3.6. 第 5 期: アメリカ・WSU 隊による調査

IUO 隊による調査開始からやや遡った 1975 年から 1981 年まで、アメリカ・ワシントン州立大学 (Washington State University: WSU) の T.R. ヘイズ (Hays)、およびハッサンらは、「ナカダの先王朝 (The Predynastic of Naqada)」プロジェクトを立ち上げ、バラスからダンフィク (Danfiq) に至る南北におよそ 15 km の範囲を断続的に調査した (Tassie and van Wetering 2013/14)。彼らは 4.3. で後述するように未知の遺跡を複数地点発見するとともに、1978 年と 1980–1 年の 3 年にわたり、カイザーによって最初に言及された B 墓地に対応する集落遺跡を確認して Kh.4 地点と付番するとともに、IUO 隊が当時発掘していたサウスタウン地区の北側で踏査と小規模な発掘調査を実施した。なお、種別不明な遺跡である PWT.144 地点も発見したが、詳細は不明である。

サウスタウン地区の調査では集落の空間的な利用法の解明を目指し、原位置でナカダ文化期の建築物を発見することと、遺物の分布状況を把握することを目的とした。調査対象には、ピートリーらの調査で確認された建築物や遺構も含まれた。このため、サウスタウン全体の範囲全体を 25 m×25 m のグリッド 58 区画に分けて、8 基の試掘トレンチ (Tr) と、4 基の試掘ピット (Tp)、18 ヶ所の表面採集区 (SC) を設けた (図 4.8.)。このうち、試掘トレンチの規模は、25 m×1 m・10 m×1.5 m・10 m×1 m の 3 種類、試掘ピットは 1 m×1 m か凸字状の Tp.75-77/1 でおおよそ 32.5 m<sup>2</sup>、遺物の表採集区は 1 m×1 m・5 m×5 m の 2 種類である。表採集区の一部には試掘トレンチが設けられた。また SC.78/N1.E.16 は後の IUO 隊 ZWE 調査区の中心部に設定され、SC.81/25 は後の IUO 隊 ZWW 調査区の北およそ 5 m の場所に位置した。調査の結果、氾濫原にせり出たテラス部分でピートリーらの調査で発掘された建築物が 2 棟確認され、St.P1、St.P2 と再命名された。また Tp.78N3-N4.E16-E17 からは石積の壁体が検出された。試掘トレンチでの発掘調査では、調査区両端と中央部の 1 m×1 m の範囲の廃土をスクリーニングし、遺物の回収に努めた (Hassan et al. 2017a: 100)。結果、多数の土器片・石器などの遺物を回収し、建築

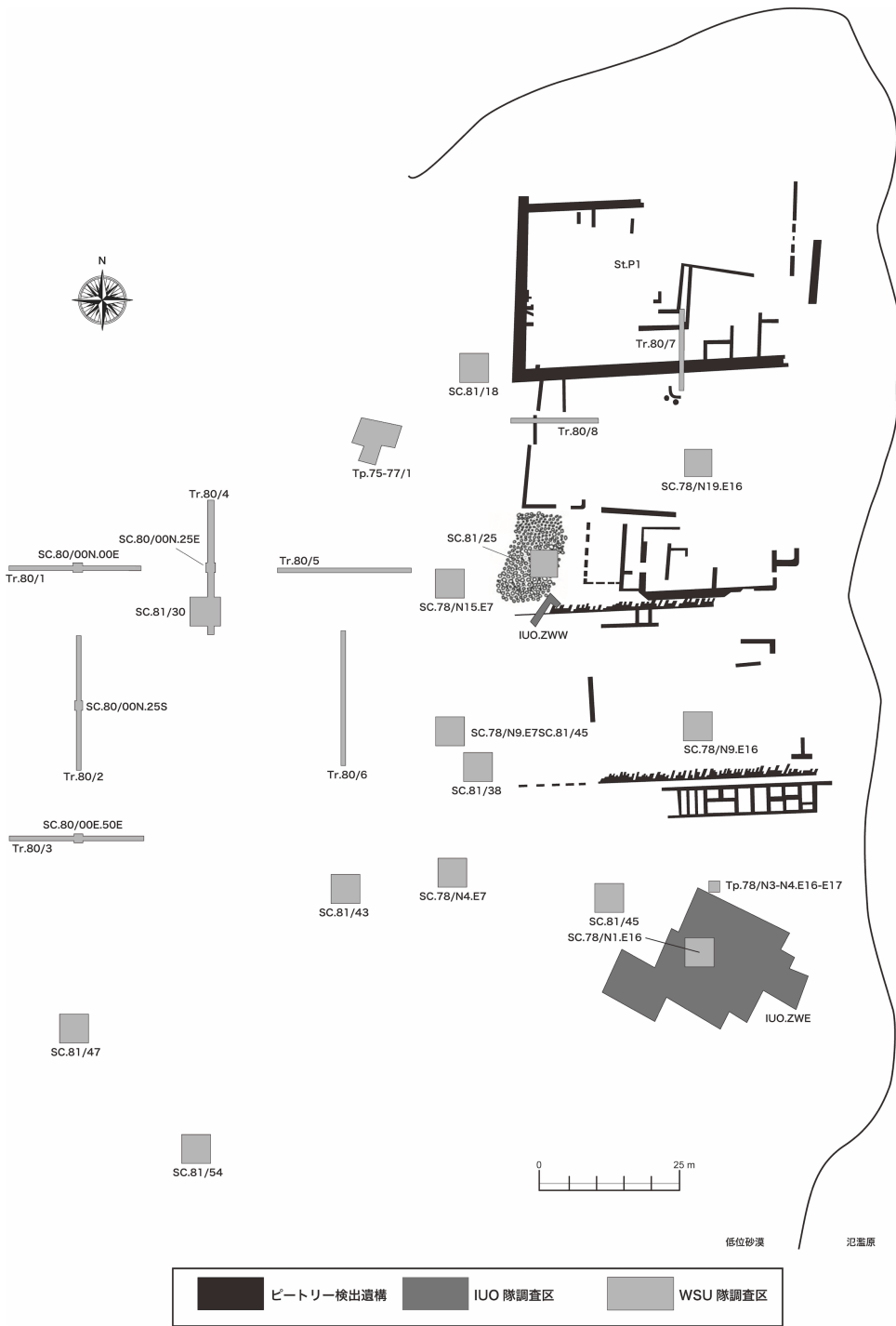


図 4.8. サウスタウン地区における各隊の調査区・発見遺構 (Hassan et al. 2017a: Fig. 5 加筆)

物の壁体に用いられたと見られる日乾レンガ片も回収した (Hassan and Matson 1989; Hassan et al. 2017a; Tassie and van Wetering 2013/14)。また植物遺体も回収された (Moens and Wetterstrom 1988: 164-6)。また 25 m×25 m グリッドの 18、25、30-2、36-8、42-6、47-51 で行った表採の結果から、WSU 隊は遺跡の遺存状況は不良なもの以下の分布を示した。まず土器は西部が最も密度が低く、北部、北西部、東部で密度が高くなり (Hassan et al. 2017a:

Fig. 6b)、細かくはピートリーの P 土器が南西部に最も高密度に分布し放射状に分布密度が減る (Hassan et al. 2017a: Fig. 6c) 一方で、R 土器は北部に最も高密度に分布し次に東部に密度が高く、西に向かうに従い密度が低下することを示した (Hassan et al. 2017a: Fig. 6d)。この結果から、特にサウスタウン地区の南西部が最も古く居住された範囲で、北東部が最も新しく、集落の活動域が南西部から北東部に向かって漸次遷移したとの通時的観点に立った見解を示し、IUO 隊の見解を引き継ぎつつ拡張した (Hassan et al. 2017a; cf. Hassan and Matson 1989)。また石器は西部に最も高密度に分布し東方向に密度が低下する (Hassan et al. 2017a: Fig. 6d) ため、サウスタウン地区の西部が作業場だった可能性を示唆した。炭化物や植物遺体、動物遺体は北西部と東部に最も高密度に分布する (Hassan et al. 2017a: Fig. 6f) が、採集点数は少ない。また日乾レンガは北部のピートリーらが発掘した建築物に近い部分に最も高密度に分布し、南や西方向に密度が低くなる (Hassan et al. 2017a: Fig. 6g) ため、北部に同様な建築物が複数存在した可能性を示唆した。さらに IUO 隊が ZWE 地区で土壁 (wattle and daub) を持つ建築物址の痕跡を提起し、日乾レンガ積みの壁体の基礎となる石組みを検出したことを踏まえ、WSU 隊はサウスタウン地区では土壁製建築物が構築された段階と、日乾レンガ製建築物が構築された段階の 2 つがあった可能性を提示した。

なお、後述のエル=ハッタラ遺跡群と同様に、サウスタウンの調査においても出土した炭化物を試料とした放射性炭素年代測定が実施された (Hassan 1984: Table 2)。重要な年代値はサウスタウンの試掘ピット A で取得された炭化物の測定値であり、較正年代 cal B.C. は地表から 10–15 cm の人工層位では  $3355 \pm 120$  または  $3345 \pm 155$ 、35–40 cm では  $3507 \pm 114$  または  $3565 \pm 105$ 、65–70 cm では  $3447 \pm 110$  または  $3370 \pm 140$  であった (Hassan 1984: Table 2)。サウスタウンの試掘ピット A の堆積は擾乱を被っていないとされる (Hassan 1984: 683) が、人工層位と年代値に明瞭な相関は見られず、理由は不明である。この年代は今日一般的な IntCal を適用した較正年代ではないが、少なくとも紀元前 3 千年紀の半ばには人類の活動が確認されたことがわかる。

以上の踏査の結果から、ハッサンらはサウスタウン地区の周囲も含めて以下のように空間利用を考えた。まず、大墓地東地区との間にはド・モルガンが言及した遺構・遺物が乏しい空間 (de Morgan 1896: 87–8) が確認されたため、サウスタウン地区が所在するテラスは墓域、空白域、集落域に空間的に区分できるとした。ハッサンらは集落域の規模は 2 ha ほどで、建築物が検出された北側範囲は行政区域、西側は食料の加工場、南側はより大規模な建築物に乏しい居住の場としての機能を推定した (Hassan et al. 2017a: 111, Fig. 8)。また南側には貯蔵施設などが存在した可能性も述べた。これは IUO の発掘調査で出土した多数の封泥類 (di Maria 2007) を根拠にしていると思われる。北側範囲の行政区域には、II 期後半以降におそらく為政者の宮殿 (palace) がサウスタウン地区の北に位置する神殿地区から移転してきた可能性を述べた (Hassan et al. 2017a: 120)。さらに、この神殿地区の存在を合わせて集落域は行政・経済・居住・信仰の 4 つに機能が分化でき、近接して存在したと推定した (Hassan et al. 2017a: 117–9)。空白域に関しては、遺構が実際に希薄だったか痕跡が残りにくい遺構が存在した可能性の両方を考え、かつ石器を用いた食料の加工場などの生産場が存在した可能性を、石器の分布を根拠にしつつ示唆した。大墓地東地区は、集落域に居住した一般の人々が用いる埋葬のための場だったとの見解を示した。ただし、この

空間利用は II 期以降で、I 期の集落域に関してはサウスタウン地区の考古学的証拠が少ないことと、カイザーらの踏査の結果も考慮し、神殿地区に存在した可能性を指摘した (Hassan et al. 2017a: 113-4)。すなわち、大墓地東地区はサウスタウン地区の利用が本格化する前からの使用が想定された。ただし上記の見解は、ハッサンら自身も述べているように、あくまで低位砂漠上の集落址から得られた知見に基づいており、氾濫原にも集落が営まれた可能性があるため、広域的には改善の余地がある旨を記している。ハッサンらは、同時期の中心地遺跡であるヒエラコンポリス遺跡の HK34B 地点と HK29A 地点を対象に、集落内で特化した機能を持つ区域に関して、サウスタウンとの比較を試みた。HK34B 地点は踏査によって II 期後半から III 期初頭に位置付けられ、広場を囲む大型の建築物や壁で囲まれていたことが推定された (Fairservis et al. 1971/72: 14)。また HK34B 地点は微高地上に立地し、壁体が存在することから、防衛的性格を持っていたことが推定された。この建築物の配置と立地は、サウスタウンと類似するとハッサンらは述べている (Hassan et al. 2017a: 120)。HK29A 地点は II 期後半に時期づけられ、主要部分は空間を持つ儀礼場を主体とするが、石器やビーズ、石製容器の製作址も発見されている。HK29A 地点にはエリート層が用いる場と隣接する工房からなり、この関係はサウスタウン地区の特に中央から西側で検出された状況と類似するとした。調査によって得られた考古学的情報と、同時期のほかの遺跡との比較を通じて、ハッサンらは、ナカダ文化期の国家形成で重要となる要素の、専門化、長距離交易を運営する政経、中心化、都市化、社会の複雑化、官僚制 (Köhler 2011) のすべてがナカダ遺跡で確認・推定できるとした。

ハッサンらのサウスタウン地区の調査は、遺跡の範囲内の各所で試掘調査と遺物の表面採集を行うことで、それまでピートリーによって少数の建築物が記載されたのみだったサウスタウンに、空間的観点に立った集落活動の議論を可能にした点に意義を持つ。この点は、同時期の IUO 隊の調査が遺跡のある範囲に特化して発掘調査を行ったのとは対照的な切り口だったが、両者を結びつけたサウスタウンの解釈は、それまでヒエラコンポリス遺跡でのみ可能だった遺跡周辺を含めた集落活動の把握に新たな事例を付加したと言える。I 期におけるサウスタウン周辺地域の集落の概況を明らかにし、それらがナカダ文化期の前半には廃絶して、サウスタウンの居住域が拡大するという見解が修正され、まとめられた点 (cf. Hassan 1999) は、この地域の中心地化のモデルを考える上で重要な視座を提供した。さらに 4.3. で述べるようにハッサンらはサウスタウン以外でも発掘調査と踏査を行っており、地域レベルでナカダ文化期の人類活動を素描した点も重要である。ただし、アメリカ隊によって出されたこれらの見解は最終的なものではないため、最終報告の出版が待たれる。

#### 4.2.3.7. その他小規模な踏査

なお上記以外にもいくつかの小規模な踏査がナカダ遺跡で行われた。1967 年 2 月 23 日に早稲田大学の第一次古代エジプト調査隊は大墓地東地区とサウスタウン地区との間の「空白地帯」で踏査を実施し、B 土器の土器片に加えて、石器 276 点と旧石器時代の石器 4 点、および偽石器 4 点を表面採集した (川村 1967: 113-4; 長屋 2013)。採集資料の整理の結果、ナカダ文化期の石器のうちツールは 35 点で、石刃が全体の 4 割、剥片が全体の 5 割を占めたと報告されている (長屋 2013: 372-3, 表 1)。ここからツールのうち鎌刃が 6 点ある点に着目し、採集地



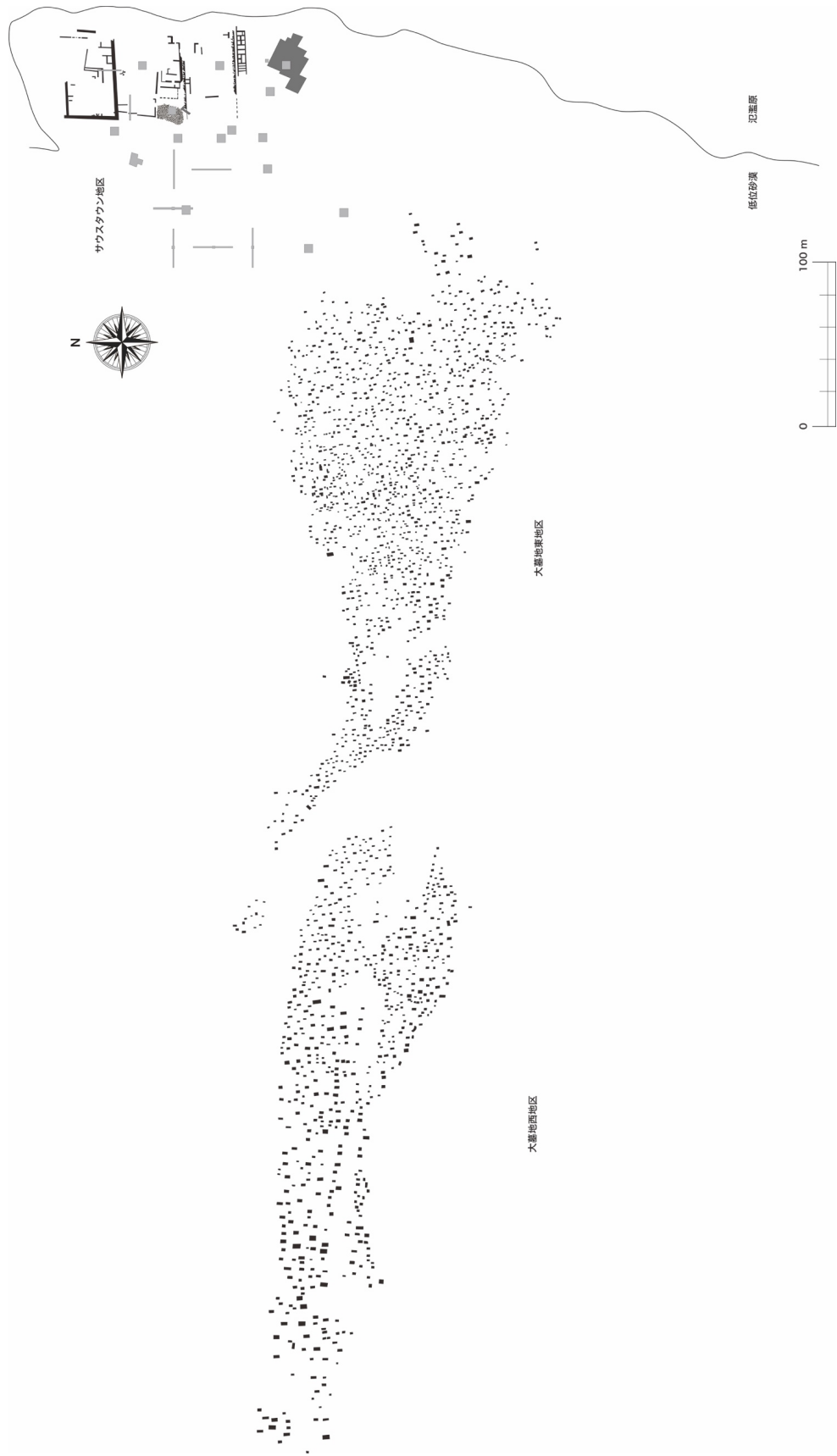


図 4.9. 大墓地東地区・同西地区・サウスタウン地区で発見された遺構の分布 (Hassan et al. 2017: Fig. 8; Petrie and Quibell 1896: pl. LXXXVI トレース・加筆)

点では鎌刃の製作された可能性を提起するとともに、石刃や剥片が全体の9割を占め、かつそれらの93%が自然面を有さないことから、調整済みの石刃石核が採集地点付近に持ち込まれた可能性を述べた(長屋 2013:373-4)。この解釈は、ハッサンらの提起するサウスタウン地区西南部での生産活動(Hassan et al. 2017a: 111)と整合する。

2018年には、英国探査協会(Egypt Exploration Society)の支援を受けたローランドが率いるイギリス隊によってナカダ遺跡とその周辺の踏査が実施された(Egypt Exploration Society 2018)。この踏査では、サウスタウン地区や「墳墓」地点の現状確認と、さらなる考古学的調査のための実行可能性調査が実施された。

#### 4.2.4. ナカダ遺跡における調査史のまとめ

本節では、ナカダ遺跡における過去の調査とその成果を示してきた。これらの総括として、図 4.9.にナカダ遺跡サウスタウン地区で過去に調査された遺構の分布図を示した。特徴は、墓地の調査が最初期に行われた一方で、集落址の調査は1970年代以降に特に集中的に行われた点である。特に集落の調査は、より近年に行われたこともあって調査範囲が部分的にも関わらず提示された情報は多い。特にIUO隊の調査では、物流に関わる遺物や物品の管理に関わる証拠が得られており、サウスタウン地区がナカダ文化期に担った役割の一端が示された。一方で、墓地・集落ともに調査で得られた成果の全体像が提示されているわけではないので、ナカダ遺跡の評価が不十分な面も持つ。本論文の研究目的に照らせば、墓地の大部分が初期に発掘されたために情報が部分的で、集落で得られた成果との統合がうまく進んでいない。ここから、墓地の発掘記録を再整理し、なおかつ集落で得られた調査の知見を踏まえて検討することが重要となる。ナカダ文化期の研究で主要な研究目的となる社会構造の発展は、墓地と集落では違ったかたちで現れることが想定されるが、両者の対照は必要である。現状では墓地の記録を再整理・再分析して、既存の知見を拡充することが求められる。

#### 4.3. ナカダ遺跡周辺遺跡での考古学的調査

ナカダ地域では、ナカダ遺跡以外にも複数の調査が実施されてきた。20世紀初期にフランスのL.ロルテ(Lortet)とC.ジェヤール(Gaillard)が踏査を実施し、複数の集落と墓地を記録した(Lortet and Gaillard 1909: 37-8)。

バラス付近では、1894-5年のクィベルらの調査ののち、1900-1年にかけて、G.A.レイズナー(Reisner)に委嘱されたA.M.リュスゴー(Lythgoe)らアメリカ隊によるナカダ文化墓地遺跡が発掘調査された(Podzorski 1988; 1994; Reisner 1936)。この遺跡は今日バラス北遺跡と呼称されるが正確な位置は不明である。この発掘によってナカダIC期からIIIB期に至る254基の墓が発掘された。本調査の結果は、長らく公刊されず、ピートリーらの発掘による出土品との比較も不十分だったが、1994年にP.V.ポズルスキー(Podzorski)が整理調査の結果を博士論文として公刊した(Podzorski 1994)。ピートリーの調査以外では、ナカダ地域の遺跡で唯一詳細がわかる事例である。

1968年にアメリカのサザン・メソジスト(Southern Methodist)大学のF.ウェンドーフ(Wendorf)らは、今日のナカダから北西に3km弱、今日のエル=ハッタラから西に2.5kmほどの場所で、E71C1と呼称するナカダ文化

期の小規模な遺跡地点を発見した (Wendorf and Schild 1976: 100, Fig. 54)。詳細は不明だが恐らく集落址と考えられ、ピートリー分類の B 土器を主体に R 土器などを採集した。この採集資料の一部は現在大英博物館 (BM EA76981-76983) に所蔵されている。後述のハッサンらが踏査した Kh.6 地点と近接し、同一地点の可能性もある。

ハッサンらは、前述の「ナカダの先王朝」プロジェクトで低位砂漠を中心に調査し、低位砂漠の縁辺部で複数の遺跡地点を確認した。これらの遺跡は今日のナカダの北側に近在するエル=ハッタラ (El Khattara: Kh) の名前を冠して付番されるか、踏査の基準線とした送電線鉄塔の番号に基づいて PWT (Power Cable Tower) と付番された (Hays 1976)。踏査の結果、集落址 7 地点 (Kh.1-7)、墓地 6 地点 (Kh.1-3・PWT.101・PWT.112・PWT.168) が発見された。ほかにも集落址 6 地点、墓地 3 地点が記録されたが、名称や詳細は不明である。これらの遺跡地点の所在地は図 4.2. を、その基礎情報は表 4.1. を参照されたい。集落址のうち、Kh.2 地点を除く Kh.1 地点と Kh.3-7 地点の 6 地点の時期は、いずれもナカダ I-II 期と推定され、規模としては Kh.3 地点が 30000 m<sup>2</sup>、Kh.4 地点が 20000 m<sup>2</sup>、Kh.7 地点が 2100 m<sup>2</sup> である (cf. Hendrickx and van den Brink 2002: Tables 23.1-2)。Kh.1-2 地点と Kh.5-6 地点の規模は、地元農民による土取りなどの後世の人類活動などにより遺跡の破壊が進み、実態は不明である。Kh.2 地点は、これらナカダ文化期初期の集落址とは異なり、ナカダ III 期初期の集落であるとされる。Kh.2 地点・Kh.3 地点・Kh.7 地点では発掘調査が行われたが、詳細が明らかでない。

一方、墓地での発掘調査は Kh.2 地点・Kh.3 地点で行われた。Kh.2 地点は 9 基の墓から構成されるナカダ III 期の小規模な墓地で、複数の部屋を有するマスタバ墓 (Mastaba/multi chambered tombs) と単室構造の日乾レンガ壁で囲まれた墓 (brick-lined single-chambered tombs) の 2 種類の墓があった (Hassan et al. 2017b)。うち 3 基が発掘調査され、いずれも築造から短期間で盗掘され、調査時には墓の表土には時期判定が可能なものも含む大量の土器片や泥レンガ片、縄の圧痕が残る粘土片、炭化木片、石製容器片、動物骨、および人骨が散乱していた (Hassan et al. 2017b)。発掘された 3 号墓は長辺 2.6 m・短辺 1.6 m・最大深度 1.78 m の単室矩形の墓で、泥レンガや土器、封泥とされる文字が押印された 12 点の粘土片が見つかった。封泥に関しては、調査者ハッサンらが P.カプロニー (Kaplony) に解読を依頼し、うちの 1 点は「金製の物品」と判読した。これに対し、東部砂漠産の金がワディ・ハマートを経て搬入されるナカダの特性を反映すると評価された (van Wetering 2012)。3 号墓は、ナカダ III 期の墓としてはやや優れた規模・構造を持つが、物品流通を示唆する出土遺物が含まれている点が非常に興味深い。Kh.3 地点での発掘では集落内に子どもの墓が 1 基発見されたのみである (cf. Holmes 1989b: 194)。

さらに、PWT.112 地点では 4.2.3. で記したド・モルガンらが発掘したナカダ IIIC1 期のマスタバ墓 2 基が再発見された (van Wetering 2012)。ハッサンらは、PWT.112 地点にて墓の計測を行い、長辺 54 m、短辺 27 m の規模を有した墓をド・モルガンのマスタバ墓と再特定するに至った。この再発見は、ド・モルガンの出版した地形図との照合からも支持された。この時に作図されたマスタバ墓の平面図 (van Wetering 2012: Fig.2) と、ド・モルガンやボルヒャルトが提示した平面図 (Borchardt 1898: Tafel XV; de Morgan 1897: Fig. 518) は大きく異なっており、特にド・モルガンらが提示した小規模な副室からなる外郭部とそれらより大型な 5 つの主室からなる内郭部からなるマスタバ墓の構造は、ハッサンらの作成した平面図には見られない。19 世紀末以降、ハッサンらの調査までに

起こった人為的・自然的な改変の可能性を割り引いても 2 者の平面図には大きな隔たりがある。この要因として、本マスタバ墓が調査された時期を含む、古代エジプト研究の初期には、建造物が実際よりも規則的かつ直線的に作図される傾向にあったことが示された (van Wetering 2012: 95)。

以上、「ナカダの先王朝」プロジェクトは、ナカダ地域の広範囲にナカダ文化期の遺跡が存在することを示した点、および過去に調査・出版された墳墓を実地で再検証した上で墓構造を捉え直した点に大きな意義を持つ。直近ではイギリス隊が Kh.3 地点の再踏査を行い、さらなる調査の実行可能性を検討した (Egypt Exploration Society 2018)。

このほか、ベルギー隊によって 2001 年 2 月から 3 月にかけて行われたナカダからおよそ南に 3.5 km のダンフイク (Danfiq) 周辺での踏査では、1985 年の踏査で発見されて発掘調査が行われた旧石器時代遺跡であるエル=アバディーヤ (el-Abadiya) 遺跡第 1 地点 (Vermeersch et al. 2000) に加えて、先王朝時代の遺跡地点である同第 2 地点と旧石器時代の遺跡である同第 3 地点が発見された (Vermeersch et al. 2004)。エル=アバディーヤ遺跡第 2 地点は、ナカダ I 期の集落址であるが、遺跡範囲の大半が耕地化を目的とした削平によって失われていたために、正確な規模は不明である。本地点では、耕地化の工事が完了する前に、遺跡の評価を目的にした小規模な緊急発掘調査がなされ、結果として、遺構は 2 か所の発掘区から炉址計 2 基、およびピット 1 基が検出され、石器や土器片、動物骨、炭化物などの遺物が発見された。これらの遺物のうち、大部分は遺構外からの出土であったとされるが、生活面と思われる面に据え置かれた大型甕の底部も発見された。ただし、住居址などの痕跡は発見されていない。発掘者によれば、埋没後の擾乱が激しく、有意な遺物の垂直・水平分布は認められなかったとされるが、集落址に典型的な遺物の組成ではあったとされる (Vermeersch et al. 2004)。またこの調査では、2 つの試料からそれぞれ較正年代で 3980–3770 cal BC、3790–3630 cal BC の値が得られており、この値は WSU 隊がナカダ I-IIA/B 期に位置付けられる集落址から採取し、測定した年代の結果と概ね整合するという。遺跡立地や遺物組成を踏まえると、エル=アバディーヤ遺跡第 2 地点は、WSU 隊によって踏査された同時期の集落と類似した遺跡地点と言える。

エル=アバディーヤ遺跡第 2 地点の存在や、3.2.6. で記した WSU により発見・調査された Kh 地点群の存在に鑑みると、ナカダ I 期のナカダ地域ではナイル河の氾濫原の縁辺部に沿って、およそ 1–2 km 程度の間隔を持って集落が点在したことが読み取れる (図 4.2.)。

ナイル河を挟んで対岸のキフトにはコプトス (Coptos) 遺跡が所在し、中王国時代第 17 王朝期 (およそ紀元前 1580–1550 年) の神殿址の下部から、ナカダ文化期の土器 (Adams 1986) や、ナカダ III 期のミン (Min) 神を祀った神殿址が発見された (Petrie 1896; Kemp 2000)。

ナカダ遺跡から遠隔になるものの、20 km 南南東のナイル河東岸には墓地遺跡のホザム (Khozam または Khizam) 遺跡が所在する。ホザム遺跡は古くに調査された遺跡で、1880–5 年に G. マスペロ (Maspero) が (Maspero 1887)、次いで 1899 年に É. シャントール (Chantre) が発掘調査した (Chantre 1899a; 1899b; 1907; 1908)。ホザム遺跡には、およそ 300 基程度と、400 基程度の墓で構成される 2 つの墓域が存在し、両墓域の使用期間は、ナカダ I 期

から IIIB 期であるとされている (Hendrickx 1992)。ナカダ遺跡・バラス遺跡について規模が大きい。シャンツールは 140 基および 210 基の墓を発掘したとされるが、最終報告が公表されていないため発掘調査の詳細は不明である。いくつかの装飾土器が資料報告された (Keimer 1935)。先王朝時代の墓地は、1958 年にカイザーとブツァーが訪れた時点ですでに耕作地に囲まれており (Kaiser 1961: 13-14)、その後の耕作地の拡大などによって 1980 年には破壊され (Shehata 1989)、今日ではほとんど残存していない (Ejsmond et al. 2015)。

ナカダ遺跡の対岸に開口するワディ・ハママートの上流では、1940 年代に F. デボノ (Debono) が踏査によりラケイタ (Laqeita) にて少なくとも 3 ヶ所の遺跡地点が発見した。これらはナカダ III 期の集落址を主体とする (Debono 1951)。また、岩壁画も多数確認された (Morrow et al. 2010)。しかし、それ以外の III 期以前の痕跡は乏しい。

#### 4.4. ナカダ地域とその周辺の考古遺跡のまとめ

以上、ナカダ地域と関連する主要なナカダ文化期の遺跡とその概要を記した。ナカダ遺跡は地域の中核的な遺跡だが、それ以外にも多くの遺跡が存在することが示された。墓地の規模を考慮すると恐らくバラス遺跡も恐らく准中核的な集落だったと考えられる。ナカダ地域における遺跡の消長を考慮すると以下ようになる。集落遺跡の所在地や時期を考慮すると、ナカダ I 期には 1-2 km ほどの間隔で小規模な集落が存在し、恐らく墓地も各集落に付随した。II 期以降はそれらの集落が廃絶されてナカダ遺跡や恐らくバラス遺跡も中核化し、墓域も大規模化した。III 期になると、中核遺跡の活動が低下し、Kh.2 地点などの小規模な墓地を伴う集落が一時的に存在した。

以上のうち、特にナカダ I 期から II 期の集落配置の変化は地域レベルでの中心化によるとされる (Kemp 2006: 73-8; Wilkinson 2000)。これは、ナカダ地域で複数の調査が過去に行われたために、上エジプト地域では数少ない遺跡地点が綿密に把握された地域だからこそ可能な見方である。本論文では、このナカダ地域の特性を考慮しつつ、地域の中核遺跡であるナカダ遺跡の墓地の検討を試みる。

## 5. 資料と方法

本章では、本論文で行う分析に共通する資料と方法の基本方針を提示する。この基本方針として、研究の基盤となるナカダ遺跡の資料の情報、分析で共通する規則を取り扱う。各分析で適用される資料の数については、各章で確認されたい。

### 5.1. 資料：ナカダ遺跡出土資料の基本情報

#### 5.1.1. 未公開記録とその特徴

本論文で行う分析は、ナカダ遺跡の発掘時にピートリーら発掘者 5 人によって作成された未公開のフィールドノートに記載事項を主要な資料とする。フィールドノートは、発掘調査で得られながらも報告書 (Petrie and Quibell 1896) に掲載されなかった成果を検討するために不可欠である。しかし、フィールドノートにはいくつかの問題点も存在する。本項では、フィールドノートの特徴を述べ、実際に分析の基盤とするデータについて記述する。

ナカダ遺跡のフィールドノートは合計で 11 冊が現存する。所蔵先のピートリー博物館が定めたノート番号は 69-72 および 135-141 である。収録されている墓の数は合計で 1004 基に上る。これは少なくとも 2116 基とされるナカダ遺跡の墓数の 47.4% で、ナカダ遺跡で発掘された墓の半数のデータは散逸により失われた。

フィールドノートの記載は、基本的に墓 1 基ごとに行われた。各記載は、墓の規模 (長軸、短軸、深さ)、墓の平面形、被葬者の位置、被葬者の埋葬形態、被葬者の性別と年齢、副葬品の位置、副葬品の種類と数、特記事項からなり、墓の最も基本的な属性が概ね言及されている。しかし墓によってはこれらのうちのいずれかが欠けている事例も存在する。墓によっては被葬者や副葬品が発見されなかった場合もあり、そうした場合には、該当箇所を指して「盗掘 (plundered)」・「擾乱 (disturbed)」・「なし (nothing)」などの簡単な言及がなされている。覆土から出土した遺物に関しても、「墓の底面から何フィート」といったかたちで垂直の出土位置情報が記録されており、墓の底面から出土した遺物とは明確に区別して取り扱われている。ただし、墓坑のエレベーションに関する情報はわずかな事例を除いてほとんど記録されていない。この点は、ノートに記された墓坑の平面形が、墓坑の上場か下場かなのが不明瞭なことにも繋がるが、ピートリーは床面出土遺物を重視していたため恐らく下場を示すと考えられる。また、覆土から出土した遺物の水平的な出土地点に関してはほとんど記録されていない。また遺物の位置とおおよその外形は俯瞰図のかたちで示されている一方で、遺体の描写に関しては、解剖学的な見地を踏まえたものになっていない。ノートの記録者は複数人おり、遺体の描写は調査担当者によって異なっている。ピートリーは比較的綿密に墓の底面で検出された遺体の部位を記録し、時には遺体を被覆した革製・植物製のマットの描写も描き込んでいる一方、クイベルによる描写は簡潔である。したがって現代の微細図の水準と比べると正確さに欠ける。ただし俯瞰図から大まかな欠損部分や検出状況の把握は可能なので、墓の擾乱の有無などの最低限必要な情報を得ることができる。なおナカダ遺跡の調査写真は残存する (e.g. Spencer 2011) もの、量としてはわずかであり検出状況を確認する手段としては用いえなかった。

また墓別土器型式一覧表は、2.2.1.2. で述べたように各墓に納められたピートリー分類の土器系式を記しており、各墓の時期を特定するための資料として用いた。

### 5.1.2. 分析対象の墓地と墓の数

本論文で分析対象とする墓地は、大墓地東地区・同西地区・同南地区・T 墓地・B 墓地である。これらの墓地の母集落は、大墓地の3地区とT 墓地はサウスタウン、B 墓地は Kh.4 地点とされる。同じくサウスタウンを母体とする G 墓地に関しては極めて小規模な墓地かつ情報が不十分なため分析対象としない。ピートリーが区分しなかった大墓地の3地区に関しては、表 5.1.に各地区の構成墓番号を構成墓数とともに示した。この表の作成にあたり、ピートリーが作成した墓坑分布図 (Petrie and Quibell 1896: pl. LXXXVI) と先行研究での言及 (Bard 1994: 87; van Wetering 2017: 523) に依拠しつつ、新たに墓坑分布図と対照してその妥当性を確認した。バードの分析で大まかに分割されたのみだった墓番号を修正し、よりピートリーらの報告と事実記載に基づいたかたちへと近づけているため、分析結果を導く土台としてより適切になると期待される。ただし、ピートリーの墓坑分布図には問題もあり、例えば墓番号の重複が11件存在する。分布図上に記載されている重複は実際にはこの数よりも多いものの、フィールドノートに記載された部分的な墓坑分布と、各墓の記載に記されている近傍の墓との関係を参照しつつ、修正を試みた。ただしこれらの作業を経ても、重複した番号は完全には整理できなかった。

表 5.1. ナカダ遺跡大墓地東地区・西地区・南地区の構成墓番号と墓数 (cf. Bard 1994; van Wetering 2017: 523)

大墓地	墓番号	墓の数
東地区	431, 481, 500-1195, 1285, 1298, 1301-1336, 1344-1919	1312
西地区	46, 56-430, 432-480, 482-499, 1200-1284, 1286-1297, 1299, 1337-1343	548
南地区	1-45, 47-55	54

各墓地の使用期間は、ヘンドリクス編年では大墓地東地区がナカダ IA-III B 期、大墓地西地区が IA-III C1 期、大墓地南地区が IIA-III A2 期、T 墓地が IIB-III B 期、B 墓地が IB-II D1 期である。

5.1.1.ではフィールドノートに収録された墓の数は1008基としたが、本論文ではノートは散逸したものの発掘報告書 (Petrie and Quibell 1896) には記載された51基を加えて合計で1059基を定量的な分析の対象とした。各墓の詳細は付編2を参照されたい。分析の基盤となる墓地別の分析対象墓数は、大墓地東地区が635基、大墓地西地区が230基、大墓地南地区が53基、T 墓地が51基、B 墓地が93基である。ただし実際には、後出の5.2.1.で設定する分析属性によって条件を満たす墓の数は変動するため、具体的な資料の数に関しては後章に記述を譲る。

### 5.1.3. 定量的な分析のため副葬品の区分とその点数

副葬品は定量的分析の主要な資料である。ここでは定量的分析の基盤となる副葬品の分類と点数を記載する。ナカダ文化の埋葬は厚葬を特徴の一つとしているため (cf. Midant-Reynes 2000a; 2000b; 2003; 高宮 2003)、墓から発見される副葬品の種類は多岐に亘る。例えば、副葬品の種類には、壺や鉢など様々な器形の土器や石製容器、パレットと呼称される顔料すりつぶし用の扁平な石製品、ナイフ形石器や石刃・斧などの石器、櫛やヘアピン・護符などの象牙や角などの原材料を含む骨・牙製品、ビーズ・ペンダント、メイスヘッドやその模造品といった

石器やパレット以外の石製品などがある (Petrie 1920; 1921)。また、長距離搬入品のラピスラズリを用いた石製品や装飾品 (Bavay 1997; Hendrickx and Bavay 2002)、あるいは円筒印章 (e.g. Honoré 2007) などの希少品も出土した。したがって分析に先立ち、副葬品を以下に示す区分にまとめた。

ナカダ文化の副葬品は、7種類12細分種類に分けた。7種類の内訳は「土器」、「石製容器」、「パレット」、「石器」、「ビーズ・ペンダント」、「骨・牙製品」、「そのほか」である。このうち「そのほか」以外の6種類は出土頻度が高い主要な副葬品である。これら6種類のいずれにも当てはまらない出土頻度が少ない遺物は「そのほか」に一括した。なお骨・牙製品には様々な器種が含まれており (e.g. 高宮 1994; 張替 1990)、象牙製品などの呼称が一般的だが、ここでは象牙製・カバ牙製・骨製・亀甲製の遺物を含んだ上で、一括して「骨・牙製品」と呼称した。この理由は、原材料に違いはあっても製品としては同一または類似しており、かつ原材料の違いにも関わらず遺物の用途や機能は共通するため、素材を基準に区分するよりも遺物の形態を基準に区分する方が有効だからである (cf. Hendrickx and Eyckerman 2011: 497)。またこれらの原材料が広義には全て骨に属することと、しばしば象牙と骨の同定が混同されてきた実質的な側面にもよる。例えば、ナカダ遺跡出土遺物を可能な限り実見したバウムガルテル (Baumgartel 1970) と、アシュモレアン博物館の所蔵資料でバウムガルテルと同一の資料を目録化したペイン (Payne 1993) とでは見解が異なる場合が多い。なお、「そのほか」には円筒印章なども含まれる。

細分種類は土器と骨・牙製品に設けた。土器は「壺・甕」・「坏・鉢」・「W土器」・「装飾土器」の4つに細分した。W土器や装飾土器に該当するのであれば、壺・甕または坏・鉢であっても前者に含めた。骨・牙製品は「骨・牙製品1類」・「骨・牙製品2類」・「骨・牙製品3類」の3つに細分した。骨・牙製品1類には櫛・ピンなどの装飾品が、骨・牙製品2類には鏃・容器などの道具類が、骨・牙製品3類にはこれらに該当しないものを含めた。

定量的な分析の対象となる副葬品の総点数は9453点である。内訳は、土器は7653点 (81.0%)、石製容器は176点 (1.9%)、パレット283点 (3.0%)、石器283点 (3.0%)、ビーズ・ペンダント154点 (1.6%)、骨・牙製品355点 (3.8%)、そのほか588点 (6.2%) である。さらに細分種類別の数に関しては、土器は「壺・甕」が5822点・「坏・鉢」が1182点・「W土器」が339点・「装飾土器」が310点で、骨・牙製品は「骨・牙製品1」が230点・「骨・牙製品2」が79点・「骨・牙製品3」が43点である。なお墓地別の対象副葬品数は、大墓地東地区が5112点、大墓地西地区が2469点、大墓地南地区では609点、T墓地では734点、B墓地では568点である。稀に覆土からの出土が報告された明らかな混入遺物は合算の対象から外した。

## 5.2. 方法

### 5.2.1. 分析対象属性の設定

分析では、ナカダ遺跡の発掘調査から得られた埋葬属性 (mortuary attribute; 以下、属性と表記する) に関する情報から傾向や特徴を観察する。墓から得られる属性は多様で、研究対象とする墓地から属性を把握し、定義することが分析の出発点となる。この属性は研究者によって定義が異なり (e.g. Parker Pearson 1999; 倉林 1988)、対象とする墓地資料の特性に合わせた設定が不可欠となる。例えば、墓の発掘から得られた情報量が報告書などから多く得られる日本考古学の場合では、埋葬された人間の死亡時点を基準にした「生前付加属性」と「死後付加



属性」に分割した属性区分の事例が存在する（山田 1997）。詳しい記述は引用文献に譲るが、この 2 つの属性には身体加工や墓の構造・副葬品・儀礼の痕跡なども当てはめられた。また「死後付加属性」については、葬儀を行う側の視点に立った「可視属性」と「不可視属性」に分け、行為としての葬儀の側面も属性の設定に加えられた。これは考古遺跡から得られる情報を最大限に汲み取ろうとした設定の一例である。一方で、3.1.1.で述べたように今日の埋葬考古学研究の先鞭をつけた北米の研究事例では、人間関係地域別ファイル（HRAF）から民族事例を抽出した上で属性を設定することが多かった（e.g. Binford 1971; Carr 1995）。例えばカーは民族事例から得られる埋葬に関わる情報を、1. 埋葬儀礼とその様式を司る変数として「応答変数（Response Variable）」と 2. 潜在的な社会的、観念的・宗教的（philosophical-religious）、状況的、物理的、そして環境的な決定因子が含めた「独立変数（independent Variable）」の 2 つに大別した。その上で、反応変数に 43 項目を、独立変数に 29 項目を設定した（Carr 1995）。民族事例を考慮した場合、遺跡には残らない属性も含まれており、考古資料にのみ依拠するよりも格段に多い属性が設定される傾向になる。HRAF にも欠落やバイアスは含まれるものの、元来あったはずの墓制の全体像により近いのは民族事例であり、遺跡から得られる考古学的な情報に依拠した区分が元来の全体像に対して網羅的でない点が浮き彫りにされる。ただし過去の埋葬研究で指摘されている通り（e.g. Hodder 1982; Ucko 1969）、埋葬行為は集団ごとに異なり、民族事例から得られる属性が必ずしも研究対象の考古遺跡で営まれた埋葬行為に当てはまるとは限らない。民族事例から得られる属性は有用だが、最終的にはそれらを参考にしつつ考古学者が自身の持つ情報から属性を設定する必要がある。

こうした点も踏まえ、5.1.1.1.で記した現存するナカダ遺跡の諸記録の記載状況から抽出できる情報を整理して以下の属性を定めた。具体的には、I. 相対編年、II. 墓の規模（ $m^2$ ）、III. 墓の平面形状、IV. 墓の構造、V. 被葬者の人数、VI. 被葬者の性別と年齢、VII. 埋葬様式、VIII. 各墓から出土した副葬品総点数、IX. 各墓から出土した副葬品種類数の合計 9 属性を定めた。上記の日本考古学の事例や HRAF から抽出できる事例と比較すると、基本的な属性に留まることは否めないが、ナカダ遺跡の発掘に関わる記録には不十分なため、利用可能な属性はこれら 9 つが限界である。以下に、各属性の詳細を示す。

I. 相対編年は、2.2.4.で記したアビュドス編年を基にした土器編年を採用する（図 2.5.）。この時間軸では、各墓地の使用期間は、大墓地東地区が Ia1-IIIb 段階、大墓地西地区が Ia1-IIIc 段階、大墓地南地区が Ib1-IIIa2 段階、T 墓地が Ib1-IIIb 段階、B 墓地が Ia2-IIb 段階となる。なお、アビュドス編年を構築したハートマンはナカダ遺跡で検出された墓 333 基分の時期を求めた（Hartmann 2016: 339）が、彼女が時期を求めた段階では 2.2.1.で記した土器型式一覧表が未公表だったため組み込まれていない。本論文で土器型式一覧表の記載事項を加味して改めて各墓の時期設定を行ったところ、5.1.2.で記した 1059 基のうち 825 基の墓に時期を与えることができた。

II. 墓の規模に関しては、面積（ $m^2$ ）を算出した。深さに関する情報を持つ墓は限られるため、体積（ $m^3$ ）は算出しなかった。また規模は、III. 墓の平面形状の分類に基づき、「長方形・隅丸長方形」は長辺×短辺、「楕円形・円形」は、楕円形は長半径×短半径× $\pi$ （ $\approx 3.14$ ）、円形は半径×半径× $\pi$ （ $\approx 3.14$ ）で算出した。「そのほか」については、形状に合わせて最適な算出方法を適用した。なお単位にメートル法を採用する。ピートリーらによるナカダ遺跡の発掘では長さの単位にヤード法が用いられ、インチ（in）やフィート（ft）で表された。しかしヤ

ード法は、今日の一般的でないため、メートル法に換算する必要がある。本論文では、国際単位系 (SI) で定められているところに基づき、フィールドノートなどで最も頻出するインチに関しては、 $1 \text{ in} = 25.4 \text{ mm}$  とした。 $1 \text{ in}$  の 12 倍に当たる  $1 \text{ ft}$  は、 $304.8 \text{ mm}$  として換算して分析で計量した。ヤード法に関しては、1959 年に国際ヤード・ポンドが制定されるまで使用地域によって細かな違いがあった。しかし例えばイギリスで用いられていたインチ ( $1 \text{ in} = \text{ca. } 25.3998 \text{ mm}$ ) と国際インチとでは、 $1 \text{ in}$  あたり  $0.002 \text{ mm}$  以下程度の違いでしかなく、遺構などの大きな対象に対しては、実際上の問題は生じていないため、そのまま国際ヤード・ポンドを本論文では採用した。本論文では、基本的に規模に関しては  $\text{m}$  で表すこととする。

III. 墓の平面形状は、「長方形・隅丸長方形」、「楕円形・円形」、「そのほか」に分類した。フィールドノートは手書きなため、不明瞭な形状の記録もあるが、辺の平行度合を見ながら適宜これらに分類した。

IV. 墓の構造は「単純土坑墓」、「ステップ墓」、「接続・複合墓」、「日乾レンガ使用墓」に分類した。単純土坑墓は素掘りの土坑を掘削して設けた墓を示す。ステップ墓は単純土坑墓の派生系で、墓坑底部長辺の一方を深く掘り込み埋葬室を設けた墓を指す。接続・複合墓は単純な切り合いでなく、先行して存在する土坑墓に別の土坑墓が添えられるように接合された事例を指す。日乾レンガ使用墓は、その名の通り日乾レンガを使用した墓を示す。

V. 被葬者の人数は、「1 人」、「2 人」、「3 人」、「4 人以上」に分けた。ナカダ文化の墓は単葬墓が主体だが、低い割合で合葬墓も確認される。3 人以上の合葬墓の事例は特に限られるが、例外も含めて捉えるためにこの分類を定めた。呼称としては、1 人が埋葬された墓を「単葬墓」、2 人以上が埋葬された墓を「合葬墓」とする。

VI. 被葬者の性別と年齢のうち、性別は「男性」・「女性」・「性別不明」・「未測定のため情報不明」の 4 つに分けた。この分類は、人骨の計測による形質人類学的分析を出土遺体に対して行った E. ウォーレン (Warren 1897)・C.D. ファーセット (Fawcett 1902) の研究から参照した。ウォーレンとファーセットはともに分析の結果を一覧表のかたちで提示しており (Warren 1897: 192–212, 220–226; Fawcett 1902: Table I)、その記載内容を参照した。初期の調査における鑑定結果には謝りがある点が指摘された場合もある一方 (Mann 1989)、大きな謝りはないとの説もある (Beuthe 2013) が、ここでは便宜的にウォーレンとファーセットの記録に従った。彼らが計測した遺体は全体の一部だが、規模の大きなデータが提示されている点が特色である (e.g. Warren 1897: 192)。なお出土遺体の性別・年齢判定にあたり、ウォーレンは頭蓋骨を主たる資料に腕や足の骨の計測結果を加えたのに対し、ファーセットは主に頭蓋骨の計測のみによっており、資料と手法に相違点がある。発掘者も現場で遺体の性別を判断しているが、ウォーレンら人類学者の見解が相違する場合には、より専門的な分析を実施したウォーレンまたはファーセットの見解を採用した。なおウォーレンとファーセットの計測結果は基本的には相補的で、どちらか一方で性別不明とされた遺体が、もう一方では明確に同定された事例も見られた。またどちらか一方のみが性別を計測・同定した遺体も存在し、この場合では両者は完全な相補関係にある。これは計測箇所や手法上の違いに起因するためと推察される。しかし中には同一の資料の計測に対して両者の見解が対立する場合も 13 例見られたが、見解の相違が生じた場合は、より後発のファーセットの見解を採用した。年齢に関しては、現代の精度から著しく劣るものの、記録上の問題から便宜的に第二次性徴期以降を「成人」、それ以前を「子ども」に大別した。

VII. 埋葬様式は、「一次葬」・「改葬」・「追加埋葬」に分けた。ナカダ文化の埋葬様式は基本的に一次葬だが、改

葬などの例外も存在する。この例外に対処するために、以上の分類を採用した。追加埋葬とは、一回で葬送行為が終了する一次葬が同一の墓に数度に渡って反復されることで遺体が追加されていく、一次葬の亜種である。

VIII. 各墓から出土した副葬品総点数の計数にあたり、遺物を 1. 「それ自体で完結する遺物」、と 2. 「複数の構成物からなる遺物」、の 2 種に区分した。1. に分類される遺物に関しては、1 個の遺物そのまま 1 として計量される一方、2. に分類される遺物に関しては、1 つのまとまりを 1 として計量する。5.1.3. で示した副葬品の分類の土器や石製容器・パレット・石器・骨・牙製品・そのほかの一部は、1. に分類される。一方で、2. にはビーズ・ペンダントや、フリント円礫などのそのほかの一部が含まれる。2. は、複数の構成物から構成されるビーズはひとまとまりのものを 1 点として計量し、200 個のビーズから構成されようとも 1 点として計量する。仮に発掘者の記述により、ある墓から 1 束分のビーズが複数出土していると確認できれば、当該の墓からビーズをそのまとまりの数の分だけ計量する。この措置は、2. に分類されるビーズ以外の他の種類の遺物に対しても同様に適用する。例えば、墓から頻繁に出土する顔料磨り潰しなどに用いられたフリント円礫が複数点が出土する場合も 1 つの出土とした。この分類の背景には、異なる性質の副葬品を定量的に扱うために標準化する意図がある。この調整なしに総点数を分析した場合、実態と異なる結果が出る可能性があるため (cf. Brown 1981)、この手順を設けた。なお、ノートや発掘報告書で、数が「複数」・「3 点以上」などの曖昧な記述に留まる副葬品に関しては、記述が指示する最も低い点数で当該の副葬品の量を計数した。例えば「3 点以上」であれば「3 点」とし、「複数」なら「2 点」とした。これらは実際の数よりも小さくなる恐れはあるが、副葬品を過剰に加算しないための便宜的な措置として講じた。ただし、例えば「複数」との記述の一方で博物館資料などで該当する副葬品が確認できた場合はその点数に準拠するなど、現状で得られる情報を最大限組み込み本来の数に近づけるよう努めた。

IX. 各墓から出土した副葬品種類数は、5.1.3. で示した分類に則って計量した。

## 5.2.2. 分析の手順と方法

### 5.2.2.1. 各属性の単独分析

まず、上記の属性のうち、II. 墓の規模 (m<sup>2</sup>)、III. 墓の平面形状、IV. 墓の構造、V. 被葬者の人数、VI. 被葬者の性別と年齢、VII. 埋葬様式、VIII. 各墓から出土した副葬品総点数、IX. 各墓から出土した副葬品種類数をそれぞれ個別に分析した (第 6 章)。これら全ての属性の分析で、概況の把握のために対象墓を I. 相対編年で定義した時期別に分類し、その時期ごとの特色を看取して通時的に並べることでその推移を把握した。なお、これらの属性の推移を把握する背景には、単にそれぞれの属性の通時的な様相を把握するためだけでなく、次の手順で示す属性のクラスター分析の結果を補完し、解釈する意図も含む。

時期に関しては、アビュドス編年を基にした本論文で用いる 15 の細分段階をまとめた基本段階で属性を分析する。この基本段階は、「Ia1-Ia3 段階」、「Ib1-Ib2 段階」、「IIa1-IIa2 段階」、「IIb 段階」、「IIIa1-IIIa2 段階」、「IIIb 段階」、「IIIc1-IIIc2 段階」の 7 段階である。移行期の I/II 前半段階と I/II 後半段階は、その時期的性質から前後の段階である Ib1-Ib2 段階か IIa1-IIa2 段階にまとめた。ある程度時期幅をもち、I/II 前半段階か I/II 後半段階のいずれかを推定段階に含める場合は、どちらかにまとめた。例えば、Ib2-I/II 前半段階の墓は Ib1-Ib2 段階にまとめてい

る。この時期幅を持たせた時間枠の適用により、細分段階が不明な墓であっても少しでも墓数を増やすためにこの処置を試みた。バードが行ったI期、II期、III期の3期のみの区分(Bard 1994)よりは鋭敏に標本から得られる推移を看取できることが期待できる。なお、墓地全体の傾向を把握するために、当該墓地の使用期間全てを含めた分析も含めた。以下に行う分析はすべてこの時期設定を適用する。「段階」という言葉を用いる場合は「基本段階」を示し、細分段階を用いる場合は改めて言及することとした。

その上で、II. 墓の規模 (m<sup>2</sup>)、VIII. 各墓から出土した副葬品総点数、IX. 各墓から出土した副葬品種類数に関しては、各時期における属性の平均値を算出し、加えて標本間のバラツキを把握するために最大値・最小値を提示するとともに、標準偏差の一種である不偏分散の平方根を算出した。標準偏差は、標本全てが母集団と合致するならば標本標準偏差を算出するが、ナカダ遺跡の場合は記録の散逸により墓地を構成する全ての墓が明らかでないため、標本標準偏差の算出は不適である。また、ナカダ遺跡で発掘された墓の現存データは、結果として母集団から値を抽出されたかたちとなるが、欠落した墓の詳細は不明なため母集団の持つ性質が明らかでない場合に算出する母標準偏差の産出も不適である。そのため母集団の持つ性質が明らかでない場合に代用される不偏分散の平方根を算出した。また、各時期の段階で異なるデータを比較するため、この不偏分散の平方根を平均から割ることで変動係数を求め、その通時的な値の推移を検討した。変動係数は値が大きければ大きいほど、そのデータを構成する標本の差異が大きいことを意味する。

III. 墓の平面形状、IV. 墓の構造、V. 被葬者の人数、VI. 被葬者の性別と年齢、VII. 埋葬様式に関しては、それぞれの数と割合を提示して通時的な傾向を看取した。

#### 5.2.2.2. k-means 法による非階層的手法を用いたクラスター分析

##### 5.2.2.2.1. 方法の概要

各属性の概況を把握した上で、第7章では第2段階として統計ソフト「R」を用いたクラスター分析を実施した。クラスター分析には、最短距離法や最長距離法、ウォード法といった階層的手法と k-means (k 平均) 法などの非階層的手法が存在するが、本論文では非階層的手法である k-means 法で各墓の属性のクラスタリングを試みる。これは、階層的手法が多数の標本の処理にはあまり向いていないからである。階層的手法では、標本間を近似度順に繋げた系統図を出力するが、標本のサイズが大きい場合には系統図が複雑になって分割が難しくなるなどの可能性が生じるため不向きである。従って階層的手法をとる場合には、標本のサイズは小さい方が望ましい。一方で、非階層的手法は標本数が多い場合に有効である。本論文で対象とするナカダ遺跡の分析対象に関しては、例えば大墓地東地区は 600 基を超えており、非階層的手法がより有効である。k-means 法は非階層的手法で最も一般的で、クラスタリングの結果を直感的に示すのに適すほか、計算処理が比較的簡便なことが利点である。

k-means 法による分析対象とした属性は、II. 墓の規模 (m<sup>2</sup>)、VIII. 各墓から出土した副葬品総点数、IX. 同副葬品種類数である。クラスター分析は、このうち VIII と IX を用いた分析と、3 属性全てを用いた分析の計 2 段階を行う。この理由は、5.1.1. で述べたとおり、ナカダ遺跡の記録に残っている情報の不完全さにある。ナカダ遺跡の場合は、全ての墓に全ての属性の情報が揃っているわけではないため、対象属性を増やせば増やすほど分析に組

み込むことが可能な墓の数が減少する。墓の数が減少すると分析結果が限定的になるため、対策が必要となる。そこで、合致する事例が多い2つの属性を対象にしたクラスタリングと、その結果を比較するために3つの変数を対象にしたクラスタリングの2段階をとった。1段階目の組み合わせは、社会的差異を明らかにする上で有効な属性であり、先行研究でも対象とされた (e.g. Bard 1994)。この2つの属性は不可分な組み合わせなので、該当する資料の数も確保できる。2段階目に加える墓の規模も社会的差異を示す重要な属性である。考古学一般では、墓の規模も被葬者の社会的差異を反映することがテインターによって述べられており (Tainter 1978)、ナカダ文化墓地遺跡の研究でも利用された (e.g. Griswold 1992a; 1992b)。3つの属性を対象としたクラスタリング結果は、2つを対象とした結果との対応を比較するために用いた。区分されたクラスターは、含まれる属性の値が大きい順に序列化した。その上で、ナカダ地域の墓地における社会的差異を評価するための足がかりとした。

#### 5.2.2.2.2. データの準備

クラスター分析のための元データに関しては csv 形式で準備した。csv 形式は欠測値があろうとも該当箇所を N/A として R に読み込むことが可能なファイル形式である。しかし、実際のクラスター分析では欠測値が存在するとクラスタリングが不能になるため、欠測値を持つサンプルは除外した。必然的に、2変数を用いた場合と、3変数を用いた場合とではサンプル数が異なってくるため、分析の段階ごとに該当するサンプル数はその都度明示した。なお、副葬品に関しては、記録上副葬品が全くない事例も存在するが、この場合は欠測値扱いをせず、0種類0点として分析に組み込んだ。墓の規模に関する情報がない場合には、そのサンプルは本分析では除外した。

#### 5.2.2.2.3. k-means 法の問題点とその対策

ここで実施する k-means 法による非階層的クラスター分析には2つの問題点がある。1つ目は分析結果が初期値の設定に依存する点である。この初期値は分析ごとにランダムに設定されるため、クラスタリングの結果が異なってくる可能性がある。また2つ目は出力されるクラスター数を事前に設定する必要な点である。特に非階層型クラスター分析の場合、クラスター数の設定には絶対的な基準がなく、分析者自身によって定める必要がある。設定によっては実態と異なるクラスター数となる可能性がある。この2つの問題点に対しては、これまで幾つかの対策が提示されている。まず適切なクラスター数を推定するための方法として、「エルボー法」・「シルエット法」・「Gap 統計量の算出」・「ハーティガン法」などがある。これらのうち、本論文では「ハーティガン法」によりクラスター数を推計した。「ハーティガン法」は、区分可能なクラスターの数をもとに2から1つずつ検討し、True または False でそのクラスター数があり得るか否かを提示する。「ハーティガン法」は R の拡張パッケージ「useful」に実装された `FitKMeans` 関数で利用可能である。以下に `x` を csv 形式のデータファイル、`x1` を `x` の代入、`x2` を「ハーティガン法」の代入としたときのコードを示す。

```
> library(useful)
> x1 <- read.csv("x", row.names=1) # データファイルの読み込みとその代入。
```

```
> x2 <- FitKMeans(x1, max.clusters = 20L, nstart = 30, iter.max = 100) #FitKMeans 関数の適用とその代入。
> x2 #FitKMeans 関数による推定クラスターの出力。
> PlotHartigan(x2) #FitKMeans 関数によるクラスター推定の図版出力。
```

以上のプロセスで最適なクラスター数の推定は可能だが、初期値の設定に関する問題は残る。例えば、R に標準で実装されている k-means 関数を用いたクラスタリングでは、結果にばらつきが見られる場合がある。初期値のランダムな設定はオリジナルな k-means 法の欠点であるが、いくつかの改良版の k-means 法がこれまで考案されてきた。そこで本論文では、初期値の設定に関わる算出方法に改良を加えた k-means++法 (Arthur and Vassilvitskii 2007) を採用し、クラスタリングを実行した。R における k-means++法に関しては、拡張パッケージ「LICORS」に実装され、利用が可能である。この k-means++法を用いたクラスタリングを 10 回試行したところ、k-means 法と比べると概ね安定したクラスタリング結果を得ることができたので、以下の分析で適用した。ただし、細かな区分を試みてクラスター数が多くなればなるほど、出力される各クラスターの構成サンプルにはバラツキが生じる。「ハーティガン法」は妥当な範囲で最も多いクラスター数を提示するが、場合によっては過度に区分され、データの評価が困難になることにもつながる。したがって本論文では、「ハーティガン法」で妥当とされるクラスター数の範囲内で、安定した区分結果が得られる最大のクラスター数を採用した。

なお、クラスター分析はデータを解析するための探索的な手法であるため、クラスタリングには必ず主観や観点が伴う。したがってクラスター分析に用いない属性の単独分析の結果も考慮した解釈が最終的に必要となる。

### 5.2.3. 大墓地東地区と同西地区におけるグリッドの設定

大墓地東地区と同西地区は広大で、両墓地の墓坑配置図 (Petrie and Quibell 1896: pl. LXXXVI) では 1/1500 縮尺で各墓の分布が墓番号とともに示されているが、両墓地内がグリッドなどによって細分化されてはいないため、ある墓が墓地内のどこに所在するのかを特定することが困難である。そこで本論文では、事前に 10 m<sup>2</sup> のグリッドを墓坑配置図上に便宜的に設定し、各グリッドが内包する墓の番号を記録して墓の所在地の特定が可能となるようにした。版面上の問題で墓坑分布図は N-29.5° -W 程度の角度で出版されているため、墓地の長軸に合わせて、図版上の北西-南東軸を「東西」軸の行に、北東-南西軸を「南北」軸の列として設定し、「東西」軸は 1-71 の計 71 行、「南北」軸は A-P の計 16 列をグリッドとして与えた (図 5.1.)。この両者を組み合わせて、グリッド名を表現した。従って各墓の所在地は、例えば「62K」といったかたちで表現される。グリッド境界線上に跨って存在する墓は、例えば「61-62K-L」、「52-53H」、「33E-F」と表現した。大墓地は北西から南東方向に流下する涸れ谷によって東地区と西地区に分けられるが、グリッド上では「東西」軸では 28-41 の範囲に、「南北」軸では B-K の範囲にこの涸れ谷が存在する。本論文では、グリッド「28-29B-C」・「30-34D」・「34-36E」・「36-37F」・「37-38G」・「37-39H」・「38-40I-J」・「38-41K」を涸れ川の範囲とし、これより西側を「西地区」・東側を「東地区」とした。このグリッドは、大墓地東地区と西地区に所在する個別の墓の所在地を文中で言及する際に使用する。

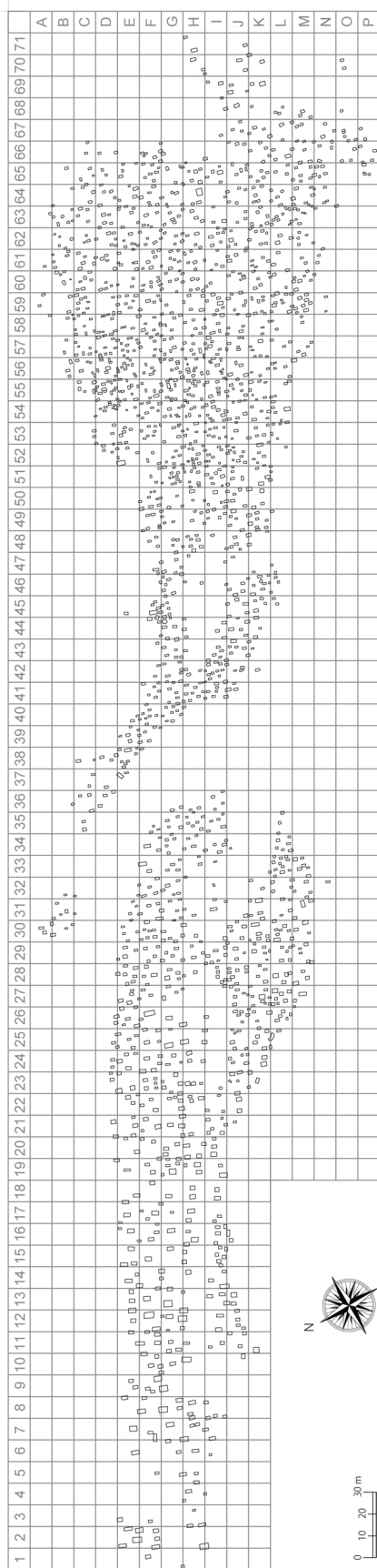


図 5.1. 大墓地東地区・同西地区のグリッド配置 (Petrie and Quibell 1896: pl. LXXXVI トレース・加筆)

## 6. ナカダ遺跡から得られる埋葬属性の通時的分析

### 6.1. はじめに

本章では、5.2.1.で記した9つの埋葬属性（以下、属性と表記する）のうち、I. 相対年代を除いた8つの属性を対象に、各属性の通時的変遷を観察する。方法は5.2.2.1.に記した。以下では、対象の8つの属性を「遺構としての墓に関する属性」・「出土遺体に関する属性」・「埋葬様式に関する属性」・「副葬品に関する属性」の4つに大きく分ける。これらの大きなまとまりには、それぞれ「II. 墓の規模 (m<sup>2</sup>) と III. 墓の平面形状、IV. 墓の構造」、「V. 被葬者の人数と VI. 被葬者の性別と年齢」、「VII. 埋葬様式」、「VIII. 各墓から出土した副葬品総点数と IX. 各墓から出土した副葬品種類数」が含まれる。分析で対象とする資料の数は、該当する節の冒頭に記した。

### 6.2. 遺構としての墓に関する属性の分析

#### 6.2.1. 墓の規模 (m<sup>2</sup>) の分析

対象とする墓の規模である面積 (m<sup>2</sup>) が得られた墓の総数は759基である。内訳は、大墓地東地区447基、大墓地西地区166基、大墓地南地区39基、T墓地35基、B墓地72基である。このうち、基本段階が明らかな墓は498基で、不明な墓が261基である。基本段階が明らかな墓の墓地別の内訳は、大墓地東地区315基、大墓地西地区94基、大墓地南地区21基、T墓地24基、B墓地44基である。墓の規模の分析では、各墓地で面積の通時的な変遷に明瞭な傾向が看取できるか検討した。

##### 6.2.1.1. 全墓地の平均面積

図 6.1.に全ての墓の面積のばらつきを墓地別に箱ひげ図で示した。またこの図に対応する各墓地における標準偏差などを含めた具体的な数値に関しては表 6.1.に示した。図 6.1.からは、平均面積が大墓地東地区 (2.00 m<sup>2</sup>)、B墓地 (2.15 m<sup>2</sup>)、大墓地南地区 (2.67 m<sup>2</sup>)、大墓地西地区 (2.73 m<sup>2</sup>)、T墓地 (4.16 m<sup>2</sup>) の順番に大きくなることが読み取れた。T墓地を除いた4ヶ所の墓地では平均面積が2.00 m<sup>2</sup> から3.00 m<sup>2</sup> の間に収まった。ここから、造営される墓の面積はこの範囲で若干の異同はあるものの、ナカダ遺跡を構成する墓地で造営される墓の標準的な面積を読み取ることができる一方、T墓地の墓の面積がそのほかの墓地における標準よりも大きいことがまず読

表 6.1. 各墓地における面積の諸元

面積	大墓地東地区	大墓地西地区	大墓地南地区	T墓地	B墓地
最大値	11.61	7.74	7.74	14.06	5.57
第3四分位	2.48	3.35	3.23	5.76	2.95
中央値	1.82	2.58	2.26	3.16	1.94
第1四分位	1.30	1.81	1.55	2.12	1.25
最小値	0.44	0.61	0.55	1.01	0.56
平均	2.00	2.73	2.67	4.16	2.15
不偏分散の平方根	0.98	1.31	1.44	3.00	1.11
変動係数	0.49	0.48	0.54	0.72	0.52
墓の数	447	166	39	35	72



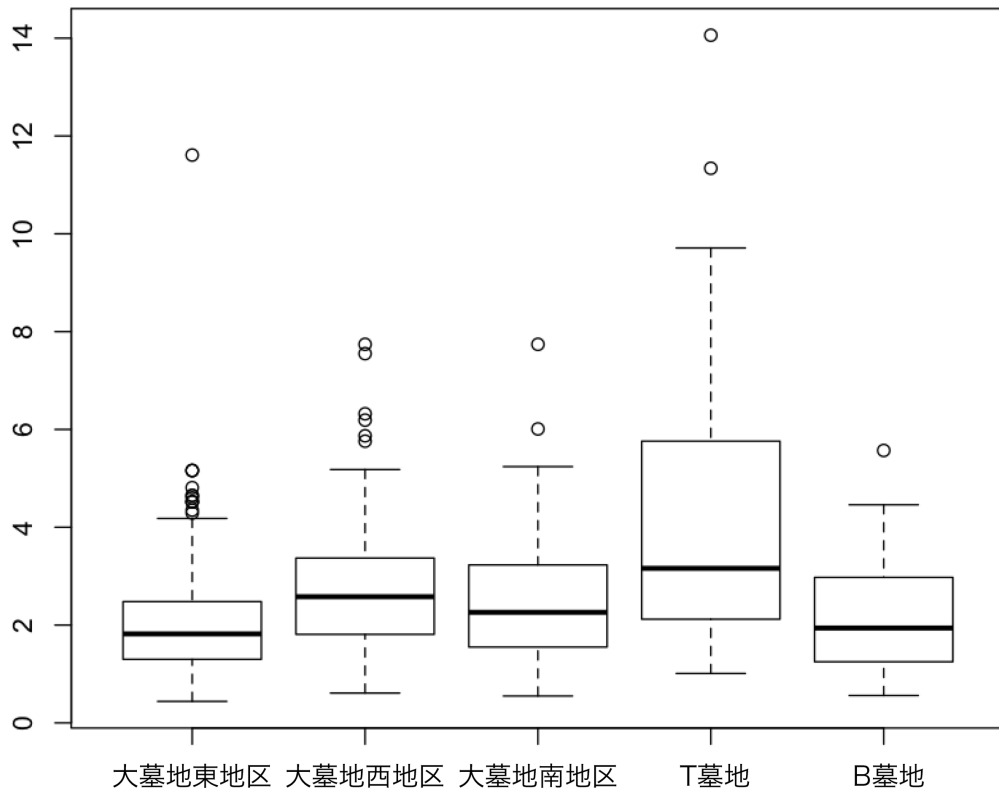


図 6.1. 墓地別に示した面積の箱ひげ図 (y 軸 : m<sup>2</sup>)

み取れた。T 墓地の面積の平均が大きい要因には、6.2.3.にて後述するように日乾レンガ壁を持つ複室構造の墓など、通常のナカダ文化の墓と比べると構造的・規模的に大きな相違点を持つ墓が存在することと関連する。

さらに図 6.1.からは、B 墓地を除いた 4 ヶ所の墓地では、上位 25%の墓の面積はばらつきが大きいことも読み取れる。この上位 25%の墓に含まれる墓の面積を確認するため、0 m<sup>2</sup>から 14.499 m<sup>2</sup>までの範囲を 0.499 m<sup>2</sup>を 1 階級として各階級に含まれる墓の数とその累積度数を図 6.2.に示した。この図では、第 1 軸は該当する面積の墓の数を度数で示し、第 2 軸では累積度数を示した。大墓地東地区では最大値を持つ墓 (1661 号墓・11.61 m<sup>2</sup>) 以外の上位 25%を占める墓の面積は 5.499 m<sup>2</sup>までの範囲に収まる (図 6.2.上段左)。ここから 1661 号墓が面積の面で例外的な事例であることがわかる。一方で、同じく上位 25%を占める墓の面積の範囲が大きい T 墓地は事情が異なり、例えば 6.04 m<sup>2</sup>の T10 号墓や 6.98 m<sup>2</sup>の T4 号墓、7.83 m<sup>2</sup>の T11 号墓や 11.34 m<sup>2</sup>の T5 号墓などがばらけて存在した (図 6.2.中段右)。一方で、大墓地西地区や南地区では、一部に面積の大きな墓は存在するが、大墓地東地区ほど顕著に面積が大きな墓は存在しない (図 6.2.上段右・中段左)。

以上から、墓地別の面積では、T 墓地に面積が大きな墓が造営されることが多く、逆に大墓地東地区は平均的に最も小さいことが読み取れた。ただし、同時に大墓地東地区には一部に顕著に大きな面積を持つ墓も存在することも読み取れた。別の集落である Kh.4 地点を母集落とする B 墓地に関しては、墓の面積の幅が最も小さく、造営される墓の面積に相対的な差異があまり見られなかった。

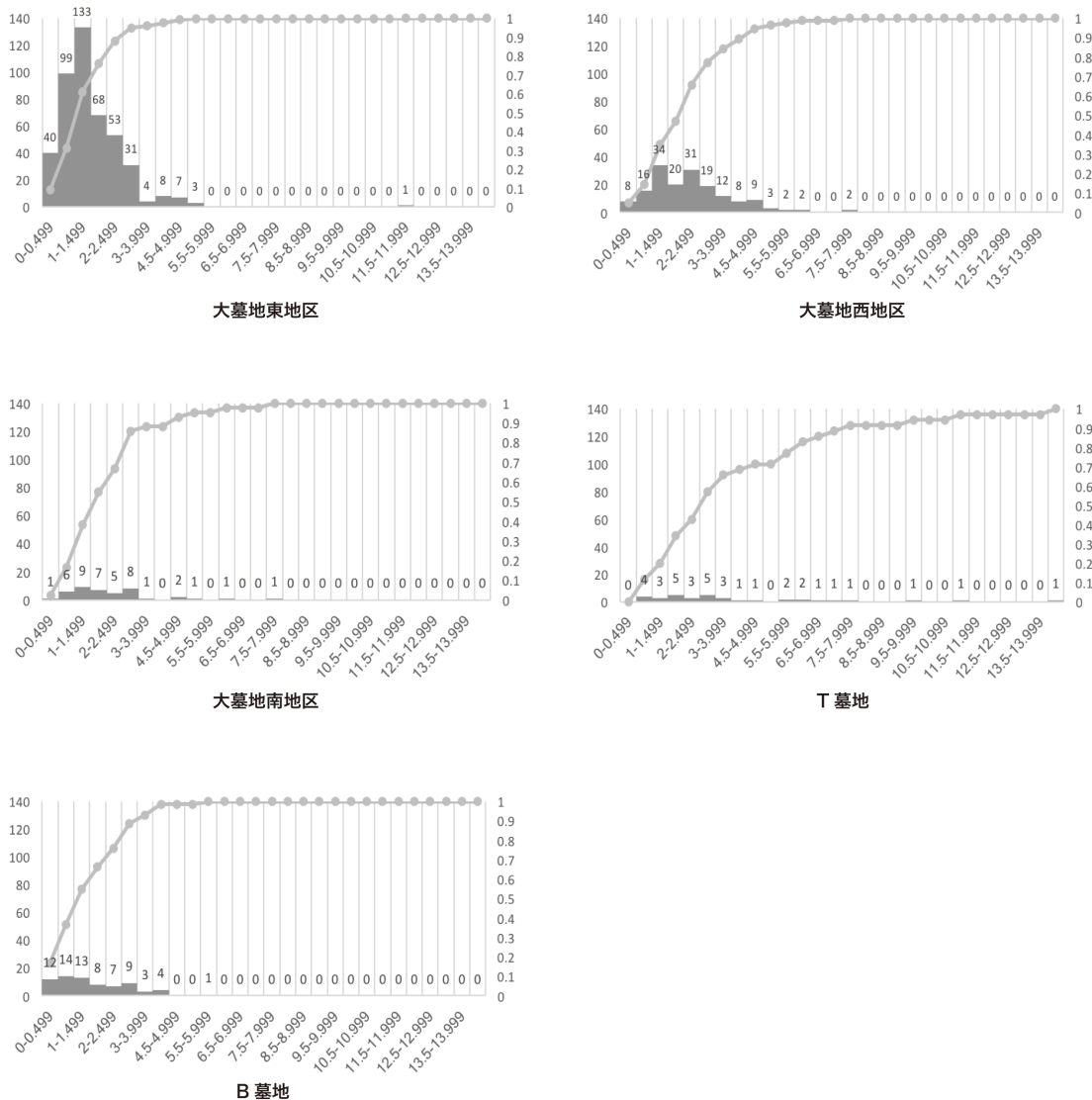


図 6.2. 墓地別に示した面積別の墓の数とその累積度数分布 (第 1 軸: 墓の数、第 2 軸: 累積度数)

### 6.2.1.2. 各墓地における墓の面積の通時的検討

#### 大墓地東地区

図 6.3. に各段階における墓の平均面積の推移を提示した。また表 6.2. に各段階における墓の面積に関する平均値・最大値・最小値・不偏分散の平方根・変動係数を示した。Ia1-Ia3 段階から IIa1-IIa2 段階にかけて各段階の平均面積の差は  $0.4\text{ m}^2$  以下だが、徐々に下落することが読み取れる (図 6.3. 上段左)。この期間は、最も大きい墓の面積は徐々に低下する一方で、最も小さい墓との差は  $0.3\text{ m}^2$  程度に留まる。Ia1-Ia3 段階の最大面積はほかの段階と比べると極端に大きい、これは 6.2.1.1. で記した 1661 号墓のものである。このため Ia1-Ia3 段階の段階の不偏分散の平方根は大きくなった。Ia1-Ia3 段階を除けば、Ib1-Ib2 段階と IIa1-IIa2 段階の不偏分散の平方根はさほど変わらないが、変動係数は Ib1-Ib2 段階で低減したものの IIb 段階まで徐々に大きくなることから、相対的な差異が

表 6.2. 大墓地東地区の墓の面積に関する諸元

基本段階	平均面積	最大面積	最小面積	不偏分散の平方根	変動係数	墓の数
Ia1-Ia3	2.25	11.61	0.87	1.65	0.39	44
Ib1-Ib2	2.16	5.16	0.51	0.92	0.24	181
IIa1-IIa2	1.97	4.65	0.76	0.86	0.39	79
IIb	2.41	3.71	1.35	0.97	0.56	5
IIIa1-IIIa2	1.84	2.71	0.93	0.73	0.51	4
IIIb	2.91	4.18	1.63	1.80	0.56	2
IIIc	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0

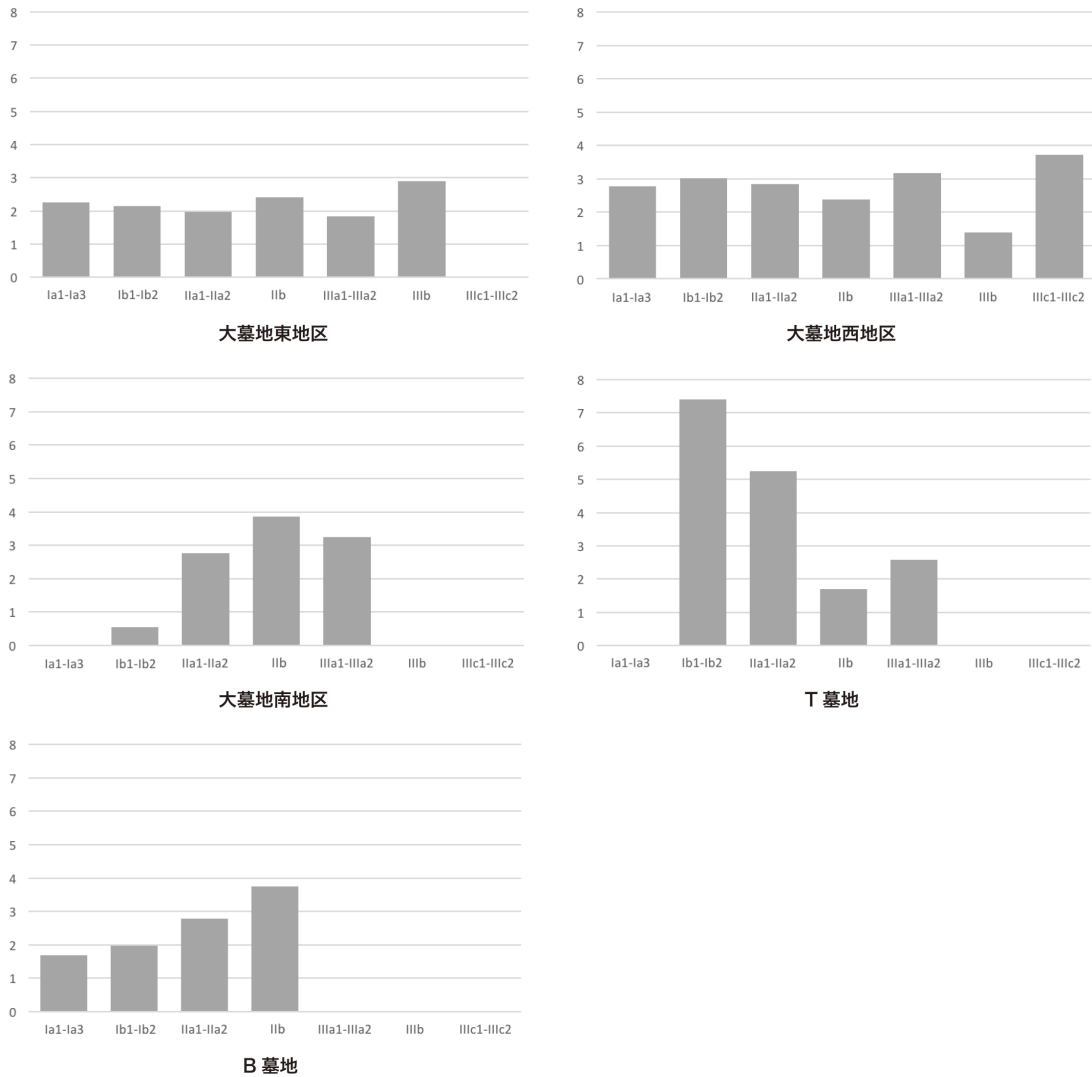


図 6.3. 墓地別に示した各段階の平均面積 (y 軸: 面積 (m<sup>2</sup>))

大きくなったことが読み取れる。IIb 段階には変動係数に加えて平均面積もやや大きくなるが、これは前段階と比べて最大面積と最小面積の差が縮まり、なおかつこの段階を構成する墓の数が少ないにも関わらず平均面積は相対的に大きくなったことによる。IIIa1-IIIa2 段階の墓は前段階と比べると平均面積が小さくなるが、IIIb 段階では

逆に大きくなる。ただしどちらの段階も該当する墓の数が少ないため、この段階に特有な特徴を示しているかは不明である。変動係数も IIb 段階以降はあまり変わらなかった。

#### 大墓地西地区

図 6.3.上段右に各段階における墓の平均面積の推移を提示した。また表 6.3.には各段階における墓の面積に関する諸元を示した。Ia1-Ia3 段階から IIa1-IIa2 段階にかけて各段階の平均面積の差は 0.2-0.3 m<sup>2</sup>程度とあまりなく推移することが読み取れる（図 6.3 上段右）。この期間の最大面積と最小面積は墓の数が少ない Ia1-Ia3 段階を除けば概ね変わらない。ただし Ia1-Ia3 段階に関しては、該当する墓の数が少ないために、ほかの段階よりも大きなすうちが得られている可能性を考慮する必要がある。平均面積にあまり差がない点は、不偏分散の平方根にも反映される。Ia1-Ia3 段階から Ib1-Ib2 段階はさほど変わらず小さいのに対して、IIa1-IIa2 段階では大きくなる。変動係数を見ると、Ia1-Ia3 段階は大きい一方で、Ib1-Ib2 段階と IIa1-IIa2 段階はそれよりも小さいことから、あまり差がなかったことが窺える。少なくとも Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階に関しては平均面積に違いはあっても、造営される墓の面積自体はその段階ごとに差が顕著でないことを示す。

IIb 段階以降は平均面積の増減が大きくなるが、これは各段階における墓の数が少ないため該当する墓が持つ数値のばらつきが反映されやすいことによる。この点は最大面積にも当てはまる。一方で最小面積はどの段階でも 1 m<sup>2</sup>を超え、IIIc 段階を除いて顕著な差はない。不偏分散の平方根は IIIa1-IIIa2 段階に大きくなるが、変動係数は逆に小さいのでむしろばらつきは小さくなったことが窺える。通時的には最大面積と最小面積の差が大きいかにも関わらず、変動係数は一部を除いて大きな変動なく推移するので、各段階に造営される墓の面積は大小に明確に分かれていたと読み取れる。

表 6.3. 大墓地西地区の墓の面積に関する諸元

基本段階	平均面積	最大面積	最小面積	不偏分散の平方根	変動係数	墓の数
Ia1-Ia3	2.78	5.18	2.26	1.22	0.81	7
Ib1-Ib2	3.01	6.32	0.91	1.14	0.30	36
IIa1-IIa2	2.85	6.19	1.01	1.55	0.35	37
IIb	2.39	2.79	1.55	0.51	0.65	5
IIIa1-IIIa2	3.17	4.74	1.29	1.39	0.41	7
IIIb	1.39	1.39	1.39	0.00	1.00	1
IIIc	3.72	3.72	3.72	0.00	0.00	1

#### 大墓地南地区

図 6.3.中段左に各段階における墓の平均面積の推移を提示した。また表 6.4.には各段階における墓の面積に関する諸元を示した。Ib1-Ib2 段階に関しては、面積の小さい墓 1 基（8 号墓）に留まるが、IIa1-IIa2 段階と IIb 段階に関しては、平均・最大・最小面積の全てが上昇し、最大最小面積の差も広がる（表 6.4.）。一方で、不偏分散の平方根は IIb 段階に特に大きくなるが、変動係数ではあまり大きな違いがないので、各段階に造営される墓の面

表 6.4. 大墓地南地区の墓の面積に関する諸元

基本段階	平均面積	最大面積	最小面積	不偏分散の平方根	変動係数	墓の数
Ia1-Ia3	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
Ib1-Ib2	0.55	0.55	0.55	0.00	0.00	1
IIa1-IIa2	2.77	5.24	1.26	1.33	0.46	12
IIb	3.86	7.74	2.06	2.66	0.53	4
IIIa1-IIIa2	3.25	6.01	1.55	1.96	0.48	4
IIIb	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
IIIc	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0

積のばらつきはあまり変わらなかったことが読み取れる。

IIIa1-IIIa2 段階には、IIb 段階と比べると平均・最大・最小面積の全てが低下し、最大面積と最小面積の差も縮まる。不偏分散の平方根と変動係数も小さくなるので、この段階は墓地の活動が前段階と比べて低下したことを示す。

#### T 墓地

図 6.3.中段右に各段階における墓の平均面積の推移を提示した。また表 6.5.には各段階における墓の面積に関する諸元を示した。Ib1-Ib2 段階は 2 基の墓 (T4 号墓・T11 号墓) のみから構成されるが、この 2 つの墓の面積の差は 1 m<sup>2</sup> 以下でどちらも面積が極めて大きい。IIa1-IIa2 段階には前段階と比べると平均面積は小さくなるが、最大面積と最小面積の差は 12 m<sup>2</sup> 近くに広がる。面積が大きな墓が造営されると同時に、小さい墓も造営されるようになり、この段階を構成する墓の面積の差異が大きくなったと読み取れる。この点是不偏分散の平方根と変動係数にも読み取れる。IIb 段階に関しては墓の数が 1 基のみなので、この段階の特徴を示しているかは不明である。IIIa1-IIIa2 段階に関しては、IIa1-IIa2 段階と比べると平均・最大・最小面積の全てが大幅に低下し、最大面積と最小面積の差も縮まる。不偏分散の平方根も小さいので、この段階は墓の面積のばらつきが小さくなったことを示す。IIb 段階を除けば、この段階は平均面積に加えて最大・最小面積の面でも利用期間の中で最も小さいことが特筆できる。

表 6.5. T 墓地の墓の面積に関する諸元

基本段階	平均面積	最大面積	最小面積	不偏分散の平方根	変動係数	墓の数
Ia1-Ia3	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
Ib1-Ib2	7.41	7.83	6.98	0.60	0.08	2
IIa1-IIa2	5.25	14.06	2.18	3.46	0.66	17
IIb	1.70	1.70	1.70	0.00	0.00	1
IIIa1-IIIa2	2.58	3.79	1.55	0.98	0.38	4
IIIb	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
IIIc	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0

## B 墓地

図 6.3.下段右に各段階における墓の平均面積の推移を提示した。また表 6.6.には各段階における墓の面積に関する諸元を示した。Ia1-Ia3 段階から IIb 段階にかけて通時的に平均面積が上昇することが特徴である。墓の数が 1 基の墓 (B127 号墓) のみの IIb 段階を除くと、最大面積も通時的に上昇する。一方で、最小面積は  $0.2 \text{ m}^2$  以下しか通時的に変化しないため、造営される墓の上限の面積が通時的に大きくなった一方で、下限の面積はこの動きに伴って変化することがなかったと読み取れる。一方で、不偏分散の平方根と変動係数を見ると、さほど墓の面積のばらつきが大きくなったとは言えない。したがって、全体的には造営される墓の面積が通時的に大きくなったことが読み取れる。

表 6.6. B 墓地の墓の面積に関する諸元

基本段階	平均面積	最大面積	最小面積	不偏分散の平方根	変動係数	墓の数
Ia1-Ia3	1.69	3.25	0.84	1.35	0.80	3
Ib1-Ib2	1.98	4.06	0.65	1.00	0.51	18
IIa1-IIa2	2.78	5.57	0.66	1.24	0.45	22
IIb	3.76	3.76	3.76	0.00	0.00	1
IIIa1-IIIa2	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
IIIb	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
IIIc	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0

### 6.2.1.3. 墓の規模に関する分析のまとめ

墓の面積の通時的な変遷は、各墓地によって異なる様相が示された。大墓地東地区や同西地区では墓の面積に大きな変化が通時的に見られなかった一方で、同南地区では IIb 段階に墓の規模がやや上昇することが読み取れた。特徴的な変化が確認できたのは、T 墓地と B 墓地である。T 墓地は利用開始期の Ib1-Ib2 段階に該当する 2 つの墓のどちらもが  $7\text{--}8 \text{ m}^2$  近い規模を持ち、次の IIa1-IIa2 段階以降はより大きな墓が造営された一方で、より小さな墓も現れ、全体的には造営される墓の規模が時代を降るごとに概ね縮小した。B 墓地では利用期間が終了する IIb 段階まで通時的に墓の平均面積が増大したが、各墓の面積のばらつきは大きくならなかった。

また、6.2.1.1.では、特にサウスタウンを母集落とする B 墓地以外の 4 墓地に関しては、大墓地東地区、同南地区、同西地区、T 墓地の順に造営される墓の面積の平均が大きくなることが示せたが、この傾向は段階別に比較すると異なる部分も見出せる (表 6.7.)。表 6.7.には時期が不明な墓は含まれていない点を注意する必要があるものの、IIb 段階を除いて通時的に大墓地東地区に造営される墓は同西地区や同南地区よりも小さいことは読み取れる。この背景には、被葬者の地位などの要因が関連していると思われる (Bard 1994; van Wetering 2017)。また特に Ib1-Ib2 段階と IIa1-IIa2 段階で最も優れる T 墓地の変遷の違いの理由に関しては、6.4.1.で後述する埋葬様式の違いが関わっていると考えられる。以下では、この規模に関する様相を踏まえつつ、引き続きほかの属性の検討を試みる。

表 6.7. 対象の 5 墓地における墓の平均面積の段階別比較

基本段階	大墓地東地区	大墓地西地区	大墓地南地区	T墓地	B墓地
Ia1-Ia3	2.25	2.78	-	-	1.69
Ib1-Ib2	2.16	3.01	0.55	7.41	1.98
IIa1-IIa2	1.97	2.85	2.77	5.25	2.78
IIb	2.41	2.39	3.86	1.70	3.76
IIIa1-IIIa2	1.84	3.17	3.25	2.58	-
IIIb	2.91	1.39	-	-	-
IIIc	-	3.72	-	-	-

## 6.2.2. 墓の平面形状の分析

墓の平面形状に関する情報が得られた墓の総数は 961 基である。内訳は、大墓地東地区 601 基、大墓地西地区 167 基、大墓地南地区 51 基、T 墓地 51 基、B 墓地 91 基である。このうち、段階を含む時期が明らかな墓は 659 基で、時期が不明な墓が 302 基である。5.2.1. に記した分類に、ノートに副葬品や遺体の記載があるものの平面図が掲載されていない事例として「不明」を付け加え、墓の平面形状を 4 種類に分類し、各墓地における段階別の形状の割合を把握してその通時的な変遷に明瞭な傾向が看取できるか検討した。

### 6.2.2.1. 全墓地における平面形状別の墓数とその割合

図 6.4. に対象の 5 墓地における墓の平面形状の割合を 100%積み上げ縦グラフで示した。この表に関連する詳しい数値は表 6.8. に記した。これらの図表からは、どの墓地でも長方形の墓が多数を占めることがわかる。楕円形の墓に関しては、大墓地東地区では割合が全体の 1/4 程度になるのに対して、ほかの墓地では 20% に満たない。特に T 墓地では 1 基 (T8 号墓) のみである。B 墓地でも確認できた事例は 5 基に留まる。この結果は、概ねバードの提示した情報 (Bard 1994: 84, Table 11) と合致する。しかし、バードが分析で対象とした墓の数は大墓地東地区 149 基、大墓地東地区 122 基、T 墓地 47 基、B 墓地 92 基で、今回対象とした墓の数よりも B 墓地以外は少ないため、今回の結果は対象の 5 墓地において造営された墓の平面形状の本来の様相により近いと言える。

表 6.8. 各墓地の墓の形状の数と割合

墓地	長方形		楕円形		そのほか		不明		墓の数
	墓の数	割合	墓の数	割合	墓の数	割合	墓の数	割合	
大墓地東地区	325	54.08%	155	25.79%	10	1.66%	111	18.47%	601
大墓地西地区	138	82.63%	20	11.98%	5	2.99%	4	2.40%	167
大墓地南地区	37	72.55%	8	15.69%	1	1.96%	5	9.80%	51
T墓地	45	88.26%	1	1.96%	3	5.88%	2	3.92%	51
B墓地	76	83.52%	5	5.49%	5	5.49%	5	5.49%	91

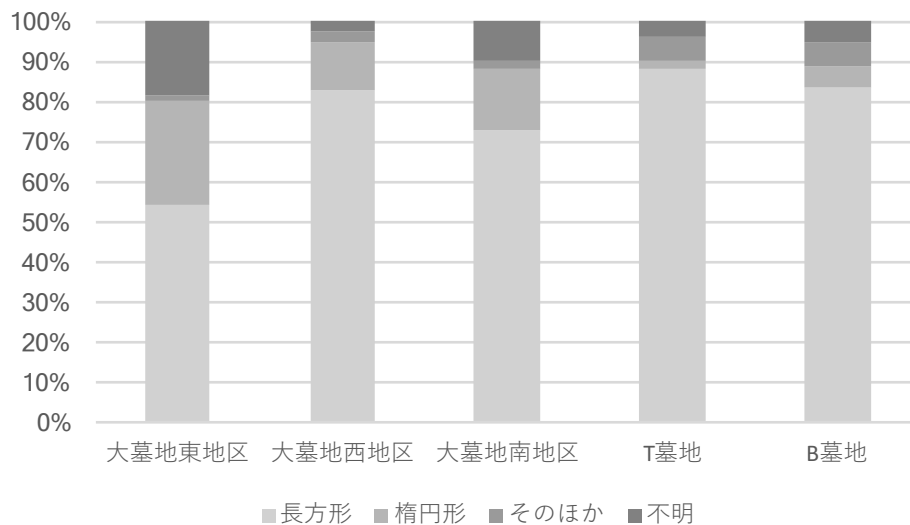


図 6.4. 各墓地の墓の形状の割合

#### 6.2.2.2. 各墓地における墓の形状の通時的な検討

##### 大墓地東地区

図 6.5.上段左に各段階における墓の平面形状の割合を 100%積み上げ縦棒グラフで提示した。また表 6.9.には各段階における平面形状別の墓の数を示した。全時期の墓を対象にした場合は、長方形の墓が多数を占めていたが、各段階の様相を見ると、Ia1-Ia3 段階では長方形・楕円形の両方が同数なことがわかる。一方で、Ib1-Ib2 段階以降は、形状が判別可能な墓の数が 1 基である IIIb 期を除くと、長方形の墓の割合が多数を占めるようになり、より多く造営されるようになったことがわかる。楕円形の墓の造営は全体の 1/2 から 1/5 に留まる。

##### 大墓地西地区

大墓地東地区と同じく、図 6.5.上段右に各段階における墓の平面形状の割合を示し、表 6.10.には各段階における平面形状別の墓の数を示した。大墓地西地区の場合は、どの段階でも長方形の墓が多数を占め、楕円形の墓はごく一部に留まる。段階が明らかな墓の数は少ないが、時期不明な墓も長方形の事例が多数を占めているため、おそらくこの傾向は実態を概ね表していると推察される。特に Ib1-Ib2 段階や IIa1-IIa2 段階では楕円形の墓は例外的な事例なことが読み取れた。

##### 大墓地南地区

図 6.5.中段左に各段階における墓の平面形状の割合を示し、表 6.11.には各段階における平面形状別の墓の数を示した。大墓地南地区の場合は、Ib-Ib2 段階にはただ 1 つの墓 (8 号墓) が楕円形だが、ほかの段階では長方形の墓が多数を占める (IIa1-IIa2 段階) か、それのみ (IIb 段階、IIIa1-IIIa2 段階) かのどちらかに限られた。この墓地に関しては記録の残りが良いため、表 6.11.で示した墓の形状別の事例数が実態を反映している。時期が不明な墓



についても長方形の墓の優位は変わらない。

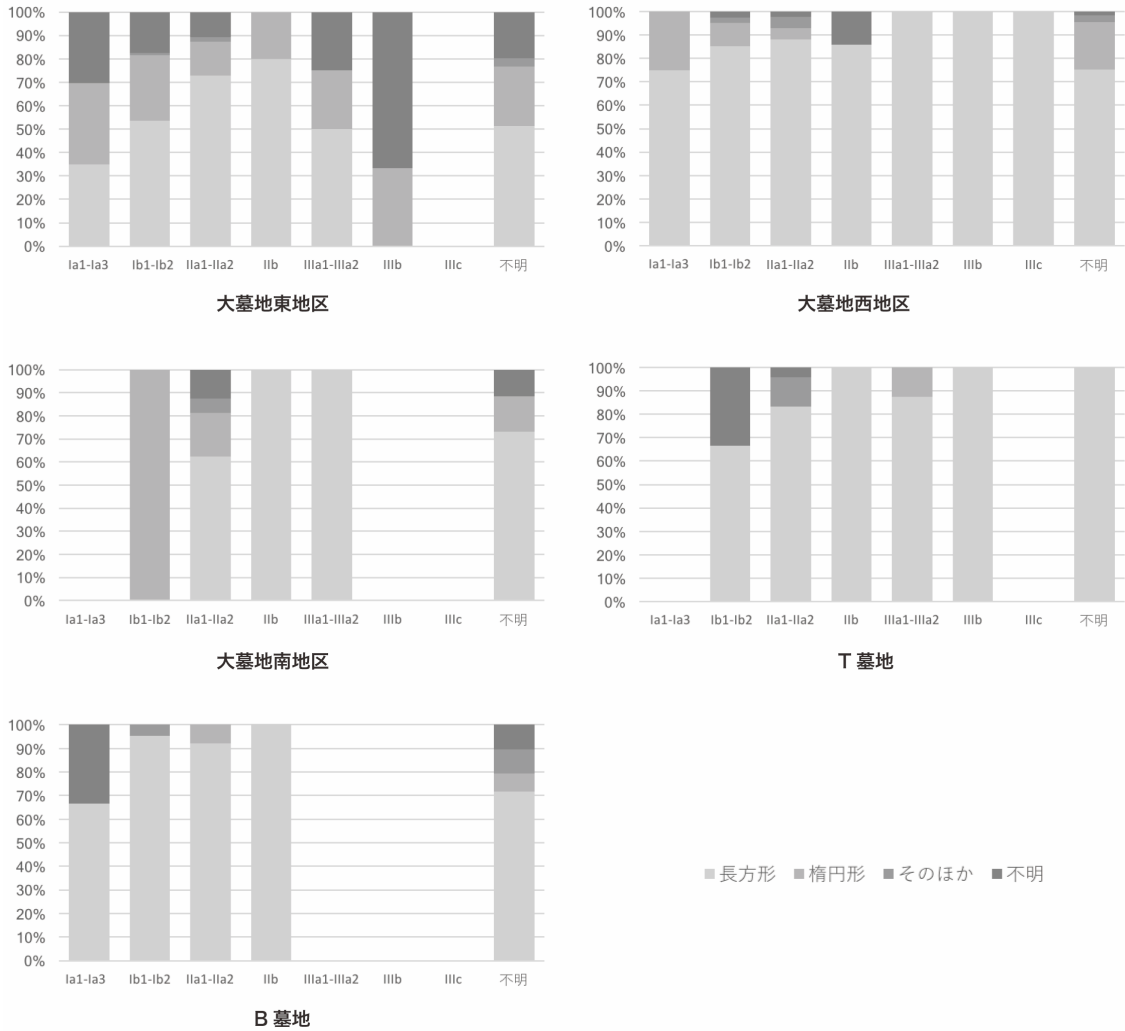


図 6.5. 各墓地における墓の形状の割合の通時的な変遷

表 6.9. 大墓地東地区における墓の形状別の数の通時的な変遷

基本段階	長方形	楕円形	そのほか	不明	墓の数
Ia1-Ia3	23	23	0	20	66
Ib1-Ib2	140	74	2	46	262
IIa1-IIa2	75	15	2	11	103
IIb	4	1	0	0	5
IIIa1-IIIa2	2	1	0	1	4
IIIb	0	1	0	2	3
IIIc	0	0	0	0	0
不明	81	40	6	31	158

表 6.10. 大墓地西地区における墓の形状別の数の通時的な変遷

基本段階	長方形	楕円形	そのほか	不明	墓の数
Ia1-Ia3	3	1	0	0	4
Ib1-Ib2	35	4	1	1	41
IIa1-IIa2	37	2	2	1	42
IIb	6	0	0	1	7
IIIa1-IIIa2	5	0	0	0	5
IIIb	2	0	0	0	2
IIIc	1	0	0	0	1
不明	49	13	2	1	65

表 6.11. 大墓地南地区における墓の形状別の数の通時的な変遷

基本段階	長方形	楕円形	そのほか	不明	墓の数
Ia1-Ia3	0	0	0	0	0
Ib1-Ib2	0	1	0	0	1
IIa1-IIa2	10	3	1	2	16
IIb	4	0	0	0	4
IIIa1-IIIa2	4	0	0	0	4
IIIb	0	0	0	0	0
IIIc	0	0	0	0	0
不明	19	4	0	3	26

#### T 墓地

図 6.5.中段右に各段階における墓の平面形状の割合を示し、表 6.12.には各段階における平面形状別の墓の数を示した。すでに 6.2.2.1.で記したように、T 墓地で検出された楕円形の墓は 1 基に留まる (T8 号墓)。したがって、T 墓地の墓の平面形状は、基本的に長方形で統一されていたことがわかる。

表 6.12. T 墓地における墓の形状別の数の通時的な変遷

基本段階	長方形	楕円形	そのほか	不明	墓の数
Ia1-Ia3	0	0	0	0	0
Ib1-Ib2	2	0	0	1	3
IIa1-IIa2	20	0	3	1	24
IIb	1	0	0	0	1
IIIa1-IIIa2	7	1	0	0	8
IIIb	1	0	0	0	1
IIIc	0	0	0	0	0
不明	14	0	0	0	14

## B 墓地

図 6.5. 下段左に各段階における墓の平面形状の割合を示し、表 6.13.には各段階における平面形状別の墓の数を示した。B 墓地でも、楕円形の墓が通時的に少なく、大多数が長方形で占められることが読み取れた。Ia1-Ia3 段階にも楕円形は見られず、IIa1-IIa2 段階にわずかに 2 基確認できるにすぎない。ただし、時期が不明な墓に初期の墓が存在する可能性があり、楕円形の墓の実際の数はいずれもより多かった可能性がある。

表 6.13. B 墓地における墓の形状別の数の通時的な変遷

基本段階	長方形	楕円形	その他	不明	墓の数
Ia1-Ia3	2	0	0	1	3
Ib1-Ib2	21	0	1	0	22
IIa1-IIa2	24	2	0	0	26
IIb	1	0	0	0	1
IIIa1-IIIa2	0	0	0	0	0
IIIb	0	0	0	0	0
IIIc	0	0	0	0	0
不明	28	3	4	4	39

### 6.2.2.3. 墓の形状に関する分析のまとめ

対象の 5ヶ所の墓地では、基本的に長方形の墓が多数を占めることが読み取れた。ただし、墓地によって特徴に差異があり、例えば大墓地東地区では Ia1-Ia3 段階に長方形と楕円形の墓がほぼ同じ割合なことも示すことができた。一方で、同じく Ia1-Ia3 段階から利用されていた大墓地西地区や B 墓地では長方形が主体を占めた。興味深い点は、同一集落を母体とする大墓地東地区と同西地区における墓の形状の傾向の違いであり、この背景には被葬者の地位などの別の要因が関わっていた可能性がある (cf. Binford 1971)。一方で、B 墓地に関しては、Kh.4 地点の人々が有していた造墓に関する規制が反映されており、近隣のサウスタウン地区とはマイナーな相違点があった可能性がある。一般にナカダ文化の墓地では、楕円形の墓がナカダ文化期の初期に多いという特徴が述べられてきた (e.g. Ayrton and Loat 1911; Midant-Reynes 2000a; 2000b; 2003; Petrie 1920)。しかし、ナカダ遺跡の場合はこの通説が当てはまらない可能性がある。

サウスタウンを母集落とする墓地でもう 1つ特徴的な点は、T 墓地の墓の形状である。この墓地の場合は、楕円形の墓はほぼ例外と言ってよく、不整形を加えても長方形以外の墓は極めて限定される。ここには強い規制が働いていたとともに、6.2.3.で述べるように T 墓地で見られる一部の墓の構造も影響している。T 墓地の特殊性が明瞭に確認できる属性の 1つだと言える。

### 6.2.3. 墓の構造の分析

ここでは、6.2.2.で扱った墓の形状がノートから得られる墓に加えて、報告書 (Petrie and Quibell 1896) に対象とする墓の構造上の特徴が明記された 2 基を加えた墓を対象とした。墓地別には、大墓地東地区 490 基、大墓地西

地区 162 基、大墓地南地区 45 基、T 墓地 48 基、B 墓地 83 基である。墓の平面図が不明な事例はここでは取り扱っていない。ナカダ文化期の墓は、基本的には素掘りの単純土坑墓であり、例外はヒエラコンボリス遺跡 HK6 地点で検出された IC-IIA 期の事例や、III C1 期以降の初期王朝時代になってから出現したマスタバ墓や地下式墓などである。しかし、対象の 5 遺跡では 5.2.1. で挙げた、単純な土坑墓からやや構造的に複雑化した例外が確認できる。ここでは、この例外である「ステップ墓」、「接続・複合墓」、「日乾レンガ使用墓」を中心に検討し、その数とその段階を墓地別に検討する。「日乾レンガ使用墓」には墓坑の壁にレンガ製の囲壁を持つ事例と、内壁を有する本格的な構造を持つ事例の両方が存在するので、適宜この別も言及する。

まず全墓地における 3 種類の構造を持つ墓の事例数と割合を表 6.14. に示した。まずステップ墓と接続・複合墓に関しては、大墓地南地区と T 墓地以外の全ての墓地で確認できる。次に日乾レンガ使用墓は、大墓地東地区・同西地区・T 墓地に存在する。これらの構造別に墓の有無を見た場合、最も際立つのは T 墓地である。T 墓地では、日乾レンガ使用墓が全体の 10 % を占めるが、それ以外は単純土坑墓でほかの 2 種類の構造は見当たらない。一方で大墓地を構成する 3 墓地では日乾レンガ使用墓はごくわずかしかなかった。ステップ墓と接続・複合墓も数は少ないが、日乾レンガ使用墓よりは多く存在する。特に大墓地南地区ではステップ墓が多い。B 墓地の場合は、接続・複合墓が大墓地の 3 墓地と比べてやや割合が高いことが確認できた。以上から、単純土坑墓以外では、いずれの構造も数が少ないことがわかる。一方で T 墓地の特異さも読み取れた。次に墓の構造別にそれらの特徴を通時的視点に立ってさらに検討する。

表 6.14. 各墓地における墓の構造別の数と割合

墓地	単純土坑墓		ステップ墓		接続・複合墓		日乾レンガ使用墓		墓の総数
	墓の数	割合	墓の数	割合	墓の数	割合	墓の数	割合	
大墓地東地区	470	95.92%	14	2.85%	3	0.61%	3	0.61%	490
大墓地西地区	149	91.98%	10	6.17%	2	1.23%	1	0.62%	162
大墓地南地区	34	75.56%	11	24.44%	0	0.00%	0	0.00%	45
T 墓地	43	89.58%	0	0.00%	0	0.00%	5	10.47%	48
B 墓地	77	92.78%	3	3.61%	3	3.61%	0	0.00%	83

#### ステップ墓

合計で 38 基確認できたステップ墓のうち、24 基は時期が不明か、段階に位置づけることができない。残りの 14 基の時期と墓地別の事例数は、Ib1-Ib2 段階 6 基（大墓地東地区 3 基、同西地区 1 基、B 墓地 2 基）、IIa1-IIa2 段階 6 基（大墓地東地区 4 基、同西地区 1 基、同南地区 1 基）、IIIa1-IIIa2 段階 2 基（大墓地西地区 1 基、B 墓地 1 基）である。ここからステップ墓は Ia1-Ia3 段階には造営されず、Ib1-Ib2 段階から散発的に造営されることがわかる。段階に時期を位置づけることができない事例の中には Ib1-IIa2 段階（1 基）や IIa1-IIb 段階（6 基）の墓があるため、造営される段階に関しては、主におそらく IIa1-IIa2 段階に多く造営されたと推定される。また上記したように T 墓地以外のどの墓地にも造営されるため、ステップ墓は特定の墓地に造営されたわけではないことが読み取れる。

## 連接・複合墓

合計で 8 基確認できた連接・複合墓のうち、4 基は時期が不明か段階に入れられない墓である。残りの 4 基の時期と墓地別の事例数は、Ia1-Ia3 段階 1 基（大墓地西地区）、Ib1-Ib2 段階 1 基（B 墓地 3 基）、IIb 段階 2 基（大墓地東地区 1 基、B 墓地 1 基）である。ここから連接・複合墓は、2-3 基程度が確認できるだけで基本的に造営されることが稀で、通時的に見ても継続して造営される構造ではないことがわかる。

5.2.1.に記したように、この分類の墓は、フィールドノートの記載を確認した上で計数しているため、偶発的に切り合って検出された事例はない。したがって、B 墓地では通時的には継続したこの種類の墓の造営はないものの、散発的に造営されたことがわかる。なお、これら 8 基のうち大墓地西地区の 118 号墓はウシ科の動物の埋葬土坑と複合して検出された点は注目される。以上から、連接・複合墓は存在自体が稀で、基本的には人間の埋葬が複合・連接するが、動物の埋葬が複合することもあることがわかった。

## 日乾レンガ使用墓

合計で 9 基確認できた日乾レンガ使用墓の時期と墓地別の事例数のうち、段階が明らかな事例の数は 8 基で、内訳は IIa1-IIa2 段階 6 基（大墓地西地区 1 基、T 墓地 5 基）、IIIa1-IIIa2 段階 1 基（大墓地東地区 1 基）、IIIb 段階 1 基（大墓地東地区 1 基）である。Ib1-Ib2 段階以前には日乾レンガの使用はなく、IIa1-IIa2 段階以降に散発的に造営されたことがわかる。なおここに含まれない大墓地東地区の 1 基（1037 号墓）は IIa1-IIb 段階なので、この期間に収まる。一方で集落遺跡では、IIa1 段階の前半に相当するナカダ IIC 期の上エジプト地域では本格的に日乾レンガが建材に用いられ始めており（Moeller 2016）、墓地でも日乾レンガが限定的に用いられ始めたことと捉えられる。4.2.で触れたように IUO 隊や WSU 隊がサウスタウンで回収している点（e.g. Fattovich et al. 2007; Hassan et al. 2017a）も付記される。

墓地別に観察すると、T 墓地が 5 基と最も多く、次いで大墓地東地区が多い。ただし日乾レンガの用い方は墓地間で大きく異なる。すなわち、T 墓地では 3 基の墓（T15・T20・T23 号墓）は日乾レンガが主要な構築材で内壁も持つ（Petrie and Quibell 1896）。T10 号墓に関してもこれら 3 基の墓に準じる構造の囲壁を持つ（Kemp 1973）。一方で、これら以外の墓では日乾レンガの利用は限定的であることが発掘者の記録などから読み取れる。以上から、T 墓地の特異さはレンガを建材に使用する点からも示され、ほかの墓地では全体の墓数に対して極めて少数なことが浮き彫りにされる。大墓地南地区と B 墓地には現在の資料からは全く該当する墓を見つけることができなかったが、特に B 墓地に関しては Kh.4 地点では少なくとも墓へ日乾レンガを使用しなかった可能性がある。

このように日乾レンガの墓への使用は極めて限定的で、例えば有力者の墓に用いるなどの社会的な規制が働いていた可能性が考えられる。日乾レンガを使用した著名な墓の事例にヒエラコンポリス遺跡 HK31 地点の 100 号墓があり、ナカダ遺跡 T20 号墓とほぼ同一の墓構造を持つことが指摘されている（Kemp 1973）。この 100 号墓はナカダ文化で唯一の壁画を有しており（Quibell and Green 1902: 20-2, pls. LXVII, LXXVI-IX）、Ib2 段階に相当するナカダ IIB 期の有力者の墓と考えられている（Friedman 2008b）。したがって、ナカダ遺跡の T20 号墓も有力者の

墓の可能性がある。この構造を持つ墓のほかにも、日乾レンガを使用した墓は Ib2-IIa2 段階の時期における有力者またはその系統に属する人々の墓である可能性が高い。

#### 6.2.4. 遺構としての墓の特徴に関する分析のまとめ

墓地別の特徴を以上の分析をもとにまとめると、まず大墓地東地区では通時的に墓の平均面積が  $2\text{ m}^2$  を前後し、その規模で造営される墓の形状は Ia1-Ia3 段階には長方形と楕円形が同程度だが、Ib1-Ib2 段階以降は長方形が主体となること、造営される墓はほぼ単純土坑墓で、ステップ墓や接続・複合墓、日乾レンガ使用墓は稀なことがわかった。

大墓地西地区では、同東地区よりも大きい  $2.5\text{ m}^2$  を前後する平均規模の墓が通時的に造営され、その規模で造営される墓の形状は通時的に長方形が主体で、造営される墓は概ね単純土坑墓だが、ステップ墓や接続・複合墓、日乾レンガ使用墓も稀だが確認できた。大墓地東地区と比べるとステップ墓の割合が若干高いことも特徴である。

大墓地南地区は、同東地区や西地区よりも利用期間が短い、それでも西地区よりも大きい  $3\text{ m}^2$  を超える平均面積の墓が造営され、その規模で造営される墓の形状は通時的に長方形が主体で、構造の面では単純土坑墓が主体だが、ステップ墓は 1/4 に迫る数に上ることが確認できた。大墓地東地区や西地区と比べると、少ない墓数にも関わらずステップ墓の割合が高いことが特徴だが、逆にそのほかの構造上の特徴を持つ墓はない。また、面積に関しても平均では大墓地西地区を超えるが、最大面積では両者の優劣は段階によって変わる。特に IIb 段階は大墓地西地区よりも同南地区の方が優れていた可能性がある。

T 墓地は、利用開始期に最も面積が大きく、その後平均規模が低減するが、造営される墓の形状はほぼ全て長方形が主体で、構造の面では単純土坑墓主体なもの、日乾レンガ使用墓が特に IIa1-IIa2 段階以降に目立つ。他 2 種類の構造を持つ墓がないことから、造墓にまつわる規制の強さが窺える。Ib1-Ib2 段階からの面積の低減の一方で、大型かつ構造面で特徴的な内壁を持つ日乾レンガ使用墓が構築される点から、Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階の間、特に I/II 後半段階と IIa1 段階の間に、T 墓地の性格が変異した可能性が想定できる。

B 墓地に関しては、当初は大墓地東地区と同程度の規模の墓が造営される一方で、通時的に面積が大きくなることが特徴で、規模が変わろうとも造営される墓の形状は概ね長方形が主体で、構造の面では単純土坑墓主体なもの、ステップ墓や接続・複合墓もある程度造営される特徴を持つ。墓地を構成する墓数が少ない中で特徴的な構造を持つ墓が造営される点は、造墓をめぐる B 墓地独自の様相と言える。また、日乾レンガ使用墓が全く存在しない点も特徴的である。

以上から、墓地ごとに規模や形状・構造にそれぞれ特徴が見られることが明らかになった。対象の 5 ケ所をこれらの特徴をもとに序列化すると、墓地を大墓地東地区と同西地区は類似するが、墓の規模の面では西地区が優れるため、遺構の特徴からは東地区は西地区に劣ると位置付けられる。この結果はバードの説と同じである (Bard 1989; 1994)。日乾レンガ使用墓は大墓地東地区の方が多いが、T 墓地の事例のような特異な構造を持っていないため、ここでは序列の決定で重要視しなかった。また大墓地南地区に関しては同西地区と同格かやや優れると考えられるが、段階による差異も考えられる。なお、バードは大墓地南地区を対象にしていなかったため、比較はでき

ない。T 墓地はサウスタウンを母集落とする 4 ヶ所の墓地の中では最も優れることは明らかである。この点はバードの説を追認する (Bard 1989; 1994)。母集落が異なる B 墓地は、大墓地東地区と同程度と考えられる。バードは B 墓地をやや優れるとするが、遺構の情報をもとにした本節での見解はやや異なる (Bard 1989; 1994)。

### 6.3. 出土遺体に関する属性の分析

#### 6.3.1. 墓 1 基あたりの被葬者の人数の分析

ナカダ文化の墓は単葬が一般的である (Midant-Reynes 2000a; 2000b; 2003; Petrie 1920)。しかし、複数の遺体が埋葬された合葬墓も存在する。単葬墓が一般的なため、合葬墓の造営には通常の埋葬とは異なる背景が存在することが想定できる。したがって合葬墓の造営の背景を探るための準備として、ここでは合葬墓の事例数とその単葬墓に対する割合と、合葬墓に葬られた遺体数の種類を観察する。ここでは、遺体の鑑定結果 (Warren 1897; Fawcett 1902) とフィールドノートや発掘報告書 (Petrie and Quibell 1896) の記載から被葬者の人数に関する情報が得られた、965 基の墓を対象とする。墓地別の内訳は、大墓地東地区 588 基、同西地区 190 基、同南地区 48 基、T 墓地 42 基、B 墓地 97 基である。このうち、大墓地南地区では合葬墓を全く確認できなかったため、分析から除外した。

##### 6.3.1.1. 各墓地における単葬墓と合葬墓の割合と数に関する分析

まず 5 ヶ所の墓地における単葬墓と合葬墓の割合を把握する。図 6.6. に大墓地南地区を含む各墓地における全時期の墓を対象にした単葬墓と合葬墓の割合を示した。単葬墓に対する合葬墓の割合は、大墓地東地区は 7.82%、同西地区は 9.47% なのに対し、T 墓地は 16.67%、B 墓地は 14.43% と若干高い。しかしどの墓地でも合葬墓の割合は低いことには変わらない。この中でも T 墓地と B 墓地は構成墓数が大墓地東地区や同西地区よりも少ないにも関わらず、合葬墓の数が多いことが注目できる。

この結果を造営時期の観点からさらに読み解くために、大墓地南地区を除いた 4 ヶ所の墓地における単葬墓と合葬墓の具体的な数を段階別に表 6.15. に示した。段階が明らかな事例の場合、大墓地西地区を除いて概ね Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階に合葬墓が多く造営されることが窺える。大墓地東地区の場合は、Ia1-Ia3 段階から Ib1-Ib2 段階が最も多く合葬墓が造営された。一方で、T 墓地と B 墓地の場合は Ib1-Ib2 段階と IIa1-IIa2 段階に合葬墓の造営に限られる。これらの墓地における造営期間の集中とはやや異なるのが大墓地西地区で IIIa1-IIIa2 段階や IIIb 段階でも 1-2 基の造営が確認できた。ただし西地区では Ib1-Ib2 段階や IIa1-IIa2 段階でも合葬墓の造営が見られるので、ほかの墓地と大きな相違点があるわけではない。また、Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階は墓地利用が増える時期なので、合葬墓の造営も増加するとも受け取れる。以上から、各墓地では概ね合葬墓が造営される時期の傾向に共通性が見られるとともに、各墓地独自の細かな特徴として大墓地東地区では墓地利用の初期から合葬墓の造営がある程度あったことと、大墓地西地区に関しては造営される時期の長さの点でほかの時期とはやや異なることが確認できた。

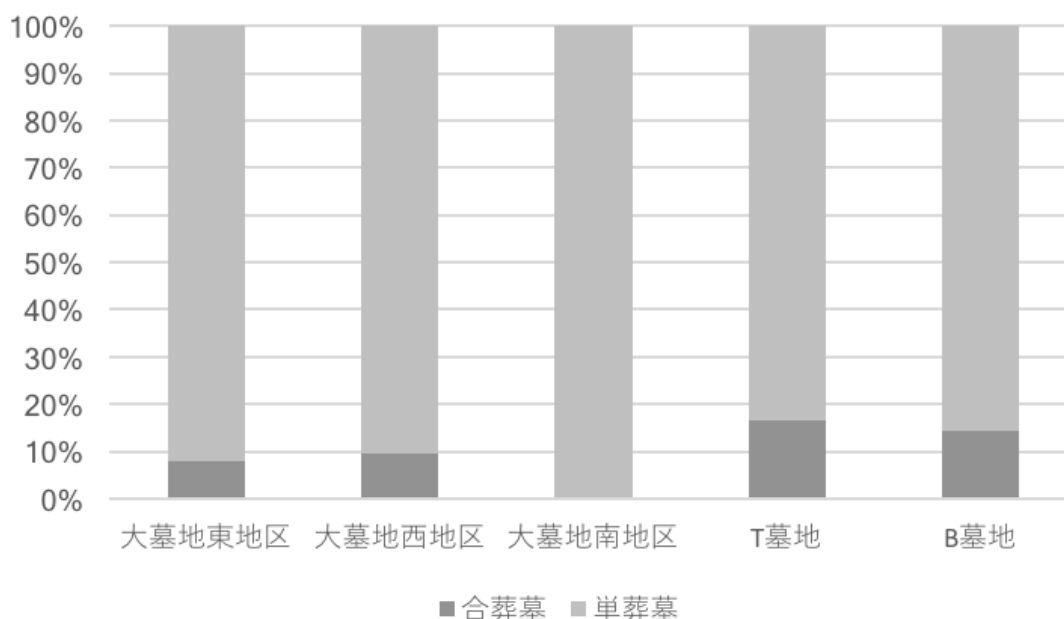


図 6.6.5 ケ所の対象墓地における単葬墓と合葬墓の割合

表 6.15.4 ケ所の対象墓地における単葬墓と合葬墓の数

基本段階	大墓地東地区		大墓地西地区		T墓地		B墓地	
	単葬墓	合葬墓	単葬墓	合葬墓	単葬墓	合葬墓	単葬墓	合葬墓
Ia1-Ia3	45	10	1	1	0	0	4	0
Ib1-Ib2	198	24	36	3	0	1	26	4
IIa1-IIa2	126	6	45	2	16	6	18	4
IIb	4	1	6	0	1	0	1	0
IIIa1-IIIa2	4	0	5	1	8	0	0	0
IIIb	3	0	3	2	1	0	0	0
IIIc	0	0	2	0	0	0	0	0
不明	162	5	74	9	9	0	34	6
合計	542	46	172	18	35	7	83	14

### 6.3.1.2. 合葬墓に葬られた遺体数の種類に関する分析

墓から発見された遺体を人数別に計数したところ、表 6.16.の結果が得られた。合葬墓の人数は 2 人埋葬が合計 62 基であり、どの墓地でも最も多い。一方で 3 人以上の墓も少数あり、3 人埋葬の墓は大墓地南地区以外の 4 ケ所の墓地で確認でき、4 人以上の埋葬は大墓地南地区以外の 4 ケ所の墓地で 11 基確認できた。なおこの中でも 5 人以上の遺体数が検出された墓は合計 6 基で、内訳は、5 人埋葬 1 基、6 人埋葬 2 基、7 人埋葬 3 基である。5 人埋葬は大墓地西地区で、7 人埋葬うち 1 基が大墓地東地区で確認できた。残る 6 人埋葬と 7 人埋葬の各 2 基の墓は全て T 墓地で検出された。

以上から、大墓地東地区、同西地区および B 墓地では、1 つの墓に葬られる遺体の数が大きくなればなるほど墓の数は減ることが読み取れるものの、T 墓地はこの傾向からは外れており 6 人以上が葬られた墓が多いのが特徴である。この T 墓地の特徴は 6.4.1.で述べる埋葬様式との関わりがある。また、大墓地東地区では遺体数の種



表 6.16. 5ヶ所の対象墓地における遺体数別の墓数

墓地	単葬墓		合葬墓		
	1人	2人	3人	4人以上	
大墓地東地区	542	36	6	4	
大墓地西地区	172	15	2	1	
大墓地南地区	48	0	0	0	
T墓地	35	1	2	4	
B墓地	83	10	2	2	

類が多いことも特徴である。B 墓地には 5 人以上の遺体が埋葬された合葬墓はないが、それ以外では大墓地東地区に次いで種類が多い。

この結果をさらに時期別に示した結果が表 6.17. である。この表を観察すると、Ib1-Ib2 段階にもともと検出数が多い 2 人埋葬の墓が多数含まれる点は表 6.15. の結果を追認するが、一方で、4 人以上の遺体数が検出された墓に着眼すると、大墓地東地区や同西地区では、Ib1-Ib2 段階以前の墓が多いのに対し、T 墓地は IIa1-IIa2 段階に多いことが特徴である。T 墓地は Ia1-Ia3 段階には利用が開始されていない点はあるが、4 人以上という多人数の埋葬は、カテゴリーとしては同一であっても T 墓地とそれ以外の墓地とでは持つ意味合いが異なることが予想される。一方で、3 人埋葬は墓地によって確認できる段階が異なり、明瞭な時期的傾向性は看取できない。B 墓地には 4 人埋葬もあるものの母集落が異なるため、それ以外の 4ヶ所の墓地とは同一の視座で見ることができないが、IIa1-IIa2 段階に合葬墓に含まれる遺体数の種類が多い点が特徴である。

表 6.17. 合葬墓が検出された 4ヶ所の対象墓地における遺体数別/段階別の墓数

基本段階	大墓地東地区			大墓地西地区			T墓地			B墓地		
	2	3	4+	2	3	4+	2	3	4+	2	3	4+
Ia1-Ia3	9	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0
Ib1-Ib2	18	2	2	3	0	0	0	0	1	3	0	0
IIa1-IIa2	5	0	1	2	0	0	1	2	3	3	1	1
IIb	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
IIIa1-IIIa2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
IIIb	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
IIIc	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明	3	4	0	8	1	0	0	0	0	4	1	1
合計	36	6	4	15	2	1	1	2	4	10	2	2

### 6.3.1.3. 墓 1 基あたりの被葬者の人数の分析のまとめ

以上から、対象の 5ヶ所の墓地遺跡では単葬墓が圧倒的に多く、合葬墓の件数は限定されることが読み取れた。また合葬墓に関しても墓地によって固有な特徴が読み取れた。全く合葬墓が検出されなかった大墓地南地区の事例がある一方で、遺体数が様々な大墓地東地区や T 墓地の事例も確認できた。特に T 墓地はそれ以外の対象の墓地とは異なる特徴が確認できた。T 墓地以外の墓地に概ね共通する特徴は、通時的に最も多い合葬墓は 2 人埋葬の墓で 3 人以上の墓は人数が多くなるごとに少なくなるか同一な点である。また大墓地に限って言えば、4 人以

上の墓は利用期間の初期に造営されることが多い。T 墓地は逆に 2 人埋葬は 1 例しかなく、5 人以上埋葬が多く、特に IIa1-IIa2 段階に造営されることが特徴だった。また、B 墓地では 2 人埋葬が多数なことは当てはまるが、3 人の遺体が葬られた墓が造営されるのは墓域利用の初期でなく、中盤から終盤だった。

以上の結果では、造営される墓の数が増加すると合葬墓も低いながら一定の割合で造営されることが読み取れた。墓地利用が盛んになるにつれて、合葬墓を造営する必要が生じることも増えたと考えられる。墓地利用が盛んになることは母集落の人口増加と関連するので、サウスタウンの住人から死者が出る機会も増えることになり、合葬の機会も生じた可能性がある。これまで、例えば母子埋葬の場合は産褥死などが要員として挙げられた (Midant-Reynes 2000a; Thomas 2004) が、同時に同時期に発生した死者を便宜的に葬った可能性も提示されてきた (cf. 黒沼 2017)。ナカダ遺跡に関しては、Ib2-IIa1 段階に相当するナカダ II 期にサウスタウンの規模が拡大し、人口も増加したことが考えられており (Hassan et al. 2017a)、産褥死以外にも偶発的な死者の発生による合葬墓の造営も想定される。この点は 6.3.2. で遺体の性別と年齢とも絡めながら考える。

一方で、初期の 4 人以上の埋葬を伴う墓では、単なる同時埋葬ではなく儀礼としての埋葬である可能性も考慮される。例えば、アダイマ遺跡西地区には Ia3 段階に概ね相当するナカダ IC 期の 6 人埋葬の事例がある (55 号墓) (Crubézy et al. 2002: 133–40; Crubézy et al. 2008)。ナカダ遺跡の場合大墓地東地区で Ia2 段階の 4 人埋葬の事例 (1587 号墓) が確認でき、類例の可能性はある。

また、T 墓地に関しては、5 人以上の埋葬であっても意味合いは異なり、T 墓地以外で見られる通常の一次葬墓ではなく二次葬墓または追加埋葬墓である。6.4.1. で検討するが、例えば T4 号墓や T5 号墓の場合は二次葬墓の場合は解剖学的な原位置が保たれないバラバラの遺骨が検出され、T15 号墓や T23 号墓のような追加埋葬墓の場合はレンガ造りで反復的な遺体の収納を前提とした構造を持つ。このようにある墓から多数の遺体が検出された場合でも、墓地によっては異なる埋葬様式の結果である場合もある。

墓 1 基から検出される遺体数に関する特徴は墓地によって様々だが、大墓地東地区と同西地区では合葬墓が Ia1-Ib1 段階前半に相当するナカダ I 期に多いという一般的な見解は、人数が多い墓に限っては当てはまるものの、2 人埋葬なども含めれば当てはまらないことが確認できた。また T 墓地に関してはこの属性でもほかの墓地とは異なる特徴を持つことが浮き彫りになった。

### 6.3.2. 被葬者の性別と年齢の分析

分析にあたり、6.3.1. と同じく出土人骨の測定結果 (Fawcett 1902; Warren 1897) やフィールドノート、発掘報告書 (Petrie and Quibell 1896) から抽出した遺体の性別と年齢に関する情報を取りまとめ、対象墓地ごとに結果を提示・検討した。以下に提示した結果は、各墓地における被葬者の性別別人数と、時期別の人数である。これは墓地における性別別構成を把握するため、時期別の人数は墓地が最も頻繁に用いられた時期を把握するためである。さらに各墓域の状況を把握した上で、墓域間の比較を行い、墓地利用が盛んな時期の異同を確認した。

6.3.1. では墓の基数を単位に資料を計数したが、ここでは被葬者数を単位に計数するため、被葬者数は 6.3.1. とは異なる。対象とする被葬者の合計人数は 1121 人である。その内訳は、大墓地東地区 667 人、同西地区 216 人、

同南地区 50 人、T 墓地 68 人、B 墓地 120 人である。

まず各墓地における性別別の人数を 5.2.1. で定めた分類に則り、割合を 100% 積み上げ縦グラフで示した (図 6.7.)。また具体的な数値は表 6.18. に示した。図 6.7. 内の割合は同じ墓地内での各分類の比率を示している。まず T 墓地以外は性別に関する記録がない遺体が多いことに注意を払う必要がある。その上で性別が確認された事例を観察すると、大墓地東地区では男性が 128 人、女性が 153 人、性別不明が 149 人確認できた。判明している分では男性よりも女性の比率が高い。ほかに T 墓地と B 墓地でも女性の比率が男性に対して高い。大墓地東地区に関しては女性の方が 20 人以上多く鑑定されていることは注目される。一方で大墓地西地区と同南地区では男性の方が多くは差は顕著ではない。ただし、性別に関する記録がない遺体に加えて性別不明な遺体も多いので、この割合の妥当性は高くない。次に各段階での男女比を検討し、墓地利用の高低の観察も試みる (表 6.19.)。

まず大墓地東地区では、特に Ib1-Ib2 段階に最も多くの被葬者が確認でき、さらに IIa1-IIa2 段階にも多くの被葬者が確認できることから、この期間は多くの墓地利用があったことが推定できる。この傾向は同じく墓地の利用期間が長い大墓地西地区でも同じである。Ib1-Ib2 段階以降は、大墓地南地区や T 墓地も利用が開始しているので、この時期はサウスタウンから死者が多く出たことがわかる。一方母集落が別の B 墓地でもこの期間の遺体が多く、サウスタウンと同じく死者が多かったことがわかる。

各段階における男女比に関しては、大墓地東地区では上記の主要な段階を含む Ia1-Ia3 段階から IIa1-IIa2 段階には女性の方が多く、同時期のほかの遺跡では B 墓地が似た様相を示す。しかし、そのほかの墓地では概ね同数か差が 1 人程度である。何れにしても性別不明な遺体や記録がない遺体が多いのでこれに関しても確実な言及はできない。

なお、被葬者の年齢に関しては特に子どもは 28 人分が鑑定されているにすぎない。墓地別の内訳は、大墓地東地区 22 人、同西地区 2 人、T 墓地 1 人、B 墓地 3 人である。このうち 15 人が合葬墓から検出された。ここから子どもの埋葬は単独で埋葬される場合と、大人の被葬者と合同で葬られる場合にあまり数の上での違いがないことがわかる。ただし、特異な事例もあり大墓地東地区の 1411 号墓 (Ib1 段階) は大人 1 人に子ども 6 人が埋葬された墓だった。子どもが一度に 2 人以上埋葬されることはこの事例以外にないため、通常の埋葬とは異なる可能性がある。また T 墓地の T15 号墓では 4 人の成人と一緒に検出されたが、この墓は反復的な埋葬を前提とした日乾レンガ使用墓であり、この子どもは有力者の系統の可能性もある。なお子どもの墓で確認できた段階上の時期

表 6.18.5 ケ所の対象墓地における性別別の被葬者数

墓地	男性		女性		不明		記録なし		合計
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	
大墓地東地区	128	19.19%	153	22.94%	149	22.34%	237	35.53%	667
大墓地西地区	30	13.89%	27	12.50%	68	31.48%	91	42.13%	216
大墓地南地区	10	20.00%	9	18.00%	14	28.00%	17	34.00%	50
T 墓地	22	32.35%	29	42.65%	8	11.76%	9	13.24%	68
B 墓地	29	24.17%	34	28.33%	21	16.67%	36	21.67%	120
合計	219		252		260		390		1121

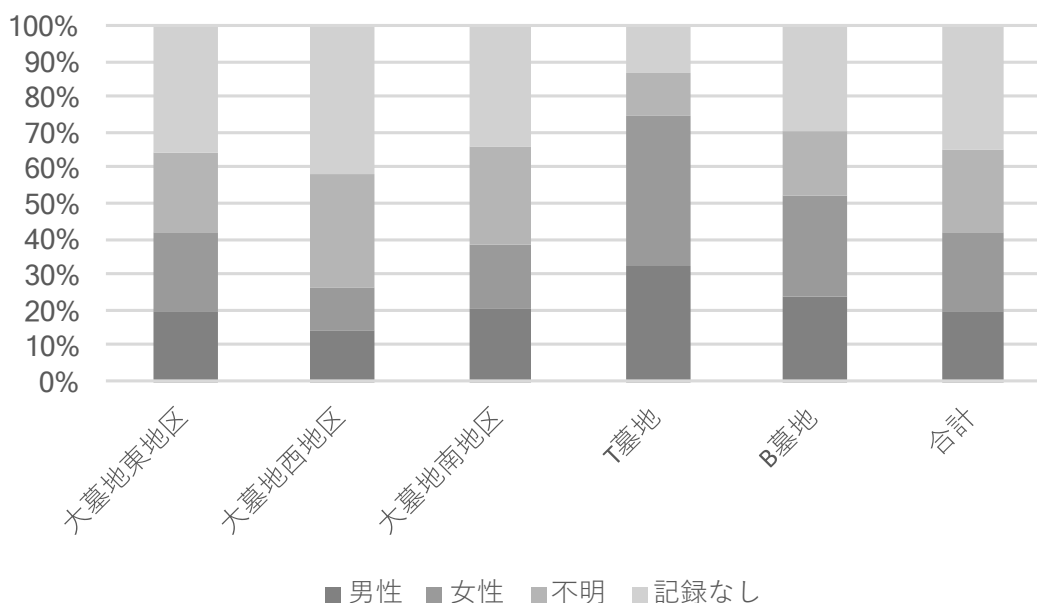


図 6.7.5 ケ所の対象墓地とそれらの合計時の遺体性別の割合

表 6.19.5 ケ所の対象墓地における性別別/時期別の被葬者数

大墓地東地区				
時期	男性	女性	不明	記録なし
Ia1-Ia3	12	15	15	19
Ib1-Ib2	45	50	52	116
IIa1-IIa2	25	40	32	40
IIb	4	1	1	2
IIIa1-IIIa2	1	1	1	1
IIIb	0	1	1	1
IIIc	0	0	0	0
不明	39	45	47	54

大墓地南地区				
時期	男性	女性	不明	記録なし
Ia1-Ia3	0	0	0	0
Ib1-Ib2	0	0	0	1
IIa1-IIa2	1	2	5	5
IIb	0	0	2	1
IIIa1-IIIa2	1	0	0	2
IIIb	0	0	0	0
IIIc	0	0	0	0
不明	8	7	6	3

B墓地				
時期	男性	女性	不明	記録なし
Ia1-Ia3	3	1	0	0
Ib1-Ib2	9	12	7	7
IIa1-IIa2	1	6	8	13
IIb	1	0	0	2
IIIa1-IIIa2	0	0	0	0
IIIb	0	0	0	0
IIIc	0	0	0	0
不明	15	15	6	14

T墓地				
時期	男性	女性	不明	記録なし
Ia1-Ia3	0	0	0	0
Ib1-Ib2	3	3	0	0
IIa1-IIa2	15	16	8	4
IIb	0	1	0	0
IIIa1-IIIa2	4	3	0	1
IIIb	0	0	0	1
IIIc	0	0	0	0
不明	0	6	0	3

大墓地西地区				
時期	男性	女性	不明	記録なし
Ia1-Ia3	0	0	1	5
Ib1-Ib2	5	5	13	19
IIa1-IIa2	8	7	14	20
IIb	1	3	1	1
IIIa1-IIIa2	2	0	4	2
IIIb	2	2	2	2
IIIc	0	0	1	1
不明	12	10	32	41

は Ib1-Ib2 段階が 8 人と多いが、1411 号墓の事例がこの数に大きく影響している。ほかにも子どもの埋葬が存在した可能性は十分に考えられるが、子どもの骨が残りにくいことや記録の残りが悪いことから不明である。

以上から被葬者の性別と年齢に関しては確実な言及が難しいことが示された。しかしこの中で重要な点は被葬者の人数で、墓地がどの段階に盛んに利用されたかが看取できる。上記の結果からは Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階にどの墓地も利用が盛んになることが読み取れる。6.3.1.3.でも指摘したようにこの時期は、サウスタウンの人口が増加した時期とされており (Hassan et al. 2017a)、墓地からは遺体数の増加と大墓地南地区や T 墓地の利用開始など、新しい墓地が開かれた点にその痕跡が読み解ける。第 4 章で言及した通り、この時期はナカダ地域で中

央化が起こり、それまでのナカダ文化初期に一定の間隔で分散して存在していた小集落が廃絶し、サウスタウンやおそらくノースタウンに人口が集約化した時期とされる。この文脈は B 墓地の母集落である Kh.4 地点にも当てはまり、Ib2 段階にはこの集落が廃絶して住民がサウスタウンに移ったとされる (Hassan et al. 2017a)。IIa1 段階以降の墓は、Kh.4 に系統を持つサウスタウンの住人によって造営された可能性が指摘されており (Hassan et al. 2017a)、特に IIa1-IIa2 段階における B 墓地の利用の高まりはサウスタウンの人口動態の影響を受けていると考えられる。したがって B 墓地では、IIa1-IIa2 段階以前と以後では墓地利用の状況が異なる。

### 6.3.3. 出土遺体に関する属性の分析のまとめ

以上、出土遺体の属性に着眼してナカダ遺跡を観察した。ここで明らかになった点は、合葬墓の造営は散発的で、基本的には単葬墓が主体だったこと、死者の発生に起因する墓地の利用が特に Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階に最も盛んで、地域の人口の増加と関連している可能性があることである。また男女比は遺体の人類学的観察により同定された事例に限れば半数か女性が多いことが見出せたが、未鑑定の遺体が多いことや情報が欠落している部分も多いため確実とは言えなかった。年齢に関しては、ごく一部の遺体が 19 世紀末に詳しく結果が公表されたのみ (Fawcett 1902) で、確実に子どもと判別できる事例以外は情報の解像度が格段に悪いことが大きな問題だった。ただし子どもの墓に関しては、単独で墓が造営される場合と、成人と合葬で造営される場合の数にあまり違いがないことも現在利用可能なわずかな情報の範囲では読み取れた。これらの分析で有意義だった点は、合葬墓の割合と墓地ごとに異なるその性格、および墓地利用の多寡である。これらの点はそのほかの属性と複合し、かつの後章で実施するクラスター分析による墓の区分と序列化の結果と組み合わせて考察する際に有力な情報となると考えられる。なお、ここでは合葬墓を墓 1 基あたりの被葬者について検討する際に扱ったが、属性としては 6.4. で検討する埋葬様式に含めることができるとも捉える。しかしここでは被葬者の人数との親和性が高いことから被葬者に関する属性の一環としてここで検討したことを付記する。

## 6.4. 埋葬様式に関する属性の分析

### 6.4.1. 埋葬様式に関する検討

ナカダ遺跡の埋葬様式は一次葬がほとんどなため、5.2.1. で挙げた例外的な事例を検討の中心に置き、それらの把握を試みた。埋葬様式の検討の対象墓は 6.3.1. で行った分析の場合と同様なので、数はそちらを参照されたい。

一次葬以外では、例外的な埋葬様式は 9 基のみで確認できた (表 6.20.)。この数はフィールドノートで確認可能な墓 965 基のうちのわずか 1 %弱である。したがって、例外的な埋葬様式の造営はナカダ遺跡では極めて限定的だったことが読み取れる。例外的な埋葬様式が確認できた墓地は大墓地東地区と T 墓地のみで、大墓地東地区では改葬墓のみが 3 基確認できた。一方で T 墓地では改葬墓と追加埋葬墓の両方が確認でき、その数は 2 基と 4 基だった。追加埋葬墓は T 墓地に限定された埋葬様式である。また、これらの例外的な埋葬様式は時期的にも限定されることが読み取れた。改葬墓は細分段階では Ib2 段階から IIa2 段階に概ね限定され、追加埋葬墓は I/II 後半段階から IIa2 段階に限定されることがわかった。ここから、どちらも時期的に限定された埋葬様式だった可能

性が読み取れる。また、墓1基あたりの遺体数の点では、これらの墓は1基を除き複数の遺体が埋葬された合葬墓だった。単葬墓で改葬された事例は見られない。例外の1基であるT25号墓から出土した遺体は腕の骨1本のみだが、T23号墓よりもやや簡易だが規模と構造が類似するため、複数の遺体が葬られた可能性がある。

表 6.20.ナカダ遺跡で確認できた例外的な埋葬の墓とその種類の一覧

墓番号	細分段階	基本段階	墓地	種別
594	Ib2	Ib1-Ib2	大墓地東地区	改葬
878	Ib1-IIa1	?	大墓地東地区	改葬
880	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2	大墓地東地区	改葬
T4	Ib2	Ib1-Ib2	T墓地	改葬
T5	I/II後半	IIa1-IIa2	T墓地	改葬
T15	IIa2	IIa1-IIa2	T墓地	追加
T20	IIa1-IIa2?	IIa1-IIa2	T墓地	追加?
T23	I/II後半-IIa1	IIa1-IIa2	T墓地	追加?
T25	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2	T墓地	追加?

以上から、ナカダ遺跡では改葬も追加埋葬も時期的に限定された埋葬様式だったことがわかった。改葬墓に関しては、ピートリーはT5号墓では遺体の大腿骨の近位端や遠位端が破損して出土したために、骨髓液の摂取などの食人行為が行われた痕跡としたが(Petrie and Quibell 1896: 32)、人骨に被熱痕が見られないことからこの説は否定されている(Hoffman 1979: 116-7)。ナカダ遺跡では、複数人分の遺骨が用いられてそれらが山状に積み上げられた事例(T5号墓)や整然と並べられた事例(878号墓・880号墓)など視覚的に特徴的な遺体の配置がされている。したがって、これらの改葬墓は葬送儀礼の一環として造営された可能性が考えられる。墓地研究では、社会の構成員が参画して葬送儀礼を行うことでその社会の共同体意識を確認し高める役割があり、その一環として参画者に視覚的に注目される遺構の配置をとる場合がある点が指摘されている(e.g. Barrett 1990; Mizoguchi 2014)。こうした説を踏まえた場合、T5号墓などの改葬墓は共同体意識を確認するための儀礼的な墓として機能したことが推定できる。T5号墓やT4号墓はナカダ遺跡の中でも大型でなおかつ副葬品も多種多数であるため、サウスタウンの有力者の墓と見る説も存在する(e.g. Cialowicz 1998; Kemp 2006; cf. Fattovich 2006)が、この2つの墓に関してはむしろ儀礼の場としての機能を持っていた可能性が指摘できる。有力者の墓としてより有力なのはむしろ追加埋葬が可能な構造を持ったT15号墓やT23号墓、T25号墓である。特にT15号墓やT23号墓は墓へ入るための入り口または傾斜路が存在した可能性が提示されており(Kemp 1973)、また6.2.4.で扱ったように日乾レンガを使用し内壁を有して部屋を形成している点からも、1回の埋葬で墓を閉じるのではなく追加で埋葬することが可能な構造を有していた。この構造の特徴は、ある程度の期間に特定の墓に継続的に埋葬することは、例えば血縁や系統などの墓に葬られることが可能な被葬者側の条件が存在する可能性を提示する。IIa1-IIa2段階では、日乾レンガ使用墓の構造自体がナカダ文化全体でも珍しい事例であり、有力者の墓はむしろ追加埋葬が可能な構造を持つこれらの墓である可能性がある。6.2.3.で触れたように、日乾レンガを使用した事例は有力者の墓の可能性が指摘できる。T15号墓やT23号墓、T25号墓は日乾レンガを使用するとともに追加埋葬が可能な構造を持つことから、I/II後半段階からIIa2段階における有力者の墓である可能性が高い。したがって追加埋葬は、

有力者に占有の埋葬様式だった可能性が指摘できる。

以上から、ナカダ遺跡で見られる埋葬様式は一次葬がほとんどで、改葬や追加埋葬は極めて例外的なことがわかった。しかし、例外的な改葬や追加埋葬にはある特定の時期だけに見られた一過性の埋葬で、それぞれ通常の埋葬とは異なる特徴を持つことがわかった。改葬は共同体意識の醸成と関わる儀礼行為の一環として考えられ、追加埋葬はナカダ遺跡の有力者に特有な埋葬様式の1つである可能性が指摘できた。

#### 6.4.2. 遺体の加工に関する検討

改葬墓と関連して、遺体加工に関する検討も必要である。ピートリーはナカダ遺跡 T 墓地 T5 号墓の遺体をナカダ遺跡で見られる様々な遺体の加工の最も顕著な事例として挙げた (Petrie and Quibell 1896: 32-3) が、実際には埋葬様式が異なるため分別して考える必要がある。例えば、ピートリーは遺体の頸部や胴体部の切断行為や、頭部の取り外し行為などの事例を挙げているが、これらの墓では被葬者の態勢は典型的なナカダ文化の埋葬様式である屈葬状態である。したがって遺体の完全な腐朽ののちに遺骨を配置する 6.4.1. で扱った改葬とは性質が異なる。むしろ、一次葬の際に遺体へ加工を加えた事例として捉えられる。

ナカダ遺跡での遺体加工の事例を検討するためには、ナカダ文化のほかの墓地遺跡における遺体のより明瞭な加工の事例の検討が有用な情報を提供する。遺体の加工に関しては、出版・未出版のナカダ文化の墓 2000 基を集計した研究によると、計 1898 体分の遺体のうち 64 体 (およそ 3.4%) に何らかの遺体への処置が見られた (Tamorri 2017: 448)。この処置の事例として、遺骨への彫り込み (bone incision) や、二次的な遺骨の埋葬、遺骨の関節外しや遺骨の移動、遺骨の除去が挙げられた。64 体の遺体のうち、遺骨への彫り込みは 28 体 (およそ 43.8%)、二次的な遺骨の埋葬は 21 体 (およそ 32.7%)、遺骨の関節外しや遺骨の移動は 12 体 (およそ 18.8%)、遺骨の除去は 3 体 (およそ 4.7%) 確認できたとされる (Tamorri 2017: 448-50)。この区分は、内実の異なる様々な事例が含まれるため事前の整理が必要だが、ナカダ文化墓における遺体の処置事例の種類を検討するために有用である。ここでは遺骨への彫り込みと二次的な遺骨の埋葬つまり改葬は二次葬に当たるため一旦保留とし、一次葬で見られる処置の事例をまず検討する。遺骨の関節外しや遺骨の移動・遺骨の除去は、遺体の切断も含めて遺骨の原状変更としてまとめて扱う。

##### 6.4.2.1. 遺骨の原状変更

特に遺体の切断や遺骨の除去に関しては、ピートリーがナカダ遺跡とバラス遺跡の発掘調査で最初に指摘したが、近年のヒエラコンポリス遺跡 HK43-44 地点やアダイマ遺跡西地区における発掘調査により、遺体の切断行為に関する研究が進んだ。両遺跡の調査から、遺体の切断は遺体軟質部の腐朽前と腐朽後のどちらの時点でも行われることがある点が明らかにされた。例えば、HK43-44 地点では全体のおよそ 5% に当たる 19 人分の人為的な頸椎の切断痕を持つ遺体が確認され (Dougherty and Friedman 2008: Table 1)、これらは腐朽前の切断の痕跡の事例としてされた。一方で、軟質部腐朽後の事例は、アダイマ遺跡西地区やゲルゼー遺跡、バラス遺跡で検出された。アダイマ遺跡西地区 88 号墓 (IIA-IIIB 期) (Crubézy et al. 2002: 195-7) では、頸椎部分での切断が見られるものの、

骨自体にはカットマークが見られなかったため、軟質部がある程度腐朽した後の頭部の取り外しが推定された (Crubézy et al. 2002; 2008)。ただし、この事例では残る遺体はナカダ文化の典型的な埋葬姿勢で原位置で検出されたことから、墓坑をすぐに埋め戻さずに軟質部の腐朽を待ったか、墓外で遺体の軟質部がある程度腐朽した後に墓坑に葬られたかのどちらかが考えられる。

また、近年発掘されたヒエラコンポリス遺跡 HK43-44 地点では、遺体の加工に関して新しい知見が提示され、腹部への詰め物などの王朝時代のミイラの製作に繋がる遺体の加工の痕跡が発見された (Jones 2007)。また、同地点では、未盗掘の 85 号墓から致命傷となった頭部への打撃による頭蓋骨の粉碎部に当て布を施して疑似的に完全な状態の遺体を取り繕ったと見られる事例が見つかった (Dougherty and Friedman 2008: 318, Fig. 4)。

これらの近年の事例の一方で、古い調査記録でも明確な遺骨の除去の事例が見られる。例えばバラス遺跡 177 号墓 (恐らく III 期) では、頭蓋骨が除去され、代わりに壺が頭蓋骨のあるべき場所に置かれていた (Petrie and Quibell 1896: pl. V, 31)。ただしこの埋葬に関しては、フィールドノートでは報告書とは異なり壺が頭部の位置からやや離れた墓坑南壁際から出土しているため、頭部の土器への置換はなく、単なる頭部の除去だった可能性も解釈された (Tamorri 2017: 454)。なお頸椎の切断痕に関する言及がないため、軟質部の腐朽後に頭部が除去されたと解釈されている (Tamorri 2017: 454) が、詳細は不明である。特に遺体の原状変更に関しては、特に近年の発掘調査で検討されることにより、詳細が明らかになる事例が多かった。

#### 6.4.2.2. 改葬に伴う遺体の加工

改葬に関しては、ナカダ遺跡以外でも複数の事例が報告されている。特にナガ・エツ=デイル遺跡 N7000 墓地の事例研究では、改葬行為による遺骨の配置した事例に関しては、視覚的に解剖学的な繋がりを意識した事例、解剖学的な繋がりにから逸脱した事例の 2 つが提示された。解剖学的な繋がりを意識した事例とは、例えば大腿骨と脛骨が並行して埋置された状態で検出されるなど、元来の解剖学的な骨の組み合わせを念頭に置いた遺骨の二次的な埋置が見られる事例のことを指す。ただし、遺体を構成する全ての骨が元の組み合わせを意識して埋置された状態を指す訳では必ずしもない。一方で、解剖学的な繋がりにから逸脱した事例は、そうした元来の解剖学的な組み合わせが全く見られない事例で、遺骨がある規則に則って配置された事例と頭部のみを二次的に埋葬した事例の 2 つにさらに細分される (Girardi 2017: 296-307)。解剖学的な繋がりを意識した事例には、ナガ・エツ=デイル遺跡 N7000 墓地 N7244 号墓 (恐らくナカダ IIA-C 期) (Girardi 2017: 297-9, Lythgoe and Dunham 1965: Fig. 60a) や、同 N7477 号墓 (IIB-C 期) (Girardi 2017: 299-301; Lythgoe and Dunham 1965: Fig. 134e)、アダイマ遺跡東墓地 162 号墓 (恐らく III 期) (Crubézy et al. 2002: 384-5) が挙げられている。エル=アムラー遺跡 a 墓地 a96 号墓 (S.D.60、IIIa1 段階相当) では、1 体分の遺体が一旦バラバラにされ、再度ナカダ文化の典型的な埋葬姿勢にある程度近似した状態で出土しており (Randall-MacIver and Mace 1902: pl. V)、この分類に入る。一方で、解剖学的な繋がりにから逸脱した事例で遺骨が規則的に配置された事例では、ナガ・エツ=デイル遺跡 N7000 墓地 N7196 号墓 (IA-IID2 期)、同 N7623X 号墓、同 N7403 号墓、N7522 号墓 (IID 期)、同 N7594 号墓 (IA-IID2 期) などが挙げられ、アダイマ遺跡東墓地 418 号墓 (III 期) (Midnat-Reynes et al. 1997: 206; Figs 4, 5) もこの事例に該当する可能性が示唆



された (Girardi 2017: 301–6)。この分類に則ると、アバディーヤ遺跡 B 墓地 B102 号墓 (I–IIB 期) (Petrie and Mace 1901: 33) や、ゲルゼー遺跡 206 号墓 (IIC–IID2 期) (Tamorri 2017: 451–2; Petrie et al. 1912: pl. III, 5) も含まれる。

このように改葬墓に関しては 2 種類の解釈が可能なが示されてきた。以上の解釈の事例に則り、ナカダ遺跡での遺体加工の事例を解釈する。

#### 6.4.2.3. ナカダ遺跡における遺体の加工に関する解釈

まず頭部の除去などに代表される遺骨の一部の除去に関しては、ピートリーが報告しているようにフィールドノート上でも非常に多く確認することができる。ただし、ナカダ遺跡の場合は初期に発掘調査されただけでなく、非常に短期間に大量の墓が発掘されたという事情があるため、遺体の検出状況の認定に問題があった点は否めない。例えば、盗掘などの人為的要因や自然的要因による遺体の破壊と、ナカダ文化期の人々が意図的に遺体の一部を除去した痕跡を区別することは非常に難しい。ナカダ文化期の墓は、埋葬から時間が経たないうちに盗掘されることが多く、特に貴石を用いたビーズなどが存在する頭部や腕部が盗掘による擾乱を被ることが多い。現状で確実な遺体除去の事例は遺体のほかの部位が解剖学的に揃っておりかつ原位置から検出された事例に限られる。さらにマットで包まれた遺体に頭部がなければ、その遺体からは頭部の除去が行われていた可能性が高い。この条件に当てはまる事例を確認すると、合計で 28 基が集計できた。墓地別の内訳は、大墓地東地区 6 基、同西地区 8 基、同南地区 2 基、B 墓地 12 基である。T 墓地では確認できなかった。ピートリーは様々な事例を報告書内で列記しているが、それらには不確実な事例も相当数含まれると思われる。この結果からは、事例は少ないもののある程度の数の遺体が原状変更を受けていた可能性が読み取れた。しかし、記録状況が悪いため確実な言明は不可能である。

この遺体の原状変更に関する不確実さの一方で、改葬墓に関しては遺体の検出状況が根本から異なるため、発掘者による認識が容易だったと思われる。ナガ・エツ=デイル遺跡 N7000 墓地の分類事例に準拠してナカダ遺跡の改葬墓の事例を検討すると、まず解剖学的な繋がりを意識した事例として、大墓地東地区 594 号墓、同 878 号墓、同 880 号墓は、複数人数分の大腿骨や脛骨が並行して置かれた状態で検出されているためこの事例に当てはめることが可能と考えられる。一方で、解剖学的な繋がりを逸脱した事例では、T 墓地 T4 号墓、同 T5 号墓が挙げられる。改装墓で見られる視覚を意図した意識的な遺骨の配置を考えると、埋葬を行う者が企図する理想的な埋葬の有様 (mortuary realisation) がナカダの葬送観念の中にあり (e.g. Wengrow and Baines 2004: 1097–100; Wengrow 2006)、それが 6.4.1. で指摘した共同体意識の醸成のために利用されたと解釈できる。

この文脈で考えた時、遺体の原状変更もまた葬送儀礼の一環として実施された社会的行動の一環であった可能性はあるが、具体的な背景は接近しがたい。ヒエラコンポリス遺跡 HK43–44 地点の研究では、社会的制裁の意味があった可能性が解釈として提示されている。ピートリーは祖先崇拜の観念と結びつけて解釈しているが、妥当性は不明である。ただ、遺体の原状変更は遺体の毀損と同義であり、王朝時代の来世観では五体が満足であることが重要な点を踏まえると、ヒエラコンポリス遺跡の事例で提示された社会的制裁はナカダ遺跡の事例にも当てはまる可能性はある。上記した通り、ヒエラコンポリス遺跡 HK43–44 地点では 85 号墓から損傷した部分を代替

物で取り繕った事例が報告されていることから、この事例は遺体が完全であることに重要性を置く葬送観念がナカダ文化期に存在したことの傍証の可能性がある。

#### 6.4.3. 埋葬様式に関する属性の分析のまとめ

以上、ナカダ遺跡で検出された埋葬様式とそれに付随する属性に着眼した観察と分析を行った。これらの属性に関しては、特に遺体と絡む情報を扱った場合、記録の残存状況が悪いことと、調査が初期に行われたために起こった調査手法上の問題により、非常に限定的な見解を得るに留まった。埋葬様式自体は、ナカダ遺跡ではほとんどの場合が一次葬で、改葬などの例外的な埋葬様式が極めて限定されること、なおかつそれらが時期的にも限定されることがわかった。特に追加埋葬に関しては、墓の構造面も考慮して有力者に専有な埋葬様式であることが示された。また、改葬に関しては、葬送行為を社会の構成員が共有・参画し、遺体を視覚的に有効に取り扱うことで、共同体意識などの確認に利用するための道具として利用された可能性を言及した。一方で、同様に遺体を利用し、加工を伴う埋葬の事例に関しては、情報の質が担保されないために極めて限定的なものの、ヒエラコンボリス遺跡の事例などを参照しながら社会的制裁が当てはまる可能性があることを言及し、王朝時代の来世観念の祖型がナカダ文化期にも存在する可能性を逆説的に提示した。埋葬様式は、ナカダ遺跡における標準的な埋葬と階層などの地位の違いによる分別・専有化などを明らかにし、葬送儀礼の社会的意味の解釈にも有用であることが以上から明らかになった。また葬送観念が実際に遺跡で検出される埋葬様式に与える影響についても限定的に言及できた。

#### 6.5. 副葬品に関する属性の定量的な分析

副葬品の定量的な分析のため、5.1.3.で記した 9433 点の副葬品を対象にする。これらの副葬品は合計で 1023 基の墓から出土した。墓地別の墓数の内訳は、大墓地東地区 633 基、大墓地西地区 226 基、大墓地南地区 48 基、T 墓地 48 基、B 墓地 68 基、である。墓地別の様相とその変遷を通時的に把握することを目的に副葬品の墓あたりの総点数と種類数の概況を求める。ある墓に納められる副葬品の総点数や種類数の優劣が明らかにできれば、対象の 5ヶ所の墓地における副葬品に関する属性の優劣が明らかになり、墓地の序列化が可能と見込まれる。以下で行う分析の手順は、6.2.1.で実施した墓の規模に関する検討に準拠した。

##### 6.5.1. 副葬品の総点数の分析

###### 6.5.1.1. 全墓地の副葬品の総点数

図 6.8.に各墓地で面積得られた墓 1 基あたりの副葬品の総点数の範囲を墓地別に箱ひげ図で示した。またこの図に対応する各墓地における不偏分散の平方根や相関係数などを含めた具体的な数値に関しては表 6.21.に示した。図 6.8.からは、副葬品の総点数の平均が B 墓地 6.85 点、大墓地東地区 7.76 点、大墓地西地区 11.52 点、大墓地南地区 12.58 点、T 墓地 15.27 点の順番に大きいことがわかる。しかし、各墓地を構成する墓に納められた副葬品の総点数に見られる差異の大きさから得られる様相はこの副葬品の総点数の平均とは異なる。すなわち大墓地

東地区や同南地区、T 墓地に関しては 0.72–0.81 の範囲に収まる一方で、大墓地西地区は 1.01、B 墓地は 1.06 と大きい。ここから、大墓地西地区や B 墓地には極端に総点数が少ない墓と多い墓が含まれていることがまず読み取れる。したがってこの平均総点数と変動係数から得られる墓地の様相は次の通りである。まず大墓地東地区は一般的に納められる副葬品が少ない。また、大墓地南地区と T 墓地は納められる副葬品が一般的に多い。しかし B 墓地は平均すると総点数は少ないが、その内実は墓ごとに大きく異なる。大墓地西地区も総点数が墓によって大きく異なるが、総点数が極端に多い墓が存在するために平均総点数も押し上げられる。この点は、箱ひげ図上で外れ値が多いことにも表れている (図 6.8)。外れ値を含めた総点数ごとの墓数を把握するために、2 点を 1 単位とした階級を設け、0 点から 30 点以上までの合計 16 の階級数を設定して度数分布と累積度数を検討する (図 6.9)

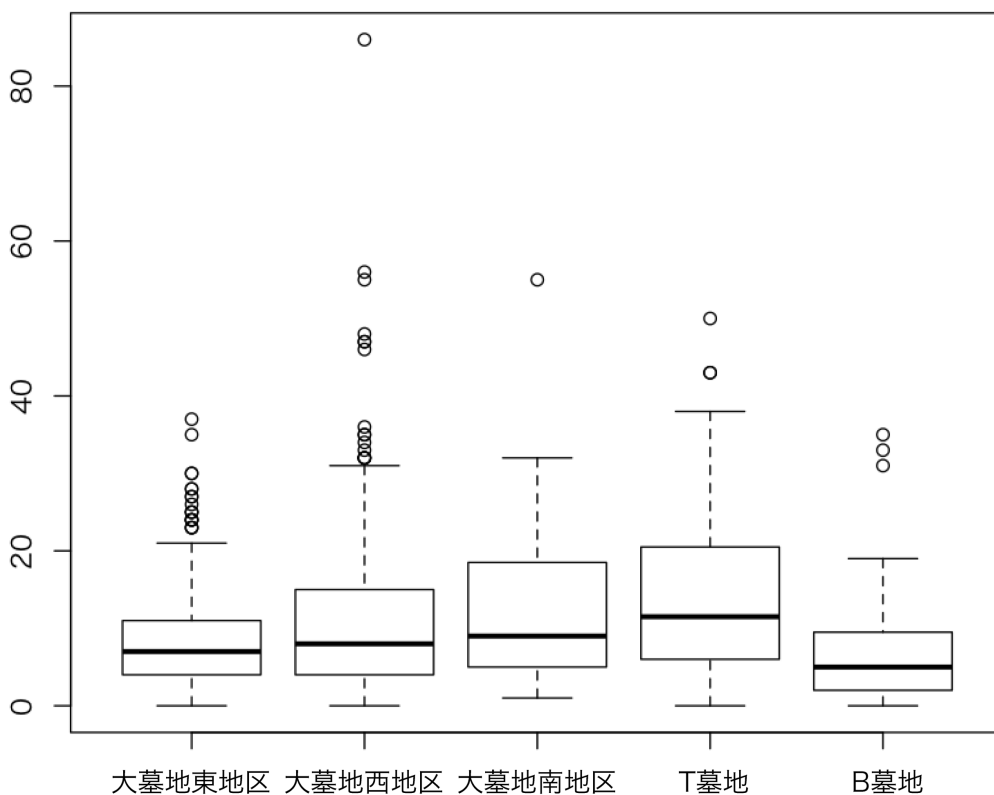


図 6.8. 各墓地における副葬品総点数の箱ひげ図 (y 軸の単位: 個)

表 6.21. 各墓地における副葬品総点数の詳細

副葬品総点数	大墓地東地区	大墓地西地区	大墓地南地区	T 墓地	B 墓地
最大値	37.00	86.00	55.00	50.00	35.00
第3四分位	11.00	15.00	18.25	19.25	9.25
中央値	7.00	8.00	9.00	11.50	5.00
第1四分位	4.00	4.00	5.00	6.00	2.00
最小値	0.00	0.00	1.00	0.00	0.00
平均	7.76	11.52	12.58	15.27	6.85
不偏分散の平方根	5.57	11.62	10.04	12.29	7.26
変動係数	0.72	1.01	0.80	0.81	1.06
墓の数	633	226	48	48	68

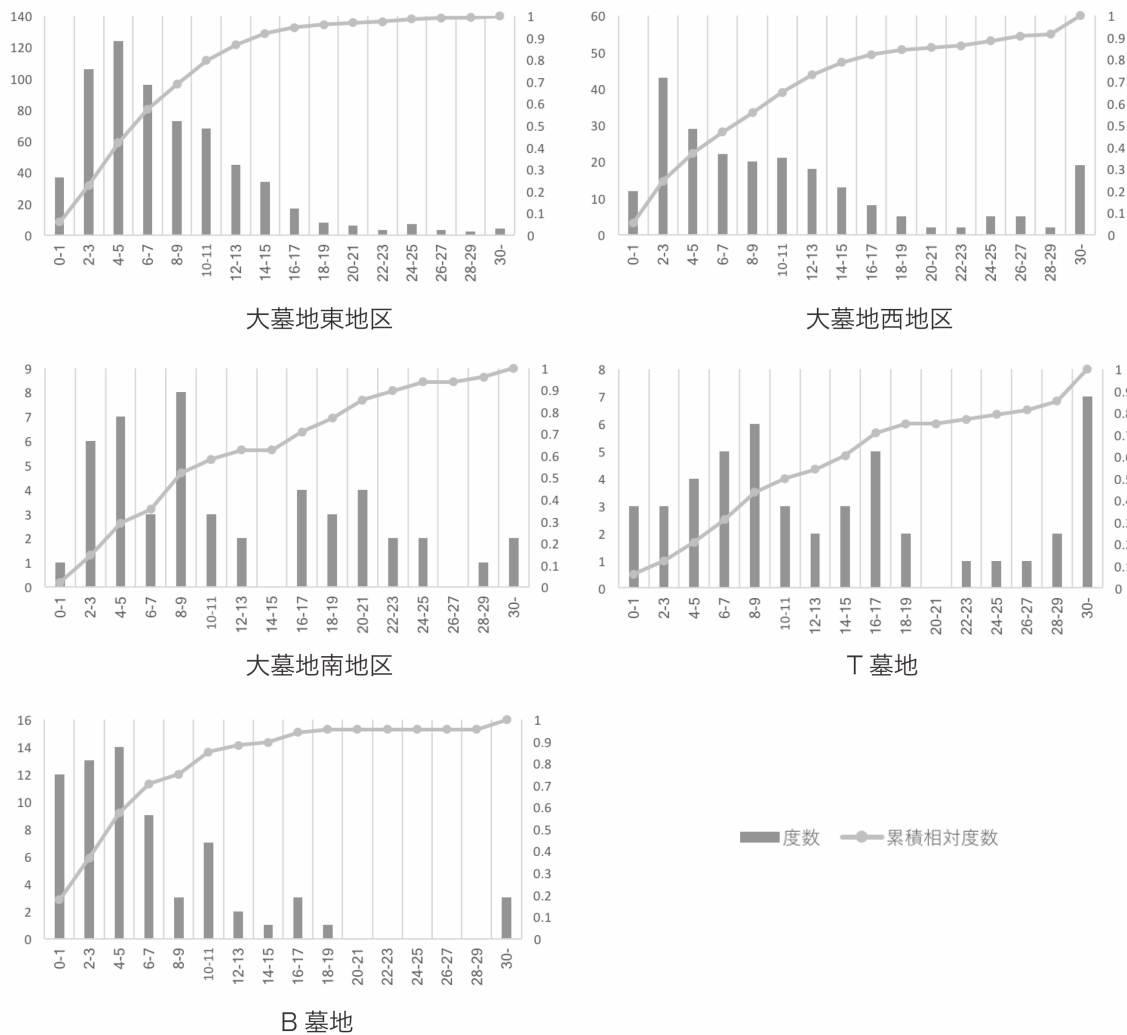


図 6.9. 各墓地における副葬品総点数の度数分布と累積度数 (y 軸の単位: 個)

と、各墓地における墓 1 基あたりに納められる副葬品総点数の分布がより明確になった。図 6.9.では第 1 軸に各単位に該当する墓の数である度数を、第 2 軸にその度数の累積を示している。また各墓地を構成する墓の数が極端に異なるため、y 軸の数値は意図的に統一していない。図 6.9.を検討すると、墓地によって度数分布は異なる様相を見ることが読み取れる。大墓地東地区では階級 4-5 点にピークを持つ右側に歪んだ分布を示し、総点数が大きくなるにしたがって度数も概ね減少する。しかし、この形状の分布を示す墓地は他にはない。ほかのどの墓地でもピークが 2 つ以上確認できる。大墓地西地区の場合、階級 2-3 点にピークを持ち以降は徐々に減少する右側に歪んだ分布である点は東地区と類似するが、階級 24-25 点や階級 26-27 点の度数が多くなるなどの違いがある。また階級 30 点以上の墓が多く、この点は図 6.8.で示された外れ値と対応する。ほかの 3 ヶ所の墓地における度数分布はさらに複雑な形状を示す。T 墓地は双峰型の分布形状に近いが、階級 28-29 点にもピークが見られる。これらの分布形状から得られる知見を墓地ごとにまとめると、大墓地東地区や西地区では基本的に 2-5 点の副葬品が納められることが多いことがまずわかる。大墓地西地区の場合は、極端に多い点数の副葬品を持つ墓も一定

数あり、この点は大墓地東地区とは異なる。一方でこれ以外の3ヶ所の墓地ではさらに納められる副葬品に明瞭な傾向は見出し難いが、特に大墓地南地区は大きく2極に分けることができ、2-9点の副葬品が納められる墓と16-21点が納められる墓があり、T墓地では6-9点の副葬品が納められる場合と16-17点が納められる場合、そして30点以上の場合の3つに分けられる。B墓地は基本的に0-5点の副葬品が納められるが、第3四分位が9.25点なため10点以上の墓が全体の1/4は存在することがわかった。

以上で概ね1基の墓に納められる副葬品の総点数の傾向は把握することはできた。しかし、この分析では全時期の墓を対象にしているため、時期ごとの特徴は掴みとれていない。以下では、墓地ごとに各時期における副葬品の総点数の推移を検討する。

#### 6.5.1.2. 大墓地東地区における副葬品の総点数の通時的検討

大墓地東地区の利用期間を段階に分け、各段階における総点数に関わる数値の詳細を一覧で表6.22に示した。また各段階における総点数の平均の推移を図6.10.上段左に示した。これらを確認すると、総点数の平均はどの段階でも10点を超えることなく、Ia1-Ia3段階からIIb段階までは8.6点から10点未満の間で推移することがわかる。またIIIa1-IIIa2段階以降は6点前後に減少する。一方で、各段階において構成する墓に納められる総点数の差異に着眼して変動係数を確認すると、Ia1-Ia3段階からIIa1-IIa2段階までは0.60から0.67の間に収まり、差異が極端に広がることはないと思取れる。IIb段階とIIIa1-IIIa2段階は0.87または0.75とやや大きくなるために差異が広がると見えるが、この2つの段階に属する墓の数が少ない点を考慮する必要がある。IIIb段階になると墓の数がさらに少なくなるだけでなく、変動係数も0.20になりほとんど差がない。したがって大墓地東地区では、長い利用期間の中で極端に墓の間で納められる副葬品に差異がつく段階は認められないことがわかる。各段階にごく少数の多量に副葬品を有する墓がある一方で、大多数の墓は副葬品の点数が少なかったことが読み取れる。

表 6.22. 大墓地東地区における副葬品総点数の段階別詳細

基本段階	総点数平均	総点数最大値	総点数最小値	不偏分散の平方根	変動係数	墓の数
Ia1-Ia3	9.00	37.00	1.00	6.00	0.67	70
Ib1-Ib2	8.66	35.00	1.00	5.70	0.66	273
IIa1-IIa2	8.85	26.00	1.00	5.34	0.60	110
IIb	9.80	23.00	4.00	8.56	0.87	5
IIIa1-IIIa2	6.20	13.00	2.00	4.66	0.75	5
IIIb	5.67	7.00	5.00	1.15	0.20	3
IIIc	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0

#### 6.5.1.3. 大墓地西地区における副葬品の総点数の通時的検討

次に大墓地西地区を検討すると、東地区とは異なる様相が見える。各段階における総点数に関わる数値の詳細を一覧で表6.23に示した。また各段階における総点数の平均の推移を図6.10.上段右に示した。明らかな点は、総点数の平均がどの段階でも10点を超えることで、特にIb1-Ib2段階からIIIa1-IIIa2段階までは、IIb段階がやや少ないものの、基本的に14点台半ばから15点大後半の間で推移することである。IIIb段階以降は徐々に減少する

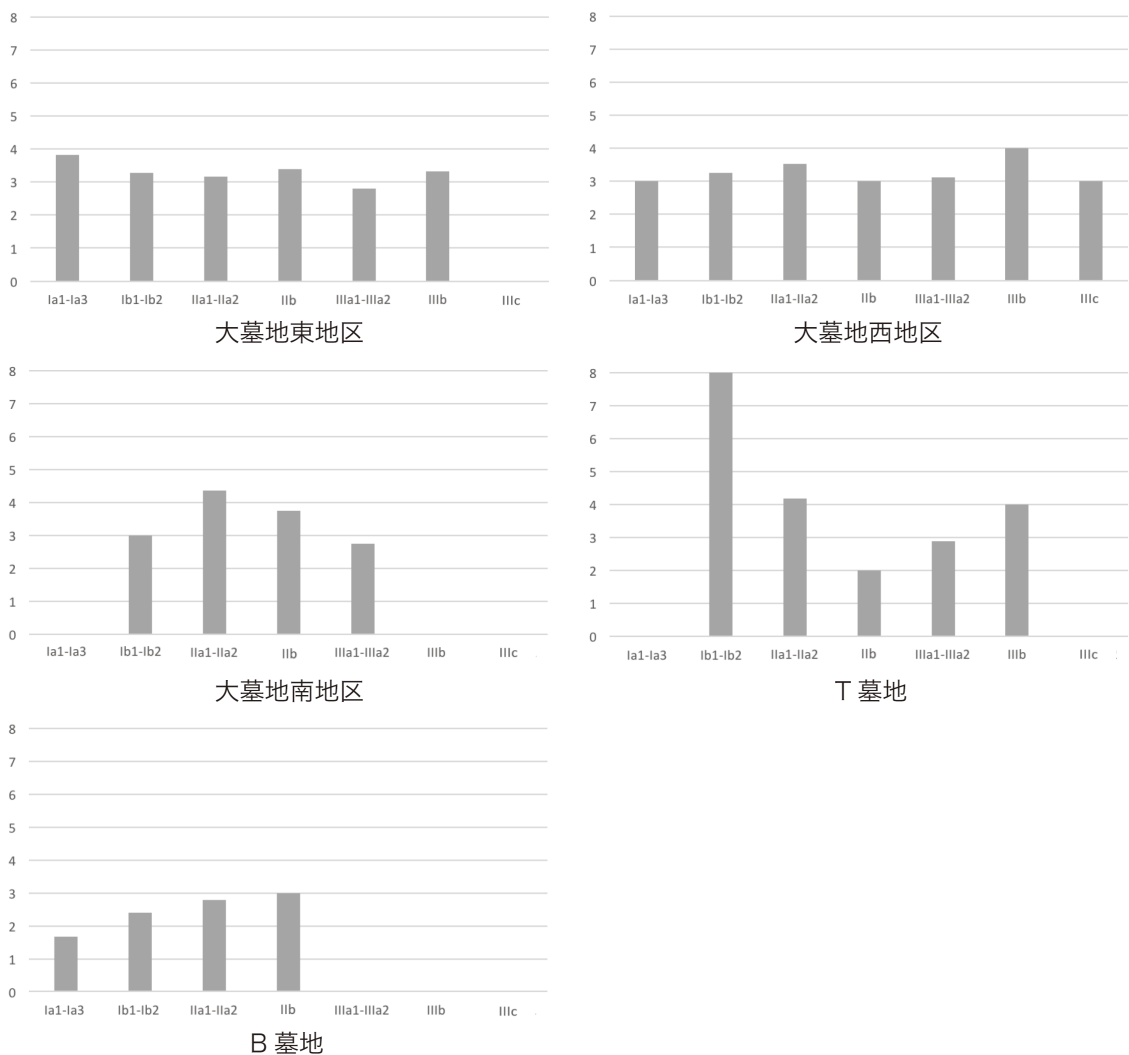


図 6.10. 各墓地における副葬品総点数の平均とその推移 (y 軸の単位: 点)

が、IIIc 段階でも 12 点を持つ。一方で、各段階において構成する墓に納められる総点数の差異に着眼して変動係数を確認すると、Ia1-Ia3 段階から IIb 段階まで 0.85 から 1.20 へと次第に大きくなることが読み取れ、差異が広がることがわかる。IIIa1-IIIa2 段階での差異は変動係数が 0.59 なために小さいが、IIIb 段階では再び 1.00 を超える。ただし IIIb 段階に関しては、属する墓の数が 2 基のみな点に注意を払う必要がある。注目すべき段階は Ib1-Ib2 段階と IIa1-IIa2 段階で、最も総点数が多い墓の 2 つがこの段階にある点である。変動係数と平均点数からみて、著しく多量な墓がある一方でそのほかの墓もある程度の量の副葬品を有しており、全般的に納められる副葬品の量が多かったことが読み取れる。図 6.8. や図 6.9. に表れていた外れ値の墓は概ねこの 2 つの段階に属していた。したがって大墓地西地区では、長い利用期間の中で墓の間で極端に納められる副葬品に差異がつく段階が Ib1-Ib2 段階や IIa1-IIa2 段階に見られることが読み取れた。Ia1-Ia3 段階時点でもある程度の総点数の差異はあったものの、Ib1-Ib2 段階以降はさらにその差異が拡大し、それが IIIb 段階までは維持されたことがわかる。各段階に少数ながら多量に副葬品を有する墓がある一方で、大多数の墓にも一定数の副葬品の点数が納められたことが読み取れる。

表 6.23. 大墓地西地区における副葬品総点数の段階別詳細

基本段階	総点数平均	総点数最大値	総点数最小値	不偏分散の平方根	変動係数	墓の数
Ia1-Ia3	10.20	25.00	3.00	8.67	0.85	5
Ib1-Ib2	15.73	86.00	1.00	14.84	0.94	49
IIa1-IIa2	14.47	56.00	1.00	13.58	0.94	60
IIb	12.25	36.00	1.00	14.71	1.20	8
IIIa1-IIIa2	15.25	32.00	6.00	8.94	0.59	8
IIIb	14.00	25.00	3.00	15.56	1.11	2
IIIc	12.00	12.00	12.00	0.00	0.00	1

#### 6.5.1.4. 大墓地南地区における副葬品の総点数の通時的検討

大墓地南地区は利用期間が短い、一部の例外を除いて東地区よりは若干大きい程度の差異が読み取れた。各段階における総点数に関わる数値の詳細を一覧で表 6.24. に示した。また各段階における総点数の平均の推移を図 6.10. 中段左に示した。総点数の平均は、属する墓が 1 基のみの Ib1-Ib2 段階を除くと、IIa1-IIa2 段階が 17.93 点で IIb 段階が 20.00 点と極めて多い一方で、IIIa1-IIIa2 段階も 10 点近くと多い。さらに、各段階における各墓の総点数の差異を示す変動係数を確認すると、IIa1-IIa2 段階と IIIa1-IIIa2 段階はそれぞれ 0.74 と 0.78 と大墓地西地区ほどではないものの差異があることがわかる。IIa1-IIa2 段階の場合は、最も多くの副葬品が納められた事例で 43 点なため、極端に多い副葬品を持つ墓の存在が変動係数を押し上げたと思われる。一方で、IIIa1-IIIa2 段階に関しては、全般的に納められる副葬品の総点数が減少したものの、差異は相対的には IIa1-IIa2 段階とあまり変わらなかったことがわかる。IIb 段階に関しては変動係数が小さいが、最多総点数と最小総点数の差も小さいので、全体的に納められる副葬品の量が多かったことが要因である。したがって大墓地南地区では、本格的に利用が開始される IIa1-IIa2 段階からは、納められる副葬品の総点数にすでにある程度の差異がある状態で、なおかつ全体的に納められる総点数が多かったことがわかった。IIIa1-IIIa2 段階になると点数自体は減るものの、差異自体は IIa1-IIa2 段階とあまり変わらないこともわかった。図 6.9. で見られた 2 極的な構図の存在が読み取れる。

表 6.24. 大墓地南地区における副葬品総点数の段階別詳細

基本段階	総点数平均	総点数最大値	総点数最小値	不偏分散の平方根	変動係数	墓の数
Ia1-Ia3	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
Ib1-Ib2	4.00	4.00	4.00	0.00	0.00	1
IIa1-IIa2	17.93	43.00	3.00	13.21	0.74	14
IIb	20.00	28.00	12.00	6.98	0.35	4
IIIa1-IIIa2	9.50	20.00	3.00	7.42	0.78	4
IIIb	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
IIIc	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0

#### 6.5.1.5. T 墓地における副葬品の総点数の通時的検討

T 墓地の利用期間は、大墓地南地区と重なるが、副葬品の総点数は南地区を凌駕する。しかし差異自体はあまり

大きくないことも読み取れた。各段階における総点数に関わる数値の詳細を一覧で表 6.25. に示した。また各段階における総点数の平均の推移を図 6.10. 中段右に示した。総点数の平均は、属する墓が 1 基のみの IIb 段階を除くと全て 12 点以上で、特に Ib1-Ib2 段階は 33.50 点で IIa1-IIa2 段階は 19.48 点と極めて多い。IIIa1-IIIa2 段階はやや少なくなるが、それでも 12 点以上 15 点以下である。利用期間を通じて多量の副葬品が納められたことが読み取れる。しかし、各段階における各墓の総点数の差異を示す変動係数を確認すると、各段階で差異があまり大きくないことがわかる。IIb 段階を除けば、Ib1-Ib2 段階から IIIa1-IIIa2 段階の変動係数はそれぞれ 0.40・0.66・0.55 と、差異があまりない。これは全体的に納められる副葬品の量が多かったことを示す。最も少ない墓の数では 4-5 点の場合もあるが、平均的な総点数の副葬品を持つ墓が多く、納められた副葬品の平均的な総点数自体も多いことが読み取れる。図 6.9. で示した分布も示唆的である。通時的には時代が下るごとに総点数の平均も変動係数も減少していく点も観察できる。したがって T 墓地では、利用開始当初の Ib1-Ib2 段階から大量の副葬品が墓に納められた一方で総点数の差異自体はあまりなく、時代が降るにつれて納められる副葬品の点数が減り、差異自体もやや小さくなることがわかった。

表 6.25. T 墓地における副葬品総点数の段階別詳細

基本段階	総点数平均	総点数最大値	総点数最小値	不偏分散の平方根	変動係数	墓の数
Ia1-Ia3	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
Ib1-Ib2	33.50	43.00	24.00	13.44	0.40	2
IIa1-IIa2	19.48	50.00	5.00	12.78	0.66	25
IIb	4.00	4.00	4.00	0.00	0.00	1
IIIa1-IIIa2	12.75	27.00	5.00	7.05	0.55	8
IIIb	15.00	15.00	15.00	0.00	0.00	1
IIIc	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0

#### 6.5.1.6. B 墓地における副葬品の総点数の通時的検討

B 墓地の場合は、属する墓が 1 基のみの IIb 段階を除くと通時的に副葬品の総点数が上昇する一方で差異はあるもののその推移はあまり変わらないことが読み取れた。各段階における総点数に関わる数値の詳細を一覧で表 6.26. に示した。また各段階における総点数の平均の推移を図 6.10. 下段左に示した。総点数の平均は、属する墓が 1 基のみの IIb 段階を除くと時代が降るごとに多くなることが特徴で、特に IIa1-IIa2 段階には 11 点を超える。最も多くの副葬品が納められた墓では 35 点になる。しかし、各段階における各墓の総点数の差異を示す変動係数を確認すると、各段階で 0.76 から 0.87 と差異はあるものの、通時的には変動幅は 0.1 強程度なことがわかる。つまり副葬品の総点数が増えても、差異自体が極端に増減することはない。一定の差異が維持されることがわかる。全く副葬品が納められない墓もあれば、極端に多い点数が納められる墓もあるが、図 6.9. で示したように 2-5 点の副葬品を持つ墓が多かったことが読み取れる。したがって B 墓地では、利用開始当初の Ia1-Ia2 段階から納められる副葬品の上限が上がった一方で、差異自体はある程度ある状態で通時的に維持されたことが読み取れた。図 6.9. で確認できた 30 点以上の副葬品を持つ墓は、IIa1-IIa2 段階に属することも確認できた。



表 6.26. B 墓地における副葬品総点数の段階別詳細

基本段階	総点数平均	総点数最大値	総点数最小値	不偏分散の平方根	変動係数	墓の数
Ia1-Ia3	2.00	4.00	1.00	1.73	0.87	3
Ib1-Ib2	6.91	19.00	0.00	5.23	0.76	22
IIa1-IIa2	11.36	35.00	0.00	9.29	0.82	27
IIb1	9.00	9.00	9.00	0.00	0.00	1
IIIa1-IIIa2	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
IIIb	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
IIIc	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0

#### 6.5.1.7. 副葬品の総点数に関する分析のまとめ

これまで扱ってきたほかの属性と同じく、墓 1 基に納められる副葬品の総点数に関しても、各墓地によって異なる様相が示された。大墓地東地区では副葬品の総点数の平均に大きな変動がなく、差異も同様に大きく変化しなかった。また点数自体も全般的に少ない。一方で、同西地区では Ib1-Ib2 段階遺構に差異が拡大してなおかつ総点数の平均も増大することがわかった。同南地区では利用が本格化した IIa1-IIa2 段階から多量の副葬品がある程度の差異を持って納められたことが読み取れた。T 墓地の場合は、南地区と同時期でも異なる様相をみせ、全対的に点数が多い一方で差異は小さく、通時的には量的減少も見られた。B 墓地は通時的に副葬品の総点数が増えるにも関わらず差異はある程度の水準で維持されることが特徴だった。ここからわかることは、まず副葬品の量のいかに関わらず、差異の程度に通時的に大きな変化がないパターンと、通時的に変化があるパターンの 2 つの存在である。前者には大墓地西地区以外の 4 ヶ所の墓地が該当し、後者には西地区が該当する。ここから西地区では墓地の中で副葬品の点数の点で差異の拡大が確認でき、被葬者の差別化が生じていた可能性が読み取れる。一方で、副葬品の差異があまり変動しないことが、該当するそれぞれの墓地に埋葬された被葬者に社会的な差異がなかったことを意味するとは必ずしも限らない点も述べられる。大墓地東地区の場合は、納められる副葬品の点数があまり多くないために被葬者の差別化が顕著ではなかったことが読み取れ、また B 墓地でも納める点数の増大という时期的な特徴は反映してもやはり差別化はあまり顕著ではなかったと思われる。しかし大墓地南地区や T 墓地は副葬品の点数自体が多いため、この 2 ヶ所の墓地に埋葬される被葬者の社会的な地位は、大墓地東地区や B 墓地に納められた人々とは異なり、垂直的に高い地位を持っていた可能性が指摘できる。特に T 墓地は大墓地西地区や南地区の両墓地からはさらに区別される。大墓地南地区は西地区と利用期間が重なる時期では若干優位だが、両墓地に顕著な違いはないと考えられる。以上から、副葬品の総点数の平均とその差異を手がかりに各墓地の通時的な概況と、被葬者の社会的な地位を想定した墓地の序列化を試みた。次節では、この結果を踏まえつつ、ビンフォードらが社会的地位の区別に有効と唱えた (Binford 1971; Carr 1995)、副葬品の種類数に関する分析を行い、本節での結果との比較を試みる。

### 6.5.2. 副葬品の種類数の分析

#### 6.5.2.1. 全墓地の副葬品の種類数

図 6.11.に各墓地で得られた墓 1 基あたりの副葬品の種類数を墓地別に箱ひげ図で示した。またこの図に対応する各墓地における不偏分散の平方根や相関係数などを含めた具体的な数値に関しては表 6.27.に示した。図 6.11.からは、副葬品の種類数の中央値は、B 墓地以外は同じ 3 種類であることがわかる。各墓地に存在する墓の持つ副葬品の種類数の幅は、大墓地が最も大きく、次いで T 墓地・B 墓地、その次に大墓地西地区、そして最後に大墓地南地区の順になる。また表 6.27.から種類数の平均を検討すると、B 墓地 2.18 種類、大墓地西地区 2.99 種類、大墓地東地区 3.05 種類、大墓地南地区 3.38 種類、T 墓地 3.44 種類の順番に大きいことがわかる。一方で、各墓地を構成する墓に納められた副葬品の種類数に見られる差異の大きさから得られる様相は平均とは異なる。すなわち大墓地東地区や同西地区、T 墓地に関しては 0.62–0.65 の範囲に収まる一方で、大墓地南地区はそれよりも小さい 0.50 で、B 墓地は 0.78 と大きい。ここから、大墓地南地区の墓に関しては、副葬品の種類数の差異がほかの墓地と比べてより少なく、逆に B 墓地では差異が大きいことがまず読み取れる。したがって、以上から種類数の平均と変動係数から得られる墓地の様相をまとめると次の通りとなる。まず大墓地東地区は、一部に多種類の副葬品を含む墓もあるが、基本的には 3 種類程度の副葬品が墓に納められる。大墓地西地区も類似するが、やや種類数が少ない。大墓地南地区は T 墓地以外では平均的に多種類の副葬品が納められる事例が最も多い。T 墓地では平均して最も多種類の副葬品が納められる傾向にあるが、墓地内での差異は大墓地東地区や同西地区と概ね同程度である。B 墓地は、対象の墓地遺跡の中では最も平均的に納められる副葬品の種類が乏しいが、墓によって差異は大きい。

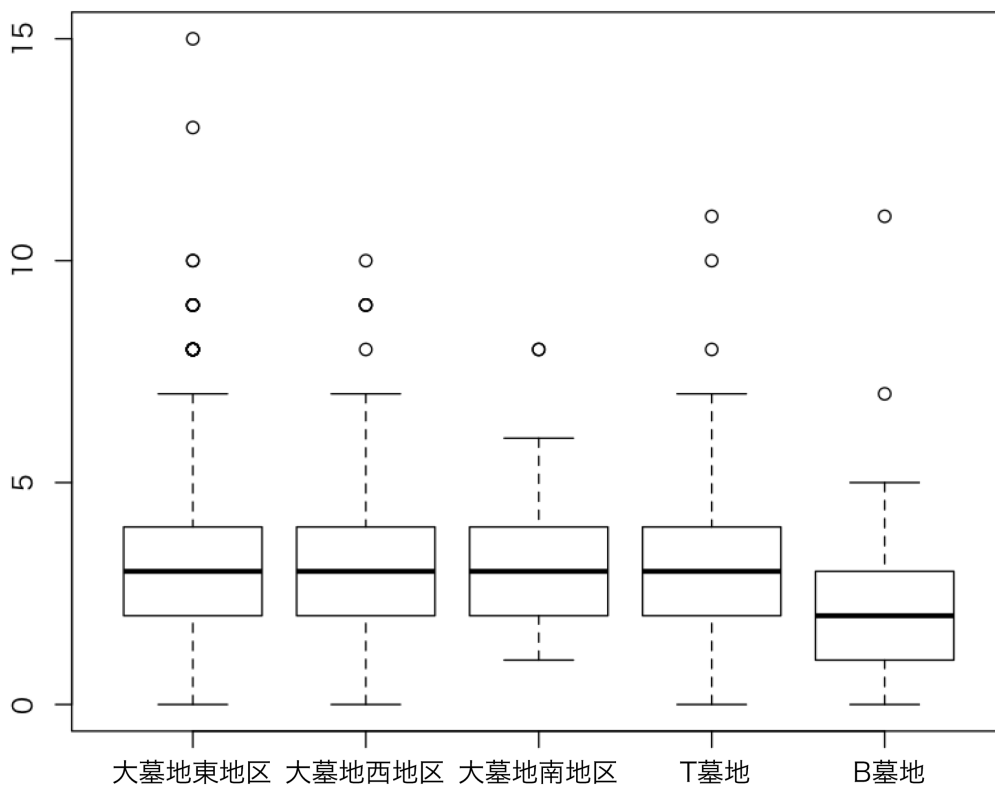


図 6.11. 各墓地における副葬品種類数の箱ひげ図 (y 軸の単位：種類)

表 6.27. 各墓地における副葬品種類数の詳細

副葬品種類数	大墓地東地区	大墓地西地区	大墓地南地区	T墓地	B墓地
最大値	15	10	8	11	11
第3四分位	4	4	4	4	3
中央値	3	3	3	3	2
第1四分位	2	2	2	2	1
最小値	0	0	1	0	0
平均	3.05	2.99	3.38	3.44	2.18
不偏分散の平方根	1.92	1.84	1.68	2.23	1.69
変動係数	0.63	0.62	0.50	0.65	0.78
墓の数	633	226	48	48	68

次に、外れ値を含めた種類数ごとの墓数を把握するために、1種類を1階級として0種類から15種類までの合計16の階級数を設定して度数分布と累積度数を検討する(図6.12.)と、各墓地で墓1基あたりに納められる副葬品種類数の分布がより明確になった。図6.12.では第1軸に各单位に該当する墓の数である度数を、第2軸にその度数の累積を示している。また各墓地を構成する墓の数が極端に異なるため、y軸の数値は意図的に統一していない。図6.12.を検討すると、大墓地南地区以外は右側に歪んだ分布を示すことが読み取れる。まず右側に歪んだ分布を示す4ヶ所の墓地について言及する。大墓地東地区では階級2種類にピークを持ち、種類数が増えるにしたがって度数も減少する。階級3種類も2種類に近い度数を持つことが特徴的である。また13種類および15種類の副葬品を持つ墓があることも特徴で、この点は図6.11.で示された外れ値と対応する。大墓地西地区の場合、階級2種類にピークを持ち以降は徐々に減少する右側に歪んだ分布である点は東地区と類似するが、階級9種類では前後の階級よりも度数が若干多くなるなどの違いがある。T墓地に関しても階級3種類にピークを持つ右側に歪んだ分布を示すが、特徴的な点は階級7・8・10・11種類にも分布があり、多種類の墓が少数存在することがわかる。またB墓地もT墓地に似るが、こちらのピークは階級2種類で、階級7と11にも分布が確認できる。一方で大墓地南地区における度数分布は単峰型に近いが、階級5が少なく6が多い分布を示す。これらの分布形状から得られる知見を墓地ごとにまとめると、大墓地東地区や西地区、B墓地などでは基本的に1-3種類の副葬品が納められることが多く、大墓地南地区やT墓地では2-4種類の副葬品が納められること多い点が見られる。

以上で概ね1基の墓に納められる副葬品の種類数の傾向は把握することはできた。しかしこの分析では時期ごとの特徴は掴みとれていないので、以下では墓地ごとに各時期における副葬品の種類数の推移を検討する。

#### 6.5.2.2. 大墓地東地区における副葬品の種類数の通時的検討

大墓地東地区の利用期間を段階に分け、各段階における種類数に関わる数値の詳細を一覧で表6.28.に示した。また各段階における種類数の平均の推移を図6.12.上段左に示した。これらを確認すると、種類数の平均は、Ia1-Ia3段階に最も多様な3.81種類である以降はIIIa1-IIIa2段階を除いて概ね3-3.5種類で推移する。一方で、各段階において構成する墓に納められる種類数の差異に着目して変動係数を確認すると、Ia1-Ia3段階は0.52で、Ib1-Ib2段階からIIb段階まではやや大きくなり0.59から0.64の間で推移する。IIIa1-IIIa2段階以降は変動係数が0.30-

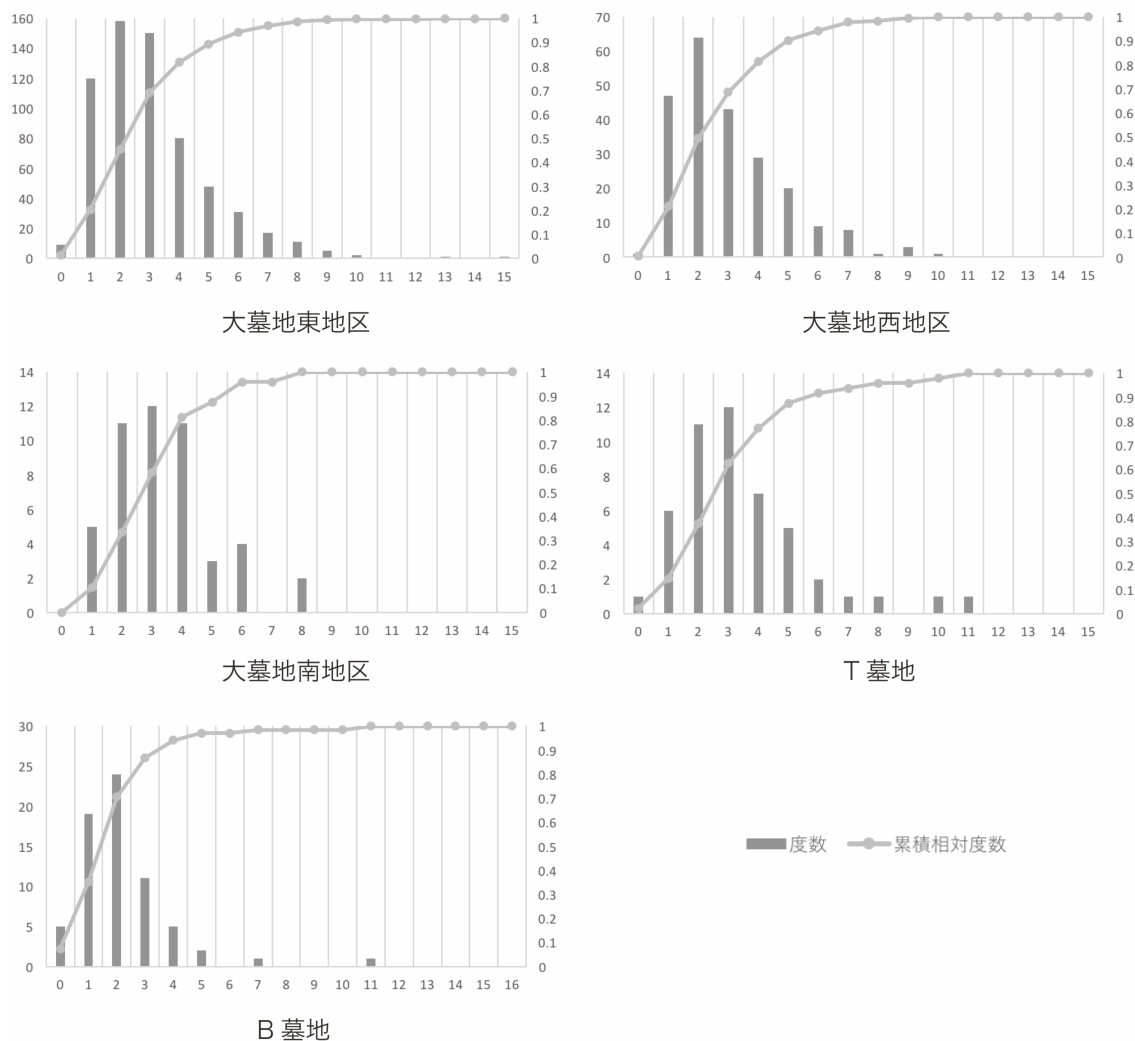


図 6.12. 各墓地における副葬品種類数の度数分布と累積度数 (y 軸の単位：種類)

表 6.28. 大墓地東地区における副葬品種類数の段階別詳細

基本段階	種類数平均	種類数最大値	種類数最小値	不偏分散の平方根	変動係数	墓の数
Ia1-Ia3	3.81	10.00	1.00	2.00	0.52	70
Ib1-Ib2	3.28	15.00	1.00	2.01	0.61	273
IIa1-IIa2	3.17	10.00	1.00	1.86	0.59	110
IIb	3.40	7.00	1.00	2.19	0.64	5
IIIa1-IIIa2	2.80	4.00	2.00	0.84	0.30	5
IIIb	3.33	4.00	2.00	1.15	0.35	3
IIIc	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0

0.35 と小さくなる。この 2 つの数値を合わせて検討すると、Ia1-Ia2 段階には差異はあるものの、多くの墓で多種類の副葬品が埋葬される傾向にあることが読み取れる。興味深いのは Ib1-Ib2 段階以降で、種類数の平均が下がる一方で、変動係数は上昇することから、納められる副葬品の種類数が多い墓が出現し、その一方で、全体的に前段階よりも納められる副葬品の種類数が少なくなることが読み取れる。ただし IIIa1-IIIa2 段階以降になると、変

動係数は小さくなって最も多い種類数も小さくなるので、墓の間で差異がなくなり、あまり多種類の副葬品が墓に納められなくなることを示している。したがって大墓地東地区では、Ib1-Ib2 段階から IIb-段階には、納められる副葬品の種類数が多い墓と少ない墓に分かれる時期があることが読み取れる。

### 6.5.2.3. 大墓地西地区における副葬品の種類数の通時的検討

次に大墓地西地区を検討すると、東地区とはやや異なる様相が見える。各段階における種類数に関わる数値の詳細を一覧で表 6.29. に示した。また各段階における種類数の平均の推移を図 6.13. 上段右に示した。まず、IIIb 段階を除いて、種類数の平均はどの段階でも 3-3.5 種類強になる点である。この中でも IIa1-IIa2 段階は平均して 3.52 種類が納められて最も多い。IIIb 段階は 4 種類だが、この時期に属する墓の数が 2 基のみなので注意を要する。一方で、各段階において構成する墓に納められる種類数の差異に着眼して変動係数を確認すると、Ia1-Ia3 段階か

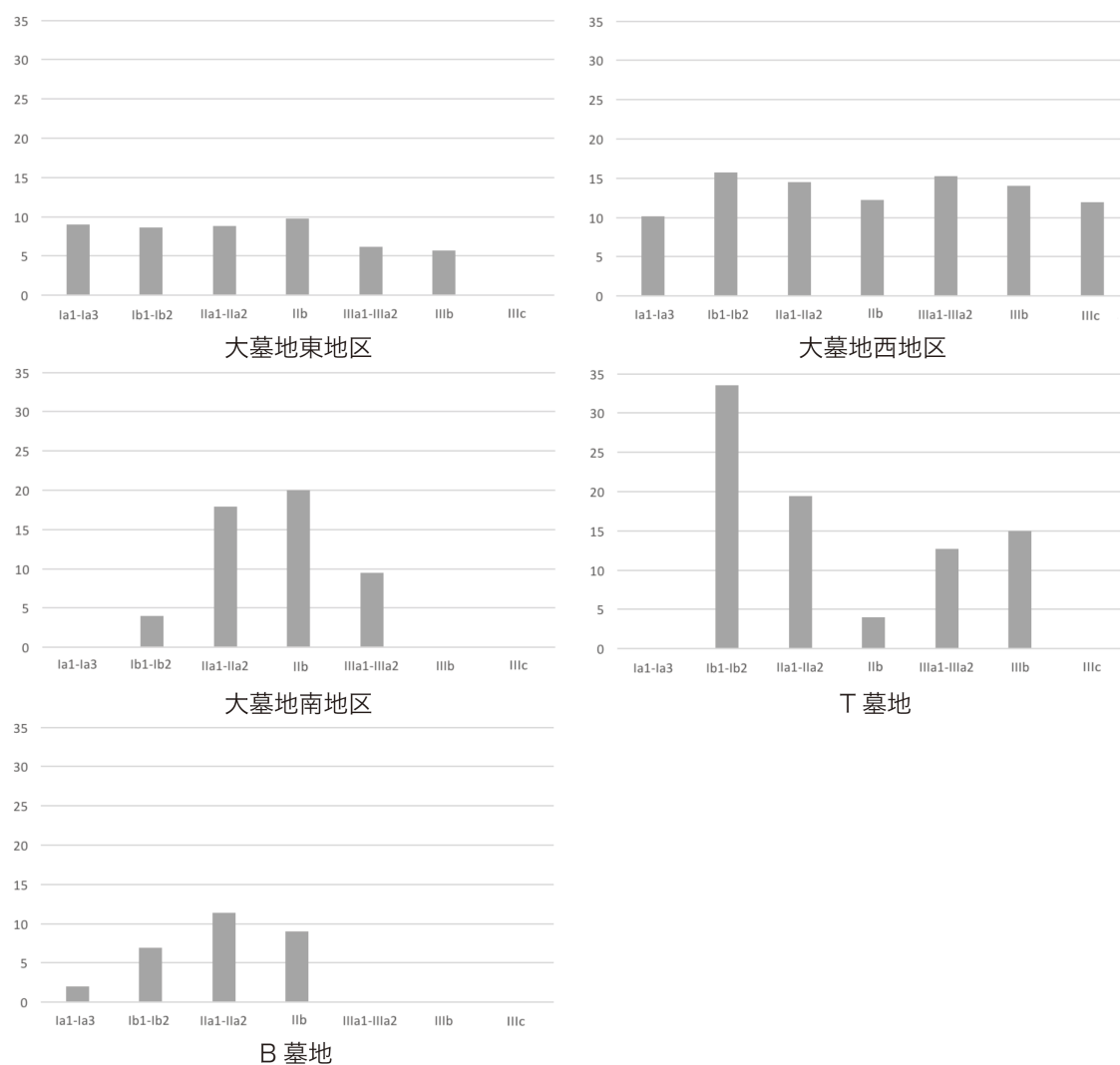


図 6.13. 各墓地における副葬品種類数の平均とその推移 (y 軸の単位: 個)

表 6.29. 大墓地西地区における副葬品種類数の段階別詳細

基本段階	種類数平均	種類数最大値	種類数最小値	不偏分散の平方根	変動係数	墓の数
Ia1-Ia3	3.00	6.00	2.00	1.73	0.58	5
Ib1-Ib2	3.27	10.00	1.00	1.86	0.57	49
IIa1-IIa2	3.52	9.00	1.00	2.04	0.58	60
IIb	3.00	6.00	1.00	1.85	0.62	8
IIIa1-IIIa2	3.13	6.00	2.00	1.46	0.47	8
IIIb	4.00	7.00	1.00	4.24	1.06	2
IIIc	3.00	3.00	3.00	0.00	0.00	1

ら IIb 段階までは 0.6 前後で大きな変化がないことが読み取れ、ある程度の差異が継続することがわかる。Ib1-Ib2 段階には最も種類数が多い墓が含まれるが、差異には影響しない。この差異は IIIa1-IIIa2 段階は小さくなる。IIIb 段階に関しては高いが前記の通り注意を払う必要がある。変動係数と平均点数からみて、大墓地西地区では特に明確な差異が見える段階は捉えがたい。平均点数は IIa1-IIa2 段階にピークがあるが、差異が変わらないことから全体的に納められる副葬品の種類が増加したことが読み取れる。したがって大墓地西地区では、長い利用期間の中で墓の間で極端に納められる副葬品に差異がつく段階はなく、一定の差異を持って継続して副葬品が納められたことが読み取れた。多くの墓には平均的な種類の副葬品が納められたと見られる。

#### 6.5.2.4. 大墓地南地区における副葬品の種類数の通時的検討

次に大墓地南地区を検討すると、東地区や西地区とはやや異なる様相が見える。各段階における種類数に関わる数値の詳細を一覧で表 6.30. に示した。また各段階における種類数の平均の推移を図 6.13. 中段左に示した。副葬品は IIa1-IIa2 段階に 4 種類を超えて最も多様なことがわかる。続く IIb 段階も 3.75 種類と多い。Ib1-Ib2 段階と IIIa1-IIIa2 段階では 2.75-3 種類なので、利用が本格化する時期には最も多くの種類の副葬品が納められたことを示す。一方で、各段階において構成する墓に納められる種類数の差異に着眼して変動係数を確認すると、IIa1-IIa2 段階に 0.49 と最も大きく、その後の IIb 段階と IIIa1-IIIa2 段階は 0.34 または 0.35 でほぼ同じなことが確認できる。変動係数と平均点数からみて、大墓地南地区では最も墓地利用が盛んだった IIa1-IIa2 段階に多くの種類の副葬品が埋葬されたが、その一方で墓によって差異もあり、利用が下火になるにあたって納められる副葬品の種類が減り、墓の間に差が見られなくなることが読み取れた。

表 6.30. 大墓地南地区における副葬品種類数の段階別詳細

基本段階	種類数平均	種類数最大値	種類数最小値	不偏分散の平方根	変動係数	墓の数
Ia1-Ia3	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
Ib1-Ib2	3.00	3.00	3.00	0.00	0.00	1
IIa1-IIa2	4.36	8.00	1.00	2.13	0.49	14
IIb	3.75	5.00	2.00	1.26	0.34	4
IIIa1-IIIa2	2.75	4.00	2.00	0.96	0.35	4
IIIb	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
IIIc	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0

#### 6.5.2.5. T 墓地における副葬品の種類数の通時的検討

次に T 墓地を検討すると、全く異なる様相が観察できた。各段階における種類数に関わる数値の詳細を一覧で表 6.31. に示した。また各段階における種類数の平均の推移を図 6.13. 中段右に示した。副葬品は墓地利用の開始当初である Ib1-Ib2 段階に 8 種類と最も多種類なことがわかる。続く IIb 段階も 4.17 種類と多い。一方で、属する墓が 1 基のみの IIb 段階と IIIb 段階を除くと、IIIa1-IIIa2 段階には 3 種類未満に種類数は減る。各段階の変動係数に着眼すると、Ib1-Ib2 段階と IIa1-IIa2 段階はそれぞれ 0.53 と 0.51 で、ある程度の差異があるものの変化は乏しい。IIIa1-IIIa2 段階になると、0.22 と差異が小さくなる。変動係数と平均点数からみて、T 墓地で墓地利用の開始当初に最も多くの種類の副葬品が埋葬され、次の IIa1-IIa2 段階には種類数は減ったものの、依然として多種類の副葬品が納められる。この段階でも差異が変わらないので、全体的に多種類の副葬品が納められる傾向にあったと見られる。その後は、墓地利用の低下とともに納められる副葬品の種類が減り、墓の間に差が見られなくなることが読み取れた。

表 6.31. T 墓地における副葬品種類数の段階別詳細

基本段階	種類数平均	種類数最大値	種類数最小値	不偏分散の平方根	変動係数	墓の数
Ia1-Ia3	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
Ib1-Ib2	8.00	11.00	5.00	4.24	0.53	2
IIa1-IIa2	4.17	10.00	1.00	2.13	0.51	25
IIb	2.00	2.00	2.00	0.00	0.00	1
IIIa1-IIIa2	2.88	4.00	2.00	0.64	0.22	8
IIIb	4.00	4.00	4.00	0.00	0.00	1
IIIc	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0

#### 6.5.2.6. B 墓地における副葬品の種類数の通時的検討

次に B 墓地を検討すると、Ia1-Ia3 段階から IIa1-IIa2 段階にかけての副葬品の種類数をめぐる変化をトレースすることができた。各段階における種類数に関わる数値の詳細を一覧で表 6.32. に示した。また各段階における種類数の平均の推移を図 6.13. 下段左に示した。副葬品の種類数の平均は、墓地利用の開始当初である Ia1-Ia3 段階から IIa1-IIa2 段階にかけて徐々に増加することが読み取れ、1.67 種類から 2.79 種類と 1 種類以上増えることがわかる。一方で、各段階の変動係数に着眼すると、0.64 から 0.72 の間を推移し、通時的な差異の増大は読み取れない。Ia1-Ia3 段階は 0.69 で、Ib1-Ib2 段階は 0.64 と若干下がり、IIa1-IIa2 段階に再度上昇する。変動係数と平均点数からみて、B 墓地では墓地利用の開始当初は納められる副葬品の種類数に限りがあり、時期を降るに連れて種類数増えたことが明らかである。ただしその一方で、各段階を構成する墓の間に種類数の差異は顕著ではないことがわかった。

#### 6.5.2.7. 副葬品の総点数に関する分析のまとめ

墓 1 基に納められるの副葬品の種類数は、全ての墓を一括した場合は墓地間に大きな差異を見いだすことがで

表 6.32. B 墓地における副葬品種類数の段階別詳細

基本段階	種類数平均	種類数最大値	種類数最小値	不偏分散の平方根	変動係数	墓の数
Ia1-Ia3	1.67	3.00	1.00	1.15	0.69	3
Ib1-Ib2	2.41	7.00	0.00	1.53	0.64	22
IIa1-IIa2	2.79	11.00	0.00	2.01	0.72	27
IIb	3.00	3.00	3.00	0.00	0.00	1
IIIa1-IIIa2	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
IIIb	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0
IIIc	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0

きなかったが、段階別に観察すると平均や差異の推移が各墓地によって異なることが示された。大墓地東地区では副葬品の種類数の平均に大きな変動がなく、差異も最も墓地が利用された期間には大きく変化しなかった。一方で同西地区では、差異に関しては東地区と類似した結果を得ることができた一方、種類数には IIa1-IIa2 段階の最も墓地利用が活発になる段階に、わずかなピークが見られた。同南地区の場合ももっと明瞭で、同じく IIa1-IIa2 段階に平均も差異もピークを迎えることが把握できた。T 墓地の場合は、ほかの墓地とは違う顕著な結果を得ることができ、利用開始段階の Ib1-Ib2 段階に最も多種類の副葬品が納められ、IIa1-IIa2 段階にはその水準が下がったものの、それでもほかの墓地と比べると多種類の副葬品が納められることがわかった。一方で、この2つの段階には差異が急激に変化することはないのも特徴である。B 墓地は通時的に副葬品の種類数が増えるにも関わらず、差異は IIa1-IIa2 段階にはやや大きくなるものの、ある程度の水準で維持されることが特徴だった。以上をまとめると、副葬品の種類数に関しては差異が通時的に顕著になる場合は少ないことがわかり、また平均の増大は墓地利用の増減と関わることも読み取れた。副葬品の種類数の平均は、3つのパターンに分けられる。1つ目は種類数の平均も差異も通時的にあまり変化しないパターンで、2つ目はある段階に副葬品の種類数がピークを迎えるパターン、そして3つ目は墓地の利用開始期か利用終了期のどちらかにピークがくるパターンである。1つ目には大墓地東地区が該当する。2つ目はさらに2つのサブパターンに分けることができ、差異があまり変わらないサブパターンと、差異が変化するサブパターンである。差異があまり変わらないサブパターンには大墓地西地区が、差異が変化するサブパターンには同南地区が該当する。3つ目には B 墓地と T 墓地が該当するが、B 墓地は墓地の利用終了期の近くで最も平均と差異が大きくなるのに対し、T 墓地は墓地利用の開始期にピークが来る。興味深い点は、6.5.1.で行った副葬品の総点数に関する分析結果との関連である。例えば、サウスタウンの人々の中では社会的地位が下の層のための墓地とした大墓地東地区では総点数の場合と符合して種類数も少なくなりまた通時的に顕著に増えることもなく差異も顕著に変化しない。一方で大墓地西地区では、総点数の増加と符合して特に Ib1-Ib2 段階以降に種類数も若干増加する。この点は南地区も同様である。T 墓地も総点数と種類数の推移がある程度符合し、B 墓地も同じである。したがって、墓地に納められる副葬品の推移は量と種類がある程度は対応することが確認できた。ピンフォードらは、民族事例をもとに社会的地位の優劣を表すために種類数がより重要なことを述べた (e.g. Binford 1971; Carr 1995) が、総点数もまた重要なことが読み取れた。両者を考慮することが、墓の区別をするために重要なことがわかった。



## 6.6. ナカダ遺跡から得られる埋葬属性の通時的分析のまとめ

本書では、8つの埋葬属性である、II. 墓の規模 (m<sup>2</sup>)、III. 墓の平面形状、IV. 墓の構造、V. 被葬者の人数、VI. 被葬者の性別と年齢、VII. 埋葬様式、VIII. 各墓から出土した副葬品総点数、IX. 各墓から出土した副葬品種類数を対象に、5ヶ所の墓地で検討した。以上から明らかになった特徴をまとめ、墓地を仮に序列化する。

### 大墓地東地区

ナカダ遺跡を構成する5ヶ所の墓地の中で最も造営される墓の規模が小さい傾向にあった。造営された墓は長方形を主体とするが初期には楕円形も一定数見られた。墓の構造はほとんどが単純土坑墓だが、ステップ墓、連接・複合墓、日乾レンガ使用墓も一部見られた。これらの特殊な構造の墓は、Ia1-Ia3段階の時点では築かれず、Ib1-Ib2段階以降にステップ墓が、IIa1-IIa2段階以降には日乾レンガ使用墓がごく少数築かれた。墓は概ね単葬だが、7%程度は合葬墓も造営された。墓地はIa1-Ia3段階の時点で多く利用されていたものの、最盛期はIb1-Ib2段階からIIa1-IIa2段階で、そののちは段階的に利用が縮小し、IIIb段階に廃絶した。埋葬様式はほとんどが一次葬だが、稀に改葬も見られた。納められる副葬品は概ね3種類程度で少量だった。

### 大墓地西地区

ナカダ遺跡を構成する5ヶ所の墓地の中で2番目に大きな規模の墓が造営される傾向にあった。造営された墓は長方形を主体とした。墓の構造はほとんどが単純土坑墓だが、大墓地東地区と同じくステップ墓、連接・複合墓、日乾レンガ使用墓も一部見られた。墓は概ね単葬だが、9.5%程度は合葬墓も造営された。墓地の利用はIa1-Ia3段階からで、最盛期はIb1-Ib2段階からIIa1-IIa2段階だが、そののちは段階的に利用が縮小し、大墓地東地区よりも長いIIIc段階に廃絶した。埋葬様式はすべて一次葬だった。納められる副葬品の種類は大墓地東地区と大きく変わらないものの、点数は対象の5ヶ所の墓地の中で2-3番目に多かった。

### 大墓地南地区

大墓地西地区に比肩する規模の墓が造営される傾向にあった。造営された墓は長方形を主体とした。墓の構造はほとんどが単純土坑墓だが、ほかにはステップ墓のみ一部に見られた。墓は全て単葬だった。墓地の利用はIb1-Ib2段階と後発だが、この利用開始期が最盛期であり、そののちは段階的に利用が縮小してIIIa2段階に廃絶した。埋葬様式はすべて一次葬だった。平均的に納められる副葬品の種類は大墓地東地区や西地区と大きく変わらないものの、点数は対象の5ヶ所の墓地の中で2-3番目に多く、大墓地西地区に比肩した。

### T墓地

特にIb1-Ib2段階からIIa1-IIa2段階にかけて、対象の5ヶ所の墓地の中で最も大きな墓が造営される傾向にあった。造営された墓は長方形を主体とした。墓の構造は単純土坑墓に加え、日乾レンガ使用墓も見られた。墓は単葬が

主体なものの、17%弱が合葬または複数の遺体を検出した。墓地の利用はIb1-Ib2段階と後発で、IIa1-IIa2段階にかけて利用の最盛期を迎えた。そののちは段階的に利用が縮小してIIIb段階に廃絶した。埋葬様式は一次葬に加え、改葬、一次葬の亜種である反復的な埋葬も見られ、多彩だった。納められる副葬品の種類は平均的にはあまりほかの墓地と変わらないものの、点数は最も多かった。

## B墓地

特にIa2-Ia3段階から通時的に造営される墓の規模が大きくなる点が特徴だった。墓は長方形を主体とした。墓の構造は単純土坑墓に加え、ステップ墓と連接・複合墓も見られた。墓は単葬が主体なものの、115%弱が合葬だった。墓地の利用はIa2-Ia3段階と大墓地東地区と同西地区にやや遅れて始まり、継続的に利用されてIIb段階に廃絶した。埋葬様式は一次葬のみ確認できた。納められる副葬品の種類は本論文の対象の5ヶ所墓地遺跡の中では最も乏しいが墓によって差異は大きく、時期が降るについて種類が増えた。総点数もIIa1-IIa2段階には多くなった。

以上の結果をもとに墓への労力の投下 (Tainter 1978) に着眼して墓地を序列化した場合、平均的にはT墓地→大墓地西地区⇄大墓地南地区→大墓地東地区(→) B墓地となる。ただし、この序列化の基準となる墓の規模や副葬品の総点数や種類数以外の属性を考慮すると、各墓地の異なる性格が浮き彫りになる。まず大墓地東地区は、埋葬様式や墓の構造などに若干の特徴はあるが、基本的には標準的なナカダ文化の墓地遺跡の特徴を持つと言える。大墓地西地区は同東地区と類似する面は多いが、墓に投げられる副葬品の総点数や墓の規模の面では凌駕するので、両墓地の間には被葬者の垂直的な差異があると考えられる。大墓地南地区は短命なものの、最盛期の大墓地西地区と類似した水準で、なおかつ大墓地全体で墓地利用が最も活発だった時期に利用が開始されたことを考えると、大墓地西地区が分化した墓域とも捉えられる。T墓地は5ヶ所の対象墓地の中では最も特異かつ重要である。埋葬様式や墓の構造からナカダ遺跡で最も重要な墓地として機能したと考えられる。特に埋葬様式に着眼した場合、利用が開始されたIb1-Ib2段階からIIa1-IIa2段階の前半にかけては、葬送関連儀礼を執り行う場としての機能を持ち、IIa1-IIa2段階の後半からは墓の構造面から系統関係に立脚した社会集団による利用が推定された。考古学的な物証からこうした点が推定可能な事例は、対象の墓地ではほかに見られなかった。B墓地は母集落が異なるため同列では扱えないものの、標準的なナカダ文化の墓地遺跡として比較の基準となりえる。特に各属性が大墓地東地区と類似しており、大墓地東地区の位置付けの参考となる。一方でB墓地は、ナカダ地域におけるサウスタウンの中心地化 (Kemp 1989; 2006; Wilkinson 2000) と関連して母集落であるKh.4地点がIb1-Ib2段階に相当する時期に廃絶することにある。先行研究によれば、B墓地はKh.4地点の廃絶後も墓地利用が続けられ、サウスタウンに居住するKh.4地点に系譜を持つ人々が埋葬地として利用したとされる (Hassan et al. 2017a)。母集落の正確な廃絶時期が不明なため疑問点はあるものの、この説に則れば、IIa1-IIa2段階までの副葬品量や墓の規模の増大はサウスタウンを母体とする墓地遺跡での動向と符合する面を持つと思われる。

本章では、属性に基づいて各墓地の特徴を見出した。次章では特に副葬品の総点数や種類数、墓の規模をもとに各墓地の内部構成を検討してさらに各墓地の特徴を検討する。

## 7. クラスタ分析

前章までの分析では、各属性の通時的な傾向を把握することができた。本章では、この結果を踏まえつつ、墓地を構成する複数の墓に存在する相対的な差異を具体化するため、副葬品の総点数と種類数、墓の規模の3つの量的に検討可能な属性に着眼して k-means++法によるクラスタ分析で墓を区分する。資料と方法、手順に関しては第5章ですでに記したので、そちらを参照されたい。

### 7.1. 分析結果

#### 7.1.1. 大墓地東地区

##### 7.1.1.1. すべての墓のクラスタリング

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、クラスタの対象となる墓の数は633基である。当初クラスタ数は17が推定されたが極めて多いため、Hartigan 値の相対差が低減するクラスタ数6を設定した。クラスタ数6でクラスタリングしたところ、各クラスタを構成する墓の数が163・148・125・116・61・20、185・146・122・105・55・20、171・156・143・96・48・19、192・159・122・79・61・20、の4通りのクラスタリング結果が得られた。このうち最も多く得られた163・148・125・116・61・20の墓の数の構成を区分に採用した。区分結果を示した散布図が図7.1である。また各クラスタを構成する墓の番号は付編4に示した。各クラスタの値の詳細は、表7.1に提示した。クラスタ1は最も多数を占め、どの変数でも最も小さいクラスタ平均を持つ。このクラスタは、副葬品を納めた墓と全く納めない墓の両方を内包し、副葬品を納めた墓は1-3種類、1-4点を含む。クラスタ2の墓は1-5種類、3-6点の副葬品を納め、クラスタを構成する墓の数では2番目に多い。クラスタ3の墓は1-7種類、6-9点の副葬品を持つ。クラスタ4の墓は1-9種類、10-14点の副葬品を持つ。クラスタ5の墓は2-10種類、14-21点の副葬品を持つ。そしてクラスタ6の墓は3-15種類、21-37点の副葬品を持つ。全体としては、クラスタ5までは各クラスタでまとまりを持つのに対し、クラスタ6に関しては墓によっては副葬品の種類数や総点数にばらつきが大きいことが読み取れる。また、副葬品の種類の増加と総点数の増加はクラスタ3までは比例し、クラスタ4より上位のクラスタでは、副葬品の総点数がクラスタの差異を決定するために重要性を持つことが読み取れる。また、種類数自体もクラスタ4以後は小規模ながら増加することも読み取れた。クラスタ6に関しては、種類数と総点数のどちらか一方か両方に優れる墓のまとまりで、あまり統一性がないことが読み取れる。特に副葬品の点数が20点を境に、クラスタを構成するまとまりのばらつきが増える。以上から大墓地東地区では、被葬者の差異を表す指標は、7種類程度までは1つの墓に納められる副葬品の種類数と総点数の両方が重要性を持つが、それ以上の差異は主に副葬品の総点数が重要性を持つことがわかった。

さらに、墓の規模を加えた3つの変数で検討した結果を対散布図で表したものが図7.2である。3つの変数を満たし、クラスタの対象となる墓の総数は444基である。3変数の場合は、クラスタ数は5が推定され、全てで165・124・94・45・16の区分を得ることができた(表7.2)。当初はクラスタ数を2変数の場合と同じ6としたが、区分結果が試行のたびに微妙に異なったため有効なクラスタリングとはならず、5でのクラスタリング

表 7.1. 各クラスターの値 (大墓地東地区・全時期・2変数)

クラスター	墓の数	副葬品の平均		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類数	総点数	最少	最大	最少	最大
1	163	1.37	2.36	0	3	0	4
2	148	2.59	4.97	1	5	3	6
3	125	3.30	7.77	1	7	6	9
4	116	3.81	11.33	1	9	10	14
5	61	5.28	16.05	2	10	14	21
6	20	7.35	26.45	3	15	21	37

表 7.2. 各クラスターの値 (大墓地東地区・全時期・3変数)

クラスター	墓の数	副葬品の平均		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類数	総点数		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	165	1.62	2.73	1.61	0	4	0	5	0.44	4.65
2	124	2.89	6.59	1.91	1	7	5	9	0.51	5.16
3	94	3.82	10.84	2.28	1	7	8	13	0.97	5.16
4	45	5.07	15.98	2.76	2	9	10	21	0.87	11.61
5	16	7.50	26.19	2.80	2	15	21	37	1.81	4.29

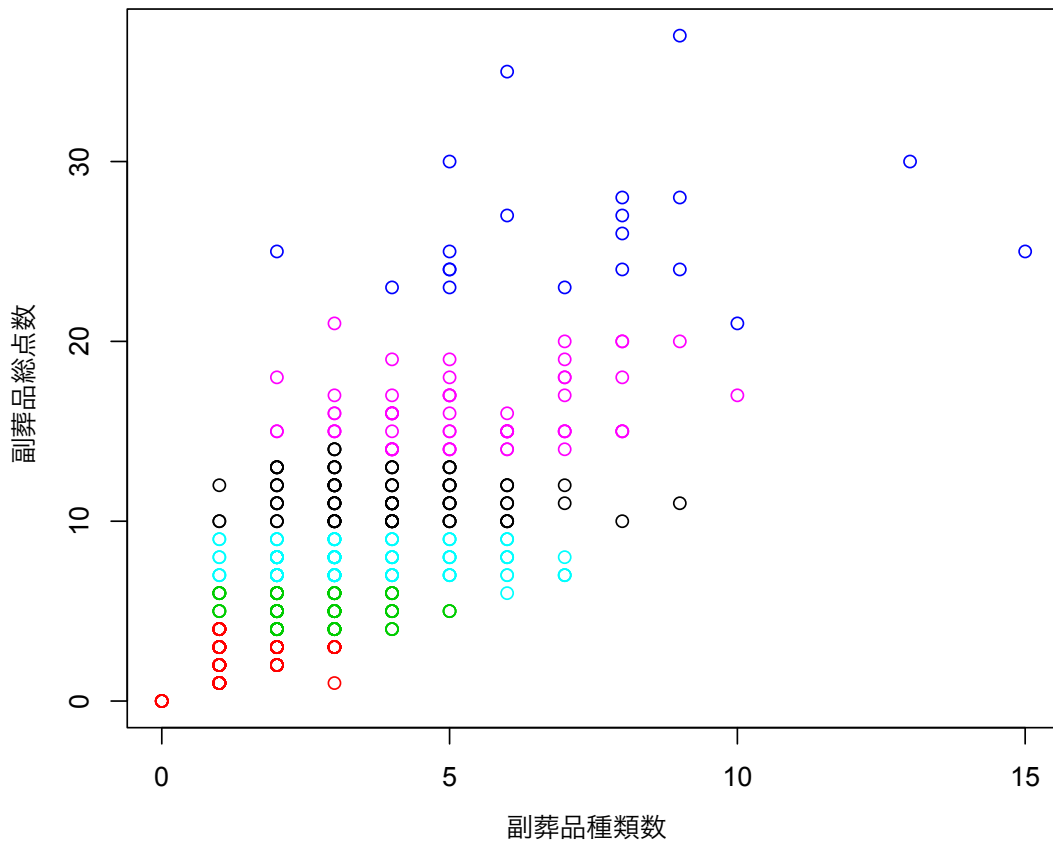


図 7.1. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地東地区・全時期・2変数)

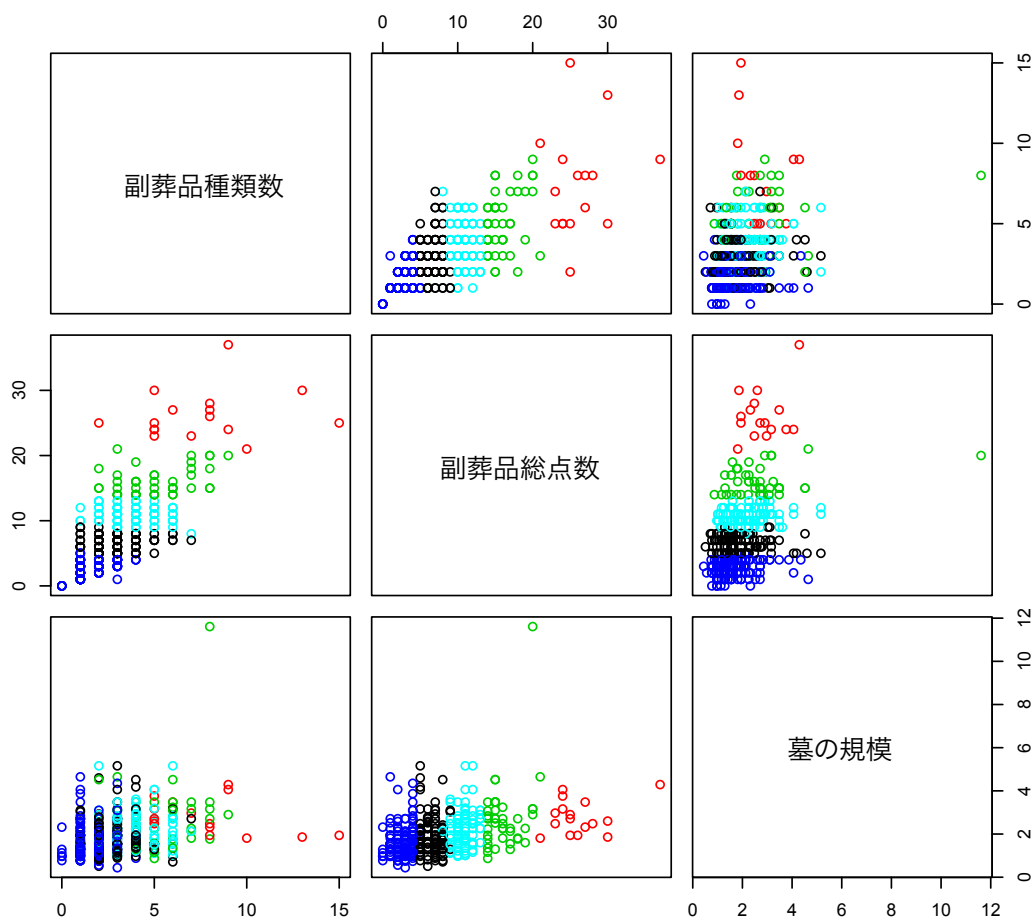


図 7.2. クラスタリング結果を示した対散布図（大墓地東地区・全時期・3変数）

を行った。その上で、3変数の場合と2変数の場合とで各クラスターを構成する墓の対応を検討したところ、墓の規模を変数として加えても上位のクラスターを構成する墓に大きな変化がないことが読み取れた。また、副葬品総点数と種類数、および墓の規模と副葬品総点数には相関が見出せる一方で、墓の規模と副葬品種類数は相関しないことも読み取れた。2変数の際に上位のクラスターだったクラスター5や6と、3変数の際に上位だったクラスター4と5を構成する墓はそれぞれ概ね対応した。3変数時のクラスター5を構成する墓は2変数時のクラスター6を構成する墓にすべて内包され、3変数時のクラスター4の墓は2変数時のクラスター5に3基を除いてすべて内包された。ここから、この分析で対象とした3つの変数は、2つの変数と同じく上位のクラスターでは概ね共通して墓の相対的な差異を示した。大墓地東地区では、特に優れた墓の場合は副葬品の種類数・総点数・墓の規模のすべてが高い水準にあったと見られ、被葬者の社会的な地位も高かったと読み取れる。一方で3変数のクラスター1から3は、対応する2変数のクラスター1から4と同数のクラスターに分割することができなかった。これは、差異が著しくない墓の場合は、それらの副葬品の種類数や総点数・墓の面積は必ずしも全て優れて

いたり劣ったりするのでなく、3変数の優劣が混交することを示す。例えば、墓の規模がある程度小さくとも多数の副葬品が収められている、といった事例が含まれる。ここから、より地位の低い人びとの墓では必ずしも3変数が一定でなくそれぞれに優劣がつく多様な状況が示された。

#### 7.1.1.2. Ia1-Ia3 段階

クラスタリング対象の墓の数は70基である。副葬品の総点数と種類数を変数としてクラスタリングした結果、クラスター数は4が推定された。クラスター数4でクラスタリングしたところ、各クラスターを構成する墓の数が $24 \cdot 32 \cdot 11 \cdot 3$ で区分できた。この区分結果を示した散布図が図7.3である。また各クラスターを構成する墓の番号は付編4に示した。各クラスターを構成する変数の値の詳細は、表7.3に示した。区分の結果は以下の通りである。各クラスターを構成する墓の数は、クラスター2が最も多く、クラスター1が2番目に多い。クラスター1の墓は1-3種類、1-6点の副葬品を含む。クラスター2の墓は2-6種類、7-12点の副葬品を含む。クラスター3の墓は4-10種類、12-20点の副葬品を含む。最後に、クラスター4の墓は5-9種類、24-37点の副葬品を含む。図7.3を観察すると、これらのまとまりは大きく3つにまとめられると推定できる。1つ目のまとまりはクラスター1と2を含み、2つ目はクラスター3を、3つ目はクラスター4を含む。この段階で特徴として、クラスター1と2では副葬品の種類数と総点数にある程度のまとまりがある程度ある一方で、クラスター3以降は構成する墓が持つ変数の値が大きくばらつく。さらに特徴的な点は、クラスター4はそれ以外のクラスターと比べると明瞭に副葬品に優れる点にある。これは被葬者の社会的な地位を反映した差異が明瞭に表れていることを示す。一方で大多数を占めるクラスター1と2の墓は種類数と総点数が低水準でまとまる。

この2変数での結果を踏まえ、墓の面積を加えた3変数でのクラスタリングの結果を対散布図で図7.4に示した。このクラスタリングで対象となる数は44基である。クラスター数は5が推定されたため、5としてクラスタリングを行ったところ、各クラスターを構成する墓の数は $16 \cdot 17 \cdot 7 \cdot 3 \cdot 1$ で安定して分割できた(表7.4)。また副葬品総点数と種類数、および墓の規模と副葬品総点数には相関が見出せる一方で、墓の規模と副葬品種類数は相関しないことが読み取れた。3変数の場合と2変数の場合ではクラスター数が異なるものの、各クラスターの水準をもとに両者の対応を試みたところ下記の結果が得られた。まず、3変数のクラスター1・2・5は、2変数のクラスター1・2・4にそれぞれ完全に内包するかたちで対応した。その一方で、3変数のクラスター3と4の構成墓は3基を除いて2変数のクラスター3に対応した。対応しなかった3変数のクラスター3と4の墓は、2変数のクラスター4と同水準の変数の値を示した。

以上から、クラスタリングの結果は、3変数の場合の方が2変数の場合よりも特に中間よりも上の水準で細分できたものの、全体としては概ね2変数のクラスタリングの結果を踏襲することが明らかとなった。墓の規模を検討対象に加えたとしても、大墓地東地区では墓地の使用開始当初から少なくとも3つのまとまりに区分できるほどに墓の差異があり、クラスター数としては4が示された。ここからIa1-Ia3段階の大墓地東地区では、墓地の利用開始の段階ですでに被葬者の間に社会的な差異が存在したことが読み取れた。

表 7.3. 各クラスターの値 (大墓地東地区・Ia1-Ia3 段階・2 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	24	2.21	3.79	1	3	1	6
2	32	3.88	8.94	2	6	7	12
3	11	6.09	15.27	4	10	12	20
4	3	7.67	28.33	5	9	24	37

表 7.4. 各クラスターの値 (大墓地東地区・Ia1-Ia3 段階・3 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	16	2.25	3.75	1.81	1	3	1	5	0.97	3.1
2	17	4.12	8.82	1.82	3	6	7	11	1.01	3.48
3	7	5.29	14.71	2.30	4	8	12	18	0.87	2.84
4	3	7.33	22.67	6.28	5	9	20	24	3.16	11.61
5	1	9.00	37.00	4.29	9	9	37	37	4.29	4.29

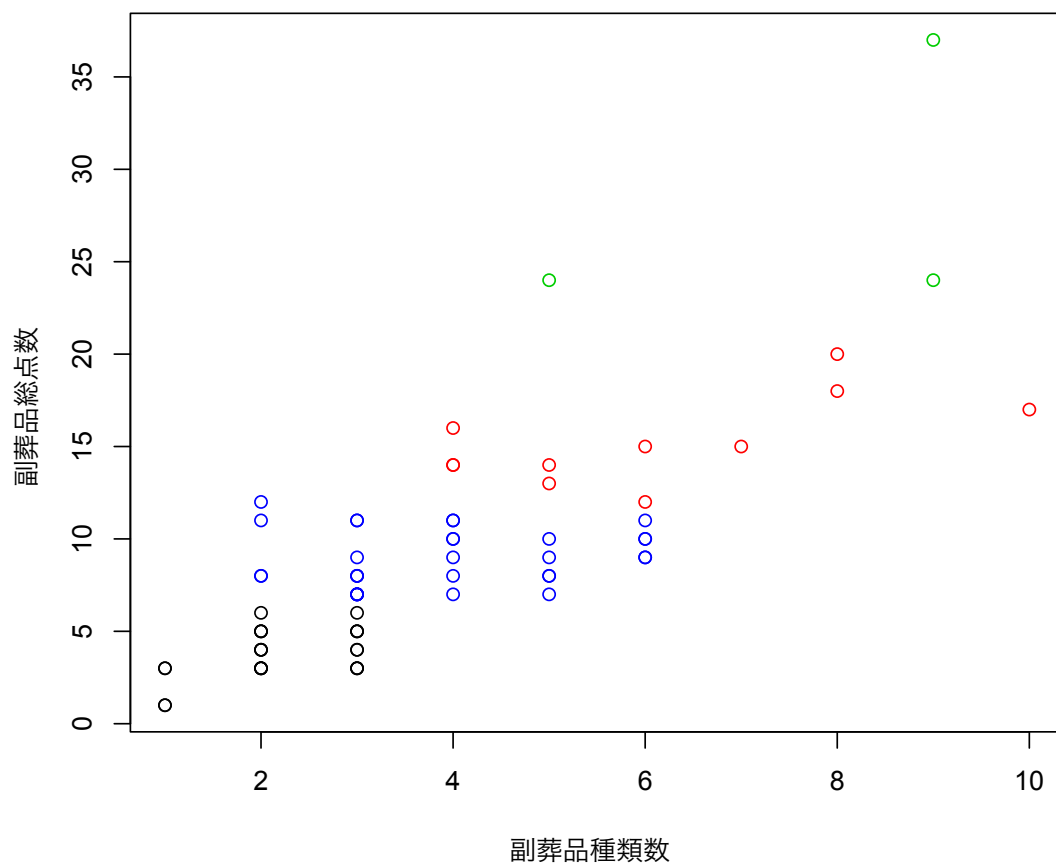


図 7.3. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地東地区・Ia1-Ia3 段階・2 変数)

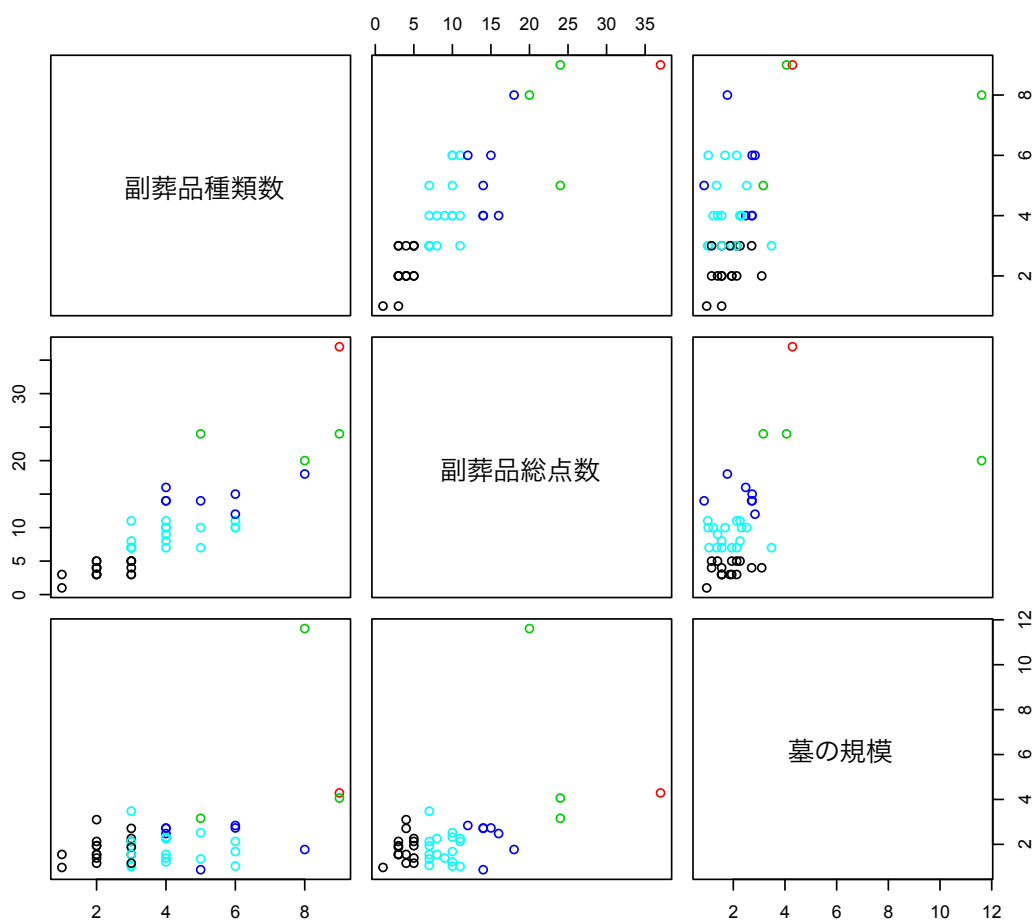


図 7.4. クラスタリング結果を示した対散布図（大墓地東地区・Ia1-Ia3 段階・3 変数）

### 7.1.1.3. Ib1-Ib2 段階

クラスタリング対象の墓の数は 285 基である。クラスター数は 5 が推定された。クラスター数を 5 としてクラスタリングを行ったところ、各クラスターの構成する墓の数は 95・80・60・31・10、94・77・58・31・10、90・80・59・31・10 の 3 種類に区分できた。このうち、最初の区分が最も多く出力されたのでこの区分を採用した。この区分結果を示した散布図が図 7.5 である。また各クラスターを構成する墓の番号は付編 4 に示した。この区分による各クラスターの変数の値は表 7.5 に示した。各クラスターを構成する墓の数は、クラスター 2 が最も多く、ついでクラスター 1 が多い。区分の結果は以下の通りである。クラスター 1 の墓は 1-4 種類、1-5 点の副葬品を含む。クラスター 2 の墓は 1-7 種類、5-9 点の副葬品を含む。クラスター 3 の墓は 1-8 種類、9-14 点の副葬品を含む。クラスター 4 の墓は 3-8 種類、14-20 点の副葬品を含む。最後に、クラスター 5 の墓は 4-15 種類、23-35 点の副葬品を含む。散布図を観察すると、これらのまとまりは大きく 3 つにまとめられると推定できる。すなわち、1 つ目のまとまりはクラスター 1-3 を含み、2 つ目はクラスター 4 を、3 つ目はクラスター 5 を含む。クラスター 1-



4の境界はいずれもやや不明瞭だが、クラスター1と2に関しては3種類・5点が、クラスター2と3に関しては5種類・10点が、クラスター3と4に関しては、5種類・15点が、それぞれの境界となる副葬品の基準である。この段階で特徴的な点は、少なくともクラスター3までは種類数と総点数の上限がクラスターごとに増加する点にある。つまり、副葬品に表れる墓の差異は、種類数にも総点数にも表れる。クラスター4は種類数ではあまり変わらないものの、総点数で差異がつけられる。クラスター5では、種類数が総点数の両方または一方で顕著に優れる事例を含んでいるがまとまりに欠ける。

さらに、墓の面積を加えた3変数で行ったクラスタリングの結果を対散布図で図7.6に示した。この分析で対象とした墓の数は178基である。最適なクラスター数は6が推定されたため、6としてクラスタリングを行ったところ、各クラスターの墓の数は45・50・26・28・21・8になった。各クラスターにおける変数の値の詳細は表7.6に示した。3変数の場合と2変数の場合ではクラスター数が異なるものの、各クラスターの水準をもとに両者の対応を試みたところ下記の結果が得られた。まず、3変数のクラスター5・6を構成する墓は、2変数のクラスター4・5の墓にそれぞれ完全に内包できた。その一方で、3変数のクラスター3と4を構成する墓は3基を除いて2変数のクラスター3の墓と対応した。対応しなかった3変数のクラスター3と4の墓は、2変数のクラスター2と3を合わせたまとまりを構成する墓に完全に内包できた。また、残る3変数のクラスター1と2は、2変数のクラスター1を構成する墓とある程度対応するものの、100基中47基が対応しなかった。ここから、2変数や3変数であろうとも上位のクラスターを構成する墓は共通する一方で、下位のクラスターは必ずしも明瞭に対応しないことが読み取れる。特に、3変数のクラスター2に関しては、2変数のクラスター2または3に対応する事例も多いと見られる。以上から、上位のクラスターはどの変数でも優れている一方で、下位のクラスターになればなるほど副葬品の種類数と総点数に対して、墓の規模はうまく対応しないことが読み取れた。中間よりも下の層に変数の優劣が多様であったことが推察される。また、図7.6から3つの変数のうち、副葬品の種類数と総点数は相関したが、墓の規模と副葬品の総点数は上位のクラスターで相関するに留まった。これはより下位のクラスターは明確に区分することが難しいことを示している。

3変数の場合では、下位のクラスターに関しては2変数の場合よりも細かく区分できているので、より細かな差異が墓にあったとも捉えられる、この差異は顕著ではないが、Ib1-Ib2段階の墓に関しては、6つのクラスターに区分できると判断できた。

以上から、Ib1-Ib2段階の大墓地東地区の墓は、Ia1-Ia3段階から大きなまとまりの構図は継続するが、特に相対的に副葬品に劣る墓に関しては、細かく見るとさらに複雑化することが示された。前段階の水準と比較すると、Ib1-Ib2段階のクラスター1・4・5は前段階のクラスター1・3・4の水準を概ね維持する一方で、本段階のクラスター2と3は前段階のクラスター2がさらに相対的に優劣を持った2つに分かれたと読み取れる。ここから、上位のクラスターに関しては概ね同水準を維持する一方で、下位だが最下位ではないクラスターが複雑化することが読み取れた。墓地の利用が盛んになる中で、中間よりはやや下の層の厚みが本段階に増加したと見られる。

表 7.5. 各クラスターの値 (大墓地東地区・Ib1-Ib2 段階・2 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	95	1.68	3.33	1	4	1	5
2	89	3.07	6.89	1	7	5	9
3	60	3.85	11.45	1	8	9	14
4	31	5.39	16.52	3	8	14	20
5	10	7.80	26.90	4	15	23	35

表 7.6. 各クラスターの値 (大墓地東地区・Ib1-Ib2 段階・3 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	45	1.58	2.89	1.70	1	3	1	5	0.56	4.06
2	50	2.68	6.64	1.89	1	5	5	9	0.51	5.16
3	26	3.04	11.92	2.68	1	5	10	14	1.52	5.16
4	28	4.96	9.43	2.49	3	7	7	12	0.71	5.16
5	21	5.71	16.62	2.53	2	9	14	20	1.16	4.52
6	8	8.50	26.38	2.40	5	15	23	30	1.86	3.48

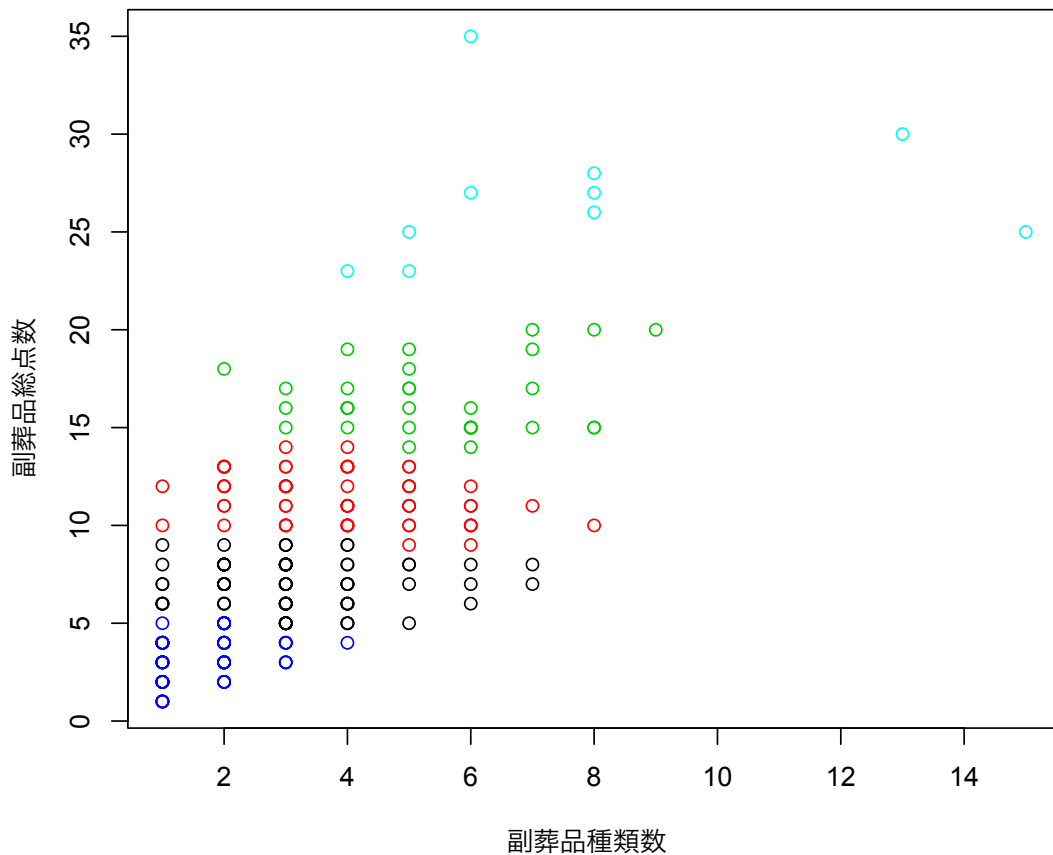


図 7.5. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地東地区・Ib1-Ib2 段階・2 変数)

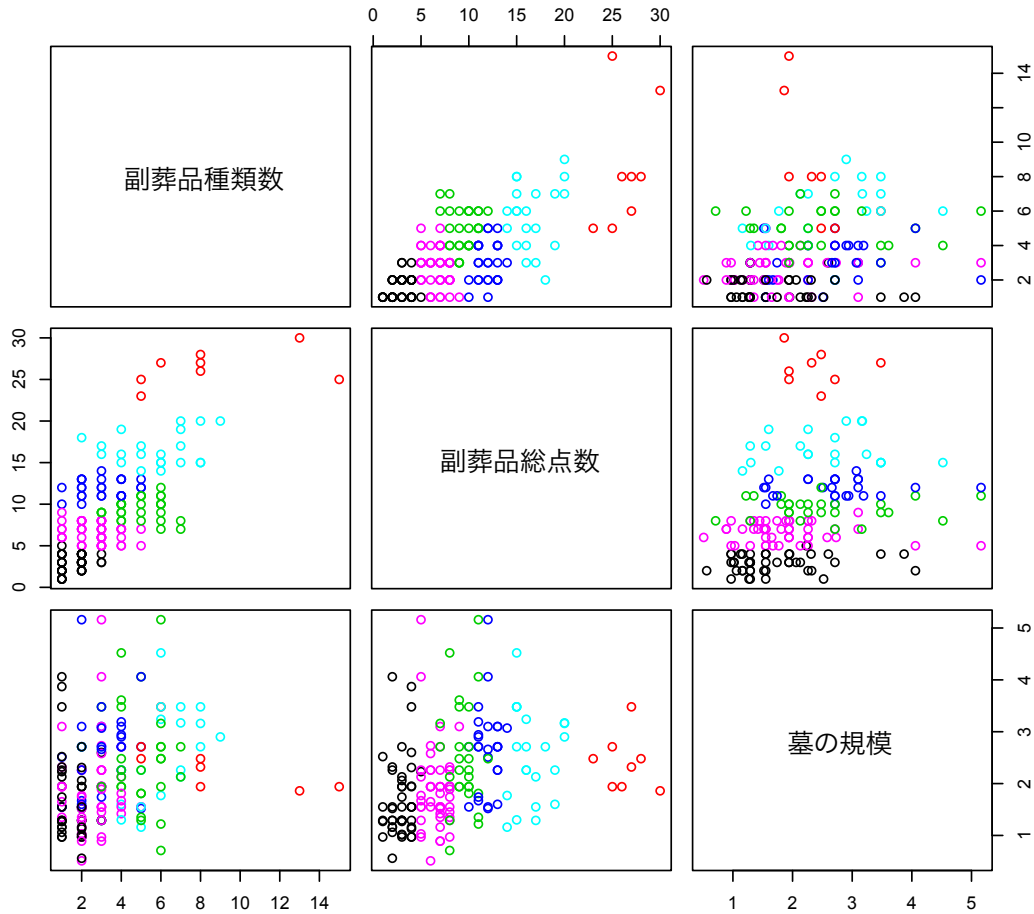


図 7.6. クラスタリング結果を示した対散布図（大墓地東地区・Ib1-Ib2 段階・3 変数）

#### 7.1.1.4. IIa1-IIa2 段階

クラスタリング対象の墓の数は 133 基である。クラスター数は 6 が推定された。クラスター数を 6 としてクラスタリングを行ったところ、各クラスターを構成する墓の数は、 $36 \cdot 33 \cdot 32 \cdot 10 \cdot 17 \cdot 5$ 、 $40 \cdot 37 \cdot 32 \cdot 15 \cdot 5 \cdot 4$ 、 $30 \cdot 29 \cdot 27 \cdot 25 \cdot 17 \cdot 5$  の 3 種類の区分が得られた。このうち最初の区分が最も安定して出力できたので、この区分を採用した。クラスター数を 5 として分析した場合は  $40 \cdot 37 \cdot 34 \cdot 17 \cdot 5$  の区分が安定して得られたが、ここでは各クラスターの変数の値を検討し、クラスター数 6 を採用した。この区分の結果を散布図で図 7.7. に示した。また各クラスターを構成する墓の番号は付編 4 に示した。各クラスターにおける変数の詳細は表 7.7. に示した。区分の結果は以下の通りである。各クラスターを構成する墓の数はクラスター 1 が最も多く、ついでクラスター 2 と 3 が多い。クラスター 1 は副葬品を納める墓と納めない墓を含み、前者の場合は 1-4 種類、1-4 点の副葬品が出土した。クラスター 2 の墓は 1-4 種類、5-8 点の副葬品を持つ。クラスター 3 の墓は 1-5 種類、9-13 点の

副葬品を持つ。クラスター4の墓は4-7種類、5-9点の副葬品を持つ。クラスター5の墓は2-8種類、13-18点の副葬品を持つ。最後に、クラスター6の墓は2-10種類、21-28点の副葬品を持つ。散布図を観察すると、これらのまとまりのうち、クラスター1と2は大きく1つにまとめられると推定できる。ここから、IIa1-IIa2段階には、

表 7.7. 各クラスターの値 (大墓地東地区・IIa1-IIa2 段階・2 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	36	1.69	2.86	0	4	0	4
2	33	2.28	6.50	1	4	5	8
3	32	3.36	10.79	1	5	9	13
4	10	5.30	7.40	4	7	5	9
5	17	4.65	15.06	2	8	13	18
6	5	5.80	23.80	2	10	21	28

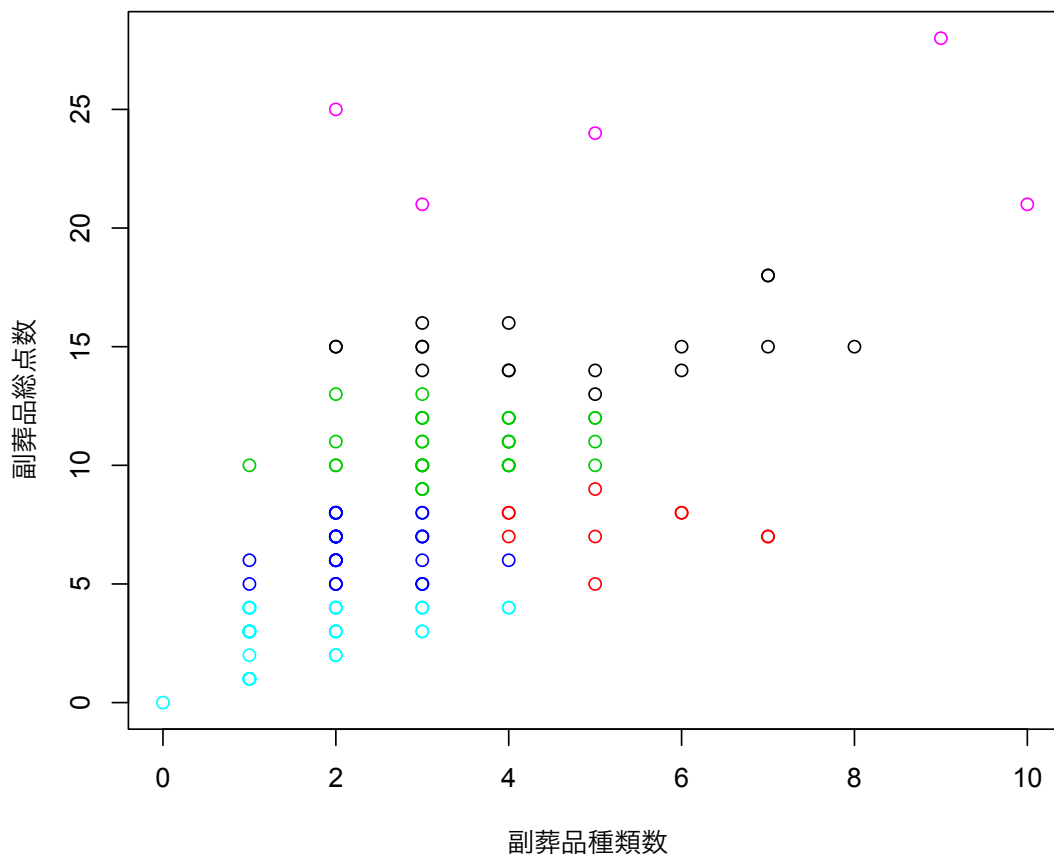


図 7.7. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地東地区・IIa1-IIa2 段階・2 変数)

副葬品の量と種類に乏しいまとまり（クラスター1と2）、副葬品の種類には乏しいが量は豊富なまとまり（クラスター3）、副葬品の量は乏しいが種類は多様なまとまり（クラスター4）、副葬品の量が種類の両方もしくは一方に優れるまとまり（クラスター5）、量・種類の両方もしくは一方が特に優れるまとまり（クラスター6）が見出された。

この2変数での結果を踏まえ、墓の面積を加えた3変数でのクラスターリングの結果を対散布図で図7.8.に示した。この分析で対象とした墓の数は80基である。最適なクラスター数は6が推定されたため、6としてクラスターリングを行ったところ各クラスターを構成する墓の数は、20・22・23・10・2・3に区分できた。各クラスターの詳細は表7.8.に示した。各クラスターの水準をもとに3変数と2変数の場合の各クラスターを構成する墓の対応を試みたところ、下記の結果が得られた。まず3変数のクラスター6は、2変数のクラスター6に内包される。そのほかのクラスターの対応は完全でないものの、概ね以下ようになった。3変数のクラスター1・2・3は、2変数のクラスター1・2・3に、それぞれ1・2・1基の墓を除いて対応する。3変数のクラスター4と5を合わせると、2変数のクラスター4と5と1基の墓を除いて対応する。ここから、最上位のクラスターを構成する墓に関しては、2変数や3変数であろうとも共通する一方で、より下位のクラスターでも構成墓が概ね対応することが読み取れる。したがって、この段階では上位のクラスターはどの変数でも優れている一方で、下位のクラスターでも若干の相違点はあるものの概ね対応することが読み取れた。

以上から、IIa1-IIa2 段階の大墓地東地区の墓は、前段階と比べてより様相が多様化し、特に副葬品が劣る墓は細かく見るとさらに複雑化することが示された。特に2変数の場合、前段階の水準と比較すると、IIa1-IIa2 段階のクラスター1は前段階のクラスター1よりやや劣る水準になり、前段階のクラスター2は本段階ではクラスター2と4に分けられる。前段階のクラスター3と4は本段階のクラスター3と5としてやや副葬品の水準を落としつつ継続した。前段階のクラスター5は、本段階のクラスター6において種類数が乏しくなるが総点数は同水準で継続した。ここから、上位のクラスターに関しては概ね同じかやや低い水準が引き継がれる一方で、下位だが最低ではないクラスターはさらに優劣が生じることが読み取れた。墓地の利用が盛んになる中で、中間よりはやや下の層の厚みの増加が本段階でも継続したと見られる。また、図7.8.から3つの変数のうち、副葬品の種類数と総点数は相関したが、墓の規模と副葬品の総点数は上位のクラスターで相関するに留まった。これはより下位のクラスターは明確な区分が難しいことを示している。以上から、本段階のクラスター数は6が示された。

表 7.8. 各クラスターの値（大墓地東地区・IIa1-IIa2 段階・3変数）

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	20	1.40	3.00	1.64	1	3	1	5	0.76	4.65
2	22	2.73	6.50	1.60	1	5	5	8	0.77	2.71
3	23	3.48	10.65	2.09	1	5	9	12	0.97	3.19
4	10	3.90	14.60	2.60	2	6	14	16	1.35	4.52
5	2	8.50	19.50	1.81	7	10	18	21	1.81	1.81
6	3	3.33	23.33	3.77	2	5	21	24	2.9	4.65

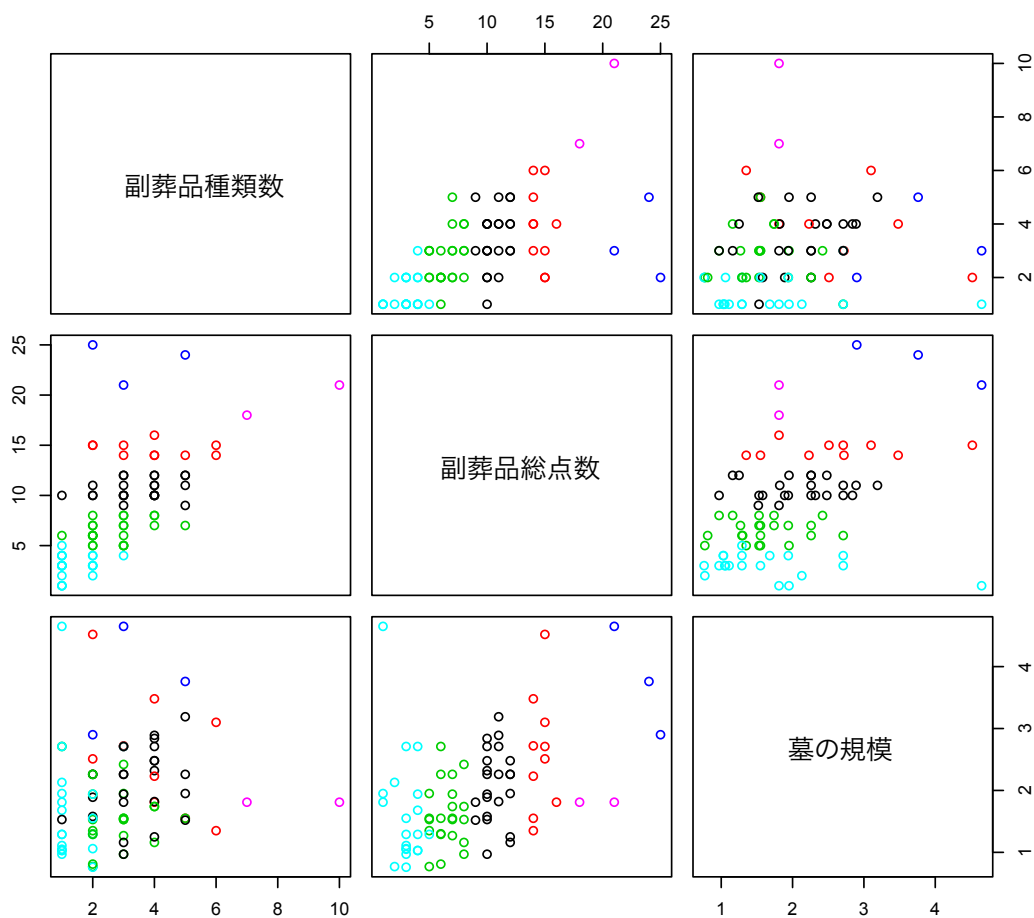


図 7.8. クラスタリング結果を示した対散布図（大墓地東地区・IIa1-IIa2 段階・3 変数）

#### 7.1.1.5. IIb 段階

クラスタリング対象の墓の数は5基である。クラスター数は4が推定された。クラスター数を4としてクラスタリングしたところ、各クラスターを構成する墓の数は、 $2 \cdot 1 \cdot 1 \cdot 1$ の区分が得られた。この区分の結果を散布図で図7.9に示した。また各クラスターを構成する墓の番号は付編4に示した。各クラスターの詳細は表7.9に示した。区分の結果は以下の通りである。クラスター1を構成する墓の数は1基のみで、1種類、4点の副葬品を納める。クラスター2の墓は2基で構成され、3種類、4点の副葬品を納める。クラスター3の墓も1基のみで、3種類、14点の副葬品を納める。最後に、クラスター4の墓も1基のみで、7種類、23点の副葬品を納める。散布図を観察すると、これらのまとまりのうち、クラスター1と2は大きく1つにまとめられると推定できる。ここから、IIb段階には、副葬品の量と種類に乏しいまとまり（クラスター1と2）、副葬品の種類には乏しいが量は豊富なまとまり（クラスター3）、副葬品の量と種類の両方に優れるまとまり（クラスター4）の3つの大きなまとまり

表 7.9. 各クラスターの値（大墓地東地区・IIb 段階・2 変数）

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	1	1.00	4.00	1	1	4	4
2	2	3.00	4.00	3	3	4	4
3	1	3.00	14.00	3	3	14	14
4	1	7.00	23.00	7	7	23	23

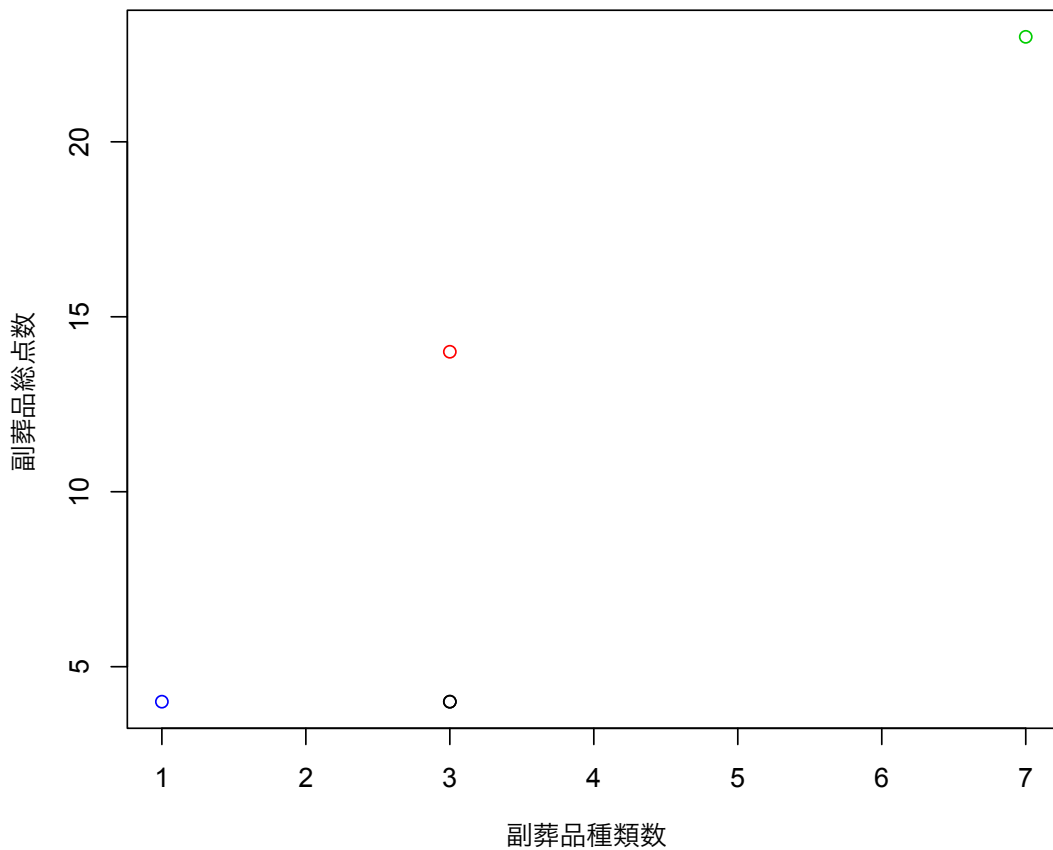


図 7.9. クラスタリング結果を示した散布図（大墓地東地区・IIb 段階・2 変数）

まが見出せる。IIb 段階以降の墓は構成数が少なく、前段階よりもやや単純化した副葬品の差異が読み取れた。前段階の水準と比較すると、IIb 段階のクラスター1 と 2 は前段階のクラスター1 と同水準になり、本段階のクラスター3 は前段階のクラスター4 と同水準、本段階のクラスター4 は前段階のクラスター5 と同水準である。ここから、上位のクラスターに関しては概ね同じかやや落とした水準が引き継がれる一方で、下位だが最低ではないクラスターは単純化することが読み取れた。この段階を境に墓地の利用が低下し、中間よりはやや下の層の厚みが薄くなることが読み取れた。

墓の面積を加えた 3 変数でのクラスタリングの結果も 2 変数の場合と全く同様の結果が得られた（図 7.10）。

このクラスターの詳細は表 7.10. に示した。クラスター2 には、やや大きい面積を持つ墓も存在するが、基本的には副葬品の種類数と総点数が増えれば墓の面積も増加することが読み取れた。つまり、3 つの変数の優劣はこの段階では連動し、墓の相対的な差異を示す点を読み取れた。以上から、本段階のクラスター数は4 が示された。

表 7.10. 各クラスターの値 (大墓地東地区・IIb 段階・3 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	1	1.00	4.00	1.35	1	1	4	4	1.35	1.35
2	2	3.00	4.00	2.52	3	3	4	4	1.94	3.1
3	1	3.00	14.00	1.94	3	3	14	14	1.94	1.94
4	1	7.00	23.00	2.97	7	7	23	23	2.97	2.97

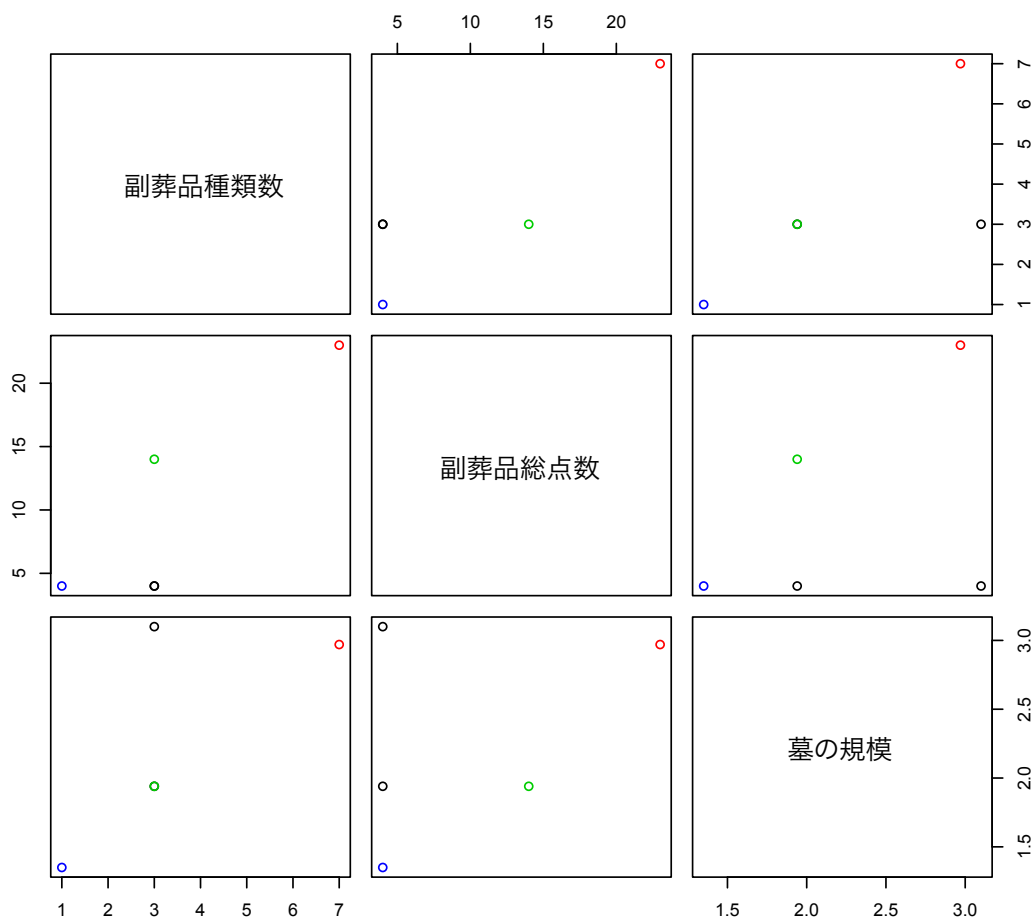


図 7.10. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地東地区・IIb 段階・3 変数)



### 7.1.1.6. IIIa1-IIIa2 段階

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、対象の墓の数は5基である。クラスター数は3が推定された。クラスター数を3としてクラスタリングを行ったところ、各クラスターを構成する墓の数に関して3・1・1の区分が得られた。この区分の結果を散布図で図7.11.に示した。また各クラスターを構成する墓の番号は付編4に示した。クラスター1のみ墓を3基含む。区分の結果は以下の通りである。クラスター1の墓は2-3種類、2-4点の副葬品を持つ。クラスター2の墓は4種類、9点の副葬品を持つ。最後に、クラスター3の墓は3種類、13点の副葬品を持つ。散布図を観察すると、IIIa1-IIIa2段階には、副葬品の量と種類に乏しいまとまり（クラスター1）、副葬品の量には乏しいが種類は豊富なまとまり（クラスター2）、副葬品の量と種類の両方に優れるまとまり（クラスター3）の3つのまとまりが見出せる。この段階にはすでに構成数が少なくなり、前段階から継続して副葬品の差異が単純化することが読み取れた。以前の段階の水準と比較すると、本段階のクラスター1は前段階のクラスター1と同等の水準になり、本段階のクラスター2はIIa1-IIa2段階のクラスター3と同水準、本段階のクラスター3は前段階のクラスター3と同水準である。種類数も総点数も少なくなることがわかる。ここから、本段階では上位のクラスターの水準が引き下がって下位のクラスターとの差が縮まり、墓地利用の低下と比例して墓地から見出せる墓の差異も小さくなることが読み取れた。

3変数の場合は、合致する墓の数は4基であった。墓の数が5基未満なため、Rを用いたクラスタリングは行わない。2変数のクラスター2を構成していた唯一の墓は、条件に合致していないため除外され、クラスター数は合計で2になる。墓の数は少ないが、副葬品の種類数と総点数が増加すれば、墓の規模も増加することが読み取れた。

表 7.11. 各クラスターの値（大墓地東地区・IIIa1-IIIa2 段階・2 変数）

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	3	2.33	3.00	2	3	2	3
2	1	4.00	9.00	4	4	9	9
3	1	3.00	13.00	3	3	13	13

表 7.12. 各クラスターの値（大墓地東地区・IIIa1-IIIa2 段階・3 変数）

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	3	2.33	3.00	1.55	2	3	2	3	0.93	1.94
2	1	3.00	13.00	2.71	3	3	13	13	2.71	2.71

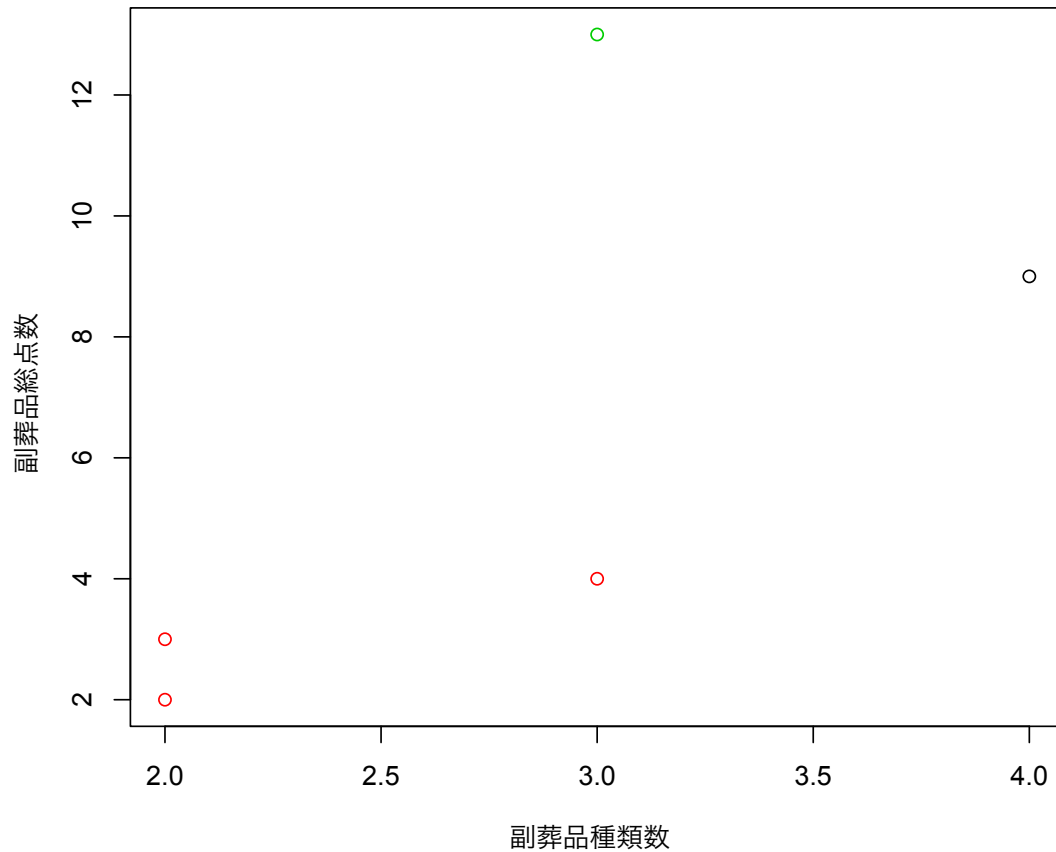


図 7.11. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地東地区・IIIa1-IIIa2 段階・2 変数)

#### 7.1.1.7. IIIb 段階

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、対象の墓の数は3基である。墓の数が5基未満のため、Rによるクラスタ分析は行わず、手動でクラスタを見出した。クラスタ数は2が推定された。各クラスタを構成する墓の番号は付編4に示した。区分の結果は以下の通りである。クラスタ1を構成する墓は2基で、どちらも4種類、5点の副葬品を納める。一方で、クラスタ2の墓は1基のみで、2種類、7点の副葬品を納める。この両者には若干の種類数や総点数の違いはあるが、同一の水準の中に入れて差しつかえない。前段階と比較すると、副葬品の差異に小さな差異しか見出せなくなる。強いて以前の段階の水準と比較すると、本段階のクラスタ1と2は、それぞれ前段階のクラスタ1と2に対応する水準だが、両者の差はほとんどない。墓地利用の終了段階であるIIIb段階には、副葬品から見出せる墓の差異はほとんどなくなることが読み取れた。

3変数の場合は、合致する墓の数は2基であった。クラスタ数は合計で2となるが、クラスタ1は種類数

とほかの規模ではクラスター2よりも優れる一方で、クラスター2は総点数でクラスター1よりも優れる。したがって、変数が優れているわけではなく、変数によって優れている分野が混交することが読み取れた。以上から、本段階は2つのクラスターに区分できた。

#### 7.1.1.8. 大墓地東地区の分析のまとめ

以上、副葬品の種類数と総点数の2つの変数の場合と、墓の規模を加えた3つの変数の場合の両面から、各段階における墓のクラスタリングを行った。その結果、細かなクラスターは段階別に4 (Ia1-Ia3 段階) →5 (Ib1-Ib2 段階) →6 (IIa1-IIa2 段階) →4 (IIb1 段階) →3 (IIIa1-IIIa2 段階) →2 (IIIb 段階) と変化することが読み取れた。ここから、Ia1-Ia3 段階の時点で、すでに墓地に造営される墓に明瞭な差異があり、その差異は Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階の最も墓地利用が活発な時期に最も複雑化したことが示された。最盛期の IIb1 段階以降は徐々に副葬品の優劣に基づく構図は単純化し、IIIb 段階の墓地利用の終末にはほとんど差異が見られなくなる。特に IIb1 段階以後は、1つの段階ごとに前段階で最上位の水準の墓が造営されなくなり、全体としても副葬品の種類の多様性もなくなる。ある段階における墓地利用の程度に比例して墓に見られる差異も変化することが読み取れた。以上から、大墓地東地区の被葬者には、墓地利用の開始当初から副葬品に被葬者の地位を示す単純な優劣が存在し、墓地利用が増加しながら最盛期にかけて、その構図がより複雑化することが読み取れた。特に特徴的な点は、最盛期までは上位の墓の水準はさほど変わらない一方で、中間層から下の層の厚みが IIa1-IIa2 段階まで増すことにある。数の上でも最上位のクラスターを構成する墓の数は大きく変化しない点も特徴である。これらの最上位の水準の墓が IIb1 段階以後は段階的に上から順に消えて行くが、母集落の衰退または社会構造の単純化が進行したためと考えられる。副葬品の差異に表れる被葬者の社会的な地位の差異は、IIa1-IIa2 段階を境に増加から現象に転じて行くため、母集団にも縦の社会構造の面で同様の推移があったことが推察された。

#### 7.1.2. 大墓地西地区

##### 7.1.2.1. すべての墓のクラスタリング

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、対象の墓の数は226基である。クラスター数は6が推定された。クラスター数を6としてクラスタリングを行ったところ、各クラスターを構成する墓の数は93・73・29・24・6・1、116・74・17・13・6・1、の2通りの区分結果が得られた。このうち、ほとんどの場合で前者の構成墓数が得られたため、この区分を採用した。区分の結果を散布図で図7.12.に示した。また各クラスターを構成する墓の番号は付編4に示した。各クラスターの詳細は表7.13.に示した。各クラスターを構成する墓の数は、クラスターの序列が上がるごとに減少する。クラスター1は副葬品を納めた墓と全く納めない墓の両方を内包し、前者の場合では1-5種類、1-6点の副葬品を持つ。クラスター2の墓は1-6種類、7-13点の副葬品を持つ。クラスター3の墓は1-9種類、14-22点の副葬品を持つ。クラスター4の墓は2-10種類、23-36点の副葬品を持つ。クラスター5の墓は3-8種類、46-56点の副葬品を持つ。最後にクラスター6の墓は3種類、86点の副葬品を持つ。これらのクラスターは、全体としては4つに大きくまとめられる。すなわち、6種類以下、総点数13点以下の副

葬品を持つクラスター1・2、1-10 種類、14-36 点の副葬品を持つクラスター3・4、クラスター5 と6 で1つずつである。これらのまとまりは、クラスター1・2 は副葬品の種類数・総点数がまとまりを持ち、クラスター3・4 はそれらのうち特に総点数がばらける。クラスター5 と6 はそれぞれ明確に分けられる。特に、クラスター2 と3 に関しては副葬品の総点数は23 点以上が境となる。ここから、ある点数以上の副葬品を墓のまとまりでは、総点数が互いの差異を決める指標となることがわかった。

表 7.13. 各クラスターの値 (大墓地西地区・全時期・2 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	93	1.91	3.35	0	5	0	6
2	73	2.99	9.74	1	6	7	13
3	29	3.93	16.52	1	9	14	22
4	24	5.40	29.20	2	10	23	36
5	6	5.00	49.83	3	8	46	56
6	1	3.00	86.00	3	3	86	86

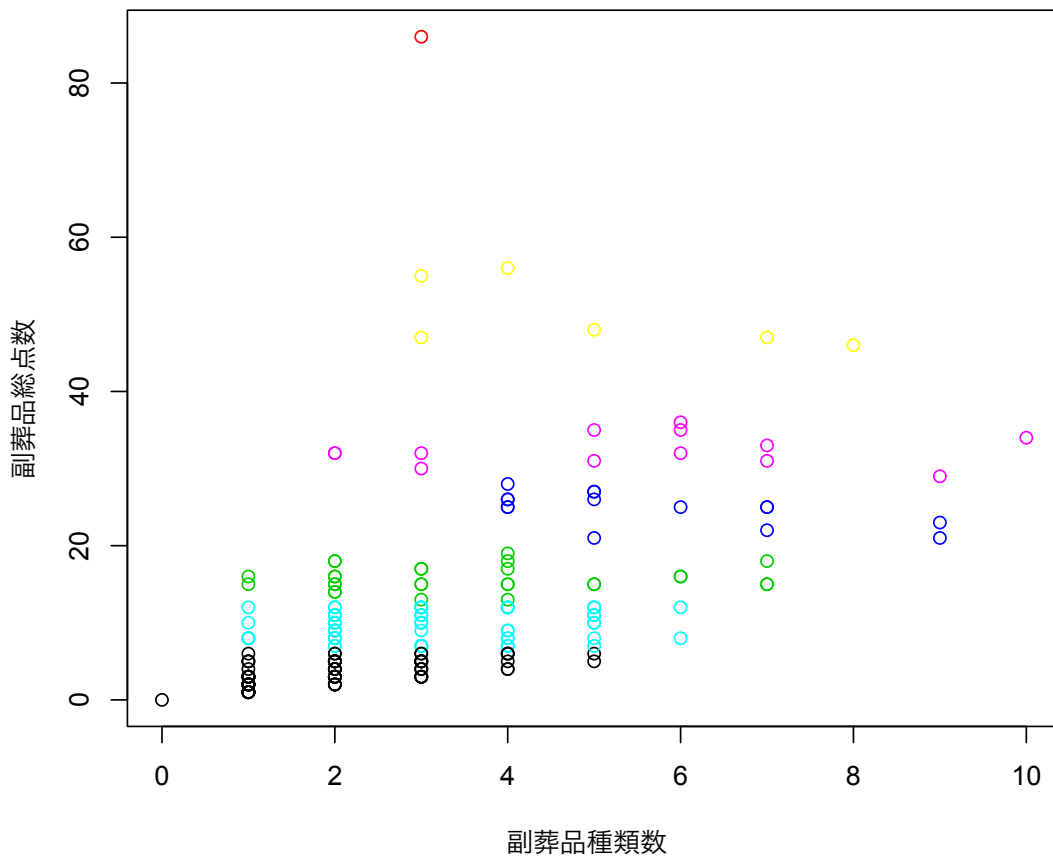


図 7.12. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地西地区・全時期・2 変数)

墓の規模を変数に加えた3変数によるクラスタリングの対象墓は162基である(図7.13.)。クラスター数は6が推定されたが、実際にクラスタリングを実施したところ、各クラスターを構成する墓の数にばらつきが出た。そこで、クラスター数を1つ繰り上げ5としたところ、各クラスターの墓数の構成は67・57・21・14・3で安定して区分できた。各クラスターにおける変数の値の詳細は表7.14.に示した。3変数の場合と2変数の場合の各クラスターを構成する墓の対応を、各クラスターの水準をもとに観察すると、以下のようになった。3変数のクラ

表7.14. 各クラスターの値 (大墓地西地区・全時期・3変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	67	1.93	3.43	2.31	0	5	0	6	0.61	7.55
2	57	2.81	9.79	2.69	1	6	7	13	1.29	5.16
3	21	3.71	16.57	3.74	1	9	14	21	1.81	7.74
4	14	5.71	29.79	3.40	2	10	23	35	1.8	6.32
5	3	5.00	47.33	3.52	3	7	47	48	1.42	4.97

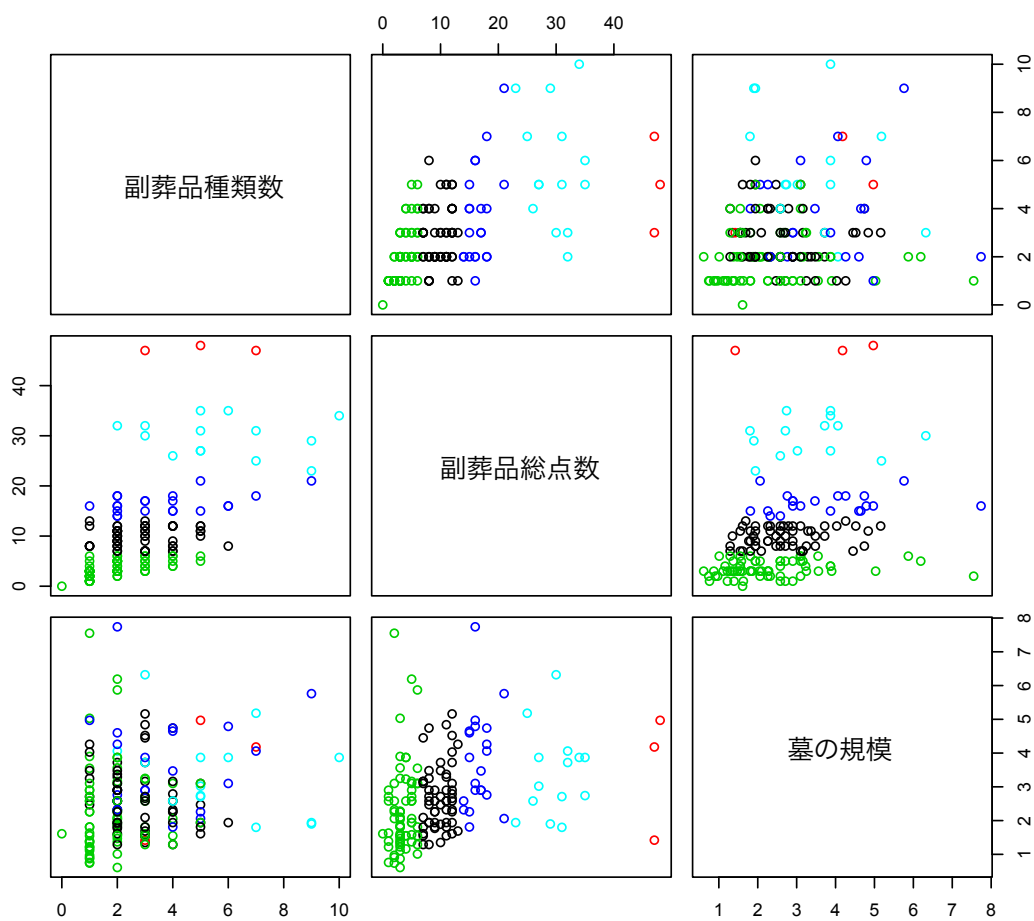


図7.13. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地西地区・全時期・3変数)

スターを構成する墓と2変数のクラスターを構成する墓に完全に内包される。ただし、2変数のクラスターのうち、クラスター6を構成する1206号墓は3変数の場合を持たないため対応は示せなかった。また墓の規模と副葬品の総点数と副葬品の総点数と種類数は相関することも図7.13.から読み取れた。以上から、墓の面積を変数に加えた場合でも墓の区分の対応が読み取れた。大墓地西地区においても、被葬者の差異は、副葬品の種類数・総点数、墓の規模に表れることが読み取れた。この結果を踏まえ、次に各段階でのクラスタリングを実施する。

#### 7.1.2.2. Ia1-Ia3 段階

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、対象の墓の数は5基である。クラスター数は2が推定された。クラスター数を2としてクラスタリングを行ったところ、各クラスターの構成墓の数は4・1の区分が得られた。区分した結果を示した散布図が図7.14.である。また各クラスターを構成する墓の番号は付編4に示した。各クラスターにおける変数の値の詳細は表7.15.に示した。区分の結果、クラスター1の墓が5基中4基を占め、2-3種類、3-9点の副葬品を納める。クラスター2の墓は7種類、25点の副葬品を納める。以上のまとまりから、Ia1-Ia3段階の大墓地西地区では、墓の数は少ないものの、副葬品の種類数・総点数では、優れるまとまりと劣るまとまりの大きく2つに墓を区分できた。ただし、優れたまとまりである108号墓は、多数の遺体が検出された合葬墓であり、小さいまとまりを構成する単葬墓とは単純には比較することができない点は留意する必要がある。墓地利用が開始した最初気の段階から、明確な差異が存在したことが読み取れた。

墓の規模を変数に加えた場合、墓の数は2変数の場合と同じで、なおかつ構成クラスター数と各クラスターを構成する墓も同じだった(図7.15.・表7.16.)。この場合、クラスター2の面積はクラスター1の面積よりも優れている。副葬品の種類数と総点数に加えて墓の規模もクラスターの優劣に対応し、なおかつ墓地の使用開始段階からすでに差異が存在することが読み取れた。ここから、Ia1-Ia3段階は2クラスターに区分できることが示された。

表 7.15. 各クラスターの値 (大墓地西地区・Ia1-Ia3 段階・2変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	4	2.25	6.50	2	3	3	9
2	1	7.00	25.00	7	7	25	25

表 7.16. 各クラスターの値 (大墓地西地区・Ia1-Ia3 段階・3変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	4	2.25	6.50	2.08	2	3	3	9	1.37	2.58
2	1	7.00	25.00	5.18	7	7	25	25	5.18	5.18

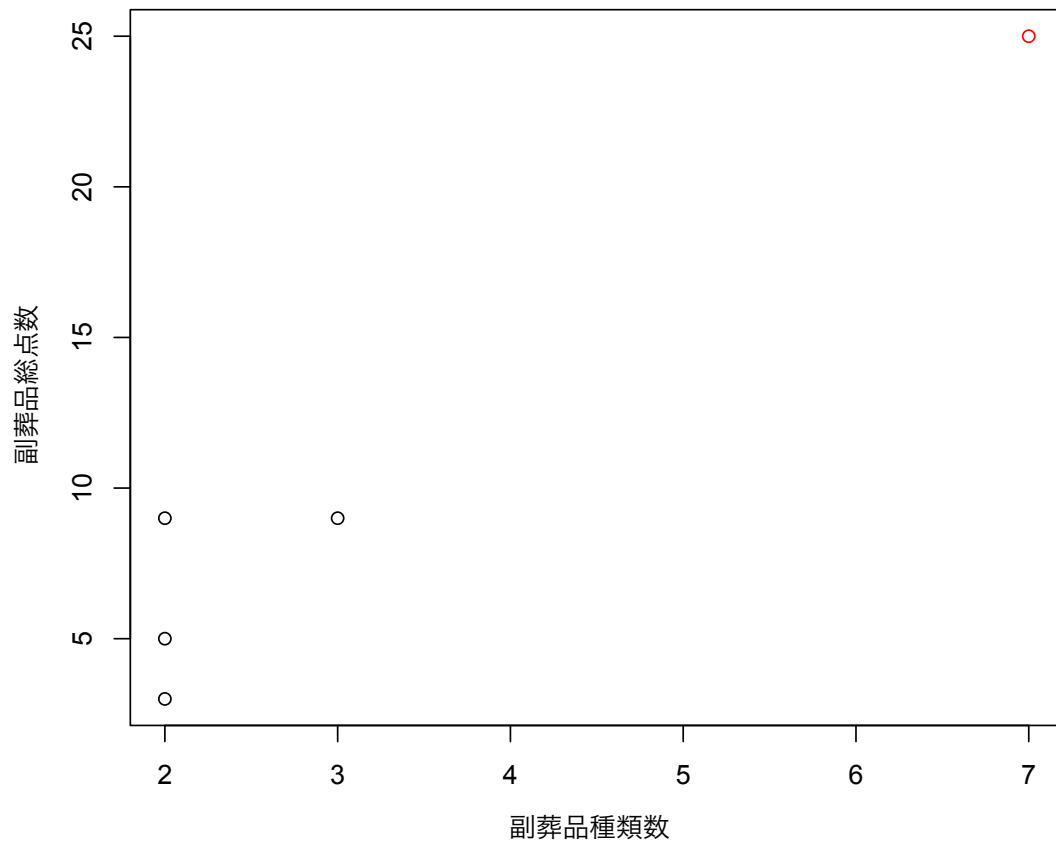


図 7.14. クラスタリング結果を示した散布図（大墓地西地区・Ia1-Ia3 段階・2 変数）

#### 7.1.2.3. Ib1-Ib2 段階

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、対象の墓の数は 46 基である。クラスター数は 4 か 5 が推定できた。両方のクラスター数で区分を行ったところ、5 では安定した結果を得ることができなかった一方で、4 では各クラスターを構成する墓の数が 15・21・10・1 で安定して区分できた。したがって、クラスター数を 4 と推定して区分を観察した。この区分の結果を示した散布図が図 7.16 である。また各クラスターを構成する墓の番号は付編 4 に示した。各クラスターにおける変数の詳細は表 7.17 に示した。区分の結果、クラスター 1 の墓は 1-5 種類、1-8 点の副葬品を持つ。クラスター 2 の墓は 1-7 種類、10-22 点の副葬品を持つ。クラスター 3 の墓は 2-10 種類、25-47 点の副葬品を持つ。クラスター 4 の墓は 3 種類、86 点の副葬品を持つ。構成する墓の数は、各クラスターは多い順に、2→1→3→4 となる。ある程度の副葬品の種類数と総点数を持つクラスター 2 が多数を占めることが特徴である。さらにこの段階で特徴的な点は、クラスター 4 の存在で、この墓は著しく多い量の副葬品を納めていた。以上から、Ib1-Ib3 段階の大墓地西地区では、副葬品の種類数や総点数に劣るクラスター 1 から、総点数を増加させかつやや種類数も増加させたクラスター 2、総点数をさらに増加させたクラスター 3、

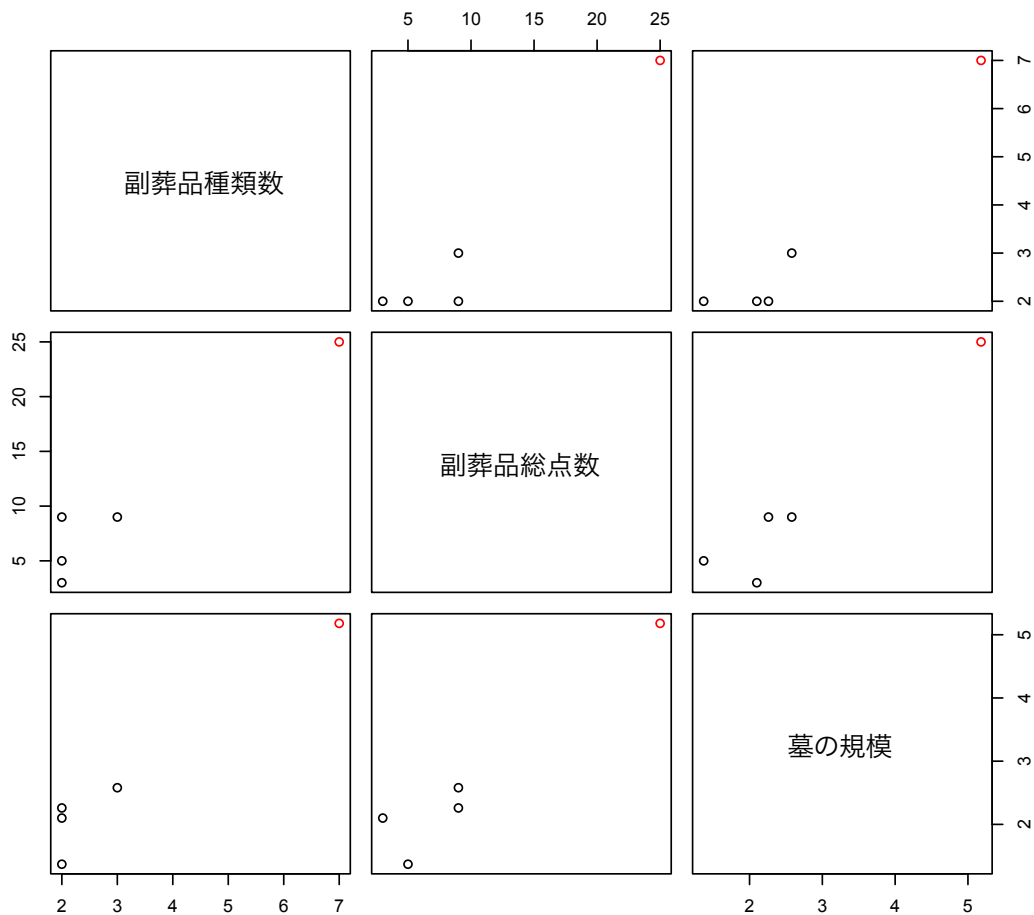


図 7.15. クラスタリング結果を示した対散布図（大墓地西地区・Ia1-Ia3 段階・3 変数）

種類数は少ないが総点数は著しく多いクラスター4が見出せた。副葬品に見る墓の相対的な優劣では、種類数も重要だが、総点数がより重要なことが読み取れた。また前段階よりも副葬品の多様化が進んだことが伺えた。

墓の面積を変数に加えた場合、該当する墓の数は37基に減少した。2変数を対象にした分析と同じクラスター数4でクラスタリングしたところ、各クラスターを構成する墓の数は17・12・7・1の組み合わせが安定して得られた（図7.17・表7.18）。2変数と3変数の場合に各クラスターを構成する墓は、3変数のクラスター2を構成する墓は2変数のクラスター2に完全に内包されるかたちで対応した。また3変数のクラスター3と4を構成する墓を合わせると、2変数のクラスター3に完全に内包された。3変数のクラスター1は2変数のクラスター1と2基の墓を除いて対応した。この例外は、2変数のクラスター2に内包される墓で、3変数と2変数のクラスターは最も下位のクラスターでは若干異なることが読み取れた。2変数のクラスター6を構成する唯一の墓は規模の情報がないため、3変数での対応はない。変数の違いが若干の区分の相違をもたらすが、全体としては、2変数のクラスター分析の結果が3変数の場合も支持され、Ib1-Ib2段階は4クラスターに区分できることが示された。



表 7.17. 各クラスターの値 (大墓地西地区・Ib1-Ib2 段階・2 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	15	2.47	3.53	1	5	1	8
2	21	3.27	14.55	1	7	10	22
3	10	4.67	31.89	2	10	25	47
4	1	3.00	86.00	3	3	86	86

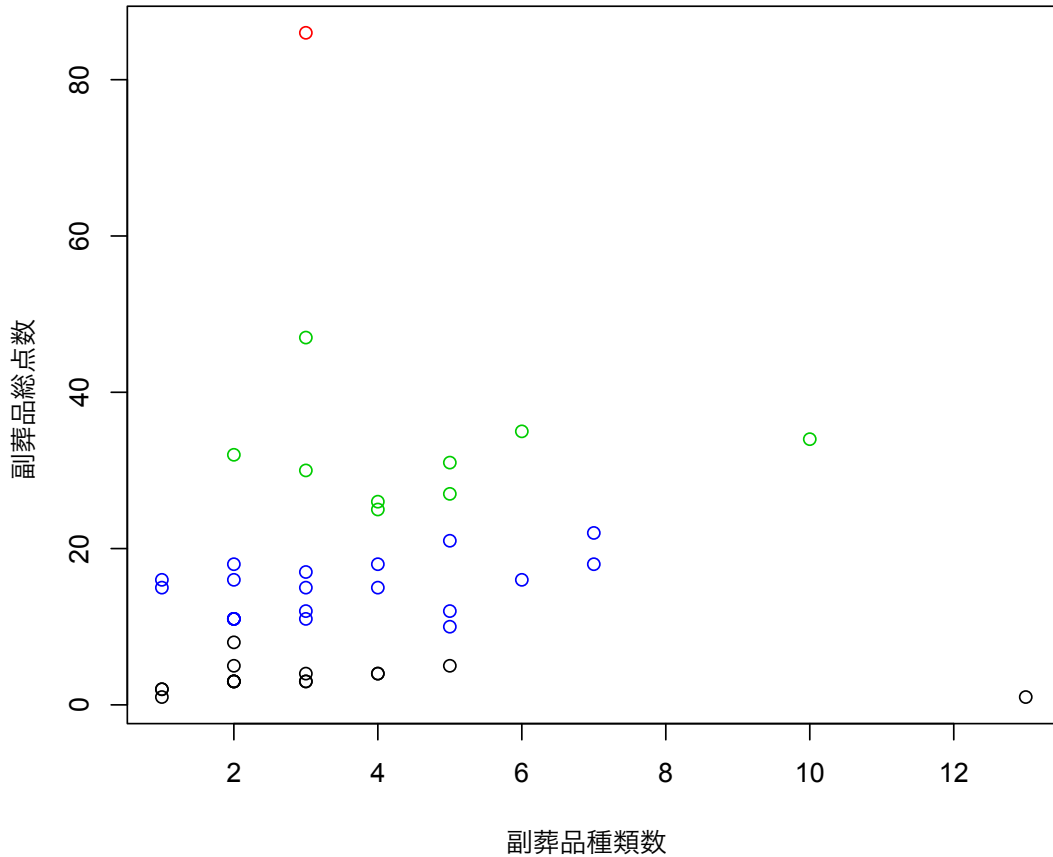


図 7.16. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地西地区・Ib1-Ib2 段階・2 変数)

表 7.18. 各クラスターの値 (大墓地西地区・Ib1-Ib2 段階・3 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	12	2.67	3.67	2.22	1	5	2	13	0.91	4.26
2	17	3.12	14.59	3.24	1	7	10	21	1.81	4.97
3	7	5.00	30.71	3.78	2	10	26	35	2.58	6.32
4	1	3.00	47.00	1.42	3	3	47	47	1.42	1.42

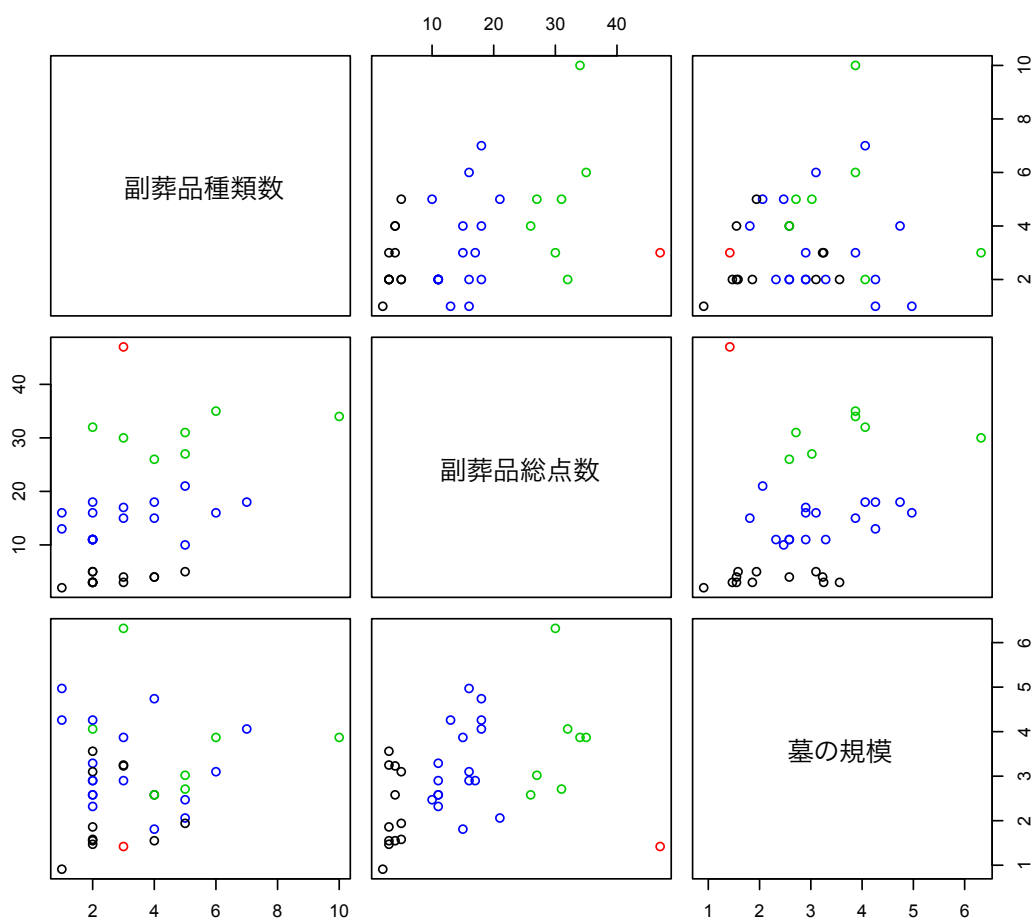


図 7.17. クラスタリング結果を示した対散布図（大墓地西地区・Ib1-Ib2 段階・3 変数）

#### 7.1.2.4. IIa1-IIa2 段階

2 変数のクラスタリングにおける対象墓の数は 60 基である。クラスター数は 4 が推定された。このクラスター数を元に行ったクラスタリングの結果を散布図で図 7.18. に示した。また各クラスターを構成する墓の数は 23・24・8・5 であり、それらを構成する墓の番号は付編 4 に示した。各クラスターにおける変数の値の詳細を表 7.19. に示した。区分の結果は以下の通りである。各クラスターを構成する墓の数は、クラスターの序列順に、2→1→3→4 となる。最下位のクラスターとその次に下位のクラスターを構成する墓の数が多くことが特徴である。クラスター1の墓は 1-5 種類、1-7 点の副葬品を持つ。クラスター2の墓は 1-7 種類、9-19 点の副葬品を持つ。クラスター3の墓は 4-9 種類、23-33 点の副葬品を持つ。クラスター4の墓は 3-8 種類、46-56 点の副葬品を納める。全体としては、クラスター1や2の水準が標準的であり、クラスター3は種類数や総点数に優れ、さらにクラスター4は種類数ではあまり多様ではないが、総点数は突出することが明らかとなった。前段階と比べると、クラスター1と2は同程度の水準を概ね引き継いでいるが、クラスター3は種類数が増えた一方で、総点数ではやや劣る。

表 7.19. 各クラスターの値 (大墓地西地区・IIa1-IIa2 段階・2 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	23	2.13	4.04	1	5	1	7
2	24	3.58	12.58	1	7	9	19
3	8	6.13	27.63	4	9	23	33
4	5	5.40	50.40	3	8	46	56

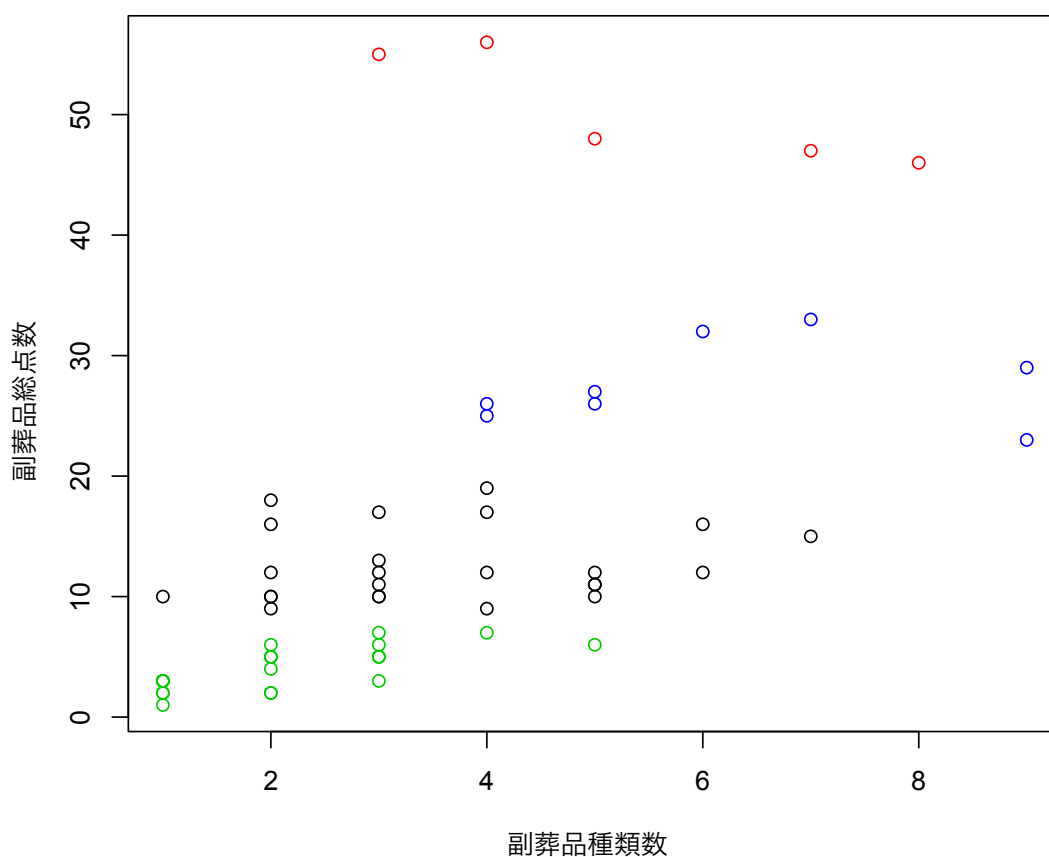


図 7.18. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地西地区・IIa1-IIa2 段階・2 変数)

クラスター4 は、種類数は同水準を維持しているものの、総点数では劣り、全体的には前段階と比べるとやや劣る。ただ、全体的には前段階の枠組みを維持しており、副葬品の差異が引き続いたことがわかる。前段階と同様に、種類数が区分のうえで重要だが、総点数がそれ以上に重要な基準となることが読み取れた。

墓の規模を加えた 3 変数を対象に分析可能な墓の数は 37 基である (図 7.19)。合致したクラスター数は 2 変数の場合よりも 1 つ多い 5 が推定された。クラスター数を 5 としてクラスタリングを試みたところ、各クラスターを構成する墓の数は 15・12・5・3・2 に安定して区分できた。各クラスターにおける変数の値の詳細を表 7.20. に

示した。各クラスターを構成する墓の数は、クラスターの序列が上がるごとに減少する。この区分をもとに2変数のクラスターとの対応を検討したところ、以下の通りになった。まず3変数のクラスター1・4・5は、それぞれ2変数のクラスター1・3・4に完全に内包されるかたちで対応する。3変数のクラスター2と3を合わせた場合、2変数のクラスター2に内包される。したがって、3変数の場合は、クラスタリング自体は細かく分けられるものの2変数のクラスターと対応できた。以上から、3変数を対象にした分析で得られたクラスター数を採用し、IIa1-IIa2段階のクラスターは5とした。

表 7.20. 各クラスターの値 (大墓地西地区・IIa1-IIa2 段階・3 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	15	2.13	4.20	2.35	1	5	2	7	0.87	6.19
2	12	3.42	11.00	2.65	2	5	9	13	1.61	5.16
3	5	3.40	16.80	4.33	2	6	16	18	2.76	7.74
4	3	7.67	26.33	2.57	5	9	23	29	1.9	3.87
5	2	6.00	47.50	4.58	5	7	47	48	4.18	4.97

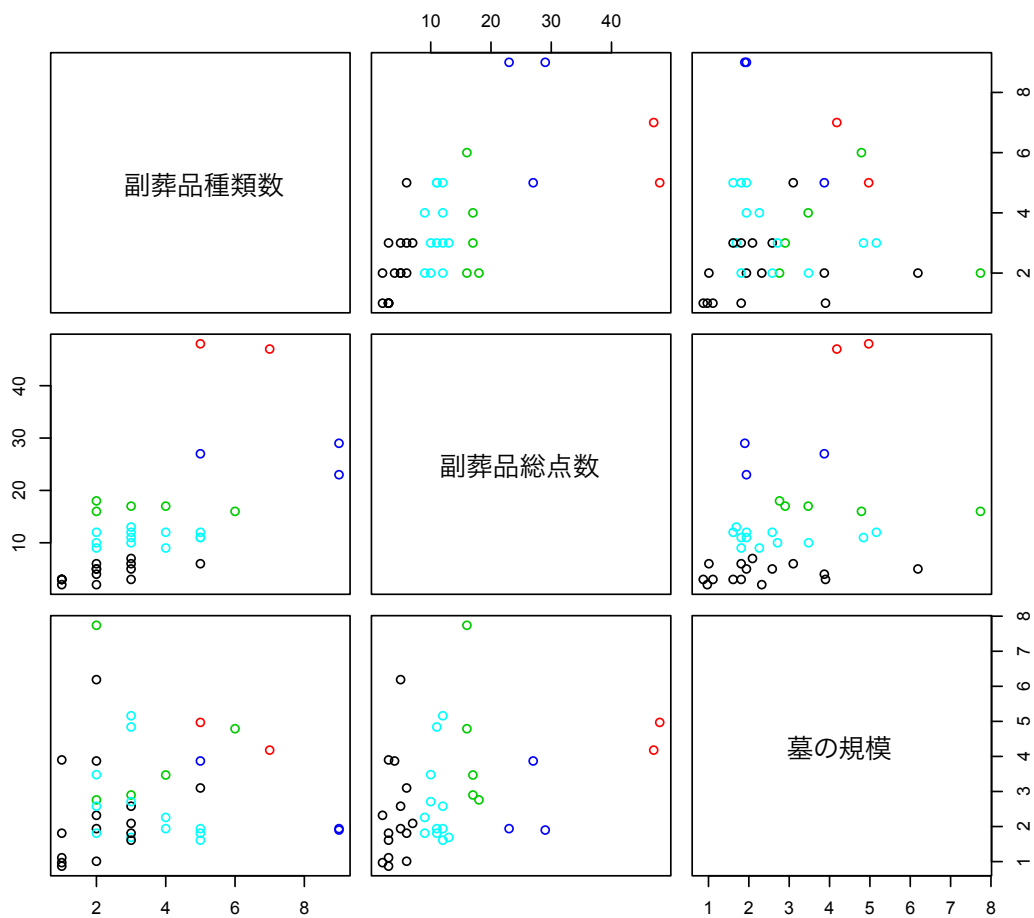


図 7.19. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地西地区・IIa1-IIa2 段階・3 変数)

7.1.2.5. IIb 段階

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、対象の墓の数は 8 基である。クラスター数は 3 が推定された。クラスター数を 3 としてクラスタリングしたところ、各クラスターを構成する墓の数は、6・1・1 と 5・1・2 の 2 種類の区分が得られた。このうち対象の 2 つの変数を元により多くの区分が得られた 5・1・2 の組み合わせを採用した。この区分の結果を散布図で図 7.20.に示した。また各クラスターを構成する墓の番号は付編 4 に示した。各クラスターにおける変数の値の詳細を表 7.21.に示した。区分の結果は以下の通りである。クラスター1の墓は 1-3 種類、1-4 点の副葬品を納める。クラスター2の墓は 4 種類、12 点の副葬品を納める。クラスター3の墓は 5-6 種類、35-36 点の副葬品を納める。前段階と比較するとクラスター1 はやや劣るが、クラスタ

表 7.21. 各クラスターの値 (大墓地西地区・IIb 段階・2 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	5	1.80	3.00	1	3	1	4
2	1	4.00	12.00	4	4	12	12
3	2	3.00	35.50	5	6	35	36

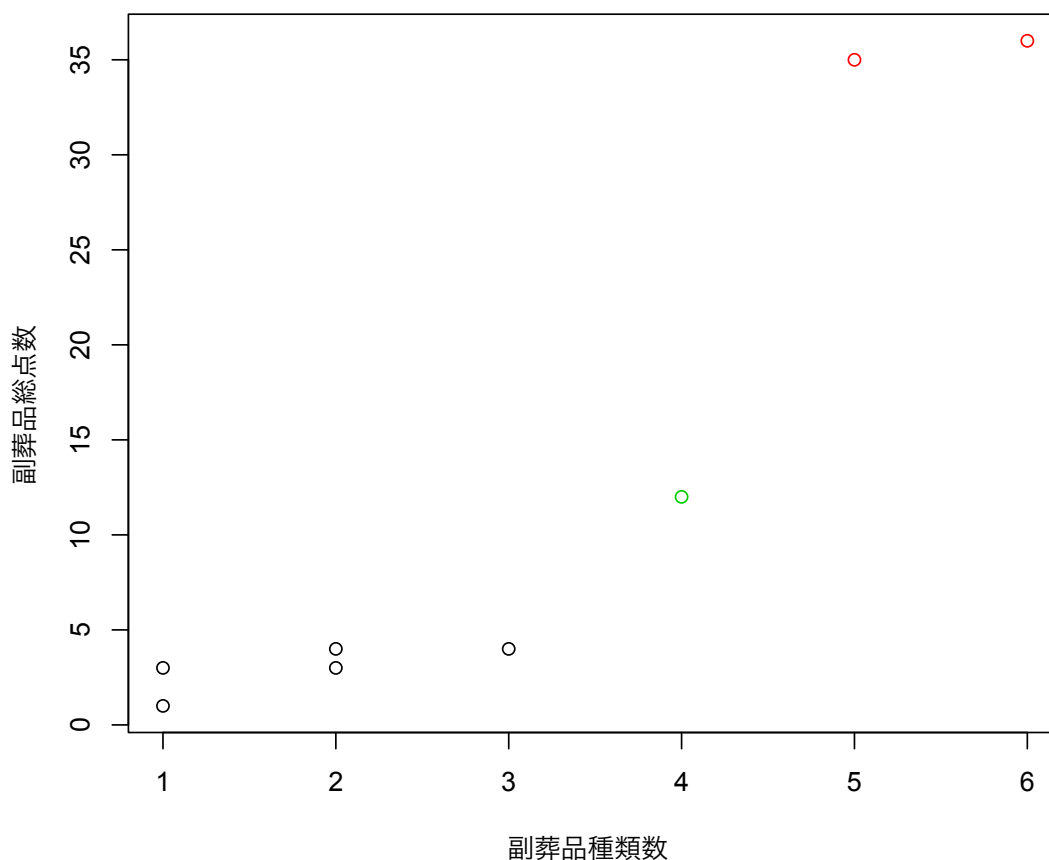


図 7.20. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地西地区・IIb 段階・2 変数)

一2 は同じ水準を維持する。クラスター3 は前段階のクラスター3 と 4 の中間に位置する水準である。全体的には、クラスター3 とそれ以外で副葬品の優劣が著しいことが示された。

墓の規模を加えた 3 変数でクラスタリングした場合、墓の数は 5 基へと減少したが、クラスター数は同じ 3 が推定された (図 7.21.)。クラスター数を 3 とし、3・1・1 の区分が得られた。この各クラスターにおける変数の値の詳細を表 7.22. に示した。3 変数のクラスター1 から 3 は、2 変数のクラスター1 から 3 にそれぞれ内包された。ここから、墓の規模を変数として加えても 2 変数のクラスターの構成は支持された。

表 7.22. 各クラスターの値 (大墓地西地区・IIb 段階・3 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	3	1.33	2.33	2.14	1	2	1	3	1.55	2.58
2	1	4.00	12.00	2.79	4	4	12	12	2.79	2.79
3	1	5.00	35.00	2.74	5	5	35	35	2.74	2.74

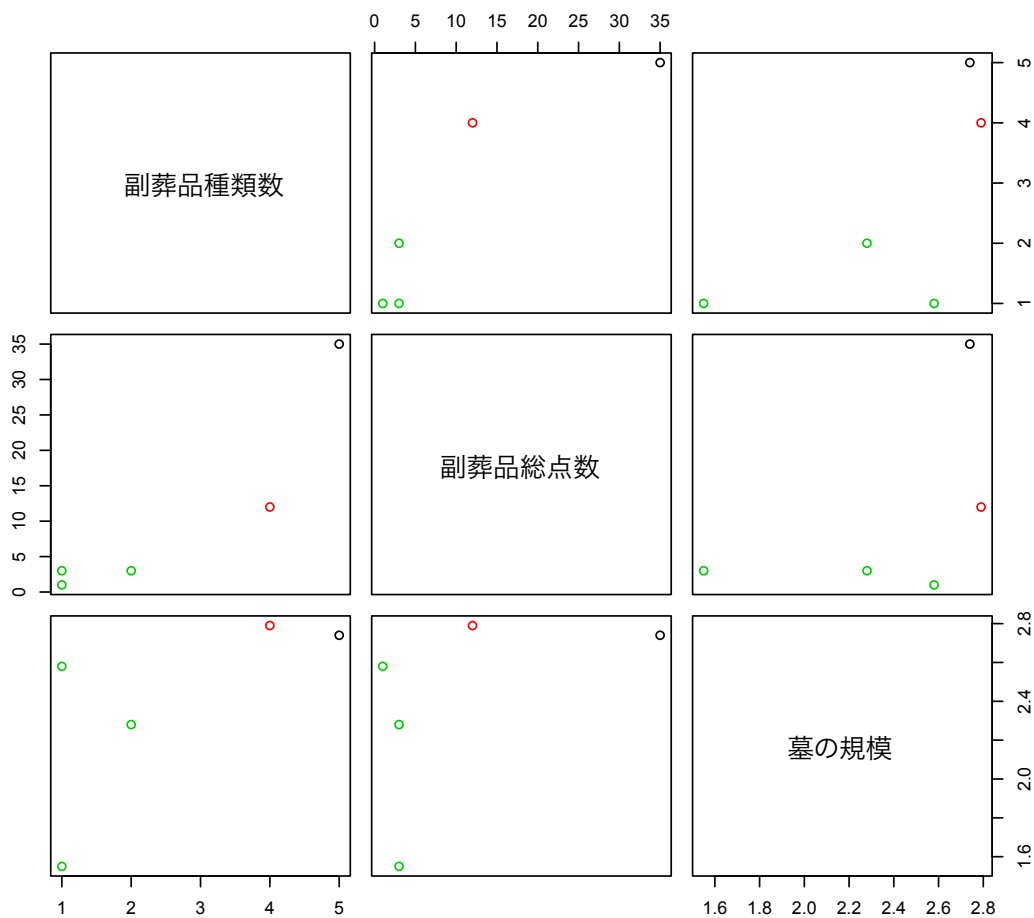


図 7.21. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地西地区・IIb 段階・3 変数)

### 7.1.2.6. IIIa1-IIIa2 段階

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、対象の墓の数は 8 基である。クラスター数は 3 が推定できた。クラスター数を 3 としてクラスタリングしたところ、各クラスターを構成する墓の数は 4・2・2 に区分できた。この区分の結果を散布図で図 7.22. に示した。各クラスターに内包される墓の数は、また各クラスターを構成する墓の番号は付編 4 に示した。また各クラスターにおける変数の値の詳細を表 7.23. に示した。クラスター1 は 4 基の墓から構成され、2-4 種類、6-11 点の副葬品を持つ。クラスター2 の墓は 2 種類、15 点の副葬

表 7.23. 各クラスターの値 (大墓地西地区・IIIa1-IIIa2 段階・2 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	4	3.25	8.75	2	4	6	11
2	2	2.00	15.00	2	2	15	15
3	2	4.50	28.50	3	6	25	32

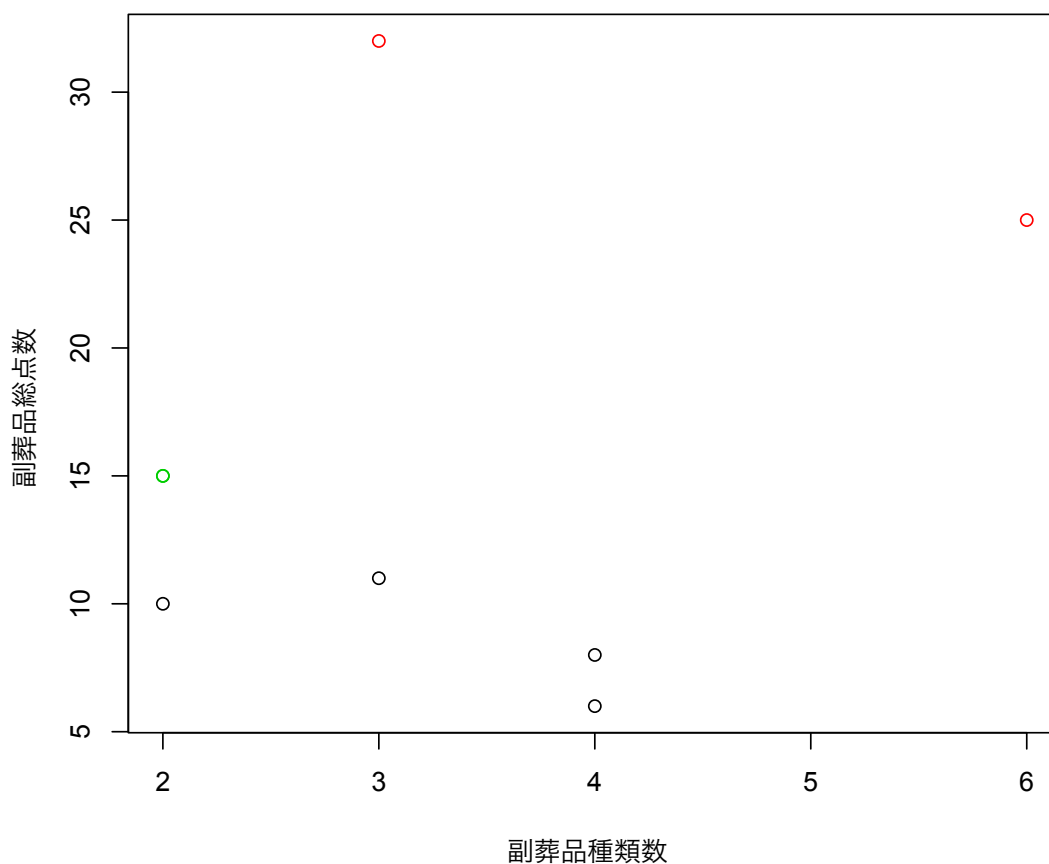


図 7.22. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地西地区・IIIa1-IIIa2 段階・2 変数)

品を有する。クラスター3の墓は6種類、25点の副葬品を有する。この段階では、種類数はある程度限定される一方で、総点数に明確な差異が表れることが特徴である。本段階のクラスター1は、前段階のクラスター1と2の水準であり、本段階のクラスター2は前段階のクラスター2よりも優れた水準にある。一方で、クラスター3は前段階のクラスター3よりもやや劣る規模である。ここから、本段階のクラスターはクラスター1と2、および3の大きく2つに区分できる。この段階には、全体的に墓への副葬品の消費が前段階と比べて低調になり、明確な差異も2つの大きなクラスター以上には見えにくくなると読み取れる。

表 7.24. 各クラスターの値 (大墓地西地区・IIIa1-IIIa2 段階・3 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	2	4.00	7.00	3.02	4	4	6	8	1.29	4.74
2	2	2.50	10.50	2.64	2	3	10	11	1.55	3.72
3	1	2.00	15.00	4.60	2	2	15	15	4.6	4.6
4	1	3.00	32.00	3.72	3	3	32	32	3.72	3.72

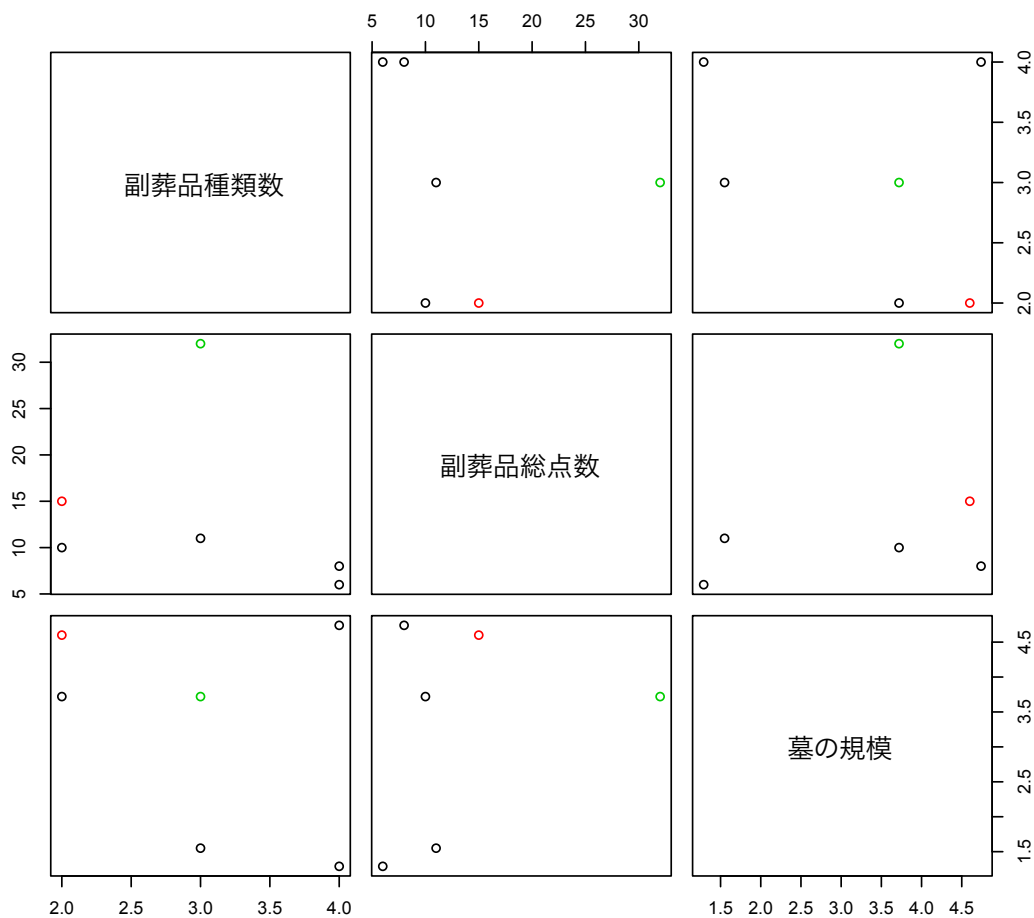


図 7.23. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地西地区・IIIa1-IIIa2 段階・3 変数)



墓の規模を加えた場合3変数でのクラスター分析の場合、該当する墓の数は6基である。クラスター数を2変数の場合と同じ3としてクラスタリングをしたところ、各クラスターを構成する墓の数は4・1・1に区分できた(図7.23・表7.24)。2変数を対象にした分析で得られたクラスターを構成する墓と3変数場合との対応は、クラスター1から3まですべて2変数に3変数が内包されるかたちで対応した。また3つの変数はすべて相関することが示された(図7.23.)。以上から、2変数のクラスタリングの結果は支持され、IIIa1-IIIa2段階は3つのクラスターに区分できることが示された。

#### 7.1.2.7. IIIb 段階

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、対象の墓の数は2基である。墓の数が少ないため、Rによるクラスター数の推定とクラスター分析は行わなかった。この2つの墓は2つのクラスターに区分できる。クラスター1は1種類3点、クラスター2は7種類25点の副葬品を持つ。両者間には明確に副葬品の優劣が存在する。クラスター1は前段階のクラスター1水準を引き継ぎ、クラスター2は前段階のクラスター3の水準を引き継ぐ。この段階には墓地の利用が低調になっており、墓の数が少ないために断定はしがたいが、前段階の3つのクラスターが存在する構図から、本段階は前段階のクラスター2の流れが消滅し、顕著な差異を持つ2つのまとまりに数が減少することが読み取れる。なお、墓の規模を加えた場合は、墓の数は1基のみとなった。2変数の場合とは、クラスター1と対応する。墓の数が非常に限定されるため評価はしがたいが、副葬品の種類数・総点数が少なければ、墓の面積もあまり大きくないことが示された。

#### 7.1.2.8. IIIc 段階

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、対象の墓の数は1基のみである。この段階には墓地利用の終了時期にあたり、造墓活動はほとんど見られない。その中で、ただ一つの墓である92号墓は、前々段階のクラスター2と同等の水準を持つ。前段階と比べると、概ねクラスター1と2の中間値に当たる。墓の数が少ないために断言できないが、この段階には墓への副葬品の投下に大きな差は見られなくなったと推察される。墓の規模を加えた場合、面積は3.5m<sup>2</sup>を超え、造墓に労力がある程度かけられたことが読み取れる。

#### 7.1.2.9. 大墓地西地区のまとめ

以上、副葬品の種類数と総点数の2つの変数を対象に、各段階における墓のクラスタリングを行った。その結果、細かなクラスターは段階別に2 (Ia1-Ia3 段階) →4 (Ib1-Ib2 段階) →4 (IIa1-IIa2 段階) →3 (IIb1 段階) →4 (IIIa1-IIIa2 段階) →2 (IIIb 段階) →1 (IIIc1 段階) と変化することが読み取れた。ここから、Ib1-Ib2 段階からIIa1-IIa2 段階の最も墓地利用が活発な時期に、墓の副葬品の多寡が複雑だったことが示された。IIIa1-IIIa2 段階はクラスター数ではIb1-Ib2 段階やIIa1-IIa2 段階と同様の4だが、墓の数が大きく異なっており、内実は全く異なる。この点を考慮すると、IIa1-IIa2 段階以後は副葬品の種類数や総点数に関わる差異が徐々に減少することがわかる。ここから、大墓地西地区の被葬者には、墓地利用の開始当初から副葬品に被葬者の地位を示す単純な優劣

が存在し、墓地利用が最盛期に入ると、その構図がより複雑化することが読み取れる。また墓地利用の最盛期以降は中間層がなくなり、再度単純な構図に戻り、終末期には大きな差異がなくなる。墓地利用の程度が、被葬者の間に表れる差異の構図の複雑性と関係することが読み取れる。墓地利用の程度は、母集落の活動や社会の複雑さとも関連することを考慮すると、Ib1-Ib2 段階と IIa1-IIa2 段階がナカダ遺跡の盛期だったことが推察される。また、こうした優劣の再単純化にあっても、顕著に副葬品が富裕な墓のまとまりと、そうでない墓のまとまりがある点は、墓地の全利用期間を通じて変わらない点は注目される。このまとまりの二元的な構図は、副葬品の量の全体的な増加の中でも維持される。一方で、多量の副葬品が墓から出土する副葬品の種類はさほど多様でない点は、大墓地西地区では種類よりも量がより重要であったことを示している。

### 7.1.3. 大墓地南地区

#### 7.1.3.1. すべての墓のクラスタリング

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、対象の墓の数は 48 基である。クラスター数は 5 が推定された。クラスター数を 5 としてクラスタリングを行ったところ、各クラスターを構成する墓の数は  $16 \cdot 14 \cdot 12 \cdot 5 \cdot 1$  で安定して区分できた。各クラスターを構成する墓の数はクラスターの序列が高くなるにつれて減少する。この区分の結果を示した散布図が図 7.24.である。また各クラスターを構成する墓の番号は付編 4 に示した。各クラスターにおける変数の値の詳細を表 7.25.に示した。区分の結果、クラスター1 の墓はどの変数でも値が最も小さく、1-4 種類、1-6 点の副葬品を納める。クラスター2 の墓は 2-4 種類、8-13 点の副葬品を納める。クラスター3 の墓は 2-6 種類、17-22 点の副葬品を含む。クラスター4 の墓は 4-8 種類、23-32 点の副葬品を有する。そしてクラスター5 の墓は 8 種類、55 点の副葬品を有する。クラスター1 と 2 は種類数には大差ないものの、総点数を基準に区分される。またクラスター3 は 2 と比べると、種類数が多様で総点数も多い。クラスター4 は種類数が顕著に多い墓を 1 基含むが、クラスター3 とは総点数の違いで分割される。クラスター5 は種類数・総点数の両面で明確にほかのクラスターとは異なり、なおかつ墓の数が 1 基のみなことが特徴である。これらのクラスターは、3 つに大きく区分することができる。すなわち、1 つ目のまとまりにはクラスター1 と 2 が含まれ、副葬品の種類数や総点数で劣る。2 つ目のまとまりは種類数や総点数で中程度に優れるクラスター3 と 4 が含まれ、3 つ目のまとまりは顕著に優れるクラスター5 で構成される。

表 7.25. 各クラスターの値 (大墓地南地区・全時期・2 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	16	2.38	3.81	1	4	1	6
2	14	2.79	9.36	2	4	7	13
3	12	4.33	18.83	2	6	16	22
4	5	5.00	26.20	4	8	23	32
5	1	8.00	55.00	8	8	55	55

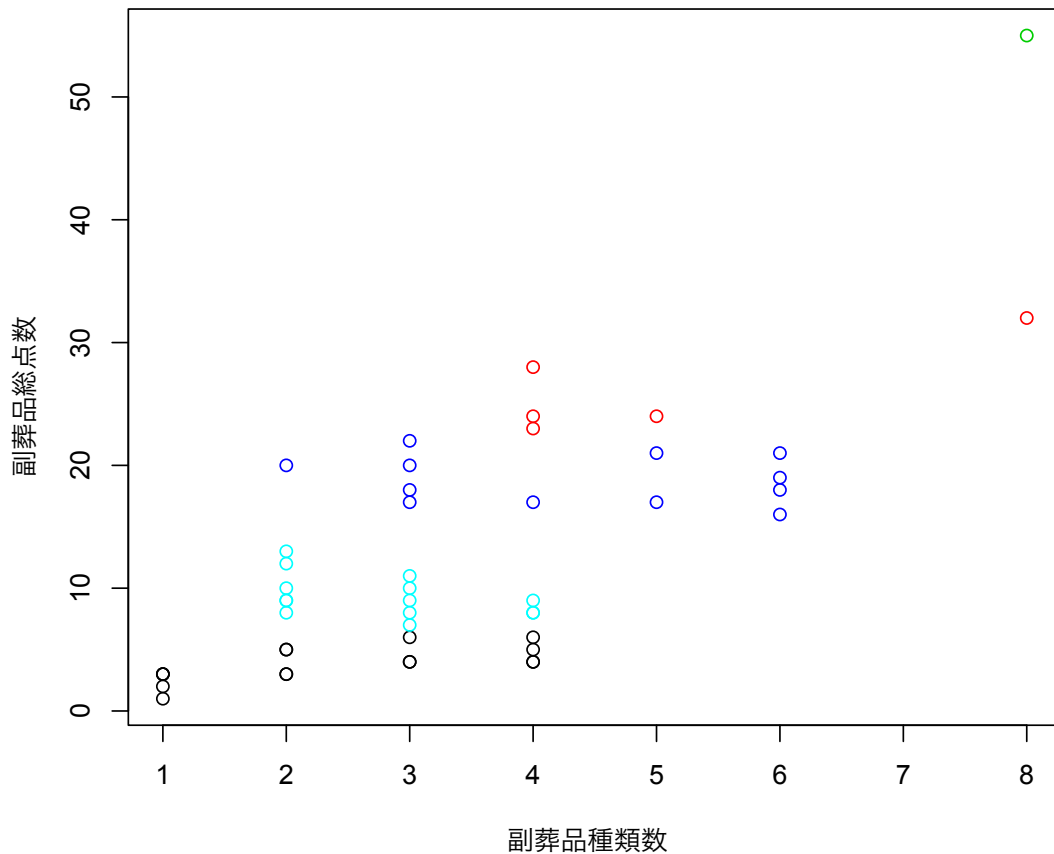


図 7.24. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地南地区・全時期・2変数)

墓の規模を変数に加えた場合、該当する墓の数は9基減って39基となる。クラスター数は2変数を対象とした場合よりも1つ減った4が推定された。このクラスタリングの結果を対散布図で図7.25に示した。各クラスターにおける変数の値の詳細は表7.26に示した。2変数と3変数の場合で、各クラスターを構成する墓の対応を検討したところ、すべての事例で3変数のクラスターの構成墓が2変数のクラスターと対応することが読み取れた。3変数の場合よりも1つ多いクラスター数に関しては、2変数のクラスター3と4が3変数のクラスター3を完全に内包した。副葬品のみを対象の変数にした場合は墓の面積を加えた場合よりも細かいクラスタリングができたが、実際には2変数のクラスター3と4も同一のクラスターの可能性が推定された。図7.25を観察すると、副葬品総点数と種類数、および墓の規模と副葬品総点数には相関が見出せる一方で、墓の規模と副葬品種類数は相関しないことが読み取れる。

以上のクラスタリングにより、大墓地南地区の条件に合致する全墓を対象にした場合、クラスター数は4であることが示された。以下では、この区分結果を参照し、クラスター数を各段階で生成する。

表 7.26. 各クラスターの値 (大墓地南地区・全時期・3変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	13	2.54	3.69	2.05	1	4	1	6	0.55	4.65
2	10	2.70	9.50	2.22	2	4	8	13	1.26	3.10
3	15	4.47	21.60	3.35	2	8	17	32	1.22	7.74
4	1	8.00	55.00	5.24	8	8	55	55	5.24	5.24

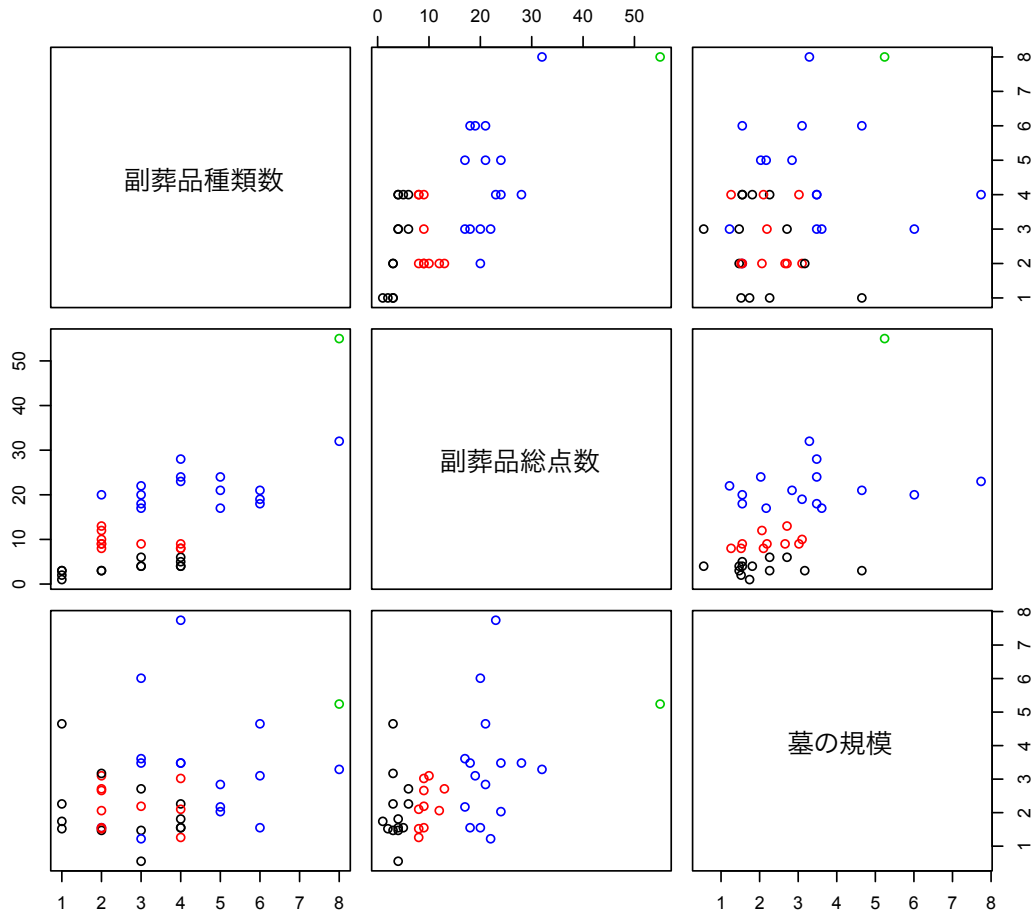


図 7.25. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地南地区・全時期・3変数)

### 7.1.3.2. Ib1-Ib2 段階

本段階に該当する墓の数は1墓に留まる。したがって、クラスタリングは不可能である。この唯一の墓である8号墓には3種類・4点の副葬品が納められている。墓の規模に関しては、0.55 m<sup>2</sup>であった。この副葬品と墓の規模の水準を基準に、次段階以後のクラスタングに向けた足がかりとする。

### 7.1.3.3. IIa1-IIa2 段階

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、墓の数は 14 基である。クラスター数は 5 が推定され、クラスタリングを行ったところ墓の数は  $7 \cdot 3 \cdot 2 \cdot 1 \cdot 1$  に区分できたものの、これらの墓の変数の値を観察したところ、過度な細分が推定された。そのため、クラスター数を 1 つ減らして 4 として分析したところ、各クラスターの構成表本数が  $5 \cdot 7 \cdot 1 \cdot 1$  の区分が安定して得られた。クラスター 2 の墓の数が最も多いことが特徴である。各クラスターを構成する墓の番号は付編 4 に示した。また各クラスターにおける変数の値の詳細は表 7.27. に示した。区分した結果を示した散布図が図 7.26. である。クラスター 1 は副葬品 1-4 種類、1-11 点が納めら

表 7.27. 各クラスターの値 (大墓地南地区・IIa1-IIa2 段階・2 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	5	3.00	6.80	1	4	1	11
2	7	4.29	18.57	2	6	17	21
3	1	8.00	32.00	8	8	32	32
4	1	8.00	55.00	8	8	55	55

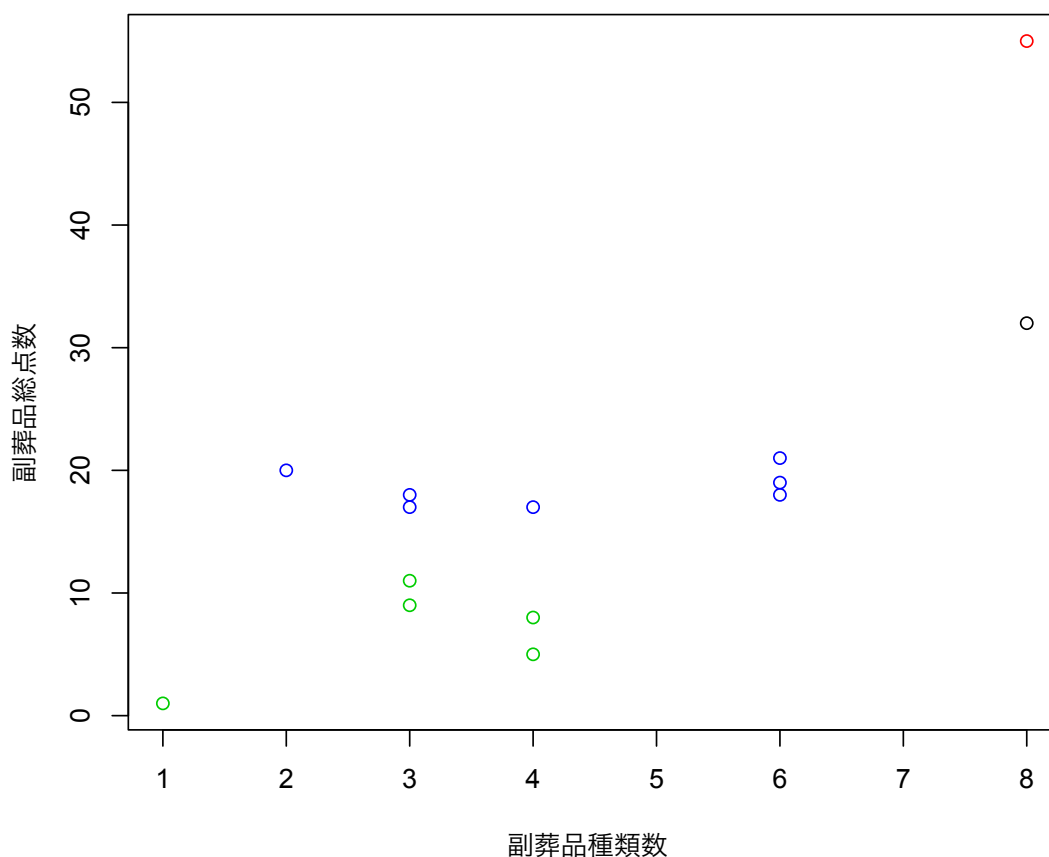


図 7.26. クラスタリング結果を示した散布図 (大墓地南地区・IIa1-IIa2 段階・2 変数)

表 7.28. 各クラスターの値 (大墓地南地区・IIa1-IIa2 段階・3 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	4	3.00	5.75	1.69	1	4	1	9	1.26	2.19
2	6	4.33	18.83	2.99	2	6	17	21	1.55	4.65
3	1	8.00	32.00	3.29	8	8	32	32	3.29	3.29
4	1	8.00	55.00	5.24	8	8	55	55	5.24	5.24

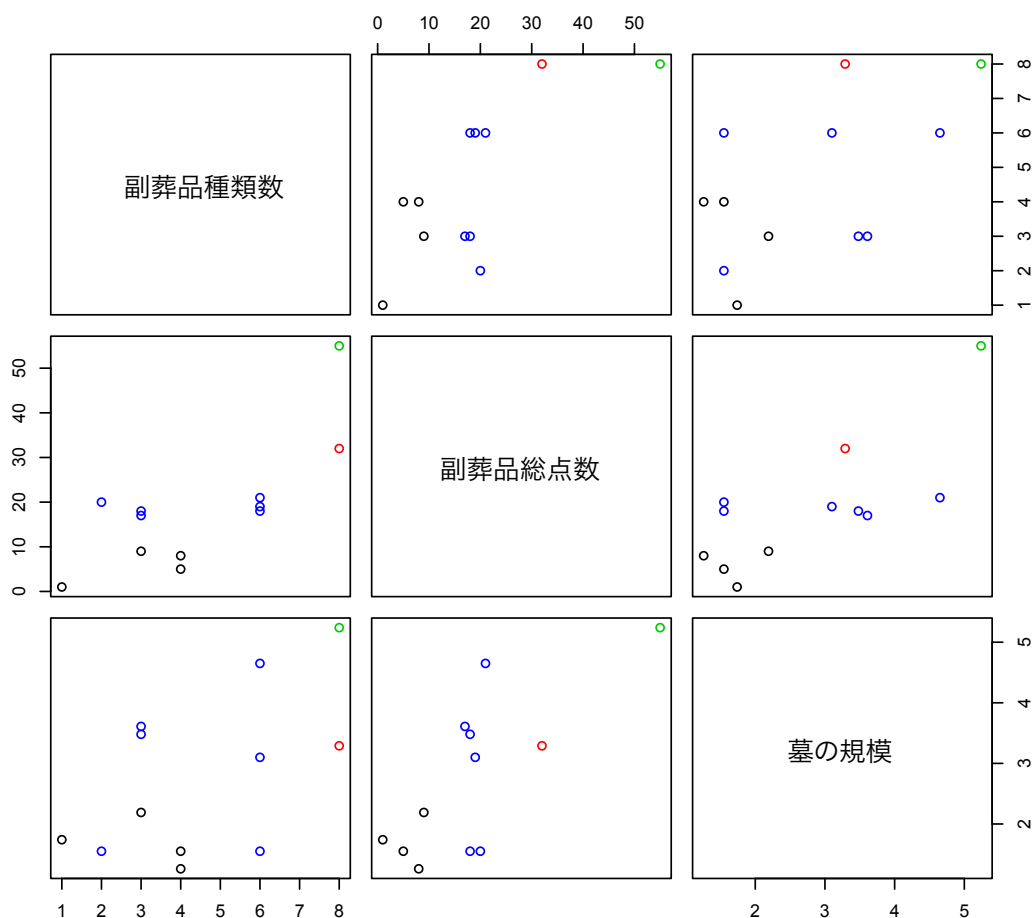


図 7.27. クラスタリング結果を示した対散布図 (大墓地南地区・IIa1-IIa2 段階・3 変数)

れた墓のまとまりである。2 番目に墓の数が多い。クラスター2 の墓は 2-6 種類、17-21 点の副葬品を含む。クラスター3 と 4 はそれぞれ墓の数が 1 基で、副葬品の種類数は 8 で同数である。クラスター3 は副葬品 32 点を持つが、クラスター4 は 55 点を持ち、この点に顕著な違いがある。全体としては、副葬品の種類数・総点数ともに少ないまとまり、中程度のまとまり、顕著に多いまとまりの 3 つに分けられ、顕著に多いまとまりは総点数でさらに 2 つに分けられる。前段階に該当した唯一の墓は、クラスター1 と同等の水準と考えられる。以上をまとめる

と、IIa1-IIa2 段階になって副葬品の種類数と点数が顕著に優れるままとまりと、それらが中程度に優れるままとまりの2つが新たに発生したと捉えられる。

墓の規模を変数として加えた場合、墓の数は2基減って12基となる。2変数の場合と同じくクラスター数を4としてクラスタリングした結果の対散布図が図 7.27.である。各クラスターにおける変数の値の詳細は表 7.28.に示した。2変数を対象に区分したクラスターを構成墓との対応を検討した結果、すべてで同様の構成墓が確認できた。図 7.27.を観察すると、墓の規模と副葬品総点数には相関が見出せる一方でそれ以外には相関が見出せない。以上から IIa1-IIa2 段階の墓は4つのクラスターに区分できた。

#### 7.1.3.4. IIb 段階

2変数によるクラスタリングの対象墓の数は4基である。したがって、Rを用いた分析ができないが、手動でクラスタリングを行った。この段階は1基と3基の墓で構成される2つのクラスターに分けることが可能である。各クラスターを構成する墓の番号は付編4に示した。クラスター1は1基の墓のみで、副葬品は2種類、12点である。一方で、クラスター2は3基の墓から構成され、副葬品は4-5種類、17-28点である。クラスター1は前段階のクラスター1とほぼ同規模であり、クラスター2は前段階のクラスター2と3の間の水準の副葬品を持つ。したがって、IIb 段階のT墓地使用開始時期には、前段階のクラスター3や4のような副葬品が顕著に優れた事例はないものの、明確に2つに区分できるだけの副葬品の差異が読み取れる。もう一つの特徴は、クラスター1よりも2の方が、副葬品が優れている点である。副葬品がある程度豊富な墓の造営が多かったことを示している可能性がある。墓の規模を変数に加えた場合でも、墓の数は変わらず、2変数の場合と同様のクラスター数と構成墓となることが読み取れた。すなわち、3変数のクラスター1と2は、2変数のクラスター1と2の構成墓と共通する。したがって、2変数の際のクラスタリングの結果が支持され、IIb1 段階のクラスター数は2であることが示された。

#### 7.1.3.5. IIIa1-IIIa2 段階

墓地利用の終了段階に当たる本段階で、副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合に該当する墓の数は4基である。IIb 段階と同様に墓の数が少ないため、手動でクラスタリングを行った。結果として、3基と1基の墓で構成される2つのクラスターに分けることができた。クラスター1は、2または4種類、3-9点の副葬品を持つ一方で、クラスター2は3種類、20点の副葬品を持つ。クラスター1は前段階と比べて種類数では同等かやや優れるが、総点数では劣る。一方でクラスター2は、種類数では前段階よりも劣るが、総点数では概ね同等の水準を持つことが読み取れる。以上から、全体としては前段階の構図を維持した状態で、墓への副葬品の投下が行われたことが示された。墓の規模を変数に加えた場合でも同じクラスタリングの結果になった。クラスター数とその構成墓の両方で2変数と3変数の双方が共通する。したがって、2変数によるクラスタリングの結果が支持され、III 段階のクラスター数は2であることが示された。

### 7.1.3.6. 大墓地南地区のまとめ

以上、通時的なまとまりの変遷を観察すると、1→4→2→2となる。Ib1-Ib2段階から続くクラスター1の水準を持ったまとまりの流れは墓地利用の終了段階であるIIIa1-IIIa2段階まで続く。最も副葬品の点で多様な段階はIIa1-IIa2段階でこの時期にのみ副葬品の内容が顕著な墓が現れる。この段階で発生したクラスター2の流れは、IIIa1-IIIa2段階まで続く。ここから、副葬品から見える被葬者の地位に関しては、IIa1-IIa2段階が最も多様であることが読み取れた。それ以外ではIb1-Ib2段階を除き、2つの差異が存在することが明らかになった。

### 7.1.4. T 墓地

#### 7.1.4.1. 全ての段階の墓のクラスタリング

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、墓の数は49基である。クラスター数は4が推定された。クラスター数を4としてクラスタリングを行ったところ、各クラスターを構成する墓の数は22・14・8・4で安定して区分できた。各クラスターを構成する墓の番号は付編4に示した。区分の結果を示した散布図が図7.28である。各クラスターにおける変数の値の詳細は表7.29に示した。クラスター1は副葬品を含む墓と含まない墓の2つを含み、副葬品を含む墓には1-4種類、1-10点が納められる。クラスター2の墓は3-7種類、11-19点の副葬品を含む。クラスター3の墓は2-6種類、23-33点の副葬品を含む。クラスター4の墓は、5-11種類、38-50点の副葬品を含む。クラスター1と2の違いは副葬品の種類数で、3-4種類が区分の境界になる。加えてクラスター2は総点数も多い特徴を持つ。クラスター3はクラスター2と種類数では変わらないものの総点数はさらに増加する。この違いは、散布図上で明瞭に区分されて表れている。一方でクラスター1-3までとは異なり、クラスター4は、1基だけクラスター3に近い水準の墓を含むが、基本的に種類数・総点数でほかの墓よりも顕著に優れる墓で構成される。以上から、まず副葬品を変数にした場合、T墓地の全時期の墓を対象とした場合、4つのまとまりに分割できることが見出せた。

墓の規模を変数に加えた場合、墓の数は14基減って35基になる(図7.29)。各クラスターにおける変数の値の詳細は表7.30に示した。2変数と同じくクラスター数4で区分したところ、全てのクラスターの構成墓が2変数で出力されたクラスターの構成墓に内包されるかたちで対応した。また図7.29を観察すると、副葬品総点数と種類数、および墓の規模と副葬品総点数には相関が見出せる一方で、墓の規模と副葬品種類数は明確には相関しないことが読み取れた。以上から、2変数のみを変数として用いたクラスタリングの結果が支持され、T墓地の

表 7.29. 各クラスターの値 (T 墓地・全時期・2 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	22	1.91	5.55	0	4	0	10
2	14	4.14	14.93	3	7	11	18
3	8	3.88	28.50	2	6	23	33
4	4	8.50	43.50	5	11	43	50



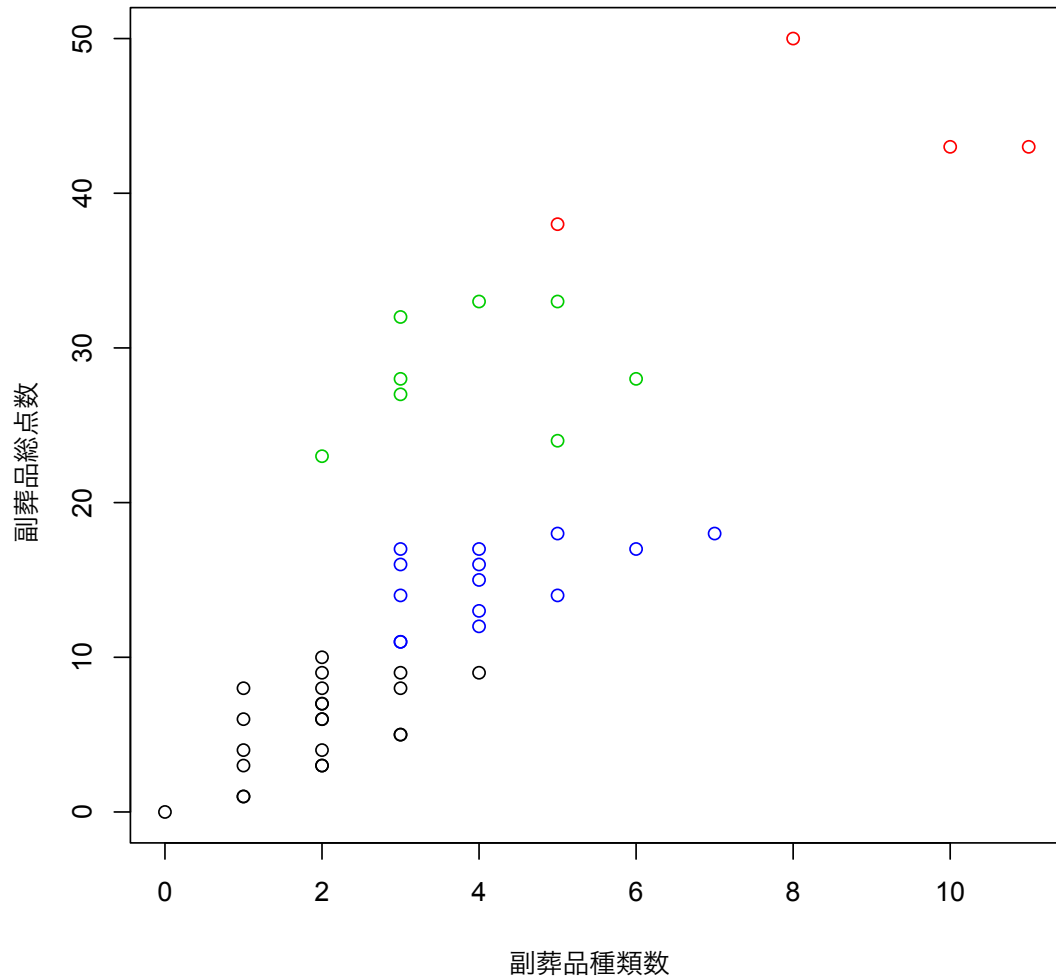


図 7.28. クラスタリング結果を示した散布図 (T 墓地・全時期・2 変数)

表 7.30. 各クラスターの値 (T 墓地・全時期・3 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	17	1.94	5.56	4.06	0	4	0	9	1.01	14.06
2	8	4.50	15.63	2.68	3	7	12	18	1.55	5.87
3	7	4.00	28.71	5.17	2	6	23	33	2.90	7.83
4	3	9.67	45.33	7.29	8	11	43	50	3.55	11.34

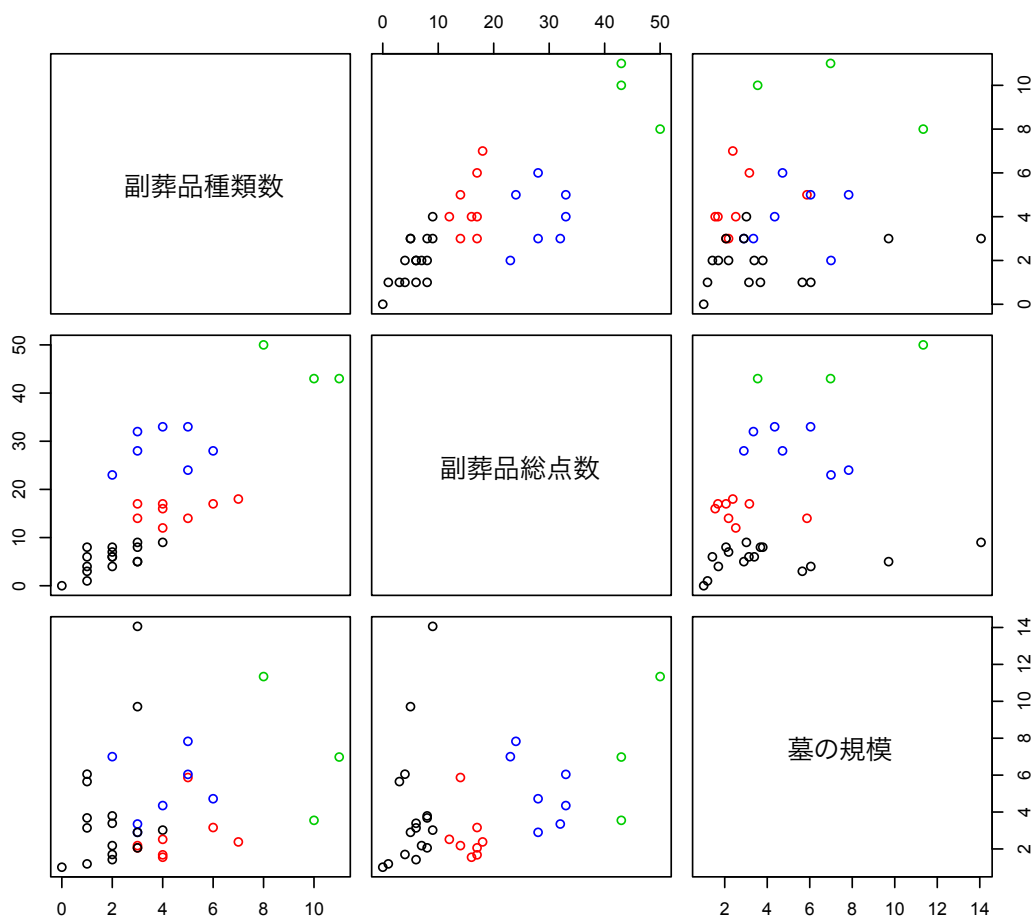


図 7.29. クラスタリング結果を示した対散布図 (T 墓地・全時期・3 変数)

墓は4つのまとまりに分割できた。

#### 7.1.4.2. Ib1-Ib2 段階

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、墓の数は2基である。墓の数が5基以下のため、Rによる分析は行っていない。手動でクラスタリングを行い、副葬品の種類数と総点数からクラスター数は2であることが推定された。各クラスターを構成する墓の番号は付編4に示した。クラスター1は副葬品が5種類、24点の墓 (T11 号墓) で、クラスター2は11種類、43点の墓 (T4 号墓) である。これら2つのクラスターには、副葬品の種類数や総点数に2倍前後の違いあることが読み取れた。どちらも種類数や総点数の値が大きいことが共通する特徴だが、クラスター2はさらにこれらの変数が大きいことが特徴である。

一方で、墓の規模を変数に加えた場合、クラスター数は同じものの T11 号墓が  $7.83 \text{ m}^2$  に対して T4 号墓が  $6.98 \text{ m}^2$  と、副葬品の種類数や総点数が優れている方が、規模の上では逆に劣ることが読み取れた。したがってこの2

つのクラスターの間で序列を定めることは難しい。むしろ変数の特徴は異なるものの、両者ともに7m<sup>2</sup>前後以上の規模を持っており、ナカダ遺跡の墓の中ではかなり大型の部類に入ることが共通して強調できる(付編2参照)。また T4 号墓は遺物が墓坑底部だけでなく垂直的に複数の位置から出土している点も考慮する必要がある、規模の大きさの一方で副葬品の密度は高かったことを念頭におく必要がある。

以上から、T 墓地の利用開始段階に当たる Ib1-Ib2 段階の墓は2つのクラスターに区分できることが示された。

#### 7.1.5.3. IIa1-IIa2 段階

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、墓の数は24基である。クラスター数は4が推定された。クラスター数を4としてクラスタリングを行ったところ、各クラスターを構成する墓の数は8・8・6・2で安定して区分できた。中間層のクラスターを構成する墓の数が多。各クラスターを構成する墓の番号は付編4に示した。区分した結果を示した散布図が図7.30である。各クラスターにおける変数の値の詳細は表7.31に示した。クラスター1の墓は2-5種類、6-11点の副葬品を含む。クラスター2の墓は2-7種類、14-23点の副葬品を含む。クラスター3の墓は3-6種類、28-38点の副葬品を含み、複数種類・多数の副葬品が納められた墓が含まれることが特徴である。クラスター4の墓には、8種類または10種類、44または50点の副葬品が納められた。全体としては、クラスター1は副葬品の種類数や総点数に一定のまとまりを確認できる一方、クラスター2の墓にはクラスター1と比べて総点数には顕著な違いが、多様な種類の副葬品が納められた墓が含まれる。クラスター3はクラスター2と比べると種類数は大差ないが、総点数は飛躍的に多い。クラスター4は種類数・総点数ともに顕著に豊富な事例である。以上をまとめると、クラスター1は最も副葬品の種類数と総点数で多様性がなく、次いでクラスター1と比べてクラスター2は種類数の差異が著しい。クラスター3は、種類数はそのままに総点数が大きい。そしてクラスター4は2つの変数で顕著である。以上からまず副葬品を変数とした場合、IIa1-IIa2段階は4つのクラスターに区分できることが見出された。

墓の規模を変数に加えた場合、墓の数は5基減って18基になる。2変数と同じくクラスター数を4として区分したところ、各クラスターを構成する墓の数は6・5・5・2で安定して区分できた。区分した結果を示した散布図が図7.31である。各クラスターにおける変数の値の詳細は表7.32に示した。2変数と同じく、中間層のクラスターを構成する墓の数が多。これらの構成墓は、全てのクラスターで2変数の場合に内包されるかたちで対応した。前段階のクラスターの水準と比較すると、本段階のクラスター2はIb1-Ib2段階のクラスター1と、本段階の

表 7.31. 各クラスターの値 (T 墓地・IIa1-IIa2 段階・2 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	8	2.57	8.29	2	4	6	11
2	8	4.38	16.63	2	7	13	23
3	6	4.33	32.00	3	6	28	33
4	2	9.00	46.50	8	10	43	50

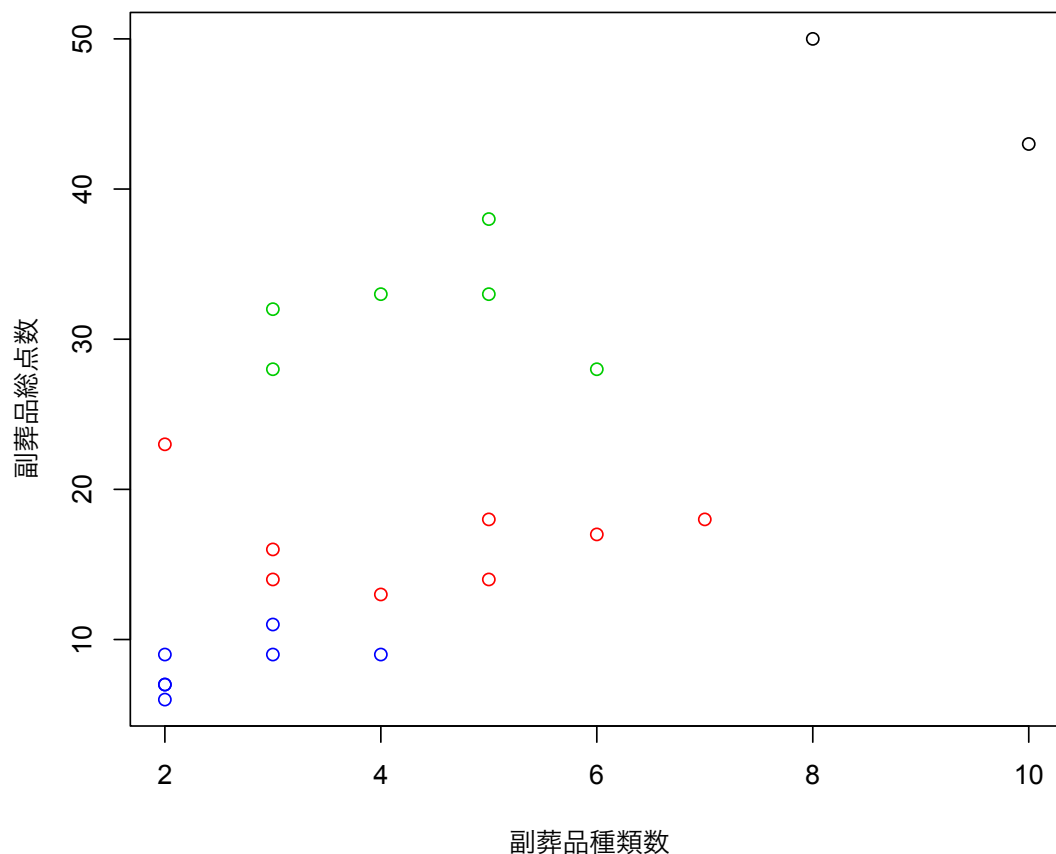


図 7.30. クラスタリング結果を示した散布図 (T 墓地・IIa1-IIa2 段階・2 変数)

表 7.32. 各クラスターの値 (T 墓地・IIa1-IIa2 段階・3 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	6	2.75	7.75	5.66	2	4	6	9	2.18	14.06
2	5	4.60	17.20	4.12	2	7	14	23	2.18	7.00
3	5	4.20	30.80	4.27	3	6	28	33	2.90	6.04
4	2	9.00	46.50	7.45	8	10	43	50	3.55	11.34

クラスター4 は Ib1-Ib2 段階のクラスター2 と概ね対応する。また図 7.31.を観察すると、副葬品総点数と種類数、および墓の規模と副葬品総点数には相関が見出せる一方で、墓の規模と副葬品種類数は明確には相関しないことが読み取れた。以上から、2 変数のみを変数として用いたクラスタリングの結果が支持され、IIa1-IIa2 段階の T 墓地の墓は 4 つのクラスターに区分できた。

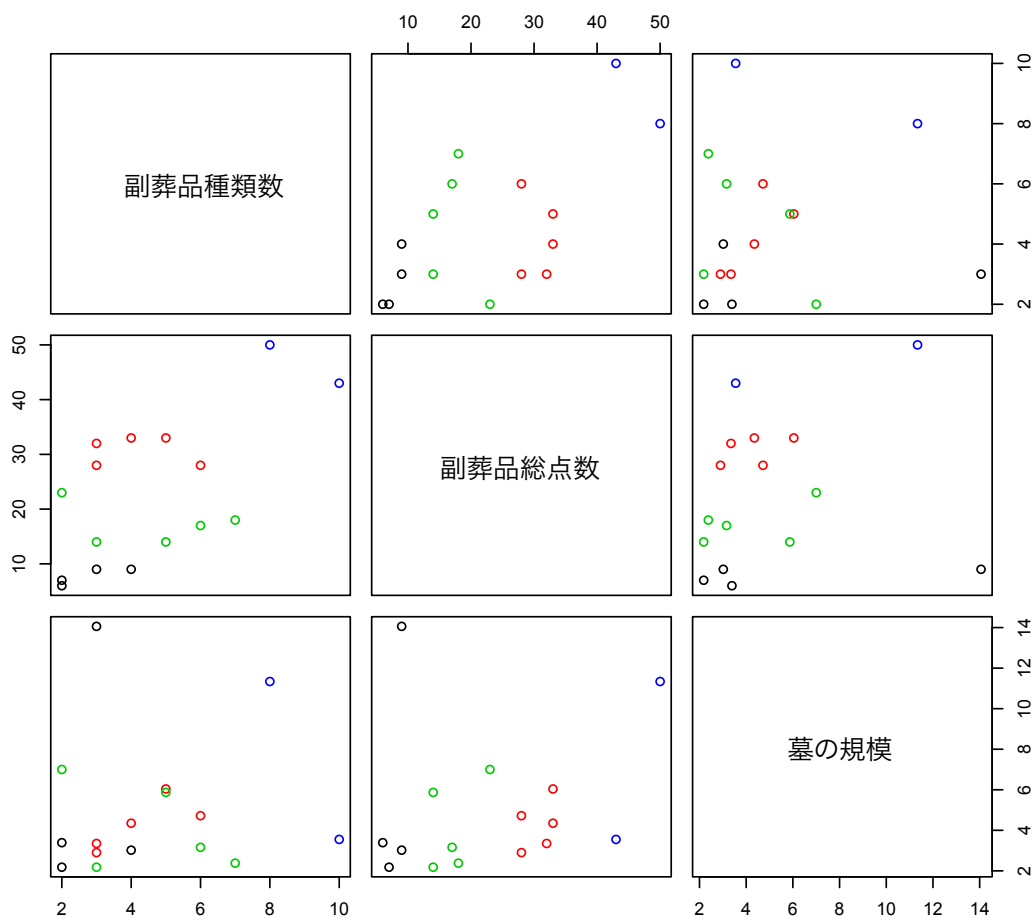


図 7.31. クラスタリング結果を示した対散布図 (T 墓地・IIa1-IIa2 段階・3 変数)

#### 7.1.5.4. IIb 段階

本段階に該当する墓の数は 1 基に留まり、クラスタリングは不可能である。この唯一の墓である T7 号墓には 2 種類・4 点の副葬品が納められており、前段階のクラスター 1 よりやや劣る水準に相当する。T7 号墓の規模は 1.7 m<sup>2</sup>であり、こちらも前段階のクラスター 1 で示された規模の水準よりは劣る。したがって、この段階では確認できた事例に関して言えば、前段階よりも全体的に劣る墓が造営されたことが窺えた。ただし、ここでほかに該当する墓が存在しない点は、そのままこの段階の造墓が少なかったことは意味しない。時期不明な墓もあるためである。むしろ、II 段階の最終段階としてこの段階の期間は短いため、偶然に該当する墓の数が少なかったと予想される。事例数に乏しいが、少なくともクラスター 1 よりやや劣る程度の墓の存在は確認できた。

#### 7.1.5.5. IIIa1-IIIa2 段階

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、墓の数は 8 基である。クラスター数は 2 が推定

された。クラスター数を2としてクラスタリングを行ったところ、各クラスターを構成する墓の数は5・3で安定して区分できた。各クラスターを構成する墓の番号は付編4に示した。区分した結果を示した散布図が図7.32である。各クラスターにおける変数の値の詳細は表7.33に示した。クラスター1の墓は2-3種類、5-11点の副葬品を含む。クラスター2の墓は3-4種類、16-27点の副葬品を含み、IIa1-IIa2段階のクラスター2にやや優れる水準をもつ。全体としては、クラスター1とクラスター2を比較すると、1は2よりも種類数で同等かやや劣り、総点数では大きく劣ることがわかる。ここから IIIa1-IIIa2 段階では、墓1基あたりの種類数よりも総点数により大き

表7.33. 各クラスターの値 (T 墓地・IIIa1-IIIa2 段階・2 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	5	2.60	8.40	2	3	5	11
2	3	3.33	20.00	3	4	16	27

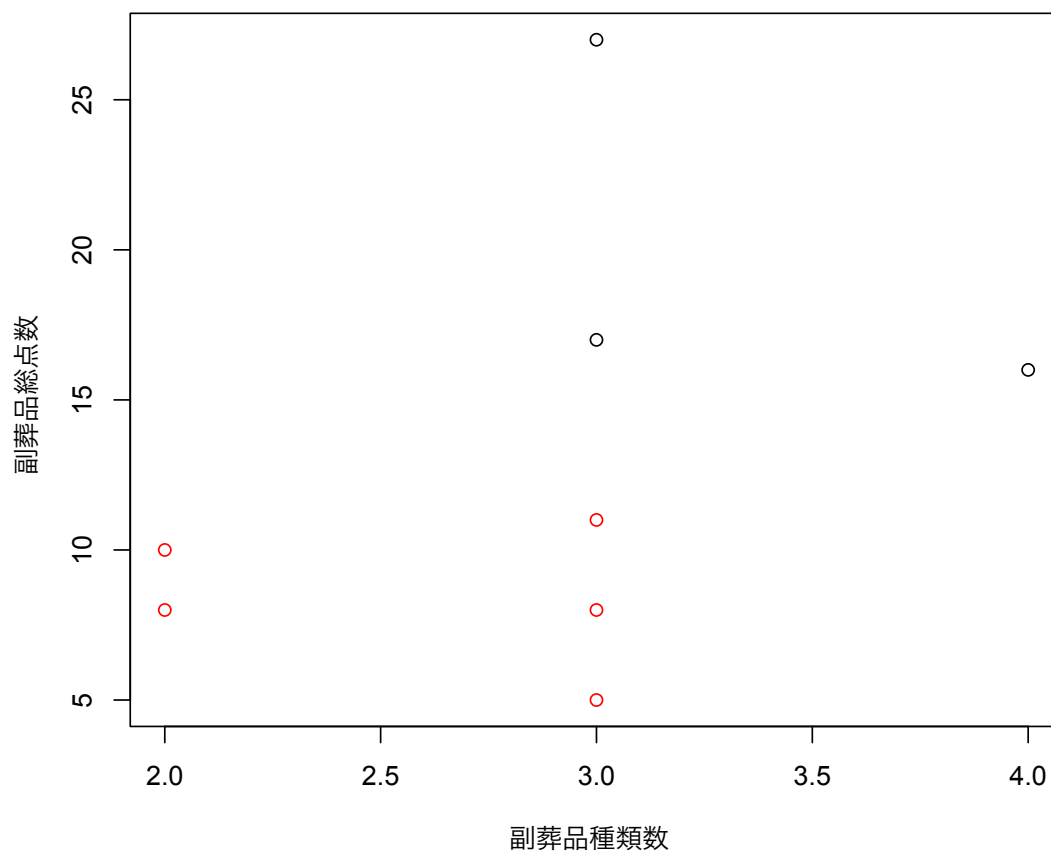


図7.32. クラスタリング結果を示した散布図 (T 墓地・IIIa1-IIIa2 段階・2 変数)

く差異が現れることが示された。クラスター1 は前段階よりも総点数でやや優れるものの、概ね IIb1 段階の水準を引き継ぐ。以上から IIIa1-IIIa2 段階の T 墓地では、クラスターの数 が IIa1-IIa2 段階の 4 つから 2 つに減少することが見出せた。この減少は、IIb1 段階の時点で起こった可能性もある。いずれにせよ IIa1-IIa2 段階後は、副葬品の種類数には大きな多様性はなくなり、総点数のみが差異を示すこととなる。しかし全体としては、IIa1-IIa2 段階の最も優れた段階には達せず、副葬品の墓への消費が少なくなったことを示す。墓の規模を変数に加えた場合、墓の数は 3 基減って 5 基になる (図 7.33・表 7.34)。2 変数と同じくクラスター数を 2 として区分したところ、

表 7.34. 各クラスターの値 (T 墓地・IIIa1-IIIa2 段階・3 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	3	2.67	7.00	2.92	2	3	5	8	2.06	3.79
2	2	3.50	16.50	1.81	3	4	16	17	1.55	2.06

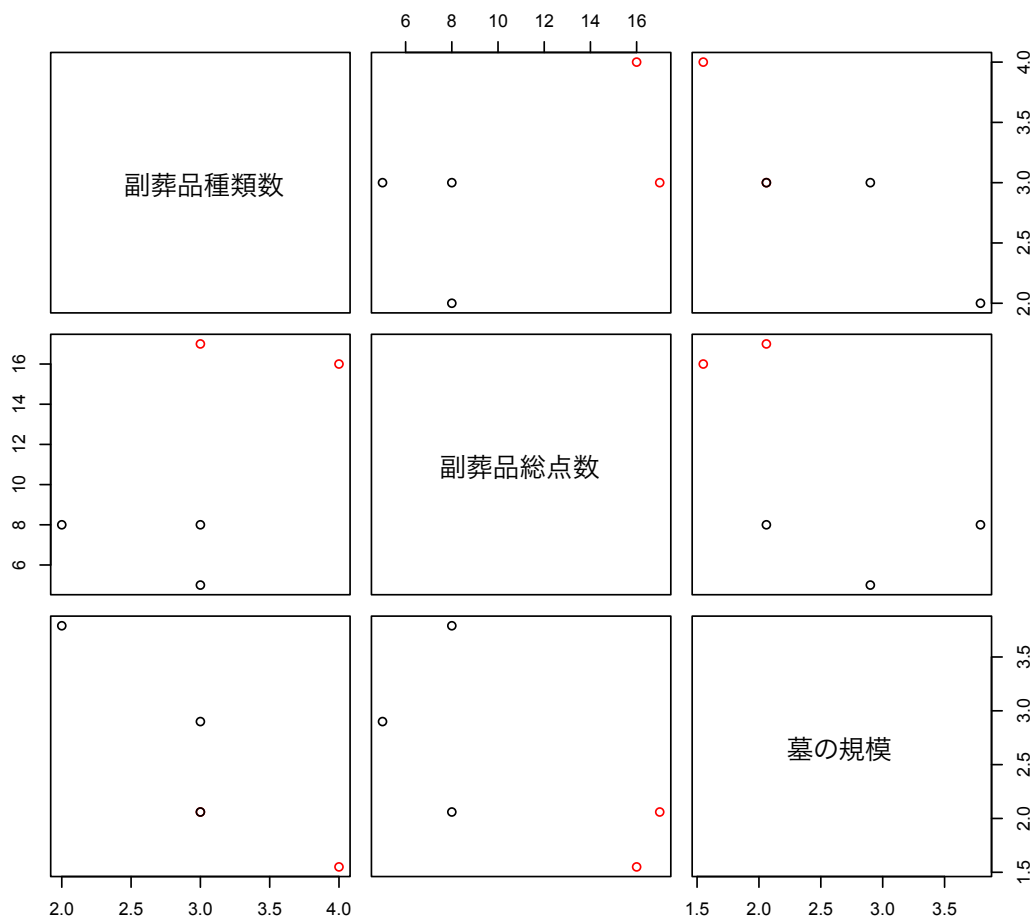


図 7.33. クラスタリング結果を示した対散布図 (T 墓地・IIIa1-IIIa2 段階・3 変数)

全てのクラスターで構成墓が2変数の場合に内包されるかたちで対応した。ただし、副葬品では優れるクラスター2が墓の規模ではクラスター1に劣っており、副葬品と墓の規模とでは相反する結果ともなった。したがって、2変数のみを変数として用いたクラスタリングの結果は必ずしも支持できるわけではないことが読み取れた。以上から、クラスター数では同一なもの、3変数を対象に実施下クラスタリングで得られた構成墓をより適切とし、IIa1-IIa2段階のT墓地の墓は2つのクラスターに区分できる。なお図7.33を観察すると、副葬品総点数と種類数、および墓の規模はすべてで相関が見出せた。

#### 7.1.5.6. IIIb 段階

本段階は墓地の使用終了時期にあたり、墓地利用が極端に少ないため、該当する墓の数は1基に留まる。したがって、クラスタリングは不可能である。この唯一の墓であるT33号墓には4種類・15点の副葬品が納められており、前段階のクラスター2の水準に相当する。この段階には前段階のクラスター2の水準の墓が造営されたことが読み取れるが、クラスター1の水準の墓が造営されたかはわからない。現有の情報からは、ある程度の種類数や総点数を持つ墓が造営されたことが読み取れるに留まる。墓の規模に関しては、T33号墓が明らかでなかったため、評価の材料とすることができなかった。

#### 7.1.5.7. T 墓地のまとめ

T墓地におけるクラスター数の変遷と通時的な視点に立って確認すると、2 (Ib1-Ib2 段階) →4 (IIa1-IIa2 段階) →2? (IIb1 段階) →2 (IIIa1-IIIa2 段階) と変遷することがわかった。一方で、まとまりの形成と分化は数の単純な増減以上に複雑である。Ib1-Ib2 段階のクラスター2は多種類・多数の副葬品が特徴だが、IIa1-IIa2 段階のクラスター4にこの特徴は引き継がれる。Ib1-Ib2 段階のクラスター1はIIa1-IIa2 段階にはクラスター1と2に分化する。IIa1-IIa2 段階のクラスター3はIb1-Ib2 段階のクラスター2から劣る水準で分化したと読み取れる。IIb1 段階にはIIa1-IIa2 段階のクラスター3と4の流れはなくなるが、クラスター1は継続する。クラスター2は見られないものの、IIIa1-IIIa2 段階にやや前々段階よりも優れたかたちで引き継がれる。IIb1 段階のクラスター1はやや劣るかたちでIIIa1-IIIa2 段階のクラスター1に引き継がれる。IIIa1-IIIa2 段階ではクラスター1と2の差はIIa1-IIa2 段階よりもやや広がりつつ、2つのまとまりが維持され、墓地利用の終了を迎える。ここから、T墓地では利用開始当初から、著しく副葬品に優れる墓のまとまりと劣る墓のまとまりの2つがあり、著しく優れるまとまりの流れはIIa1-IIa2 段階に対して、劣る墓のまとまりはさらに分化しながらも墓地の利用期間を通じて継続し、墓地利用の最後には差異がある状態であったことがわかる。したがって、T墓地で最も被葬者の地位の差異が多様だったのはIb1-Ib2 段階からIIa1-IIa2 段階までで、それ以降は最も高位の地位が不在の状態で二つの元副葬品の内容に劣るまとまりが最後まで存在したことになる。

#### 7.1.5. B 墓地

##### 7.1.5.1. すべての墓のクラスタリング



副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、墓の数は87基である。クラスター数(k)に関しては4であることが推定されたが、墓の数が54・22・8・3の区分と、60・16・8・3の区分の2種類が得られた。そこで、クラスター数を3として処理を改めて実施したところ、65・19・3の区分が得られた。この区分の結果を示した散布図が図7.34である。また各クラスターを構成する墓の番号は付編4に示した。各クラスターにおける変数の値の詳細は表7.35に示した。各クラスターを構成する墓の数はクラスター番号が大きくなるにつれて少なくなる。区分の結果、クラスター1の墓はどの変数でも最も小さいクラスター平均を持ち、副葬品が納め

表 7.35. 各クラスターの値 (B 墓地・全時期・2変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	65	1.52	3.23	0	4	0	8
2	19	3.26	13.58	1	7	9	22
3	3	6.33	33.00	4	11	31	35

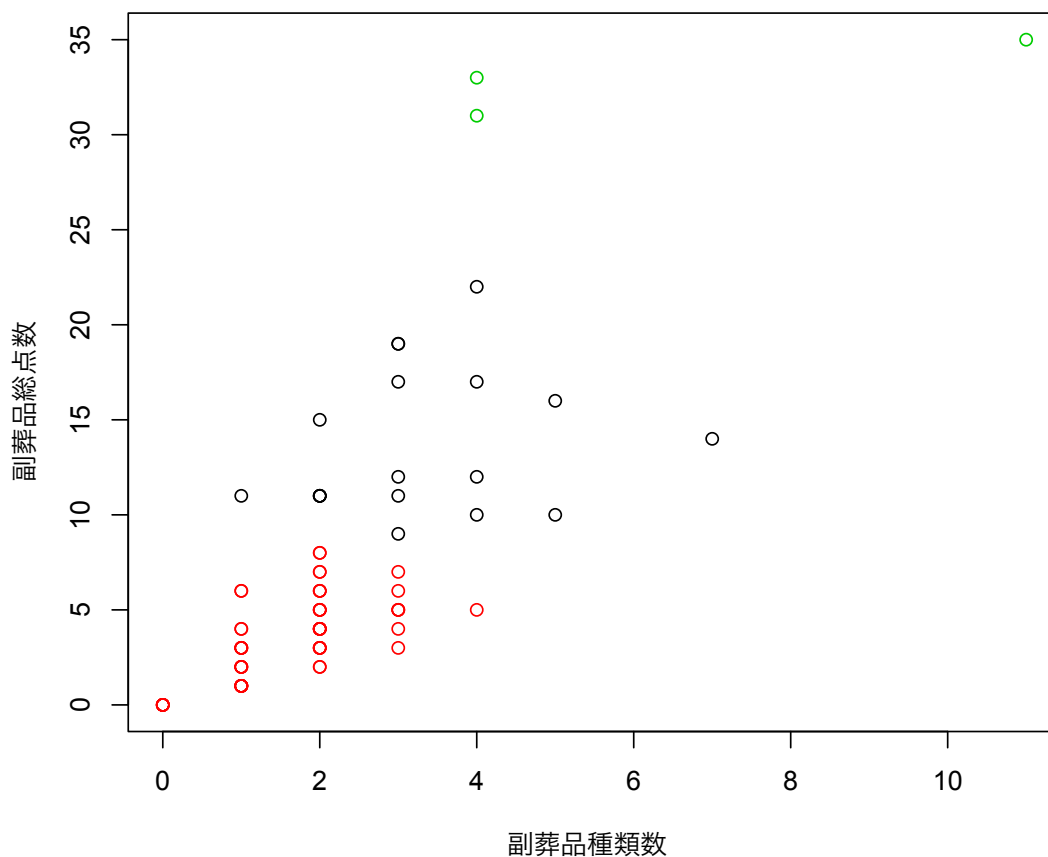


図 7.34. クラスタリング結果を示した散布図 (B 墓地・全時期・2変数)

表 7.36. 各クラスターの値 (B 墓地・全時期・3 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	47	1.55	3.02	1.73	0	4	0	6	0.56	4.06
2	15	2.67	9.93	2.63	1	5	7	12	1.30	4.09
3	7	3.86	16.71	2.86	2	7	14	19	0.65	4.30
4	3	6.33	33.00	4.61	4	11	31	35	3.79	5.57

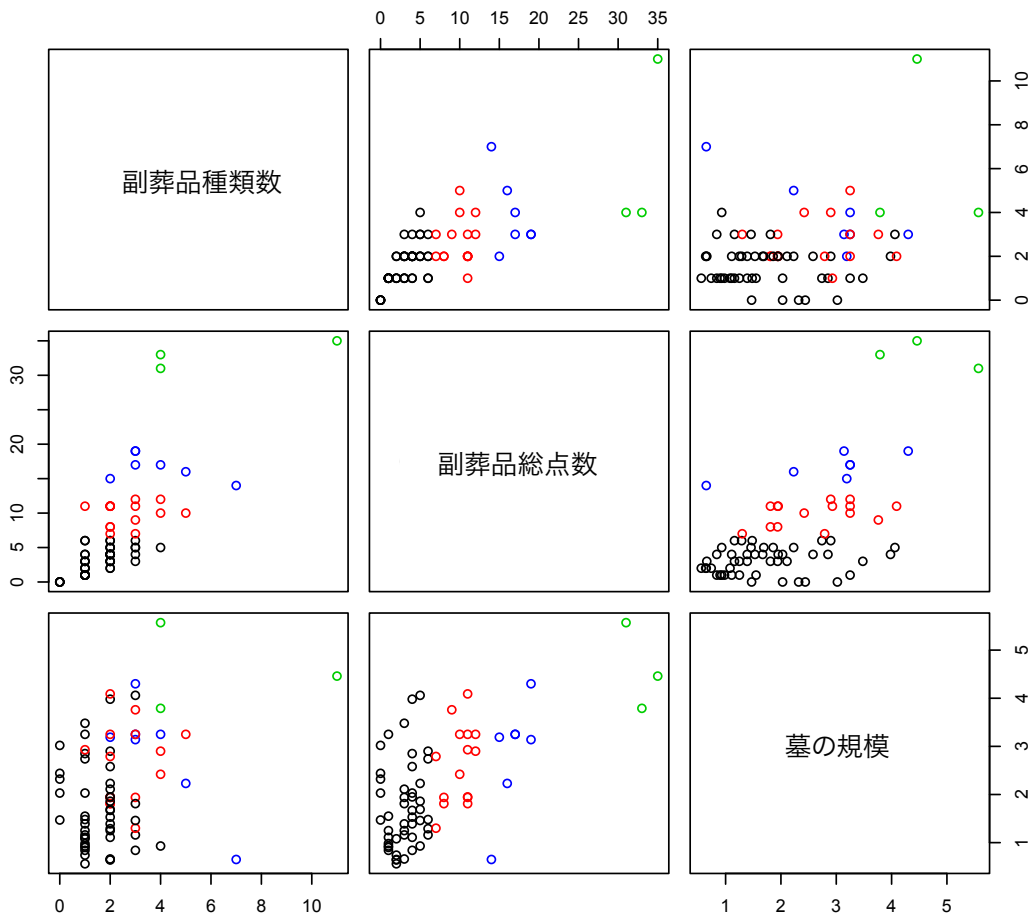


図 7.35. クラスタリング結果を示した散布図 (B 墓地・全時期・3 変数)

られた事例と全くない事例の双方を含むことが示された。副葬品を納める場合でも、総点数1点から8点、種類数1種類から4種類と幅がある。クラスター2の墓には総点数9-22点、1-7種類の副葬品が区分された。クラスター3の墓は4-11種類、31-35点の副葬品を有する。これらの中でクラスター3が最も対象の2つの変数が優れていることが散布図から明瞭である。クラスター1は変数のばらつきは少ないが、クラスター2はばらつきが大きい。クラスター1と2は、総点数9点を境に分けられた。以上から副葬品のみによ拠した場合、副葬品の総点数

と種類数のうち、特に総点数がクラスタリングに重要な指標と観察できた。また、B 墓地に存在する全ての墓は大きく3つに分けることができ、最も優れた墓は突出してほかのクラスターから区分できることが示された。

墓の規模を変数に加えた場合、墓の数は2変数場合から15基減った72基である。クラスタリングの結果を対散布図で示した(図7.35.)。クラスター数を当初2変数で試みた4としてクラスタリングを実施したところ、安定して47・15・7・3の区分が得られた。各クラスターにおける変数の値の詳細は表7.36.に示した。クラスターの数が増えるごとに、各クラスターを構成する墓の数は減じる。その上で2変数のみを用いたクラスタリングの結果と比較した場合、2変数でクラスタリングした場合のクラスター3は、3変数の場合のクラスター4と構成墓が一致した。一方で、より下位のクラスターの場合、2変数のクラスター2に3変数のクラスター3が完全に内包された。一方で、3変数のクラスター2の構成墓は2変数のクラスター1と2に分散して対応した。つまり2変数ではクラスタリングが不十分だったものの、3変数ではより細かく区分ができた。ここから、より下位のクラスタリングに関しては3変数を対象にしたクラスタリングの結果がより妥当と判断できる。図7.35.を観察すると、副葬品総点数と種類数、および墓の規模と副葬品総点数には相関が見出せる一方で、墓の規模と副葬品種類数は相関しないことが読み取れる。

以上から、B 墓地に所在する全時期の墓を対象とした場合、クラスターは4であることを示すことができた。

#### 7.1.4.2. Ia2-Ia3 段階

墓の数は3基である。B 墓地にはIa1 段階に属する墓がないため、Ia2 段階からIa3 段階に属する墓がここで分析対象である。この基本段階に属する墓は3基だが、Rではヘッダーを含めて4行以下の表は不完全な表と認識されてしまい分析ができない。したがって、ここではRを用いないで観察する。墓の数が限定されるため、手動でのクラスタリングは可能である。

この段階は1基と2基の墓で構成される2つのクラスターに分けることができる。各クラスターを構成する墓の番号は付編4に示した。クラスター1は2基の墓から構成され、副葬品の種類数・総点数はともに1である。クラスター2は1基の墓から構成され、3種類、4点の副葬品を持つ。

墓の規模を変数に加えた場合、それぞれ1基の墓から構成される3つにクラスタリングできた。すなわち、副葬品と面積に劣るクラスター1、副葬品は劣るが面積は優れるクラスター2、副葬品は優れるが墓の面積は劣るクラスター3である(表7.37)。2変数の場合と比べるとクラスター数が1つ増え、副葬品にのみ依拠したクラスタリングでは得られなかった区分ができた。したがってB 墓地の利用が開始した本段階には3つのクラスターが存

表 7.37. 各クラスターの値 (B 墓地・Ia2-Ia3 段階・3 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	1	1.00	1.00	0.98	1	1	1	1	0.98	0.98
2	1	1.00	1.00	3.25	1	1	1	1	3.25	3.25
3	1	3.00	4.00	0.84	3	3	4	4	0.84	0.84

在することが判断できた。以上から、B 墓地に所在する Ia2-Ia3 段階の墓は、3つのクラスターに区分できた。

#### 7.1.4.3. Ib1-Ib2 段階

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、墓の数は 22 基である。最適なクラスター数に関しては、4 であることが推定された。墓の数を 4 としてクラスタリングを行ったところ、すべてで墓の数が 5・11・3・3 に区分できた。各クラスターを構成する墓の番号は付編 4 に示した。区分した結果を示した散布図が図 7.35.である。各クラスターにおける変数の値の詳細は表 7.38.に示した。クラスター1 は副葬品が納められた墓と納められていない墓を含み、副葬品が納められた墓でも 1 種類・3 点以下である。クラスター2 の墓は平均して 1-4 種類、4-8 点の副葬品が出土した事例が含まれる。クラスター3 の墓は 2-3 種類だが、15-19 点の副葬品が含まれ、種類が限定されるのに対して点数が多い。クラスター4 の墓は 3-7 種類だが 10-14 点の副葬品を含み、クラスター3 とは逆に副葬品の種類に富む墓を含む反面、総点数は限定される。全体としては、副葬品の種類の少ない墓はまとまりがある一方で、特にクラスター3 では点数がある程度多い場合でも種類数はばらつきがあることが読み取れた。以上をまとめると、Ib1-Ib2 段階の B 墓地ではまず副葬品の種類数と点数の両方またはどちらか一方が優れている 2つのまとまりと、副葬品の種類数と点数で劣る 2つのまとまりがあることがわかる。より細かくみると、優れているまとまりでは、種類数の少なさの一方で点数に優れるまとまり（クラスター3）と点数が抑えられる代わりに種類数が豊富な事例を含むまとまり（クラスター4）があることが読み取れ、劣るまとまりは特に副葬品を 1 種類以上持つ（クラスター2）か否か（クラスター1）でさらにまとまりをさらに分割できることが示された。

墓の面積を変数に加えた場合、墓の数は同じ 4 だが、2 変数のみの場合とは異なる結果が得られた（図 7.36.）。この場合の墓の数は 18 基である。各クラスターにおける変数の値の詳細は表 7.39.に示した。まず、3 変数のクラスター1 は 2 変数のクラスター1 と 2 の一部に対応する。3 変数のクラスター2 は 2 変数のクラスター2 に完全に内包される。3 変数のクラスター3 と 4 は、2 変数のクラスター4 と 3 に完全に対応するかたちで対応する。上位のクラスター2 つでは、2 変数でも 3 変数でも構成墓が一致する一方で、下位のクラスター2 つでは墓の規模を加えた場合、副葬品のみによるクラスタリングとは異なる区分が得られた。一方で上位の 2 つのクラスターに関しては、副葬品の種類数が多様で総点数に劣る場合には墓の規模がより小さく、副葬品の種類数は必ずしも優れなくとも総点数が多い場合には墓の規模も大きくなることがわかった。ここから、2 変数のクラスター3 と 4 では、

表 7.38. 各クラスターの値（B 墓地・Ib1-Ib2 段階・2 変数）

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	5	0.80	1.80	0	1	0	3
2	11	2.36	5.18	1	4	4	8
3	3	2.67	17.00	2	3	15	19
4	3	5.00	11.67	3	7	10	14

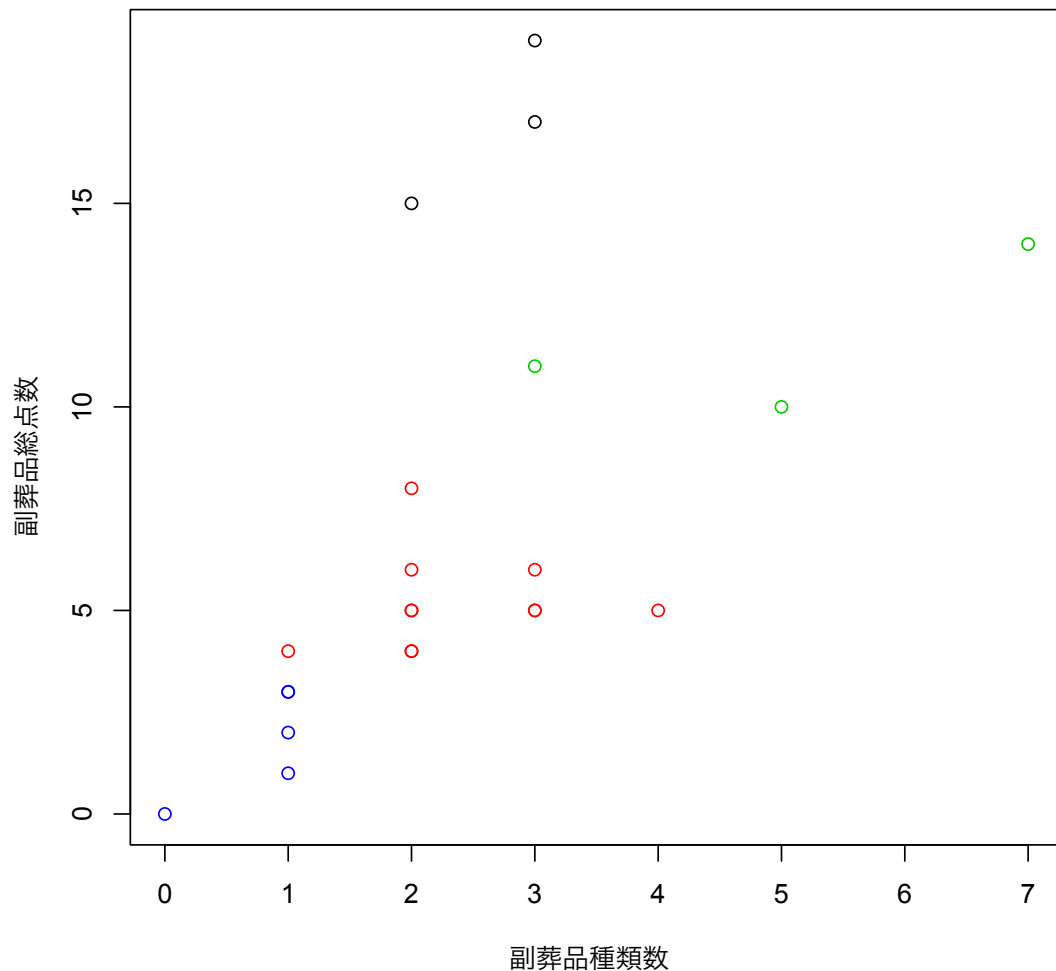


図 7.35. クラスタリング結果を示した散布図 (B 墓地・Ib1-Ib2 段階・2 変数)

表 7.39. 各クラスターの値 (B 墓地・Ib1-Ib2 段階・3 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	6	1.33	3.17	1.38	1	2	1	4	0.93	2.03
2	6	2.67	5.67	1.98	2	4	5	8	0.93	4.06
3	3	5.00	11.67	1.95	3	7	10	14	0.65	3.25
4	3	2.67	17.00	3.19	2	3	15	19	3.14	3.25

クラスター3の方が優れることが明らかになった。2変数のみでは捉えられきれなかった優劣を明らかにすることができた。なお対象の3つの変数に関しては、図 7.31.を観察すると、副葬品総点数と種類数、および墓の規模と副葬品総点数には相関が見出せる一方で、墓の規模と副葬品種類数は相関しないことが読み取れる。

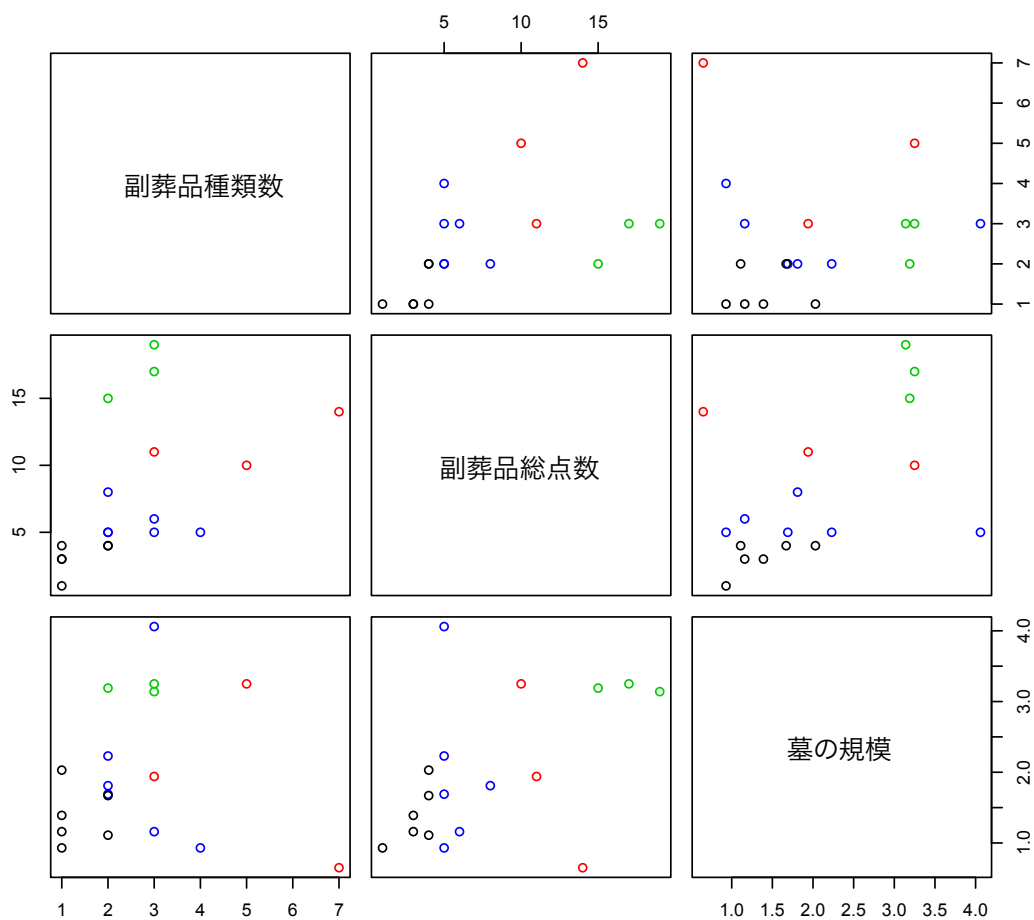


図 7.36. クラスタリング結果を示した散布図 (B 墓地・Ib1-Ib2 段階・3 変数)

以上から、B 墓地に所在する Ib1-Ib2 段階の墓は、4 つのクラスターに区分できた。

#### 7.1.4.4. IIa1-IIa2 段階

副葬品の総点数と種類数をクラスタリングの変数とした場合、墓の数は 25 基である。クラスター数に関しては 4 が推定され、この墓の数でクラスタリングを実行したところ、 $10 \cdot 8 \cdot 4 \cdot 3$  の墓の数の区分が安定して出力された。各クラスターを構成する墓の番号は付編 4 に示した。このクラスタリングの結果を示した散布図が図 7.37 である。各クラスターにおける変数の値の詳細は表 7.40 に示した。クラスター 1 は副葬品が納められた墓と納められていない墓を含み、副葬品が納められた墓では 1-2 種類、2-6 点の副葬品を含む。クラスター 2 の墓は 1-4 種類、8-12 点の副葬品を含む。クラスター 3 の墓は 3-5 種類、16-22 点の副葬品を含み、複数種類・多数の副葬品が特徴である。クラスター 4 は、4 種類または 11 種類、31-35 点の副葬品が納められた墓を含むが、11 種類・35

表 7.40. 各クラスターの値 (B 墓地・IIa1-IIa2 段階・2 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		副葬品種類数		副葬品総点数	
		種類	総点	最少	最大	最少	最大
1	10	1.56	3.33	0	2	0	6
2	8	2.50	10.75	1	4	8	12
3	4	4.00	18.50	3	5	16	22
4	3	6.33	33.00	4	11	31	35

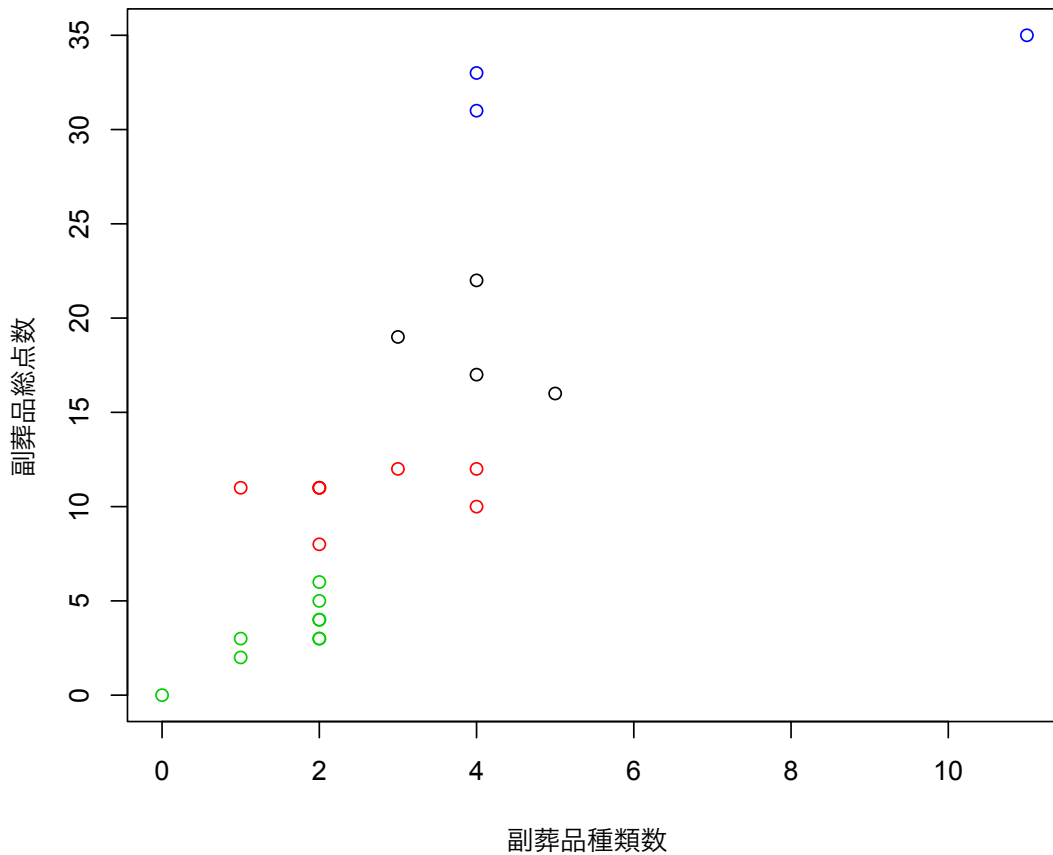


図 7.37. クラスターリング結果を示した散布図 (B 墓地・IIa1-IIa2 段階・2 変数)

点の副葬品を持つ墓は大きく外れるのでさらに細分できる可能性がある。全体としては、クラスター1 から3 までは副葬品の種類数や総点数に一定のまとまりを確認することができる一方で、クラスター4 はこれらの指標で極端に外れた事例を含む。特にクラスター1 から3 のうち、2 と3 の間は分割できることが予想される。以上をまとめると、IIa1-IIa2 段階の B 墓地でもまず副葬品の種類数と点数の両方またはどちらか一方が優れている1つのまとまり (クラスター4) と、副葬品の種類数と点数でやや優れる1つのまとまり (クラスター3)、そしてそれらが劣る2つのまとまり (クラスター1・2) があることがわかる。前段階と比べると、クラスター4 のばらつきは

表 7.41. 各クラスターの値 (B 墓地・IIa1-IIa2 段階・3 変数)

クラスター	墓の数	副葬品平均数		平均面積	副葬品種類数		副葬品総点数		面積	
		種類	総点		最少	最大	最少	最大	最少	最大
1	9	1.63	3.38	1.88	0	2	0	6	0.66	3.98
2	8	2.50	10.75	2.82	1	4	8	12	1.81	4.09
3	3	4.00	17.33	3.26	3	5	16	19	2.23	4.30
4	3	6.33	33.00	4.61	4	11	31	35	3.79	5.57

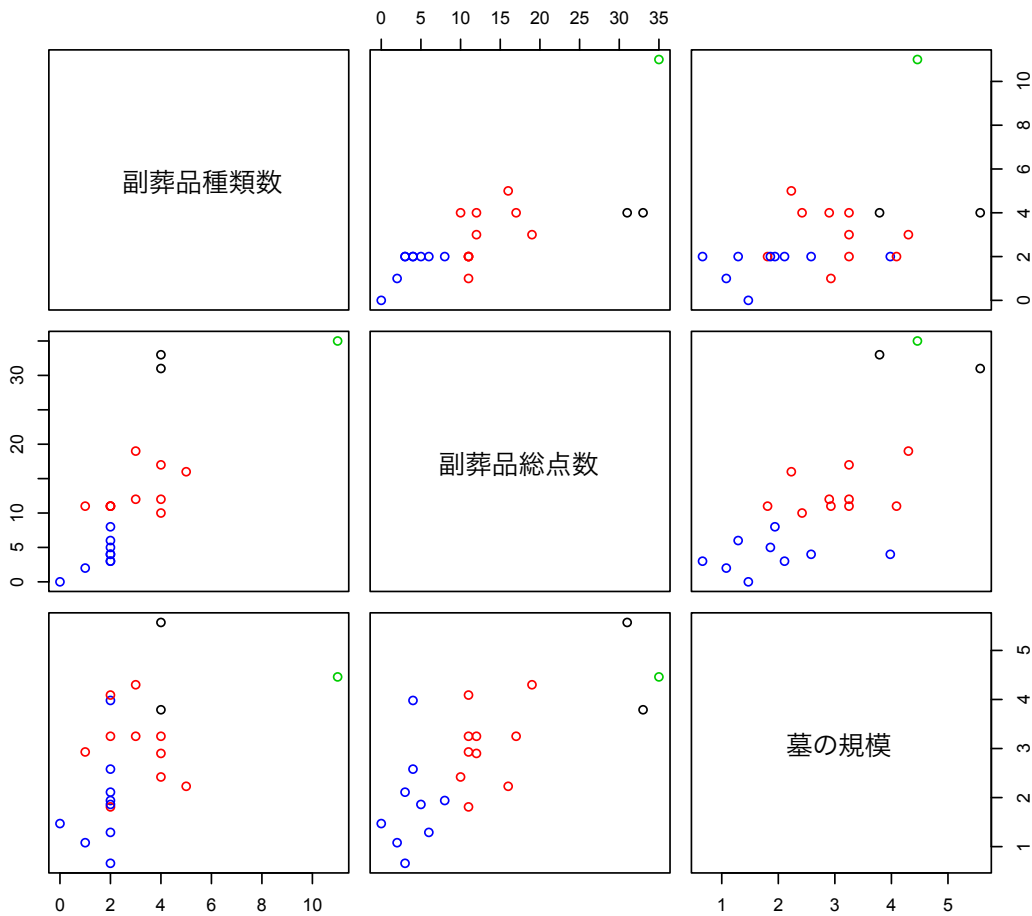


図 7.38. クラスタリング結果を示した対散布図 (B 墓地・IIa1-IIa2 段階・3 変数)

際立って大きい。一方でクラスター1と2はあまり変わらない。その一方でクラスター3は1・2と4の間を埋めるかたちで新たなまとまりを示している。前段階のクラスター3がやや種類数や点数で低減したものとして読み取れる。

墓の規模を変数に加えた場合、墓の数は1基減って23基となった。クラスター数を4としてクラスタリング



を対散布図で図 7.38. に示した。対応を確認したところすべてのクラスターで構成墓が 2 変数と 3 変数の場合で一致した。各クラスターにおける 3 変数の値の範囲は、表 7.41. に記した。ここから、2 変数で行ったクラスタリングの結果が支持された。また図 7.38. を観察すると、副葬品総点数と種類数、および墓の規模と副葬品総点数には相関が見出せる一方で、墓の規模と副葬品種類数は明確には相関しないことが読み取れた。

以上から、IIa1-IIa2 段階の墓は 4 つのクラスターに区分できることが示された。

#### 7.1.4.5. IIb 段階

本段階は墓地の使用終了時期にあたり、墓地利用が極端に少ないため、墓の数は 1 基に留まる。したがって、クラスタリングは不可能である。この唯一の墓である B127 号墓には 3 種類・9 点の副葬品が納められており、前段階のクラスター 2 の水準に相当する。この段階には前段階のクラスター 4 や 3 のような多数の副葬品を納める墓は造営されなくなり、点数も種類数もある程度絞られることが読み取れる。墓の規模を変数として考慮した場合、墓の面積は 3.76m<sup>2</sup> であった。水準としてもクラスター 2 の範囲を満たしており、副葬品のみを変数とした場合に得られたクラスタリングの結果が支持された。

#### 7.1.4.6. まとめ

副葬品の種類数と総点数を変数とした B 墓地におけるまとまりは、Ia1-Ia3 段階の 2 つのまとまりに始まり、Ib1-Ib2 段階には 4 つのまとまりが読み取れ、IIa1-IIa2 段階にもこのまとまりの数が継続し、墓地利用が終了する IIb1 段階には 1 基の墓しか確認できないことがわかった。ただし、Ib1-Ib2 段階と IIa1-IIa2 段階のまとまりの数は 4 と同数ながらもその内実は異なる。Ib1-Ib2 段階の場合は、副葬品に乏しい 2 つのまとまりと豊富な 2 つのまとまりの 2 つの大きなまとまりを認識することができた。その一方で、IIa1-IIa2 段階の場合は、副葬品に乏しい 2 つのまとまりは維持されるが、豊富な 2 つのまとまりの方はさらに 2 つに分かれ、最も豊富なまとまり（クラスター 4）は種類数・総点数がともにさらに増進するのに対し、2 番目に豊富なまとまり（クラスター 3）はやや減退することが読み取れた。Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階への移行の際には、クラスターを 2 つずつ含む 2 つの大きなまとまりから、単独のクラスターからなる 2 つのまとまりと 2 つのクラスターを含む 1 つの、合計で 3 つの大きなまとまりに分化したと考えられる。IIa1-IIa2 段階までは造墓に際して一つの墓に投げられる副葬品の量的・質的な基準の分化が通時的に進んだと捉えられる。副葬品の種類や点数が多様化することから、被葬者の地位の多様化も進んだと考えられる。特に、IIa1-IIa2 段階には、地位の上で異なる 3 つのまとまりが存在することが読み取れた。

## 7.2. まとめ：クラスター分析から見たナカダ遺跡の社会構造の複雑化と単純化

以上を踏まえ、通時的な視点に立って墓地利用の増大と縮小と、社会構造の複雑化と単純化との関係、および階層別の埋葬地の変遷の有無を考察する。

まず階層の有無に関しては、大墓地東地区や大墓地西地区など、ナカダ遺跡の最初期から使用されていた墓地

です。すでに Ia1-Ia3 段階から副葬品の総点数や種類数、墓の規模の点で明確に区分できる差異の存在が明らかになったことから、遺跡の使用が開始された段階で、母集落にはある程度の階層が存在したと見られる。差異が著しい墓がごく少数に留まることからこの点が暗示される。

まず上位のクラスターを構成する墓について考える。大墓地東地区と同西地区では、最上位のクラスターを構成する墓に含まれる副葬品の総点数や種類数の水準は、大墓地東地区ではあまり変わらずに推移するのに対し、大墓地西地区では極端に総点数が多い墓が現れる。特に大墓地西地区では Ia1-Ia3 段階から Ib1-Ib2 段階への移行時に前段階からさらに変数の値の水準が上昇することが読み取れた。この 2ヶ所の墓地での最上位クラスターの水準の維持、または上昇は IIa1-IIa2 段階まで続き、墓地の利用が低下するにしたがって見られなくなる。少なくとも、この 2つの墓地では IIa1-IIa2 段階までは最上位のクラスターが固定化されるような縦の社会的地位を反映した構造が Ia1-Ia3 段階の時点ですでに存在した可能性がある。

一方で、中間層のクラスターを構成する墓の数は墓地の利用が盛んになるにつれて大幅に厚みを増したことが読み取れた。これは特に大墓地東地区で顕著である。大墓地東地区では Ib1-Ib2 段階以降にクラスター数が最大になる。この時期は、ナカダ遺跡における集落活動の高まりと符合しており (e.g. Hassan et al. 2017)、ナカダ地域における中心地化が進むにつれて人口の流入が起り、墓地で中間層のクラスターを構成する墓に埋葬された母集落の人々の間にも縦の社会的地位に関わる差異が発生したことが反映されていると推察される。この差異の枠組みは IIa1-IIa2 段階にも維持されるが墓地利用は前段階よりはやや低下することが読み取れた。この大墓地東地区の推移の一方で、同西地区でも利用の増大による Ib1-Ib2 段階からの中間層の出現と差異化が読み取れた。大墓地東地区と同じく集落活動の活発化による人口流入の影響を受けていると考えられる。一方で、大墓地西地区の墓の水準は、大墓地東地区よりも高いことが伺えた。また墓の数の増加も大墓地東地区ほど顕著ではない。したがって被葬者の縦の社会的地位の違いによって一定程度埋葬される墓地が選択されていた可能性がある。属性の単独分析からも大墓地東地区に対する同西地区の卓越が読み取れている点が、この考えの傍証と言える。興味深い点は、大墓地西地区も Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階への移行時にクラスターの枠組みを維持しながらも、前段階よりも若干水準を落とすことにある。大墓地東地区と西地区で符合する動きである。先行研究においてもナカダ II 期におけるクラスターの増加と差異の拡大は指摘されたが (Bard 1989; 1994)、II 期として一括して扱われていたため捉えられていなかった。この動きは後述するように、墓地の分散に関わっている可能性がある。

この大墓地東地区と同西地区の動きの一方で、Ib1-Ib2 段階に利用が開始される T 墓地では、副葬品に優れ、なおかつ規模も大きく、特殊な埋葬様式である改葬墓を含む墓が造営される。この改葬墓の存在は、第 6 章でも指摘したように、T 墓地が単なる埋葬の場としての機能だけでなく、埋葬に関連した儀礼の場としても機能した可能性が考えられる (cf. Barrett 1990; Mizoguchi 2014)。したがってこの場合はクラスターリングで高水準のまとまりを認識できても、それがこの段階の T 墓地において上位の階層に属する被葬者が埋葬されたことを必ずしも意味しないと考えられる。むしろ大幅に集落の活動が活発になった Ib1-Ib2 段階においてナカダ遺跡の共同体をつなぎとめるための儀礼行為の結果として改葬墓が造営された可能性がある。以上から、Ia1-Ia3 段階から Ib1-Ib2 段階まで重要な点は、大墓地東地区や同西地区に中間層が伸長しつつも、そうした変化にも関わらず一定以上の水

準をもった固定的な上位の社会階層が存在したことが読み取れることが挙げられる。

ナカダ遺跡の4ヶ所の墓地の関係が最も複雑になる段階はIIa1-IIa2段階であり、上位の社会階層の人々の埋葬地が大墓地に東地区や同西地区だけでなく、T墓地や大墓地南地区にも広がったのがこの段階にあたる。この段階にはT墓地に部屋構造を持つ日乾レンガ使用墓が出現するなど、第6章で見たように墓の構造面からも被葬者の系統を背景にしたある集団による分別された墓域利用が存在した可能性が推定できるようになる。この日乾レンガ使用墓は、変数に関する情報が足りないために本章で行ったクラスター分析の対象とはなっていないが、上位の階層に所属する人々の埋葬地が大墓地西地区や大墓地東地区から分散、または分離された可能性を示唆する。クラスター分析の対象墓からもIIa1-IIa2段階のT墓地に明確な差異が読み取れ、上位のクラスターの水準が同段階の大墓地西地区と同程度であることからこの点が考えられる。一方でこの段階に本格的な利用が始まった大墓地南地区でも副葬品の総点数が50点を超える水準を持つ最上位のクラスターが確認できており、こちらも上位の階層の人々の埋葬地としても機能した可能性が高い。

一方で、どの墓地でもより低い水準の墓のまとまりが確認できることから、既存の墓地に加えて新しい墓地が分化して利用が開始されること自体はナカダ遺跡の社会における縦の社会的地位の違いとはあまり関係がないと思われる。Ib1-Ib2段階から引き続いたIIa1-IIa2段階のサウスタウンにおける人口増が新しい墓地が造営される主な要因であり、大墓地南地区などの小規模な墓地でも墓地内である程度の差異が墓に見られる構図が維持された。このようにIIa1-IIa2段階には墓地が分散する一方で、縦の社会的地位に関わる構造の枠組み自体は概ね前段階から変わらなかったと考えられる。ただし、この墓地の分散が、中間層のクラスターを構成する墓に埋葬された被葬者のための埋葬地を選択できる余地が増えたために分散が生じ、大墓地東地区や同西地区における若干の水準の低下の要因となった可能性はある。

IIb段階以降は、どの墓地でも利用が低調になり始め、それに伴って副葬品や墓の規模からは墓を多くのまとまりに区分することができなくなる。加えて最上位のクラスターを構成する墓の水準が下落することから、IIb段階以降は、ナカダ遺跡における社会構造は全体的に縮小・単純化した可能性が窺える。T墓地でもIIIa1-IIIa2段階にはIIa1-IIa2段階と比べると全く別の様相を呈すようになる。IIIa1-IIIa2段階に相当するナカダIII期の集落自体の活動自体は過去の調査において推定されているものの(e.g. di Pietro 2007; 2016; 2017; Fattovich et al. 2007)、墓地利用は低調である。ここから、最盛期と比べると集落活動も往時より低下したことが推察される。墓地利用の縮小は、被葬者の人数の減少を意味し、最盛期には多数のまとまりにクラスタリングできていた中間層が薄くなることにつながった。したがって、母集落でも集落活動の低下に伴い、それまでの段階に存在したと想定できる多層的な階層は見られなくなったと考えられる。集落活動が低下すれば、複雑な社会構造を維持する必要がなくなったためとも捉えられる。このナカダ遺跡における活動の低下は競合仮説(Kemp 2006; Wilkinson 2000)で示されたナカダの競合からの敗退と現象面では整合的である。IIIa1-IIIa2段階以後は、どの墓地もIIIc段階までに廃絶するため、ナカダ遺跡における活動はいつそう低下したと考えられる。

サウスタウンとは異なる母集落を持つB墓地ではIa2-Ia3段階にはわずかな水準の差しかなかったクラスターが、見かけ上はIIa1-IIa2段階に向けて拡大することが読み取れた。B墓地に関してはIb1-Ib2段階の終盤に母集落

である Kh.4 地点の廃絶し、その後は Kh.4 地点に系統を持つサウスタウンの住人が墓地を使用した点が先行研究で想定されている (Hassan et al. 2017a)。B 墓地では、大墓地南地区と類似したクラスターの構成が確認できるため、サウスタウンを母集落とする墓地内で見られる被葬者の縦の社会的地位に関わる副葬品などの粋組みが B 墓地にも移入された可能性が考えられる。

以上から、ナカダ遺跡では、墓地利用の開始段階に当たる Ia1-Ia3 段階からすでにある程度の階層が存在し、次の Ib1-Ib2 段階には急激に母集落の人口が増加して中間層を中心に社会的な地位が複雑化したことが推定された。墓地における階層などの縦の社会的な地位に関わる複雑化は集落活動と密に連動していると推察され、その単純化もまた連関することが考えられた。

ただし注意しなければならない点は、クラスター分析は、あくまでも区分のための主観的な手法に過ぎないため、本章で各墓地・各基本段階に求めたクラスターの数が、必ずしも実際に当時のナカダ遺跡に存在した縦の社会的地位に関わる差異の序列を提示しているとは限らない。判別できる点は、明確な差異を持った墓の存在と、互いに差異を持ちながらもそれらが顕著ではない中間層の墓が Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階というある程度時間的に区切られる幅の中で造営された点である。このクラスター分析の限界点を踏まえつつ、次章以降では見方を変えて縦の社会的地位の差異に関する通時的な検討を継続する。

## 8. 希少品とクラスターとの関連性の検討

### 8.1. 希少品の定義と種類

前章で区分したクラスターを考察するため、ナカダ遺跡の5ヶ所の墓地における希少品が納められた墓とクラスターを構成する墓の関係性に着眼した比較と検討を行う。ここでの希少品とは入手に労力がかかる物品や、製作に特殊な技術が必要な物品のことを指し、具体的には搬入品と精製品の2種類が挙げられる。

これらの希少品に着眼する理由は複数ある。まず搬入品に関しては、非在地産の素材で作られた製品の持つ社会的な重要性が指摘できる。搬入品は在地には存在しない素材であるため、搬入された側の社会では希少性という点で価値が生まれる。この希少性を持つ搬入品の入手は、特定の社会集団によって掌握・管理されることが多く、そうした特定の所有者によって自身の社会内における地位を示すシンボルとして利用されることが知られている。埋葬との関連では、搬入品が被葬者の地位が高位であることを示すシンボルの1つとして認められる点が指摘されてきた (e.g. Binford 1971; Brown 1971; 1981)。非在地の素材による搬入品は、ある社会で構成員の個と個を分かちシンボルの1つとして利用され、埋葬にもそれが反映されていることが述べられてきた。入手が特定の集団によって管理されることが多いことから、搬入品の所有は、特に階層などの縦の社会的地位と関連する占有であることが想定される。したがって、埋葬コンテキストから階層を考察する際に重要な着眼点になると考えられ (cf. Brown 1971)、ナカダ遺跡においても搬入品の有無とクラスターの関係性に着眼すれば、被葬者の階層を表し、差別化する地位シンボルとして搬入品が機能したか否かを調べるができる。

また精製品に着眼する理由は、高品質な製品に仕上げるための特別な技術を必要とし、結果として時間的な労力が多大に投じられる点にある。第3章で述べたように、埋葬から被葬者の階層などの縦の社会的な地位を見分けるためには、墓の造営に投じられる労力が重要とされてきた (cf. Tainter 1978)。墓の造営に投じられる労力は、墓自体の造築という遺構への労力の投下と並んで、製作や収集などの副葬品の準備への時間的な労力の投下も被葬者の地位を区別するために重要とされた (cf. Tainter 1978)。精製品は準備に投じられる労力が高いことから、ある墓に埋葬される量や種類との関連で被葬者間に存在する相対的な地位の検討に有効と考えられる。したがって、ナカダ遺跡における精製品とクラスターの関係性に着眼すれば、搬入品と同じく被葬者の階層を表し、差別化する地位シンボルとして機能したか否かを検討することが可能になると見込まれる。

ただし搬入品と精製品は、必ずしも明確に分別できるわけではない。なぜなら、原材料にごく簡単な初期加工を加えた状態で中・長距離を運搬され、墓地の母集落で加工されて製品化される場合もあるからである。例えばナカダ文化の場合、ナカダ III 期に石製容器の原材料が東部砂漠やファイユーム地方などの原産地である程度加工され、その後に上エジプト地域などの消費地へと搬出されたことが知られている (e.g. Harrell et al. 2000)。この事例では搬入と製作の両方の過程を経て製品化されるので、製品自体に搬入と製作の両方に労力が投下されるために明確な分離は不可能である。したがってここでは明確な分別は避け、希少品として一括する。

さらに希少品に着眼するもう1つの理由は、ナカダ遺跡が立地するナカダ地域の地理的な特徴と関連する。ナカダ地域は、古くから集落であるサウスタウンが物流上の重要な役割を果たしたことが述べられてきた (cf. Fattovich et al. 2007)。第4章で述べたとおり、ナカダ遺跡は、紅海に至るルートであるワディ・ハママートのナイ

ル河側における出口の対岸に立地しており、ナイル河との交差点にあたる。また、北方 40 km にはワディ・ケナがあり、2 つのワディはどちらも東部砂漠の資源原産地へと連絡している。東部砂漠には天然資源が豊富に存在し、なおかつ紅海産の貝類もビーズとして利用されることから、ナカダ遺跡がナカダ文化期に結節点としての役割を果たしていた可能性がこれまで指摘されてきた (e.g. Cox 2012)。また IUO 隊の調査では、紅海側との物流が着眼点とされた (Fattovich et al. 2007)。つまり、ナイル河下流域における、南北、および東方向の物流のハブとしての役割をナカダ遺跡が担っていたことが想定される。この想定背景には、王朝時代にナカダ遺跡が、古代エジプト語でヌベト (*Nbt*)、つまり「金の町」として知られており、東部砂漠から算出される金の一時的な集積地であったことも関連する (cf. Helck 1982)。この王朝時代の記述がナカダ文化期にまで遡る直接的な証拠はないが、4.3. で記した通りナカダ III 期の墓地遺跡 Kh.2 地点では金製の物品が納められていた可能性が指摘されており (van Wetering 2012)、金の物流に関する傍証となる可能性が考えられる。いずれにせよ、ナカダ遺跡が持つこの立地面での特性は、ほかのナカダ文化期の遺跡にはあまりない特徴であり、集落での物流などに関わる活動が墓地で得られる考古学的証拠に関連することが想定できる。したがって、前章までで得られた墓地分析の結果を、社会階層に着目して解釈するために希少品への着目は有効と考えられる。以下では、ナカダ文化期の物流や搬入に関する先行研究を瞥見し、搬入品の検討で重要な原産地と消費地との距離に関する整理を記述する。

## 8.2. 希少品の概要

希少品の先行研究は搬入品と精製品ともに厚い蓄積がある。ここでは、搬入品に関しては原産地に関する先行研究をまとめ、精製品に関しては埋葬コンテキストとの関連から先行研究を概括する。

### 8.2.1. 搬入品

上エジプト地域に所在するナカダ文化の墓地遺跡からは様々な搬入品が発見されるが、それらの原産地は上エジプト地域から見て、下エジプト地域、今日のイスラエル・パレスティナに相当するカナーン地域などの北方、今日のエジプト最南部やスーダンの北部に該当するヌビア地域などの南方、東部砂漠や紅海方面の東方の 3 方面に存在する。これらのナイル河下流域で出土した搬入品に関しては、これまで数度集成されるとともに (e.g. Griswold 1992a; Hartung 2001; Hendrickx and Bavay 2002)、原産地に関する議論も行われてきた。特にカナーン地域やさらに遠方の今日のイランやイラクにあたるメソポタミア方面から搬入された遺物に関しては、ナカダ III 期に発生した初期王権の対外関係を明らかにするために盛んに議論されてきた (Griswold 1992a; Hartung 2001; 2014; Hill 2004; Mark 1998)。本論文では対外関係などの政治的な問題は目的ではないため詳しくは先行研究に譲るが、特に最初期の王墓とされるアビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地の j 号墓 (III A1 期) では 700 点以上の西アジア方面から搬入された貯蔵壺が発見されたため (Dreyer 1998)、初期王権の発生と物流の関係性が議論された (Hartung 2001)。一方で、本論文と直接関連する搬入品とナカダ文化の墓地における被葬者の地位との関係を論じた研究では、必ずしも搬入品が縦の社会的な地位の上位にいる層と結びつくわけではない点が示された (Griswold 1992a)。この研究では、搬入品を全般的に取り扱い、特に墓の規模に着目した研究が行われた。考古学一般における階層

などの縦の社会的地位に関する議論を踏まえて搬入品を検討しており、本論文にとって意義深い。近年では、アビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地で出土した搬入品に関する議論が進められ (Hartung 1998a; 2016)、墓地における搬入品の消費に関する議論が進んだ。この U 墓地における研究は、様々な種類の搬入品の利用期間とその墓地頻度を示しており、報告内容に限られるナカダ文化の墓地の中では稀有な研究事例である。

以上の流れと関連して同墓地を発掘した U. ハートウング (Hartung) の搬入品の距離に関する整理は重要である (Hartung 1998b)。彼は、上エジプト地域の遺跡を対象に、ある遺跡の所在地を基準にした距離別に物流を、「地元内市場交易 (Lokaler Markthandel)」、「地域内交易 (Regionaler Handel)」、「ナイル河流域内の超地域的な交易 (Überregionaler Handel innerhalb des Niltales)」、「超地域的な遠距離交易 (Überregionaler Fernhandel)」の4つに段階的に分けた (Hartung 1998b: 36-40)。これらのうち、「地域内交易 (Regionaler Handel)」は 100 km 程度の距離幅を対象にした。さらにこれらの段階のうち、「ナイル河流域内の超地域的な交易」と「超地域的な遠距離交易」は重要である。「ナイル河流域内の超地域的な交易」にはナイル河の流域における 100 km 以上の運搬距離を要する物流に加え、東部砂漠に所在する貴石や金属などの諸資源の搬入含まれる。また「超地域的な遠距離交易」にはナイル河下流域の外側であるカナーン地域やメソポタミア地域などからの物品の搬入が含まれる。距離を基準にしたこの取引の分類は、ナイル河流域で出土した搬入品の原産地をうまく捉えたかたちで物品流通を整理しており、ナカダ遺跡を含めた上エジプト地域における遺跡の検討に有効である。

この案を採用してナカダ遺跡における搬入品を整理した場合、「ナイル河流域内の超地域的な交易」がまず重要となる。ナカダ遺跡から出土した東部砂漠や紅海で算出する原材料を用いた副葬品が出土した墓に着眼することで、それらの遺物が被葬者の地位を示すシンボルとしてナカダ遺跡の社会で機能していたかを把握することができると予想される。次に、「超地域的な遠距離交易」の痕跡として当てはまる物品も重要となる。例えば、ナカダ遺跡ではラピスラズリを用いた製品や円筒印章が出土しており、ナイル河流域を越え出た物品の搬入が確認できる。これらの副葬品と墓のクラスターを確認することで、「ナイル河流域内の超地域的な交易」による搬入品と合わせて被葬者の差異に関する検討が可能と見込まれる。

そこで以下では、この整理の枠組みを参照しつつさらに単純化して「ナイル河下流域内」と「ナイル河下流域外」に距離的に分別し、主要な搬入品の原産地に関する大要を抑えることとする。「ナイル河下流域内」には上記の「地域内交易」圏と「ナイル河流域内の超地域的な交易」圏が含まれ、「ナイル河下流域外」には「超地域的な遠距離交易」圏が相当する。「ナイル河下流域内」には東部砂漠や紅海沿岸も含むこととする。「ナイル河下流域外」は今日のアスワン以南、スエズ運河以東の範囲とする。西方からの搬入品に関しては、例えばアビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地で西部砂漠から搬入されたと推定される土器の事例が報告されている (Hartung and Hartmann 2005) もの、全般的に搬入の事例は乏しいためここでは考慮しない。なお、ナカダ文化の遺跡から出土する原材料はピートリーがナカダ遺跡の報告書などで議論し (Petrie 1920: 43-4; Petrie and Quibell 1896: 45-6)、集成にも反映されている (Hendrickx and Bavay 2002) が、一部には誤認やのちに修正された事例もある (e.g. Payne 1993) ので、初期の記載とは合致しない部分も存在する。

#### 8.2.1.1. ナイル河下流域内からの搬入品とその原産地

東部砂漠を含むナイル河下流域内の各地からは、副葬品の原材料となる鉱物資源が搬入された。鉱物資源別に原産地と製品、出土遺物の事例を概観する。

##### 8.2.1.1.1. 東部砂漠

金、銅、マラカイト、方鉛鉱、アメジスト、赤鉄鉱、柘榴石、玉髓類（玉髓・瑪瑙・カーネリアン）、カンラン石、凍石、シルト岩、硬砂岩、泥岩、石灰岩、アラバスター、斑岩、閃緑岩、蛇紋岩、角礫岩など、多種多様な貴金属や石材、宝石の原産地が東部砂漠に存在する（図 8.1・図 8.2）。

金の原産地は東部砂漠のナイル河側や山間部に複数確認された（Klemm and Klemm 2012）。この中でもナカダ文化期から利用されていた可能性がある原産地にボカリ（Bokari）I が挙げられる（Klemm and Klemm 2012: 179–88）。この原産地はおそらくナカダ III 期以降に利用されたと考えられる。その一方で、ナカダ III 期以前には金の利用は限定的で採取も活発でない。専ら天然の金塊から熔解・精製され、王朝時代に行われた鉱石からの熔解と抽出は未発達だったとされる（Klemm and Klemm 2012: 276; 2014: 141–2）。遺物は金箔が多数を占める。遺跡からの初出はマハスナ遺跡 H 地点 17 号墓（ナカダ IC 期）から出土したビーズだが（Ayrton and Loat 1911: 11）、IID2 期までは散発的な出土に留まる。III 期以降は高い社会階層の人々による利用が促進され、儀器や副葬品の原材料となった。テル・エル＝ファルカ遺跡東丘（Eastern Kom）地区では IIIB 期中頃の層の建築址から金製の人物像（Chłodnicki and Ciałowicz 2007）が出土し、サッカラ遺跡やアビュドス遺跡の王墓や高官墓からも金箔製の石製容器蓋などの副葬品が出土した（e.g. Spencer 1993: 86, Fig. 63）。IIIC1 期には押圧剥離技術によるフリント製波状剥離ナイフの把手部分が金箔で被覆された事例がある（Needler 1956）。

銅はこれまで上エジプト地域における物流の主な検討の対象となってきた（Largacha 1993）。これまで銅の原産地の候補として、エジプト東部砂漠、シナイ半島、そして今日のヨルダンのフェイナン（Feinan）地方が挙げられてきた。したがって、ナイル河下流域内外の両方を含むが、ここで一括して扱うこととする。ナカダ遺跡近傍の東部砂漠では、ワディ・ハママートから北方におよそ 20 km の地点に所在するワディ・セムナ（Wadi Semna）が銅の産出地として知られる（Hartung 2013: Fig. 8）。ただし、銅の精錬元となるマラカイトは顔料の材料として頻繁に用いられたため、東部砂漠産の銅を用いた製品の製作は不明である（Hartung 2013）。埋葬からはマラカイトの塊や粉末が頻出し、使用痕跡があるパレットには磨り潰した残存物である緑色が沈着している事例も存在するので、東部砂漠産の事例はマラカイトの鉱石そのものが利用された可能性が高い。現在では製品用の銅の原産地はより北方のワディ・アラバー（Wadi Araba）が有力視されている。また銅製品の供給・生産地の一つにはマーディ（Maadi）遺跡が考えられている。マーディ遺跡からは 16.5 kg ものマラカイトの鉱石が発見された（Rizkana and Seeher 1989）ほか、銅製品の鋳型が出土したことが根拠とされる（Hartung 2013）。マーディ遺跡は下エジプト文化の中心地の一つだが、ワディ・アラバーのナイル河側の出口に所在するセドメント（Sedment）遺跡までが下エジプト文化の範囲であったことも傍証となる（Williams 1982）。また、マーディ遺跡で発見された鋳型と類似した個体が、今日のヨルダンのアカバ（Aqaba）に近いテル・フジャイラート・アル＝グズラン（Tell Hujayrat al-Ghuzlan）



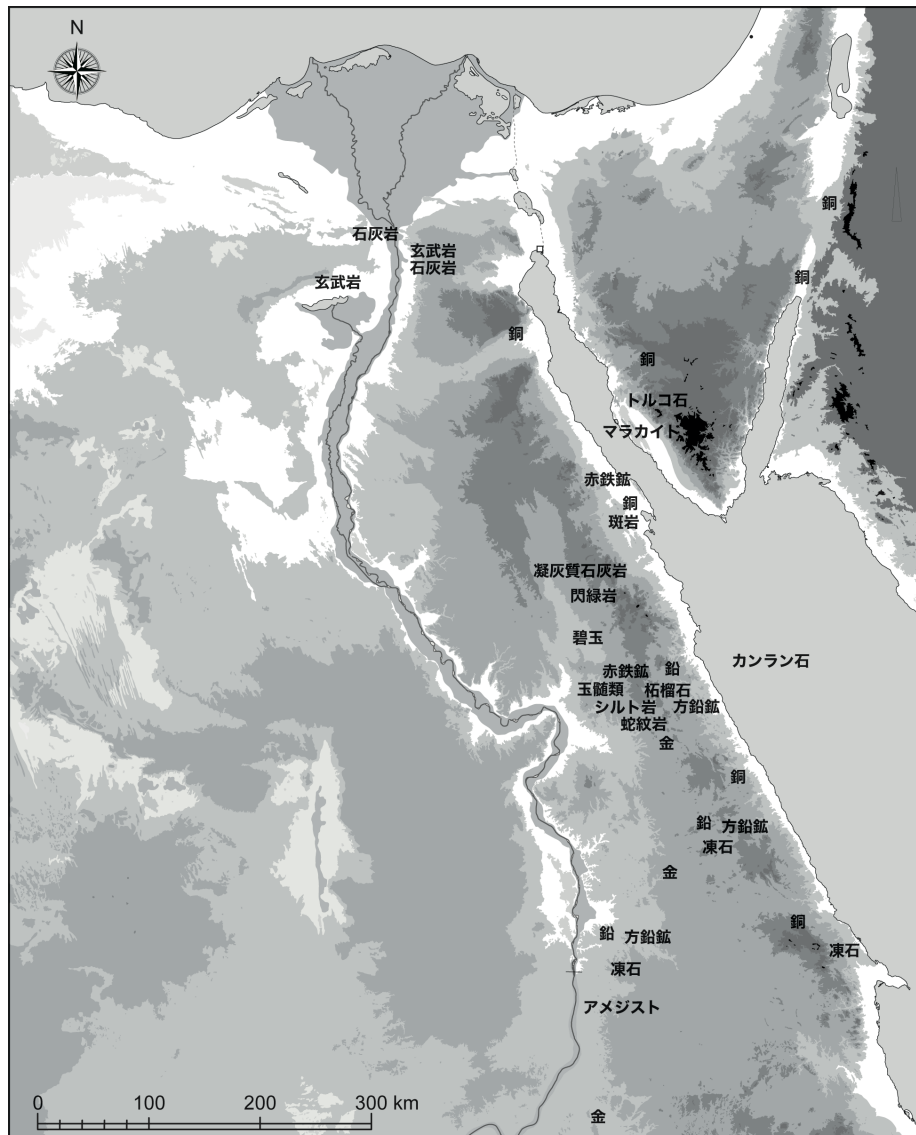


図 8.1. 東部砂漠・シナイ半島・アカバ周辺の資源分布 (Moeller 2016: Fig. 4.1. 改変・加筆)

遺跡からも出土した点も別の理由として考えられる (Hartung 2013: 24)。この遺跡ではマラカイトから銅が精錬された証拠が見つかり、周辺にはフェイナン地域などの銅の原産地も存在することから、シナイ半島を超えた搬入の可能性はある。ただし産地に関しては、最近の同位体分析からワディ・アラバー以外のカナーン以北の地域やシナイ半島なども原産地の候補として挙げられ、多岐化している (Abdel-Motelib et al. 2012)。いずれにせよ上エジプト地域の諸遺跡に、遠隔から銅がもたらされた説が現在は有力である。上エジプトのナカダ文化の諸遺跡から出土する銅製品は、ヘアピンや針、鋸、ナイフや斧などで特に小物が多く、ナカダ IIC-D 期以後に点数が急増する (Hartung 2013: 24)。III 期にはサッカラの高官墓から銅製品が精製の副葬品の一部として発見された (e.g. Emery 1939)。

銅と密接に関連するマラカイトは、東部砂漠のワディ・セムナヤウンム・セミウキ (Umm Semiuki) などの複

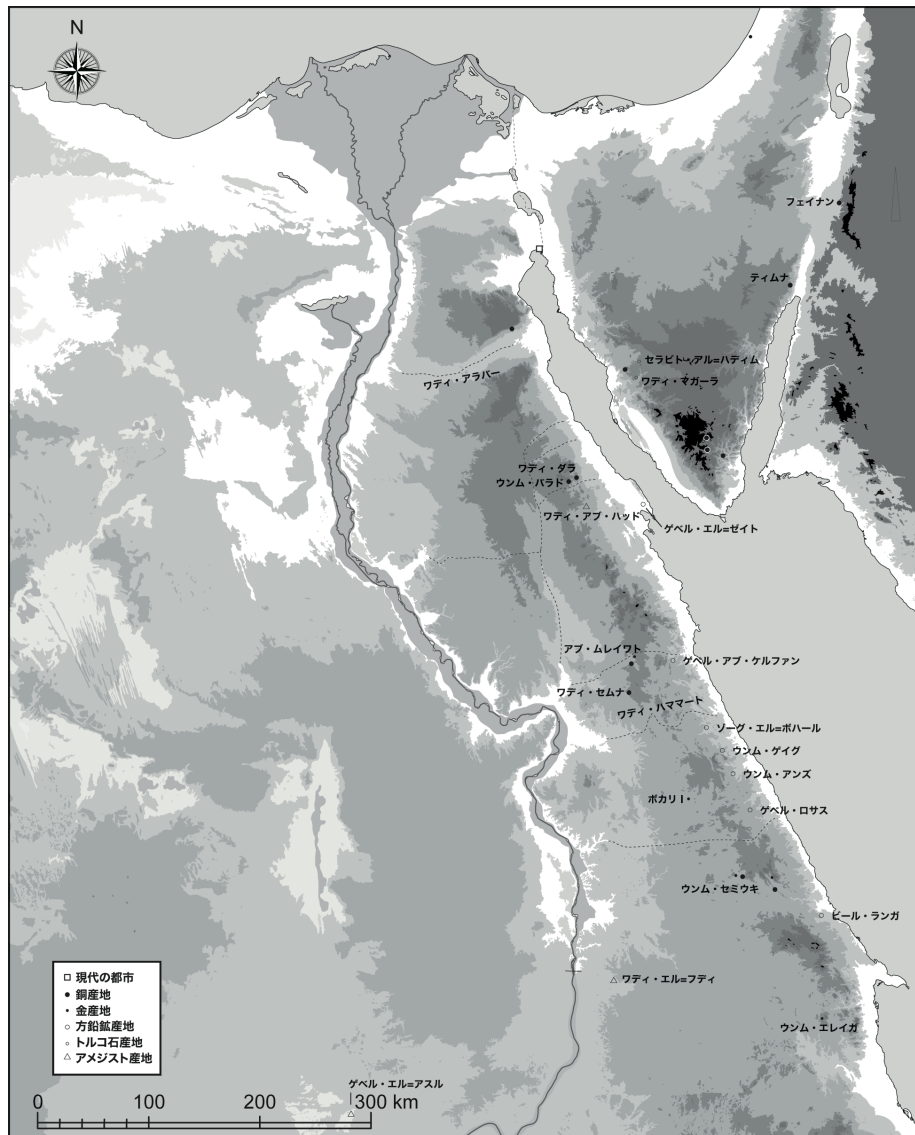


図 8.2. 東部砂漠・シナイ半島・アカバ周辺の主な原産地 (Moeller 2016: Fig. 4.1. 改変・加筆)

数の鉱床から採取され、ナイル河流域に搬入された可能性が高い (Hartung 2013)。マラカイト自体は熔解による加工は施されず、鉱石をそのまま利用されることがほとんどで顔料として粉末化されたほか、ビーズの玉に利用された事例も存在する。マラカイトはナカダ文化の墓地遺跡から頻繁に出土するため、東部砂漠からの資源の採取が活発だったことの傍証と言える。

銀と関連する方鉛鉱は、東部砂漠の山岳地帯の紅海側にゲベル・エル=ゼイト (Gebel el-Zeit) などの 7ヶ所の鉱床が確認された (Hartung 2013)。8.2.1.2.で後述するように、方鉛鉱の鉱石は銀の抽出に用いられた可能性が指摘された (Hassan and Hassan 1981) が、実際には不確実である。遺跡からは専らマラカイトと同様に鉱石をそのまま利用した礫やビーズの玉などが出土する。ただし、マラカイトとは異なりナカダ IIC-D 期以降に出土量が増えるため、東部砂漠の資源開発が進むにつれて利用が本格化したと考えられている (Hartung 2013; 2016)。

アメジストはナカダ文化の遺跡からはわずかに出土するのみでビーズなどに用いられた。王朝時代の採掘地として今日のアスワンの南の東部砂漠にワディ・エル=フディ (Wadi el-Hudi) が、下ヌビア地域の西部砂漠にゲベル・エル=アスル (Gebel el-Asr) が知られている (Shaw 2000; Shaw et al. 2010) が、ナカダ文化期にも利用されたかは不明である。

赤鉄鉱はエジプトで入手が容易な鉱物だが、質の高い鉱床は今日のケナ東方の東部砂漠内ワディ・アブ・ゲリダ (Wadi Abu Gerida) や紅海側のゲベル・エル=ゼイド北方のワディ・ディブ (Wadi Dib) などが挙げられる (Aston et al. 2000: 38)。ナカダ文化期には近傍の東部砂漠から採取していた可能性がある。ビーズの玉や塊そのものが出土することが多い。

柘榴石はワディ・ハママート北方の東部砂漠に所在するゲベル・ミティク (Gebel Mitiq) などの鉱床が既知であるほか、アスワンや紅海側にも鉱床が存在する (Aston et al. 2000: 31-2)。ナカダ文化期にはビーズの玉に利用されることが多い。

玉髄を含む玉髄類は形成過程や不純物の違いで名称が分けられ、瑪瑙やカーネリアンも含まれる。瑪瑙やカーネリアンは、玉髄などとともケナ東方の東部砂漠内ワディ・アブ・ゲリダ (Wadi Abu Gerida) などの鉱床で採取できるほか、東部砂漠の地表面でも容易に採集可能とされる (Aston et al. 2000: 26-7)。ナカダ文化期には、玉髄・瑪瑙・カーネリアンの用途はともにビーズの玉やペンダントなどの装飾品であり、特にカーネリアンはナカダ文化の墓地から高頻度で出土する。

カンラン石は玄武岩中に微量含まれており、東部砂漠や西部砂漠で散見されるが、大規模な鉱床はこれらの地域には存在しないとされる。紅海上のセントジョンズ (St. Johns) 島には鉱床が存在し、グレコ・ローマン時代 (紀元前 332-紀元 395 年) には盛んに採取されたとされる (Aston et al. 2000: 47-8) が、ナカダ文化期にも採取されたかは不明である。ナカダ文化期にはほかの宝石と同様に、カンラン石もビーズの玉などの装飾品に用いられた。

凍石の原産地は東部砂漠の中央部と南部に広く分布しており、今日のエドゥフの東方のワディ・バラミーヤ (Wadi Barramiya) に露頭が多い (Aston et al. 2000: 58-9)。ナカダ文化期の採取地は不明だが、初期からビーズの玉などに用いられた。

シルト岩、硬砂岩、泥岩は堆積岩の一種で、ワディ・ハママート周辺などの東部砂漠の北部や中央部に広く分布する (Aston et al. 2000: 57-8)。特にワディ・ハママート周辺で採取可能なこれらの堆積岩はナカダ文化期にパレットなどの原材料として非常に多く用いられた (Stevenson 2007)。加工が比較的容易なため、スプーンなどの小型の遺物にも用いられた (Petrie 1920)。

同じ堆積岩ながら生物起源である石灰岩は、今日のエスナから地中海沿岸までのナイル河下流域両岸や東部砂漠で採取可能である。採取地は非常に多いが、中でも今日のカイロ近郊のトゥラなどでは良質な石灰岩が採取される (Aston et al. 2000: 40-2)。ナカダ文化期には石灰岩はナイル河流域に加えて採取されたほか、東部砂漠ではワディ・ケナ北方のゲベル・マンザール・エル=セイル (Gebel Manzal el-Seyl) でナカダ III 期の凝灰質石灰岩製石製容器の製作址が見つかった (Harrell et al. 2000)。石灰岩は、石製容器に加えて、ビーズなどの装飾品や動物小像・人物小像などにも利用された。

石灰岩と関連する石灰角礫岩は、今日のエスナ (Esna) からミニヤー (Minya) までのナイル河流域の高位砂漠上で採取可能とされる (Aston et al. 2000: 42)。ナカダ文化期には石製容器やメイスヘッドの原材料に利用された。

斑岩は特に東部砂漠の山岳地帯に多く分布する (Aston et al. 2000: 48-50)。ゲベル・ドハーン (Gebel Dokhan) 周辺で採掘された斑岩は良質で、主に石製容器の原材料として用いられた。

閃緑岩は東部砂漠のワディ・ハママートの北側に位置するワディ・ウンム・シェギラート (Wadi Umm Shegilat) が採掘地として知られる (Aston et al. 2000: 30-1)。この原産地から搬入された閃緑岩が、ナカダ文化期に石製容器やメイスヘッドの原材料として用いられた。

蛇紋岩に関しても東部砂漠のワディ・ハママート沿いに路頭が多く見られ、支流のワディ・ウンム・エシュ (Wadi Umm Esh) 沿いでナカダ文化期にはすでに採掘された可能性が指摘された (Aston et al. 2000: 56-7)。蛇紋岩も石製容器やメイスヘッドの原材料として用いられたほか、護符などの小型の遺物の原材料にもされた。またアバディーヤ遺跡ハルフィア・ギブリ (Halfia Gibli) 地点の集落址から出土した砥石として用いられた可能性がある蛇紋岩製の遺物に関しては、ゲベル・ドハーン付近が原産地として推定された (Mahmood and Bard 1993)。

#### 8.2.1.1.2. 紅海

紅海で産出され、ナカダ文化の遺跡に搬入された資源として貝類とサンゴ類が挙げられる。貝類に関しては、特にマクラガイ科の貝の一種であるセキトリマクラ (*Oliva bulbosa*) やリュウテン属の一種の巻貝 (*Turbo opercula*) がナカダ文化の遺跡から出土したほか (Mumford 2012: 107-8)、ウニの一種もヒエラコンポリス遺跡 HK6 地点で出土した (Van Neer et al. 2004)。これらの貝類は、主にビーズなど装身具に利用された。

サンゴ類に関しては、特にクダサンゴ (*Tubipora musica*) がビーズの素材としてナカダ文化期に利用されたことが知られている (e.g. Bard 1994; Petrie 1920; Petrie and Quibell 1896)。

#### 8.2.1.1.3. ファイユーム・カイロ周辺

玄武岩やアラバスターが挙げられる。玄武岩はナイル河下流域に広く分布しているものの、特に北部に多くの露頭が確認された (Mallory-Greenough et al. 1999)。採石地遺跡はファイユームのゲベル・エル=カトラニ (Gebel el-Qatrani) 周辺に限られる。ここでは、第4王朝から第6王朝期の採石場が発見されたが、使用開始時期はさらに遡る可能性が指摘された (Aston et al. 2000: 23)。ナカダ文化期には、玄武岩は石製容器の原材料として用いられたが、カイロ近郊の路頭で採取された玄武岩が用いられたことが指摘された (Mallory-Greenough et al. 1999)。

アラバスターは地中海沿岸や紅海沿岸、西部砂漠のほか、ファイユームにも原産地が存在する (Aston et al. 2000: 21-2)。ファイユームのウンム・エル=サワン (Umm el-Sawwan) は唯一の明確なアラバスターの採石地で、第3王朝から第4王朝の時期が提案されたが、さらに遡る可能性が指摘された (Aston et al. 2000: 21-2)。アラバスターは、ナカダ文化期には石製容器やメイスヘッドなどに用いられた。

#### 8.2.1.2. ナイル河下流域外からの搬入品とその原産地

この区分に該当する遺物として、ラピスラズリ・銀・トルコ石・黒曜石・円筒印章があげられる。以下、個別に概要を記す。銅はすでに 8.2.1.1.1. で一括して述べたのでここでは省いた。

ラピスラズリは変成岩の一種の宝石で特徴的な群青色を持つ。現代では粉末化されて顔料の天然ウルトラマリソンの原料になり、鋳石は宝飾品に加工される。考古遺跡からは、鋳石を加工した装飾品などの遺物が出土する。ラピスラズリの特徴は原産地が限られる点にある。ナイル河下流域や西アジアに所在する遺跡で出土するラピスラズリの原産地は、今日のアフガニスタン北部バダクシャン (Badakhshān) 地方のヒンドークシュ (Hindu Kush) 山脈やパミール (Pamir) 山脈とされる (Bavay 1997; Hermann 1968; Payne 1968)。バダクシャン地方はナイル河下流域から東におよそ 4000 km の遠隔にある。シベリアのバイカル湖周辺、北米のロッキー山脈、南米のアンデス山脈などに鋳床が存在するが地理的に隔絶している。物流経路に当たる西アジアでも出土が確認できるため、ナイル河下流域から出土するラピスラズリ製品の原材料の産地はバダクシャン地方が最も有力である (高宮 2001)。これまでに 99 点のラピスラズリ製品がナカダ文化の遺跡から発見された (Hendrickx and Bavay 2002: Tables 3.3)。

銀の原産地はこれまで諸説存在した。ナカダ文化の遺跡から出土する銀は、ナイル河下流域外から搬入された方鉛鋳の原石から抽出されたとする説がある一方 (Gale and Stos-Gale 1981)、東部砂漠で産出される方鉛鋳から抽出されたとする説もある (Hassan and Hassan 1981)。方鉛鋳は元来鉛を主体とするが銀も少量含んでおり、分離と抽出は可能とされる。実際に東部砂漠の紅海沿いには複数の方鉛鋳が採取可能な地点がある (Hartung 2013: Fig. 8)。ハッサンらの説に従えば、これらの方鉛鋳はワディ・ハママートなどの涸れ谷を通じてナイル河流域に搬入されたと考えられる。しかし、方鉛鋳の多くは未加工かビーズの玉に加工されるが、銀そのものを抽出した痕跡は乏しい。ナカダ文化期の遺跡で出土した銀製品は合計で 12 点 (cf. Hendrickx and Bavay 2002: 66, Table 3.4) と非常に少ないため、明確な原産地は不明である。ここでは便宜的にナイル河流域外からの搬入とした。

トルコ石に関しては、エジプトで出土する遺物の場合、シナイ半島西南部のワディ・マガーラ (Wadi Maghara) 周辺やセラビト・エル=ハディーム (Serabit el-Khadim) 周辺、ビール・ナシブ (Bir Nasib) 周辺が原産地とされる (Hartung 2013: Fig. 8; Minotti 2017: Fig. 4)。トルコ石は、いわゆるガラス質凍石 (glazed steatite) (cf. Tite and Bimson 1989) との混同がしばしば指摘されるが (Hendrickx and Bavay 2002: 60)、確実にトルコ石製と確認できる遺物は合計で 38 点がナカダ文化の遺跡で出土した (Hendrickx and Bavay 2002: Tabel 3.2)。

黒曜石製の遺物の出土事例は少ない。ナカダ文化の遺跡から出土した黒曜石製品は例外を除いて剥片や石刃、ビーズの玉などの小物で、供給量自体が少なかったとされる (Zarins 1989: 365)。黒曜石製品の特徴は、ラピスラズリと同じく原産地がナイル河下流域にないため、長距離物流の結果ナカダ文化の遺跡に搬入されたことが明らかな点にある (Zarins 1989; 2001)。また原産地の推定が可能なため、これまで蛍光 X 線分析法による原産地の推定が複数行われてきた。原産地の候補にはアナトリア半島やエチオピア高原、今日のイエメンがあるアラビア半島南部が知られてきたが、上エジプト地域のアビュドス遺跡やナカダ遺跡などから出土した試料は、分析の結果アナトリア半島産ではなく、エチオピアまたはイエメン産とされた (Bavay et al. 2000; Giménez et al. 2017)。一方で、下エジプト地域で出土した黒曜石製遺物に用いられた素材の原産地はアナトリア半島とされ (Bavay et al. 2000; 2004)、ナイル河下流域の南北で黒曜石の原産地が異なる結果となった。

北方系の土器はカナーン地域のものでそれより以北の地域のものに分けられる。これらは形態的な模倣が多数な点の特徴である。カナーン地方からの土器の搬入はナカダ IIC 期以降に多くなる。本論文で対象とする IIIB 期までに相当する前期青銅器時代 I 期 (EB I) に搬入された土器は貯蔵壺が主体で、内容物の輸送でナカダ文化圏に搬入されたとされる。EB I の貯蔵壺の多くはナカダ文化の W 土器の最初期型式と同じく寸胴な外形に波状の把手を備えるが、W 土器とは異なり寸胴の外形を維持し、胎土も異なる。EB I の貯蔵壺はこれまでに 700 点以上が確認されたが、ほとんどがアビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地から出土した (Hendrickx and Bavay 2002: Table 3.5)。ナカダ III 期以降の U 墓地から出土した貯蔵壺は搬入品だが、それ以外は模倣品が主である。時期は 3 点を除けば全て IIC 期以降で、下エジプト地域のミンシャト・アブ・オマル遺跡から上エジプト地域のヒエラコンボリス遺跡まで出土した。III 期以降はファイユーム以北から出土し、上エジプト地域ではアビュドス遺跡に偏在する。貯蔵壺以外では輪状把手壺 (loop-handled jar) や突起付鉢 (knobbed bowl) などが 6 ヶ所の遺跡から計 18 点出土した (Hendrickx and Bavay 2002: Table 3.6)。一部は F5a・F5b の突起付鉢や P79 の把手付小型短頸壺はピートリーの土器型式に組み込まれた (Petrie 1921)。これらもほとんどが模倣品とされる (cf. Abd el-Moneim 2000)。

カナーン地域以北を原産地とする土器の原型はナカダ II-III 期に併行するウルク期のメソポタミア地域のもので、三角形の把手を 4 つ備える大型壺や注口壺が該当する (Wattrin 2007: 24-6)。三角形の把手を備える大型の壺は形態的に極めて近い個体がバダリ遺跡 3800 地点で上半のみ残存して発見されたが (Brunton and Caton-Thompson 1928: pl. XL)、ほかにも三角形の把手を取り入れたピートリー分類の D45 の壺 (AM 1895.584) がナカダ遺跡 454 号墓 (I/II 段階後半) で出土した。また注口壺はウルク VII-VI 期のものを模倣元とし、ナカダ文化の土器型式ではピートリー分類の F58a や F58b、F58c (Petrie 1921: pl. XVIII) を模倣品とする (Wattrin 2007: 25-6)。これらは注口を除けば P 土器の短頸壺とも類似するため、注口部分を形態的に模倣したとされる (Wilkinson 2002: 240-1)。

円筒印章は、初期の形態であるスタンプ印章を加えても、ナカダ文化の遺跡で出土した事例は 20 点弱に留まる。円筒印章の重要性は、いくつかの印章に施された図案の様式がナカダ文化期と同時期のウルク期からジェムデット・ナスル (Jemdet Nasr) 期のスーサ (Susa) 遺跡 (イラン) やテペ・シアルク (Tepe Sialk) 遺跡 (イラク)、ヌジ (Nuzi) 遺跡 (シリア) などから出土した印章の意匠と類似している点にある。特にナカダ IID1 期以前の墓から出土した印章は、西アジアから直接搬入されたことが推定された (cf. Boehmer 1974; Honoré 2007)。ただし、ナカダ文化の遺跡から出土する円筒印章は、集落で行われる物流の管理という本来の機能から隔絶した埋葬で出土しており、むしろ装飾品に近い機能を持っていたことが推定された (Honoré 2007)。IUO 隊は集落遺跡のナカダ遺跡サウスタウン地区でおそらく III 期の欠損品 4 点を発見しており、既知の中では埋葬以外からの稀有な出土例だが、粘土製のため搬入品ではない。搬入品として重要な印章は、IID1 期以前の個体である。したがって、円筒印章は長距離物流を示唆するが、埋葬からの出土は副葬品という二次的な利用の結果と捉えられる。

## 8.2.2. 精製品

ナカダ文化の墓地に埋葬される精製品は、土器や石器、石製品など多岐に亘る。特に押圧剥離技術を用いた両面加工石器や、石製品の石製容器・メイスヘッド (棍棒頭) は、事例があまり多くなく製作に特殊な技術を要す

ることから奢侈品でもあったことが考えられた (cf. 高宮 2003)。

押圧剥離技術を用いた両面加工石器は大半がフリント製のナイフ形石器で、石刃や剥片などを利用した剥片石器とは異なる。このナイフ形石器はナカダ I 期の段階ですでに副葬品として墓に納められた。多くは大型で、菱形、「コンマ」形、三日月形、半月形、魚尾形、木葉形などが存在する (Baumgartel 1960; Petrie and Quibell 1896; Spurrell 1896; 高宮 1992)。これらは時期によって形態に変化がある (Petrie and Mace 1901: pl. IV)。I 期に用いられるナイフ形石器の事例には、菱形や「コンマ」形、魚尾形が挙げられる。魚尾形石器はナカダ文化期を通じて製作されるが、I 期にはより T 字形に近い形をとる (Roth 1992; van Walsem 1978/79)。II 期になると菱形や「コンマ」形は製作されなくなり、三日月形や木葉形が製作される。魚尾形ナイフは V 字形に近い形態に変化するが継続して製作される。II 期の特徴は後半に半月形の大型ナイフ形石器が製作され始めることになる。このナイフは押圧剥離技術を用いて表面が波状に入念に剥離されるため、波状剥取ナイフ (ripple-flaked knife) とも呼ばれる (e.g. Midant-Reynes 1987)。波状剥離ナイフは製作に特に労力がかけられ、製作実験から 1 点の完成品を仕上げるのに全行程で 18 時間がかかることが示された (Kelterborn 1984)。III 期には、波状剥離ナイフと魚尾形ナイフが製作される。魚尾形ナイフはこの時期には Y 字形の外形を持つ。

石製容器に関しては、東部砂漠で算出する多種類の石材から製作されることをすでに示した。材料の入手に加えて製作技術が必要な精製品であることが窺える。

メイスヘッドは、ナカダ III C1 期の図像などに示されるように、王権など権威の表象として機能した。そのため、III C1 期以前にも所有者の権威を示す機能が存在した可能性が推定できる。素材は、石製容器と同様に多種類の石材から製作されるが、こちらもケズリや研磨などで加工されており、材料の入手に加えてある程度の製作技術が必要な精製品であることが窺える。断面形態は凸形や洋ナシ型が存在する (Ciałowicz 1989) が、凸型のメイスヘッドは I 期に存在する一方で、洋ナシ型は II 期以降とやや後発なことが特徴である。

パレットに関しては原材料が堆積岩なため、加工は比較的容易である。搬入にかかる労力がまず注目されるが、同時に製作にも一定の技術が必要だったことが考えられる。形態は様々だが、ナカダ I 期には魚や鳥、亀などを具体的にケズリ加工で製作した一方で、II 期後半以降は長方形などの幾何学的な形態の事例が多くなる。動物形のパレットは、形態が簡略化されたり抽象化されたりする。また、側縁部に刻線を施す事例が増えるようになることも特徴である。

### 8.3. 資料と方法

以上を踏まえて、本章では以下の希少品と墓のクラスターとの関係を比較・検討する。まず、地元の原材料から製作された副葬品に関しては波状剥離ナイフなどの押圧剥離技術による両面加工が施されたナイフを扱う。次に原材料の長距離の搬入を要する副葬品として、石製容器、パレット、紅海産のサンゴや東部砂漠産の鉍石を用いたビーズ、マラカイトの塊や方鉛鉍の塊を扱う。特に石製容器は、玄武岩、角礫岩、石灰岩、アラバスター、蛇紋岩などの原材料から製作された。パレットは、泥岩製が主体である。東部砂漠産の鉍石には、マラカイト、方鉛鉍、金、銀、アメジスト、瑪瑙、赤鉄鉍、柘榴石、玉髄、カーネリアン、カンラン石の 11 種類が含まれる。

表 8.1. 希少品の種類と交易距離、出土点数、出土母数、およびクラスタリング対象墓数

原産地	希少品種類	遺物数	出土墓数	クラスタリング墓数
ナイル河下流域	両面調整石器	122	75	46
ナイル河下流域	石製容器	238	176	117
ナイル河下流域/東部砂漠	メイスヘッド	43	36	28
東部砂漠	パレット	406	354	238
東部砂漠	マラカイト	65	63	50
東部砂漠	方鉛鉱	8	8	7
東部砂漠	金	6	6	4
東部砂漠	アメジスト	1	1	0
東部砂漠	赤鉄鉱	17	17	11
東部砂漠	石榴石	24	18	11
東部砂漠	凍石	28	36	17
東部砂漠	玉髓類	96	66	38
東部砂漠	カンラン石	4	4	3
紅海	サンゴ・貝	12	10	8
ナイル河下流域外?	銀・鉛	5	4	2
シナイ半島/カナーン地域	銅	87	55	38
シナイ半島	トルコ石	3	3	2
エチオピア	黒曜石	7	6	2
バダクシャン地域	ラピスラズリ	12	11	8
メソポタミア地域?	円筒印章	2	2	2

また、ナイル河下流域外から原材料が搬入された副葬品には、銅、トルコ石、石灰岩製の円筒印章、ラピスラズリや黒曜石を用いた製品を扱う。ここには銅やトルコ石のようにナイル河下流域に比較的近い原産地を持つ事例や、ラピスラズリのようにアフガニスタンなどの超遠距離に原産地が所在する事例を含む。模倣品がほとんどのカナーンやメソポタミアの様式を持つ土器はここでは取り扱わない。

以上から、本章の分析で扱う資料数と墓の数は多岐に亘るため、表 8.1.に一覧を掲載した。第 7 章では、副葬品の総点数と種類数の 2 変数の場合と、それらに墓の規模を加えた 3 変数の場合の 2 つのクラスタリング分析を行ったが、ここでは検討対象の墓を 2 変数で対象とした墓とする。これは 2 変数の場合が最も多くの数の墓をクラスタリングできたこと、2 変数と 3 変数の場合とで序列自体にはあまり大きな違いがなかったことによる。表 8.1.には各遺物種類の出土事例の概数を提示するために全出土墓数を提示した。表中で記した実際に分析で対象とする墓数とはクラスタリング分析で対象とした墓を示す。以上の資料を対象にしたこの分析の方法と手順は以下の通りである。まず方法は、対象資料が出土した墓とその墓が属するクラスタの対応を観察し、クラスタの序列別に対象資料が出土した墓の数をまとめた。この方法の手順は、まず該当する遺物種類ごとに墓を抽出し、各墓地における該当の副葬品が出土した墓の数を把握した。次に墓地ごとに得られたまとめの結果を比較し、該当墓の数的な偏在が見られるか否かを確認し、希少品の観点から見た場合の墓地ごとの優劣を検討した。この検討の結果を踏まえつつ、各墓地で該当する墓がどのクラスタに属しているかを調べてまとめた。まとめでは、全基本段階を対象にまず墓地ごとにクラスタの対応の概況を把握した。続いて、基本段階ごとにクラスタとの対応を観察し、クラスタの序列による該当墓の数的優劣を看取した。最後に、各希少品で得られた結果を総合し、墓地ごとに、どの希少品が地位を示す指標として認めることができ、墓地ごとにその構成に相違点があるか否かに着眼することで、被葬者の相対的な差異を示す物品の内実とそれらを用いて表される地位の差異を考察した。



## 8.4. 分析結果

### 8.4.1. ナイル河下流域内からの搬入品

#### 8.4.1.1. 金

金が出土した墓は、大墓地東地区・同西地区・T墓地の3ヶ所の墓地で6基確認できた。内訳は、大墓地東地区3基、同西地区1基、T墓地1基である。このうち、大墓地東地区の2基を除いた4基がクラスタリングの対象となった。全段階を対象とした場合、大墓地東地区の2基のうち1基は6区分のうち上から2番目、もう1基が下から2番目のクラスターに該当した。中間より上位と下位の両方のクラスターに確認できたことが特徴である。大墓地西地区では1基の墓は6区分のうち上から3番目のクラスターに含まれ、中間層のクラスターに金が含まれたこととなる。T墓地では1基の墓が4区分のうち最上位のクラスターに該当した。またこれらの墓はすべてIIa1-IIa2段階で、大墓地東地区の2基は5区分のうち上から2番目と3番目のクラスターに該当し、大墓地西地区の1基は4区分のうち上から2番目に該当した。T墓地の1基はIIa1-IIa2段階で、4区分中最上位のクラスターに該当した。ただし、クラスタリングできなかった2基はIb1-Ib2段階であるため、金製品の初出はIIa1-IIa2段階以前となる点は注意が必要である。

以上から、金はIb1-Ib2段階に初出したものの、IIa1-IIa2段階になるとより多く墓に納められるようになることがわかった。また全段階を対象とした場合でも各基本段階を対象とした場合でも、金は中間よりも上位のクラスターの墓に納められることがわかった。ここから、金は中間から高位の社会的地位にある人々のシンボルとして用いられた可能性が読み取れた。

#### 8.4.1.2. 銀・鉛

銀・鉛が出土した墓は4基だが、クラスタリングできた墓は2基だった。内訳は大墓地東地区が2基、大墓地西地区2基である。全時期を対象にクラスタリングできた墓は両墓地で1基ずつであり、大墓地東地区では6区分のうち上から2番目のクラスターに、大墓地西地区では6区分のうち上から3番目のクラスターに認められた。

時期別のクラスタリングは大墓地東地区の墓のみが可能で、この墓はIb1-Ib2段階に属する。5区分のうち上から2番目のクラスターに該当した。したがって、銀・鉛はIb1-Ib2段階に初出し、中間の序列の墓に収められたことが読み取れた。なお、クラスタリングできなかった大墓地西地区の事例にはIIa1-IIa2段階の墓があるため、Ib1-Ib2段階からIIa1-IIa2段階に散発的に銀や鉛が納められたことが読み取れた。

#### 8.4.1.3. 銅

銅は5ヶ所すべての墓地の合計で55基の墓から確認できた。内訳は、大墓地東地区26基、同西地区20基、同南地区2基、T墓地3基、B墓地4基である。このうち、大墓地東地区20基、同西地区10基、同南地区2基、T墓地3基、B墓地3基がクラスタリングの対象である。

全段階を対象とした場合、大墓地東地区では6区分のうち最上位に3基、上から2番目に4基、上から3番目に6基、下から3番目に3基、下から2番目のクラスターに5基が該当した。最下位以外のどのクラスターにも

銅製品が確認できたことが特徴である。大墓地西地区では6区分のうち上から2番目と3番目に1基ずつ、下から3番目に3基、下から2番目のクラスターに5基が該当した。したがって、最上位と最下位を除いた中間のクラスターに見られた。大墓地南地区では5区分のうち最上位と上から3番目に1基ずつ該当することが確認できた。T墓地では4区分のうち上から2番目に1基、下から2番目のクラスターに2基が確認できた。B墓地の3基は、4区分のうち最上位を除いた各クラスターに1基ずつ該当した。

以上から、全段階を対象にした場合、銅製品が納められた墓の序列の傾向は墓地によってやや異なり、中間層を中心とした複数のクラスターで確認できた大墓地東地区や同西地区、B地区の場合と、T墓地や大墓地南地区のように中間から上位のクラスターに限定される場合の両方が確認できた。

さらに基本段階が明確な場合に限定したとき、墓の数は、大墓地東地区17基、同西地区5基、同南地区2基、T墓地2基、B墓地2基となった。大墓地東地区は、1基がIa1-Ia3段階、13基がIb1-Ib2段階、3基がIIa1-IIa2段階だった。Ia1-Ia3期の墓は4区分のうち上から2番目のクラスターに該当した。Ib1-Ib2段階の墓は5区分のうち最上位と上から2番目に2基ずつが、下から2番目に6基が、最下位のクラスターに3基が該当した。IIa1-IIa2段階の墓は、6区分のうち最上位、上から2番目、下から2番目に1基ずつが該当した。したがって、最下位のクラスターに該当する場合もあるが、概して通時的に中間からやや上位の墓に納められる傾向が読み取れた。

大墓地西地区で基本段階別にクラスタリングできた5基はすべてIIa1-IIa2段階だった。これらは、4区分のうち下から3番目に3基、最上位と上から2番目のクラスターに1基ずつが該当した。したがって、西地区の場合は中間よりやや上のクラスターの墓に納められる傾向が読み取れた。

大墓地南地区の2基はIIa1-IIa2段階で、4区分のうち最上位と下から2番目のクラスターに1基ずつ該当した。

T墓地の2基もIIa1-IIa2段階で、4区分のうち上から2番目と下から2番目のクラスターに1基ずつ該当した。

B墓地の2基もIIa1-IIa2段階で、4区分中最上位と上から2番目のクラスターに1基ずつ該当した。

以上から、まず銅はIa1-Ia3段階に初出するが、Ib1-Ib2段階以降に増加し、IIa1-IIa2段階にも多く確認できることがわかった。特徴的な点は、銅製品が確認できた墓は、Ib1-Ib2段階までは大墓地東地区に限定された一方で、IIa1-IIa2段階以降はほかの墓地でも確認できるようになった点である。次に、通時的に見た場合でも概ね中間よりも上位のクラスターに銅製品が含まれることがわかり、特にこの傾向は大墓地東地区と同西地区で明確なことがわかった。以上の2つの特徴から、銅は中間から高位の社会的地位にある人々のシンボルとして用いられた可能性が読み取れた。IIa1-IIa2段階における銅製品の出土墓地の分散と大墓地東地区における減少からは、高位の人びとの埋葬地が大墓地東地区以外へと分散化した可能性が推察できる。

#### 8.4.4. マラカイト

マラカイトは5ヶ所全ての墓地で63基の墓から確認できた。内訳は、大墓地東地区29基、同西地区22基、同南地区7基、T墓地4基、B墓地1基である。このうち、大墓地東地区23基、同西地区15基、同南地区7基、T墓地4基、B墓地1基がクラスタリングの対象である。

全段階を対象とした場合、大墓地東地区では6区分のうち最上位に4基、上から2番目に2基、上から3番目

に7基、下から3番目に5基、下から2番目に4基、最下位に1基が該当した。したがって、どの序列にも確認できる一方で、中間により多くのマラカイトが出土した墓が見られることが特徴である。大墓地西地区では6区分のうち上から3番目に5基、下から3番目に2基、下から2番目と最下位のクラスターに4基ずつが該当した。大墓地西地区では中間よりも下のクラスターに多くマラカイトが出土した墓が見られることが特徴である。大墓地南地区では、5区分のうち上から3番目に4基、下から2番目に2基、最下位のクラスターに1基が該当した。T墓地では、4区分のうち最上位に2基、上から2番目と下から2番目のクラスターに1基ずつが該当した。B墓地では4区分のうち下から2番目のクラスターに1基が該当した。

以上から、全段階を対象にした場合、マラカイトが納められた墓の序列の傾向も墓地によってやや異なるものの、概ね中間層を中心に下位のクラスターに確認できた。

さらに基本段階が明確な場合に限定したとき、墓の数は、大墓地東地区14基、同西地区10基、同南地区6基、T墓地4基、B墓地1基となった。まず大墓地東地区では、3基がIa1-Ia3段階で、5基ずつがIb1-Ib2段階とIIa1-IIa2段階、1基がIIb段階だった。Ia1-Ia3段階の墓は、4区分のうち最上位に1基、下から2番目のクラスターに2基が該当した。Ib1-Ib2段階の墓は、5区分のうち最上位に1基、上から3番目と下から2番目のクラスターに2基ずつが該当した。IIa1-IIa2段階の墓は6区分のうち上から3番目に3基、最上位と下から3番目のクラスターに1基ずつが該当した。IIb段階の1基は、4区分のうち最下位のクラスターに該当した。したがって、通時的に概ね中間から上位の墓に納められる傾向が読み取れた。

大墓地西地区の墓は、3基がIb1-Ib2段階、5基がIIa1-IIa2段階、2基がIIb段階だった。Ib1-Ib2段階の墓は、4区分のうち最下位に1基、上から2番目のクラスターに2基が該当した。IIa1-IIa2段階の墓は、4区分のうち上から2番目と最下位に2基ずつ、上から3番目のクラスターに1基が該当した。IIb段階の2基は、3区分のうち最上位と最下位に該当した。したがって、通時的に中間を中心にやや上から下位のクラスターの墓に納められる傾向が読み取れた。

大墓地南地区の墓は、5基がIIa1-IIa2段階で、残りの1基はIIIa1-IIIa2段階だった。IIa1-IIa2段階の墓は、2基ずつが4区分のうち最上位と上から2番目、1基が下から2番目のクラスターに該当した。IIIa1-IIIa2段階の墓は最上位に該当した。したがって、通時的に概ね中間から上位の墓に納められる傾向が読み取れた。

T墓地では4基すべてがIIa1-IIa2段階で、3基が4区分のうち最上位、1基ずつが上から2番目と下から2番目のクラスターに該当した。したがって、通時的に概ね中間から上位の墓に納められる傾向が読み取れた。

B墓地ではIb1-Ib2段階の1基が4区分のうち最上位のクラスターの墓だった。

以上から、マラカイトは大墓地東地区でIa1-Ia3段階に初出し、Ib1-Ib2段階以降に本格的に墓に納められることが読み取れ、IIa1-IIa2段階には全ての墓地で見られることがわかった。納められる墓の序列の傾向は、概ねどの墓地でも同じで、中間を中心に上位のクラスターの墓から出土することが読み取れた。ここから、マラカイトは、中間層を中心に広く墓に納められる遺物であり、必ずしも高位の社会的地位にある人々に占有されるわけではないことがわかった。

#### 8.4.1.5. 方鉛鉱

方鉛鉱は大墓地南地区と B 墓地を除く 3 ヶ所の墓地で 8 基が確認できた。内訳は、大墓地東地区 4 基、同西地区 3 基、T 墓地 1 基である。このうち、大墓地東地区の 1 基以外のすべてがクラスタリングの対象である。

全段階を対象とした場合、大墓地東地区では 6 区分のうち上から 2 番目、3 番目、下から 3 番目のクラスターに 1 基ずつが該当した。中間からやや上位のクラスターに多く見られることが特徴である。大墓地西地区では 6 区分のうち上から 3 番目、下から 2 番目、最下位に 1 基ずつが該当した。T 墓地では 4 区分のうち最上位のクラスターに該当した。

以上から、全段階を対象にした場合、方鉛鉱が納められた墓の序列の傾向は、大墓地東地区と T 墓地では中間から上位のクラスターに確認できる一方で、大墓地西地区では中間から下位に確認できた。

さらに基本段階が明確な場合に限定したとき、墓の数は、大墓地東地区 3 基、同西地区 2 基、T 墓地 1 基であった。大墓地東地区の墓は、1 基が Ib1-Ib2 段階で、2 基が IIa1-IIa2 段階だった。Ib1-Ib2 段階の 1 基は 5 区分のうち上から 3 番目、IIa1-IIa2 段階の 2 基は、6 区分のうち上から 2 番目と 3 番目のクラスターに該当した。したがって、通時的に中間からやや上位の墓に納められる傾向にある。大墓地西地区では 2 基とも IIa1-IIa2 段階で、4 区分のうち上から 2 番目と最下位のクラスターに 1 基ずつ該当した。したがって、西地区の場合は中間から下位の墓に納められる傾向にある。また T 墓地では、T 墓地が 4 区分中最上位のクラスターの墓だった。

以上から、方鉛鉱は Ib1-Ib2 段階が初出で、IIa1-IIa2 段階以降に墓への副葬が本格化したことが読み取れた。一方で、方鉛鉱が含まれる墓のクラスターの序列は墓地によってやや異なり、大墓地東地区や T 墓地ではより上位のクラスターの墓から出土する一方で、大墓地西地区ではより下位のクラスターの墓から出土する傾向が読み取れた。ここから、大墓地東地区や T 墓地では高位の社会的地位にある人々のシンボルの 1 つだった可能性が読み取れる一方、大墓地西地区では必ずしも高位の人々に占有されたわけではないことがわかった。

#### 8.4.1.6. 赤鉄鉱

赤鉄鉱が出土した墓は大墓地南地区を除く 4 ヶ所の墓地から 17 基だった。内訳は、大墓地東地区 8 基、同西地区 7 基、T 墓地 1 基、B 墓地 1 基である。このうち、大墓地東地区と同西地区の 3 基ずつ以外のすべてがクラスタリングの対象である。

全段階を対象とした場合、大墓地東地区では 6 区分のうち最上位に 2 基、上位から 2・3・4 番目のクラスターに残りの 1 基ずつが該当した。最上位から中間の墓のまとまりに多く見られることが特徴である。大墓地西地区では 6 区分のうち下から 3 番目に 2 基、上から 3 番目と下から 2 番目のクラスターに 1 基ずつが該当した。どちらも 1 基のみの T 墓地と B 墓地では、T 墓地が 4 区分のうち最上位、B 墓地が 4 区分のうち上位から 3 番目のクラスターに該当した。

以上から、全段階を対象にした場合、赤鉄鉱が納められた墓の序列の傾向は、大墓地東地区と T 墓地では中間から上位のクラスターに確認できる一方で、大墓地西地区と B 墓地では中間から下位に確認できた。

さらに基本段階が明確な場合に限定したとき、墓の数は、大墓地東地区と同西地区が 4 基ずつ、T 墓地と B 墓

地が1基ずつである。大墓地東地区では全てIb1-Ib2段階で、5区分のうち最上位に2基、上から2番目と下から2番目のクラスターに1基ずつが該当した。したがって、中間から最上位の墓に納められる傾向にある。大墓地西地区では、Ib1-Ib2段階の墓が2基、IIa1-IIa2段階とIIIa1-IIIa2段階の墓が1基ずつだった。Ib1-Ib2段階の墓はどちらも4区分のうち下から2番目、IIa1-IIa2段階の墓は4区分のうち下から2番目、IIIb段階の墓は2区分のうち最上位のクラスターに該当した。したがって西地区の場合は、IIIb段階以外は通時的に中間より下位の墓に赤鉄鉱が納められる傾向にある。またT墓地とB墓地では、T墓地では4区分のうち最上位、B墓地では4区分のうち上から2番目のクラスターに該当した。

以上から、赤鉄鉱は、Ib1-Ib2段階に大墓地東地区と同西地区、T墓地で初出し、この段階に最も多く納められ、以降は散発的な副葬に留まることがわかった。納められる墓のクラスターの序列は、墓地によって異なり、大墓地東地区やT墓地、B墓地では中間から上位のクラスターの墓から出土する一方、大墓地西地区では中間から下位のクラスターの墓から出土する傾向が読み取れた。ここから、大墓地東地区やT墓地では高位の社会的地位にある人々のシンボルとして用いられた一方、大墓地西地区やB墓地では必ずしも高位の社会的地位にある人々にはあまり用いられないことがわかった。

#### 8.4.1.7. 凍石

凍石が出土した墓はT墓地を除く4ヶ所の墓地から28基だった。内訳は、大墓地東地区18基、同西地区7基、同南地区1基、B墓地2基である。このうち、大墓地東地区13基、同西地区1基、同南地区1基、B墓地2基がクラスタリングの対象である。

全段階を対象とした場合、大墓地東地区では6区分のうち最上位に2基、上から2番目に3基、上から3番目に2基、下から4番目に1基、下から5番目のクラスターに5基が該当した。最下位のクラスターを除いたクラスターで確認でき、中間層により多いことが特徴である。大墓地西地区では6区分のうち下から3番目のクラスターに認められた。大墓地南地区では5区分のうち上から2番目のクラスターに認められた。B墓地では、2基のうち1基が4区分のうち下から2番目、もう1基が最下位のクラスターに該当した。

以上から、凍石が納められる墓のクラスターの序列は墓地によってやや異なり、大墓地東地区では中間を中心に上位の墓にも納められるのに対し、ほかの墓地では中間から下位のクラスターに納められることがわかった。

さらに基本段階が明確な場合に限定したとき、墓の数は、大墓地東地区11基、同南地区1基、B墓地2基となる。大墓地西地区とT墓地の事例には基本段階を与えられなかった。大墓地東地区はIa1-Ia3段階とIIa1-IIa2段階、およびIIIb段階が1基ずつ、Ib1-Ib2段階が8基だった。Ia1-Ia3段階の墓は、4区分のうち上から2番目のクラスターに認められた。Ib1-Ib2段階の墓は、5区分のうち上から2番目に3基、上から3番目と下から2番目に2基ずつ、最下位のクラスターに1基が認められた。IIa1-IIa2段階の墓は、6区分のうち上から3番目のクラスターに認められ、IIIb段階の墓は2区分のうち最下位のクラスターに認められた。したがって、中間から下位のクラスターに納められる傾向にある。

大墓地南地区の場合はIIa1-IIa2段階で、4区分のうち2番目のクラスターに認められるため、中間の墓に納め

られる傾向にある。また B 墓地の墓はどちらも IIa1-IIa2 段階で、所属クラスターは 4 区分中 1 基が上から 2 番目、もう 1 基が最下位だった。

以上から、凍石は Ia1-Ia3 段階に初出するが、Ib1-Ib2 段階に最も多く副葬され、その後は散発的になることがわかった。また出土した墓が含まれるクラスターの序列は、どの墓地でも概ね中間層から下位に当たることがわかった。ここから、どの墓地でも最も高位の社会的地位にある人々のシンボルとしては用いられず、中間層の人々に用いられた可能性が読み取れた。

#### 8.4.1.8. 柘榴石

柘榴石が出土した墓は 5ヶ所全ての墓地から 18 基だった。内訳は、大墓地東地区 3 基、同西地区 11 基、同南地区 2 基、T 墓地 1 基、B 墓地 1 基である。このうち、大墓地東地区 2 基、同西地区 5 基、同南地区 2 基、T 墓地 1 基、B 墓地 1 基がクラスターリングの対象である。

全段階を対象とした場合、大墓地東地区では 1 基が 6 区分のうち上から 2 番目、1 基が上から 3 番目のクラスターに認められた。中間からやや上位のクラスターに認められることが特徴である。大墓地西地区では 5 基のうち、1 基が 6 区分のうち最上位に、2 基ずつが上から 3 番目と下から 3 番目のクラスターに認められた。最上位に加えて中間の序列のクラスターに認められることが特徴である。大墓地南地区では 1 基が 6 区分のうち最上位に、1 基が下から 3 番目のクラスターに認められた。T 墓地では、1 基が 4 区分のうち最上位のクラスターに認められた。B 墓地では、1 基が 4 区分のうち最下位のクラスターに含まれた。

以上から、柘榴石が納められる墓のクラスターの序列は、B 墓地以外は中間から上位に当たることがわかった。一方で、B 墓地では最下位に含まれた。

さらに基本段階が明確な場合に限定したとき、墓の数は、大墓地東地区・同西地区・同南地区が 2 基ずつ、T 墓地・B 墓地が 1 基ずつとなる。大墓地東地区では墓の時期と所属クラスターは、1 基が Ib1-Ib2 段階で 5 区分のうち上から 3 番目、もう 1 基が IIa1-IIa2 段階で 6 区分のうち下から 2 番目に認められた。大墓地西地区では 1 基が IIa1-IIa2 段階で 4 区分のうち上から 2 番目、もう 1 基は IIIb 段階で 2 区分のうち最上位のクラスターに認められた。大墓地南地区の場合は 2 基共に IIa1-IIa2 段階で、4 区分のうち最上位と最下位のクラスターに 1 基ずつ認められた。T 墓地の墓は IIa1-IIa2 段階で、所属クラスターは 4 区分のうち最上位だった。また B 墓地の墓も IIa1-IIa2 段階で、所属クラスターは 4 区分のうち最下位だった。

以上から、柘榴石は Ib1-Ib2 段階に初出するが、IIa1-IIa2 段階に最も多く副葬され、その後は散発的になることがわかった。また柘榴石が含まれる墓のクラスターの序列は墓地によって大きく異なり、大墓地西地区や同南地区、T 墓地では上位のクラスターに見られる一方、大墓地東地区や B 墓地では中間から下のクラスターに見られた。ここから、大墓地西地区や同南地区、T 墓地では高位の社会的地位にある人々のシンボルとしては用いられた一方、大墓地東地区や B 墓地では中間層より下位の人々に用いられた可能性があることがわかった。なお、大墓地西地区でより多く確認できることも特徴として指摘できる。

#### 8.4.1.9. 玉髄類

玉髄類が出土した墓は5ヶ所全ての墓地から66基だった。内訳は、大墓地東地区41基、同西地区18基、同南地区2基、T墓地2基、B墓地3基である。このうち、大墓地東地区28基、同西地区5基、同南地区1基、T墓地2基、B墓地2基がクラスタリングの対象となった墓である。

全段階を対象とした場合、大墓地東地区では5基ずつが6区分のうち最上位と下から3番目、10基が上から2番目、4基が上から3番目、3基が下から2番目、1基が最下位のクラスターに認められた。上位のクラスターにより多く認められることが特徴である。大墓地西地区では、1基ずつが6区分のうち上から3番目と下から2番目および最下位に、2基が下から3番目のクラスターに認められた。大墓地西地区の場合はやや下位のクラスターに認められることが特徴である。大墓地南地区の墓は5区分のうち上から2番目のクラスターに認められた。T墓地の墓はどちらも4区分のうち最上位に、B墓地の墓は6区分のうち上から3番目と最下位のクラスターに1基ずつ認められた。

以上から、玉髄類が納められる墓のクラスターの序列は墓地によってやや異なり、大墓地東地区と同南地区・T墓地では中間や上位の墓にも納められるのに対し、それ以外の墓地では中間から下位のクラスターに納められることがわかった。

さらに基本段階が明確な場合に限定したとき、墓の数は、大墓地東地区が22基、同西地区とT墓地・B墓地が2基ずつ・同南地区が1基となる。大墓地東地区では、Ia1-Ia3段階の墓4基のうち、1基ずつが4区分のうち最上位と上から2番目、2基が下から2番目のクラスターに認められた。Ib1-Ib2段階の12基の所属クラスターは、5区分のうち上最上位と上から3番目は1基ずつのみで、上から2番目と下から2番目は5基ずつ確認できた。IIa1-IIa2段階の5基の所属クラスターは、6区分のうち最上位と上から3番目に1基ずつ、上から2番目に3基だった。IIIb段階の墓は上から2番目のクラスターに認められた。以上から、玉髄類は大墓地東地区では通時的に中間から上位のクラスターに納められることが特徴である。大墓地西地区の場合は、IIIa1-IIa2段階とIIIb段階の墓が1基ずつだった。このうち、IIIa1-IIIa2段階の墓は3区分のうち最下位、IIIb段階の墓は2区分のうち最上位のクラスターに属する。大墓地西地区では、最上位と最下位の両方のクラスターに玉髄類が納められることが特徴である。大墓地南地区はIIa1-IIa2段階の1基のみで最上位のクラスターに含まれる。T墓地の墓はともにIIa1-IIa2段階で、所属クラスターはどちらも4区分のうち最上位だった。またB墓地の墓はともにIIa1-IIa2段階で、所属クラスターは4区分のうち最上位から2番目と最下位が1基ずつだった。

以上から、玉髄類はIa1-Ia3段階に初出するが、Ib1-Ib2段階からIIa1-IIa2段階にかけて最も多く副葬され、その後は散発的になることがわかった。また出土した墓が含まれるクラスターの序列は、墓地によって微妙に異なるが、概ねどの墓地でも主に中間から上位の墓に納められるとともに下位の墓にも散発的に納められることがわかった。ここから、玉髄類は、中間から高位の社会的地位にある人々に利用されたとともに、少数は下位の人びとに使用もされて、幅広い層に用いられた可能性があることがわかった。

#### 8.4.1.10. カンラン石

カンラン石が出土した墓は4基だったが、クラスタリングできた墓は3基だった。内訳は大墓地東地区が2基、大墓地南地区1基である。うち1567号墓はIb1-Ib2段階で、1774号墓はIa1-Ia3段階である。大墓地南地区の墓である17号墓はIIIa1-IIIa2段階である。クラスタリングの結果、大墓地東地区では6区分のうち最上位と下から3番目のクラスターに認められた。大墓地南地区の17号墓は、5区分のうち上から3番目のクラスターに認められた。

時期別のクラスタリングでは、大墓地東地区の場合はIb1-Ib2段階の墓は5区分のうち最上位と4区分のうち下から2番目のクラスターに該当した。大墓地南地区の17号墓は最上位だった。したがって、カンラン石を用いた製品は上位の墓により多く収められたことが読み取れた。数が少ないため明瞭な傾向も不明だが、中間層より上位の社会的地位にある人々のシンボルとしてより多く用いられた可能性が読み取れた。

#### 8.4.1.11. アメジスト

アメジストが出土した墓は1基のみ確認できたが、この墓は基本段階が明確でなく、クラスタリングが可能な副葬品の種類数と総点数に関する情報も得られなかった。したがって出土墓の序列に関する議論はできない。時期はIIa1-IIb1段階と不明確だが、ナカダIIC-D期相当なことは確実である。

#### 8.4.1.12. サンゴ、紅海産貝類

サンゴまたは紅海産貝類を用いた製品が出土した墓は10基だったが、大墓地西地区の1基を除き、全て大墓地東地区の墓だった。このうち、クラスタリングできなかった墓は大墓地東地区の2基のみだった。まず全段階を対象とした場合のクラスタリング結果では、大墓地東地区は6区分のうち1基ずつが最上位と下から2番目、2基が上から3番目、3基が下から3番目に認められた。大墓地西地区では6区分のうち上から3番目のクラスターに認められた。時期別のクラスタリングでは、大墓地東地区で得られた6基は、Ib1-Ib2段階が5基で残りはIa1-Ia3段階だった。Ia1-Ia3段階の墓は、4区分中最下位のクラスターに該当した。Ib1-Ib2段階の場合、1基が最上位、2基ずつが5区分中上から3番目と下から2番目のクラスターに該当した。したがって、サンゴや紅海産の貝類は、Ia1-Ia3段階に初出後にIb1-Ib2段階に本格的に使用されたものの、それ以降は用いられなくなったことがわかった。またサンゴまたは紅海産貝類を用いた製品は必ずしも上位の墓に占有されるわけではなく、幅広い序列の墓に収められたことが読み取れた。数が少ないため明瞭な傾向も不明だが、特定の上位の社会的地位にある人々のシンボルとしてより占有されたわけではない点が読み取れた。

#### 8.4.1.13. メイスヘッド

メイスヘッドが出土した墓は大墓地南地区を除く4ヶ所の墓地から36基だった。内訳は、大墓地東地区21基、同西地区13基、T墓地・B墓地1基ずつである。このうち、大墓地東地区19基、同西地区7基、T墓地・B墓地1基ずつがクラスタリングの対象である。

全段階を対象とした場合、大墓地東地区では6区分のうち最上位と下から3番目のクラスターに4基ずつ、上



から2番目と下から2番目に3基ずつ、上から3番目に5基が認められた。最下位を除いたクラスターに認められることが特徴である。大墓地西地区では6区分のうち上から2番目と下から2番目のクラスターに1基ずつ、下から3番目に2基、最下位に3基が認められた。大墓地西地区の場合は、最上位以外のクラスターに認められることが特徴である。T墓地では4区分のうち下から2番目、B墓地では最下位のクラスターに認められた。

以上から、メイスヘッドが納められる墓のクラスターの序列は墓地によってやや異なり、大墓地東地区と同南地区中間から上位の墓にも納められるのに対し、それ以外の墓地では中間から下位のクラスターに納められることがわかった。

さらに基本段階が明確な場合に限定したとき、墓の数は、大墓地東地区が17基、同西地区が4基、T墓地・B墓地が1基ずつとなる。大墓地東地区では、Ia1-Ia3段階の墓6基は、4区分のうち最上位、上から2番目、下から2番目のクラスターに2基ずつ該当した。Ib1-Ib2段階の墓9基の所属クラスターは、5区分のうち最上位と上から2番目に1基ずつ、上から3番目に2基、下から2番目に5基だった。IIa1-IIa2段階とIIb段階の1基ずつは、それぞれ前者は6区分のうち下から2番目、後者は4区分のうち上から2番目のクラスターに認められた。したがって、メイスヘッドは大墓地東地区では中間から上位のクラスターに納められることが特徴である。

大墓地西地区の場合は各段階のクラスターがわかる事例は4基で、Ib1-Ib2段階とIIa1-IIa2段階の墓が2基ずつだった。Ib1-Ib2段階の墓はともに4区分のうち下から2番目、IIa1-IIa2段階の墓は1基ずつが4区分のうち下から2番目と最下位のクラスターに認められた。大墓地東地区とは異なり、西地区では下位のクラスターにメイスヘッドが納められることが特徴である。T墓地の事例はIIa1-IIa2段階で、所属クラスターは4区分のうち下から2番目だった。またB墓地の事例はIb1-Ib2段階で、所属クラスターは4区分のうち下から2番目だった。

以上から、メイスヘッドはIa1-Ia3段階に初出し、Ib1-Ib2段階に最も多く副葬され、IIa1-IIa2段階にはやや低調になることがわかった。また、メイスヘッドが出土した墓が含まれるクラスターの序列は、墓地によって異なり、大墓地東地区は中間から上位の墓に納められた一方で、同西地区やT墓地、B墓地では中間よりも下位の墓が該当することがわかった。ここから、大墓地東地区では高位の社会的地位にある人々のシンボルとしては用いられた一方、大墓地西地区やT墓地、B墓地では中間層より下位の人々に用いられた可能性があることがわかった。

#### 8.4.1.14. 両面調整石器

両面調整石器が出土した墓は5ヶ所全ての墓地から75基だった。内訳は、大墓地東地区40基、同西地区31基、同南地区2基、T墓地・B墓地1基ずつである。このうち、大墓地東地区28基、同西地区15基、同南地区2基、T墓地・B墓地1基がクラスターリングの対象である。

全段階を対象とした場合、大墓地東地区では6区分のうち最上位のクラスターに2基、上から2番目に9基、上から3番目と下から3番目に4基ずつ、下から2番目に8基、最下位のクラスターに1基が認められた。どのクラスターにも見られるが中間層に特に多く認められることが特徴である。大墓地西地区では6区分のうち上から2番目と最下位のクラスターに1基ずつ、上から3番目に6基、下から2番目に2基、下から2番目5基が認められた。西地区の場合も中間層のクラスターに特に多く認められるが、最上位のクラスターには確認できない

ことが特徴である。大墓地南地区では1基ずつが5区分のうち上から2番目と3番目のクラスターに認められた。T墓地とB墓地ではそれぞれ4区分のうち下から2番目のクラスターに認められた。

以上から、両面調整石器が納められる墓のクラスターの序列は墓地によってやや異なるものの、どの墓地でも中間から上位の墓に納められることがわかった。

さらに基本段階が明確な場合に限定したとき、墓の数は、大墓地東地区が20基、同西地区が12基、同南地区が2基、T墓地・B墓地が1基ずつとなる。大墓地東地区の事例の基本段階別の所属クラスターは以下の通りになる。Ia1-Ia3段階の墓4基のうち、4区分のうち上から2番目のクラスターに3基、下から2番目のクラスターに1基が該当した。Ib1-Ib2段階の墓9基の所属クラスターは、5区分のうち上から2番目のクラスターに4基、上から3番目と下から2番目に3基ずつ、最下位に2基が該当した。IIa1-IIa2段階の4基は、6区分のうち最上位、上から2番目、下から2番目、最下位のクラスターにそれぞれ1基ずつ認められた。以上から、両面調整石器は大墓地東地区では通時的に中間から下位の序列のクラスターに納められることが特徴である。大墓地西地区では、Ib1-Ib2段階が5基、IIa1-IIa2段階の墓が7基だった。Ib1-Ib2段階の墓は、4区分のうち上から2番目のクラスターに3基、下から2番目に2基が属する。IIa1-IIa2段階の墓は、4区分のうち最上位と下から2番目のクラスターに1基ずつ、上から2番目に3基、最下位のクラスターに2基が認められた。大墓地西地区でも通時的に中間から下位の序列のクラスターに納められることが特徴である。大墓地南地区では、2基の墓がともにIIa1-IIa2段階で、所属クラスターは4区分のうち上から2番目と下から2番目に該当した。T墓地の墓はIIa1-IIa2段階で、所属クラスターは4区分のうち下から2番目だった。またB墓地の墓もIIa1-IIa2段階で、所属クラスターは最上位だった。

以上から、両面調整石器はIa1-Ia3段階に初出し、Ib1-Ib2段階に最も多く副葬され、IIa1-IIa2段階にはやや低調になることがわかった。また両面調整石器が出土した墓が含まれるクラスターの序列は、墓地によってやや異なり、B墓地以外では、中間からやや下位の序列のクラスターで確認できる一方で、B墓地では最上位の墓に納められることがわかった。ここから、両面調整石器はB墓地以外では、中間層からやや低い社会的地位にある人々に用いられた可能性がある一方、B墓地では高い地位にある人々に用いられた可能性が提示された。

#### 8.4.1.15. パレット

パレットが出土した墓は5ヶ所全ての墓地から354基だった。内訳は、大墓地東地区215基、同西地区103基、同南地区12基、T墓地13基・B墓地11基ずつである。このうち、大墓地東地区154基、同西地区51基、同南地区11基、T墓地13基・B墓地8基がクラスタリングの対象である。

全段階を対象とした場合、大墓地東地区では6区分のうち最上位のクラスターに13基、上から2番目に26基、上から3番目に42基が、下から3番目に36基、下から2番目に27基、最下位に10基が認められた。どのクラスターにも見られるが中間層に特に多く認められることが特徴である。大墓地西地区では6区分のうち上から2番目のクラスターに2基、上から3番目に12基、下から3番目に6基、下から2番目に18基、最下位に13基が認められた。西地区の場合も中間層のクラスターに特に多く認められるが、最上位のクラスターには確認でき

ないことが特徴である。大墓地南地区では、5区分中上から2番目のクラスターに2基、上から3番目に5基、下から2番目に1基、最下位3基が認められた。T墓地では4区分のうち最上位と上から2番目、最下位のクラスターに3基ずつが、下から2番目のクラスターに5基が認められた。B墓地では4区分のうち上から2番目のクラスターに1基が、下から2番目に3基が、最下位に4基が認められた。

以上から、パレットが納められた墓のクラスターの序列は墓地によってやや異なるものの、どの墓地でも中間の墓を中心に幅広いクラスターに納められることがわかった。

さらに基本段階が明確な場合に限定したとき、墓の数は、大墓地東地区が127基、同西地区が30基、同南地区が6基、T墓地が13基、B墓地が7基となる。大墓地東地区では、Ia1-Ia3段階に28基、Ib1-Ib2段階に68基、IIa1-IIa2段階に25基、IIb段階に3基・IIIb段階に1基となった。Ia1-Ia3段階は4区分のうち最上位のクラスターに2基、上から2番目に5基、下から2番目に16基、最下位に5基が該当した。Ib1-Ib2段階は、5区分のうち最上位のクラスターに7基、上から2番目に13基、上から3番目に21基、下から2番目に22基、最下位のクラスターに5基が該当した。IIa1-IIa2段階は、6区分のうち最上位のクラスターに2基、上から2番目に8基、上から3番目に4基、下から3番目に8基、下から2番目に2基、最下位のクラスターに1基が該当した。IIb段階は4区分のうち上から2番目のクラスターに1基、最下位に2基が該当した。またIIIb段階は2区分のうちの最下位のクラスターに該当した。以上から、大墓地東地区ではパレットは通時的に最上位のクラスターから最下位までのクラスターの墓に納められ、特に中間層に最も多く納められることがわかった。

大墓地西地区でクラスタリングの対象とした29基のうち、Ia1-Ia3段階は3基、Ib1-Ib2段階は11基、IIa1-IIa2段階は12基、IIb段階・IIIa1-IIIa2段階・IIIb段階が1基ずつとなった。Ia1-Ia3段階は2区分のうち最上位に1基、最下位のクラスターに2基が該当した。Ib1-Ib2段階は、4区分のうち上から2番目に4基、下から2番目に5基、最下位のクラスターに2基が該当した。IIa1-IIa2段階は、4区分のうちの上から2番目に4基、下から2番目に5基、最下位のクラスターに3基が該当した。IIb段階は3区分のうち最上位のクラスターに該当した。IIIa1-IIIa2段階も同様に3区分のうち最上位のクラスターに該当した。またIIIb段階は2区分のうち最上位のクラスターに該当した。以上から、大墓地西地区ではパレットは主に中間層に納められ、やや下位や上位のクラスターの墓にも納められることがわかった。

大墓地南地区の墓の時期は、Ib1-Ib2段階とIIb段階、IIIa1-IIIa2段階が1基ずつ、IIa1-IIa2段階が3基となった。Ib1-Ib2段階はこの1基が単独でクラスターを形成した。IIa1-IIa2段階は、4区分のうち上から2番目に1基、下から2番目のクラスターに2基が該当した。IIb段階は2区分のうち最上位のクラスターに該当した。IIIa1-IIIa2段階では、2区分のうち最下位のクラスターに該当した。以上から、大墓地南地区ではパレットは主に中間からやや上位のクラスターの墓にも納められることがわかった。

T墓地の墓の時期は、Ib1-Ib2段階が2基、IIa1-IIa2段階が8基、IIIa1-IIIa2段階が2基、IIIb段階が1基となった。Ib1-Ib2段階は、2区分のうち最上位に1基、最下位のクラスターにもう1基が該当した。IIa1-IIa2段階は、4区分のうち最上位と上から2番目に2基ずつ、下から2番目に3基、最下位のクラスターに1基が該当した。IIIa1-IIIa2段階は、2区分のうち最上位に1基、最下位のクラスターにもう1基が該当した。IIIb段階はこの1基

が単独でクラスターを形成した。以上から、T 墓地ではパレットほどの序列のクラスターの墓にも納められることがわかった。

B 墓地の墓の時期は、Ia1-Ia3 段階が 1 基、Ib1-Ib2 段階が 4 基、IIa1-IIa2 段階が 2 基だった。Ia1-Ia3 段階の墓は、2 区分のうち最上位のクラスターに該当した。Ib1-Ib2 段階の墓は、2 基ずつが 4 区分のうち最上位と下から 2 番目のクラスターに該当した。IIa1-IIa2 段階は、4 区分のうち最上位と下から 2 番目のクラスターに 1 基ずつ該当した。以上から、B 墓地ではパレットは中間から上位のクラスターの墓に納められることがわかった。

以上から、パレットは通時的に用いられ、どの墓地でも中間から上位の序列のクラスターに納められることが読み取れた。ここから、パレットほどの墓地でも社会的地位とはあまり関係がなく用いられた可能性があることがわかった。

#### 8.4.1.16. 石製容器

石製容器が出土した墓は 5 ヶ所全ての墓地から 176 基だった。内訳は、大墓地東地区 93 基、同西地区 66 基、同南地区 3 基、T 墓地 10 基・B 墓地 4 基である。このうち、大墓地東地区 65 基、同西地区 35 基、同南地区 3 基、T 墓地 10 基・B 墓地 4 基がクラスタリングの対象である。

全段階を対象とした場合、大墓地東地区では 11 基が 6 区分のうち最上位、9 基が上から 2 番目、19 基が上から 3 番目、12 基が下から 3 番目、10 基が下から 2 番目、4 基が最下位のクラスターに認められた。どのクラスターにも見られるが中間層から上位に特に多く認められることが特徴である。大墓地西地区では、2 基が 6 区分のうち上から 2 番目、13 基が上から 3 番目、10 基が下から 3 番目、6 基が下から 2 番目、4 基が最下位のクラスターに認められた。西地区の場合も中間層のクラスターに特に多く認められるが、最上位のクラスターには確認できないことが特徴である。大墓地南地区では、1 基ずつ 5 区分のうち最上位、上から 2 番目、上から 3 番目のクラスターに認められた。T 墓地では、3 基ずつが 4 区分のうち最上位と最下位、2 基ずつが上から 2 番目と下から 2 番目のクラスターに認められた。B 墓地では、1 基ずつが 4 区分のうち上から 2 番目と下から 2 番目、2 基が最下位のクラスターに認められた。

以上から、石製容器が納められた墓のクラスターの序列は墓地によってやや異なるものの、どの墓地でも中間から上位の墓のクラスターに納められることがわかった。

さらに基本段階が明確な場合に限定したとき、墓の数は、大墓地東地区が 58 基、同西地区が 21 基、同南地区が 3 基、T 墓地が 9 基、B 墓地が 3 基となる。大墓地東地区の墓の時期は、Ia1-Ia3 段階が 12 基、Ib1-Ib2 段階が 29 基、IIa1-IIa2 段階が 16 基、IIb 段階が 1 基だった。Ia1-Ia3 段階は 3 基が 4 区分のうち最上位、4 基ずつが上から 2 番目と下から 2 番目、1 基が最下位のクラスターに該当した。Ib1-Ib2 段階は、4 基が 5 区分のうち最上位、2 基が上から 2 番目、12 基が上から 3 番目、9 基が下から 2 番目、2 基が最下位のクラスターに該当した。IIa1-IIa2 段階は、3 基が 6 区分のうち最上位、2 基が上から 2 番目、3 基が上から 3 番目、7 基が下から 3 番目、1 基が下から 2 番目のクラスターに該当した。IIb 段階は 1 基が 4 区分のうち上から 2 番目のクラスターに該当した。以上から、大墓地東地区では石製容器は最上位のクラスターから中間よりもやや下の序列までのクラスターの墓に納

められ、特に中間層に最も多く納められることがわかった。

大墓地西地区の墓の時期は、Ib1-Ib2 段階が 8 基、IIa1-IIa2 段階が 10 基、IIb 段階・IIIa1-IIIa2 段階が 2 基・IIIb 段階が 1 基となった。Ib1-Ib2 段階は、4 基が 4 区分のうち上から 2 番目、3 基が下から 2 番目、1 基が最下位のクラスターに該当した。IIa1-IIa2 段階は、2 基が 4 区分のうち最上位、5 基が上から 2 番目、2 基が下から 2 番目、1 基が最下位のクラスターに該当した。IIb 段階はただ 1 基で 3 区分のうち最上位のクラスターに該当した。IIIa1-IIIa2 段階の 2 基は 3 区分のうち最上位のクラスターに該当した。また IIIb 段階もただ 1 基で 2 区分のうち最上位のクラスターに該当した。以上から、大墓地西地区ではパレットは最下位に納められることもあるが、概ね中間から上位のクラスターの墓に納められることがわかった。

大墓地南地区の墓の時期は、IIa1-IIa2 段階が 1 基、IIb 段階が 2 基となった。これらはすべて最上位のクラスターに該当した。

T 墓地の墓の時期は、Ib1-Ib2 段階が 2 基、IIa1-IIa2 段階が 6 基、IIIa1-IIIa2 段階が 1 基となった。Ib1-Ib2 段階は、1 基が 2 区分のうち最上位に、もう 1 基が最下位のクラスターに該当した。IIa1-IIa2 段階は、2 基ずつが 4 区分のうち最上位と上から 2 番目、下から 2 番目のクラスターに該当した。IIIa1-IIIa2 段階は、2 区分のうち最上位のクラスターに該当した。

B 墓地でクラスタリングの対象とした 3 基の段階は、Ib1-Ib2 段階が 1 基、IIa1-IIa2 段階が 2 基だった。Ib1-Ib2 段階の墓は 4 区分のうち下から 2 番目のクラスターに該当した。IIa1-IIa2 段階は、1 基が 4 区分のうち最上位に、もう 1 基が上から 2 番目のクラスターに該当した。

以上から、石製容器は通時的に用いられ、クラスターの序列は、墓地によって若干の違いがあるものの、概ね中間層が最多で上位の序列のクラスターにも納められることが読み取れた。ここから、石製容器はどの墓地でも中間から高位の社会的地位にある人々のシンボルとして用いられた可能性があることがわかった。

## 8.4.2. ナイル河下流域外からの搬入品

### 8.4.2.1. トルコ石

トルコ石を用いた製品が出土した墓は 3 基だったが、クラスタリングできた墓は 2 基だった。内訳は大墓地西地区と同東地区でそれぞれ 1 基である。どちらも基本段階は不明だったが、大墓地西地区の事例は IIa1-IIb 段階、同東地区の事例は I/II 前半-IIb 段階と考えられ、ナカダ IIC-D 期相当である。2 変数を対象にしたクラスタリングによれば、大墓地西地区の事例は 6 区分のうち上位から 4 番目、同東地区の事例は 6 区分のうち上位から 1 番目のクラスターに該当した。したがって、トルコ石は最上位の墓にも、中間より下位の墓にも取められたことが読み取れた。基本段階が不明なため明瞭な傾向も不明だが、おそらく IIa1 段階以降に高位の社会的地位にある人々のシンボルとして用いられた可能性が読み取れた。

### 8.4.2.2. 黒曜石

黒曜石を用いた製品が出土した墓は 6 基確認できたが、クラスタリングできた墓は 2 基だった。内訳は大墓地

西地区と東地区でそれぞれ1基である。大墓地西地区の事例は IIb 段階、同東地区の事例は IIa1-IIa2 段階である。2変数を対象にしたクラスタリングによれば、ともに6区分のうち大墓地西地区の事例は上位から3番目、同東地区の事例は1番目のクラスターに該当した。時期別のクラスタリングでは、大墓地西地区の事例は3区分のうち上位から1番目、同東地区の事例は6区分のうち上位から1番目だった。したがって、黒曜石を用いた製品は最上位の墓に収められたことが読み取れ、最上層の社会的地位にある人々のシンボルだった可能性が読み取れた。

#### 8.4.2.3. ラピスラズリ

ラピスラズリが出土した墓は大墓地東地区と同西地区、およびT墓地の3ヶ所の墓地から11基だった。内訳は、大墓地東地区7基、同西地区・T墓地2基ずつである。このうち、大墓地東地区3基、同西地区・T墓地2基ずつがクラスタリングの対象である。

全段階を対象とした場合、大墓地東地区では1基ずつが6区分のうち最上位、上から3番目、下から2番目、最下位のクラスターに認められた。最上位・中間・最下位のどのクラスターにも認められることが特徴である。大墓地西地区では、1基ずつが6区分のうち上から3番目と下から3番目のクラスターに認められた。西地区の場合は中間層のクラスターに認められることが特徴である。大墓地南地区では、1基ずつが5区分のうち上から2番目と3番目のクラスターに認められた。T墓地とB墓地では4区分のうち下から2番目のクラスターに認められた。

以上から、ラピスラズリが納められた墓のクラスターの序列は中間が主体だが、大墓地東地区では上位にも下位にも墓のクラスターに納められることがわかった。

さらに基本段階が明らかな事例に限って観察すると、大墓地東地区では各段階のクラスターがわかる事例は1基のみだった。この墓はIIa1-IIa2段階で6区分のうち下から2番目のクラスターに認められた。大墓地西地区の場合もIb1-Ib2段階の1基のみで、4区分のうち上から2番目のクラスターに認められた。T墓地では、2つの墓どちらもIIa1-IIa2段階で、所属クラスターは4区分中最上位と下から2番目が1基ずつだった。

以上から、ラピスラズリはIb1-Ib2段階に散発的に搬入され、IIa1-IIa2段階に多く墓に収められることがわかった。また、ラピスラズリが出土した墓が含まれるクラスターの序列は、最上位にも最下位にも見られるが、中間層の墓が主体なことが読み取れた。ここから、ラピスラズリは必ずしも高い社会的地位にある人々のシンボルとして用いられた可能性があるわけではないことがわかった。

#### 8.4.2.4. 円筒印章

円筒印章が出土した墓は2基のみ確認でき、どちらもクラスタリングできた。内訳は大墓地東地区とT墓地でそれぞれ1基であり、墓番号は1863号墓（大墓地東地区）とT29号墓（T墓地）である。1863号墓もT29号墓もともにIIa1-IIa2段階である。変数（副葬品の総点数と種類数）を対象にしたクラスタリングで、1863号墓は6区分のうち最上位、T29号墓は4区分のうち下から2番目のクラスターに該当した。時期別のクラスタリングでも、1863号墓は6区分のうち最上位、T29号墓は4区分のうち下から2番目のクラスターに該当した。したがっ

て、円筒印章は最上位の墓と中間層の墓の両方に収められたことが読み取れ、最上層の社会的地位にある人々のシンボルとしても中間層の人々のシンボルとしても使用された可能性が読み取れた。

#### 8.5. ナカダ遺跡における希少品と上エジプトにおける供給

以上の検討から、希少品は種類によって中間から上位のクラスターから多く出土する事例もあれば、下位のクラスターにも上位のクラスターにも出土例が見られる事例もあることがわかった。また同一の希少品の種類であっても墓地ごとに当該の種類の遺物を納める墓のクラスターの傾向が異なる場合もあった。まず、クラスターの序列に基づいて 18 種類の希少品の種類を分類すると、上位から中間の序列のクラスターに出土事例が偏る希少品の種類には、金、銅、方鉛鉱（大墓地東地区・T 墓地）、赤鉄鉱（大墓地東地区・T 墓地）、柘榴石（大墓地西地区・同南地区・T 墓地）、玉髓類、メイスヘッド（大墓地東地区）、両面調整石器（B 墓地）、石製容器、黒曜石、円筒印章があげられる。ここに恐らくカンラン石とトルコ石も加わる。一方で、中間から下位序列のクラスターが出土事例の主体である希少品の種類には、マラカイト、方鉛鉱（大墓地西地区）、赤鉄鉱（大墓地西地区・B 墓地）、凍石、柘榴石（大墓地東地区・B 墓地）、メイスヘッド（大墓地西地区・同南地区・T 墓地）、両面調整石器（大墓地東地区・同西地区・同南地区・T 墓地）、ラピスラズリが確認できた。また、偏在が読み取れないかどの序列でも広く見られる希少品の種類も存在し、サンゴまたは紅海産貝類、およびパレットがここに当てはまった。

以上から言及可能な点は 4 つある。まずワディ・ハママート周辺などのナカダ遺跡から相対的に近い東部砂漠で産出する物品であっても、中間よりも上位のクラスターの墓に納められる場合もあれば、下位のクラスターの墓にも納められる場合がある点である。ある程度の距離の運搬が必要な場合でも、それが一概に上位のクラスターに占有されるわけではないことが読み取れる。次に 2 点目として同様の現象が、より遠隔地に原産地を持つ希少品の種類の一部にも当てはまる点である。例えば、ラピスラズリは最も遠隔地に原産地を持つにも関わらず、中間から下位のクラスターの墓から得られる場合がほとんどだった。ただし、東部砂漠に原産地を持つ希少品よりは序列ごとに分化が進んでいる点は確認でき、銅や黒曜石、円筒印章などのナイル河流域外に原産地を持つ希少品は概ね中間から上位の墓のクラスターに当てはまることが読み取れた。ラピスラズリ以外は、希少性から上位の階層の人々にある程度占有された可能性が考えられる。次に 3 点目として序列による副葬の分化とは関連しない種類も存在する点が挙げられる。こうした種類の希少品は、ある程度の距離の運搬が不可欠であっても、それ自体は占有に直結せずに墓に納められる一般的な副葬品としてナカダ遺跡の人びとに位置付けていた可能性が示唆される。4 点目として、製作に技術が必要な種類の物品に関しては、上位や少なくとも中間のクラスターに属する墓から出土する事例が多い点が挙げられる。両面調整石器やメイスヘッドは墓地によって出土した墓が属するクラスターの序列に違いがあるものの、中間の出土事例を多く含む。上位のクラスターから出土した事例も含め、主に中間層以上の人びとによって用いられた可能性が示唆される。これら 4 点からは、物品がある程度の距離の運搬を必要とする場合でも、ナイル河下流域内か近傍に原産地を持つか、域外に持つかによって占有の傾向が異なる点と、運搬の必要性に加えて製作技術の要件も加算される希少品は上位の階層によって占有される事例が多い点である。搬入自体もある程度重要だが、希少性が高ければ高いほど占有されることが多くなり、一方

で製作に必要な技術もまた希少品の占有に重要な要素であることが読み取れた。

これらの希少品の傾向の内実により接近するため、通時的観点に立って検討すると、墓地の利用期間を通じて副葬される事例もあれば、時期によって消長する場合もあることも読み取れる。例えば、両面調整石器やメイスヘッド・石製容器・パレットは、形態差はあるものの通時的に墓に納められる物品である。一方で鉱物類に関しては、時期的な消長が読み取れた。まず通時的に確認できる事例を除いた希少品の多くが Ia1-Ia3 段階にはわずかな出土例しか見られなかったものの、Ib1-Ib2 段階以後に急増する現象が観察される。Ib1-Ib2 段階に急増する事例には銅、マラカイト、玉髓類、トルコ石、黒曜石があり、IIa1-IIa2 段階に多く見られる事例には金、方鉛鉱、柘榴石、ラピスラズリ、円筒印章が確認できた。一方で、赤鉄鉱や凍石、サンゴおよび紅海産の貝類は、Ib1-Ib2 段階に集中的に墓に納められたのち、次の段階には急激に事例が減少することが読み取れた。カンラン石は、墓地の利用期間中の局所的な確認に留まった。

この時期的な消長からは、搬入された希少品の種類は時期によって異なり、Ib1-Ib2 段階は特に搬入された希少品の種類が急増したことが読み取れる。この背後には、もともと資源が存在した東部砂漠の利用が高まり、なおかつナイル河下流域外からの物品の流入が組織化されたことが考えられる。第 6 章で提示したように、Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階はナカダ遺跡の墓地利用が最も活発だった時期であり、同時期には集落域が拡大して集落人口も拡大したことが推定されてきた (Hassan et al. 2017a)。集落人口の拡大は集落活動の活発化と結びついており、この動向が搬入を要する物品の流入と関連したと考えられる。すなわち、サウスタウンを媒介とした南北東方向の物流が、Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階に活発化・組織化したことによって、東部砂漠に存在するそれまで未知だった新たな資源の開拓とナイル河下流域外からの物品の流入が管理されたことが背景にあり (cf. Hartung 2008; 2013; 2016)、結果としてこの時期を境にナカダ遺跡の墓地に多種類の希少品が納められることになったと解釈できる。興味深い点は、Ib1-Ib2 段階における搬入を要する物品の品目の転換である。赤鉄鉱や凍石、サンゴおよび紅海産の貝類はこの段階を境に出土事例が少なくなるため、需給体制と希少性に関する価値の転換がナカダ遺跡の人々の間で起こった可能性がある。これらの物品と Ib1-Ib2 段階以後に副葬が本格化する物品とでは、採掘にかかる労力が異なり、後者の場合は組織的な資源開発がなければ入手が難しい点 (cf. Aston et al. 2000; Klemm and Klemm 1993; 2012) も大きく関連すると考えられる。重要な点は、供給された希少品の全てが上位の階層に占有されているわけではない点である。この点は、物流の中継地であるナカダ遺跡では流通する物資の入手が比較的容易であり、その結果墓地で消費されやすかったと捉えられる。ただし、これは東部砂漠方面からの物品に関しては適用できるものの、ナイル河流域外からもたらされた物品には当てはまらない。域外からの搬入品はより上位のクラスターに多く見られることから、高位の階層の人々に優先的に占有されたと考えられる。

これらのナカダ遺跡における希少品の占有と消長の傾向は、ほかの同時代の遺跡と比べるとさらに明瞭になる。ここでは唯一同様の検討が行われたアビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地における見解 (Hartung 2016) と比較する。ただし、本論文では主にビーズの玉に用いられる鉱石類を細分した一方で、アビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地の事例ではビーズとして一括されているため、ここではビーズを構成する鉱物類は除外して比較した。金、銀、銅、マラカイト、方鉛鉱、赤鉄鉱、黒曜石、石製容器、パレット、両面調整石器が比較の対象である。アビュドス遺



跡U墓地とナカダ遺跡とでは規模や墓地の利用度が異なるため、出土事例の比較を行うよりも、各墓地の中でこの時期における当該遺物の利用の消長のあり方を比較することとした。

これらの希少品の種類のうち、両遺跡で類似した時期的傾向が得られた副葬品は、金、銀、マラカイト、方鉛鉱、黒曜石の4種類である。一方で、それ以外の希少品は両遺跡で異なる傾向が見られた。まず銅はアビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地では Ia1-Ia3 段階から確認でき、Ib1-Ib2 段階以降に微増したのちに、IIa1-IIa2 段階から IIb 段階にかけて同水準である一方、ナカダ遺跡では Ia1-Ia3 段階に初出する点では同一なもの、Ib1-Ib2 段階から特に増えることが特徴だった。ナカダ遺跡の方がより銅が盛んに搬入された可能性が指摘できる。一方で、赤鉄鉱に関しては、アビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地では Ia1-Ia3 段階から確認でき、Ib1-Ib2 段階まで出土事例が見られるのに対し、ナカダ遺跡では Ib1-Ib2 段階が初出で最も多く事例が見られた一方でほかの段階ではあまり見られないことから、両遺跡で供給時期や消費量に相違点が確認できる。また両面調整石器は、アビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地では Ia1-Ia3 段階から通時的に少量が確認できるのに対し、ナカダ遺跡では Ia1-Ia3 段階の初出後に IIa1-IIa2 段階に出土事例が増加することが特徴である。したがってナカダ遺跡では製作量が増加したことが推察される。パレットはアビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地では Ia1-Ia3 段階に初出し、Ib1-Ib2 段階に本格的に墓に納められた以降はほとんど事例が見られなくなるのに対し、ナカダ遺跡では Ib1-Ib2 段階までは同様の推移を見せるものの、IIa1-IIa2 段階にも出土事例が多く継続する点が特徴である。パレットの原材料の原産地に近いナカダ遺跡では供給と製作・消費が続いたと捉えられる。石製容器に関しては、アビュドス遺跡 UeQ 地区 U 墓地では Ia1-Ia3 段階に初出し、IIa1-IIa2 段階に本格的に墓に納められるのに対し、ナカダ遺跡では Ia1-Ia3 段階の初出後に、U 墓地よりも早く Ib1-Ib2 段階に本格的に用いられるようになる点が特徴である。

これらの相違点は、まず原産地の位置に求められる可能性がある。例えば、赤鉄鉱はアビュドス遺跡とナカダ遺跡の間にある今日のケナから東に伸びる涸れ谷沿いで採取可能なこと (Aston et al. 2000) から、ナカダ遺跡よりもアビュドス遺跡への供給が多かった可能性がある。一方でパレットは原産地により近いナカダ遺跡に多く搬入され、製作・消費されたとも捉えられる。

一方で、石製容器や銅はより遠隔の上エジプト地域から北方に素材の原産地があるが、それにも関わらずアビュドス遺跡よりもナカダ遺跡で消費量が多い点は、母集落の役割の違いにその理由を求められる可能性がある。ナカダ遺跡は東部砂漠から得られる諸資源の集積・分配地としての役割を担っており、北方からの物品もナカダ遺跡より以遠の各地へと搬出されるために同地に集積された可能性がある。

以上から、物流上の通過点であるアビュドス遺跡と集積地であるナカダ遺跡とでは、墓地から得られる希少品には相違点が見られることが指摘できた。ただし、このナカダ遺跡における希少品の豊富さは、IIb 段階以降は著しく減退する。これには、アビュドス遺跡における初期王権の確立によるナカダ遺跡との力関係の逆転が関連していると考えられる。アビュドス遺跡では、IIb 段階以後に特に III 段階からはカナーン地域などからの搬入品がおそらく下エジプト地域のテル・エル=ファルカ遺跡などを經由して大量に出土するようになる一方で、ナカダ遺跡ではそうした物品はほとんど確認できなくなることがこの点を傍証する。おそらく IIb 段階以後は徐々に東部砂漠で得られる諸資源の物流の機構をアビュドス遺跡に掌握され、ナカダ遺跡における物流上の主体性が失われ

たとえられる。これに伴い、墓における高位の社会的地位に属する人々による希少品の占有も終了したと提起できる。

#### 8.6. まとめ

以上、ナカダ遺跡における希少品の占有と種類ごとの消長に関して検討した。結果として、ナカダ遺跡から出土が確認できる希少品の種類には、高位の社会階層の人びとによる占有が確認できる事例もあれば、できない事例もあることが明らかになった。特に占有が認められる希少品の種類は、ナイル河下流域外などの遠隔地から搬入される物品や、製作に技術と労力がかかる種類が多く含まれることが確認できた。その一方で、東部砂漠などのナカダ遺跡から比較的近傍で入手できる種類の希少品は必ずしも高位の社会階層と対応するとは限らないことがわかった。したがって、高位の社会階層の人々には、金、銅、玉髄類、石製容器、黒曜石、円筒印章などは概ね縦の社会的地位を示すシンボルとして占有的に利用されたことが想定される点を指摘できた。墓地によっては、方鉛鉱、赤鉄鉱、柘榴石、メイスヘッド、両面調整石器もまた高位の社会階層を示すシンボルとして用いられた。一方で、中間の階層の人々には、マラカイト、凍石、ラピスラズリが概ね利用されることが確認できた。中間層の場合も、方鉛鉱や赤鉄鉱、柘榴石、メイスヘッド、両面調整石器などが部分的に用いられていた点も指摘できる。一方で、サンゴまたは紅海産貝類、およびパレットといった搬入を要するものの、特に特定の階層のシンボルとしては用いられない種類も存在することが読み取れた。これらの種類の物品は土器と同じく、被葬者の社会的な立ち位置とは直接関係しない基本的な副葬品のセットの一部だったと考えられる。以上から、ナカダ遺跡では、高い地位であるほどに重視される複数の物品が確実に存在し、より下位の人々は上位の人々が用いる物品を部分的に導入して地位のシンボルとする段階的な構図が読み取れた。ここに地位とはあまり関係がない副葬品が組み合わさることで、ナカダ遺跡の墓から出土する多様な副葬品のアセンブリが形成されたと考えられる。

## 9. 上位クラスター構成墓の空間的分析

### 9.1. はじめに

本章では、第3章で提示したようにナカダ遺跡で社会階層をもとに隔絶された墓域が出現する否かを検討するため、5ヶ所の墓地における上位のクラスターを構成する墓の分布を観察する。サククスらの仮説によれば、ある社会内の特定の資源を独占する集団は、自分たちの系統によって独占の正当性を保持し、彼らの埋葬地も分割されることが提示された (Saxe 1970)。本章では、ナカダ遺跡において特定の特徴を持つ墓の分布が墓地内で空間的に偏りが見られるか否かを検討するために、第7章で区分したクラスターのうち各基本段階の上位のクラスターの分布を対象に、この仮説がナカダ遺跡の場合に当てはまるかを検証する。そのために、ここではまず墓地空間における墓の空間的な分布に着眼した先行研究とその問題点を瞥見し、次いで本論文で採用したアビュドス編年を各墓に適用して通時的な墓地の拡大過程を押さえる。そしてこの拡大過程を土台に、上位クラスターを構成する墓の分布を確認してサククスらの仮説の適用の可能性を議論する。

## 9.2. 墓地の空間的分析に関する先行研究

### 9.2.1. 概要

ナカダ文化の墓地遺跡における特定の特徴を持った墓の分布に関する言及は、ナカダ遺跡と同時期に行われたバラス遺跡の発掘報告書の中で言及された。発掘者のクィベルは、「良い墓 ('good tombs')」は墓の分布域の外側に集塊せずに分布することを述べた (Petrie and Quibell 1896: 10)。しかし、この言及は具体例が示されておらず、包括的な分布傾向の把握を目的になされた言及ではない。このナカダ遺跡とバラス遺跡の調査以降も、各墓の発掘と遺物の研究は行われた一方で、分布への着眼は極めて限定的だった。分布に着眼した研究が徐々に進められるようになったのは 1970 年代以降だが、今日まで十分に研究されたとは言えない状況にある。

この限られた空間分析に関する先行研究の事例には、3つの方向性がある。1つ目は墓地の空間構造の原理について言及した方向性で、2つ目は副葬品や性別の分布傾向に着眼し方向性、3つ目は現在進行中の発掘調査から徐々に墓地空間の構造を解明する方向性である。ただし、これらの方向性は明確に区分できず、相互に関連する。

墓地の空間構造の原理について言及した方向性を持つ研究に関しては、アルマント遺跡 1400–1500 地点 (Bard 1988; 1994)、ナカダ遺跡 (大墓地東地区、大墓地西地区、B 墓地、T 墓地) (Bard 1989; 1994; Kemp 1973)、ナガ・エツ=デイル遺跡 N7000 墓地 (Delrue 2001; Savage 1995; 1998)、ヒエラコンポリス遺跡 HK43–44 地点 (Friedman et al. 1999)、ゲルゼー遺跡 (Stevenson 2009) がこれまでに検討された事例として挙げられる (cf. Campagno 2003)。またナカダ文化以前に上エジプト地域に存在したバダリ文化の遺跡の研究事例も挙げれば、バダリ遺跡の事例が加わる (Anderson 1995)。総じてこれらの研究は、墓地のある部分に副葬品の量や墓の規模の面でまとまりを見出すことと、そのまとまりを形成した墓の分布の背後にある要因の探索を試みた。例えばアルマント遺跡 1400–1500 地点では墓域の北側にカイザーの Iib 段階から Iid 段階に当たる時期の 2つのまとまりがあり、墓地空間の利用が大まかに 2分されていた可能性が提示された (Bard 1994: 55)。またナガ・エツ=デイル遺跡 N7000 墓地では、サヴェージュが6つの血縁集団 (decent group) による墓域の分割 (Savage 1995; 1998) を提案した。この説は

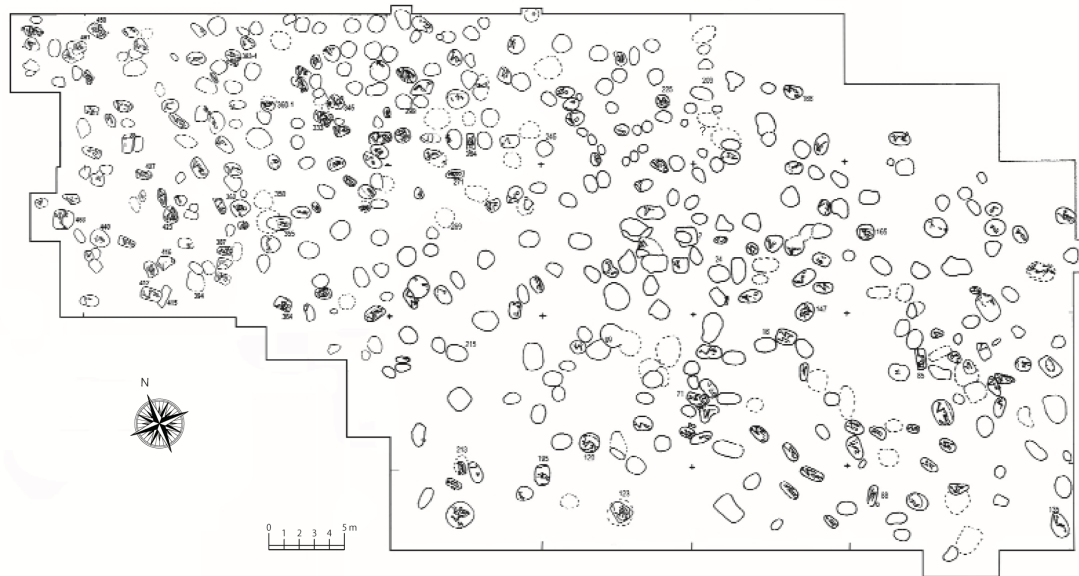


図9.1. ヒエラコンポリス遺跡 HK43-44 地点墓坑分布図 (Friedman 2004: 4 加筆)

のちに批判されたものの、カイザーの IIc 段階から II d 段階に関しては、親族組織を背景にした2つのまとまりが存在した可能性は指摘された (Campagno 2003; Delrue 2001)。一方で、近年まで発掘されたヒエラコンポリス遺跡 HK43-44 地点ではより明瞭な墓の分布パターンが検出された。HK43-44 地点では、円環状の平面分布をなす単純土坑墓群が検出され (図9.1.)、発掘者らはこの土坑墓群を同じ血縁集団を持つ集団によって形成された墓群であると考えた (Friedman et al. 1999: 5; 馬場 2014)。この HK43-44 地点での発見事例を念頭に置きつつ、発掘報告書と未刊記録を組み合わせて検討されたゲルゼー遺跡では類似した円環状の墓の分布が少なくとも2つ提案された (Stevenson 2009: 246)。これらの事例が墓地の中で墓の分布上のまとまりを提案した一方で、本論文の対象のナカダ遺跡についても部分的ながら各墓地における墓の空間的な分析が言及された。例えば第5章で言及したように、バードは T 墓地→大墓地西地区→B 墓地→大墓地東地区と各墓地には序列が存在することが提起され、被葬者の社会階層により選択される墓地が異なる可能性が提示された (Bard 1994)。また近年では、バードの研究を整理して規模の大きな墓や副葬品の量などで優れる墓の分布が再検討され、母集落が異なる B 墓地を除いたこの序列の妥当性が再確認された (van Wetering 2017; in prep)。

墓地空間分析のうち、副葬品や性別の分布傾向に着目し方向性を持った研究では、カスティューヨスによる、大規模な墓と10点以上の副葬品が出土した墓に絞った研究が挙げられる (Castillos 1983)。彼は、バダリ文化の遺跡からナカダ III C 期に至る9遺跡22地点の墓地を対象に各遺跡を分析し、該当する墓の墓地内での所在地を示した結果を提示した。その結果、どの墓地でも該当する墓に空間的な分布を見出した。この空間的な分布は、バダリ文化期やナカダ文化期前半には散漫だが、ナカダ文化期後半では、より1ヶ所に集中するようになる大きな傾向を持つという。そして彼は、まとまりの形成の理由として特権階級などの社会的・経済的な要因が背後に存

在するとした (Castillos 1983:9)。またゲルゼー遺跡の研究では、W 土器や R 土器、L 土器が出土墓、被葬者の顔や頭の向きの方、子供の墓の所在地の分布を調べた複要素を対象にした分布が検討された (Stevenson 2009a)。筆者は、合葬墓に着眼し、大墓地東地区、同西地区、B 墓地、T 墓地で分布を検討したが (黒沼 2017)、明確な分布の偏在は見出せなかった。またケンプは、ナカダ遺跡 T 墓地を対象に、特にレンガ製の壁体を構造の一部に用いた墓の分布を、未公開資料をもとに提示し、一部類似するヒエラコンポリス遺跡 HK33 地点の墓の事例と対比しつつ、それらの墓に埋葬された被葬者がナカダ遺跡の社会の上位階層に属した可能性を示した (Kemp 1973)。

現在進行中の発掘調査から徐々に墓地空間の構造を解明する方向性は、近年特にヒエラコンポリス遺跡 HK6 地点での発掘調査で顕著である。同墓地では 1980 年代から断続的に発掘調査が継続され、近年ナカダ IC-IIA 期の大規模な埋葬複合体 (mortuary complex) が 2 単位、列柱構造複合体が 1 単位墓地中央部分で検出された (図 9.2) (Friedman 2008a; 2008b; Friedman et al. 2011; 2017)。ここでは、単に墓坑のみならず列柱構造を持つ建築物や周囲を囲む壁体、陪葬墓とされる墓坑、動物埋葬墓などが検出され、一定の空間的な範囲で様々な種類の埋葬関連施設が設けられたことが示された。これらの埋葬複合体は、ほかの同時代の遺跡では見られない特異な事例である。焼成粘土製のマスク (Friedman 2014) や多様な精製品が出土したことから、発掘者らはヒエラコンポリス遺跡の支配者層の埋葬地と考えた。HK6 地点では、今後徐々に全容が明らかになると見込まれる。

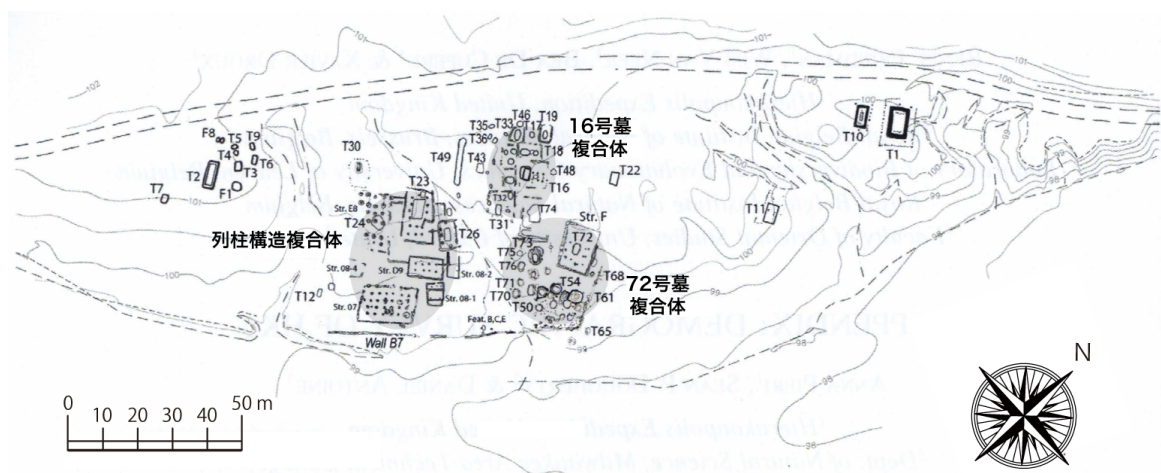


図 9.2. ヒエラコンポリス遺跡 HK6 地点墓坑分布図 (Friedman et al. 2017: Fig. 1 改変・トーンほか加筆)

### 9.2.2. 問題点

ナカダ文化墓地の空間的側面をめぐるこれまでの研究には 3 つの問題点が存在する。まず 1 つ目は、まとまりの認識の問題である。先史考古学一般では、墓の規則的な分布の背景には血縁関係が存在することが述べられている (e.g. Tainter 1978)。その一方で、墓地内における墓の分布のあり方は様々で、基本的な事例には線状 (linear)、同心状 (concentric)、分節 (segmented) があり (Parker Pearson 1999: 12-3)、分節配置の場合にはさらに墓の横で連接する場合 (row segmented side-by-side) や、長辺の端部で挟まれるように連接する場合 (row segmented head)

などに分類できるという。この基本的な分類に当てはめた場合、ナカダ文化の墓は線状の分布を取ることが多いが、多くは墓の分布に規則性がなく、HK43-44 地点のように規則的な配置が認識・主張された事例は限定される。その HK43-44 地点も確かに円環状の墓は認識可能だが、墓地内にはそれとは直接関連しないで分布する他の墓も存在しており、確実な事例と断定し得ない。このように、ナカダ文化の墓地では墓の分布が規則的でないために、有意なまとまりを見出すことが容易でないという問題点を持つ。エジプトに限らず、血縁関係をまとまりの原理として提示した研究の対象遺跡では、墓の分布上のまとまりが例えば墓地全体で墓が一定の方向を指向するなどして明瞭な事例が多い (e.g. 溝口 1995; Mizoguchi 2014; Parker Pearson 1999)。したがって、多くのナカダ文化の墓地では、例えば地形的な要因を除き、墓地を複数の単位にまとまりを設定することが難しい。墓地空間のまとまりを設定するためには、各墓の検出状況を精査することが必要だが、各墓の検出状況が特に古い発掘であるほど不明であるために、公刊情報のみでは不十分である。したがって、未公刊記録などの資料を用いた包括的な検討が必要である。また、まとまりの認識の上では、相対編年の構築の指標となった遺跡の分布に対する扱いも重要だが、この点がナカダ文化墓地の空間的分析の中で省みられた事例も乏しい。例えば、アルマント遺跡はカイザーの相対編年の構築の指標遺跡だが、対象となった土器型式に何らかのパターンが見出せるように空間的な観察が行われるため、バードが主張するような同時代のまとまりは見出されなければ不自然である。むしろ、指標遺跡としていない相対編年でも一定のパターンでまとまりが見出せることが重要であるはずだが、この点はあまり考慮されていない。またアルマント遺跡では、墓の配列に一定の指向性などが見えず、墓地考古学一般で根拠とされる配列の要件も満たしていない。また被葬者の社会階層に基づく分布の偏在を作業仮説として設定して墓の所在地を検討した事例も存在するが、それらは副葬品の点数や墓の規模などの情報に単純に依拠し、なおかる情報自体が欠落により限定的な中で実施されたため、有効な傾向を見出すことができていない (e.g. Castillos 1983; van Wetering 2017)。墓の副葬品に関する情報をもとにクラスタリングを実施したバードの研究でも、クラスターと墓の分布を直接結びつけるには至っておらず、限定的な言及に止まる (Bard 1994)。

2 つ目の問題点は、例えば墓地のまとまりの要因を特定するための理論的な枠組みの不足である。例えば、ヒエラコンポリス遺跡 HK43-44 地点では、円環状の墓の分布という遺構の配置に基づいて血縁集団による墓群の形成が判断された (Friedman et al. 1999)。また同遺跡の HK6 地点では初期の支配者の埋葬地として考えられた (Friedman 2008b)。また、副葬品の総量や墓の規模もまた空間的な分布の検討や言及の際に別の着眼点として議論されてきた。しかしいずれの事例でも、発掘された証拠から底上げ的に形成された見解であり、考古学一般の成果に立脚した理論的側面は明示的でないか不十分である。墓の空間分布からまとまりを認識するための枠組みが十分に整備されているとは言えない。

3 つ目の問題点は、理論に基づいた分布の分析を実践するために基盤となる情報の不足である。この不足は、特に相対編年とある墓地を構成する墓 1 基あたりの情報に顕著である。第 5 章で扱ったようにこれまでのナカダ文化の墓地研究では、特にナカダ IIC 期以降は墓の分布を検討可能な相対編年が組まれた一方で、I 期などの前半に関しては時期の明確な区分が不明な面が存在した。これは、ナカダ文化の墓地における墓の分布を通時的に検討するための枠組みが整備されていないことを意味する。

墓 1 基あたりの情報に関しては、多くのナカダ文化の墓地遺跡が 1950 年代までに発掘されたため、当時の報告書に掲載された墓の情報が限定されることによる。発掘者らが優良と考えた墓の事例以外が掲載されることは少なく、墓坑分布図も必ずしも出版されなかった。

### 9.2.3. 解決策と資料、分析方法の設定

これらの問題点を解決して、墓の分布を検討するため、以下の資料を対象にして解決策をとる。

まず、まとまりの認識と各墓の相対年代は密接に関連するため、相対編年は第 2 章で示したようにアビュドス編年を基にした時間軸を採用し、各墓に適用する。同時性または近時性を保持するため、ある基本段階に造営された墓のみを図示し、そのうえでまとまりを看取する。そして理論的には、第 3 章で扱ったサククスとゴールドステインによる墓地の占有化に関する 8 番目の仮説 (Goldstein 1981, Saxe 1970) が、ナカダ遺跡に当てはまるかを検討する。この仮説に加えて、テインターによる墓の構造には縦の社会的な地位の差異が反映されるという主張 (Tainter 1978) も導入し、ある遺物や遺構の特徴を持つ墓が複合的に空間的な集中を示していれば、その空間は特定の社会的な地位の人びとのための埋葬地であったと考えられるという作業仮説を立てる。この作業仮説を実際にナカダ遺跡で検証するため、遺物の特徴を持つ墓に関しては、第 7 章で区分した上位クラスターの墓を対象に分布を確認する。クラスタリングでは、副葬品の種類数と総点数を対象に行ったため、副葬品に関する特徴が反映されており、相対的な差異を把握するために有効である。また遺構の特徴を持つ墓に関しては、第 6 章の分析のうち、墓の構造で特異な事例である日乾レンガ使用墓の分布を確認する。分布は、発掘報告書に掲載された墓坑分布図 (Petrie and Quibell 1896: pl. LXXXVI) に該当する墓をプロットして確認する。ナカダ遺跡の墓坑分布図は詳細なため、分布の分析に用いることができる。時期別に墓の分布を検討した事例は、J.C. ペイン (Payne) の研究が存在するが、カイザー編年に基づいているため再検討が必要である (Payne 1992)。なお大墓地南地区のうち、墓坑分布図に記載されている南側の墓群は検討から除外し、北側の墓群のみを対象とする。これは、当該の墓群が大墓地南地区である可能性が高いものの、先行研究によっては別の墓域である G 墓地として捉えられており (Hassan et al. 2017a; van Wetering 2017)、墓地の同定が揺らいでいることによる。

### 9.3. ナカダ遺跡の各墓地の拡大過程

アビュドス編年を基盤に、ピートリーの出土墓別土器型式表に基づいて墓の相対年代を決定し、段階別に墓坑分布図にプロットしたところ、図 9.3-9.9. で示した結果を得ることができた。このプロットでは、先行研究 (Payne 1992) を追認できた部分と、できなかった部分の双方が見出せた。以下に、墓地別に墓の造営段階を検討する。分布の検討対象となる墓は、基本段階が明らかな事例のみである。時期が不明な事例や明確でない事例は除外した。なお、適用される土器編年が異なるために先行研究では時期が提示されたものの本論文では基本段階が与えられない事例や、土器型式から段階を得ることができても墓坑分布図上に墓番号が記載されていないためにプロットすることができなかった事例がある点も留意されたい。

### 9.3.1. 大墓地東地区

墓域の拡大過程は、巨視的に見た場合はペインの提示 (Payne 1992: Figs 1-2) を踏襲するかたちとなった。すなわち、サウスタウン地区に近い墓域北東側に最初期の墓が造営され、墓域が徐々に西遷しながら、ナカダ文化期中期後半には、東地区の西端に造墓範囲が到達し、後半には東地区の全体に極めて散漫に墓が造営される、という過程である。段階別に分布範囲の詳細を確認する。

#### Ia1-Ia3 段階

東地区の北東側を中心にこの段階の墓が分布する。確認できた墓の数は 35 基である。G61-63D-F と G55-57D-F にこの段階の多くの墓が集中する。一方で、墓の分布自体はより散漫で、最も西の墓は G52F に、最も南の墓は G62N に確認できた (図 9.3.)。ただし、G52-60G-P の範囲には G58-59I と G60G を除いて墓が確認できず、この範囲よりも北側と東側に分布範囲が限られる。この段階には墓が緩やかな間隔で東地区の北東側に造営されたと看取できる。

#### Ib1-Ib2 段階

この段階の墓は前段階の Ia1-Ia3 段階の墓の分布範囲に存在する間隙に墓が造営されることに加え、西側にも範囲が拡大する。墓の分布範囲の拡大の一方、造営された墓の数も増加して位置を確認できた墓だけでも 161 基になる。範囲としては、最大で東西に 38-68 列、南北に A-P 行のグリッドに分布する (図 9.3.)。最も西側の墓は G38E に、最も南の墓は G65P に確認できた。この範囲は東地区の範囲自体をほぼ納めるが、墓の分布の密度は場所によって様々である。例えば、G54-56C-E と G53-57F-I にはこの段階の多くの墓が集中する。一方で、西に位置する墓の分布の密度は傾向として疎になる。この段階には前段階の Ia1-Ia3 段階の墓の分布域を包括しながら西側や南側に墓の造営範囲が広がり、なおかつそれまで墓が造営されなかった 51 列より西側にも墓の造営場所が広がったと看取できる。

#### IIa1-IIa2 段階

この段階の墓の位置に関しては、149 基分を確認することができた。これらの墓は、前段階までの墓が集中して分布していた東地区東-北東側の範囲に造営されることがほとんどなくなり、西側を中心に分布する。範囲としては、最大で東西に 30-69 列、南北に A-P 行に分布する。前段階までの主要な造墓範囲だった 53 列より東、H 行より北に所在する墓の数は少ない (図 9.3.)。この段階には、特に 53 列より西側にこの段階の墓が盛んに造墓されたことがわかる。53 列より東側にも墓は散漫に分布するが、それまでの主要な造墓範囲の外縁に分布するのみである。ここから、例外はあるものの、この段階には前段階の分布範囲を踏まえつつ、さらに西側に集中的に造墓範囲が広げられたと看取できる。

#### IIb 段階



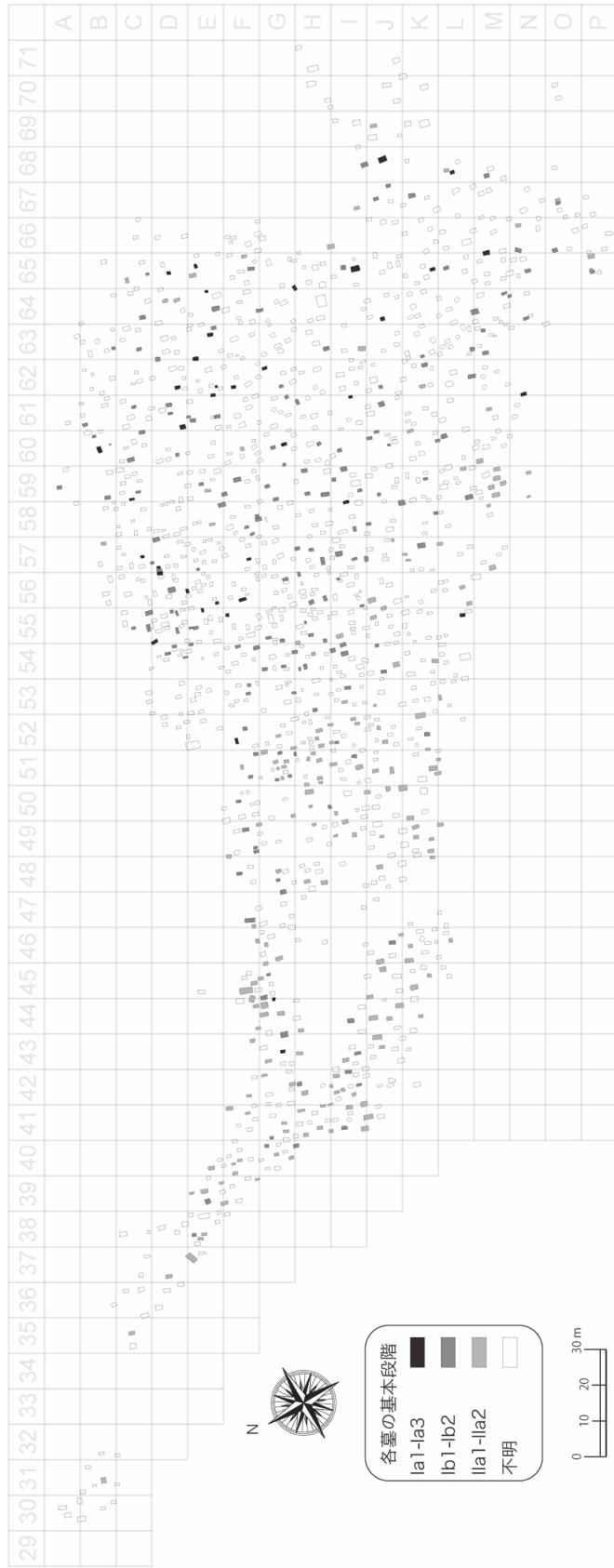


図9.3. 大墓地東地区 Ia1-Ia3 段階～IIa1-IIa2 段階における墓坑分布

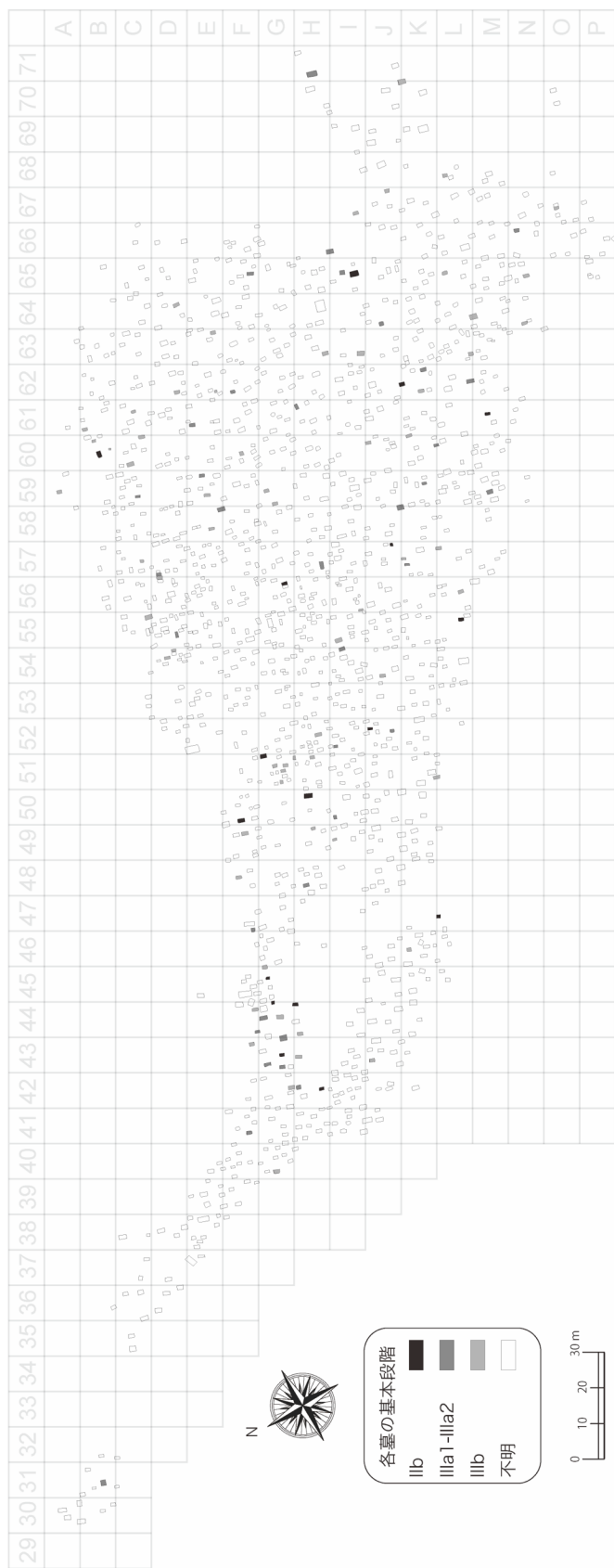


図94. 大墓地東地区 IIb 段階～IIIb 段階における墓坑分布

この段階の墓に関しては、8基分の位置を確認することができた。これらの墓のうちの6基は、前段階までの墓が集中して分布していた53列より西側に分布する(図9.4)。前段階の分布の間隙に造墓された。ここから、2基の例外を除き、前段階までの墓の分布範囲に準拠した墓の造営が継続したことが読み取れる。

### IIIa1-IIIa2 段階

この段階の墓は6基確認できた。これらの墓は東地区の全体に分布するが、規則性は見られない(図9.4)。それまでの段階に造営された墓が存在しない余剰な空間に造営されたことが読み取れる。

### IIIb 段階

この段階の墓は3基確認できた。これらの墓は東地区の東西に分布し、東側にはG40GとG43Jに、西側にはG70-71J-Kに分布する(図9.4)。この段階にも、それまでの段階に造営された墓が存在しない余剰な空間に造営されたことが読み取れる。

### 大墓地東地区における段階別墓分布のまとめ

大墓地東地区では、ペインの主張した墓地の拡大過程を概ねトレースすることができた(Payne 1992)。これはアビュドス編年を基盤とする相対編年であっても、同様に墓域の拡大過程を捉えられることを示す。東地区では、墓地は母集落に近い範囲から墓地としての利用を開始し、Ib1-Ib2段階には次第に墓域を拡張して、IIb段階まで東方向に拡張を継続する拡大の過程を示す。開始期には広い空間に散漫に墓を造営していた傾向が、Ib1-Ib2段階以降は、やや造墓範囲に集中を見せるようになり始め、この傾向がIIb段階まで継続する点は、墓地の利用頻度が高くなり、造営される墓の数が多くなったことと関係があると考えられる。多数の墓を造営するために、ある程度の集中を保ちつつ同時に拡大することで、埋葬地のスペースの確保を図ったと考えられる。またIa3段階ののち、Ib1段階からIIb段階までは墓の造営場所に関する規制が生じ、維持された可能性がある。その規制の背景には、血縁や系譜とは異なる社会構造や縦の社会的地位に規定された社会集団の存在が推定される。興味深い点は墓地の利用が低下するIIIa1段階以降で、墓の造営場所に明瞭な計画性は見出せなくなり、むしろ前段階までの墓が造営されていない間隙を埋めるかたちで埋葬施設の造営のためのスペースを確保したと見られる。この段階に看取できる無計画性は、頻繁な墓地の利用がなくなったことと関係する可能性がある。

### 9.3.2. 大墓地西地区

墓域の拡大過程は、ペインの提示(Payne 1992: Figs 1-2)を部分的に追認するかたちとなった一方で、ペインの主張とは異なる側面も見いだすことができた。追認できた面は、墓地の南東側にナカダ文化期中頃前半の墓が造営され、墓域が徐々に西遷し、中頃の後半以降は分布範囲が東西に別れて拡大するという大きな墓地の拡大の過程である。その一方で、用いた相対編年の違いからペインが提示した中頃後半から後半の墓地分布が看取できない部分もあった。またペインが提示しなかった文化期前半初期の墓の分布も今回看取できた。以下では、段階別

に分布範囲の詳細を確認する。

#### Ia1-Ia3 段階

西地区に分散してこの段階の墓が分布する。ペインはこの段階について言及していない (Payne 1992) が、近年ではこの段階の墓の位置がヘンドリクス編年をもとに提示された (van Wetering 2017: Figs. 2a-c)。今回の検討で確認できた墓の数は7基である。墓は互いに距離を保って分布していることが確認できた。最も西の墓は G8H に、最も東の墓は G29I に確認できた (図 9.5)。広範囲に少数の墓が集中することなく分布しているため、いかなるまとまりも見出すことができない。ここから、この段階の墓は、間隔を大きく設けて造営されたことが分かる。

#### Ib1-Ib2 段階

この段階の墓は前段階の Ia1-Ia3 段階の墓の分布範囲とはあまり関連がなく、西地区の末端を除いた部分に分布する。確認できた墓の数は64基である。範囲としては、最大で東西に5-31列、南北にE-M行のグリッドに分布する (図 9.5)。最も西側の墓は G5G-H に、最も東の墓は G32L に確認できた。この中で分布の密度には濃淡があり、例えば G26-31/J-M の範囲に墓のまとまりが看取できるほか、G16-24/E-J の範囲にも緩いまとまりを看取できる。以上から、この段階には前段階の Ia1-Ia3 段階の墓の分布域とはあまり関係がなく、多数の墓が西地区の中核部分を中心に造営されたことが看取できる。その中でもまとまりが少なくとも2ヶ所見られ、このまとまりの付近が墓の造営場所の中心だったと看取できる。

#### IIa1-IIa2 段階

この段階の墓の位置に関しては、85基を確認することができた。これらの墓は、前段階までの墓の分布範囲に継続して造営されたことが分布上から看取できる。したがって、分布範囲は西地区の大部分に及び、範囲としては、最大で東西に2-35列、南北にD-M行に分布する (図 9.5)。最も西の G2E-F に所在する墓の所在地は隔絶しているが、それ以外の墓はほかの墓との距離が3グリッド (縦横 30m) 以上離れることはない。ただし広範な分布の一方で、この段階の墓が分布しない範囲もあり、例えば G30-36E-J などがある。ある程度のまとまりは G26-29D-F や G12-14E-H に見られるが、全体的に複数の墓が広く分布することが特徴である。ここから、この段階には I/II 前半段階- I/II 後半段階の墓の分布範囲を引き続き使用しながら、さらに墓域全体に造墓範囲が広げられたと看取できる。

#### IIb 段階

この段階の墓に関しては、11基の位置を確認することができた。これらの墓の大多数は、前段階までの墓の範囲と同じ範囲に分布し、それらの間隙に造営された (図 9.6)。ただし分布範囲自体は前段階よりも縮小しており、東西方向に11-29列、南北方向にD-L行の範囲に大多数の墓が分布する。この範囲の墓の分布は、顕著なまとまりを形成しない。一方で、それまで墓が造営されていなかった墓地北東側にも墓が1基確認できた (G34G)。次

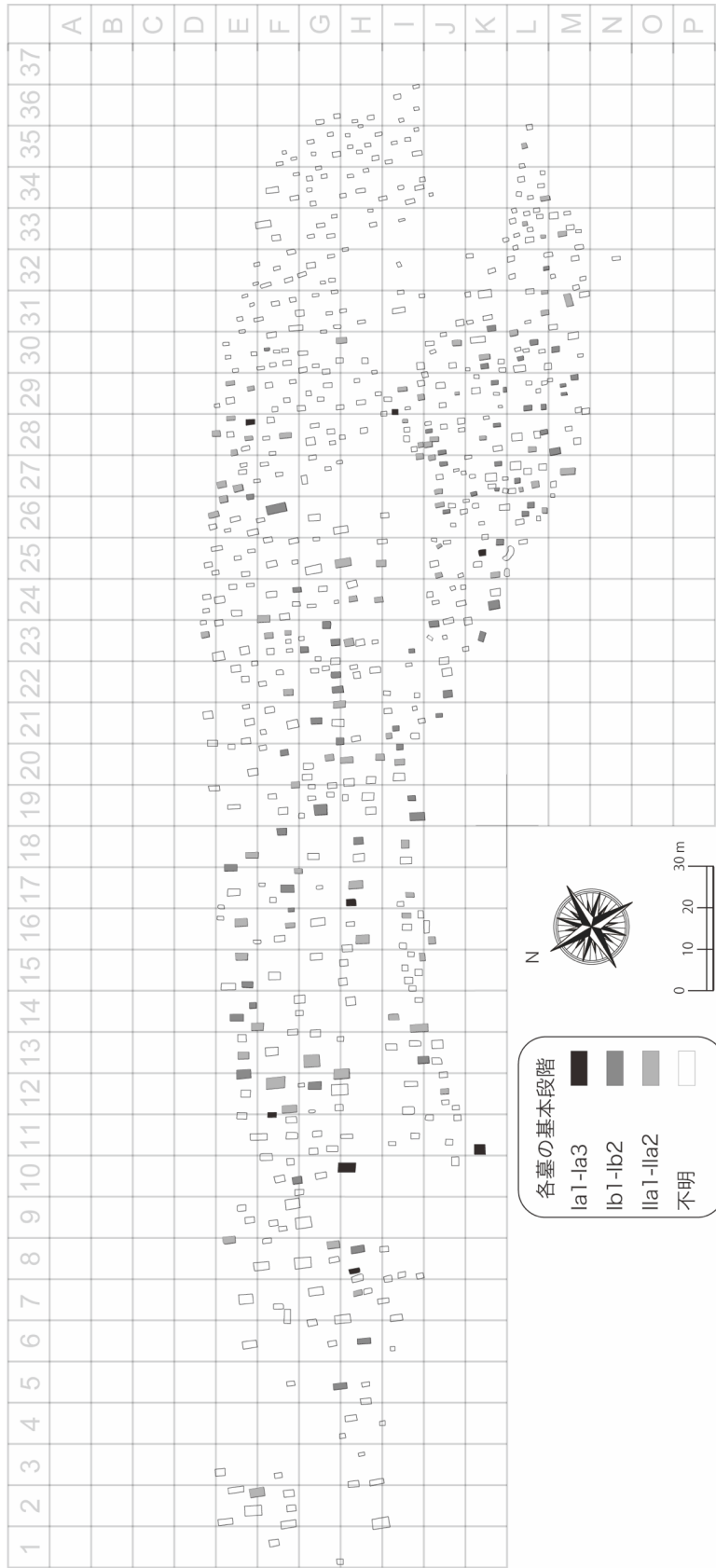


図9.5. 大墓地西地区 Ia1-Ia3 段階～IIa1-IIa2 段階における墓坑分布

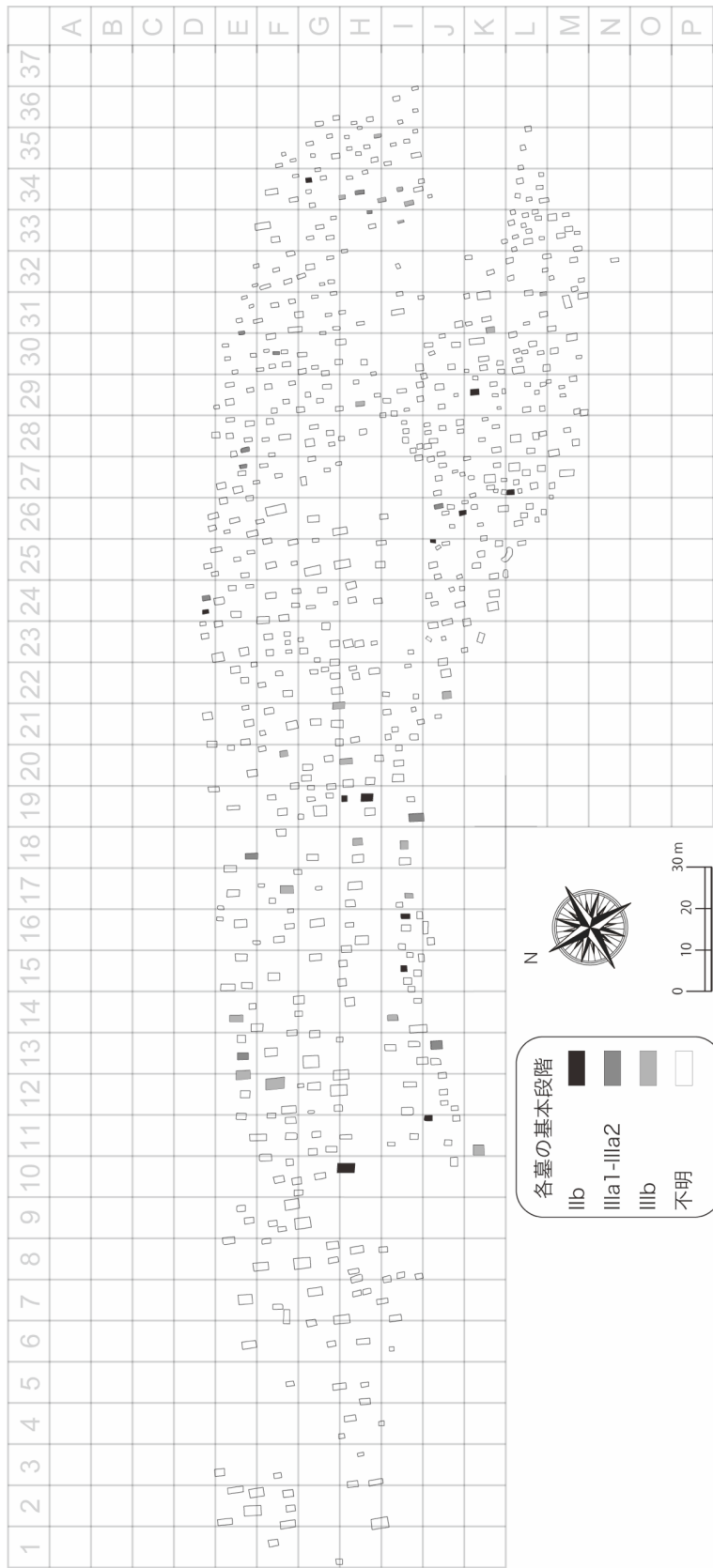


図9.6. 大墓地西地区 IIb 段階～IIIb 段階における墓坑分布

の段階以降に墓が造営される範囲を先取りした分布となっている。しかし基本的には、1基の例外を除き、この段階では前段階までの墓の分布範囲に準拠した墓の造営が継続したことが読み取れる。

### IIIa1-IIIa2 段階

この段階の墓は、7基の位置を確認できた。これらの墓は全て墓地の中心付近に造営されず、むしろ墓の分布の外延部付近に埋葬される。しかし、G33-34Hに所在する2基の墓は、前段階に新たに造営が開始された墓の範囲に造営されたことが読み取れる(図9.6)。分布範囲自体は前段階よりもまばらになる。この段階では、顕著な墓のまとまりを形成することはなく、墓が広範囲に点在して造営されたことが読み取れる。

### IIIb 段階

この段階の墓は、9基の位置を確認できた。これらの墓の分布は、2つに分けられる(図9.6)。1つ目は、G29列よりも西側に分布する3基の墓で、いずれも点在しており計画的な造営ではなく、前段階までの墓の間に設けられた。2つ目は、G33-35H-Iに所在する6基で、IIIb段階から使用され始めた造営範囲に継続して設けられた。この6基にはまとまりを形成しており、集中的にこの部分に墓が造営されたと看取できる。以上からこの段階では、墓地の西側では墓が点在して造営され、墓を設ける場所に計画性があまり見られないのに対して、墓地の北東側ではまとまりを形成するかたちで墓が造営されたことが読み取れる。

### IIIc 段階

この段階の墓の位置は、墓の分布図上では見つけることができなかった。したがって、墓の分布は不明である。

### 大墓地西地区における段階別墓分布のまとめ

大墓地西地区では、ペインの主張した墓地の拡大過程を部分的に追認することができた(Payne 1992)。特にナカダ文化期中頃前半の墓域はペインの主張が妥当であることが、アビュドス編年を基盤とする相対編年であっても示された。一方で、全体的にはペインの主張する墓域の拡大を確認することができなかった。確かに西地区では中頃前半に相当するIb1-Ib2段階の墓は墓地の南東側に集中が見られるが、通時的には、前段階のIa1-Ia3段階の時点から墓地の広範に互って墓が点在して造営され、その傾向はIb1-Ib2段階からIIa1-IIa2段階にも当てはまる。つまり、西地区の大部分では墓域が漸次的に拡大するのではなく、当初から広範に墓が造営され、間隙を埋めるように墓が造営されて墓地が形成されたと読み取れる。一方で、墓域の漸次的な拡大もIIIb段階以降に墓地の北東側で見られる。この新たな墓域の拡大は、それまでの段階に使用されていた墓域に追加で墓を造営することが可能なスペースがなくなったためと考えられる。同時にIIIa1段階以降の主要な埋葬地として計画的に墓が造営されたと捉えられる。興味深い点は、涸れ谷を挟んで隣接する東地区とは墓地の拡大の仕方が全く異なることで、その要因には集塊状の造墓を避ける規制があった可能性がある。その規制の具体的な背景を考えるためには、分布だけでなく他の要素の検討も必要だが、西地区の被葬者は東地区に埋葬された人々とは異なる枠組み

の例えば階層などの社会集団に属していた可能性がある。例えば先行研究では、大墓地西地区は比較的高位の階層に属する人々の埋葬地（e.g. Bard 1994; van Wetering 2017）だったことが可能性として挙げられる。墓の分布図に記載された内容からは、大型の墓が多いことが読み取れることがこの点を傍証し、それぞれの墓の造営に投じられた労力は高かった可能性がある。また墓地活動が低下する IIIa1 段階以降の分布パターンが異なる点も、埋葬される社会集団の性質に変化が生じた可能性がある。いずれにせよ、東地区とは異なる墓地の形成過程が段階別の通時的な検討から明らかにすることができた。

### 9.3.3. 大墓地南地区

大墓地南地区は、線状に墓が分布することが特徴である（図 9.7.）。ナカダ遺跡の墓地の中では、比較的規則的な墓の配置を保っている。墓坑分布図上で時期を決定できない墓が 12 基と多いため、明確に墓域の拡大過程を検討するのは難しい。墓地自体の存続期間は、Ib1 段階から IIIa2 段階だが、分布図上では、IIa1 段階から IIIa2 段階の墓までしか確認できなかった。IIa1-IIa2 段階では、IIa1 段階に属する墓 3 基が墓域の北側から検出された一方で、IIa2 段階の墓は南側から検出された。ここから、墓地は大まかには北側から南側に漸次拡大したと推定できる。ただし、IIb 段階の墓 1 基が墓域の北側で検出されているので、絶対とは言えない。一方で、IIIa2 段階の墓 1 基は墓域の南側で検出されているので、上記の大まかな墓域の拡大の流れと連動する。

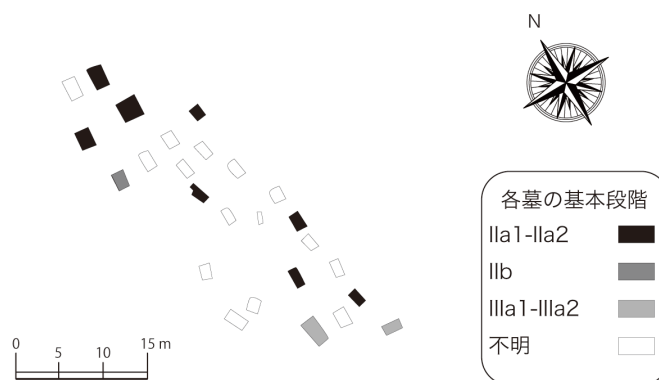


図 9.7. 大墓地南地区における墓坑分布

### 9.3.4. T 墓地

B 墓地と同じく、T 墓地の墓の分布も本格的には検討されていない。しかし、ケンプは日乾レンガ製の壁体を持つ墓の分布の検討を行っている（Kemp 1973）。ピートリーによる墓坑分布図からは、T 墓地には北側と南側の 2 つのまとまりが存在し、ケンプらの知見を踏まえると北側のまとまりはさらに南北に分離することができ、日乾レンガ製の壁体を持つ墓や大規模な墓が多い北側と、やや小型の墓が存在する南側のまとまりにさらに分けられる（図 9.8.）。したがって、T 墓地には 3 つのまとまりが分布図上では見えることとなる。このうち、最も南のまとまりに関しては、ほとんど情報がなく、実態は不明である。以下では、墓の分布域を段階別に通時的に観察するが、時期不明な墓が多いことに留意する必要がある。またここでは最も南のまとまりに関しては、例外



(T26 号墓) を除いて分布の議論に加えない。

#### Ib1-Ib2 段階

T 墓地は、この段階から使用が開始される。この段階の墓の分布は 3 基確認でき、いずれも北側のまとまりに等間隔で分布する。この 3 基の墓はいずれも大型の墓である。

#### IIa1-IIa2 段階

この段階には、確認できる墓の数が大きく増えて 18 基になる。分布の範囲は、前段階までの墓地北側に加えて中央部のまとまりでも確認できるようになる。

#### IIb 段階

この段階に確認できる墓の数は 1 基のみで、墓地中央部に分布する。分布位置から考えると前段階からの墓地範囲が継続して利用されたと推定できる。この段階以降、墓地北東部には墓が造営されなくなる。

#### IIIa1-IIIa2 段階

この段階に確認できる墓の数は 3 基で、前段階から継続して墓地中央部に分布する。墓の分布自体は緩やかなまとまりを形成するに留まる。

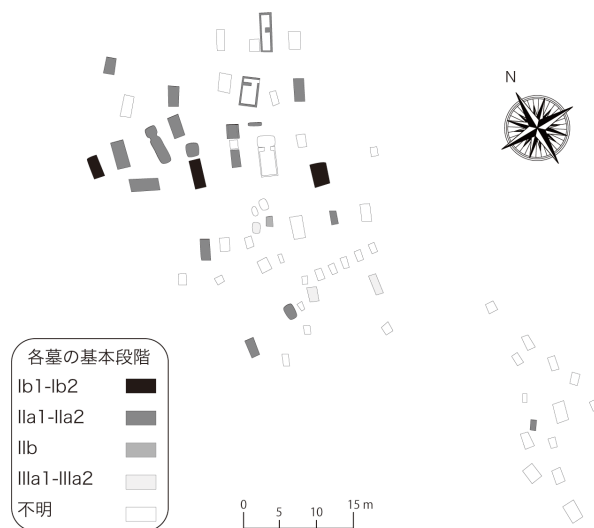


図 9.8. T 墓地における墓坑分布

#### T 墓地における段階別墓分布のまとめ

以上から、T 墓地における北東部と中央部のまとまりでは、北東部の大型墓が密集する区域の利用が最初に開始し、次に中央部の利用という北から南への造墓範囲の遷移が窺える。T 墓地では、北東部の大型墓群が墓地利用の出発点であり、それらが一通り利用され終えたのちに、南側により規模の小さな墓が造営されたと見ること

ができる。この遷移に関しては、IIa1-IIa2 段階が移行の段階であったことが分布範囲から推定される。分布図で明瞭だが、北東部は内部に部屋を持つ日乾レンガの壁体を有する墓が少なくとも 3 基確認でき、墓の規模が大きいことも考慮すると何らかの特殊な墓地空間であったことが示唆される。移行段階である IIa1-IIa2 段階を境に、墓の規模や構造だけでなく所在地点の面でも異なる墓が T 墓地に造営されることから、T 墓地の利用の背景が変異したと推定できる。IIa1 段階に帰属する T15 号墓や I/II 後半段階から IIa1 段階に推定される T23 号墓は、反復的な埋葬を前提とした構造を持っているため、特に北東部のまとまりの中心部は特定の血縁と系譜を持ち、社会的に高い階層にある人々のための埋葬地が提起される。一方で、特に IIa1 段階以後の中央部のまとまりに見られる単純土坑墓に埋葬された人々は、北東部の墓地空間に埋葬された人々と同種の社会的立ち位置にあった可能性はあるが、墓の造営に投じられた労力が、墓の規模から見ても大きいとは言えないため、確実とは言えない。副葬品の内容を踏まえた検討が必要である。

### 9.3.5. B 墓地

B 墓地内での墓の分布に関する議論は、これまで筆者が合葬墓について検討（黒沼 2017）した以外には行われていない。したがって、B 墓地の墓の分布は議論が不十分な点である。B 墓地における墓の分布は、全体としては線状だが、墓坑分布図で確認できる限りでは、主軸方向が異なる墓も多い。B 墓地の微地形に関する情報は欠落しているが、一見すると墓地の中央部分を境にして南北に墓のまとまりが看取できる。B 墓地は使用期間が長く、記録の残存状況も良いため、各段階の墓の分布も確認できる。以下では、各段階の墓の分布を瞥見する。

#### Ia2-Ia3 段階

Ia2 段階から使用が開始される B 墓地では、この段階の墓は合計で 4 基確認できた。Ia2 段階と Ia3 段階の墓が 1 基ずつ墓地の北東側に確認できる（図 9.9）。また細分段階が不明な墓も確認でき、1 基ずつ北東部と中央部に確認できる。この段階で注目すべきは、墓地の造営範囲が北東部と中央部の 2 ヶ所に認められることで、北東部 3 基の墓からなるまとまりを形成するが、中央部は単独である。この分布は次段階の墓の分布を観察する際に重要となる。

#### Ib1-Ib2 段階

この段階の墓の分布は 21 基確認できた。このうちの 20 基は墓地の北東側でまとまりを形成する。前段階からの埋葬地を引き続き使用されたと読み取れる（図 9.9）。このまとまりには細分段階が特定できない墓も含めてこの基本段階のどの段階の墓も存在する。残りの 7 基は墓地の中心部から南西部にかけてまとまりを形成せずに分布することが確認できた。これらのうち、IIa1 段階は主に南西部に、IIa2 段階の墓は中心部に分布するが明確に細分段階で分布地を区別することはできない。墓は北東部と比べれば散って分布しており、空間の使用の仕方が異なる。

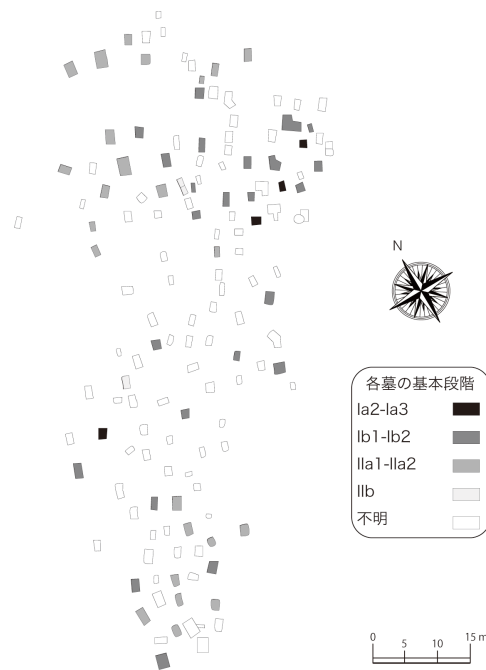


図 9.9. B 墓地における墓坑分布

#### IIa1-IIa2 段階

この段階の墓は、前段階から引き続いて墓地の北東部と南西部に分化して分布する（図 9.9.）。分布が確認できる墓の数は 21 基である。墓地の中央部にはこの段階の墓は確認できない。北東側では墓の分布のまとまりが緩いが、南側ではまとまって墓が分布する。

#### IIb 段階

この段階の墓は、それまでとは異なり墓地の北東部と中央部に 1 基ずつ分布する（図 9.9.）。分布が確認できる墓の数はこの 2 基のみである。この段階の終わりには B 墓地の使用が停止し、墓地の利用が不活発になると考えられる。数が少ないため確実ではないものの、分布からは前段階までの流れを汲まないことが推定できる。

#### B 墓地における段階別墓分布のまとめ

B 墓地では、墓域全体では線状の墓の分布を示しているが、その内実は通時的に 2 つのまとまりに分けられることが段階別の検討で判明した。ここから B 墓地の母集落である Kh. 4 地点の人々は、墓域を 2 つの区域に分けて使用していた可能性が高いことが推定できる。先行研究によれば、Kh. 4 地点では階層化などがあまり進まないことが指摘されている（Bard 1994）。仮にこの言説を踏まえるのなら、B 墓地における埋葬は、縦の社会集団によるよりも、血縁や系譜といった横の次元の社会集団に基づいてなされた可能性が高い。墓地からは 2 つの墓のまとまりが認められることから、少なくとも 2 つの集団が B 墓地の母集団には存在した可能性がある。ほかのナカダ遺跡の墓地とは異なり、明瞭な墓の分布パターンを B 墓地では通時的に看取することができた。

#### 9.4. 各墓地における上位クラスター構成墓の分布

以上の各基本段階における墓の分布を踏まえた上で、各墓地における上位クラスター構成墓の分布の検討を試みる。本節で示した図版ではクラスター別に色わけを行い、高位のクラスターから下位に向かって色が薄くなるようにした。第7章で示したように、クラスター数は最大でも6なので、上位のクラスター数は最大で3になる。したがって、色わけは3種類にとどめた。同段階の下位クラスター構成墓には色を付していない。基本段階によっては上位クラスターの数か1または2の事例があるが、その場合は最も濃い色から順に用いた。よって、すべての色を使用しているわけではない点を留意されたい。

##### 9.4.1. 大墓地東地区

###### Ia1-Ia3 段階

図9.10.に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓はG60BとG65Iに2基確認できた。加えて、G56-57D、G62F、G64Jに2番目に高い序列のクラスターを構成する墓が確認できた。この段階の墓はまばらに造営されるため、上位クラスター構成墓の明瞭な偏在は確認できなかった。

###### Ib1-Ib2 段階

図9.11.に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓はG45GとG56に2基確認できた。2番目に高い序列のクラスターを構成する墓は、墓地の広い範囲に確認でき、最も西では、G43-45Gに確認できたほか、この段階の主要な埋葬地であるG54-62D-Iにも点在することが確認できた。G54-62D-Iでは、上位クラスター構成墓の分布はまばらな一方で、G43-45Gでは3基だけながら20×10mの範囲に集中が見られた。

###### IIa1-IIa2 段階

図9.12.に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓はG44G、G50H、G51G、G61Mに4基確認できた。2番目に高い序列のクラスターを構成する墓は、この段階でも墓地の広い範囲で確認でき、最も西ではG42-44Gに確認できたほか、墓地東側ではG66H-Iのように単独で存在する事例も確認確認できた。まとめるとしては、特にG42-44G付近では、最上位から3番目に高い序列のクラスターを構成する墓が7基確認できた。この範囲は前段階の上位クラスターのまとまりに隣接する。

###### IIb 段階

図9.13.に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。墓の分布はまばらなもの、G44G-Hに最上位のクラスターを構成する墓が2基確認できた。この2基が分布する範囲も前段階の上位クラスターのまとまりに隣接することが特徴である。

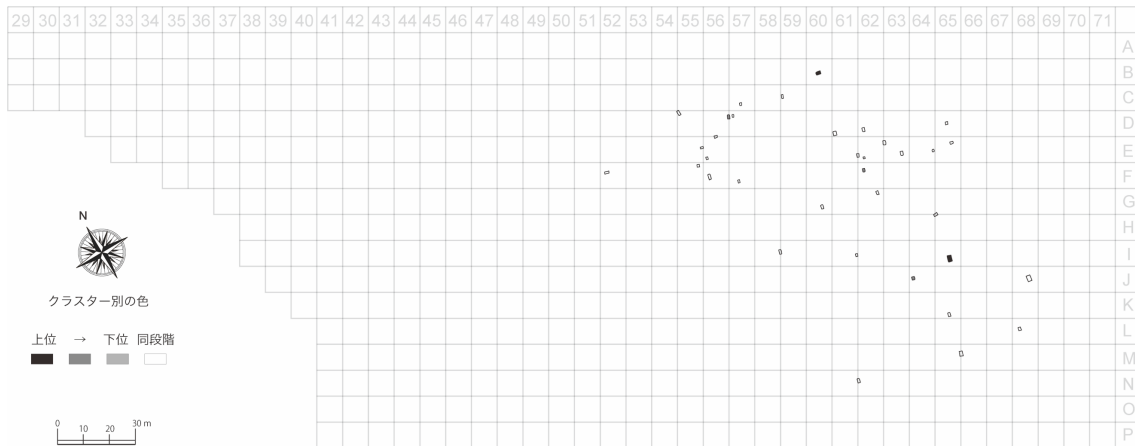


図 9.10. 大墓地東地区 Ia1-Ia3 段階における上位クラスター構成墓の分布

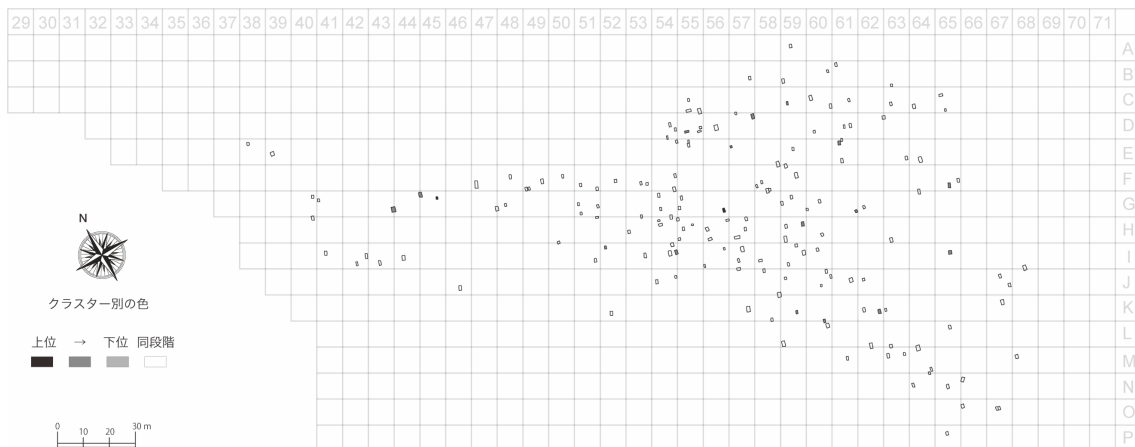


図 9.11. 大墓地東地区 Ib1-Ib2 段階における上位クラスター構成墓の分布

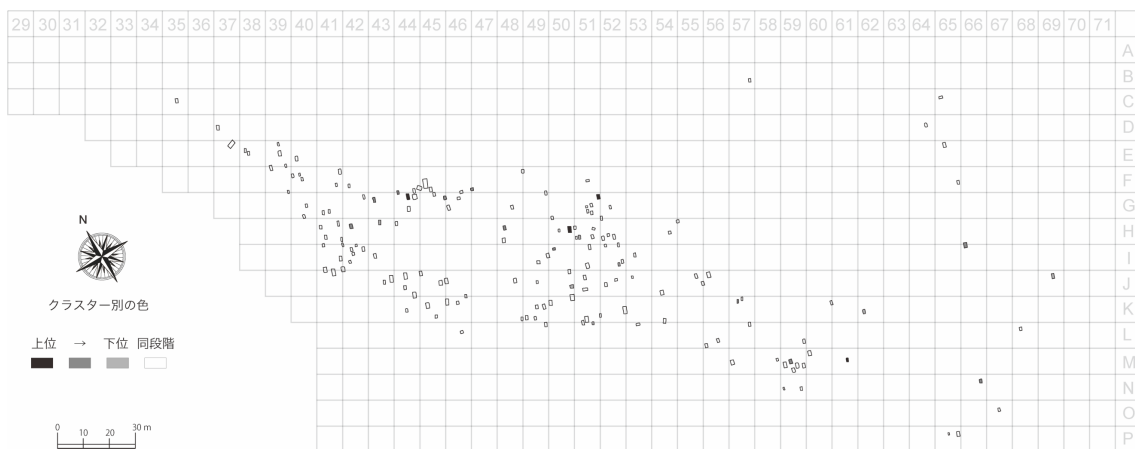


図 9.12. 大墓地東地区 IIa1-IIa2 段階における上位クラスター構成墓の分布

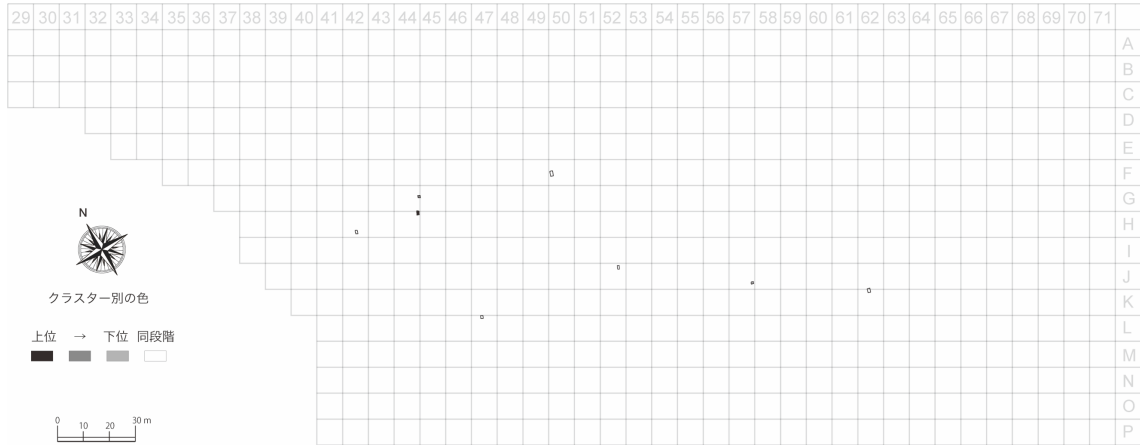


図 9.13. 大墓地東地区 IIb 段階における上位クラスター構成墓の分布

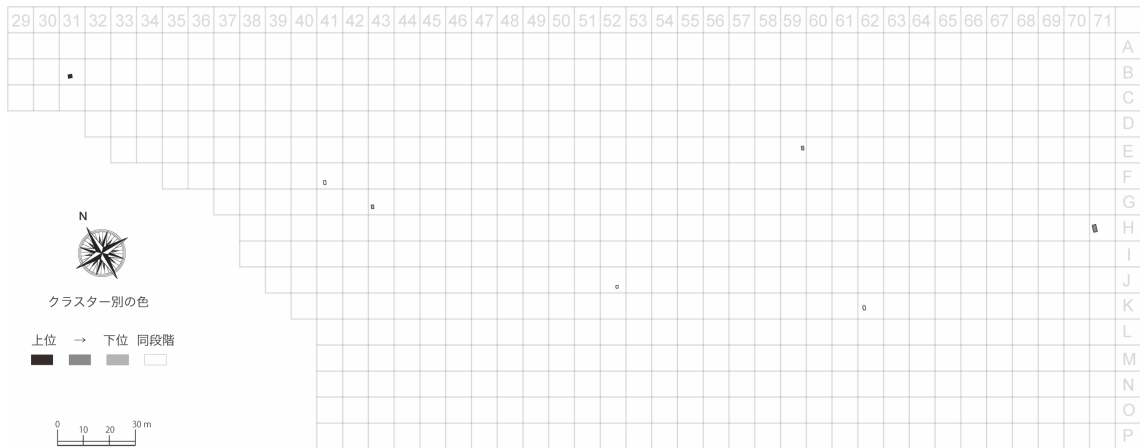


図 9.14. 大墓地東地区 IIIa1-IIIa2 段階における上位クラスター構成墓の分布

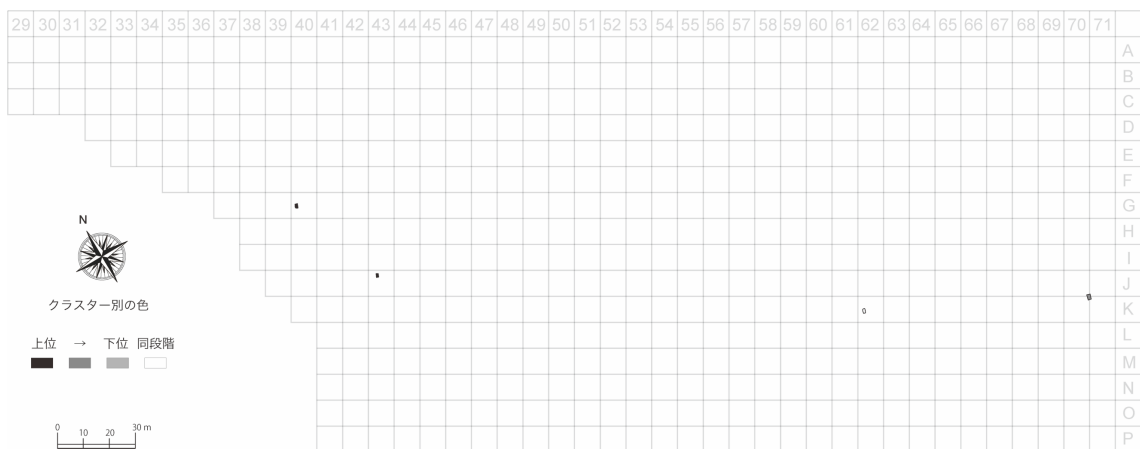


図 9.15. 大墓地東地区 IIIb 段階における上位クラスター構成墓の分布

### IIIa1-IIIa2 段階

図 9.14.に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓は G31B に 1 基確認できた。また 2 番目に高い序列のクラスターを構成する墓は G43G、G59E、G71H に 3 基確認できた。この段階には墓の分布が極めてまばらになるためまとまりを認識することはできない。しかし、墓地のより外側で上位のクラスターを構成する墓が確認できた。

### IIIb 段階

図 9.15.に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓は G40G と G43J に 2 基確認できた。また 2 番目に高い序列のクラスターを構成する墓は G70-71J-K に 1 基確認できた。引き続きこの段階も墓の分布が極めてまばらであり、まとまりを認識することはできない。墓地の外側に上位のクラスターを構成する墓が確認できる点は継続的に看取できた。

### まとめ

以上、大墓地東地区における上位クラスター構成墓の分布を検討した。その結果、特に Ib1-Ib2 段階から IIIb 段階までは墓地の西側である G43-45G 付近に各段階の上位クラスター構成墓の一部が緩やかにまとまることが確認できた。一方で、墓地の利用開始段階にあたる Ia1-Ia3 段階や利用終了に近づく IIIa1-IIIa2 段階以降では、明瞭な偏在は確認できなかった。偏在性の一方で、特に Ib1-Ib2 段階からは上記の西側の緩やかなまとまりの一方で、墓地の東側でもほかの墓とはあまり隣接しない上位クラスター構成墓が確認された。この分布の特徴は、IIIa1-IIIa2 段階以降の上位クラスター構成墓の分布の先駆とも捉えられる。

## 9.4.2. 大墓地西地区

### Ia1-Ia3 段階

図 9.16.に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓は G11K に 1 基確認できた。全体的にこの段階の墓はまばらに造営されることに加え、上位クラスター構成墓が 1 基のみなので明瞭な偏在は確認できなかった。

### Ib1-Ib2 段階

図 9.17.に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓は G12G に 1 基確認できた。2 番目に高い序列のクラスターを構成する墓は墓地の中心部に確認できたほか、東側の G31K にも 1 基確認できた。G12-22E-J の範囲では上位クラスター構成墓の分布が多く、散漫ではあるもののまとまりの存在が読み取れた。

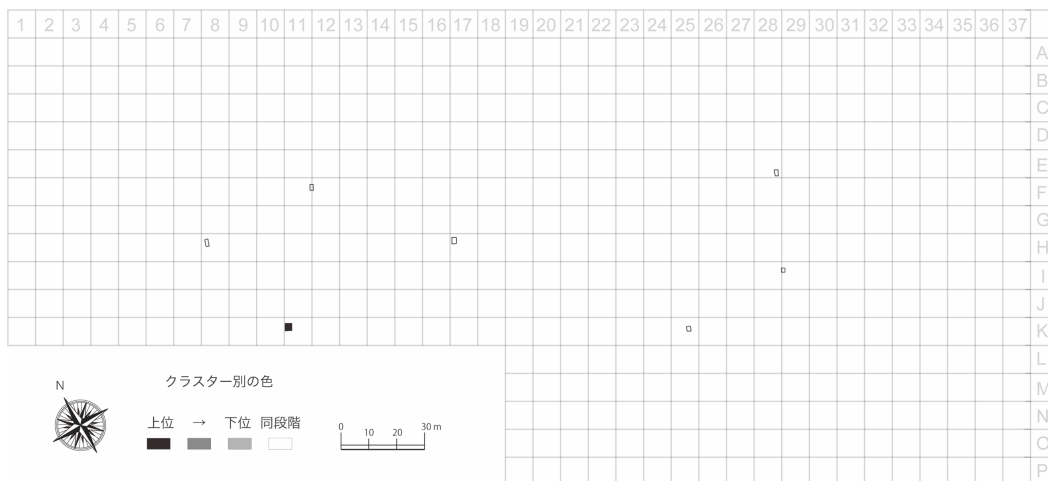


図 9.16. 大墓地西地区 Ia1-Ia3 段階における上位クラスター構成墓の分布

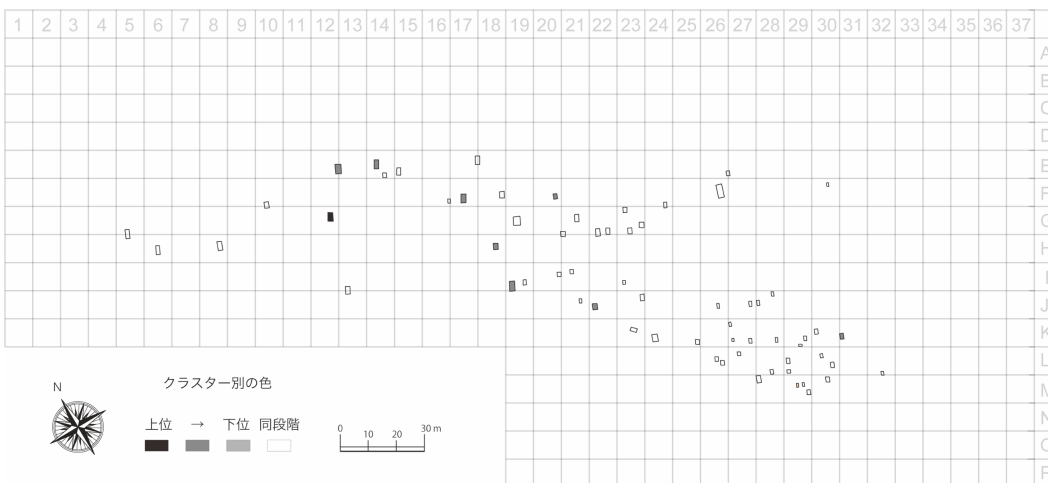


図 9.17. 大墓地西地区 Ib1-Ib2 段階における上位クラスター構成墓の分布

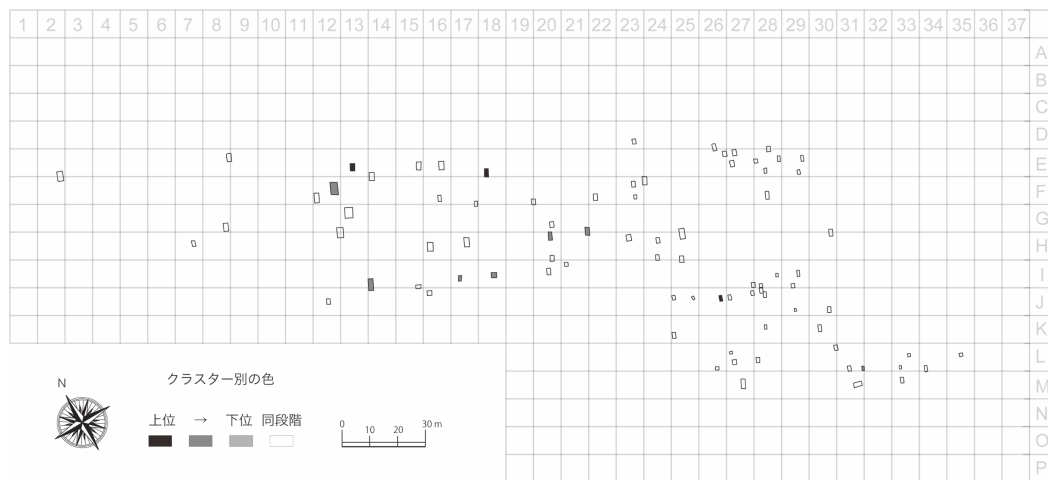


図 9.18. 大墓地西地区 IIa1-IIa2 段階における上位クラスター構成墓の分布



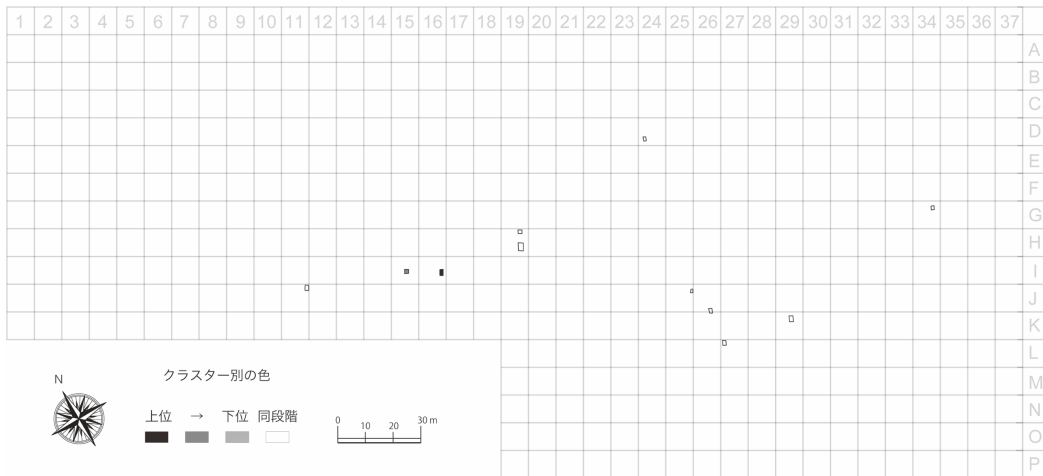


図 9.19. 大墓地西地区 IIb 段階における上位クラスター構成墓の分布

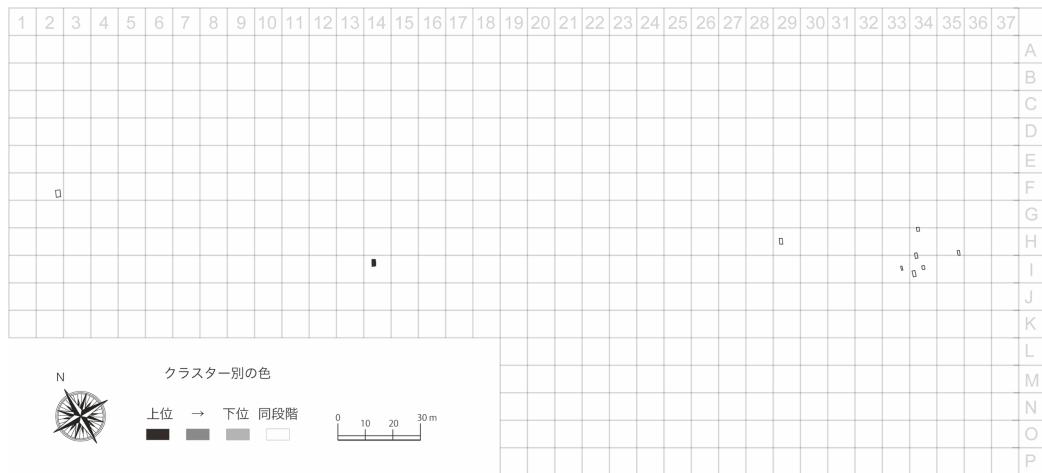


図 9.20. 大墓地西地区 IIIb 段階における上位クラスター構成墓の分布

### IIa1-IIa2 段階

図 9.18. に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓は G13E、G18E、G26J に 3 基確認できた。2 番目に高い序列のクラスターを構成する墓は、前段階と同じく墓地の中心部に確認できたほか、東側の G31L にも 1 基確認できた。引き続き G12-22E-J の範囲で、上位クラスター構成墓の分布が多く、散漫ではあるもののまとまりの存在が読み取れた。また墓地の南東側の G31K-L 付近でも上位クラスター構成墓の造営が継続することも確認できた。

### IIb 段階

図 9.19. に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓は G16I に 1 基確認できた。2 番目に高い序列のクラスターを構成する墓は、その西隣の G15I で確認できた。墓地全体で造営される墓の位置がまばらになるのに対して引き続き墓地中心部に上位クラスター構成墓の分布が多いことが読

み取れた。

#### IIIa1-IIIa2 段階

本段階には上位クラスター構成墓が合計で4基あるものの、どの墓も位置を特定することができなかった。そのため、分布の検討は不可能だった。

#### IIIb 段階

図 9.20.に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓は G14I に1基確認できた。この段階は、G33-35H-I 付近に同時期の墓が6基見られるが、そのいずれにも上位クラスター構成墓を確認することができなかった。

#### まとめ

大墓地西地区では、Ib1-Ib2 段階から詳細不明な IIIa1-IIIa2 段階を除いた IIIb 段階まで一貫して墓地の中央部である G12-22E-J の範囲で上位クラスター構成墓の分布が確認できた。大墓地東地区とは異なり、漸次的に埋葬地が拡大するわけではない状況の中で一定の範囲に上位クラスター構成墓を確認できることは、墓地中心部が西地区における高位の人々の埋葬地だった可能性がある点を読み取れた。G31K-L 以外では上位クラスター構成墓が見られない点も偏在性を浮き彫りにした。

### 9.4.3. 大墓地南地区

#### IIa1-IIa2 段階

図 9.21.上段右に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓は墓地の北側に4基確認できた。同段階のより下位のクラスターを構成する墓が南側に分布するのは対照的な分布が示された。ここから、北側がより高位の社会階層に属する人々の埋葬地だった可能性を読み取れた。

#### IIb 段階および IIIa1-IIIa2 段階

図 9.21.下段左と右にこれら2つの基本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。これら2つの基本段階には、造営される墓地が少なく、プロット可能な墓の数が少なかったため、差異を見いだすことができない。言及可能な点は、これらの段階では、墓地全体の中の余剰地に墓が造営されることであり、南に漸次埋葬地が動くことが窺える。

#### まとめ

大墓地南地区では、墓地利用の開始期かつ最盛期である IIa1-IIa2 段階には、墓地の北側が上位クラスター構成墓でほぼ占有されることが見出せた。ただし、この段階より後には明瞭な傾向を得るだけの資料に乏しかった。

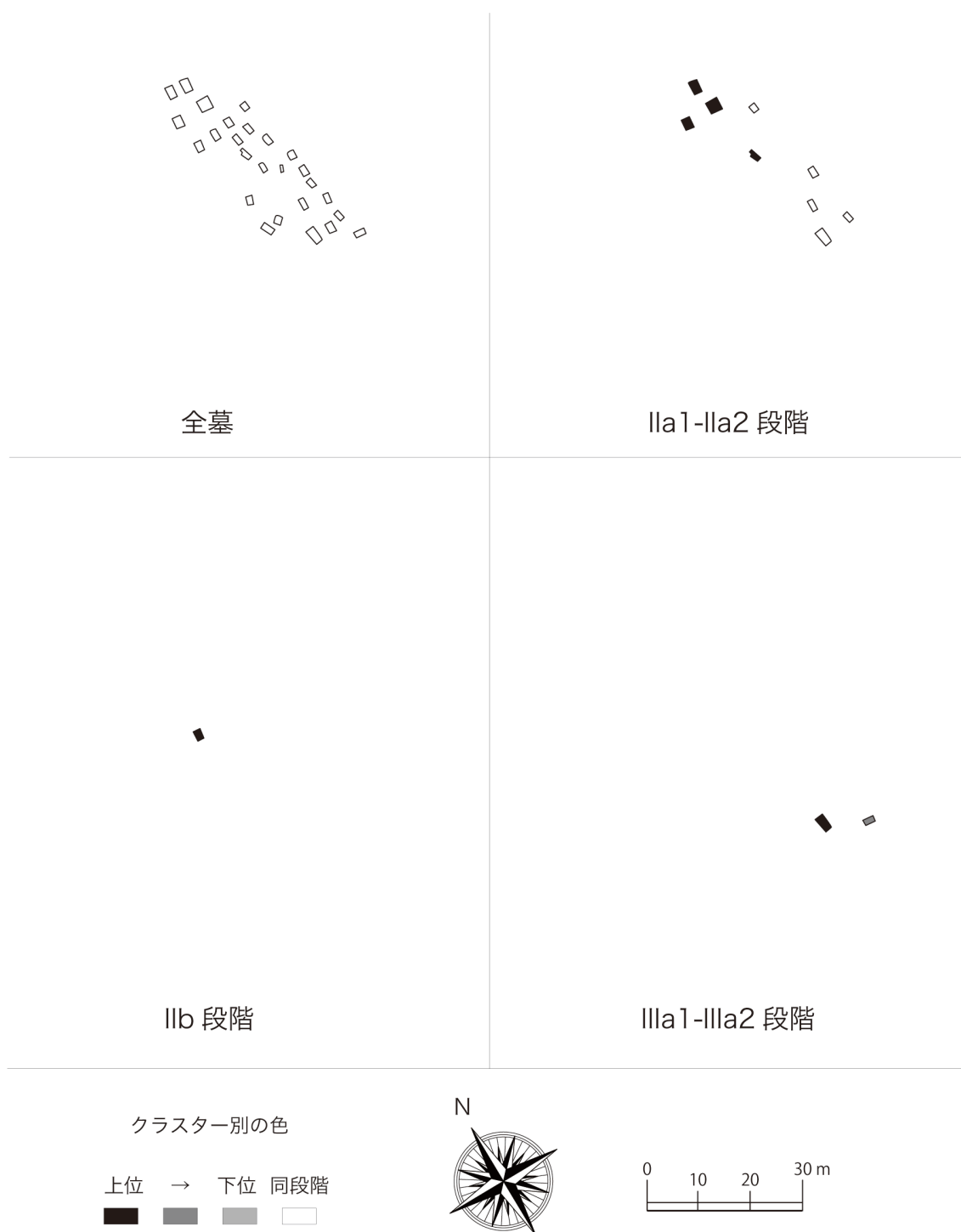


図 9.21. 大墓地南地区各基本段階における上位クラスター構成墓の分布

#### 9.4.4. T 墓地

##### Ib1-Ib2 段階

図 9.22. 上段右に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓は右側に 1 基確認できた。この段階はまだ墓が少ないため、偏在性などの分布の特徴を押さえることはできない。

#### IIa1-IIa2 段階

図 9.22.中段左に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓は墓地の北部分に 2 基確認できた。さらに 2 番目に序列が高いクラスターはその周囲に 3 基確認できた。前段階の北から西側に墓域が拡大し、なおかつそこには上位クラスター構成墓が造営されたことが読み取れた。一方で、ほとんど実態が不明な T 墓地の南側のまともにも 2 番目に序列が高いクラスターのうちの 1 基が確認できた。

#### IIb 段階

図 9.22.中段右に本段階における墓の分布を示したが、図示できた墓は 1 基のみなためクラスターの序列に基づいた分布の研究はできなかった。

#### IIIa1-IIIa2 段階

図 9.22.下段左に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓は墓地の中央のまともりの南側に 1 基確認できた。IIa1-IIa2 段階までに偏在が見られた場所からは、やや離れた場所に確認できたため、本段階以前からの埋葬地の継続性は見られないと言える。同時代の墓とまとまって分布することが読み取れた。

#### まとめ

以上、T 墓地における上位クラスター構成墓の分布を検討した。その結果、利用開始期の Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階までは墓地の北側のまともりに上位クラスター構成墓が集中することがわかった。したがって、T 墓地のこの区域は、より優れた副葬品の内容を持つ墓が造営される場所だったことが読み取れる。ただし、同時期の小規模で下位クラスターに属する墓も存在するため、必ずしもこの区域が占有的に使用されたとは言えない。IIa1-IIa2 段階以後になると、墓地利用が低減し、上位クラスター構成墓が確認できたとしても IIa1-IIa2 段階とは全く異なる場所に造営されたことが読み取れた。

#### 9.4.5. B 墓地

##### Ia1-Ia3 段階

図 9.23.上段右に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓は、北側のまともりにのみ 1 基確認できた。さらに 2 番目に序列が高いクラスターは南側に 1 基確認できた。

##### Ib1-Ib2 段階

図 9.23.中段左に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓は墓地の北側のまともりに 2 基、南側のまともりに 1 基確認できた。さらに 2 番目に序列が高いクラスターは北側の

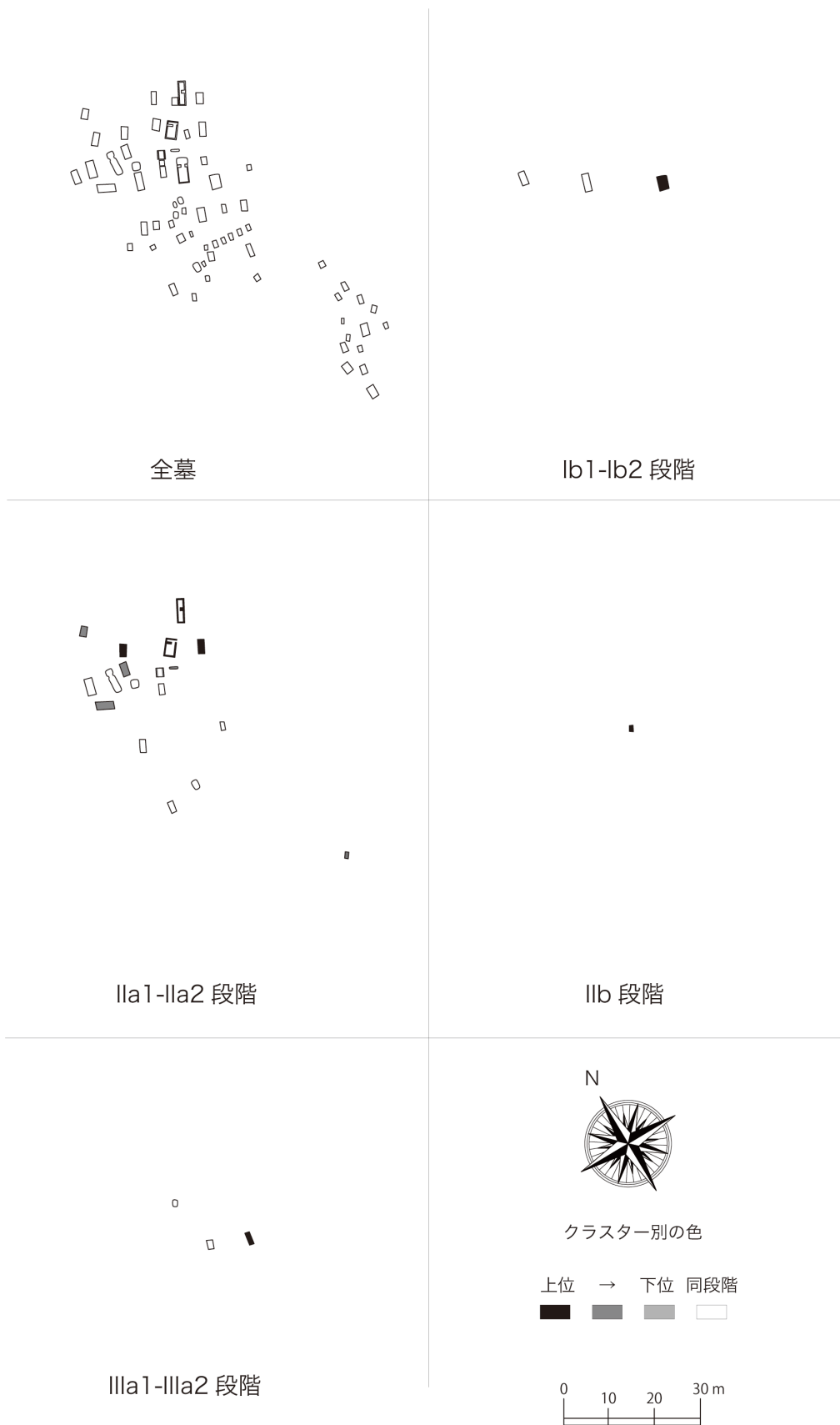


図 9.22. T 墓地地区各基本段階における上位クラスター構成墓の分布

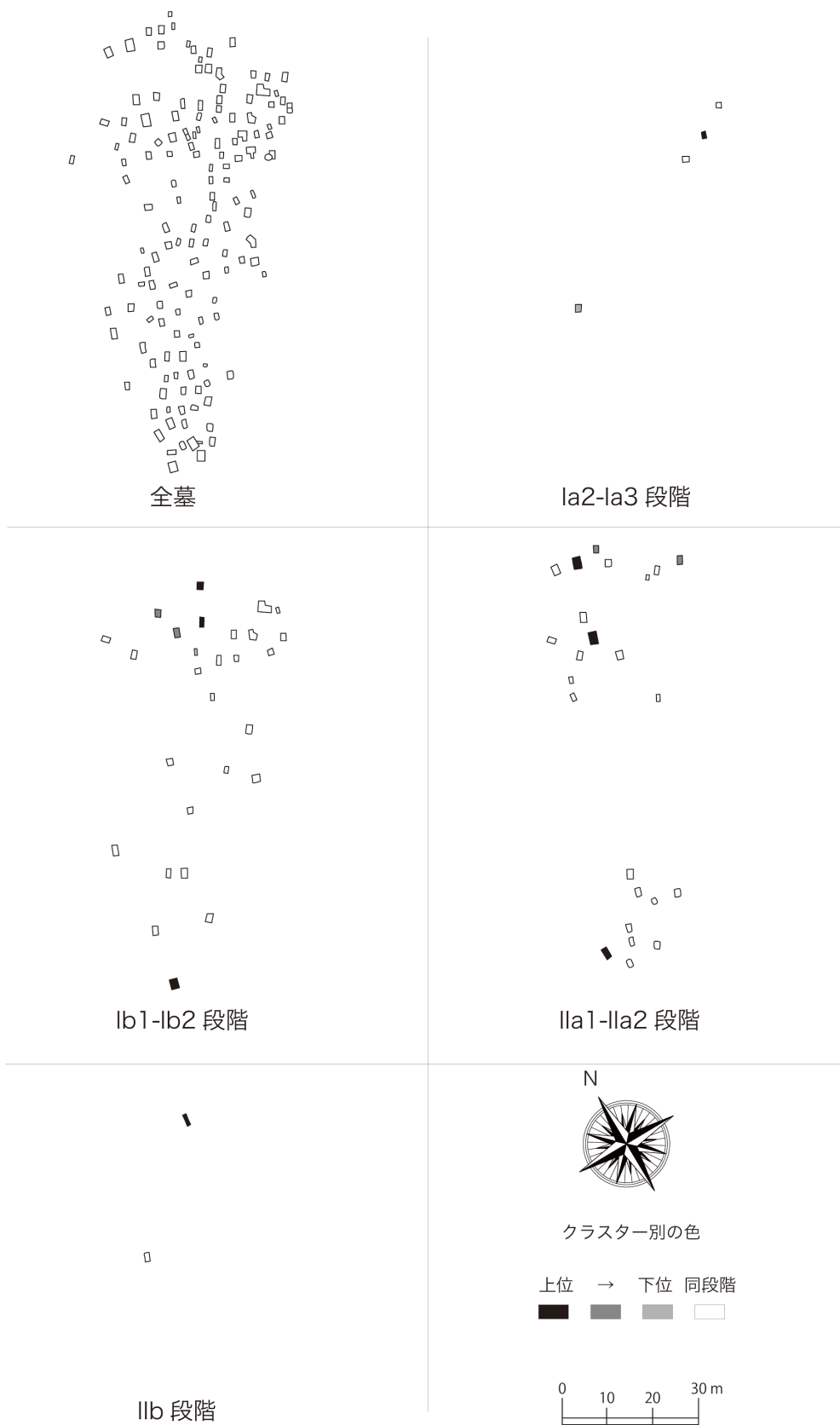


図 9.23. B 墓地地区各基本段階における上位クラスター構成墓の分布

まとまりに2基確認できた。本段階では、上位クラスター構成墓が明瞭に2つに分けることができ、その数は北側のまとまりにより多いことも確認できた。

#### IIa1-IIa2 段階

図9.23.中段右に本段階における上位クラスター構成墓の分布を示した。最上位のクラスターを構成する墓は墓地の北部分に2基、南側に1基確認できた。さらに2番目に序列が高いクラスターは北側にのみ2基確認できた。前段階に引き続き2つのまとまりに明瞭に区分することができた。また上位クラスター構成墓の数も引き続き北側のまとまりにより多いことが確認できた。前段階と比べても上位クラスター構成墓の造営場所は南北のまとまりでともに近接しており、埋葬地の固定化の可能性も読み取れた。

#### IIb 段階

図9.22.中段左に本段階における墓の分布を示したが、図示できた墓は2基のみである。上位クラスター構成墓は、北側のまとまりにのみ確認できた。南側のまとまりでは、上位クラスター構成墓は確認できなかった。

#### まとめ

以上、B墓地における上位クラスター構成墓の分布を検討した。その結果、利用開始期のIa2-Ia3段階からIIa1-IIa2段階まで南北のまとまりでそれぞれ最上位のクラスター構成墓を確認することができた。上位クラスター構成墓は、それぞれのまとまりで造営されるだけでなく、どちらのまとまりでも継続的に一定の区域で造営されることが読み取れた。また墓地の北側のまとまりに、より多くの上位クラスター構成墓が確認できた。したがって、B墓地では、2つのまとまりで別々に被葬者の階層の違いによる一定の埋葬地の設定が行われた可能性が読み取れた。

#### 9.5. ナカダ遺跡各墓地における上位クラスター構成墓の分布のまとめ

サクスの仮説に基づき (Saxe 1970)、ナカダ遺跡の5ヶ所の墓地に存在する上位クラスター構成墓の分布位置を確認し、分布に偏在性の有無が見られるか否かを検討した。以下、墓地別に結果を要約する。

大墓地東地区では、母集落であるサウスタウンに近い東側部分から墓地の拡大が始まり、IIb段階まで徐々に西側に向かって埋葬地が広がった。IIIa1-IIIa2段階とIIIb段階には、それまでの墓の間隙に少数の墓が造営されることが読み取れた。この大きな墓地の拡大過程の中で、上位クラスター構成墓に関しては、まずIa1-Ia3段階には明瞭な分布の偏在を確認することができなかった。Ib1-Ib2段階以降は墓地の西側で上位クラスター構成墓の散漫な集中が認められた。この集中部ではIIa1-IIa2段階、IIb段階まで上位クラスター構成墓の造営が認められた。ただし、これらの段階には同時期の別の箇所からも上位クラスター構成墓が確認できるため、絶対的な偏在ではなかった。ここから、大墓地東地区では、必ずしも上位クラスター構成墓は明確な空間的集中をもって造営されるとは限らないことが読み取れた。したがって大墓地東地区では、サクスの仮説は、部分的にのみ適用できるこ

とがわかった。

一方で大墓地西地区では、Ia1-Ia3 段階には少数の墓がまばらに造営されていたものの、Ib1-Ib2 段階からはより広範囲に分布が認められるようになり、同様の動きは IIa1-IIa2 段階まで継続する。IIb 段階はそれまで存在する墓の間に少数の墓が造営されることが読み取れたが、IIIa1-IIIa2 段階以降は分布のより外側に点在して墓が造営されることが読み取れた。この墓地の拡大過程の大枠の中で、上位クラスター構成墓に関しては、概ね墓地中央部の西側に所在を看取できた。この傾向は、Ia1-Ia3 段階から IIIb 段階まで見られた。一方で、Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階までは墓地東側でもごく少数の上位クラスター構成墓の造営が認められた。ここから、大墓地西地区では、上位クラスター構成墓は墓地中央部の西側に空間的集中をもって造営されることが読み取れ、ほかにも墓地の東側にまとまりがあった可能性が読み取れた。したがって大墓地西地区では、サクスの仮説は、概ね適用できることがわかった。

大墓地南地区では、利用開始段階に当たる Ib1-Ib2 段階の墓を確認することはできなかったものの、IIa1-IIa2 段階からは墓地全体に墓が分散して造営され、IIb 段階の墓はそれまでの墓の間に造営される。IIIa1-IIIa2 段階の墓は墓地の南側に造営された。この大きな墓地の拡大過程の中で、上位クラスター構成墓に関しては、時期によって偏在を認識できる場合とできない場合の両方があった。IIa1-IIa2 段階には、墓地の北側に明確に偏在した。一方で、IIb 段階や IIIa1-IIIa2 段階は墓自体の数が少ないため、偏在の認識が難しかった。したがって大墓地南地区では、サクスの仮説は、IIa1-IIa2 段階には概ね適用できるが、そのほかの段階では不明なことがわかった。

T 墓地では、利用開始段階に当たる Ib1-Ib2 段階には北側のまとまりに墓の造営が確認できたのち、IIa1-IIa2 段階には前段階の墓の南北に造墓が見られた。IIb 段階以降は、墓地の南側に墓の分布が見られた。この大きな墓地の拡大過程の中で、上位クラスター構成墓に関しては、時期によって場所が異なる点が看取できた。まず Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階までは、墓地の北側に偏在が確認できた。一方で、IIb 段階や IIIa1-IIIa2 段階は墓自体の数が少ないため、偏在の認識が難しかった。したがって T 墓地では、サクスの仮説は、Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階には概ね適用できるが、そのほかの段階では不明なことがわかった。

B 墓地では、利用開始段階に当たる Ia2-Ia3 段階には北側と南側のまとまりの両方で墓の造営が確認できたのち、Ib1-Ib2 段階には前段階の墓の分布を核に、北のまとまりは西側に、南のまとまりは南側に墓地の拡大が読み取れた。この動き墓地利用の終了段階に当たる IIb 段階まで見られた。この大きな墓地の拡大過程の中で、上位クラスター構成墓は基本的に南北のまとまりの両方に造営され、各段階における造墓範囲に混交して見られることが看取できた。北側のまとまりに関しては、Ia2-Ia3 段階から IIb 段階まで北西側に墓の造営が見られた。また南側のまとまりでは、特に Ib1-Ib2 段階と IIa1-IIa2 段階により南側の部分で墓が確認できた。ここから、両方のまとまりで、各段階に用いられた埋葬地のより外側に上位クラスター構成墓がある程度まとまることが読み取れた。したがって B 墓地では、サクスの仮説は、どちらのまとまりにも部分的に適用できることがわかった。

これらを踏まえた上で、ナカダ遺跡の 5 ヶ所の墓地における上位クラスター構成墓の分布を考えると、大墓地東地区と同西地区、大墓地南地区、T 墓地、B 墓地の 4 つに分布の種類の違いが見られる。まず第 1 は大墓地東地区と同西地区の場合で、この 2 ヶ所の墓地では、墓地の利用が最も盛んになる Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階



に上位クラスター構成墓の緩やかな偏在が確認できることから、この段階にはある程度の墓地空間の占有が上位の縦の社会的地位にある人びとによって行われていたことが考えられる。次に大墓地南地区では、小規模な墓域の中にも明瞭な偏在が確認できたため、こちらは被葬者の縦の社会的地位の違いがより明瞭に反映されたと考えられる。T 墓地の場合は、北側のまとまりのさらに中心から北側部分が縦の社会的地位が高い人々によって優先的に用いられていたことが推定できる。そして B 墓地の場合は、母集落に 2 つの集団が想定でき、それぞれの集団には縦の社会的地位が高い人々が別々に存在したことが墓の分布に顕在化したと考えられる。以上の見解は、第 6 章で行った対象の 5 ケ所の墓地の序列化と整合的であり、序列の高い墓地ほど上位クラスター構成墓による墓地空間の占有の度合いが強いことが読み取れた。したがってナカダ遺跡では、被葬者の縦の社会的地位の高低と埋葬場所に関しては、地位が高ければ高いほど墓地内の特定の場所に埋葬される可能性が高いという規制が存在したことが考えられた。

## 10. ナカダ文化期におけるナカダ遺跡

本論文ではナカダ遺跡における縦の社会的地位に関わる構造の変化について墓地資料を用いて検討した。その結果、特にナカダ IIA 期から IIB 期間に相当する Ib1-Ib2 段階からナカダ遺跡では墓地利用が活発化し、同様の水準が IIa1-IIa2 段階まで続いたことがわかった。最初期から使用されていた大墓地東地区と同西地区では利用開始段階に当たる Ia1-Ia3 段階にすでに副葬品の内容に明確な差異が存在するが単純な差異が認められるに留まっていた一方、Ib1-Ib2 段階では特に中間層の厚みが増してより縦の社会構造が複雑化した点が読み取れた。そしてこの複雑な構造は IIa1-IIa2 段階まで継続し、内壁を有する日乾レンガ使用墓の出現や墓地空間における上位の墓の偏在化、墓地間の序列などをこの段階に観察することができた。IIB 段階以後は墓地利用の規模が急激に縮小し、III 段階の半ばまでにはどの墓地も廃絶することが読み取れた。この大まかな流れは、母集落であるサウスタウンの盛衰と対応していると考えられる。墓地遺跡を含めたナカダ遺跡におけるこの盛衰がなぜ生じたのかについて、同時代的な大きな枠組みとしてほかの遺跡との対外的な原因を探る必要がある。上エジプト地域の歴史的動向の中にナカダ遺跡を位置づけるため、第 1 章で言及した競合理論で最後の段階まで主導権を争ったとされる 2ヶ所の中心地遺跡で、地域政体 (regional polity) の中核的な遺跡とされる、アビュドス遺跡とヒエラコンポリス遺跡 (Andelković 2004; 2006; 2011; Campagno 2002; Kemp 1989; 2006; Wilkinson 2000) の通時的な様相を瞥見して比較し、上エジプト地域におけるナカダ文化期の流れの中にナカダ遺跡を位置づける。そのために、本章では墓地と集落の動態と発見された代表的な遺構や遺物に着眼してナカダ遺跡の位置づけを措定することを試みる。まずは両遺跡の初源と存続期間について瞥見する。

### 10.1. ヒエラコンポリス遺跡の概要

ヒエラコンポリス遺跡は今日のエドゥフ (Edfu) から北西におよそ 15 km のナイル河西岸に所在する (図 1.1.)。遺跡範囲内のナカダ文化期の地点は、これまでに墓地は 14 ヶ所、集落は 51 ヶ所など多数が確認された (図 10.1.) (Friedman 2008b: Table 1; Hendrickx and van den Brink 2002: 363; 380–2)。最初の調査は 1898–9 年に行われ、今日まで低位砂漠や氾濫原などの各所が発掘された (Adams 1987; 1995; Fairservis 1983a; 1983b; 1986; Fairservis et al. 1971/72; Hoffman 1982; Lansing 1935; Needler 1984; Quibell 1900; Quibell and Green 1902)。

これらの発掘調査による顕著な成果は以下の通りである。まず墓地では発掘者の述べるところのエリート層と一般層の両方の墓地が発見・発掘された。第 9 章などで触れた氾濫原から 2 km ほど奥に所在する HK6 地点ではナカダ IC-IIA 期の墓地が検出された。この墓地での特筆すべき発見は、列柱構造を持つ複数の建築物からなる複合体が 1 件と、ある 1 つの墓を核に付属墓や動物埋葬墓、壁体などの付属施設からなる埋葬複合体 2 件 (16 号墓と 72 号墓) である (e.g. Friedman 2008a; 2008b; 2009a; Friedman et al. 2011; 2017)。これらの埋葬複合体または列柱構造複合体はナカダ文化のほかの遺跡では類例がない遺構である。16 号墓複合体は IC-IIA 期、72 号墓複合体は恐らく IIA 期が造営時期として考えられており、従来はナカダ文化期中盤以降に徐々に墓の構造が複雑化すると考えられていた観点 (cf. Reisner 1936) からは、時期的にも極めて特異である。一方でこの墓地では、一般的な単独で存在する単純土坑墓はあまり見つかっていない。遺物の面では、焼成粘土製のマスクが 16 号墓から、23 号

墓からは石灰岩製の人物像、押圧剥離技術による動物の形態を持ったフリント製石器など、通常の土器やパレットなどに加えて儀礼的な用途の副葬品も多く出土したことが特徴である (e.g. Adams 2002; Friedman 2014)。このほかに西アジアなどの北方からの遺物や、黒曜石などの南方からの遺物も IIA 期と III 期に見られることが特徴である (Adams 1996; Adams and Friedman 1992)。さらにより低位砂漠と氾濫原の境界に近い HK31 地点では「100 号墓」と呼称される IIC 期ころの壁面を内部に有する日乾レンガ使用墓などが発見された (Case and Payne 1962; Kemp 1973; Quibell and Green 1902)。この墓は HK6 地点の利用停止後に使用されたエリート層の墓とも捉えられており、平面・内部構造がナカダ遺跡 T 墓地の T15 号墓と類似している点が指摘された (Kemp 1973)。このほかに同一の墓地からは日乾レンガ使用墓が複数調査された (Adams 1974a; 1974b)。一般層の墓地としては、第 6 章や第 9 章などで触れた HK43-44 地点が挙げられる。この墓地は IIA-IIB 期とされ、単純土坑墓のみで構成されるが、発掘者によると一部では墓の円環状の配列が検出された (Friedman 2008b; Friedman et al. 1999; 2002)。この墓地では、第 6 章で触れた通り遺骨の原状変更が見られたことも特徴である (Dougherty and Friedman 2008; Jones 2007)。また、HK6 地点では、IIA 期以後の空白期間を挟んで IIIA1 期から造墓が再開し、大型の土坑墓が複数造営された (e.g. Adams 2000; Hoffman et al. 1982)。

集落址では、住居址に加え、儀礼場、食糧生産や土器・石器製作の痕跡が確認された。HK29 地点でナカダ II 期前半の日乾レンガを部分的に使用した焼失住居が検出された (Hoffman 1980; 1982)。またナカダ II 期前半の HK24B 地点や HK11C 地点ではビール醸造址が検出された。特に HK11C 地点では製造されたビールが涸れ川を挟んだ対岸の HK6 地点の墓への供献されたことが推定されたほか、魚の加工など食糧の生産が行われた痕跡も見つかった。 (e.g. Baba et al. 2017; Geller 1992; Takamiya 2008)。HK29A 地点では、IIA 期から IIIB 期に至る期間に使用された儀礼場が検出された (Friedman 2009b)。この儀礼場では長辺 45 m、短辺 13 m の楕円形の広場が中心を占め、その周りに動物骨を含んだピットや柱穴が検出された。このほかに土器製作の痕跡は HK67 地点などの複数の地点で見つかったほか、石器製作の痕跡が HK29A 地点などで発見された (e.g. Takamiya and Endo 2008)。また氾濫原の遺丘型遺跡であるネケン (Nekhen) では、「パレス・ファサード (Palace Façade)」と呼ばれる、III 期から古王国時代にかけて見られた壁龕構造を持つ大規模な建築物址や集落、神殿址が発見された。パレス・ファサードは王朝時代には宮殿に用いられており、IIIC1 期以降に現れる王名を記した記章である「セルク (serekh)」にも使用されているため、ナカダ文化社会においても王を表す表象の一つと考えられ、発掘者らはネケンで発掘された建築物の址を権力者の居所と判断している (Fairservis et al. 1971/72)。神殿地区からは、精巧な浮き彫り加工で王の姿が描写された「ナルメル王のパレット」 (Petrie 1953b) や「ナルメル王のメイスヘッド」 (Payne 1993) などの III 期における王権を示す遺物が「メイン・デポジット (Main Deposit)」と呼ばれるデポから発見された。このほかに、HK27 地点には第 2 王朝最後の王であるカセケムイ (Khasekhemwy) の築いた日乾レンガを用いた城塞が存在する。なお、集落址ではバダリ文化期の痕跡も発見されており (Brunton 1932)、遺跡の利用開始時期はナカダ文化期以前に遡ると考えられる。対岸のエルカブ遺跡でもバダリ文化期の集落址が発見されており (Claes et al. 2014)、この地域における集落活動が紀元前 5 千年紀から行われていたと見られる。

ヒエラコンポリス遺跡の特徴は、ナカダ文化期前半の特異な墓地利用と、ナカダ文化期を通じて確認でき、部

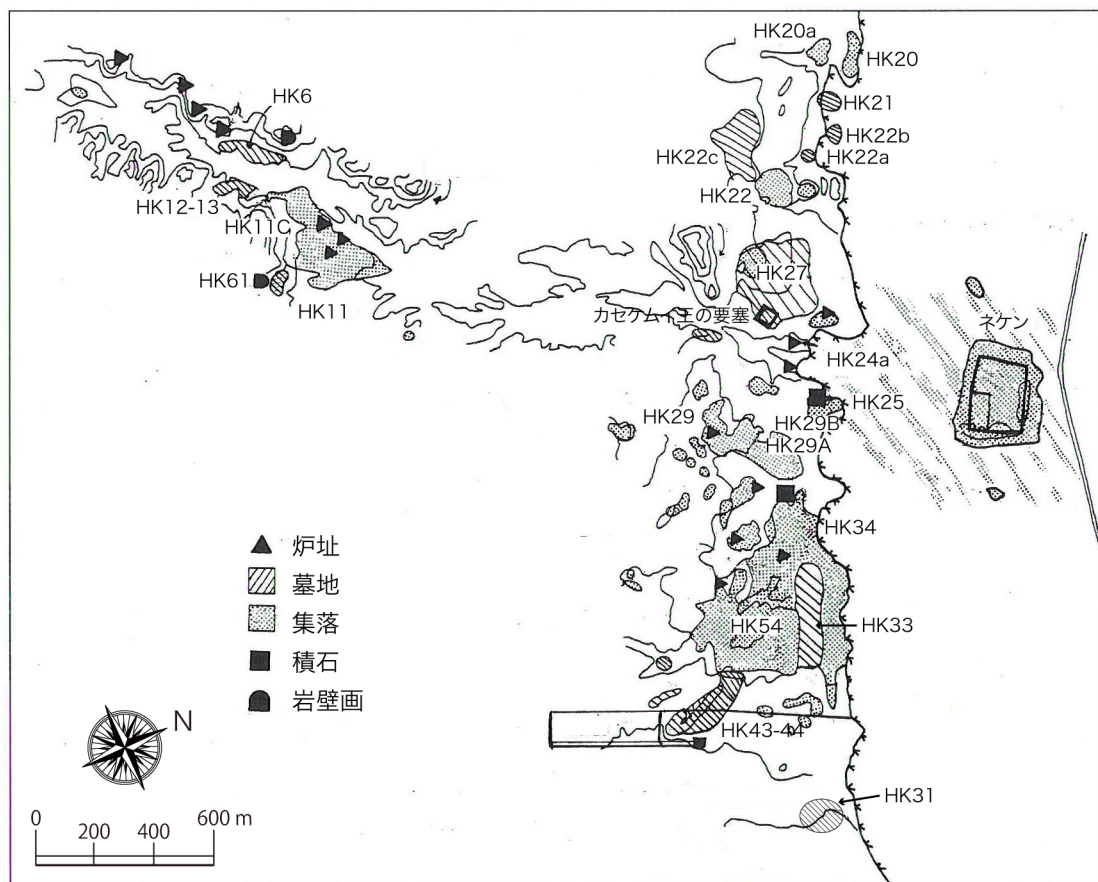


図 10.1. ヒエラコンポリス遺跡における主な地点位置図 (Adams Fig.1; Friedman 2008b Fig.1 加筆・修正)

分的には墓地利用とも対応する様々な集落活動である。一方で、特にⅡ期半ばにおける墓地活動はやや不明瞭な点も挙げられる。さらにⅢ期以降は、特にネケン地区が国家体制の成立を示唆する様々な遺構・遺物が発見されたため、重要性を持った事がわかる。ヒエラコンポリス遺跡が重要性を持つのはナカダ文化期前半とⅢ期前半であり、葬送の発展と国家体制の構築の痕跡が把握可能な遺跡と捉えられる。

## 10.2. アビュドス遺跡の概要

アビュドス遺跡はエジプト中部のソハーグ (Sohag) から南南東におよそ 48 km、近隣のエル=バルヤーナ (el-Balyana) 市から西南西におよそ 9.5 km の地点に所在する複合遺跡である (図 1.1.)。王朝時代には冥界を司るオシリス神信仰の中心地であり、多くの葬祭関連遺構が築造されてきた (e.g. Effland et al. 2010)。アビュドス遺跡におけるナカダ文化期の遺跡地点は、これまでに墓地遺跡 15 地点、集落遺跡少なくとも 4 地点が発見された (図 10.2.)。最初の調査は 1895-8 年に行われ、今日まで低位砂漠の縁辺部や内陸部の各所が発掘された (e.g. Amélineau 1899; Bestock 2009; Dreyer 1998; Hartmann 2016; Hartung 2001; Hossein 2011; Hussein 2016; 2017; de Morgan 1896; Naville 1914; Patch 1991; 2011; Peet 1914; Peet and Loat 1913; Petrie 1900; 1901; 1902; 1903; 1925; Randall-MacIver and Mace 1901)。

これらの発掘調査による顕著な成果は以下の通りである。墓地では、王墓地やそれに先立つ一般層の墓地が発見された。王墓地は、UeQ 地区 B 墓地でナカダ III C1-III D 期の第 1 王朝と第 2 王朝の後半の王墓地が発見・発掘された (Amélineau 1899; Kaiser and Dreyer 1982; Petrie 1900; 1901)。この墓地では第 1 王朝の 6 人の王と第 2 王朝の 2 人の王の墓を含む 14 基の墓が発見され、いずれも上部構造と地下構造を持ち、特に第 1 王朝の王墓には合計で 857 基の付属墓が造営された (cf. Reisner 1936: 429)。B 墓地に隣接する U 墓地では、今日までに先行する時期の IA 期から III B 期までの 617 基の土坑墓と 38 基の日乾レンガ使用墓が発掘された (Hartmann 2016; Hartung 2002; 2014/15)。U 墓地は IA-II B 期に最も多く利用されたと推定されている (Hartmann 2016)。III D2 期までは単純土坑墓のみだったのに対し、III A1 期以降は日乾レンガ使用墓のみが構築され、最初期の王墓とされる U-j 号墓などが発掘された (Dreyer 1998; Hartung 2001)。U-j 号墓は長辺 9.10 m、短辺 7.30 m、現地表面から深さおよそ 2 m を測り、内部は 10 部屋で構成された (Dreyer 1992; 1998)。また U-j 号墓からは王朝時代に王権の象徴の 1 つとされたヘカ杖 (*Hqa-scepter*) の形状をした象牙製品や、最初期の文字が書かれた象牙製のラベルが複数発見されたほか、ピートリー分類の W50/51 土器に加えて前期青銅器時代 I 期のカナーン地域から搬入が推定される土器が 400 点以上出土した (Dreyer 1998)。W50/51 土器は多数見つかり、そのうちの複数の個体にサソリが描かれていることから、U-j 号墓の被葬者の名はサソリ王 (*scorpion*) と推定された。U-j 号墓は U 墓地の中でも B 墓地側に存在し、王墓地の墓域が形成される先駆けとも捉えられる。U 墓地のほかにより氾濫原に近い低位砂漠上では E 墓地 (IA-III A2 期) や F 墓地 (IB-IC 期)、G 墓地 (IIC-III? 期)、Φ/X 墓地 (III D1-III B? 期) などが 20 世紀初期に発掘調査された (Neville 1911; Peet 1914; Randall-MacIver and Mace 1901)。また今日も所在する第 19 王朝のラメセス 2 世およびセティ 1 世の葬祭殿の付近では III C1-III D 期の墓地が近年検出された (Hossein 2011; Hussein 2016; 2017)。

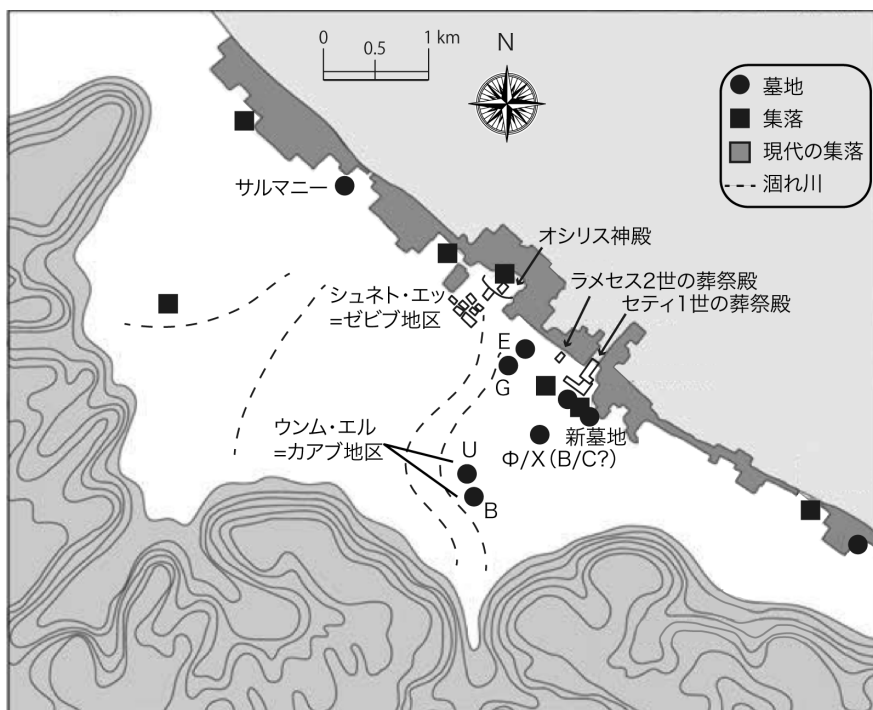


図 10.2. アビュドス遺跡における主な地点位置図 (Hartung 2014/15 Abb.1 加筆・修正)

これらの墓の多くは、日乾レンガを外壁に使用した地下式墓であることが特徴である。またシュネト・エツ=ゼビブ (Shunet ez-Zebib) 地区では、IIIC 期の葬祭と関連する日乾レンガを使用したパレス・ファサードを持つ囲み状の遺構 (funerary enclosure) が複数検出され (e.g. Bestock 2009)、いわゆる船の埋葬 (boat burial) も合わせて検出された (e.g. O'Connor 1991)。シュネト・エツ=ゼビブ地区から北におよそ 2 km のサルマニー遺跡では、IC-III A2 期の墓地発掘された (el-Sayed 1979)。

墓地が多数発掘された一方で、集落に関しては遺存状態が良い事例は少なく、わずかな調査事例があるのみである。ナカダ IID-III A1 期の集落からは住居址やビール醸造址が検出された (Peet 1914; Peet and Loat 1913)。この集落址は今日のラメセス 2 世およびセティ 1 世の葬祭殿の付近と推定されている (cf. Hussein 2017)。このほかにシュネト・エツ=ゼビブ地区付近では IIIB-III D 期の集落址や神殿址が発掘された (Petrie 1902)。さらにセティ 1 世の葬祭殿から南東におよそ 3 km の地点には IC-II C 期の集落址が発掘された (Randall-MacIver and Mace 1901)。

アビュドス遺跡の特徴は、ナカダ文化期を通じて墓地が確認でき、ナカダ III 期の王墓地の出現に至る通時的な墓地の発展が確認できる点である。一方で、特に I 期から II 期における対応する集落は付近に確認できておらず、やや遠隔の地点に確認されるに留まっている点も特徴として挙げられる。アビュドス遺跡が最も重要性を持つのは III 期以降であり、国家体制の構築と密接に関わる遺跡と考えられる。

### 10.3. ナカダ遺跡・ヒエラコンポリス遺跡・アビュドス遺跡の同時代的比較

以上、ヒエラコンポリス遺跡・アビュドス遺跡の概要を把握した。この把握を踏まえ、本論文で得られた結果を踏まえつつナカダ遺跡の位置づけを通時的な観点から捉え直す。特に墓地における特徴を主体に、集落などでの特徴を比較する。ナカダ遺跡の時期は、ほかの遺跡と共通の土台で議論するため、ヘンドリクス編年に置き換える。対応関係は、図 2.5 に示した。時期の枠組みとしては、ナカダ I 期 (IA-IC 期)、II 期前半 (IIA-II B 期)、II 期後半 (IIC-II D2 期)、III 期 (III A1 期以降) の 4 つに大きく分けた。

#### 10.3.1. ナカダ I 期

ナカダ遺跡では、ナカダ IA 期 (Ia1 段階) から大墓地東地区と同西地区が利用された。第 7 章で検討したように、この段階にはすでに明確な差異が存在したことが読み取れた一方、墓地内で上位の序列にある墓が空間的に偏在するなどの現象は見られなかった。IB 期 (Ia2 段階) からは B 墓地でも利用が開始された。Ib1 段階に当たる IC 期の後半からは、墓地利用の活発化が大墓地で始まり、II 期以降に続く動きが見られ始めた。集落では、サウスタウンにおける居住が推定されるが、確実な痕跡は乏しい。B 墓地の母集落である Kh.4 地点でも墓地と同時期からの居住が考えられるが、踏査のみで遺存状態も悪いため推定に留まる。IC 期の後半には墓地に反映されるかたちで、集落活動が活発化し始めたと考えられる。一方ヒエラコンポリス遺跡では、IA-IB 期に相当する明確な墓地資料は確認されていないものの、IC 期からは HK6 地点に埋葬複合体を伴う墓地が形成される。埋葬複合体などを形成しない典型的な墓域も HK12 地点などに存在すると思われるが、未調査なため取り扱えない。集落では HK29 地点などの複数の地点で I 期のおそらく後半から居住が確認できる。ただし、大部分が踏査に留まるた

め、詳細は不明である。アビュドス遺跡では、U 墓地でこの時期に最も活発な墓地利用が見られた一方で、造営された墓は単純土坑墓に留まった。対応する集落 U 墓地に近接する低位砂漠縁辺部には確認されておらず、やや離れた場所の事例のみが現在確認された事例である。以上を総合すると、ナカダ I 期には 3 ヶ所の遺跡のうち、ヒエラコンポリス遺跡が最も顕著な特徴を持つ事例を持つ。ナカダ遺跡ではすでに階層と認識可能できる明確な縦の社会的地位の分別の存在が考えられるが、ヒエラコンポリス遺跡にも明確な階層差が見られ、なおかつ墓地の占有や計画的な墓地空間の利用に大きな相違点が存在する。アビュドス遺跡でもナカダ遺跡と類似した状況にあったと考えられる。したがって、この時期の上エジプト地域におけるナカダ遺跡の位置付けは、ナカダ地域の中心地ではあるものの、ヒエラコンポリス遺跡に比肩する規模でなかったと考えられる。ただし、ヒエラコンポリス遺跡が広域に上エジプト地域におけるナカダ文化圏を広く影響下に置いていたかは不明である。競合仮説で示されたように、ナカダ I 期の上エジプト地域は 5 ヶ所程度の中心地が存在し、ナカダ遺跡はそのうちの 1 角として位置付けられる。重要な点は、この時期にすでに明確に分別された差異が墓地から読み取ることができ、特にナカダ遺跡では IC 期の後半には活発化の傾向が見られ始めると推定できる点である。ナカダ II 期以降に生じた社会構造の複雑化へ向けた萌芽はすでに形成されていたと考えられる。

### 10.3.2. ナカダ II 期前半

ナカダ遺跡では、ナカダ IIA 期 (Ib1 後半-I/II 前半段階) に大墓地東地区と同西地区の利用が最も活発化した。第 7 章で検討したように、この段階には中間層の厚みが飛躍的に増加するとともに、ナカダ I 期にすでに見られた最上位の墓の水準も維持された。また、墓地内で上位の序列にある墓の緩やかな空間的まとまりが見出せるようになる。Ib1 段階に属する 1610 号墓では、王朝時代に用いられた王冠の一種である「赤冠」が浮き彫りにされた B 土器の口縁部片 (AM 1895.795) が出土しており (Wainwright 1923)、この段階に伸長する墓地活動と上位の社会的地位の人々の存在との関連が推察される。B 墓地でも前の時期から引き続いて墓の造営が継続された。Ib1 段階に当たる IIA 期の後半には大墓地南地区が、Ib2 段階に当たる IIA-B 期には新たに T 墓地の造営が開始された。T 墓地では改葬墓などが造営され、儀礼上の役割を有した可能性が考えられた。II 期前半はナカダ遺跡の活動が最も活発化した時期であり、最盛期と考えられる。集落では、サウスタウンでの居住に加えて食糧生産などの痕跡も踏査などで見出された。墓の数の急増を考えると、集落に多くの人員が集まり集落活動が活発化した時期と考えられる。この動きを受け、B 墓地の母集落である Kh.4 地点では集落が廃絶され、元も住人はサウスタウンへと統合されたと考えられる。ヒエラコンポリス遺跡では、HK6 地点にて埋葬複合体が IC 期から IIA 期に造営されたため、この時期の初期にも継続して活発な墓地の造営活動が見られた。HK6 地点は IIA 期に一旦廃絶するが、より氾濫原に近い HK43 地点では IIA-II B 期に単純土坑墓からなる墓地が形成され、集落に居住した一般の人々はこちらに埋葬された。したがって IIA 期には、縦の社会的地位によって墓地が分別されていたと考えられる (cf. Friedman 2008b)。集落に関しては HK29 地点などの複数の地点に置いて I 期のおそらく後半から継続して本時期にも居住が継続したと考えられるが、詳細は不明である。また HK29A 地点では儀礼場が設けられ、使用が開始されたと推定される。アビュドス遺跡では、U 墓地では I 期に引き続いて活発な墓地利用が見られた一

方、造営された墓も基本的に単純土坑墓に留まった。この活動は、IIB 期の後半から一旦低調になった (Hartmann 2016)。集落に関しては I 期に引き続いて近接する低位砂漠縁辺部には確認されておらず、やや離れた場所の事例を確認できる。以上を総合すると、ナカダ II 期前半は 3ヶ所の遺跡のうち、ナカダ遺跡の興隆が最も著しかったと考えられる。ナカダ遺跡では階層が集落活動の活発化と人口の流入により複雑化した。ヒエラコンポリス遺跡は、エリート層の墓地の動向が HK6 地点の廃絶から若干不透明になる一方で、HK43-44 地点では多くの土坑墓が比較的短期間に造営されたことから遺跡内での人口は多い水準にあったと考えられる。おそらく I 期からの階層構造自体は維持されたと考えられる。アビュドス遺跡は前段階よりも活動が低下したとも考えられるが、概ね同規模を維持したと考えられる。したがって、この時期の上エジプト地域におけるナカダ遺跡の位置付けは、ナカダ地域の中心地であり、より勢力が伸長したと考えられる。規模的にもヒエラコンポリス遺跡に比肩するようになったと考えられる。第 8 章で見たように、東部砂漠産の資源などの搬入品の種類や量が増加したのはこの時期であり、物流に関連した集落活動の伸長が想定できる。競合仮説では、ナカダ II 期前半には、上エジプト地域のかつての 5ヶ所程度の中心地のうちアバディーヤが脱落するとされたが、東に接し、なおかつ諸資源の原産地に近いナカダが物流の主導権を握ったことでアバディーヤが弱体化されたとも捉えられる。この時期におけるナカダ遺跡の活動の伸長は著しく、上エジプト地域の中でもナカダ遺跡が重要性を持った段階と捉えられる。

### 10.3.3. ナカダ II 期後半

ナカダ遺跡では、ナカダ IIC-IID1 期 (I/II 後半-IIa2 段階) には II 期前半に引き続いて大墓地東地区と同西部地区の利用が活発な状態を概ね維持した。基本的に中間層の厚みは II 期前半から変わらず、墓の副葬品に見られる差異の構図も概ね維持された。墓地内における上位の序列にある墓の緩やかな空間的まとまりも大墓地東地区と同西部地区では維持された。この段階には大墓地南地区の利用も本格化した。またこの時期の T 墓地では T15 号墓や T20 号墓など日乾レンガを使用した複室構造の墓が造営されるようになり、ナカダ遺跡における縦の社会的地位が高い人々が埋葬されるようになった。B 墓地でも前の時期から引き続いて墓の造営が継続され、多量・多種類の副葬品が墓に納められた。II 期後半のうち、特に IID1 期はナカダ遺跡における墓地の活動が II 期前半に引き続いて活発な時期であり、最盛期の後半に当たると考えられる。この傾向は IIb 段階に当たる IID2 期になるとどの墓地でも衰微の兆候が見られるようになった。集落に関しても、墓の数を踏まえると引き続き多くの人員が居住し、活動が活発な時期だったと考えられる。ヒエラコンポリス遺跡では、HK31 地点においてナカダ文化期で唯一となる壁画を持つ 100 号墓が造営されるなど、複数の日乾レンガ使用墓が造営された。100 号墓は構造面でナカダ遺跡の T20 号墓と極めて類似する (Kemp 1973)。このほかに HK27 地点が新たに利用を開始され、単純土坑墓が造営された。ほかにもこの時期の墓地が存在する可能性はある (e.g. Friedman 2008b: Table 1) が、詳細は不明である。したがって II 期後半にも、縦の社会的地位によって墓地がある程度分別されていたと考えられる (cf. Friedman 2008b)。集落に関しては HK29 地点などの複数の地点で居住が継続したと考えられるが詳細は不明である。HK29A 地点では、儀礼場の使用が II 期後半まで続いた。アビュドス遺跡では、U 墓地では II 期前半の最後からの低調な墓地利用が IIC 期前半まで続いたものの、IIC 期後半以降は再び墓地利用がやや活発化した。造営さ



れた墓は基本的に単純土坑墓だが、精細な浮き彫りによる人物像を持つ象牙製のナイフ把手などの墓など副葬品の富裕さはⅡ期前半までと比べると全体的に高くなった（Hartung 2008; Hartung 2014/15）。浮き彫りを持つ象牙製のナイフ把手はナカダ遺跡では発見されていない遺物だが、しばしば今日ルーヴル美術館に収蔵されている伝ゲベル・エル=アラク出土の個体（e.g. Bénédite 1916）に見られるように円筒印章と同じく西アジアの同時代の意匠を持つ場合がある希少品の一種で、北方との物流上の繋がりを示唆する遺物である（Hartung 2014）。また G 墓地やΦ/X墓地などのほかの墓地の利用が開始された。対応する集落に関しては IIC 期まではⅡ期前半まで同様やや離れた場所の事例に確認できるが、IID1 期以降は氾濫原により近いおそらく今日セティ 1 世の葬祭殿が存在する付近に存在した可能性がある。以上を総合すると、ナカダⅡ期前半は 3 ヶ所の遺跡のうち、ナカダ遺跡は勢力を維持したものの IID2 期からは衰退に転じたため、最も力を持った遺跡は、Ⅱ期後半の中ごろまではナカダだったと考えられる。ナカダ遺跡では集落活動が引き続き活発なため、ある程度は複雑化した状態が継続したと考えられる。ヒエラコンポリス遺跡では、エリート層の墓地が HK31 地点で見られ、HK27 地点などでも多くの土坑墓が造営されたことから遺跡内での人口と階層構造はある程度の水準が維持されたと考えられる。アビュドス遺跡では U 墓地にのみ着目すると前段階よりも活動が低下したとも考えられるが、副葬品の点では優れることから縦の社会的地位による墓地の区別が行われ始めたと考えられる。したがって、この時期の上エジプト地域におけるナカダ遺跡の位置付けは、ナカダ地域の中心地であり、規模的にもヒエラコンポリス遺跡に比肩する状態を維持したと考えられるものの、IID2 期には衰退期に入ったと考えられる。東部砂漠産の資源などの搬入品の種類は移り変わるものの、全体的には物流の量が増加したため引き続きナカダが物流の面で重要性を持っていたと考えられるが、Ⅱ期後半の終盤にはこの構図は崩れる。アビュドス遺跡の伸長に取って代わられたと考えられる。ナカダ遺跡はこの時期の終盤に上エジプト地域の中で主体的に重要性を持つ立ち位置から転落したと捉えられる。

#### 10.3.4. ナカダⅢ期

ナカダ遺跡では、この時期にはⅡ期後半最終末からの流れを引きついで、墓地の利用が著しく退行した。各墓地は IIIA1 期に大墓地南地区、IIIB 期に同東墓地・T 墓地、IIIC1 期に大墓地西地区にいずれも利用が停止された。中間層の厚みも通時的に縮小し、墓の副葬品に見られる大きな差異も通時的になくなった。T 墓地などのかつての上位の社会的地位にあった人々の墓地でも、大きな差異は見られなくなる。Ⅱ期後半に存在した日乾レンガ使用墓も造営されなくなる。また既存の墓地の利用が終了する一方で、より Kh.2 地点などの小規模な墓地が新しく開かれる動きも若干見られるようになる。ただし集落に関しては、Ⅲ期に入っても複数の建築物が構築されたことは IUO 隊の調査から明らかにされた。墓地と集落の活動があまり対応しなくなったと考えられる。ヒエラコンポリス遺跡では、HK6 地点が空白期間を経て再利用され、大型の墓が複数造営されたものの、利用自体はあまり活発ではなくなる。むしろ HK27 地点などのより氾濫原側の墓地が継続して営まれた。この段階で重要なのは、氾濫原に所在するネケンであり、宮殿地区や神殿地区・居住地区などパレス・ファサードやメインデポジットから出土した図像を持つパレットやメイスヘッドなど、王権の成立に関わる様々な痕跡が確認されるようになった。アビュドス遺跡では、IIIA1-IIIB 期の U 墓地で少数の墓が造営されたが、すべて日乾レンガを使用した複室構造

の墓であり、最初期の王墓地となった。ほかにも氾濫原側で同時代の墓地が形成された。U 墓地の隣接地は、III C1 期以降は第 1 王朝や第 2 王朝時代の王墓地となった。合わせて集落も今日のセティ 1 世の葬祭殿付近に所在したと考えられた。以上を総合すると、ナカダ III 期は 3 ヶ所の遺跡のうち、ナカダ遺跡は完全に衰退し、最も力を持った遺跡はアビュドスだったと考えられる。ナカダ遺跡では集落活動自体は見られるため、社会自体は維持されたものの、墓からは差異を計ることが難しくなる。ヒエラコンポリス遺跡でも、エリート層の墓地が HK6 地点や、一般層の墓地である HK27 地点などがあり、多数の重要な遺物が出土したネケンも存在するため、2 番目に重要な遺跡だったと考えられる。最も重要な遺跡はアビュドス遺跡であり、王墓地とその母体となった集落は王朝開始後のナカダ文化期の重要な遺跡と考えられる。したがって、この時期の上エジプト地域におけるナカダ遺跡の位置付けは、ナカダ地域の中心地だった可能性はあるが完全に衰退しており、東部砂漠産の資源などの単なる物流上の経由地としての役割を持っていたと考えられる。例えば、バラス遺跡では継続して墓が造営され (Petrie and Quibell 1896)、その近隣の墓地であるバラス北遺跡でもナカダ遺跡の墓地よりはやや長く利用が継続された (Podzorski 1994)。そのため、規模が大幅に縮小しながらも物流上の機能がある程度保ったと推定できる。この集落・墓地活動の低下は、III C1 期以降は、ナカダ文化の中心地はより北方の下エジプト地域へと展開したため、ナカダ遺跡の必然的な辺境化を招いた点にあると考えられる。

#### 10.4. ヒエラコンポリス遺跡・アビュドス遺跡と比較した際のナカダ遺跡の特色

ヒエラコンポリス遺跡やアビュドス遺跡などの競合理論で中心地とされた遺跡と比較すると、ナカダ遺跡の墓地では、一般的な単純土坑墓ではない特殊な特徴を持つ日乾レンガ使用墓などがやや後発する点が特色である。その一方でナカダ IA 期の段階から一般的な単純土坑墓やその亜種であるステップ墓などが集中して 2000 基近く造営された事例は、ヒエラコンポリス遺跡やアビュドス遺跡では今日まで確認されていない。ここから、ナカダ遺跡では、顕著に労力を投じる墓の造営行為は一般的でなく、日乾レンガ使用墓などの一部の例外を除けば、どの墓も構造上は大きな差は見られないこともまた特色と言える。副葬品の点やおそらく規模の点からは、差異が存在することは観察できたが、構造上の違いとしては最盛期以外に見られない点は、I 期の後半から埋葬複合体が造営されたヒエラコンポリス遺跡と比べると大きな違いである。この点では、アビュドス遺跡と墓の造営に関する傾向は類似すると考えられる。被葬者の間に社会的な地位に基づく差異が存在する一方で、著しい差異は一部を除いて存在しないことがナカダ遺跡の通時的な特色である。これは II 期前半から始まる中間層の増加の点からも示唆される。そしてその背景には、東部砂漠から得られる諸資源の集積と物流上の管理などがあったと考えられ、ほかの遺跡にはないナカダ遺跡の特色と言える。最盛期の II 期ではヒエラコンポリス遺跡とは類似した水準にあった点にあり、墓の造営に大きな労力が投じられたと推定できる日乾レンガ使用墓の T 墓地における存在は、ナカダ遺跡がこの時期に最も重要性を持った遺跡であることを示す。III 期以降のナカダ遺跡の衰退は、ほかの 2 ヶ所の中心地との力学的関係が如実に現れており、この点も通時的視点に立って見た場合の盛衰が示される特色である。

これらの特色は、集落にも反映されている。集落活動の推移はヒエラコンポリス遺跡とナカダ遺跡とでは、拡

大期や中心化の時期は概ね同時期なもの、ナカダ遺跡の方がより早く低下することが示された (Hassan et al. 2017a; Hoffman et al. 1986)。一方で、ヒエラコンポリス遺跡のネケンのような神殿址や HK29A 地区のような儀礼場はナカダ遺跡の集落域では見つかっていない。ド・モルガンによって発掘された王族墓 PWT.112 地点のマスクバ墓 (de Morgan 1897) の事例はあるものの、ナカダ遺跡自体からはナルメル王のパレットやメイスヘッドなどの王権を表示する遺物が出土していない点は、ナカダ IID1 期以降ではナカダ遺跡の重要性がヒエラコンポリス遺跡やアビュドス遺跡と比較すると低かったことを間接的に示している。

従来は、競合理論に基づいたナカダ遺跡の位置づけがなされてきたが、ほかの 2 ヶ所の遺跡と比べた際の様々な痕跡の違いは、競合理論が述べるような地域の中心地としての共通性以上に、ある中心地が得手としていた役割やそれぞれの興隆の背景があることが考えられる。ナカダ遺跡であれば地理的な所在地と墓地と集落からの出土遺物の特徴から物流上の結節点として機能したことが推定できる。すなわち、物流が社会の複雑化をもたらしたとする考え方 (cf. Trigger 1983) がナカダ遺跡には当てはまると考えられる。一方で、ヒエラコンポリス遺跡では物流は間接的には重要性を持っていたものの、必ずしも直接的な要因ではないと考えられる。例えば、HK6 地点の造営と搬入品の増加は対応しない点は、直接的な要因でないことの傍証と考えられる。むしろヒエラコンポリス遺跡では、純粋に生産行為による社会の複雑化と中心地化が考えられる。多様な活動が明らかにされた集落の存在が、この点を指示すると考えられる。同じ理由はアビュドス遺跡にも当てはまる可能性があるが、特にナカダ文化期中盤以降は特に北方方面からの物流の面でも重要性を帯びたと考えられる。物流上の重要性は、特にナカダ IID2 期以降により重要となり、その主導権や管轄権がナカダ遺跡からアビュドス遺跡に移った可能性がある。IID2 期には明確な王墓の存在は認められていないものの、アビュドス遺跡がナイル河下流域で主導的な立ち位置を占める前駆として物流などへの管理の動きが生じた可能性が指摘できる。

## 11. 結論

### 11.1. まとめ

序論で述べたように、国家の形成という歴史的な大きな流れに対し、ナカダ文化期の中心地は大きく寄与したことが予想されるため、中心地遺跡を研究することは、社会がいつどのようにどのくらい複雑化したかについて検討するために貢献できるところが大きいと考えられた。この中心地の遺跡の1つであるナカダ遺跡は、重要でありながらも19世紀末や20世紀前半に発掘されたために成果の公表が限定的な遺跡である。したがって、ナカダ遺跡を未公開の記録を用いた研究は、アーカイヴに収蔵されたそうした記録の活用という新規の発掘調査とは違った方向性による新たな研究の展開が可能になる意味で重要性を持つ。新規の発掘調査の現場から得られる新たな知見を踏まえつつ未公開記録を検討することで先行研究をさらに発展させた新しい展開が期待できる。

この見通しを持って、階層などの縦の社会的地位に関わる社会構造 (Tainter 1978) がいかに変化し、その背後にある国家形成へと至る流れの中で果たしたナカダ遺跡は果たした役割を捉えることを研究の目的とし、ナカダ遺跡の最も重要な考古資料である墓地資料を対象に、階層や階級などの複雑化と単純化の過程を、今日入手することが可能な情報を可能な限り組み合わせて考究した (第6章-第9章)。そして近年新規の発掘調査で新たな知見が徐々に蓄積されつつある別の中心地の遺跡であるヒエラコンポリス遺跡とアビュドス遺跡と比較することで特に上エジプト地域におけるナカダ遺跡の位置づけを比較検討した。

この分析のためには基盤となる時間軸の設定が不可欠なため、相対編年を構築するために大元となる土器分類やそれらによって組まれた相対編年を最初期のピートリーの研究例から最も新しいアビュドス遺跡 U 墓地を対象に構築されたアビュドス編年に至るまでの研究事例の概要を記述した上で (第2章)、本論文ではアビュドス編年を基本にした相対編年の時間軸を設定し、それを近年新たに発見されたナカダ遺跡のアーカイヴ記録である墓別土器型式一覧表に適用することで各墓の時期を措定した (第3章・付編2)。

また、墓地資料から縦の次元の社会構造の複雑化を議論するために必要な着眼点を求めるために、特に1960年代以降に考古学一般における墓地研究に関する理論レベルの議論の概要と問題点をまとめ、ナカダ文化の墓地に関する先行研究のうち、特に縦の次元の社会構造の複雑化と取り扱った事例を中心にまとめた。そしてナカダ遺跡に関する先行研究は、現存する情報を可能な限り扱っておらず、時間軸の設定も大枠に過ぎ、成果は部分的かつ素描的なことを挙げ、近年の新規の発掘調査で得られた新しい知見を踏まえた見解の修正が必要な点を言及し、縦の次元の社会構造の複雑化を研究するため、1. 被葬者の地位に差異を見出しやすい副葬品と墓の規模への着眼とそれらの定量的な分析、2. 被葬者の地位に基づく墓地や区域の隔絶の有無、3. 新しい相対編年の時間軸の適用、4. 記録の拡充、の4つの方針を設定した (3.3.)。また本論文で実施する研究の前提となるナカダ遺跡とその周辺の考古遺跡における調査史をまとめ (第4章)、未公開記録の種類とそれぞれの特徴と限界点を把握し、そこから3.3.で設定した方針に則った分析対象の属性、分析方法や資料を設定した (第5章)。

以上の設定を踏まえて、属性の分析で得られた値に基づく被葬者の地位を巡る墓地の序列化 (第6章) と、それらの内実をクラスタリング (第7章) と希少品の占有 (第8章)、特定の墓の墓地内における偏在 (第9章) から、ナカダ遺跡における縦の次元の社会構造の複雑化を検討した。そしてその結果を踏まえてヒエラコンポリス

遺跡とアビュドス遺跡の2つの中心地遺跡と同時代的に通時的に比較することで、ナカダ遺跡の上エジプト地域における位置づけを考察した(第10章)。以下では、第6章-第10章の各章で分析により得られた結果と解釈の要点をまとめ、ナカダ遺跡における縦の社会構造の変化とナカダ文化期における位置づけを改めて確認する。

#### 11.1.1. 属性分析に基づく墓地の序列化

墓の規模(m<sup>2</sup>)、墓の平面形状、墓の構造、被葬者の人数、被葬者の性別と年齢、埋葬様式、各墓から出土した副葬品総点数、各墓から出土した副葬品種類数の8つの属性を対象に各属性を単独に分析したところ、各属性での結果は以下のようになった。

まず数値から直接序列を検討可能な属性である墓の規模(m<sup>2</sup>)、各墓から出土した副葬品総点数、各墓から出土した副葬品種類数の3つの結果は次の通りである。

墓の規模に関しては、各墓地に存在するすべての墓の平均を求めた場合、T墓地→大墓地西地区→大墓地南地区(→)B墓地(→)大墓地東地区となった。興味深い点は基本段階別に面積を検討した場合で、大墓地の3地区では通時的にあまり平均的な規模に大きな変化がないのに対し、T墓地ではIb1-Ib2段階が最も大きくその後は概ね小さくなり、反対にB墓地では通時的な平均面積の上昇が見られた。T墓地以外は造営される墓の規模に極端な違いはないものの、差異を見いだすことができた。墓の規模は被葬者の地位の差異と基本的に直結すると解釈できた。

副葬品の総点数に関しては、各墓地に存在する全ての墓における平均を求めた場合、T墓地→大墓地西地区→大墓地南地区→大墓地東地区(→)B墓地となった。大墓地西地区は例外的に大量の副葬品を有する墓が複数存在するものの、大多数の墓は8点を中心にした総点数を持つことがわかった。基本的には副葬品の総点数が多い場合は、被葬者の地位も高いことが推定されたが、注意しなければならない点も存在し、例えばT墓地のIb1-Ib2段階やIIa1-IIa2段階にみられる改葬墓では多種多様な副葬品こそ納められているものの、それらは埋葬様式の解釈にて後述するように葬送儀礼と結びついており、単純に被葬者の地位が高いとは言えない。それでもT墓地では改葬墓以外の副葬品総点数は多いため、上記の序列は維持できると判断できた。むしろ、T15号墓のように墓の構造面では最も優れた日乾レンガ使用墓にも関わらず副葬品の総点数が少ない点は、盗掘か追加埋葬に伴う既存の副葬品の撤去などの人為的な影響を受けている場合が考えられ、本来は総点数がさらに多く、地位の差異を表すために有効に機能していた可能性が考えられた。

副葬品の種類数に関しては、各墓地に存在する全ての墓における平均を求めた場合、T墓地→大墓地南地区→大墓地東地区→大墓地西地区(→)B墓地となった。注目できる点は、大墓地西地区は副葬品の総点数では多いのに対して種類数では少ない点である。逆に大墓地東地区は副葬品の総点数では少ないのに対して種類数では多く、序列の関係が逆転する。この点に関しては、大墓地西地区の墓では盗掘により元来の種類数よりも減少している可能性も考えられるものの、両墓地の違いはほとんどないため、納められる副葬品の多様性に大きな違いはなかったと推定できた。また上記したようにT墓地の改葬墓には多種多様な副葬品が納められるため、必ずしも被葬者の地位の高低と結びつかない場合がある点も考慮する必要がある。ただし、これらの点を踏まえても基本的に

は副葬品種類数もまた被葬者の地位の差異を決定する際に一定の役割を果たしたと推定できた。T 墓地の日乾レンガ使用墓に関して上記のように副葬品の総点数と同様に本来の種類数はさらに多様だった可能性が指摘できると考えられる。

次に直接数値から序列を検討できない属性である墓の平面形状と墓の構造、被葬者の人数、被葬者の性別と年齢、埋葬様式の分析で得られた結果と解釈は以下の通りである。

墓の平面形状は、どの墓地でも長方形の墓が同数または多数を占めており、墓の造営時には平面形状は長方形または長方形に近いかたちがより選択されたことが示された。一般に楕円形の墓よりも長方形の墓のほうが墓の規模が大きいとされているため (e.g. Midant-Reynes 2000a; 高宮 2003)、長方形の墓はより高い序列にあり、それらが多数を占める墓地もまた相対的に高い序列にあることが考えられた。この観点から墓の平面形状の割合 (表 6.8.) を見ると、墓地の序列は T 墓地 (→) B 墓地 (→) 大墓地西地区 → 大墓地南地区 → 大墓地東地区 となることを読み取れた。母集落が異なる B 墓地を除外すれば、サウスタウンを母集落とする 4 ケ所の墓地では概ね墓の規模を対象とした場合と同じ序列を得ることができた。ここからより序列の高い墓地では長方形の墓の形状が好んで造営される傾向にあることがわかった。

墓の構造に関しては、単純土坑墓、ステップ墓、接続・複合墓、日乾レンガ使用墓のうち、日乾レンガ使用墓が最も序列が高いことがヒエラコンポリス遺跡やアビュドス遺跡など事例から推定されてきた (Dreyer 1998; Kaiser and Dreyer 1982; Kemp 1973; Quibell and Green 1902; Reisner 1936)。特に日乾レンガで部屋構造を構築する墓は特に墓地内で序列が高いことが推定された。ここから、まず日乾レンガ使用墓に着眼して各墓地を検討したところ T 墓地での割合が最も高いことがわかった (表 6.9.)。次に単純土坑墓の亜種だが構築に労力がかかるステップ墓の分布を調べたところ、大墓地南地区における割合が最も高いことがわかった。また最も造営に労力がかからない単純土坑墓の割合が高ければ高いほどその墓地の序列は低いことが予期されたため、その割合を分析したところ、大墓地東地区が最も単純土坑墓の割合が高いことがわかった。以上を総合して、墓の構造の観点からは、T 墓地 → 大墓地南地区 → 大墓地西地区 (→) B 墓地 (→) 大墓地東地区 となることを読み取れた。

被葬者の人数に関しては、単葬墓を基本とするナカダ文化の墓制の中で、合葬墓の割合を測ることで各墓地や基本段階別にマイナーな墓制の一端が見出せると期待された。まず単葬墓と合葬墓の割合を検討したところ、T 墓地 (→) B 墓地 (→) 大墓地西地区 → 大墓地東地区 → 大墓地南地区 の順に合葬墓の割合が低くなることを読み取れた。次に人数別により詳細に検討した結果、4 人以上の合葬墓の割合が大墓地東地区と T 墓地で高いことがわかり、大墓地西地区や B 墓地では例外的なことがわかった。また大墓地南地区では合葬墓が皆無だった。しかしながら 4 人以上の合葬墓の割合が大墓地東地区と T 墓地に関しては、墓の構造や後述の埋葬様式を含めて考察すると割合の高さの意味が異なると解釈できた。すなわち、大墓地東地区では初期の基本段階により多いのに対して、T 墓地では IIa1-IIa2 段階に多く、墓の構造や埋葬様式では大墓地東地区の場合は単純土坑墓に納められた通常の一次葬なのに対して T 墓地の場合は日乾レンガ使用墓に納められた追加埋葬を伴う事例が改葬墓だった。ここから T 墓地の場合は特に墓に納められる際に被葬者の系統が重要だったことの一端を示すと推定できた。これは後述の墓地空間の占有とも関わる点と解釈される。以上から、被葬者の人数の観点ではすべての墓地を序列

化することはできないものの、少なくとも T 墓地はすべての墓地の中で最も序列が高いことが推定された。なお大墓地東地区の場合、特に 4 体以上の合葬墓に関しては儀礼行為の結果や血縁などが要因として解釈できるが、被葬者の縦の社会的地位は必ずしも高いとは限らないと推定される。

被葬者の性別と年齢に関しては、墓地を序列化するためには不向きな観点であるため序列を導くことはしなかった。まず性別に関しては、判定された事例に限ればどの墓地でも女性の割合が男性よりも多いが、性別不明な事例や記録がない事例も多いため実際の割合は不明だった。また年齢に関しても子ども以外的事例の正確な判定はできておらず、子どもの墓自体も極めて限定されて 28 人だった。子どもに関してはこのうちの 15 人が合葬墓に埋葬されていたことから、子どもを埋葬する場合は高頻度で合葬墓に葬られると解釈できた。また被葬者の性別と年齢からは、墓地利用の高低を把握するために利用できた。特に Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階には被葬者の数は著しく多いため (表 6.19)、この時期には墓地利用がどの墓地でも最も盛んだったと解釈できた。

埋葬様式に関しては、どの墓地でも基本的には一次葬であり、改葬墓や追加埋葬墓に関しては極めて例外的だったことが明らかになった (表 6.20)。これはナカダ遺跡の墓地での埋葬様式はほぼ一次葬で規制されていたことを意味する。逆に例外的な埋葬様式が存在することは、規制を越え出たあえて例外的な埋葬様式を選択する必要性があったと解釈できる。この例外的な埋葬様式である改葬と追加埋葬はどちらも時期的に限定されており、一過性ながら通常の埋葬様式とは異なる葬送儀礼が実行されたことが示唆された。まず改葬に関しては、葬送儀礼が社会の構成員の参画により社会の共同体意識を確認し高める役割があり、その一環として参画者に視覚的に注目される遺構の配置をとる場合がある点を考古学一般における事例から引用し (e.g. Barrett 1990; Mizoguchi 2014)、ナカダ遺跡で確認できる改葬墓は共同体意識を確認するための儀礼的な墓として機能したと推定した。一方で追加埋葬に関しては、有力者の墓に適用された埋葬様式と解釈した。これは墓の構造の面と組み合わせで理解でき、追加埋葬墓は日乾レンガ使用墓で、墓へ立ち入るための扉や傾斜路が存在した可能性があり (Kemp 1973)、内壁を有して部屋を形成していることから、1 回の埋葬で墓を閉じるのではなく追加で埋葬することを前提とした構造を持つと考えられた。この構造的な特徴は、例えば血縁や系統などを背景に特定の墓に継続的に埋葬することが可能な被葬者側の条件が存在する可能性を提示した。追加埋葬墓は IIa1-IIa2 段階でのみ見られ、日乾レンガを使用した墓の構造自体がナカダ文化全体でも珍しい事例であり、有力者の墓の可能性が考えられた。また、被葬者の遺体の原状変更についても議論を行い、少なくとも頸部の切断などはナカダ遺跡でも確認できることを明らかにした。ヒエラコンボリス遺跡 HK43-44 地点での近年の出土事例とその解釈 (Dougherty and Friedman 2008) を引用し、原状変更を受けた遺体は何らかの社会的な制裁の意味合いを持っていた可能性を考えた。

これらの結果を総括して墓地を序列化した場合、概ね T 墓地→大墓地西地区⇄大墓地南地区→大墓地東地区 (→) B 墓地となると解釈できた。B 墓地に関しては、属性によって序列上の立ち位置が異なるものの、特にサウスタウンを構成する 4 ヶ所の墓地には墓地ごとに属性に優劣が存在することが示された。これにより先行研究で示された T 墓地→大墓地西地区→B 墓地→大墓地東地区という見解 (Bard 1994) を修正できたと考えられる。

#### 11.1.2. クラスタリング

副葬品の総点数と種類数、墓の規模を変数にした k-means++法を用いたクラスタリングの結果により、墓の序列に関わって得られた知見を以下の4点にまとめた。1点目は Ia1-Ia3 段階からの明確な差異の存在である。クラスタリングの結果からこの時期に使用されていた大墓地東地区と同西地区では明確に水準が分けられる墓のまとまりの存在が明らかになった。この水準の違いは偶発的なものとは考えにくく、縦の社会的地位の差異、すなわち階層がナカダ文化期の初期からすでに存在していたと解釈した。ナカダ文化期に先行するバダリ文化期でも差異が報告されている (Anderson 1995) ため、前段階からの縦の社会構造の構図を引き継いでいた可能性が示唆された。2点目は Ib1-Ib2 段階における墓地利用の大幅な促進とそれに伴う中間層の厚みの増大である。中間層には顕著ではないものの差異が存在することから、階層は緩やかであり、一方で前段階から引き継いで顕著に差異を示す水準の墓のまとまりも存在することから、ナカダ遺跡の社会全体で階層構造が複雑化したことが推定できた。この理由には集落活動の活発化に伴う人口の流入などが考えられた。この流れは IIa1-IIa2 段階まで続いたため、母集落であるサウスタウンの最盛期は Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階に求められると推定できた。3点目は IIb 段階以降の墓地利用の低下に伴う変数上の差異の低減であり、集落活動の低下がそれまでの複雑な階層構造から単純な構造へと回帰したと考えられ、ナカダ自体の衰退が確認できた。4点目は、最盛期における墓地の分化とそれらの墓地には様々な水準の墓が内包された点である。これは墓地利用の活発化は既存の墓地に加えて新たな墓地の造営が開始されたことを意味するだけでなく、どの墓地でも縦の社会構造の様々な位置に属する人々が埋葬されたことを意味し、階層による埋葬地の差異は絶対的なものではなく、緩やかな規制に留まったと解釈できた。

クラスタリングで得られた墓のまとまりは主観的なもののため、ある時期に具体的に何層の社会構造が存在したかについては言及することができないものの、相対的な差異は明らかに Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階に大きくなり、母集落における社会の構造が複雑化していたことを示すことができた。

### 11.1.3. 希少品の占有

搬入品と加工に特殊な技術を要する精製品の2種類を希少品としてまとめ、それらが出土した墓と第7章で形成したクラスターとの対応を検討して、上位クラスターに希少品が占有されるか否かを検討した。その結果として希少品の種類によって出土するクラスターにちがいがあり、金、銅、玉髓類、石製容器、黒曜石、円筒印章などは概ねどの墓地でも縦の社会的地位を示すシンボルとして利用されたことが想定できた。また墓地によっては、方鉛鉱、赤鉄鉱、柘榴石、メイスヘッド、両面調整石器も被葬者の高位の社会階層を示すシンボルとして用いられた可能性が読み取れた。一方で、マラカイト、凍石、ラピスラズリは概ね中間のクラスターを構成する墓から出土することが確認でき、縦の社会的地位では中間層に位置付けられる人々にこれらの希少品の種類が用いられたことが読み取れた。さらに中間層の場合は、方鉛鉱や赤鉄鉱、柘榴石、メイスヘッド、両面調整石器などが部分的に用いられていた点が指摘できた。この点は、必ずしもこれらの希少品の種類が縦の社会的地位では上位の人々に占有されていたわけではないことを意味した。特定の希少品の保有の有無はあくまで相対的なもので、絶対的な占有には至っていなかったと考えられた。一方で、サンゴまたは紅海産貝類、およびパレットといった搬入を要する一方で、特に特定の階層のシンボルとしては用いられない種類の希少品も存在することが読み取れた。



これらの種類の物品は土器と同じく、被葬者の社会的な立ち位置とは直接関係しない基本的な副葬品のセットの一部だったと考えられる。なお大墓地西地区では最高位のクラスターよりも下のクラスターを構成する墓に希少品が含まれていることが多かったが、これは最高位のクラスターが土器のみか納められる副葬品の種類数が少なかったことが反映されている。したがって大墓地西地区では、実際には上位のクラスターにも多くの希少品が納められていた可能性が考えられた。

#### 11.1.4. 墓地内における特定の墓の偏在

第3章で扱ったサククスとゴールドステインによる墓地の空間的な占有に関する8番目の仮説 (Goldstein 1981, Saxe 1970) を検証するため、アビュドス編年に基づいて墓の分布を把握し、基本段階別に上位クラスターを構成する墓の所在地を捉えて墓地の空間的な占有の有無を検討した。その結果、墓地によって異なる結果が得られた。

大墓地東地区では Ia1-Ia3 段階には上位クラスターの偏在は認められなかったが、Ib1-Ib2 段階以降は墓地の西側で上位クラスター構成墓の散漫な集中が認められ、IIb 段階まで造営が続いた。一方で別の箇所にも上位クラスター構成墓が確認できるため、完全に偏在したわけではない点が読み取れた。ここから大墓地東地区では墓の造営箇所に関する規制は強くなく、サククスらの仮説は部分的にのみ適用できると考えられた。

大墓地西地区では Ia1-Ia3 段階から上位クラスターの偏在が認められた。上位クラスター構成墓は概ね墓地中央部の西側に所在し、この傾向が IIIb 段階まで続いた。加えて、Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階までは墓地東側でもごく少数の上位クラスター構成墓の造営が認められた。ここから、大墓地西地区では上位クラスター構成墓は墓地中央部の西側に空間的集中して造営され、最も墓地の利用が高まる Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階には造営場所が分散した可能性が読み取れた。以上から大墓地西地区では、サククスらの仮説が概ね適用できた。

大墓地南地区では利用が本格化する IIa1-IIa2 段階から時期によって異なる場所に上位クラスター構成墓の偏在した可能性が認められた。IIa1-IIa2 段階には、上位クラスター構成墓は墓地の北側に偏在することが明確に認識できた。一方で、IIb 段階や IIIa1-IIIa2 段階は墓自体の数が少ないため、偏在の認識が難しかった。したがって大墓地南地区では、サククスらの仮説は、IIa1-IIa2 段階には概ね適用できるが、そのほかの段階では不明なことがわかった。したがって大墓地西地区では、サククスらの仮説は部分的にのみ適用できると考えられた。

T 墓地では、Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階までは、墓地の北側に上位クラスター構成墓の偏在が確認できた。一方で、IIb 段階や IIIa1-IIIa2 段階は墓自体の数が少ないため、偏在の認識が難しかった。Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階までの偏在の中には、改葬墓や日乾レンガ使用墓など T 墓地を特徴付ける埋葬様式や構造を持つ墓が存在する点も特徴である。したがって T 墓地では、サククスらの仮説は、Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階には概ね適用できるが、そのほかの段階では不明なことがわかった。対象とした5ヶ所の墓地の中では最も顕著に上位クラスター構成墓の偏在が確認できた。

B 墓地では、墓地が南北の2つのまとまりに分けられ、上位クラスター構成墓は基本的に南北のまとまりの両方に造営されたことが看取できた。北側のまとまりでは、Ia2-Ia3 段階から IIb 段階まで北西側に上位クラスター構成墓の造営が見られ、南側のまとまりでは、特に Ib1-Ib2 段階と IIa1-IIa2 段階により南側部分で確認できた。両

方のまとまりでは各段階に用いられた埋葬地のより外側に上位クラスター構成墓が緩やかにまとまることを読み取れた。ここから B 墓地では、サクスの仮説は、どちらのまとまりにも部分的に適用できることがわかった。

以上から T 墓地を除けばいずれの墓地でも上位クラスター構成墓は緩やかな偏在に留まることが読み取れた。これは社会構造の複雑さに関わらず、墓地の一部における上位クラスター構成墓の空間的な占有は緩やかなもので、分布に反映される縦の社会的な差異は部分的なことがわかった。例外は T 墓地であり、Ib1-Ib2 段階から IIa1-IIa2 段階には、明確な墓の分布に関する占有が存在した可能性が考えられた。第 6 章における各属性の分析でみられるように T 墓地は属性別にみても最上位に序列化できる墓地だった。また大墓地西地区に見られるように、各属性の分析による序列化でより上位に位置づけられた墓地では緩やかながらより明確な上位クラスター構成墓のまとまりが確認できた。ここから、墓地の序列の高さは上位の被葬者を納める墓の分布が偏在化することと有意な関係にあると解釈でき、最上位の墓地では墓の空間的な使い方に強い規制が存在したと考えた。おそらく、最上位の階層に所属する人々のための埋葬地だったと考えられる。

#### 11.1.5. 被葬者の差異と上エジプト地域におけるナカダ遺跡の位置づけ

##### 11.1.5.1. 墓に表れる被葬者の差異

以上の分析によってナカダ遺跡の墓地資料のどの部分に被葬者の縦の社会的地位の差異を指し示す基準が生じるかを議論し、ナカダ遺跡における縦の社会的地位に関わる社会構造の一端を検討してきた。第 3 章において考古学一般における墓地研究に関する理論レベルの議論では、副葬品に関しては点数に加えて種類数が、墓の造営に投じられた労力の大きさが、被葬者の地位の差異を見出すために重要な視点であることが述べられてきた (Binford 1971; Brown 1981; Carr 1995; Tainter 1978)。また墓の空間的な配置や墓地の占有が、ある社会に系統などを背景にした社会構造の存在を示すことも述べられてきた (Goldstein 1981; Saxe 1970)。これらの諸点をナカダ遺跡で認められるかを分析した結果として、副葬品の総点数と種類数、および墓の規模が墓の差異を表すために重要であり、特に副葬品の種類数と比べて総点数により強く表れる可能性にあることが読み取れた。これは特にクラスタリングに際して読み取れた傾向だった (第 7 章)。また墓の規模は造墓に際して投じられた労力の一端を示すものとしてナカダ遺跡の事例にも有効で、墓の構造の面では日乾レンガなどの付加的な構築材の使用が墓の差異を際立たせることが読み取れた。副葬品の種類数よりも総点数がより重要な点は、民族事例を対象にした一般的な理論の成果とは異なるが、同じ着眼点であっても埋葬におけるそれらの特徴は文化や地域によって異なることはあり得る現象であり (cf. Hodder 1982; Parker Pearson 1999; Ucko 1969)、ナカダ文化期における埋葬上の特徴だったと考えることができる。規模の大きな墓を造営することを含めて造墓に投じる労力に墓の差異が表れるという点は、ナイル河下流域における王朝時代においても頻出する事例であり (cf. Bárta 2011; Grajetzki 2003; Reisner 1936; Taylor 2001)、ナカダ遺跡におけるこれらの差異の基準となる特徴は、ナカダ文化期には王朝時代の先駆としてすでに表れていたと考えられる。

##### 11.1.5.2. 上エジプト地域におけるナカダ遺跡の位置づけ

特に第 10 章で検討したように、ナカダ遺跡は主に物流による経済活動をもとにナカダ文化期中盤に興隆したと考えられた。第 8 章で検討したように、Ib1-Ib2 段階を境に搬入品の品目が増加したこと、墓地利用の増大から考えられる集落活動の活発化は時期的に符合し、経済活動の活発化が集落活動の盛化と連関して生じたと考えられる。物証の面からはこの時期を境にカナーン地域などの北方、エティオピアなどの南方、東部砂漠や紅海などの東方からの物品がナカダ遺跡から見つかることから、ナカダ遺跡は物流上の結節点に当たったことが判断された。第 4 章で触れた通り、IUO 隊によるサウスタウンでの調査では ZWE 地区から封泥片や円筒印章が見つかる点も傍証となる。ただし、ZWE 地区での発見物の正確な時期は不明でナカダ III 期に属する可能性も存在するため、ナカダ遺跡での活動の興隆を伴う物流の活発化と結びつくかは確実ではない点も留意する必要がある。集落域からの確実な証拠には乏しいものの、墓地資料には物流の活発化の痕跡は表れているため、本論文では物流が、ナカダ遺跡が上エジプト地域のナカダ文化の中で果たした独自の役割であると考えたい。したがって、ナカダ遺跡はナカダ文化期中盤の物流上の拠点だったという先行研究などの見解を受け継ぐ (e.g. Cox 2012; Fattovich et al. 2007)。この物流上の性格のために、ナカダ遺跡の縦の社会構造は、最上層を構成する顕著に差異を持つ人々の層を除き、それよりも下の中間層を占める人々の割合が多かったと考えられる。中間層を占める人々は、物流の実際の担い手だったかもしれない。あまり顕著な差がない分厚い中間層の存在は、ナカダ遺跡における物流にまつわる役割が Ib1-Ib2 段階以降に急速に拡大し、Iib 段階以降に低減することの傍証と捉えられるだろう。ナカダ遺跡の活動の低減と同時期に入れ替わるかたちでアビュドス遺跡における墓地の階層による分化や構造面で顕著な墓の出現、搬入品の増加が見られることから、ナカダ遺跡の役割はアビュドス遺跡に移行したと考えられる。この移行は希少品の原材料の占有そのものの掌握というよりも、物流構造の掌握というかたちで起こったと考えられる。アビュドス遺跡とナカダ遺跡の関係性は、特にナカダ文化期の後半以降は使役関係にあったと考えられる。東部砂漠で算出される諸資源の管理や集積の主体性がナカダ遺跡からは失われ、これを期にナカダ遺跡の活動が低下したと考えられる。墓地での活動が低下する一方で、集落ではナカダ III 期の活動も見られることから (e.g. di Pietro 2007; 2016; 2017; Fattovich et al. 2007)、アビュドス遺跡の影響のもとに限定的な活動がナカダ遺跡で続いたと考えられる。ナカダ遺跡の重要性はナカダ文化期中盤に中心地としての役割を担ったことにあり、直接的には初期の王権の誕生には結びつかなかったものの、ナイル河下流域において社会の枠組みを発達させるための潤滑油となる経済的な構造の醸成に寄与した遺跡だったと考えられる。

## 11.2. 今後の課題

本論文で扱った墓地資料からのナカダ文化社会の縦の社会構造の変化の検討に関連して 2 つの課題を示す。

### 11.2.1. 遺物研究の組み込み

本論文では、未公開記録から得られる数値などのデータに主に依拠してナカダ遺跡の社会における縦の社会構造の変化を検討してきた。反面、実資料の特徴をより詳細に反映した検討できていない点が課題である。例えば副葬品の形態に関しては土器を除いて今回の分析では主要な変数とはしなかった。被葬者の差異の考察と関連し

て挙げられる実資料の着眼点に関しては、例えば製作技術や特定型式の墓地内における分布、原材料の分布などが着眼点として挙げられる。製作技術に関しては、例えば土器や石製容器であればケズリ痕などの成型に伴う痕跡が捉えられれば、ナカダ遺跡におけるローカルな成型技術や製作者の特定などが可能になると思われる。さらにそれらの変遷を捉えれば、ローカルな型式の消失 (e.g. Friedman 2000) に伴う製作技術の変化も捉えることができるようになる予期される。政策副葬品の原材料に関しては、これまで博物館によって見解や記載、用語が異なっており、統一できていない点が問題となる。近年新規に発掘された遺跡を中心に進展が著しい遺物研究で提示された基準に基づいて原材料の確認をすることで、ナカダ遺跡における原材料の選択や流通といった点を実証的に検討することが可能になると思われる。遺物研究をさらに進展させて各資料の特徴が明らかになれば、副葬品の生産と消費という枠組みで、墓地資料の検討にさらに深みを持たせることが可能になると予想される。

この着眼点に立脚した研究を実施する場合は、博物館における実資料の実見が重要となる。ただし資料見学自体も問題点を持ち、例えばナカダ遺跡の出土資料はすべてが現存しているわけではないため、実見可能な個体は必然的に限定される点と、資料が各所に分散しているために実行に大きな労力を伴うことが予期できる。従来はこの資料が分散している点の実働面での障害となっていた面は否めない。しかし近年はオンライン上で所蔵目録が公開される博物館の事例も増加しており、ピンポイントで実見が必要な遺物にアクセスすることが可能になった。実見に先立って事前に遺物を選択できる点は、実資料の調査時に効率性を高めることに繋がると考えられる。

#### 11.2.2. 未公刊記録を用いた研究の限界点と可能性

第1章で記述した通り、ナカダ文化期の墓地遺跡は現在まで既知の遺跡のおよそ2/3が20世紀前半まで発掘調査された。その結果としてナカダ遺跡やアビュドス遺跡・ヒエラコンボリス遺跡などの重要なナカダ文化期の墓地遺跡が発掘された一方で、当時は調査成果が必ずしも出版されたわけではなく、出版されたとしても今日の水準から見ると不十分な場合がほとんどだった。したがって初期に発掘された重要な遺跡の成果は不十分に共有されたため、多くの遺跡では調査結果の部分的な公表とならざるを得なかった。ノートなどの未公刊の記録を用いた研究は初期の調査の成果を整理し、それまで知られていなかった情報や解釈を付加できる点で意義を持つ。反面、調査者自身にしかわからない記録事項には、解釈が介在することとなり、完全に調査者が捉えた認識を追跡することは難しくなる。そしてこの困難さは、遺跡を未公刊の記録を用いて研究した場合に、解釈全体に波及する可能性がある。これは特に現場での記述を簡便にするために調査者が用いた略称・記号などに特に当てはまる。記録の正しい理解のためには、そうした直接考古学とは関係ない面に通ずることも必要となる。またより実質的な面では、未公刊記録は手書きで記されているため、記録者の筆跡を熟知する必要がある。筆跡を十分に把握していない場合は、誤読を招くことにもつながる。調査者に直接尋ねることができない場合は、未公刊記録を用いて研究する側の人間の解釈が必ず入り込む点が、こうした研究の問題点である。

さらに手許に存在する記録が調査で得られた発見物全てではない可能性も十分に存在する。この場合はナカダ遺跡にも当てはまり、現存する墓のノートは全体の半分程度に留まる。こうした欠落は分析に直接影響する点であり、得られる結果が限定的になる可能性がある。手許に存在する記録で遺跡全体の傾向を導き出すのに十分代

表的な場合は問題ないが、墓 1 基単位での高精度な分析には記録の欠落は直接的に影響すると考えられる。複数の記録が利用可能な場合、それらを相互参照することで散逸した部分の墓が持っていた情報を可能な限り回収する必要があると言える。墓別土器型式一覧表のように、後代になって新たに記録が発見される場合もあるため、アーカイヴ記録の収集と綿密な内容の確認が求められ、未知の情報が付加できる可能性もある。

### 11.3. 結語

本論文では、ナカダ遺跡の墓地資料をもとに、同遺跡における社会構造の複雑化と単純化の流れをトレースしてきた。考古学的な言説としては、物流にまつわる経済活動がナカダ遺跡の社会構造を進展させかつ衰退させた点を述べてきた。しかしより実際の面では、未公刊記録を可能な限り扱って考古学的な知見を深めることを企図し、実行してきた。11.2.2.で記したように、未公刊記録は発掘調査で得られた成果のすべてが収録されているわけではなく、散逸の影響を免れているか否かによって情報の完全性が大きく影響される。従来の研究ではこの点が問題視され、アーカイヴに保存された未公刊記録を活用する研究の方向が本格化していなかった。しかし、近年の発掘調査による成果の一方で、初期の調査で得られた知見に関しては抜粋的で、議論の俎上に十分に乘ってきたとは言えなかった。過去の発掘報告書に掲載された変数を用いた定量的・統計的な分析も資料が部分的であるゆえに得られる結果も不完全なものとして捉えられる傾向にあった。しかし、過去の発掘で記録された情報にも、新規の発掘調査で得られた知見と複合しつつ検討されることで、それまでの知見を改訂することは可能と考えられる。現在のナカダ文化の研究で重要な点は、新規の発掘調査と博物館に収蔵された膨大な過去の発掘の記録の両方を調査して複合・関連づけていくことであり、どちらか一方に偏るのではなく、均衡して相互補完的に研究を進めていく必要があると考える。そのためにナカダ遺跡は重要な遺跡の 1 つであり現場から得られる新たな知見と習合してナカダ文化の研究を推進するための役割を担っていると考える。

## 謝辞

本研究の実施にあたり、資料調査、資料のご提供、情報提供、ご助言、ご著作の提供などの多大なご協力を以下の方々・機関から賜りました。記して御礼を申し上げます。ご助言などは本論文に反映しておりますが、誤謬などがあつた場合も含めて文責はすべて筆者に属することを明記します。

まず、筆者が学部から大学院まで過ごした首都大学東京大学院考古学研究室の山田昌久先生、出穂雅実先生、岩瀬彬先生、西洋史研究室の高橋亮介先生・稲垣春樹先生からは、これまで研究室に在籍する中で、演習時や調査中、それ以外の場で数々のご指導・ご助言・励ましを賜りました。指導要員の山田先生からは、学部時代からの足掛け11年以上の長期に亘って考古学を基礎からご教授いただきました。また出穂雅実先生、岩瀬彬先生、稲垣春樹先生からは、日々のご指導に加えて研究に関してご相談の場を設けていただき、様々な疑問点にお答えいただきました。2016年に着任された高橋亮介先生からは、古代エジプトの研究に関する数々のご助言を賜りました。博士後期課程の時間をともに過ごした白石哲也氏・萩原弘幸氏・橋本望氏・堀恭介氏・田中康太郎氏・廣松滉一氏・吉留頌平氏とは、演習時や研究室での日常などで研究に関する議論を行うことができました。

博物館訪問による資料調査では、以下の方々から多大なご支援をいただきました。ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン考古学科：アリス・スティーヴンソン (Alice Stevenson) 博士、ラファエル・スパークス (Raphael Sparks) 博士。同ピートリー・エジプト考古学博物館：アンナ・ガーネット (Anna Garnett) 博士、トレイシー・ゴールドディング (Tracey Golding) 氏。マンチェスター大学付属博物館：キャンベル・プライス (Campbell Price) 博士、スーザン・マーティン (Susan Martin) 博士、ギャレス・フライアー (Gareth Frier) 氏。大英博物館古代エジプト・スーダン部：ダニエル・アントワヌ (Daniel Antoine) 博士、ルネイ・アンダーソン (Renée Anderson) 博士、マルセル・マレー (Marcel Marée) 博士、スザンヌ・ウッドハウス (Susanne Woodhouse) 氏。オクスフォード大学附属アシュモレアン博物館古代部：リアム・マクナマラ (Liam McNamara) 博士、クレア・バートン (Claire Burton) 氏。ケンブリッジ大学付属フィッツウィリアム美術館古代部：ヘレン・ストルードウィック (Helen Strudwick) 博士、カリス・ミレット (Charis Millett) 氏。同考古学・人類学博物館：イモーゲン・ガン (Imogen Gunn) 氏。メードストーン博物・美術館：パーニル・リチャーズ (Pernille Richards) 氏。ロチェスター・ギルドホール博物館：スティーヴン・ナイ (Steven Nye) 氏。タッチストーンズ・ロッチデール：サラ・ホジキンソン (Sarah Hodgkinson) 氏、ヘレン・マクフィーリー (Helen McFeery) 氏。ベクスリー・ホール・プレイス & ガーデンス：カースティ・マカラン (Kirsty Macklen) 氏。ベルリン旧博物館：ローベルト・クーン (Robert Kuhn) 博士。レーマー・ペリツァエウス博物館：クリストファー・バイヤー (Christopher Bayer) 博士、オリファー・ガウアート (Oliver Gauert) 博士。バイエルン州立エジプト美術博物館：シルヴィア・ショスケ (Sylvia Schoske) 博士、ヤン-ミヒャエル・ダームス (Jan-Michael Dahms) 博士。ブリュッセル王立美術歴史博物館：ディルク・フイヘ (Dirk Huyge) 博士†、リュック・デルヴォー (Luc Delvaux) 博士、ヴーター・クラス (Wouter Claes) 博士。デンマーク国立博物館：アンヌ・ハスルン・ハンセン (Anne Haslund Hansen) 博士。

筆者が2013年に初めてピートリー博物館を訪れた際に学芸員だったスティーヴンソン博士からは、議論を通

じてナカダ文化期の遺跡をアーカイヴ記録から研究することの重要性をご教示いただきました。また、同博士からは墓別の土器型式一覧やフィールドノートなどナカダ遺跡に関する様々なアーカイヴ記録をご提供いただき、使用の快諾をいただきました。先行研究では知られていないナカダ遺跡出土資料の収蔵先などの情報に関してもご教示いただきました。これらの記録なくして本論文の執筆は不可能であり、厚く御礼を申し上げます。

またナカダ遺跡のフィールドノートは、所蔵先のピートリー博物館の学芸員ガーネット博士から使用のご許可を賜りました。規定に基づき、ノートの使用に関して同博物館から許可を得た旨を記します。Use permission of Petrie's archival records is by courtesy of the Petrie Museum of Egyptian Archaeology, University College London.

近藤康久先生（総合地球環境学研究所）、三木健裕氏（ベルリン自由大学）からは、筆者が2014年より参加しているオマーンでの調査で、調査技術などの取得に当たって多大なご教示を賜るとともに、西アジア考古学の立場から見た際のナカダ文化に関する考えや、本論文に関するご助言を賜りました。

安岡義文氏（東京大学）からは、博物館学芸員の連絡先などのご教示のほか、折に触れて励ましのお言葉を賜りました。

2016年より筆者が参加しているエジプトのゲベレイン遺跡の調査隊長であるヴォイチェフ・エイスマンド（Wojciech Ejsmond）氏（ワルシャワ大学）からは、ナカダ文化研究の現状や問題点に関する議論を行い、有益なご助言をいただきました。また実地でナカダ文化期の墓地を踏査し、土器の分類を経験できた点は、博物館での資料調査へと役立つ知識や土器観察の着眼点を得ることに繋がり、非常に有益でした。

ナイル河下流域の新石器時代土器の研究を専門とするジョシュア・エミット（Joshua Emmitt）博士（オークランド大学）からは、ナカダ文化の研究に対する先史考古学の視点に立った議論とご助言をいただきました。また同博士からは英語論文を執筆した際には言語面の校正などの多大なご協力をいただきました。

バート・ヴァンザイネ（Bart Vanthuyne）博士（ルーヴァン大学）、ヨリス・ヴァン・フェーテリンク（Joris van Wetering）博士（元 UCL 考古学科）からは近年のナカダ遺跡を巡る研究の動向に関する助言をいただきました。またヴァン・フェーテリンク博士からは、未出版の論文の引用に関して快諾をいただきました。

スタン・ヘンドリクス（Stan Hendrickx）博士（ハッセルトメディア美術デザイン大学）からは、現在のナカダ文化の土器編年に関する問題点に関して、ご教示を賜りました。

公益財団法人 高梨学術奨励基金からは2013・2015・2016・2017年度に若手研究者助成を受けました。助成により欧州への渡航が可能となり、本研究に不可欠な資料調査を実施することができました。

最後に、学部時代から一貫して支えて頂いた父・母・弟・祖母に深甚の感謝を申し上げます。

末筆ではございますが、以上の方々・機関に重ねて厚く御礼を申し上げます。

# 引用文献

## 凡例

- 引用文献の表記方法は、日本西アジア考古学会が発行する雑誌『西アジア考古学』で規定された形式に則った。
- 記載順は欧米言語による文献を先に記し、邦語文献はその後ろに記した。欧米言語による文献はアルファベット順に、邦語文献は五十音順に列記した。双方とも同一著者による複数の文献がある場合は発行年代が古いものから順に記載し、同一著者による同一発行年の文献が複数ある場合は a, b, c... の順に発行年の後に付して区別した。

[英・独・仏・伊・蘭語文献]

- Abd el-Moneim, M. A. M. 2000 Knobbed bowls of the late Predynastic-Early Dynastic period. In L. Krzyżaniak, K. Kroeper and M. Kobusiewicz (eds.), *Recent Research into the Stone Age of Northeastern Africa*, 149–157. Poznań, Poznań Archaeological Museum.
- Abdel-Motelib, A., M. Bode, R. Hartmann, U. Hartung, A. Hauptmann and K. Pfeiffer 2012 Archaeometallurgical expeditions to the Sinai Peninsula and the Eastern Desert of Egypt. *Metalla* 19/1–2: 3–59.
- Adams, B. 1974a *Ancient Hierakonpolis*. Warminster, Aris & Philipps.
- Adams, B. 1974b *Ancient Hierakonpolis: Supplement*. Warminster, Aris & Philipps.
- Adams, B. 1986 *Sculptured pottery from Koptos in the Petrie collection*. Warminster, Aris & Philipps.
- Adams, B. 1987 *The Fort Cemetery at Hierakonpolis (Excavated by John Garstang)*. London, KPI.
- Adams, B. 1995 *Ancient Nekhen : Garstang in the city of Hierakonpolis*. New Malden, SIA.
- Adams, B. 1996 Imports and imitations in Predynastic funerary contexts at Hierakonpolis. In L. Krzyżaniak, K. Kroeper and M. Kobusiewicz (eds.), *Interregional Contacts in the Later Prehistory of Northeastern Africa*, 133–143. Poznań, Poznań Archaeological Museum.
- Adams, B. 2000 *Excavations in the Locality 6 cemetery at Hierakonpolis 1979–1985*. Oxford, Archaeopress.
- Adams, B. 2002 Seeking the roots of ancient Egypt: A unique cemetery reveals monuments and rituals from before the Pharaohs. *Archéo-Nil* 12: 11–28.
- Adams, B. and R. F. Friedman 1992 Imports and influences in the Predynastic and Protodynastic settlement and funerary assemblages at Hierakonpolis. In E. C. M. van den Brink (ed.), *The Nile Delta in Transition: 4th.–3rd. Millennium B.C. Proceedings of the Seminar held in Cairo, 21.–24. October 1990, at the Netherlands Institute of Archaeology and Arabic Studies*, 317–338. Tel Aviv, Published by E. C. M. van den Brink.



- Amélineau, É. 1899 *Les nouvelles fouilles d'Abydos I (1895–1896)*. Paris, Ernest Leroux.
- Andelković, B. 2004 The Upper Egyptian commonwealth: A crucial phase of the state formation process. In S. Hendrickx, R. F. Friedman, K. M. Ciałowicz and M. Chłodnicki (eds.), *Egypt at its Origins: Studies in Memory of Barbara Adams*, 535–546. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Andelković, B. 2006 Models of state formation in Predynastic Egypt. In K. Kroeper, M. Chłodnicki and M. Kobusiewicz (eds.), *Archaeology of Early Northeastern Africa: In Memory of Lech Krzyżaniak*, 593–609. Poznań, Poznań Archaeological Museum.
- Andelković, B. 2011 Political organization of Egypt in the Predynastic period. In E. Teeter (ed.), *Before the Pyramids: The Origins of Egyptian Civilization*, 25–32. Chicago, IL, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Anderson, D. A. 2006 *Power and competition in the Upper Egyptian Predynastic: A view from the Predynastic settlement at el-Mahâsna, Egypt*. Unpublished Ph.D. Dissertation. Pittsburgh, PA, University of Pittsburgh.
- Anderson, D. A. 2007 Zoomorphic figurines from the Predynastic settlement at el-Mahasna, Egypt. In Z. Hawass and J. Richards (eds.), *The Archaeology and Art of Ancient Egypt: Essays in Honor of David B. O'Connor*, 33–54. Cairo, Conseil Suprême des Antiquités de l'Égypte.
- Anderson, W. 1992 Badarian burials: Evidence of social inequality in Middle Egypt during the early Predynastic era. *Journal of the American Research Center in Egypt* 29: 51–66.
- Arthur, D., and S. Vassilvitskii 2007 K-means++: the advantages of careful seeding. *Proceedings of the Eighteenth Annual ACM-SIAM Symposium on Discrete Algorithms*, 1027–1035. Philadelphia, PA, Society for Industrial and Applied Mathematics.
- Aston, B. G., J. A. Harrell and I. Shaw 2000 Stone. In P. T. Nicholson and I. Shaw (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, 5–77. Cambridge, Cambridge University Press.
- Atzler, M. 1981 *Untersuchungen zur Herausbildung von Herrschaftsformen in Ägypten*. Hildesheim, Gerstenberg Verlag.
- Ayrton, E. R. and W. L. S. Loat 1911 *The Pre-dynastic cemetery at El Mahasna*. London, Egypt Exploration Fund.
- Baba, M., W. van Neer and B. de Cupere 2017 Industrial food production activities during the Naqada II period at HK11C, Hierakonpolis. In B. Midant-Reynes, Y. Tristant, and E. M. Ryan (eds.), *Egypt at its Origins* 5, 3–34. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Bagh, T. 2004 First Dynasty jewelry and amulets. Finds from the Royal Naqada Tomb: Proposed reconstructions, comparisons and interpretations. In S. Hendrickx, R. F. Friedman, K. M. Ciałowicz and M. Chłodnicki (eds.), *Egypt at its Origins: Studies in Memory of Barbara Adams*, 591–605. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Baines, J. 1995 Origins of Egyptian kingship. In D. O'Connor and D. P. Silverman (eds.), *Ancient Egyptian Kingship*, 95–156. Leiden, Brill.
- Baines, J. 1989 Communication and display: the integration of early Egyptian art and writing. *Antiquity* 63: 471–482.
- Baines, J. 2013 *High culture and experience in ancient Egypt*. Sheffield, Equinox Publishing.

- Bard, K. A. 1988 A quantitative analysis of the Predynastic burials in Armant cemetery 1400–1500. *The Journal of Egyptian Archaeology* 74: 39–55.
- Bard, K. A. 1989 The evolution of social complexity in Predynastic Egypt: An analysis of the Naqada cemeteries. *Journal of Mediterranean Archaeology* 2/2: 223–248.
- Bard, K. A. 1994 *From farmers to Pharaohs: Mortuary evidence for the rise of complex society in Egypt*. Sheffield, Sheffield Academic Press.
- Barocas, C. 1986 Les raisons d'une fouille et d'un survey: Le site de Naqadah. *Cahiers de recherches de l'Institut de Papyrologie et d'Égyptologie de Lille* 8: 17–28.
- Barocas, C. 1989 Fouilles de l'Instituto Universitario Orientale (Naples) à Zawaydah (Naqadah, "South Town" de Petrie: Campagne 1984. In S. Schoske (ed.), *Akten des vierten Internationalen Ägyptologen Konferenz, München 1985. Band 2*, 299–303. Hamburg, Helmut Buske Verlag.
- Barocas, C., R. Fattovich and M. Tosi 1989 The Oriental Institute of Naples expedition to Petrie's South Town (Upper Egypt), 1977–1983: An interim report. In L. Krzyżaniak and M. Kobusiewicz (eds.), *Late Prehistory of the Nile Basin and the Sahara*, 290–301. Poznań, Poznań Archaeological Museum.
- Barrett, J. C. 1990 The monumentality of death: The character of Early Bronze Age mortuary mounds in southern Britain. *World Archaeology* 22: 179–189.
- Bárta, M. 2011 *Journey to the West: The world of the Old Kingdom tombs in ancient Egypt*. Praha, Filozofická fakulta Univerzity Karlovy v Praze.
- Bartel, B. 1982 A historical review of ethnological and archaeological analyses of mortuary practice. *Journal of Anthropological Archaeology* 1/1: 32–58.
- Baumgartel, E. J. 1955 *The cultures of prehistoric Egypt I*. Revised edition. London, Oxford University Press.
- Baumgartel, E. J. 1960 *The cultures of prehistoric Egypt II*. London, Oxford University Press.
- Baumgartel, E. J. 1970 *Petrie's Naqada excavation: A supplement*. London, Bernard Quaritch.
- Bavay, L. 1997 Matière première et commerce à longue distance: La lapis-luzuri et l'Égypte prédynastique. *Archéo-Nil* 7: 79–100.
- Bavay, L., D. Faltings, L. André and T. de Putter 2004 A bladelet core from Tell el-Fara'in-Buto and the origin of obsidian in the Buto-Maadi Culture of Lower Egypt. In S. Hendrickx, R.F. Friedman, K.M. Ciałowicz and M. Chłodnicki (eds.), *Egypt at its Origins: Studies in Memory of Barbara Adams*: 607–619. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Bavay, L., T. de Putter, B. Adams, J. Navez and L. André 2000 The origin of obsidian in Predynastic and Early Dynastic Upper Egypt. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 56: 5–20.
- Bénédite, G. 1916 Le couteau de Gebel el-'Arak: Étude sur un nouvel objet préhistorique acquis par le Musée du Louvre. *Fondation Eugène Piot. Monuments et mémoires publiés par l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres* 22: 1–34.
- Bestock, L. 2009 *The development of royal funerary cult at Abydos: Two funerary enclosures from the reign of Aha*.

- Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Beuthe, T. 2013 On the validity of sexing data from early excavations: Examples from Qau. *The Journal of Egyptian Archaeology* 99: 308–311.
- Bienkowski, P. and E. Southworth 1986 *Egyptian antiquities in the Liverpool Museum I: A list of the provenance objects*. Warminster, Aris & Phillips Ltd.
- Binford, L. R. 1962 Archaeology as anthropology. *American Antiquity* 28/2: 217–225.
- Binford, L. R. 1971 Mortuary practices: Their study and their potential. In J. Brown (ed.), *Approaches to the Social Dimensions of Mortuary Practices*, 6–29. Washington, DC, Society for American Archaeology.
- Blinkenberg, C. and K. Friis Johansen 1924 *Corpus vasorum antiquorum: Danemark. Copenhague Musée national (Collection des antiquités classiques): Fasc. 1*. Paris and Copenhagen, Librairie ancienne Édouard Champion and Librairie V. Pio – Povl Branner.
- Boehmer, R. M. 1974 Das Rollsiegel im prädynastischen Ägypten. *Archäologische Anzeiger* 4: 497–503.
- Borchardt, L. 1898 Das Grab des Menes. *Zeitschrift für ägyptischen Sprache und Altertumskunde* 36: 87–105.
- Brown, J. A. 1971 Introduction. In J. Brown (ed.), *Approaches to the Social Dimensions of Mortuary Practices*, 1–5. Washington, DC, Society for American Archaeology.
- Brown, J. A. 1981 The search for rank in prehistoric burials. In R. Chapman, I. Kinnes and K. Randsborg (eds.), *The Archaeology of Death*, 25–38. Cambridge, Cambridge University Press.
- Brown, J. A. 1995 On mortuary analysis: With special reference to the Saxe–Binford research program. In L. A. Beck (ed.), *Regional approaches to mortuary analysis*, 3–26. New York, Plenum Press.
- Brumfiel, E. M. 1989 Factional competition in complex society. In D. Miller, M. Rowland and E. Tilley (eds.), *Domination and Resistance*: 127–139. London, Unwin Hyman.
- Brunton, G. 1932 The Predynastic town-sites at Hierakonpolis. In Egypt Exploration Society (ed.), *Studies Presented to F.L.L. Griffith*, 272–276. London, Egypt Exploration Society.
- Brunton, G. and G. Caton-Thompson 1928 *The Badarian Civilisation and Predynastic remains near Badari*. London, Bernard Quaritch.
- Butzer, K. W. 1959a Environment and human ecology in Egypt during Predynastic and Early Dynastic times. *Bulletin de la Société de Géographie d'Égypte* 32: 43–87.
- Butzer, K. W. 1959b Contributions to the Pleistocene geology of the Nile valley. *Erdkunde* 13: 46–67.
- Butzer, K. W. 1976 *Early hydraulic civilization in Egypt: A study in cultural ecology*. Chicago, IL, The University of Chicago Press.
- Butzer, K. W. 1999a Climate. In K. A. Bard (ed.), *Encyclopedia of Archaeology of Ancient Egypt*, 227–228. London and New York, Routledge.
- Butzer, K. W. 1999b Climatic history. In K. A. Bard (ed.), *Encyclopedia of Archaeology of Ancient Egypt*, 228–232. London

- and New York, Routledge.
- Campagno, M. 2002 On the Predynastic 'Proto-State' of Upper Egypt. *Göttinger Miszellen* 188: 49–60.
- Campagno, M. 2003 Space and shape: Notes on pre- and proto-state funerary practices in ancient Egypt. In S. Bickel and A. Loprieno (eds.), *Basel Egyptology Prize 1: Junior Research in Egyptian History, Archaeology, and Philology*, 13–26. Basel, Schwabe.
- Carneiro, R. L. 1970 A theory of the origin of the State. *Science* 169: 733–738.
- Carr, C. 1995 Mortuary practices: Their social, philosophical-religious, circumstantial, and physical determinants. *Journal of Archaeological Method and Theory* 2/2: 105–200.
- Case, H. and J. C. Payne 1962 Tomb 100: The Decorated Tomb at Hierakonpolis. *The Journal of Egyptian Archaeology* 48: 5–18.
- Castillos, J. J. 1982 *A reappraisal of the published evidence on Egyptian Predynastic and Early Dynastic cemeteries*. Toronto, Benben Publications.
- Castillos, J. J. 1983 *A study of the spatial distribution of large and richly endowed tombs in Egyptian Predynastic and Early Dynastic cemeteries*. Mississauga, Benben Publications.
- Centre de la Vieille Charité (Marseille) 1990 *L'Égypte des millénaires obscurs*. Marseille, Musées de Marseille.
- Chantre, É. 1899a Notes sur les nécropoles de la Haute Égypte. *Bulletin de la Société d'Anthropologie de Lyon* 18: 67–70.
- Chantre, É. 1899b Étude craniologique sur la population prépharaonique de la Haute Égypte. Nécropole de Khozam. Note préliminaire. *Bulletin de la Société d'Anthropologie de Lyon* 18: 187–192.
- Chantre, É. 1907 La nécropole Memphite de Khozan (Haute-Égypte) et l'origine des égyptiens. *Bulletin de la Société d'Anthropologie de Lyon* 29: 229–246.
- Chantre, É. 1908 *Réponse de M. Ernest Chantre aux accusations portées contre lui au sujet de ses travaux sur la nécropole de Khozan*. Lyon, A. Rey.
- Chapman, R. 2003 Death, society and archaeology: The social dimensions of mortuary practices. *Mortality* 8/3: 305–312.
- Chapman, R. and K. Randsborg 1981 Approaches to the archaeology of death. In R. Chapman, I. Kinnes and K. Randsborg (eds.), *The Archaeology of Death*, 1–24. Cambridge, Cambridge University Press.
- Chłodnicki, M. and K. M. Ciałowicz 2007 Golden figures from Tell el-Farkha. *Studies in Ancient Art and Civilization* 10: 1–15.
- Ciałowicz, K. M. 1989 Predynastic mace-heads in the Nile Valley. In L. Krzyżaniak and M. Kobusiewicz (eds.), *Late Prehistory of the Nile Basin and the Sahara*, 261–266. Poznań, Poznań Archaeological Museum.
- Ciałowicz, K. M. 1998 The king and his retinue: The origins of archaic accompanied burials. *Gdańsk Archaeological Museum African Reports* 1: 23–32.
- Ciałowicz, K. M. 2011 Excavation on the Western Kom: Lower Egyptian settlement on the Western Kom. In M. Chłodnicki, K. M. Ciałowicz and A. Mączyńska (eds.), *Tell el-Farkha I: Excavations 1998–2011*, 149–162. Poznań and Kraków,

- Poznań Archaeological Museum and Institute of Archaeology, Jagiellonian University, Kraków.
- Claes, W., S. Hendrickx, A. Devillers, E. Hart, K. Kindermann, M. de Dapper, S. Ikram, G. Storms, C. Swerts and D. Huyge 2014 From the early Old Kingdom to the Badarian: Preliminary report on the 2012 excavation campaign in the settlement area of Elkab. In A. Mączyńska (ed.), *The Nile Delta as a Centre of Cultural Interactions between Upper Egypt and the Southern Levant in the 4th Millennium BC*, 73–94. Poznań, Poznań Archaeological Museum.
- Cox, J. 2012 Trade and power: The role of Naqada as a trading centre in Predynastic Egypt. In C. M. Knoblauch and J. C. Gill (eds.), *Egyptology in Australia and New Zealand 2009: Proceedings of the conference held in Melbourne, September 4th–6th*, 1–8. Oxford, Archaeopress.
- Crubézy, E., S. Duchesne and B. Midant-Reynes 2008 The Predynastic cemetery at Adaima (Upper Egypt): General presentation and implications for the populations of Predynastic Egypt. In Y. Tristant and B. Midant-Reynes (eds.), *Egypt at its Origins 2*, 289–310. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Crubézy, E., T. Janin and B. Midant-Reynes 2002 *Adaima II: La nécropole prédynastique*. Le Caire, Institut Français d'Archéologie Orientale.
- David, R. 1980 *The Macclesfield collection of Egyptian antiquities*. Warminster, Aris & Phillips Ltd.
- Davis, W. M. 1983 Cemetery T at Nagada. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 39: 17–28.
- Debono, F. 1951 Expedition archéologique royale au desert oriental (Keft-Kosseir): Rapport préliminaire sur la campagne 1949. *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 51: 59–110.
- Dee, M. W., D. Wengrow, A. Shortland, A. Stevenson, F. Brock, L. Girdland Flink and C. Bronk Ramsey 2013 An absolute chronology for early Egypt using radiocarbon dating and Bayesian statistical modelling. *Proceedings of the Royal Society A* 469 (2159). [doi:10.1098/rspa.2013.0395]
- Delrue, P. 2001 The Predynastic cemetery N7000 at Naga ed-Dêr: A re-evaluation. In H. Willems (ed.), *Social Aspects of Funerary Culture in the Egyptian Old and Middle Kingdom*, 21–66. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Dougherty, S. P. and R. F. Friedman 2008 Sacred or mundane: Scalping and decapitation at Predynastic Hierakonpolis. In Y. Tristant and B. Midant-Reynes (eds.), *Egypt at its Origins 2*, 311–338. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Dreyer, G. 1992 Recent discoveries at Abydos Cemetery U. In E. C. M. van den Brink (ed.), *The Nile Delta in Transition: 4th.–3rd. Millennium B.C. Proceedings of the Seminar held in Cairo, 21.–24. October 1990, at the Netherlands Institute of Archaeology and Arabic Studies*, 293–299. Tel Aviv, Published by E. C. M. van den Brink.
- Dreyer, G. 1998 *Umm el-Qaab I: Das prädynastische Königsgrab U-j und seine frühen Schriftzeugnisse*. Mainz am Rhein, Verlag Philipp von Zabern.
- Effland, U., J. Budka and A. Effland 2010 Studien zum Osiriskult in Umm el-Qaab/Abydos: Ein Vorbericht. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 66: 19–91.
- Egypt Exploration Society 2018 *The Naqada Regional Archaeological Survey and Site Management Project*. <https://www.ees.ac.uk/naqada>. (2018 年 9 月 17 日 閱覽)

- el-Sayed, A. 1979 A prehistoric cemetery in the Abydos area. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 35: 249–301.
- Ejsmond, W., J. Chyla and C. Baka 2015 Report from field reconnaissance at Gebelein, Khozam and el-Rizeiqat. *Polish Archaeology in the Mediterranean* 24/1: 265–274.
- Ellis, C. 1992 A Statistical Analysis of the Protodynastic Burials in the "Valley" Cemetery of Kafr Tarkhan. In E. C. M. van den Brink (ed.), *The Nile Delta in Transition: 4th.–3rd. Millennium B.C. Proceedings of the Seminar held in Cairo, 21.–24. October 1990, at the Netherlands Institute of Archaeology and Arabic Studies*, 241–258. Tel Aviv, Published by E. C. M. van den Brink.
- Ellis, C. 1996 Expression of social status: a statistical approach to the Late Predynastic/Early Dynastic cemeteries of Kafr Tarkhan. In L. Krzyżaniak, K. Kroeper and M. Kobusiewicz (eds.), *Interregional Contacts in the Later Prehistory of Northeastern Africa*, 151–164. Poznań, Poznań Archaeological Museum.
- Emery, W. B. 1939 A preliminary report on the First Dynasty copper treasure from North Saqqara. *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 39: 427–437.
- Emery, W. B. 1949 *Great Tombs of the First Dynasty I*. Cairo, Government Press.
- Emery, W. B. 1952 *Saqqara and the Dynastic Race: An inaugural lecture delivered at University College London*. London, H.K. Lewis & Co Ltd.
- Emery, W. B. 1954 *Great Tombs of the First Dynasty II*. London, Egypt Exploration Fund.
- Emery, W. B. 1958 *Great Tombs of the First Dynasty III*. London, Egypt Exploration Fund.
- Emery, W. B. 1962 *A funerary repast in an Egyptian tomb of the Archaic Period*. Leiden, Brill.
- Emery, W. B. and Z. Y. Saad 1938 *Excavations at Saqqara: The tomb of Hemaka*. Cairo, Government Press.
- Emery, W. B. and Z. Y. Saad 1939 *Excavations at Saqqara 1937–1938: Hor-Aha*. Cairo, Government Press.
- Endesfelder, E. 1990 Zur Keramikausstattung prädynastischer Gräber, dargestellt am Beispiel des Friedhofes von Armant. D. Apelt, E. Endesfelder and S. Wenig (eds.), *Meroitica 12: Studia in honorem Fritz Hintze*, 97–118. Berlin, Akademie-Verlag Berlin.
- Fairservis, W. A. 1983a *The Hierakonpolis Project: Excavation of the temple area on the Kom el Gemuwia season of 1978*. Poughkeepsie, NY, Vassar College.
- Fairservis, W. A. 1983b *The Hierakonpolis Project: The graffiti and the origins of Egyptian Hieroglyphic writing*. Poughkeepsie, NY, Vassar College.
- Fairservis, W. A. 1986 *The Hierakonpolis Project: Excavation of the archaic remains east of the niched gate season of 1981*. Poughkeepsie, NY, Vassar College.
- Fairservis, W. A., M. A. Hoffman and K. R. Weeks 1971/72 Preliminary report on the first two seasons at Hierakonpolis. *Journal of American Research Center in Egypt* 9: 7–27, 67–99.
- Fattovich, R. 2001 La missione archeologica italiana dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli in Alto Egitto (Naqadah):

- Un ricordo e un commento. In M. Casini (ed.), *Cento anni in Egitto: Percorsi dell'archeologia italiana*, 35–37. Firenze, Electa.
- Fattovich, R. 2006 Some general remarks on the origins of the state in Upper Egypt. In K. Kroeper, M. Chłodnicki and M. Kobusiewicz (eds.), *Archaeology of Early Northeastern Africa: In Memory of Lech Krzyżaniak*, 623–646. Poznań, Poznań Archaeological Museum.
- Fattovich, R., S. Malgora, R. Pirelli and M. Tosi 2007 Exploration at South Town by the Naples Oriental Institute (1977–1986). In H. Hanna (ed.), *The International Conference on Heritage of Naqada and Qus Region, Vol. I.*, 45–56. Cairo, ICOM.
- Fawcett, C. D. 1902 A second study of the variation and correlation of the human skull, with special reference to the Naqada crania. *Biometrika* 1: 408–467.
- Flores, D. V. 2003 *Funerary sacrifice of animals in the Egyptian Predynastic period*. Oxford, Archaeopress.
- Frazer, J. G. 1890 *The golden bough: A study in comparative religion*. First edition. London, Macmillan & Co.
- Fried, M. H. 1967 *The evolution of political society: An essay in political anthropology*. New York, Random House.
- Friedman, R. F. 1994 *Predynastic settlement ceramics of Upper Egypt: A comparative study of the ceramics of Hemamieh, Nagada and Hierakonpolis*. Unpublished Ph.D. dissertation. Ann Arbor, MI, University Microfilms International.
- Friedman, R. F. 2000 Regional diversity in the Predynastic pottery of Upper Egyptian settlements. In L. Krzyżaniak, K. Kroeper and M. Kobusiewicz (eds.), *Recent Research into the Stone Age of Northeastern Africa*, 171–186. Poznań, Poznań Archaeological Museum.
- Friedman, R. F. 2004 Farewell to HK 43. *Nekhen News* 16: 4.
- Friedman, R. F. 2008a Excavating Egypt's early kings: Recent discoveries in the elite cemetery at Hierakonpolis. In Y. Tristant and B. Midant-Reynes (eds.), *Egypt at its Origins* 2, 1157–1194. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Friedman, R. F. 2008b The cemeteries of Hierakonpolis. *Archéo-Nil* 18: 8–29.
- Friedman, R. F. 2009a HK6 checklist. *Nekhen News* 21: 7.
- Friedman, R. F. 2009b Hierakonpolis Locality HK29A: The Predynastic ceremonial center revisited. *Journal of the American Research Center in Egypt* 45: 79–103.
- Friedman, R. F. 2014 The masks of Hierakonpolis cemetery HK6. In M. A. Jucha, J. Dębowska-Ludwin and P. Kołodziejczyk (eds.), *Aegyptus est Imago Caeli: Studies Presented to Krzysztof M. Ciałowicz on his 60th Birthday*, 115–127. Kraków, Institute of Archaeology, Jagiellonian University in Kraków.
- Friedman, R. F., A. Maish, A. G. Fahmy, J. C. Darnell and E. D. Johnson 1999 Preliminary report on field work at Hierakonpolis: 1996–1998. *Journal of American Research Center in Egypt* 34: 1–35.
- Friedman, R. F., W. van Neer, B. de Cupere and X. Droux 2017 The elite Predynastic cemetery at Hierakonpolis HK6: 2011–2015 progress report. In B. Midant-Reynes, Y. Tristant and E. M. Ryan (eds.), *Egypt at its Origins* 5, 231–289. Leuven, Uitgeverij Peeters.

- Friedman, R. F., W. van Neer and V. Linseele 2011 The elite Predynastic cemetery at Hierakonpolis: 2009–2010 update. In R. F. Friedman and P. N. Fiske (eds.), *Egypt at its Origins 3*, 157–198. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Friedman, R. F., E. Watrall, J. Jones, A. G. Fahmy, W. van Neer and V. Linseele 2002 Excavations at Hierakonpolis. *Archéo-Nil* 12: 55–68.
- Fustel de Coulanges, N. D. 1864 *La cité antique*. Paris, Librairie Hachette.
- Gale, N. H. and Z. A. Stos-Gale 1981 Ancient Egyptian silver. *The Journal of Egyptian Archaeology* 67: 103–115.
- Garstang, J. 1902a Excavations at Reqaqnah in Upper Egypt. *Man* 2: 65–66.
- Garstang, J. 1902b *Mahâsna and Bêt Khallaf*. London, Bernard Quaritch.
- Garstang, J. 1907 The so-called Tomb of Mena at Nagadeh in Upper Egypt. *Report of the British Association for the Advancement of Science. 74th Meeting, Cambridge*: 711–712. London, British Association for the Advancement of Science.
- Geller, J. R. 1992 Predynastic Beer Production at Hierakonpolis, Upper Egypt: Archaeological Evidence and anthropological Implications. Unpublished Ph.D. dissertation. Ann Arbor, MI, University Microfilms International.
- Giménez, J., J. A. Sánchez and L. Solano 2017 Identifying the Ethiopian origin of the obsidian found in Upper Egypt (Naqada period) and the most likely exchange routes. *The Journal of Egyptian Archaeology* 101: 349–359.
- Girardi, C. 2017 Diversity in Body Treatment in the Predynastic Cemetery at Naga ed-Deir (N 7000). In B. Midant-Reynes, Y. Tristant and E. M. Ryan (eds.), *Egypt at Its Origins 5*, 291–310. Leuven, Uitgeverij Peeters
- Goldstein, L. 1981 One-dimensional archaeology and multidimensional people: Spatial organization and mortuary analysis. In R. Chapman, I. Kinnes and K. Randsborg (eds.), *The Archaeology of Death*, 53–70. Cambridge, Cambridge University Press.
- Goodenough, W. H. 1965 Rethinking ‘Status’ and Role: Toward a general model of the cultural organizations of social relationships. In M. Banton (ed.), *The Relevance of Models for Social Anthropology*, 1–24. London, Tavistock Publications.
- Grajetzki, W. 2003 *Burial customs in ancient Egypt: Life in death for rich and poor*. London, Duckworth.
- Gran-Aymerich, E. and J. Gran-Aymerich 1994 À la confluence de la préhistoire et de l'Égyptologie: Les origines de la préhistoire orientale et Jacques de Morgan. In C. Berger, G. Clerc and N. Grimal (eds.), *Hommages à Jean Leclant: Tome IV. Varia*, 85–96. Le Caire: Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Griswold, W. A. 1992a *Imports and social status: The role of long-distance trade in Predynastic Egyptian state formation*. Unpublished Ph.D. dissertation. Ann Arbor, University Microfilms International.
- Griswold, W. A. 1992b Measuring social inequality at Armant. In R. F. Friedman and B. Adams (eds.), *The Followers of Horus: Studies dedicated to Michael Allen Hoffman*: 193–198. Oxford, Oxbow Books.
- Harrell, J. A., V. Max Brown and M. S. Masoud. 2000 An Early Dynastic Quarry for stone vessels at Gebel Manzal el-Seyl, Eastern Desert. *The Journal of Egyptian Archaeology* 86: 33–42.
- Hartmann, R. 2011a Some remarks on the chronology of the early Naqada Culture (Naqada I / Early Naqada II) in Upper



- Egypt. *Archéo-Nil* 21: 21–32.
- Hartmann, R. 2011b The chronology of Naqada I tombs in the Predynastic cemetery U at Abydos. In R. F. Friedman and P. N. Fiske (eds.), *Egypt at its Origins* 3, 917–938. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Hartmann, R. 2016 *Umm el-Qaab IV: Die Keramik der älteren und mittleren Naqadakultur aus dem prädynastischen Friedhof U in Abydos (Umm el-Qaab)*. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Hartung, U. 1998a Prädynastische Siegelabrollungen aus dem Friedhof U in Abydos (Umm el-Qaab). *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 54: 187–217.
- Hartung, U. 1998b Zur Entwicklung des Handels und zum Beginn wirtschaftlicher Administration im prädynastischen Ägypten. *Studien zur Altägyptischen Kultur* 26: 35–50.
- Hartung, U. 2001 *Umm el-Qaab II: Importkeramik aus dem Friedhof U in Abydos (Umm el-Qaab) und die Beziehungen Ägyptens zu Vorderasien im 4. Jahrtausend v.Chr.* Mainz am Rhein, Verlag Philipp von Zabern.
- Hartung, U. 2002 Abydos, Umm el-Qaab: Le cimetière prédynastique U. *Archéo-Nil* 12: 87–94.
- Hartung, U. 2008 Ein Fragment eines verzierten Dolchgriffs aus dem Friedhof U in Abydos (Umm el-Qaab). In E. -M. Engel, V. Müller und U. Hartung (Hrsg.) *Zeichen aus dem Sand Streiflichter aus Ägyptens Geschichte zu Ehren von Günter Dreyer*: 183–194. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Hartung, U. 2013 Raw material supply and social development in Egypt in the 4th Millennium BC. In S. Burmeister, S. Hansen, M. Kunst and N. Müller-Scheeßel (eds.), *Metal Matters: Innovative Technologies and Social Change in Prehistory and Antiquity*, 13–30. Rahden, Verlag Marie Leidorf.
- Hartung, U. 2014 Interconnections between the Nile valley and the southern Levant in the 4th millennium BC. In F. Höflmayer and R. Eichmann (eds.), *Egypt and the Southern Levant in the Early Bronze Age*, 107–134. Rahden, Verlag Marie Leidorf.
- Hartung, U. 2014/15 Der Friedhof U in Umm el-Qaab und die funeräre Landschaft von Abydos in prädynastischer Zeit. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 70/71: 175–191.
- Hartung, U. 2016 Chronological aspects of the development of funeral equipment in Cemetery U at Abydos (Umm el-Qa'ab) In M. D. Adams, B. Midant-Reynes, E. M. Ryan and Y. Tristant (eds.), *Egypt at its Origins* 4, 271–298. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Hartung, U. and R. Hartmann 2005 Zwei vermutlich aus der Westwüste stammende Gefäße im prädynastischen Friedhof U in Abydos. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 61: 211–218.
- Hassan, A. A. and F. A. Hassan 1981 Source of galena in Predynastic Egypt at Naqada. *Archaeometry* 28/1: 77–82.
- Hassan, F. A. 1981 Historical Nile floods and their implications for climatic change. *Science* 212: 1142–1144.
- Hassan, F. A. 1984 Radiocarbon chronology of Predynastic Nagada settlements, Upper Egypt. *Current Anthropology* 25/5: 681–683.
- Hassan, F. A. 1985 Radiocarbon chronology of Neolithic and Predynastic sites in Upper Egypt and the Delta. *The African*

- Archaeological Review* 3: 95–116.
- Hassan, F. A. 1988 The Predynastic of Egypt. *Journal of World Prehistory* 2: 135–185.
- Hassan, F. A. 1997 The dynamics of a riverine civilization: A geoarchaeological perspective on the Nile Valley, Egypt. *World Archaeology* 29/1: 51–74.
- Hassan, F. A. 1999 Nagada (Naqada). In K. A. Bard (ed.), *Encyclopedia of archaeology of ancient Egypt*: 555–557. London and New York, Routledge.
- Hassan, F. A. and R. G. Matson 1989 Seriation of Predynastic potsherds from the Nagada region. In L. Krzyżaniak and M. Kobusiewicz (eds.), *Late prehistory of the Nile basin and the Sahara*, 303–315. Poznań, Poznań Archaeological Museum.
- Hassan, F. A., J. van Wetering and G. J. Tassie. 2017a Urban development at Nubt, Naqada region, Upper Egypt, during the Predynastic – Protodynastic period. In B. Midant-Reynes, Y. Tristant and E. M. Ryan (eds.), *Egypt at its Origins* 5, 81–128. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Hassan, F. A., J. van Wetering and G. J. Tassie. 2017b The Early Dynastic cemetery at el-Quleila North (Kh.2), Naqada region, Upper Egypt. In *Abstract of the Origins* 6, 41–42. Vienna, Institut für Ägyptologie, Universität Wien.
- Hawkes, C. 1954 Archeological theory and method: Some suggestions from the Old World. *American Anthropologist* 56/2: 155–168.
- Hays, T. R. 1976 Predynastic Egypt: Recent field research. *Current Anthropology* 17: 552–554.
- Helck, W. 1982 Naqada. In W. Helck and W. Westendorf (eds.), *Lexikon der Ägyptologie Band IV: Megiddo – Pyramiden*, 344–347. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Hendrickx, S. 1986 Predynastische objecten uit Naqada en Diospolis Parva (Boven-Egypte). *Bulletin des musées royaux d'art et d'histoire* 57/2: 31–44.
- Hendrickx, S. 1989 *De Grafvelden der Naqada-Cultuur in Zuid-Egypte, met bijzondere Aandacht voor het Naqada III Grafveld te Elkab: Interne Chronologie en Sociale Differentiatie*. Unpublished Ph.D. Dissertation. Leuven, Kathorike Universiteit te Leuven.
- Hendrickx, S. 1992 The Predynastic Cemeteries at Khozam. In R. F. Friedman and B. Adams (eds.), *The Followers of Horus. Studies Dedicated to Michael Allen Hoffman*, 199–202. Oxford, Oxbow Books.
- Hendrickx, S. 1994a *Elkab V: The Naqada III cemetery*. Bruxelles, Musées royaux d'art et d'histoire.
- Hendrickx, S. 1994b *Antiquités préhistoriques et protodynastiques d'Égypte*. Bruxelles, Musée royaux d'art et d'histoire.
- Hendrickx, S. 1996 The relative chronology of the Naqada Culture: Problems and possibilities. In A. J. Spencer (ed.), *Aspects of Early Egypt*: 33–69. London, British Museum Press.
- Hendrickx, S. 1999 La chronologie de la préhistoire tardive et des débuts de l'histoire de l'Égypte. *Archéo-Nil* 9: 13–81.
- Hendrickx, S. 2006 Predynastic – Early Dynastic chronology. In E. Hornung, R. Krauss and D. A. Warburton (eds.), *Ancient Egyptian Chronology*, 55–93. Leiden, Brill.
- Hendrickx, S. 2011 Crafts and craft specialization. In E. Teeter (ed.), *Before the Pyramids: The Origins of Egyptian*

- Civilization*, 93–98. Chicago, IL, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Hendrickx, S. and L. Bavay 2002 The relative chronological position of Egyptian Predynastic and Early Dynastic tombs with objects imported from the Near East and the nature of interregional contacts. In T. E. Levy and E. C. M. van den Brink (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd Millennium B.C.E.*, 58–80. London, Leicester University Press.
- Hendrickx, S. and M. Eyckerman 2011 Tusks and tags: Between the hippopotamus and the Naqada plant. In R. F. Friedman and P. N. Fiske (eds.), *Egypt at its Origins 3*, 497–570. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Hendrickx, S. and D. Huyge 2014 Neolithic and Predynastic Egypt. In C. Renfrew and P. Bahn (eds.), *The Cambridge World Prehistory: Vol. 1*, 240–258. Cambridge, Cambridge University Press.
- Hendrickx, S. and E. C. M. van den Brink 2002 Inventory of Predynastic and Early Dynastic cemetery and settlement sites in the Egyptian Nile valley. In T. E. Levy and E. C. M. van den Brink (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd Millennium B.C.E.*, 346–399. London, Leicester University Press.
- Hendrickx, S. and P. Vermeersch 2000 Prehistory: From the Palaeolithic to the Badarian Culture (c. 700,000–4000 BC). In I. Shaw (ed.), *The Oxford History of Ancient Egypt*, 17–43. Oxford, Oxford University Press.
- Hermann, G. 1968 Lapis lazuli: The early phases of its trade. *Iraq* 30/1: 21–57.
- Hertz, R. 1905 Contribution a une étude sur la representation collective de la mort. *L'Année sociologique* 10: 48–137.
- Hikade, T. 2011 Origins of monumental architecture: Recent excavations at Hierakonpolis HK29B and HK25. In R. F. Friedman and P. N. Fiske (eds.), *Egypt at its Origins 3*, 81–108. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Hill, J. A. 2004 *Cylinder Seal Glyptic in Predynastic Egypt and Neighboring Regions*. Oxford, Archaeopress.
- Hodder, I. 1982 *Symbols in action: Ethnoarchaeological studies of material culture*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Hoffman, M. A. 1979 *Egypt before the Pharaohs: The prehistoric foundations of Egyptian civilization*. New York, Alfred A. Knopf.
- Hoffman, M. A. 1980 A Rectangular Amratian house from Hierakonpolis and its significance for Predynastic research. *Journal of Near Eastern Studies* 39: 119–137.
- Hoffman, M. A. 1982 *The Predynastic of Hierakonpolis: An interim report*. Giza, Cairo University Herbarium, Faculty of Science and Macomb, IL, The Department of Sociology and Anthropology, Western Illinois University.
- Hoffman, M. A. and M. A. Berger 1982 A taxonomic system for Predynastic settlement ceramics and the Locality 29 assemblage. In M. A. Hoffman (ed.), *The Predynastic of Hierakonpolis: An interim report*, 66–85. Giza and Macomb, IL, Cairo University Herbarium, Faculty of Science and Macomb and The Department of Sociology and Anthropology, Western Illinois University.
- Hoffman, M. A., H. A. Hamroutch and R. O. Allen 1986 A model of urban development for the Hierakonpolis region from Predynastic through Old Kingdom times. *Journal of the American Research Center in Egypt* 23: 175–187.
- Hoffman, M. A., C. Lupton and B. Adams 1982 Excavations at Locality 6. In M. A. Hoffman (ed.), *The Predynastic of*

- Hierakonpolis: An interim report*, 38–61. Giza and Macomb, IL, Cairo University Herbarium, Faculty of Science and Macomb and The Department of Sociology and Anthropology, Western Illinois University.
- Holmes, D. L. 1989a Inter-regional variability in Egyptian Predynastic lithic assemblages. In L. Krzyżaniak and M. Kobusiewicz (eds.), *Late Prehistory of the Nile Basin and the Sahara*, 243–254. Poznań, Poznań Archaeological Museum.
- Holmes, D. L. 1989b *The Predynastic lithic industries of Upper Egypt: A comparative study of the lithic traditions of Badari, Nagada and Hierakonpolis*. Oxford, Tempvs Reparatum.
- Honoré, E. 2007 Earliest Cylinder-Seal Glyptic in Egypt: From Greater Mesopotamia to Naqada. In H. Hanna (ed.), *The International Conference on Heritage of Naqada and Qus Region, Vol. I.*, 31–45. Cairo, ICOM.
- Hood, A. G. E., M. Woodworth, M. W. Dee, J. -L. Schwenninger, C. Bronk Ramsey and P. W. Ditchfield 2017 A tale of six vessels: A multidisciplinary approach to the analysis of six Predynastic and Early Dynastic vessels from Abydos, Ballas and Naqada – Preliminary remarks. In B. Midant-Reynes, Y. Tristant and E. M. Ryan (eds.), *Egypt at its Origins 5*, 645–656. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Hosseini, Y. M. 2011 A new archaic period cemetery at Abydos. In R. F. Friedman and P. N. Fiske (eds.), *Egypt at its Origins 3*, 269–280. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Hussein, Y. M. 2016 The brick architecture of a new tomb from the Early Dynastic cemetery at south Abydos. In M. D. Adams, B. Midant-Reynes, E. M. Ryan and Y. Tristant (eds.), *Egypt at its Origins 4*, 299–308. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Hussein, Y. M. 2017 New Predynastic and Early Dynastic activities to the north of the Early Dynastic cemetery at south Abydos. In B. Midant-Reynes, Y. Tristant and E. M. Ryan (eds.), *Egypt at its Origins 5*, 129–144. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Janßen, U. 2015 *Gesellschaften im Wandel: Funerärer Aufwand und soziale Wirklichkeit im frühstaatlichen Mesopotamien und Ägypten anhand von Grabbefunden aus Ur und Kafr Tarkhan*. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Johnson, A. J. and N. C. Lovell 1994 Biological differentiation at Predynastic Naqada, Egypt: An analysis of dental morphological traits. *American Journal of Physical Anthropology* 93: 427–433.
- Jones, J. 2007 New perspectives on the development of mummification and funerary practices during the Pre- and Early Dynastic Periods. In J. -C. Goyon and C. Cardin (eds.), *Proceedings of the Ninth International Congress of Egyptologists. Actes du neuvième congrès international des égyptologues. Grenoble, 6–12 septembre 2004*: 979–989. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Junker, H. 1912 *Bericht über die Grabungen der kaiserlichen Akademie der Wissenschaften in Wien auf dem Friedhof in Turah. Winter 1909–1910*. Wien, Alfred Hölder.
- Kahl, J., T. Bagh, E. -M. Engel and S. Petschel 2001 Die Funde aus dem "Menesgrab" in Naqada: Ein Zwischenbericht. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 57: 171–185.
- Kahl, J. and E. -M. Engel 2001 *Vergraben, Verbrannt, Verkannt und Vergessen: Funde aus dem "Menesgrab"*. Münster, Published by J. Kahl.

- Kaiser, W. 1956 Stand und Probleme der ägyptischen Vorgeschichtsforschung. *Zeitschrift für ägyptische Sprache und Altertumskunde* 81: 87–109.
- Kaiser, W. 1957 Zur inneren Chronologie der Naqadakultur. *Archaeologia Geographica* 6: 69–77.
- Kaiser, W. 1961 Bericht über eine archäologisch-geologische Felduntersuchung in Ober- und Mittelägypten. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 17: 1–53.
- Kaiser, W. 1990 Zur Entstehung des gesamtägyptischen Staates. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 46: 287–299.
- Kaiser, W. and G. Dreyer 1982 Umm el-Qaab: Nachuntersuchungen im frühzeitlichen Königsfriedhof: 2. Vorbericht. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 28: 211–269.
- Kantor, H. J. 1942 The early relations of Egypt with Asia. *Journal of Near Eastern Studies* 1: 174–213.
- Kantor, H. J. 1952 Further evidence for early Mesopotamian relations with Egypt. *Journal of Near Eastern Studies* 11: 239–250.
- Kantor, H. J. 1992 The relative chronology of Egypt and its foreign correlations before the First Intermediate Period. In R. W. Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology Vol. I*, 3–21. Third Edition. Chicago, IL, The University of Chicago Press.
- Kawai, N. 2011 An early cult centre at Abusir-Saqqara? Recent discoveries at a rocky outcrop in north-west Saqqara. In R. F. Friedman and P. N. Fiske (eds.), *Egypt at its Origins* 3, 801–830. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Keimer, M. L. 1935 Sur deux vases prédynastiques de Khodzâm. *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 35: 161–181.
- Kelterborn, P. 1984 Towards replicating Egyptian Predynastic flint knives. *Journal of Archaeological Science* 11: 433–453.
- Kemp, B. J. 1973 Photographs of the decorated tomb at Hierakonpolis. *The Journal of Egyptian Archaeology* 59: 36–43.
- Kemp, B. J. 1982 Automatic analysis of Predynastic cemeteries: A new method for an old problem. *The Journal of Egyptian Archaeology* 68: 5–15.
- Kemp, B. J. 1989 *Ancient Egypt: Anatomy of civilization*. London and New York, Routledge.
- Kemp, B. J. 2000 The Colossi from the early shrine at Coptos in Egypt. *Cambridge Archaeological Journal* 10/2: 211–242.
- Kemp, B. J. 2006 *Ancient Egypt: Anatomy of civilization*. Second edition. London and New York, Routledge.
- Klemm, R. and D. D. Klemm 1993 *Steine und Steinbrüche im Alten Ägypten*. Berlin, Springer-Verlag.
- Klemm, R. and D. D. Klemm 2012 *Gold and gold mining in ancient Egypt and Nubia: Geoarchaeology of the ancient gold mining sites in the Egyptian and Sudanese Eastern Deserts*. Berlin, Springer.
- Klemm, R. and D. D. Klemm 2014 Früher Goldbergbau in Ägypten und Nubien. In H. Meller, R. Risch and W. Pernicka (eds.), *Metalle der Macht: Frühes Gold und Silber. 6. Mitteldeutscher Archäologentag vom 17. bis 19. Oktober 2013 in Halle (Saale)*, 141–149. Halle, Landesmuseum für Vorgeschichte.
- Köhler, E. C. 2011 The rise of the Egyptian state. In E. Teeter (ed.), *Before the Pyramids: The Origins of Egyptian Civilization*, 123–125. Chicago, IL, The Oriental Institute of the University of Chicago.

- Kołodziejczyk, P. 2012 Seals and tokens. In M. Chłodnicki, K. M. Ciałowicz and A. Mączyńska (eds.), *Tell el-Farkha I: Excavations 1998–2011*, 267–277. Poznań and Kraków, Poznań Archaeological Museum and Institute of Archaeology, Jagiellonian University, Kraków.
- Kroeber, A. L. 1927 Disposal of the dead. *American Anthropologist* 29/3: 308–315.
- Kroeper, K. 2004 Minshat Abu Omar: Aspects of the analysis of a cemetery. In S. Hendrickx, R. F. Friedman, K. M. Ciałowicz and M. Chłodnicki (eds.), *Egypt at its Origins: Studies in Memory of Barbara Adams*, 881–904. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Kuhn, R. 2015 *Ägyptens Aufbruch in die Geschichte: Frühe (Kultur-) Technologien im Niltal – Highlights aus dem Ägyptischen Museum und Papyrussammlung Berlin*. Wiesbaden, Reichertverlag.
- Lansing, A. 1935 The museums excavations at Hierakonpolis. *Bulletin of the Metropolitan Museum of Art* 30: 37–45.
- Largacha, A. 1993 Some suggestions and hypotheses concerning the Maadi Culture and the expansion of Upper Egypt. *Göttinger Miscellen* 135: 41–51.
- Legge, F. 1913 New Light of Sequence-Dating. *Proceedings of the Society of Biblical Archaeology* 35: 101–113.
- Lévi-Strauss, C. 1958 *Anthropologie structurale*. Paris, Librairie Plon.
- Libby, W. F. 1955 *Radiocarbon dating*. Chicago, IL, The University of Chicago Press.
- Lorre, C. 2008 La collection préhistorique égyptienne du Musée d'Archéologie Nationale, Saint-Germain-en-Laye, France. In Y. Tristant and B. Midant-Reynes (eds.), *Egypt at its Origins 2*, 1231–1236. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Lortet, L. C. and C. Gaillard 1909 *La faune momifiée de l'ancienne Égypte et recherches anthropologiques Tome II*. Lyon, Archéologie du Museum d'Histoire nationale de Lyon.
- Lubbock, J. 1865 *Pre-historic times as illustrated by ancient remains, and the manners and customs of modern savages*. London, Williams and Norgate.
- Lucas, A. and J. R. Harris 1962 *Ancient Egyptian Materials and Industries*. London, Edward Arnold.
- Lythgoe, A. M. and D. Dunham 1965 *The Predynastic cemetery N7000: Naga ed-Dêr, Part IV*. Berkeley, CA, University of California Press.
- Mahmood, A. -M. A. and K. A. Bard 1993 Sources of the Predynastic grinding stones in the Hu-Semaineh Region, Upper Egypt, and their cultural context. *Geoarchaeology* 8/3: 241–245.
- Malinowski, B. 1944 *A scientific theory of culture and other essays*. Chapel Hill, NC, The University of North Carolina Press.
- Mallory-Greenough, L., J. D. Greenough and J. Victor Owens 1999 The stone source of Predynastic basalt vessels: Mineralogical evidence for quarries in northern Egypt. *Journal of Archaeological Science* 26: 1261–1272.
- Mann, G. E. 1989 On the accuracy of sexing of skeletons in archaeological reports. *The Journal of Egyptian Archaeology* 75: 246–249.
- di Maria, R. 2007 Naqada (Petrie's South Town): The sealing evidence. In H. Hanna (ed.), *The International Conference on Heritage of Naqada and Qus Region, Vol. I.*, 65–78. Cairo, ICOM.

- Mark, S. 1998 *From Egypt to Mesopotamia: A study of Predynastic trade routes*. College Station, TX, Texas A&M University Press.
- Maspero, G. 1887 *L'Archéologie égyptienne*. Paris, A. Quantin.
- Metcalf, P. and R. Huntington 1991 *Celebrations of death: The anthropology of mortuary ritual*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Midant-Reynes, B. 1987 Contribution à l'étude de la société prédynastique: Le cas du couteau "Ripple-flake". *Studien zur Altägyptischen Kultur* 14: 185–224.
- Midant-Reynes, B. 2000a *The prehistory of Egypt: From the first Egyptians to the first Pharaohs*. Malden, MA, Oxford, Carlton, Victoria, Blackwell Publishing.
- Midant-Reynes, B. 2000b The Naqada period (c. 4000–3200 BC). In I. Shaw (ed.), *The Oxford history of ancient Egypt*, 44–60. Oxford, Oxford University Press.
- Midant-Reynes, B. 2003 *Aux origines de l'Égypte: Du néolithique à l'émergence de l'état*. Paris, Édition Fayard.
- Midant-Reynes, B., H. Boisson, N. Buchez, É. Crubézy, S. Hendrickx and F. Jallet 1997 Le site prédynastique d'Adaïma: Rapport de la huitième campagne de fouille. *Bulletin de l'Institut Français d'Archéologie Orientale* 97: 201–219.
- Midant-Reynes, B. and P. Sabatier 1999 Préhistoire égyptienne et radiocarbon. *Archéo-Nil* 9: 83–107.
- Minotti, M. 2017 La faïence aux périodes nagadiennes à Adaïma: Les balbutiements d'une innovation technique pour la parure?. *Archéo-Nil* 27: 27–48.
- Mizoguchi, K. 2014 The centre of their life-world: The archaeology of experience at the Middle Yayoi cemetery of Tateiwa-Hotta, Japan. *Antiquity* 88: 836–850.
- Moeller, N. 2016 *The archaeology of urbanism in ancient Egypt: From the Predynastic period to the end of the Middle Kingdom*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Moens, M. -F. and W. Wetterstrom 1988 The agricultural economy of an Old Kingdom town in Egypt's west delta: Insights from the plant remains. *Journal of Near Eastern Studies* 47/3: 159–173.
- Mond, R. and O. H. Myers 1937 *Cemeteries of Armant I*. London, Egypt Exploration Society.
- Morgan, L. H. 1877 *Ancient societies*. London, MacMillan & Company.
- de Morgan, J. 1896 *Recherches sur les origines de l'Égypte Tome I: L'âge de la pierres et métaux*. Paris, Ernest Leroux.
- de Morgan, J. 1897 *Recherches sur les origines de l'Égypte Tome II: Éthnographie préhistorique et tombeau royale de Nagadah*. Paris, Ernest Leroux.
- Morris, I. 1991 The archaeology of ancestors: The Saxe/Goldstein hypothesis revisited. *Cambridge Archaeological Journal* 1/1: 147–169
- Morrow, M., M. Morrow, T. Judd and G. Phillipson 2010 *Desert RATS: Rock Art Topographical Survey in Egypt's Eastern Desert. Site Catalogue*. Oxford, British Archaeological Reports.
- Mumford, G. 2012 Ras Budran and the Old Kingdom trade in Red Sea shells and other exotica. *British Museum Studies in*

- Ancient Egypt and Sudan* 18: 107–145.
- Murray, M. A. 1934 Female fertility figures. *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 64: 93–100.
- Murray, M. A. 1956 Burial customs and beliefs in the hereafter in Predynastic Egypt. *The Journal of Egyptian Archaeology* 42: 86–96.
- Naville, É. 1914 *The cemeteries of Abydos. Part 1: 1909–1910. The mixed cemetery and Umm el-Ga'ab*. London, Egypt Exploration Fund.
- Needler, W. 1956 A flint knife of King Djer. *The Journal of Egyptian Archaeology* 42: 41–44.
- Needler, W. 1981 Federn's revision of Petrie's Predynastic classification. *Journal of the Society for the Study of Egyptian Antiquity* 11: 69–74.
- Needler, W. 1984 *Predynastic and archaic Egypt in The Brooklyn Museum*. Brooklyn, NY, The Brooklyn Museum.
- Nordström, H. -Å. and J. Bourriau 1993a The Vienna System. In D. Arnold and J. Bourriau (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery. Fascicle 1*, 168–182. Mainz am Rhein, Verlag Philipp von Zabern.
- Nordström, H. -Å. and J. Bourriau 1993b Ceramic technology: Clays and fabrics. In D. Arnold and J. Bourriau (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery. Fascicle 2*, 144–190. Mainz am Rhein, Verlag Philipp von Zabern.
- O'Connor, D. 1991 Boat graves and pyramid origins: New discoveries at Abydos, Egypt. *Expedition* 33/3: 5–15.
- O'Connor, D. 1997 Ancient Egypt: Egyptological and anthropological perspectives. In J. Lustig (ed.), *Anthropology and Egyptology: A Developing Dialogue*, 13–22. Sheffield, Sheffield Academic Press.
- O'Shea, J. M. 1981 Social configurations and the archaeological studies of mortuary practices: A case study. In R. Chapman, I. Kinnes and K. Randsborg (eds.), *The Archaeology of Death*, 39–52. Cambridge, Cambridge University Press.
- O'Shea, J. M. 1984 *Mortuary variability: An archaeological investigation*. Orlando, FL, Academic Press, Inc.
- Parker Pearson, M. 1982 Mortuary practices, society and ideology: An ethnoarchaeological study. In I. Hodder (ed.), *Symbolic and structural archaeology*, 99–114. Cambridge, Cambridge University Press.
- Parker Pearson, M. 1999 *The archaeology of death and burial*. Phoenix Mill, Sutton Publishing Limited.
- Patch, D. C. 1991 *The origin and early development of urbanism in ancient Egypt: A regional study*. Unpublished PhD dissertation. Ann Arbor, MI, University Microfilms International.
- Patch, D. C. 2011 Settlement patterns and cultural change in the Predynastic Period. In S. Hendrickx, R. F. Friedman, K. M. Ciałowicz and M. Chłodnicki (eds.), *Egypt at its Origins: Studies in Memory of Barbara Adams*, 905–918. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Patenaude, J. and G. J. Shaw 2011 *A catalogue of Egyptian cosmetic palettes in the Manchester University Museum collection*. London, Golden House Publications.
- Payne, J. C. 1968 Lapis lazuli in early Egypt. *Iraq* 30/1: 58–61.
- Payne, J. C. 1987 Appendix to Naqada excavations supplement. *The Journal of Egyptian Archaeology* 73: 181–189.



- Payne, J. C. 1992 Predynastic chronology at Naqada. In R. F. Friedman and B. Adams (eds.) *The Followers of Horus: Studies dedicated to Michael Allen Hoffman*: 185–192. Oxford, Oxbow Books.
- Payne, J. C. 1993 *Catalogue of the Predynastic Egyptian collection in the Ashmolean Museum*. Oxford, Clarendon Press.
- Peet, T. E. 1914 *The cemeteries of Abydos. Part 2: 1911–1912*. London, Egypt Exploration Fund.
- Peet, T. E. 1933 The classification of Egyptian pottery. *The Journal of Egyptian Archaeology* 19: 62–64.
- Peet, T. E. and W. L. S. Loat 1913 *The cemeteries of Abydos. Part 3: 1912–1913*. London, Egypt Exploration Fund.
- Petrie, W. M. F. 1896 *Koptos*. London, Bernard Quaritch.
- Petrie, W. M. F. 1899 Sequences in prehistoric remains. *The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 29/3–4: 295–301.
- Petrie, W. M. F. 1900 *The royal tombs of the First Dynasty, 1900. Part I*. London, Egypt Exploration Fund.
- Petrie, W. M. F. 1901 *The royal tombs of the Earliest Dynasties, 1901. Part II*. London, Egypt Exploration Fund.
- Petrie, W. M. F. 1902 *Abydos I, 1902*. London, Egypt Exploration Fund.
- Petrie, W. M. F. 1903 *Abydos II, 1903*. London, Egypt Exploration Fund.
- Petrie, W. M. F. 1914 *Tarkhan II*. London, Bernard Quaritch.
- Petrie, W. M. F. 1920 *Prehistoric Egypt: Illustrated by over 1,000 objects in University College, London*. London, Bernard Quaritch.
- Petrie, W. M. F. 1921 *Corpus of Prehistoric pottery and palettes*. London, Bernard Quaritch.
- Petrie, W. M. F. 1925 *Tombs of the courtiers and Oxyrinkhos*. London, Bernard Quaritch.
- Petrie, W. M. F. 1939 *The making of Egypt*. London, The Sheldon Press.
- Petrie, W. M. F. 1953a *Corpus of Proto-Dynastic pottery*. London, Bernard Quaritch.
- Petrie, W. M. F. 1953b *Ceremonial slate palettes*. London, Bernard Quaritch.
- Petrie, W. M. F. and A. C. Mace 1901 *Diospolis Parva: The cemeteries of Abadiyeh and Hu. 1898-1899*. London, Egypt Exploration Fund.
- Petrie, W. M. F. and J. E. Quibell 1896 *Naqada and Ballas*. London, Bernard Quaritch.
- Petrie, W. M. F., G. A. Wainwright and A. H. Gardiner 1913 *Tarkhan I and Memphis V*. London, Bernard Quaritch.
- Petrie, W. M. F., G. A. Wainwright and E. MacKay 1912 *The Labyrinth, Gerzeh and Mazguneh*. London, Bernard Quaritch.
- di Pietro, G. A. 2007 “Kleinfunde” from the Italian excavations at Zawaydah (Petrie’s “South Town”). In H. Hanna (ed.), *The International Conference on Heritage of Naqada and Qus Region, Vol. I*, 79–87. Cairo: ICOM.
- di Pietro, G. A. 2009 Documentazione e studio dei materiali dalle indagini archeologiche della Missione IUO (1977–1986) a Zawaydah (Naqada, Alto Eitto). In R. Pirelli (ed.), *Ricerche Italiane e Scavi in Egitto Vol. 3*. 63–69. Il Cairo, Centro Archeologico Italiano.
- di Pietro, G. A. 2010 Documentazione e studio dei materiali dalle indagini archeologiche della Missione IUO (1977–1986) a Zawaydah (Naqada, Alto Eitto): Seconda e terza stagione. In R. Pirelli (ed.), *Ricerche Italiane e Scavi in Egitto Vol. 4*, 111–

20. Il Cairo, Centro Archeologico Italiano.
- di Pietro, G. A. 2011a Miscellaneous artefacts from Zawaydah (Petrie's South Town, Naqada). In R. F. Friedman and P. N. Fiske (eds.), *Egypt at its Origins 3*, 59–79. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- di Pietro, G. A. 2011b Models from Predynastic daily life. A view from Naqada. In M. Horn, C. van den Hoven, J. Kramer, D. Soliman, N. Staring and L. Weiss (eds.), *Current Research in Egyptology 2010: Proceedings of the Eleventh Annual Symposium which took place at Leiden University, The Netherlands, 5–8 January 2010*, 42–52. Oxford, Oxbow Books.
- di Pietro, G. A. 2016 Upper Egyptian Pre- / Proto-dynastic settlement ceramics: The assemblages from Petrie's 'South Town' at Naqada. In B. Bader, C. M. Knoblauch and E. C. Köhler (eds.), *Vienna 2: Ancient Egyptian Ceramics in the 21st century. Proceedings of the International Conference held at the University of Vienna 14th–18th of May, 2012*, 179–190. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- di Pietro, G. A. 2017 Beyond the bounds of domestic life? Naqada: Aspects of the settlement in the middle-late 4<sup>th</sup> millennium BC. In B. Midant-Reynes, Y. Tristant and E. M. Ryan (eds.), *Egypt at its Origins 5*, 145–164. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Pirelli, R. 2007 Counters and 'tokens' at Zawaydah (Petrie's 'South Town'). In H. Hanna (ed.), *The International Conference on Heritage of Naqada and Qus Region, Vol. I*, 39–47. Cairo: ICOM.
- Podzorski, P. V. 1988 Predynastic Egyptian seals of known provenience in the R.H. Lowie Museum of Anthropology. *Journal of Near Eastern Studies* 47/4: 259–268.
- Podzorski, P. V. 1994 *The northern cemetery at Ballâs in Upper Egypt: A study of the middle and late Predynastic remains*. Berkeley, CA, Coyote Press.
- Porada, E. 1980 A lapis lazuli figurine from Hierakonpolis in Egypt. *Iranica Antiqua* 15, 175–179.
- Quibell, J. E. 1900 *Hierakonpolis I*. London, Bernard Quaritch.
- Quibell, J. E. 1905 *Catalogue general des antiquités égyptiennes du Musée du Caire: Nos 11001–12000 et 14001–14754: Archaic Objects*. Le Caire, Imprimerie de l'Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Quibell, J. E. 1913 *Excavations at Saqqara (1911–1912): The Tomb of Hesy*. Le Caire, L'imprimerie de l'Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Quibell, J. E. 1923 *Excavations at Saqqara (1912–1914): Archaic Mastabas*. Cairo, Government Press.
- Quibell, J. E. and F. W. Green 1902 *Hierakonpolis II*. London, Bernard Quaritch.
- Radcliff-Brown, A. 1922 *The Andaman islanders: A study in social anthropology*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Randall-MacIver, D. and A. C. Mace 1902 *El Amrah and Abydos: 1899–1901*. London, Egypt Exploration Fund.
- Regner, C. 1998 *Schminkpaletten*. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Regner, C. 1999 *Keramik*. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Reisner, G. A. 1910 *The archaeological survey of Nubia: Report for 1907–1908*. Cairo, National Printing Department.
- Reisner, G. A. 1936 *The development of the Egyptian tomb down to the accession of Cheops*. Cambridge, MA, Harvard University Press.

- Renfrew, C. 1986 Introduction: Peer political interaction and socio-political change. In C. Renfrew and J. F. Cherry (eds.), *Peer Polity Interaction and Socio-Political Change*, 1–18. Cambridge, Cambridge University Press.
- Rizkana, I. and J. Seeher 1989 *Maadi III: Non-lithic small finds and the structural remain of the Predynastic settlement*. Mainz am Rhein, Verlag Philipp von Zabern.
- Roth, A. M. 1992 The psš-kf and “Opening of the Mouth” ceremony: A ritual of birth and rebirth. *The Journal of Egyptian Archaeology* 78: 113–147.
- Rowland, J. M. 2003a Trends in burial evidence: Evaluating expectations for the regional and temporal distribution of mortuary behaviour in Predynastic Egypt. In R. Ives, D. Lines, C. Naunton and N. Wahlberg (eds.), *Current Research in Egyptology III. December 2001*, 63–68. Oxford, Archaeopress.
- Rowland, J. M. 2003b *Social transformation in the delta from the terminal predynastic to the Early Dynastic period: A comparative study*. Unpublished Ph.D. dissertation. London, Institute of Archaeology, University College London.
- Rowland, J. M. and F. A. Hassan 2003 The computerised database and potential for a Geographical Information System at Kafr Hassan Dawood. In Z. Hawass and L. Pinch Brook (eds.), *Egyptology at the Dawn of the Twenty-First Century: Proceedings of the 8th International Congress of Egyptologists, Cairo 2000, Volume 1 Archaeology*, 416–423. Cairo, The American University in Cairo Press.
- Savage, S. H. 1995 *Descent, power and competition in Predynastic Egypt: Mortuary evidence from cemetery N7000 at Naga-ed-Deir*. Unpublished Ph.D. dissertation. Ann Arbor, MI, University Microfilms International.
- Savage, S. H. 1997 Decent group competition and economic strategies in Predynastic Egypt. *Journal of Anthropological Archaeology* 16: 226–268.
- Savage, S. H. 1998 AMS Radiocarbon Dates from the Predynastic Egyptian Cemetery, N7000, at Naga-ed-Dêr. *Journal of Archaeological Science* 25/3: 235–249.
- Saxe, A. A. 1970 *Social dimensions of mortuary practices*. Unpublished Ph.D. dissertation. Ann Arbor, MI, University of Michigan.
- Scharff, A. 1927 *Grundzüge der ägyptischen Vorgeschichte*. Leipzig, J. C. Hinrichs'sche Buchhandlung.
- Scharff, A. 1929 *Die Altertümer der Vor- und Frühzeit Altägyptens II: Bestattung, Kunst, Amulette und Schmuck, Geräte zur Körperpflege, Spiel- und Schreibgeräte, Schnitzereien aus Holz und Elfenbein, Verschiedenes*. Berlin, Verlag von Karl Curtius.
- Scharff, A. 1931 *Die Altertümer der Vor- und Frühzeit Altägyptens I: Werkzeuge, Waffen, Gefäße*. Berlin, Verlag von Karl Curtius.
- Seidlmayer, S. J. 1988 Funerärer Aufwand und soziale Ungleichheit: Eine methodische Anmerkung zum Problem der Rekonstruktion der gesellschaftlichen Gliederung aus Friedhofsfunden. *Göttinger Miscellen* 104: 25–51.
- Shaw, I. 2000 The evidence for amethyst mining in Nubia and Egypt. In L. Krzyzaniak, K. Kroeper and M. Kobusiewicz (eds.), *Recent Research into the Stone Age of Northeastern Africa*, 220–227. Poznań: Poznań Archaeological Museum.

- Shaw, I. 2012 *Ancient Egyptian technology and innovation*. London, Bloomsbury.
- Shaw, I., E. Bloxam, T. Heldal and P. Storemyr 2010 Quarrying and landscape at Gebel el-Asr in the Old and Middle Kingdoms. In F. Raffaele, M. Nuzzolo and I. Incordino (eds.), *Recent Discoveries and Latest Researches in Egyptology: Proceedings of the First Neapolitan Congress of Egyptology, Naples, June 18th-20th, 2008*, 293–312. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Shehata, R. Z. A. 1989 Status report on the Predynastic cemetery of Khozam. *Varia Aegyptiaca* 6: 165–166.
- Sowada, K. 1996 The Politics of Error: Flinders Petrie at Diaspolis Parva. *Bulletin of the Australian Centre for Egyptology* 7: 89–96.
- Spencer, A. J. 1993 *Early Egypt: The rise of civilisation in the Nile Valley*. London, British Museum Press.
- Spencer, H. 1876 *The principles of sociology: Volume I*. London, Williams and Norgate.
- Spencer, P. 2011 Petrie and the discovery of earliest Egypt. In E. Teeter (ed.), *Before the Pyramids: The Origins of Egyptian Civilization*, 17–24. Chicago, IL, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Spurrell, F. C. J. 1896 The flint implements of Naqada. In W. M. F. Petrie and J. E. Quibell *Naqada and Ballas*: 55–59. London, Bernard Quaritch.
- Staatliche Museen Preussischer Kulturbesitz (Hrsg.) 1967 *Ägyptisches Museum Berlin, östlicher Stülerbau am Schloss Charlottenburg*. Berlin, Staatliche Museen zu Berlin.
- Steinmann, F. 1998 *Katalog Ägyptischer Sammlungen in Leipzig 2: Tongefäße von der Vordynastischen Zeit bis zum Ende des Mittleren Reiches*. Mainz am Rhein, Verlag Philipp von Zabern.
- Stevenson, A. 2007 The material significance of Predynastic and Early Dynastic palettes. In R. Mairs and A. Stevenson (eds.), *Current Research in Egyptology 2005: Proceedings of the Sixth Annual Symposium*, 148–162. Oxford, Oxbow Books.
- Stevenson, A. 2009a *The Predynastic Egyptian cemetery of el-Gerzeh: Social identities and mortuary practices*. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Stevenson, A. 2009b Social relationships in Predynastic burial. *The Journal of Egyptian Archaeology* 95: 175–192.
- Stevenson, A. 2014 *A piece of a giant jigsaw: A newly re-discovered pot from Naqada*. <http://blogs.ucl.ac.uk/museum/s/2014/03/11/a-piece-of-a-giant-jigsaw-a-newly-re-discovered-pot-from-naqada/> (2018年2月2日閲覧).
- Stevenson, A. 2015 Telling times: Time and ritual in the realization of the early Egyptian state. *Cambridge Archaeological Journal* 25/1: 145–161.
- Stevenson, A. 2016 The Egyptian Predynastic and state formation. *Journal of Archaeological Research* 24/4: 421–468.
- Stevenson, A. 2017 You ought to be able to find some things at Negada: Newly discovered archives concerning the 1894–95 excavations at Naqada and Ballas. In *Abstract of the Origins 6* Vienna, Institut für Ägyptologie, Universität Wien.
- Stevenson, A. (ed.) in prep. *The many histories of Naqada*.
- Stos-Gale, Z. A. and N. H. Gale 1981 Sources of galena, lead and silver in Predynastic Egypt. *Revue d'Archéométrie Supplément 1981: Actes du XXe symposium international d'archéométrie Paris 26–29 mars 1980. Volume III*: 285–296.

- Tainter, J. A. 1978 Mortuary practices and the study of prehistoric social systems. In M. B. Schiffer (ed.), *Advances in Archaeological Method and Theory, Volume I*: 105–141. New York, Academic Press.
- Takamiya, I. H. 2008 Firing Installations and Specialization: A View from Recent Excavations at Hierakonpolis Locality 11C. In Y. Tristant and B. Midant-Reynes (eds.), *Egypt at its Origins 2*, 187–202. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Takamiya, I. H. and H. Endo 2008 Return to the temple workshop: The manufacture of bifacial flint tools. *Nekhen News* 20, 8–9.
- Tamorri, V. 2017 New perspectives on practices of funerary body manipulation in Predynastic and Early Dynastic Egypt. In B. Midant-Reynes, Y. Tristant and E. M. Eyan (eds.), *Egypt at its Origins 5*: 445–464. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Tassie, G. J. and J. van Wetering. 2013/14 The history and research of the Naqada region collection. *Egyptian & Egyptological Documents, Archives, Libraries* 4: 61–77.
- Taylor, J. H. 2001 *Death and the afterlife in ancient Egypt*. London, British Museum Press.
- Thomas, A. P. 2004 Some comments on the Predynastic cemetery at El-Mahasna. In S. Hendrickx, R. F. Friedman, K.M. Ciałowicz and M. Chłodnicki (eds.), *Egypt at its Origins: Studies in Memory of Barbara Adams*, 1041–1056. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Tite, M. and M. Bimson 1989 Glazed atlatite: An investigation of the methods of glazing used in ancient Egypt. *World Archaeology* 21: 87–100.
- Trigger, B. G. 1979 Egyptology and anthropology: Egypt and the comparative study of early civilizations. In K. Weeks (ed.), *Egyptology and the Social Science*, 21–53. Cairo, The American University in Cairo Press.
- Trigger, B. G. 1983 The rise of Egyptian civilization. In B. G. Trigger, B. J. Kemp, D. O'Connor and A. B. Lloyd (eds.), *Ancient Egypt: A Social History*, 1–70. Cambridge, Cambridge University Press.
- Trigger, B. G. 1993 *Early civilizations: Ancient Egypt in context*. Cairo, The American University in Cairo Press.
- Trigger, B. G. 2003 *Understanding early civilizations*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Tylor, E. B. 1865 *Researches into the early history of mankind and the development of civilization*. London, John Murray.
- Ucko, P. J. 1968 *Anthropomorphic figurines of Predynastic Egypt and Neolithic Crete with comparative material from the prehistoric Near East and mainland Greece*. London, Andrew Szmild.
- Ucko, P. J. 1969 Ethnography and archaeological interpretation of funerary remains. *World Archaeology* 1/2: 262–280.
- van Gennep, A. 1909 *Les rites de passage*. Paris, É. Nourry.
- van Neer, W., V. Linseele and R. F. Friedman. 2004 Animal burials and food offerings at the elite cemetery HK6 of Hierakonpolis. In S. Hendrickx, R. F. Friedman, K. M. Ciałowicz and M. Chłodnicki (eds.), *Egypt at its Origins: Studies in Memory of Barbara Adams*, 67–130. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- van Walsem, R. 1978/79 The psš-kf: An investigation of an ancient Egyptian funerary instrument. *Oudheidkundige Mededelingen uit het Rijksmuseum van Oudheden* 59–60: 193–249
- van Wetering, J. 2012 Relocating de Morgan's royal tomb at Naqada and identifying its occupant. In J. Kabaciński, M.

- Chłodnicki and M. Kobusiewicz (eds.), *Prehistory of Northeastern Africa: New Ideas and Discoveries*, 91–124. Poznań, Poznań Archaeological Museum.
- van Wetering, J. 2017 The cemeteries of Nubt, Naqada region, Upper Egypt. In B. Midant-Reynes, Y. Tristant and E. M. Eyan (eds.), *Egypt at its Origins 5*, 521–550. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- van Wetering, J. in prep. Cemeteries of Nubt, Naqada Region, Upper Egypt (Part II) Cemetery N T and other cemeteries during the Naq. II-III. In A. Stevenson (ed.), *The many histories of Naqada*.
- Vermeersch, P. M., E. Paulissen and P. van Peer 2000 El Abadiya, a Shuwikathian Site. In P. M. Vermeersch (ed.), *Palaeolithic Living Sites in Upper and Middle Egypt*, 159–199. Leuven, Leuven University Press.
- Vermeersch, P. M., W. van Neer and S. Hendrickx 2004 El Abadiya 2: A Naqada I site near Danfiq, Upper Egypt. In S. Hendrickx, R. F. Friedman, K. M. Ciałowicz and M. Chłodnicki (eds.), *Egypt at its Origins: Studies in Memory of Barbara Adams*, 213–376. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- von Bissing, F. W. 1913 *Catalogue général des antiquités égyptiennes du Musée du Caire: Tongefäße Erster Teil: Bis zum Beginn des Alten Reiches*. Vienne, Imprimerie Adolf Holzhausen.
- von der Way, T. 1997 *Tell el-Fara'in - Buto I: Ergebnisse zum frühen Kontext. Kampagnen der Jahre 1983–1989*. Mainz am Rhein, Verlag Philipp von Zabern.
- Wainwright, G. A. 1923 The Red Crown in early prehistoric times. *The Journal of Egyptian Archaeology* 9: 26–33.
- Warren, E. 1897 An investigation on the variability of the human skeleton: With especial reference to the Naqada race discovered by professor Flinders Petrie in his explorations in Egypt. *Philosophical Transactions of the Royal Society B* 189: 135–227.
- Watrin, L. 2007 The relative chronology of the Naqada Culture: A view from Buto, Ma'adi, Harageh and Gerzeh. In H. Hanna (ed.), *The International Conference on Heritage of Naqada and Qus Region, Vol. I.*, 1–30. Cairo, ICOM.
- Wendorf, F. and R. Schild 1976 *The Prehistory of the Nile Valley*. New York, Academic Press.
- Wengrow, D. 2006 *The archaeology of early Egypt: Social transformation in north-east Africa, 10,000 to 2650 BC*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Wengrow, D. 2011 The invention of writing in Egypt. In E. Teeter (ed.), *Before the Pyramids: The Origins of Egyptian Civilization*, 99–103. Chicago, IL, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Wengrow, D. and J. Baines 2004 Images, human bodies and the ritual construction of memory in late Predynastic Egypt'. In S. Hendrickx, R. F. Friedman, K. M. Ciałowicz and M. Chłodnicki (eds.), *Egypt at its Origins: Studies in Memory of Barbara Adams*, 1081–1113. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Wengrow, D., M. Dee, S. Foster, A. Stevenson and C. Bronk Ramsey 2014 Cultural convergence in the Neolithic Nile Valley: A prehistoric perspective on Egypt's place in Africa. *Antiquity* 88: 95–111.
- Wilkinson, T. A. H. 1995 *State Formation in Egypt: Chronology and Society*. Oxford, Tempvs Reparatum.
- Wilkinson, T. A. H. 2000 Political unification: Towards a reconstruction. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen*

*Instituts, Abteilung Kairo* 56: 377–395.

Wilkinson, T. A. H. 2002 Uruk into Egypt: Imports and imitations. In J. N. Postgate (ed.), *Artefacts of Complexity: Tracking the Uruk in the Near East*: 237–248. London, British School of Archaeology in Iraq.

Williams, B. B. 1982 Notes on prehistoric cache fields of lower Egyptian tradition at Sedment. *Journal of Near Eastern Studies* 41: 213–221.

Wittfogel, K. A. 1957 *Oriental despotism: A comparative study of total power*. New Haven, Yale University Press.

Yahia, M. A., A. M. Abdallah and H. Hamrourh 1982 Geomorphology of the Naqada region, Upper Egypt. *Qatar University Science Bulletin* 2: 251–264.

Zarins, J. 1989 Ancient Egypt and the Red Sea trade: The case for obsidian in the Predynastic and Archaic periods. In A. Leonard and B. B. Williams (eds.), *Essays in Ancient Civilization Presented to Helene J. Kantor*, 339–368. Chicago, IL, The Oriental Institute of the University of Chicago.

Zarins, J. 2001 *The land of incense: Archaeological work in the Governorate of Dhofar, Sultanate of Oman 1990–1995*. Muscat, Sultan Qaboos University.

#### [邦語文献]

川端一光・岩間徳兼・鈴木雅之 2018 『Rによる多変量解析入門: データ分析の実践と理論』 オーム社。

川村喜一 1967 「ナイル流域採集の遺物について. 『オリエント』 10 卷 3-4 号 103–119, 215 頁。

倉林眞砂斗 1988 「集団墓分析論 I: 中国新石器時代馬家窯文化 (半山・馬廠期) を例として (一)」 『金沢大学文学部論集. 史学科篇』 8 号 101–138 頁。

黒沼太一 2017 「エジプト先王朝時代、ナカダ遺跡における合葬墓—未公開資料を用いた埋葬様式分類と空間分析からの墓地利用の検討—」 『西アジア考古学』 18 号 17–34 頁。

白井則行 1998 「葬送行為の考古学と先王朝時代の下エジプト研究」 『エジプト学研究』 6 号 81–103 頁。

白井則行 1999 「人類学とエジプト学: その協調の可能性」 『エジプト学研究』 77 号 66–86 頁。

高宮いづみ 1992 「エジプト・ナカダ文化における大型ナイフ形石器について」 『オリエント』 35 卷 1 号 123–138 頁。

高宮いづみ 1994 「エジプト・ナカダ文化の歯牙・骨製品について」 『オリエント』 37 卷 1 号 104–120 頁。

高宮いづみ 2001 「前 4 千年紀ナイル河下流域におけるラピスラズリ交易について」 『西アジア考古学』 2 号 21–37 頁。

高宮いづみ 2003 『エジプト文明の誕生』 同成社。

長屋憲慶 2013 「ナカダ遺跡採集の石器について.」 吉村作治先生古稀記念論文集編集委員会 (編) 『永遠に生きる: 吉村作治先生古稀記念論文集』 369–375 頁 中央公論美術出版。

馬場匡浩 2013 『エジプト先王朝時代の土器研究』 六一書房。

馬場匡浩 2014 「エジプトの王墓—ピラミッド出現に至る墓の変遷と文化・社会の変化—」 アジア考古学四学会

- (編)『アジアの王墓』193-215 頁 高志書院。
- 張替いづみ 1990「エジプト・ナカダ文化期の牙型製品について」『古代』90号 1-20 頁。
- 溝口孝司 1995「福岡県筑紫野市永岡遺跡の研究: いわゆる二列埋葬墓地の一例の社会考古学的再検討」『古文化談叢』34号 159-192 頁。
- 溝口孝司 2004「葬送」安齋正人(編)『現代考古学事典』306-309 頁 同成社。
- 山田康弘 1997「土井ヶ浜集団の社会構造」龍田考古会(編)『先史学・考古学論究Ⅱ』41-70 頁 龍田考古会。
- 横山浩一 1985「総論-日本考古学の特質」近藤義郎・甘粕健・戸沢充則・横山浩一(編)『岩波講座日本考古学Ⅰ 研究の方法』1-10 頁 岩波書店。



## 付編 1. 博物館所蔵資料コードの一覧

ナカダ遺跡から出土した遺物は、現時点で確認できた限りで7ヶ国42ヶ所の博物館または研究所などに所蔵されている。所蔵先が多岐にわたるため、博物館所蔵資料コードを各所蔵資料の頭に付すことで所蔵機関の判別を容易にした。本文および付編5で特定に遺物を言及する場合は、この博物館所蔵資料コードを用いる。この博物館所蔵資料コードは先行研究（Baumgartel 1970; Payne 1987）に準拠するが、本論文でこれまで未知だった複数の機関で所蔵を確認した場合は新しく博物館所蔵資料コードを付与した。博物館所蔵資料コードを以下に一覧を記載する。記載順は、博物館所蔵資料コード、所蔵機関名、所蔵機関所在都市、同所在国である。合わせて各博物館の所蔵品カタログやオンラインカタログが存在する場合は引用を付した。

- AM：オクスフォード大学付属アシュモレアン博物館（Ashmolean Museum, Oxford University）、オクスフォード、イギリス（Payne 1993）。
- BC：バーミンガム美術館（Birmingham Museum & Art Gallery）、バーミンガム、イギリス。
- Be：ベルリン旧博物館（Altes Museum, Staatliche Museen zu Berlin）、ベルリン、ドイツ（Kuhn 2015; Scharff 1929; 1931; Staatliche Museen Preussischer Kulturbesitz 1967）。
- BFA：ボストン美術館（Museum of Fine Arts, Boston）、ボストン、アメリカ（URL: <https://www.mfa.org/collections/search> 2018年11月30日閲覧）。
- BM：大英博物館（The British Museum）、ロンドン、イギリス（URL: [https://www.britishmuseum.org/research/collection\\_online/search.aspx](https://www.britishmuseum.org/research/collection_online/search.aspx) 2018年11月30日閲覧）。
- BMC：プリンマー・カレッジ美術資料コレクション（The Art and Artifact Collections, Bryn Mawr College）、プリンマー、アメリカ（URL: <http://triarte.brynmawr.edu> 2018年11月30日閲覧）。
- BMK：ロンドン自然史博物館（Natural History Museum）、ロンドン、イギリス。
- Bo：ボルトン博物館（Bolton Museum）、ボルトン、イギリス。
- BoS：ボン大学付属エジプト学博物館（Ägyptisches Museum der Universität Bonn）、ボン、ドイツ（Regner 1998; 1999）。
- BX：ベクスリー・ホール・プレイス & ガーデنز（Hall Place & Gardens, Bexley）、ベクスリー、イギリス。
- CB：ブリュッセル王立美術歴史博物館（Musées Royaux d'Art et d'Histoire, Bruxelles / Koninklijke Musea voor Kunst en Geschiedenis, Brussel）、ブリュッセル、ベルギー（Hendrickx 1986; 1994b）。
- CNH：フィールド自然史博物館（Field Museum of Natural History）、シカゴ、アメリカ（URL: <https://collections-anthropology.fieldmuseum.org> 2018年11月30日閲覧）。
- CS：スタンフォード大学付属カンター美術センター（Cantor Arts Center, Stanford University）、スタンフォード、アメリカ（URL: <http://cantorcollection.stanford.edu> 2018年11月30日閲覧）。
- DO：ダラム大学付属東洋博物館（Oriental Museum, Durham University）、ダラム、イギリス（URL:

<https://www.dur.ac.uk/oriental.museum/whatsere/discover/> 2018年11月30日閲覧)。

- EM：エジプト博物館 (The Egyptian Museum)、カイロ、エジプト (Quibell 1905; von Bissing 1913)。
- FW：ケンブリッジ大学付属フィッツウィリアム美術館 (The Fitzwilliam Museum, University of Cambridge)、ケンブリッジ、イギリス (URL: <http://webapps.fitzmuseum.cam.ac.uk/explorer/> 2018年11月30日閲覧)。
- GM：ロチェスター・ギルドホール博物館 (Rochester Guildhall Museum)、ロチェスター、イギリス。
- HM：グラスゴー大学付属ハンタリアン博物・美術館 (The Hunterian, University of Glasgow)、グラスゴー、イギリス (URL: <http://collections.gla.ac.uk> 2018年11月30日閲覧)。
- IAL：ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン考古学科 (Institute of Archaeology, University College London)、ロンドン、イギリス (URL: <http://archcat.museums.ucl.ac.uk> 2018年11月30日閲覧)。
- IM：マナー・ハウス博物館 (Manor House Museum)、イルクリー、イギリス。
- KH：アウグスト・ケストナー博物館 (August Kestner Museum)、ハノーファー、ドイツ。
- KN：デンマーク国立博物館 (Nationalmuseet i København)、コペンハーゲン、デンマーク (Blinkenberg and Friis Johansen 1924)。
- LC：ワールド・ミュージアム (World Museum)、リヴァプール、イギリス (URL: <http://www.liverpoolmuseums.org.uk/wml/collections/antiquities/ancient-egypt/> 2018年11月30日閲覧) (Bienkowski and Southworth 1986)。
- LI：リール第3大学付属エジプト学博物館 (Le Musée d'Égyptologie, Université de Lille 3)、リール、フランス (Centre de la Vieille Charité (Marseille) 1990)。
- LP：ライプツィヒ大学付属エジプト学博物館-ゲオルク・シュタインドルフ (Ägyptisches Museum - Georg Steindorff, Universität Leipzig)、ライプツィヒ、ドイツ (Steinmann 1998)。
- MAA：ケンブリッジ大学付属考古学・人類学博物館 (Museum of Archaeology and Anthropology, University of Cambridge)、ケンブリッジ、イギリス (URL: <http://collections.maa.cam.ac.uk> 2018年11月30日閲覧)。
- MF：ウェスト・パーク博物・美術館 (West Park Museum and Art Gallery)、マクルスフィールド、イギリス (David 1980)。
- MH：マウント・ホルヨーク・カレッジ付属美術館 (Mount Holyoke College Art Museum)、サウス・ハドリー、アメリカ (URL: <http://museums.fivecolleges.edu> 2018年11月30日閲覧)。
- MM：マンチェスター大学付属博物館 (Manchester Museum, University of Manchester)、マンチェスター、イギリス (Patenaude and Shaw 2011)。
- MaM：メードストーン博物・美術館 (Maidstone Museum & Art Gallery)、メードストーン、イギリス。
- MuM：バイエルン州立エジプト美術博物館 (Staatliches Museum Ägyptischer Kunst, Bayern)、ミュンヘン、ドイツ。
- MTS：マーチャント・テイラーズ校 (Merchant Taylors' School)、ムーア・パーク、イギリス。
- NC：ノリッチ城博物館 (Norwich Castle Museum)、ノリッチ、イギリス。
- OIC：シカゴ大学東洋学科付属博物館 (Oriental Institute Museum, University of Chicago)、シカゴ、アメリカ

(URL: <https://oi-idb.uchicago.edu> 2018年11月30日閲覧)。

- PhU：ペンシルヴェニア大学附属考古学人類学博物館 (Penn Museum, University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology)、フィラデルフィア、アメリカ (URL: <https://www.penn.museum> 2018年11月30日閲覧)。
- RM：タッチストーンズ・ロッチデール (Touchstones Rochdale)、ロッチデール、イギリス。
- RP：レーマー・ペリツァエウス博物館 (Roemer-Pelizaeus Museum)、ヒルデスハイム、ドイツ。
- SE：スウォンジー大学附属エジプト美術博物館 (The Egypt Centre, Museum of Egyptian Antiquities, Swansea University)、スウォンジー、イギリス (URL: <http://www.egyptcentre.org.uk> 2018年11月30日閲覧)。
- UC：ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン附属ピートリー・エジプト考古学博物館 (Petrie Museum of Egyptian Archaeology, University College London)、ロンドン、イギリス (URL: <http://petriecat.museums.ucl.ac.uk> 2018年11月30日閲覧)。
- UCW：(元) ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン附属ウェルカム基金 (Wellcome Foundation, University College London)、ロンドン、イギリス。

























墓番号	墓地	ノート記載事項(下線付きはノートに未記載だが、博物館で所蔵確認した遺物)	装飾土器	W壺	壺・壺・深鉢	坏・鉢	石製容器	パレット	石器	ビーズ	骨牙製品合計	その他	骨・牙1類	骨・牙2類	骨・牙3類	副葬品種類数	副葬品総点数	墓の面積	大墓地東西エリア	細分段階	基本段階
T58	T墓地	遺物なし	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1.01	-	?	?
T59	T墓地	土器: 1 (壺: 1)	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.19	-	?	?
G1	G墓地	土器: 5 (L30-33壺: 1, 壺: 4)	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	0.77	-	IIb-IIa2	?
G2	G墓地	土器: 13 (W壺: 1, L30-33壺: 5, 壺: 6, 鉢: 1), マラカイトの塊	0	1	11	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4	14	不明	-	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
G5	G墓地	土器: 4 (L30-33壺: 2, 鉢: 2)	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	不明	-	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
G6	G墓地	土器: 7 (W62-63壺: 1, 壺: 4, 鉢: 2)	0	1	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	7	1.68	-	IIIb	IIIb





付編3. 被葬者人数・性別別人数・基本段階・ノート記載事項の墓別一覧

墓番号	墓地	ノートに記載された遺体検出状況	被葬者人数	男性	女性	不明	性別記録なし	細分段階	基本段階
1	大墓地南地区	遺体に関する記載なし。	1	0	0	1	0	IIb	IIb
2	大墓地南地区	頭蓋骨が離れて出土。腕の一部と脊椎の下部から大腿骨まで出土。原位置。	1	0	1	0	0	?	?
3	大墓地南地区	腕の骨ばかりの骨のみ出土。	1?	0	0	1	0	IIa2	IIa1-IIa2
4	大墓地南地区	脊椎下部以下、完全に原位置。ほかの部位なし。	1?	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
5	大墓地南地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb	IIb
6	大墓地南地区	一部の骨が落ちて出土したのみ。	骨片	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
7	大墓地南地区	足、腕の骨が落ちて出土したのみ。	1?	0	1	0	0	?	?
8	大墓地南地区	頭蓋骨なし。足の骨が落ちて出土。	1?	0	0	0	1	IIb1	IIb1-IIb2
9	大墓地南地区	骨盤、足の骨はほぼ完全に原位置。ほかの部位は落ちて出土。	1?	0	0	0	1	?	?
10	大墓地南地区	骨盤、足の骨が落ちて出土。	1	1	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
11	大墓地南地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
12	大墓地南地区	遺体に関する記載なし。	1	1	0	0	0	?	?
13	大墓地南地区	遺体に関する記載なし。	1	0	1	0	0	?	?
14	大墓地南地区	遺体に関する記載なし。	1?	0	0	1	0	?	?
15	大墓地南地区	遺体に関する記載なし。	1	0	1	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
16	大墓地南地区	遺体に関する記載なし。	1	1	0	0	0	I/II 前半-IIa1	IIa1-IIa2
17	大墓地南地区	足の骨の一部のみ出土。	1	0	0	0	1	IIa2	IIa1-IIa2
18	大墓地南地区	頭蓋骨残存。壊れて出土し、顎の骨が分かれて出土。	1?	0	0	1	0	?	?
19	大墓地南地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa2	IIa1-IIa2
20	大墓地南地区	腕の骨と肩甲骨の一部もに残存。乱れて出土。	1	0	0	1	0	?	?
21	大墓地南地区	腕の骨と脊椎の一部は乱れて出土。脊椎の下部から足はほぼ完全に原位置。	1	1	0	0	0	IIa2	IIa1-IIa2
22	大墓地南地区	ステップ墓。遺体はほぼ完全に原位置。	1	1	0	0	0	IIa1-IIb	?
23	大墓地南地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa2	IIa1-IIa2
24	大墓地南地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
25	大墓地南地区	ステップ墓。頭蓋骨は壊れ、顎の骨のみ。ほか、完全に原位置。	1	0	0	1	0	IIa2	IIa1-IIa2
26	大墓地南地区	ステップ墓。頭蓋骨なし。ほか、完全に原位置。	1	1	0	0	0	?	?
27	大墓地南地区	ステップ墓。頭蓋骨は壊れ、顎の骨のみ。ほか、完全に原位置。	1	0	0	1	0	?	?
28	大墓地南地区	ステップ墓。覆土中に大きな石(閉塞石?)。頭蓋骨なし。腕、手の骨、骨盤は乱れて出土。	1	0	0	1	0	?	?
29	大墓地南地区	ステップ墓。頭蓋骨なし。腕、手の骨は乱れて出土。脊椎以下、完全に原位置。切断の痕跡?	1	0	0	0	1	IIIa1-IIIa2	IIIa1-IIIa2
30	大墓地南地区	ステップ墓。腕の骨、骨盤のみ残存。原位置から乱れて出土。	1	0	1	0	0	?	?
31	大墓地南地区	ステップ墓。頭蓋骨なし。腕、脊椎10点、肩甲骨、足の骨などが残存。原位置から乱れて出土。	1	0	0	1	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
32	大墓地南地区	ステップ墓。東西方向に長軸を持つ墓坑。頭位は西、左側身。頭蓋骨なし。腕、脊椎、肩甲骨、肋骨、足の骨などが残存。原位置から乱れて出土。	1	0	0	0	1	?	?
33	大墓地南地区	足、骨盤、脊椎3点のみ残存。原位置?	1	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
34	大墓地南地区	足の骨のみ残存。	1	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
35	大墓地南地区	腕、足の骨が一部のみ残存。	骨片	0	0	0	1	?	?
36	大墓地南地区	ステップ墓。遺体はステップ下部から出土。頭蓋骨なし。腕の骨は原位置からずれて出土。ほかの部位は完全に原位置。	1	0	1	0	0	IIa1-IIb	?
37	大墓地南地区	ステップ墓。遺体はステップ下部から出土。頭蓋骨は痕跡のみ確認。腕の骨は原位置からややずれて出土。ほかの部位は完全に原位置。	1	1	0	0	0	?	?
38	大墓地南地区	頭蓋骨、手が離れて出土。腕の一部なし。ほか、完全に原位置。	1	0	0	1	0	?	?
39	大墓地南地区	脊椎、腕、その他わずかな骨の破片のみ残存。	骨片	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
40	大墓地南地区	頭蓋骨、破損した状態で出土。手、腕は乱れている。ほか、残存せず。	1	0	0	1	0	IIa1	IIa1-IIa2
41	大墓地南地区	足の骨が一部残存するのみ。原位置。ほか、残存せず。	1	0	0	1	0	IIb	IIb
42	大墓地南地区	頭蓋骨なし? 腕、肋骨など散乱。脊椎以下、完全に概ね原位置。	1	0	0	1	0	?	?
43	大墓地南地区	頭蓋骨なし。腕は一部のみで乱れる。ほか、概ね完全に原位置。	1	0	1	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
44	大墓地南地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
45	大墓地南地区	頭蓋骨・腕の一部、乱れて出土。脚部のみ原位置。ほかの部位なし。	1?	0	0	0	1	IIb	IIb
46	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
47	大墓地西地区	頭蓋骨、腕の一部のみ残存。	1?	0	0	0	1	IIIa1-IIIa2	IIIa1-IIIa2
48	大墓地西地区	遺体残存せず。	骨片	0	0	0	1	?	?
49	大墓地西地区	脊椎下部以下遺存し原位置。頭蓋骨、覆土から出土。ほかの部位なし。	1	0	1	0	0	?	?
50	大墓地西地区	頭蓋骨なし。腕、一部乱れる。ほか、完全に原位置。	1	1	0	0	0	?	?
52	大墓地西地区	遺体に関する記載なし。	1	1	0	0	0	?	?
53	大墓地西地区	ステップ墓。遺体はステップ内から出土。頭蓋骨なし。腕が落ちて出土した以外は、完全に原位置。	1	1	0	0	0	?	?
54	大墓地西地区	頭蓋骨なし。腕が落ちて出土した以外は、完全に原位置。	1	0	1	0	0	?	?
55	大墓地西地区	脊椎がない以外は、完全に原位置。	1?	0	0	0	1	?	?
56	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
57	大墓地西地区	東西軸に長軸を持つ墓坑。頭位西?、左側身。頭蓋骨がやや乱れ、レンガ上から出土。ほか、概ね完全に原位置。	1?	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
58	大墓地西地区	ステップ墓。足の骨のみ落ちて出土。	1?	0	0	0	1	?	?
59	大墓地西地区	骨盤以下、完全に原位置。	1	0	0	1	0	?	?
60	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
61	大墓地西地区	ステップ墓。足の骨1本のみ出土。	1?	0	0	1	0	IIa1-IIb	?
91	大墓地西地区	額骨、腕、足の骨のみ乱れて出土。	1?	0	0	0	1	?	?
92	大墓地西地区	腕の骨が数点のみ出土。	1?	0	0	0	1	IIc1	IIc1
93	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa2	IIa1-IIa2
97	大墓地西地区	僅かな骨のみ乱れて出土。	骨片	0	0	0	1	IIb	IIb
98	大墓地西地区	皮膚のついた骨片のみ残存。	骨片	0	0	0	1	IIa2	IIa1-IIa2
99	大墓地西地区	遺体状況不明。	1?	0	0	0	1	Ib1-I/II 前半	Ib1-IIb2
100	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa2	IIa1-IIa2
101	大墓地西地区	頭蓋骨は離れて出土。足は完全に原位置。	1?	0	0	0	1	?	?
102	大墓地西地区	脊椎、骨盤、足の一部が出土。	1?	0	0	0	1	?	?
103	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa2	IIa1-IIa2
104	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIb	?
105	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
106	大墓地西地区	頭蓋骨と僅かな骨のみ残存。	1?	0	0	0	1	I/II 後半-IIb	?
107	大墓地西地区	頭蓋骨なし。腕の骨は一部のみ残存。ほか、完全に原位置。	1?	0	0	0	1	?	?
108	大墓地西地区	主体部: 4体分の埋葬。うち3体は頭蓋骨以外、完全に恐らく原位置。もう1体は背骨のみ。頭蓋骨は3点落ちて出土。2つは東側から出土。1つは西側から出土。付属部: 子供の埋葬。かなり上位から検出。	5	0	0	1	4	Ia1	Ia1-Ia3
109	大墓地西地区	骨盤の一部以下、完全に恐らく原位置。	1	0	1	0	0	Ib1-IIb2	Ib1-IIb2
110	大墓地西地区	頭蓋骨?。腕が落ちて出土。脊椎16点以下完全に恐らく原位置。きつい屈葬?	1?	0	0	0	1	Ib1-IIb2	Ib1-IIb2
111	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIb	?
112	大墓地西地区	骨2本のみ残存。	骨片	0	0	0	1	IIa2	IIa1-IIa2
113	大墓地西地区	3体埋葬。西側の遺体はほぼ完全に原位置、左側身を下にして頭は北側。真ん中の遺体は、頭蓋骨、肋骨、腕、足の骨が一部なし。ほか、原位置。頭蓋骨が西側の遺体の傍で見つっており、この遺体の頭蓋骨の可能性があり。なし。腕、乱れる。北側の遺体は頭蓋骨と脊椎のみ。乱れて出土。	3	1	0	1	1	IIb	IIb
114	大墓地西地区	2体埋葬? 散乱。骨盤が2つ出土。頭蓋骨は1点のみ。墓坑中央に腕や足の骨が散乱。東南側に脊椎。	1?	0	1	0	0	IIb	IIb
115	大墓地西地区	頭蓋骨なし。腕、乱れる。ほか、完全に原位置。	1	0	1	0	0	?	?
116	大墓地西地区	東西軸に長軸を持つ墓坑。ただし、埋葬は通常の配置。頭蓋骨は破片状で少し離れて出土。ほか、完全に原位置。	1	0	0	1	0	Ib1-IIb2	Ib1-IIb2
117	大墓地西地区	破片上の頭蓋骨以外完全。概ね原位置?	1?	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
118	大墓地西地区	南側の大きい墓坑と北側の小さい墓坑からなる墓。土器は南側の墓坑から。南側の墓坑は足のみ。北側の墓坑は脊椎と骨盤のみ。発掘者によると動物(ガゼル)の埋葬。	2	0	0	0	2	?	?
119	大墓地西地区	骨盤以下、完全に原位置。	1	0	0	1	0	?	?
120	大墓地西地区	骨盤、足の骨のみ乱れて出土。	1?	0	0	0	1	Ib1	Ib1-IIb2
121	大墓地西地区	足の骨1本以外のみ残存。	1?	0	1	0	0	IIb	IIb
122	大墓地西地区	頭蓋骨以外完全。概ね原位置?	1?	0	0	0	1	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
123	大墓地西地区	僅かな骨のみ残存。	骨片	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2

墓番号	墓地	ノートに記載された遺体検出状況	被害者人数	男性	女性	不明	性別記録なし	細分段階	基本段階
124	大墓地西地区	頭蓋骨、手の一部が離れて出土。ほか、概ね完全で原位置。	1	0	0	1	0	IIb-IIa1	?
125	大墓地西地区	スネの骨のみ乱れて出土。	骨片	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
140	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb	IIb
141	大墓地西地区	ステップ墓。頭蓋骨は壊れ顎が離れて出土。腕が乱れている以外、完全で原位置。	?	0	0	0	1	?	?
142	大墓地西地区	ほかの墓に切られている。脊椎やその他の骨が山状に検出。	1?	0	0	0	1	?	?
143	大墓地西地区	頭蓋骨なし。腕がやや乱れる。ほか、完全で原位置。	1?	0	0	1	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
144	大墓地西地区	頭蓋骨なし。頰骨が乱れる。ほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	IIb	IIb
145	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIIa1-IIIb	?
146	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
147	大墓地西地区	足がやや乱れる。脊椎14点以下、概ね完全で原位置。	1?	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
148	大墓地西地区	腕と足の骨以外残存せず。	1	0	1	0	0	IIb-IIa2	?
149	大墓地西地区	遺体に関する記載なし。	不明	0	0	0	0	?	?
160	大墓地西地区	遺体に関する記載なし。	不明	0	0	1	0	IIb-IIa2	IIb-IIa2
161	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
162	大墓地西地区	指の骨数点とかかとの骨のみ出土。	骨片	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
163	大墓地西地区	頭蓋骨なし。腕、脊椎以下、概ね完全で原位置。	1	0	0	0	1	IIb-IIa1	?
164	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
165	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
166	大墓地西地区	頭蓋骨、上層から出土。脊椎下部以下、完全で原位置。	1	0	0	0	1	IIa2-IIa3	IIa1-IIa3
167	大墓地西地区	僅かな骨のみ乱れて出土。	骨片	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
168	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
169	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb	IIb-IIa2
170	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb	IIb-IIa2
171	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb2	IIb-IIa2
172	大墓地西地区	僅かな骨のみ残存。	骨片	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
173	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIb	?
174	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半-IIa1	IIa1-IIa2
175	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb	IIb-IIa2
176	大墓地西地区	遺体残存せず。	1	0	0	1	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
177	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半	IIa1-IIa2
178	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb2-I/II 前半	IIb-IIa2
179	大墓地西地区	大腿骨?1本のみ残存。	骨片	0	0	0	1	IIb2-IIa1	?
180	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
181	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
182	大墓地西地区	足の骨が散乱して出土。	骨片	0	0	1	0	?	?
183	大墓地西地区	足の骨が散乱して出土。	骨片	0	0	1	0	IIb	IIb
184	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIb	?
185	大墓地西地区	骨が散乱して出土。	骨片	0	0	0	1	IIb2	IIb-IIa2
186	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
187	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb-IIa2	IIb-IIa2
188	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
189	大墓地西地区	骨盤以下、完全で原位置。	1	0	0	0	1	?	?
190	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb-IIa2	IIb-IIa2
191	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb-IIa2	IIb-IIa2
192	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb2	IIb-IIa2
193	大墓地西地区	遺体に関する記載なし。	1	1	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
194	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb	IIb-IIa2
195	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb2-I/II 前半	IIb-IIa2
196	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa2	IIa1-IIa3
197	大墓地西地区	足の骨などの僅かな骨が散乱して出土。	1	1	0	0	0	?	?
198	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
199	大墓地西地区	頭蓋骨なし。それ以外、概ね完全で原位置。	1	0	0	0	1	?	?
200	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
201	大墓地西地区	脊椎下部以下、完全で原位置。	1	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
202	大墓地西地区	足の骨のみ残存。原位置でない?	1?	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
203	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb-IIa2	IIb-IIa2
204	大墓地西地区	足の骨のみ残存。原位置でない?	1	0	0	0	1	IIb-IIa2	?
205	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb-IIa2	IIb-IIa2
206	大墓地西地区	骨が散乱して出土。	骨片	0	0	0	1	IIb2	IIb-IIa2
207	大墓地西地区	2体埋葬。大柄の聖人の遺体、脊椎下部以下、完全で原位置。小柄の若年者の遺体、足の骨と脊椎が残存。	2	0	0	0	2	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
208	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb	IIb
209	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
210	大墓地西地区	遺体に関する記載なし。	1	0	0	1	0	IIa1	IIa1-IIa2
211	大墓地西地区	腕、脊椎、骨盤、足などが出土。概ね完全で原位置。	1?	0	0	0	1	IIb2	IIb-IIa2
212	大墓地西地区	遺体に関する記載なし。	不明	0	0	0	0	IIb2	IIb-IIa2
214	大墓地西地区	足の骨のみ原位置で出土。	1	0	0	1	0	?	?
215	大墓地西地区	肋骨、骨盤、大腿骨が恐らく原位置で出土。	1	0	0	1	0	?	?
216	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb-IIa2	IIb-IIa2
217	大墓地西地区	2体埋葬。東西に並列。西側の遺体、脊椎以下、完全で恐らく原位置。他の部位なし。東側の遺体、完全で原位置。	2	0	0	0	2	IIb	IIb-IIa2
218	大墓地西地区	2体分の骨。腕、脊椎、骨盤、足などが散乱して出土。	2	0	0	0	2	?	?
219	大墓地西地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	IIb	IIb
220	大墓地西地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	?	?
221	大墓地西地区	遺体に関する記載なし。	1	0	0	1	0	I/II 後半-IIb	?
222	大墓地西地区	足のみおそらく原位置で出土。	1?	0	0	0	1	IIb / IIa1	?
223	大墓地西地区	腕が乱れて出土。脊椎9点以下、完全で原位置。	1?	0	0	0	1	IIb2	IIb-IIa2
224	大墓地西地区	足のみ乱れて出土。東西軸に長軸を持つ墓坑。	1?	0	0	0	1	I/II 前半-後半	?
225	大墓地西地区	頭蓋骨?と僅かな骨のみ出土。	1	0	0	1	0	IIb-IIa2	?
226	大墓地西地区	2体埋葬。南北に縦列に出土。南側の遺体、腕が乱れて出土。脊椎以下完全で原位置。他の部位なし。北側の遺体、脊椎以下完全で原位置。他の部位なし。若年者だが、大柄な骨。頭蓋骨が乱れて出土。肋骨なし。肩甲骨以下、完全で原位置。	2	0	0	1	1	IIb	IIb-IIa2
227	大墓地西地区	?	1?	0	0	0	1	IIb-IIa1	?
228	大墓地西地区	脚部と骨盤のみ残存。	?	0	0	0	1	?	?
229	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
231	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
232	大墓地西地区	骨盤と両足のみ残存。原位置と思われる。	1	1	0	0	0	?	?
233	大墓地西地区	破損した頭蓋骨と骨がわずかに残るのみ。	骨片	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
234	大墓地西地区	3番目の脊椎以下、残存。	1?	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
235	大墓地西地区	脊椎数点のみ?	骨片	0	0	0	1	IIb2	IIb-IIa2
236	大墓地西地区	頭蓋骨がややずれて出土。ほか、完全で原位置。脊椎21点。上腕あり。頭蓋骨内部からは乾燥した脳が発見される。土器にマークあり?	1	0	0	1	0	IIb-IIa2 / IIa1	?
237	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
238	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb-IIa2	IIb-IIa2
239	大墓地西地区	遺体は一部残存していると思われるが、詳細不明。	1?	0	0	0	1	?	?
240	大墓地西地区	腕、脊椎、骨盤、足が出土。原位置でない?	1?	0	0	1	0	?	?
241	大墓地西地区	腕が乱れて出土。骨盤以下、完全で原位置。ほかの部位なし。	1?	0	0	0	1	IIb2	IIb-IIa2
242	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb-IIa2 / IIa1-IIb	?
243	大墓地西地区	脊椎数点と骨盤のみ残存。	1?	0	0	0	1	?	?
245	大墓地西地区	遺体に関する記載なし。	1	1	0	0	0	IIb	IIb-IIa2
246	大墓地西地区	骨盤、大腿骨のみ出土。原位置?	1?	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
247	大墓地西地区	脊椎、骨盤、大腿骨のみ出土。原位置?	1?	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
248	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
249	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa2	IIa1-IIa2
250	大墓地西地区	足の骨が数本のみ出土。	骨片	0	0	0	1	?	?
251	大墓地西地区	脊椎下部以下、完全で原位置。ほかの部位なし。	1	0	0	1	0	?	?
252	大墓地西地区	遺体に関する記載なし。	1	0	0	1	0	IIb	IIb-IIa2
253	大墓地西地区	脛の骨が2本のみ出土。	骨片	0	0	0	1	IIa1-IIa2	?
254	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa3
255	大墓地西地区	頭蓋骨なし。ほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2

墓番号	墓地	ノートに記載された遺体検出状況	被害者人数	男性	女性	不明	性別記録なし	細分段階	基本段階
256	大墓地西地区	腕、足、骨盤が南東角にまとまって出土。	1	0	0	1	0	?	?
257	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
258	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
259	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
260	大墓地西地区	腕の一部、脊椎下部以下、完全で原位置。	1	0	0	1	0	lb1	lb1-lb2
261	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半	IIa1-IIa2
262	大墓地西地区	頭蓋骨なし。ほか、完全で原位置。 2体埋葬。頭蓋骨1点は覆土から、もう1点は墓坑南壁際から出土。遺体は南北に縦列。腕、肩甲骨なし。北側の遺体は、脊椎12点以下、南側の遺体は、脊椎6点以下、完全で恐らく原位置。ほかの部位なし。	1	0	0	1	0	lb2-I/II 前半	lb1-lb2
263	大墓地西地区	腕、足の骨が墓坑中心部に散在するのみ。	2	0	0	0	2	Ia1-Ia2 / lb1-lb2	?
264	大墓地西地区	腕の骨など一部の骨のみ乱れて残存。	1	0	0	1	0	IIa1	IIa1-IIa2
266	大墓地西地区	頭蓋骨の一部と脊椎下部以下が残存。脊椎下部以下、完全で原位置。	1	0	0	1	0	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
267	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
268	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
270	大墓地西地区	前腕の骨、大腿骨、ほか僅かな数の骨片のみ出土。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
271	大墓地西地区	後代の混入遺体あり。頭蓋骨、胴体などが出土。	不明	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
272	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
273	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
274	大墓地西地区	足の一部の骨のみ原位置。	1?	0	0	0	1	lb2	lb1-lb2
275	大墓地西地区	脊椎の一部以下、完全で原位置。	1?	0	0	0	1	lb2	lb1-lb2
283	大墓地西地区	3体埋葬。木柩内から出土。頭蓋骨なし。最も長い脊椎は14点残存。	0	0	3	0	?	?	?
286	大墓地西地区	脊椎7点、指が乱れて出土。	1?	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
326	大墓地西地区	脊椎4点と足の骨2本のみ出土。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
331	大墓地西地区	遺体状況不明。	1	1	0	0	0	IIa1-lb1	?
343	大墓地西地区	ステップ墓。頭蓋骨が離れて出土した以外は、完全で原位置。	1	1	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
346	大墓地西地区	足の骨1本のみ出土。	骨片	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
350	大墓地西地区	遺体状況不明。	1?	0	0	0	1	?	?
355	大墓地西地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	I/II 後半	IIa1-IIa2
356	大墓地西地区	2体埋葬。東西に並列した埋葬。足の骨のみ残存。西側の遺体が東側の遺体の上に被る。西側の遺体の方が大柄より新し。東側の遺体の方がより年配。	2	0	0	0	2	?	?
362-363	大墓地西地区	2体埋葬。伸展葬。足は曲げられて出土。死後、やや乾燥してから埋葬。東側の遺体は、老齢で大柄。西側の遺体は、若年で小柄。	2	1	0	0	1	I/II 前半-後半	?
369	大墓地西地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	IIa1-lb1	?
400	大墓地西地区	頭蓋骨、足の骨は底部で出土。肩の骨などは覆土から出土。子供の埋葬。	1?	0	0	0	1	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
401	大墓地西地区	頭蓋骨、肋骨、脊椎。脊椎と肋骨のみ原位置。	1	0	0	1	0	IIa1-lb1	?
402	大墓地西地区	ステップ墓。遺体、脊椎、足の骨、頭蓋骨が残存。頭蓋骨は破損。足と脊椎16点はステップ下部から、頭蓋骨はステップ上部から検出と見える。	1	0	1	0	0	IIa1-lb1	?
414	大墓地西地区	大腿骨のみ出土。	骨片	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
421	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
430	大墓地西地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
436	大墓地西地区	腕部がやや乱れている以外、完全で原位置。北向き埋葬?	1?	0	0	0	1	?	?
437	大墓地西地区	脊椎24点、頭蓋骨、腕なし。ほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	?	?
438	大墓地西地区	腕部がやや乱れている以外、完全で原位置。ややきつめの屈葬?	1	0	0	0	1	IIa1-lb1	?
439	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
440	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
441	大墓地西地区	脊椎20点、頭蓋骨なし。腕散乱、ほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	?	?
442	大墓地西地区	脊椎一部と頭蓋骨、腕なし。ほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	IIa1-lb1	?
443	大墓地西地区	脊椎大半と頭蓋骨、腕なし。ほか概ね完全で原位置。	1	0	0	0	1	?	?
444	大墓地西地区	脊椎の一部と頭蓋骨、腕なし。ほか概ね完全で原位置。	1	0	0	0	1	?	?
445	大墓地西地区	脊椎の一部と頭蓋骨、腕なし。ほか概ね完全で原位置。	1	0	0	0	1	?	?
446	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
447	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
448	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
449	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半	IIa1-IIa2
459	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb-IIIa1	?
460	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa2	IIIa1-IIIa2
461	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-I/II 前半	lb1-lb2
462	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
470	大墓地西地区	ステップ墓。遺体はステップから出土。脊椎の一部、頭蓋骨、腕なし。脊椎10点以下、完全で原位置。	1	0	1	0	0	lb1-IIa2	?
471	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb2	lb1-lb2
472	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb2	lb1-lb2
473	大墓地西地区	腕部が乱れて出土した以外、完全で原位置。	1	0	0	1	0	I/II 後半-lb1	?
474	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
475	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
476	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
477	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
478	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIb	IIb
479	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ia1	Ia1-Ia3
480	大墓地西地区	遺体に関する記載なし。	不明	0	0	1	0	?	?
481	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa2	IIIa1-IIa2
482	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
483	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-lb1	?
484	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
485	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIIa1	IIIa1-IIIa2
486	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
487	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb2	lb1-lb2
488	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
489	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
490	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
491	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIIa2	IIIa1-IIIa2
492	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
493	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
494	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-lb1	?
495	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
496	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
501	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-lb1	?
502	大墓地東地区	頭蓋骨は離れて出土。腕なし。その他、完全で原位置。	1	0	1	0	0	lb1-IIa1	?
503	大墓地東地区	脊椎と骨盤は完全で原位置、その他乱れて出土した僅かな骨のみ残存。	1	0	0	0	1	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
504	大墓地東地区	頭蓋骨の一部と骨片のみ残存。	1?	0	0	0	1	lb2-I/II 前半	lb1-lb2
505	大墓地東地区	頭蓋骨と腕の一部なし。それ以外、完全で原位置。	1	0	0	0	1	?	?
506	大墓地東地区	骨盤と足の骨のみ残存。原位置。	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
507	大墓地東地区	ステップ墓。遺体はステップ内から出土。頭蓋骨以外、完全で原位置。	1?	0	1	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
508	大墓地東地区	僅かな骨のみ残存。	1?	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
509	大墓地東地区	頭蓋骨破片、骨片のみ乱れて出土。	1?	0	0	0	1	IIa1-lb1	?
510	大墓地東地区	頭蓋骨(頭頂骨、前頭骨以外)、腕なし。ほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	I/II 前半-lb1	?
511	大墓地東地区	頭蓋骨、腕なし。ほか、完全で原位置。	1	0	0	0	0	I/II 後半	IIa1-IIa2
512	大墓地東地区	頭蓋骨、腕なし。ほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1-I/II 前半	lb1-lb2
513	大墓地東地区	僅かな骨片のみ残存。	1?	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
514	大墓地東地区	大腿骨のみ乱れて出土。	1?	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
515	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
516	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIIa1-IIIa2	IIIa1-IIIa2
517	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
518	大墓地東地区	遺体残存せず。 主体部: 頭蓋骨は逆さまの鉢の下から出土。腕、肋骨なし。脊椎以下、完全で原位置。ほかの部位なし。	不明	0	0	0	0	I/II 前半-lb1	?
519	大墓地東地区	付属部: 頭蓋骨なし? ほか、完全で原位置。 付属部の方が下位に位置する。	2	0	1	0	1	IIb	IIb
520	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 前半-lb1	?

墓番号	墓地	ノットに記載された遺体検出状況	被害者人数	男性	女性	不明	性別記録なし	細分段階	基本段階
521	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
522	大墓地東地区	頭蓋骨、足の骨、足首が散乱して出土。	1	1	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
523	大墓地東地区	腕の骨が離れて出土。脊椎以下、完全で原位置。それ以外の部位なし。	1	0	1	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
524	大墓地東地区	腕、足の骨のみ散乱して出土。	1?	0	0	0	1	II 後半	IIa1-IIb2
525	大墓地東地区	頭蓋骨、腕の骨が乱れて出土。それ以外の部位なし。	1	0	0	1	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
526	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕の骨は乱れて出土。ほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	?	?
527	大墓地東地区	頭蓋骨、腕の骨が離れて出土。脊椎の下部以下、完全で原位置。その他の部位なし。	1	0	1	0	0	II 前半	IIa1-IIb2
528	大墓地東地区	ほぼ完全で原位置。	1	0	0	1	0	?	?
529	大墓地東地区	頭蓋骨、頸骨、腕の骨が離れて出土。脊椎、肋骨、足の骨は概ね原位置。その他の部位なし。	1	0	0	1	0	IIa1	IIa1-IIa2
530	大墓地東地区	ステップ墓。頭蓋骨がやや離れて出土。恐らく切断。そのほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	IIa1-IIb	?
531	大墓地東地区	遺体状況不明。	1	0	1	0	0	?	?
532	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
533	大墓地東地区	1: 頭蓋骨と足が出土。概ね原位置。/ 2: 頭蓋骨と脊椎のみ出土。	1	0	0	1	0	IIa2	IIa1-IIa2
534	大墓地東地区	ステップ墓? 頭蓋骨と腕が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	IIb-IIa1	?
535	大墓地東地区	遺体に関する記載なし。	1	0	1	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
536	大墓地東地区	脊椎の下部以下、完全で原位置。	1	0	0	1	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
537	大墓地東地区	脊椎の下部以下、完全で原位置。	1	0	1	0	0	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
538	大墓地東地区	脊椎の一部、骨盤、下脚部のみ恐らく原位置。	1	0	1	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
539	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
540	大墓地東地区	頭蓋骨なし。ほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
541	大墓地東地区	腕が乱れて出土。骨盤以下、完全で原位置。	1	0	1	0	0	?	?
542	大墓地東地区	ステップ墓。頭蓋骨、腕は乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	?	?
543	大墓地東地区	足の骨などが散乱して出土。	骨片	0	0	0	1	?	?
544	大墓地東地区	脊椎の一部以下、完全で原位置。ややきつい屈葬。	1	1	0	0	0	IIa2-IIb1	?
546	大墓地東地区	脊椎13点、骨盤、大腿骨が原位置で出土。	1	0	1	0	0	I/II 後半-IIb	?
547	大墓地東地区	骨盤と腕の骨が乱れて出土。	1?	0	0	0	1	?	?
548	大墓地東地区	頭蓋骨が離れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	IIb1	IIb1-IIb2
549	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
550	大墓地東地区	腕の骨が離れて出土。頭蓋骨、脊椎なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	?	?
551	大墓地東地区	腕の骨が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	I/II 前半	IIb1-IIb2
552	大墓地東地区	腕、足の骨が散乱して出土。足首のみおそらく原位置。	1	0	0	1	0	IIa1-IIb	?
553	大墓地東地区	頭蓋骨なし。肩甲骨が覆土から出土。ほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	IIa1-IIb	?
554	大墓地東地区	遺体残存せず。	1	1	0	0	0	?	?
555	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
556	大墓地東地区	脊椎、腕、骨盤、足の骨が散乱して出土。	1?	0	0	0	1	IIb	IIb
557	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	?	?
558	大墓地東地区	足首のみ残存。概ね原位置?	1?	0	0	0	1	IIa2	IIa1-IIa2
559	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
560	大墓地東地区	若年者の遺体。頭蓋骨、脊椎なし。そのほか、散乱した骨。	1?	0	0	0	1	?	?
561	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
562	大墓地東地区	頸骨、腕の骨、足の骨の一部が乱れて出土。脊椎と骨盤は原位置。	1	0	0	0	1	I/II 後半-IIb	?
563	大墓地東地区	頭蓋骨と腕の骨が乱れて出土した以外は、完全で原位置。	1	0	0	1	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
564	大墓地東地区	骨盤、足、足首のみ原位置で出土。	1	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
565	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
566	大墓地東地区	骨盤と足首の一部のみ残存。乱れて出土。	1	0	0	0	1	IIa1-IIb	?
567	大墓地東地区	腕の一部が乱れて出土。脊椎以下、完全で原位置。	1	0	0	0	0	?	?
568	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
569	大墓地東地区	骨盤と脊椎の下部、膝から足首まで、おそらく原位置で出土。	1	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
570	大墓地東地区	脊椎以下、完全で原位置。上腕骨と下腕骨は乱れて出土。	1	0	1	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
571	大墓地東地区	骨盤と足首のみ乱れて出土。	1	0	0	0	1	IIa1-IIb	?
572	大墓地東地区	骨盤以下のみ残存。大腿骨と腕の骨の一部は離れて出土。	1	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
573	大墓地東地区	子供の墓? 頭蓋骨は破片、原位置から外れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
594	大墓地東地区	4体埋葬。大人3人と子供1人。頭蓋骨、脊椎は散乱して出土。足の骨が並んで出土。	4	1	0	1	2	IIb2	IIb1-IIb2
600	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
601	大墓地東地区	ステップ墓。腕の一部が乱れて出土。骨盤以下、完全で原位置。ほかの部位なし。	1	0	0	0	1	IIa1-IIb	?
654	大墓地東地区	骨が数点のみ出土。	1?	0	0	0	0	IIb1-IIb2	IIb1-IIb2
660	大墓地東地区	頭蓋骨が離れて出土した以外、完全で原位置?	1	1	0	0	0	?	?
701	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	?	?
702	大墓地東地区	脊椎2点、足、腕、骨盤などが散乱して出土。	1?	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
703	大墓地東地区	頭蓋骨、腕が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
704	大墓地東地区	705に切られる。遺体は脊椎が数点のみ出土。	1?	0	0	0	1	IIIb	?
705	大墓地東地区	704を切り、706に切られる。遺体は小さな骨片のみ出土。	1?	0	0	0	1	?	?
706	大墓地東地区	脊椎24点。頭蓋骨なし。腕散乱。膝より下もなし。ほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	I/II 前半-後半	?
707	大墓地東地区	脊椎数点、骨盤、足のみ出土。	1	1	0	0	0	IIb2-I/II 前半	IIb1-IIb2
708	大墓地東地区	頭蓋骨・肋骨のみ出土。	1?	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
709	大墓地東地区	不整形な墓坑。遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
710	大墓地東地区	頭蓋骨なし、それ以外は完全?	1	0	1	0	0	I/II 後半-IIa1	IIa1-IIa2
711	大墓地東地区	頭蓋骨2つ? うち1の胴体は、完全で原位置。革で覆われる。	1	0	1	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
712	大墓地東地区	頭蓋骨、手、下腕なし。脊椎18点。ほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	IIb1-IIb2	IIb1-IIb2
713	大墓地東地区	頭蓋骨、腕、脊椎なし。ほか、足は完全で原位置。成人の骨。	1	0	0	0	1	IIa1-IIb	?
714	大墓地東地区	脊椎なし。遺体残存せず?	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
716	大墓地東地区	頸骨と腕が乱れて出土。脊椎9点以下、完全で原位置。N-45-Eの長軸方向。	1	0	1	0	0	IIb2	IIb1-IIb2
717	大墓地東地区	ステップ墓。遺体はステップ内から出土。頭蓋骨が破損、乱れて出土。腕なし。その他、原位置。乾燥した脳あり。	1	0	1	0	0	IIa1-IIb	?
718	大墓地東地区	ステップ墓。頭蓋骨はややずれて出土。そのほか、ほぼ完全で原位置。	1	1	0	0	0	?	?
719	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
720	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半-IIb	?
721	大墓地東地区	骨盤以下、完全で原位置。	1	0	0	0	1	IIa1-IIb	?
722	大墓地東地区	腕、肩甲骨が乱れて出土。脊椎以下、完全で原位置。	1	0	0	1	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
723	大墓地東地区	脊椎以下のみ残存。完全で原位置。	1	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
724	大墓地東地区	骨盤、足が残存。原位置からやや乱れる?	1	0	1	0	0	IIb1	IIb1-IIb2
725	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
726	大墓地東地区	727と墓坑共有。西側。遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半-IIb	?
727	大墓地東地区	726と墓坑共有。東側。足の骨が数本のみ出土。	1	0	0	1	0	IIb1-IIb2	IIb1-IIb2
728	大墓地東地区	頭蓋骨、腕は乱れて出土。脊椎以下、概ね完全で原位置。	1	0	1	0	0	?	?
729	大墓地東地区	頭蓋骨なし。ほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	I/II 後半-IIb	?
730	大墓地東地区	頭蓋骨。脊椎の一部なし。腕、肩甲骨が乱れて出土。ほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
731	大墓地東地区	腕、足の骨のみ散乱して出土。	1	0	1	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
732	大墓地東地区	頭蓋骨、腕の骨なし。脊椎16点。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	IIa2	IIa1-IIa2
733	大墓地東地区	頭蓋骨、腕の骨乱れて出土。ほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
734	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕は乱れて出土。脊椎以下、概ね完全で原位置。	1	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
735	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
736	大墓地東地区	頭蓋骨、腕は乱れて出土。脊椎以下、概ね完全で原位置。	1	0	0	1	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
737	大墓地東地区	頭蓋骨と足のみやや乱れて出土。	1	0	0	0	1	IIa1-IIb2	?
738	大墓地東地区	脊椎3点と骨盤のみ原位置。腕、足の骨は乱れて出土。	1	0	0	0	1	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
739	大墓地東地区	腕、足の骨1本が乱れて出土。足の骨も1本と骨盤は原位置。	1	0	0	1	0	IIb1-I/II 後半	IIb1-IIb2
740	大墓地東地区	頭蓋骨が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	?	?
741	大墓地東地区	腕、足の骨が乱れて出土。	1	0	0	1	0	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
743	大墓地東地区	足以外残存せず。原位置?	1	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
744	大墓地東地区	腕の骨なし。頸骨が離れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	IIb1-IIb2	IIb1-IIb2
745	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
746	大墓地東地区	頭蓋骨、腕、骨盤、脚などがまとまって出土。	1	0	0	1	0	IIb1	IIb1-IIb2
747	大墓地東地区	腕か足の骨が散乱して出土。	1	0	0	0	1	IIb1	IIb1-IIb2
748	大墓地東地区	頭蓋骨、足なし。腕が乱れて出土。脊椎と骨盤は原位置。	1	1	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
749	大墓地東地区	750との二連墓坑。頭蓋骨、腕、足の骨がやや乱れて出土。そのほか、原位置。	2	0	1	0	1	IIa1-IIa1	?
750	大墓地東地区	749との二連墓坑。脊椎と骨盤の一部のみほぼ原位置で出土。	1	0	0	0	1	?	?

墓番号	墓地	ノートに記載された遺体検出状況	被葬者人数	男性	女性	不明	性別記録なし	細分段階	基本段階
751	大墓地東地区	2体埋葬。1体はほぼ完全。底部から10センチほど上層で検出。頭位西、右側身の屈葬。もう1体は頭蓋骨のみ。墓坑北側で骨盤と足の骨?が出土。腕が頭蓋骨の脇で出土。	2	0	2	0	0	lb2	lb1-lb2
752	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIb	?
753	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕の骨の一部が乱れて出土。その他、完全で原位置。	1	0	1	0	0	lb2-1/II 前半	lb1-lb2
754	大墓地東地区	骨盤以下のみ、完全で原位置。	1	0	1	0	0	?	?
755	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	?	?
756	大墓地東地区	頭蓋骨と腕がやや乱れて出土。その他、完全で原位置。	1	0	0	1	0	I/II 前半-IIb	?
757	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
800	大墓地東地区	頭蓋骨、腕が離れて出土。腕の一部なし? その他、完全で概ね原位置。	1	0	0	1	0	IIa1-IIb	?
804	大墓地東地区	完全で原位置?	1	1	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
807	大墓地東地区	上半身なし。その他、完全で原位置?	1	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
822	大墓地東地区	2体埋葬。成人と若年者の埋葬。	2	0	0	0	2	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
824	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb2-1/II 前半	lb1-lb2
827	大墓地東地区	頭蓋骨がやや離れて出土。その他、完全で原位置。マットで遺体全体が覆われる。	1	0	1	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
836	大墓地東地区	完全で原位置。	1	0	0	0	1	I/II 前半-IIb	?
867	大墓地東地区	完全で原位置。	1	1	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
869	大墓地東地区	ステップ墓。遺体は、ステップ内から乱れて出土。	1	0	1	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
875	大墓地東地区	2体埋葬。いずれも頭蓋骨なし。その他、完全で原位置?	2	1	0	1	0	lb1	lb1-lb2
880	大墓地東地区	4体埋葬。大人3人、子供1人。改葬墓。大腿骨などは並べられて出土。骨盤や脊椎は散乱して出土。頭蓋骨は1点のみ出土。	4	1	0	0	3	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1206	大墓地西地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-1/II 前半	lb1-lb2
1233	大墓地西地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1241	大墓地西地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	I/II 後半	IIa1-IIa2
1247	大墓地西地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1248	大墓地西地区	3体埋葬。1体は完全で原位置。2体は頭蓋骨と脊椎のみで、そのうち1体は逆姿勢で埋葬。	3	0	0	0	3	IIa1-IIb	?
1251	大墓地西地区	2体埋葬。1体は、下顎と頸部脊椎が乱れている以外は、完全で原位置。もう1体は足のみ。	2	0	0	0	2	I/II 前半	lb1-lb2
1300	大墓地東地区	頭蓋骨、腕部、脊椎の上部分は乱れて出土。その他、完全で原位置。	1	1	0	0	0	?	?
1301	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1302	大墓地東地区	骨が散乱して出土。	??	0	0	0	1	?	?
1303	大墓地東地区	2体埋葬。遺体は2体とも脊椎の下部と足は完全。それ以外は残存せず?	2	0	0	0	2	IIa1	IIa1-IIa2
1304	大墓地東地区	頭蓋骨が原位置からはずれて検出。その他、完全で原位置。	1	0	0	1	0	?	?
1305	大墓地東地区	遺体は残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1306	大墓地東地区	遺体は残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1307	大墓地東地区	頭蓋骨がずれて出土。腕部なし。その他、遺体は完全で原位置。埋葬の主軸は東西方向。左半身が下。頭の向きは西。	1	0	1	0	0	?	?
1308	大墓地東地区	頭蓋骨が大きくずれて出土。腕部がややずれて出土。その他、遺体は完全で原位置。埋葬の主軸は東西方向。左半身が下。頭の向きは西。	1	0	1	0	0	?	?
1309	大墓地東地区	若い遺体。頭蓋骨がややずれ、腕部が完全でない。その他、完全で原位置。脊椎12点。	1	0	0	0	1	lb2-1/II 前半	lb1-lb2
1310	大墓地東地区	頭蓋骨が乱れて出土。	??	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
1311	大墓地東地区	骨が散乱して出土。	??	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
1312	大墓地東地区	脊椎、腕部なし。頭蓋骨、脚部が、恐らく原位置で出土。	??	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
1313	大墓地東地区	頭蓋骨が欠けるが、ほか残存。恐らく原位置。頭位は南西。	1	0	1	0	0	?	?
1314	大墓地東地区	骨が散乱して出土。	??	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1315	大墓地東地区	頭蓋骨がずれて出土。脊椎下部以下、完全で原位置。マット残存。	1	0	0	1	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1316	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕部やや乱れ。その他、完全で原位置。	1	0	0	0	1	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
1317	大墓地東地区	遺体残存せず。南西-北東方向に長軸を持つ墓坑。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1318	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb1-IIa1	?
1319	大墓地東地区	不整形な墓坑。頭蓋骨と一部の骨がまとまって出土。	1	1	0	0	0	I/II 後半-IIa2	IIa1-IIa2
1320	大墓地東地区	頭蓋骨、腕部なし。その他、完全で原位置。頭位西。左側身。	不明	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1321	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb1-1/II 前半	lb1-lb2
1322	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕部乱れて出土。その他、完全で原位置。頭位西。左側身。	??	0	0	0	1	IIa1-IIb	?
1323	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	?	?
1324	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1325	大墓地東地区	頭蓋骨は北側壁沿いで出土。腕部なし。その他、完全で原位置。頭位西。左側身。	??	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1326	大墓地東地区	脊椎17点、頭蓋骨なし。腕部はあり。原位置でない?	??	0	0	0	0	IIa1-IIb	?
1327	大墓地東地区	遺体残存せず。墓坑長軸は東西軸。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIb	?
1328	大墓地東地区	遺体残存せず。墓坑長軸は東西軸。	不明	0	0	0	0	lb1-IIa1	?
1329	大墓地東地区	脊椎以外残存? 脚部のみ、概ね完全で原位置。墓坑長軸は東西軸。頭位も元来は西? 左側身。	??	0	1	0	0	lb1	lb1-lb2
1345	大墓地東地区	脊椎下部と、骨盤、大腿骨の一部のみ残存。遺体はマットで包まれている(ラッピング)。さらに別のマットが遺体の下から出土。	??	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1346	大墓地東地区	前腕部、膝から下なし。その他、完全で概ね原位置。頭位西の左側身。東西軸に長軸を有する墓坑。	??	0	0	0	1	lb1-1/II 前半	lb1-lb2
1347	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb2	lb1-lb2
1348	大墓地東地区	脊椎16点。頭蓋骨と腕部の一部なし。腕部の一部は原位置からずれて出土。その他、完全で原位置と推定。	??	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1349	大墓地東地区	脊椎24点。頭蓋骨と腕部の一部がずれて出土。その他、完全で原位置。遺体はマットで包まれて出土。	1	1	0	0	0	lb1-IIb	?
1350	大墓地東地区	壊れた頭蓋骨がずれて出土、その他、完全で原位置。	??	0	0	0	1	?	?
1351	大墓地東地区	脚部、骨盤の一部のみ散乱して出土。	??	0	0	0	1	IIa3-lb1	?
1352	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-1/II 前半	lb1-lb2
1353	大墓地東地区	頭蓋骨のみ残存。	不明	0	1	0	0	?	?
1354	大墓地東地区	頭蓋骨がややずれて出土。腕部なし。その他、完全で原位置。	1	1	0	0	0	IIa1-IIb	?
1355	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
1356	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕部一部のみ残存。その他、完全で原位置。	??	0	0	0	1	IIa1	IIa1-IIa2
1357	大墓地東地区	頭蓋骨、腕部、脊椎一部なし。その他、完全で原位置。脊椎11点。	1	0	0	0	1	?	?
1358	大墓地東地区	2体埋葬。南北に長軸をもつ墓坑に、縦列で埋葬。北側の遺体、腕部が一部のみずれて出土。脊椎8点、ほか完全で原位置。南側の遺体、脊椎20点、完全で原位置。両遺体の頭蓋骨は墓坑南壁際の一箇所から出土	2	1	1	0	0	lb2-1/II 前半	lb1-lb2
1359	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1360	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIb	?
1361	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕がやや乱れて出土。その他、完全で原位置。脊椎16点。東西軸に長軸を持つ墓坑。頭位東で左側身。	??	0	0	0	1	lb2	lb1-lb2
1362	大墓地東地区	頭蓋骨なし。その他、完全で原位置。脊椎21点。	1	0	0	1	0	IIa2-lb1	?
1363	大墓地東地区	腕なし。その他、完全で概ね原位置。脊椎18点。	1	0	1	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1364	大墓地東地区	2体埋葬。墓坑は東西軸に長軸を持つ。遺体は東西に並列して埋葬。通常の体制。西側の遺体、頭蓋骨がやや乱れるが、完全で原位置。革製のマットで包まれる。東側の遺体、頭蓋骨なし。その他、完全で原位置。脊椎18点。	2	0	1	0	1	lb1-1/II 前半	lb1-lb2
1365	大墓地東地区	3体埋葬。すべて頭蓋骨なし。西側の遺体、腕は一部あり? 真ん中の遺体、腕は残存。原位置からややずれて出土。東側の遺体、頭蓋骨以外完全? きつい屈葬。	3	0	0	0	3	lb1	lb1-lb2
1366	大墓地東地区	頭蓋骨のみ残存。	??	0	0	0	1	lb2	lb1-lb2
1367	大墓地東地区	頭蓋骨、腕なし。その他、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb2-1/II 前半	lb1-lb2
1377	大墓地東地区	頭蓋骨、腕の骨が乱れて出土した以外は、完全で原位置? マットで包まれる。	1	1	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
1388	大墓地東地区	頭蓋骨なし。その他、完全で原位置? 木製の柁の上から出土。マットが被さる。	1	0	1	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1401	大墓地東地区	遺体ありだが、状況不明。	1	0	1	0	0	IIa3-lb2	?
1410	大墓地東地区	2体埋葬? 1体は完全で原位置? かなりきつい屈葬。もう1体は頭蓋骨とその他の骨が乱れて覆土から出土。	2	0	1	0	1	lb1	lb1-lb2
1411	大墓地東地区	7体埋葬? 1体は成人の埋葬で、残り6体は子供の埋葬。遺体の上にマットが幾層にも重なる。	7	0	0	1	6	lb1	lb1-lb2
1415	大墓地東地区	2体埋葬。概ね完全で原位置。	2	1	0	1	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1416	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb2	lb1-lb2
1417	大墓地東地区	2体埋葬。完全で原位置。	2	1	1	0	0	IIa2	IIa1-IIa3
1418	大墓地東地区	遺体状況不明。	??	1	0	0	0	IIa2-lb1	?
1419	大墓地東地区	頭蓋骨逆、下腕れて出土した以外は、完全で原位置。	1	0	1	0	0	lb1	lb1-lb2

墓番号	墓地	ノットに記載された遺体検出状況	被害者人数	男性	女性	不明	性別記録なし	細分段階	基本段階
1426	大墓地東地区	頭蓋骨が逆以外、完全で原位置。きつい屈葬?	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1437	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置?	1	1	0	0	0	la2	la1-la3
1450	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	la3	la1-la3
1451	大墓地東地区	頭部がずれて出土。そのほか、完全で原位置?	1	0	0	0	1	III A1-III a2	III a1-III a2
1452	大墓地東地区	遺体は、完全で原位置。頭には髪が残る。皮膚も残る。	1	1	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1453	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1454	大墓地東地区	頭蓋骨は覆土内から出土。そのほか、原位置からやや乱れて出土。	1	1	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1455	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	la3	la1-la3
1456	大墓地東地区	頭蓋骨がやや乱れている以外は完全?	1	0	1	0	0	la2-lb1	?
1457	大墓地東地区	頭蓋骨は移動され、脊椎上で出土。腕も同位置で出土。そのほか、概ね完全で原位置か、脊椎24点。	1	0	1	0	0	lb1	lb1-lb2
1458	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	II a1-II a2	II a1-II a2
1459	大墓地東地区	背骨と骨盤のみ原位置。残りは散乱。頭部なし?	1	0	1	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1460	大墓地東地区	足のみ原位置で残存。腕?も発見されているが、散乱。マットあり。	1	0	0	1	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1461	大墓地東地区	脊椎18点。頭蓋骨が原位置からやや外れる。腕は一部原位置もあるが、散乱している。ほかの部位は完全で原位置。	1	1	0	0	0	II a1-II a2	II a1-II a2
1462	大墓地東地区	頭蓋骨、腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	?	?
1463	大墓地東地区	遺体は完全で原位置?	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1464	大墓地東地区	異形な墓。ステップ墓? 埋葬は2つ? 埋葬室は2つ存在する。遺体はどちらの埋葬室でも見つかったが、散乱している状態。	2	0	0	1	1	lb1	lb1-lb2
1465	大墓地東地区	マットが遺体・副葬品の下に存在。若年者の遺体。脊椎18点、腕・頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置?	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1466	大墓地東地区	頭蓋骨、腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	la2-lb1	?
1467	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	la1	la1-la3
1468	大墓地東地区	脊椎・頭蓋骨なし? そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	lb1	lb1-lb2
1469	大墓地東地区	概ね完全で原位置?	1	0	1	0	0	?	?
1470	大墓地東地区	若年者の遺体? 頭蓋骨・脊椎なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1471	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	la3	la1-la3
1472	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	?	?
1473	大墓地東地区	骨がわずかに出土。原位置でない?	1?	0	0	0	1	la3	la1-la3
1474	大墓地東地区	頭蓋骨は原位置から離れ、南側壁際から出土。腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	lb1	lb1-lb2
1475	大墓地東地区	頭蓋骨が離れて出土し、腕なし。そのほか、完全で原位置?	1	0	0	1	0	lb1	lb1-lb2
1476	大墓地東地区	肋骨などが僅かに乱れて出土。遺存状況悪い。	1?	0	0	0	1	la2	la1-la3
1477	大墓地東地区	ステップ墓? 肋骨、腕、脚などの骨が散乱して出土。	1	0	0	1	0	lb1	lb1-lb2
1478	大墓地東地区	頭蓋骨なし。ほか、遺体状況不明。	1?	0	0	0	1	la3	la1-la3
1479	大墓地東地区	頭蓋骨、脚部などが散乱して出土。	1?	0	0	0	1	?	?
1480	大墓地東地区	頭蓋骨が著しく離れた地点で出土。腕なし。そのほか、概ね完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb2	lb1-lb2
1481	大墓地東地区	頭蓋骨と腕はやや乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1?	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1485	大墓地東地区	完全で原位置? きつい屈葬?	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1487	大墓地東地区	完全で原位置?	1	0	1	0	0	la2	la1-la3
1488	大墓地東地区	完全で原位置?	1	0	1	0	0	la3-lb1	?
1490	大墓地東地区	両足、完全で原位置。脊椎が数個。そのほかの部位なし。	1?	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1491	大墓地東地区	完全で原位置。遺体下にマット残存。石製容器の把手の中に革製コード残存。	1	0	0	1	0	lb1	lb1-lb2
1492	大墓地東地区	完全で原位置?	1?	0	0	0	1	?	?
1507	大墓地東地区	3体埋葬。東側の遺体、足がやや乱れる? 西側の遺体、状況不明。おそらく完全で原位置? 覆土から別個体の骨盤と足が出土。	3	1	0	0	2	la2	la1-la3
1535	大墓地東地区	3体埋葬。すべての遺体で頭蓋骨、腕なし。そのほか、完全で原位置。南東の遺体のみ脊椎上部なし。	3	0	0	0	3	lb1-lb2	lb1-lb2
1536	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	II a1-II a2	II a1-II a2
1537	大墓地東地区	骨盤と足の骨のみ出土。	1?	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1538	大墓地東地区	骨盤以下、完全で原位置。そのほかの部位なし。	1	0	0	0	1	la3	la1-la3
1539	大墓地東地区	頭蓋骨と脊椎のみ出土。原位置。	1?	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1540	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1541	大墓地東地区	完全で原位置。	1	0	0	0	1	la2-lb1	?
1542	大墓地東地区	頭蓋骨がやや乱れて出土。腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	?	?
1543	大墓地東地区	通常の埋葬。完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1544	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1545	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕と肋骨が乱れて出土。脊椎13点以下、完全で原位置。	4	1	1	2	0	lb1	lb1-lb2
1546	大墓地東地区	完全で原位置。とてもきつい屈葬。	1	1	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1547	大墓地東地区	骨盤以下、完全で原位置。そのほかの部位なし。	2	0	0	0	2	lb2	lb1-lb2
1548	大墓地東地区	腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1549	大墓地東地区	頭蓋骨がやや乱れる。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1550	大墓地東地区	頭蓋骨、腕なし。残りはあり。遺体下にマット残存。	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1551	大墓地東地区	頭蓋骨、腕部の一部なし。そのほか、遺体はほぼ完全。	1?	0	0	0	1	lb2	lb1-lb2
1552	大墓地東地区	両足、腕の一部のみ。両足は原位置。	1	0	0	1	0	lb1	lb1-lb2
1553	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1554	大墓地東地区	両足、脊椎、腕のみ。腕は原位置からずれ、脊椎上から出土。複数の土器にマークあり。	1	0	0	1	0	lb1	lb1-lb2
1555	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb2	lb1-lb2
1556	大墓地東地区	骨が散乱して出土。	1?	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1557	大墓地東地区	完全で原位置。板?	1	0	1	0	0	la3	la1-la3
1558	大墓地東地区	骨が散乱して出土。	1	0	0	1	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1559	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1560	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb2	lb1-lb2
1561	大墓地東地区	大腿骨のみ乱れて出土。	1?	0	0	0	1	lb2	lb1-lb2
1562	大墓地東地区	完全で原位置。	1	1	0	0	0	?	?
1563	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。遺体は革製のマットで包まれる。	1	0	0	0	1	la1	la1-la3
1564	大墓地東地区	頭蓋骨が離れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1565	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1566	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1567	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb2	lb1-lb2
1568	大墓地東地区	遺体状況不明。恐らく完全で原位置。	1?	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1569	大墓地東地区	肋骨と脊椎のみ出土。原位置か不明。	1?	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1570	大墓地東地区	脊椎以下、完全で原位置。そのほかの部位なし。	1	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1571	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
1572	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	la1	la1-la3
1573	大墓地東地区	革が残存(マット?)。保存状態良好。2体埋葬。頭蓋骨1点のみ乱れて出土。そのほか、西側の遺体は完全で原位置。東側の遺体は、腕を除き完全で原位置。	2	0	0	1	0	la1-la2	la1-la3
1574	大墓地東地区	保存状態良好。完全で原位置。	1	0	0	0	1	la3	la1-la3
1575	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1576	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb2	lb1-lb2
1577	大墓地東地区	頭蓋骨と脊椎のみ出土。恐らく原位置。	1	0	0	1	0	lb2-1/II 前半	lb1-lb2
1578	大墓地東地区	頭蓋骨が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	la2-lb1	?
1579	大墓地東地区	腕が乱れて出土。骨盤以下なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	II b-III a2	?
1580	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	?	?
1581	大墓地東地区	頭蓋骨、腕、足の骨などが散乱して出土。	1?	0	0	0	1	la2	la1-la3
1582	大墓地東地区	脊椎、骨盤、大腿骨のみ出土。恐らく完全で原位置。	1?	0	0	0	1	lb2	lb1-lb2
1583	大墓地東地区	2体埋葬。東西に並列して埋葬。ともに頭蓋骨なし。ほか、完全で原位置。	2	0	0	0	2	lb1-lb2	lb1-lb2
1584	大墓地東地区	脊椎下部以下、完全で原位置。そのほかの部位なし。	1	0	0	0	1	la2	la1-la3
1585	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	la1-la3	la1-la3
1586	大墓地東地区	完全で原位置。	1	1	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1587	大墓地東地区	5体埋葬。真ん中の遺体は、腕以外は完全で原位置。西側の遺体は頭蓋骨・足・腕の骨が残るがバラバラ。東側の2体は、一部に足の骨があるものの頭蓋骨のみ、頭蓋骨の位置は概ね原位置。最後の一体は頭蓋骨のみで東側遺体の近く。頭蓋骨の一部のみ。遺体の上層3インチには、マットの破片を伴う木片。	5	4	0	1	0	la2	la1-la3
1588	大墓地東地区	足の一部のみ出土。	1?	0	0	0	1	IB2-1/II 後半	lb1-lb2
1589	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1590	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	la1	la1-la3
1591	大墓地東地区	腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	la2	la1-la3
1592	大墓地東地区	腕の一部なし。そのほか、完全で原位置。	2	0	1	1	0	la3-lb1	?

墓番号	墓地	ノートに記載された遺体検出状況	被害者人数	男性	女性	不明	性別記録なし	細分段階	基本段階
1593	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb2-Ila1	?
1594	大墓地東地区	完全で原位置?	1	0	1	0	0	lb1	lb1-lb2
1595	大墓地東地区	頭蓋骨のみ出土。	1	0	0	1	0	la3	la1-la3
1596	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	I/II 後半-Ila2	Ila1-Ila2
1597	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置?	1	0	0	0	1	la1-la2	la1-la3
1598	大墓地東地区	腕の骨は並んだ状態で、脊椎の後ろから出土。脊椎、脚部は、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1599	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	la3	la1-la3
1600	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1601	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb2	lb1-lb2
1602	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1603	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1604	大墓地東地区	子供の埋葬? 完全で原位置?	1	0	1	0	0	I/II 前半-Ila2	Ila1-Ila2
1605	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1606	大墓地東地区	2体埋葬、西側遺体、脚部・脊椎のみ出土。原位置。東側遺体、骨が散乱して出土。	2	0	0	1	1	lb1	lb1-lb2
1607	大墓地東地区	脚部の一部のみ残存。原位置。頭蓋骨、覆土?	1	0	1	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1608	大墓地東地区	腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	la2	la1-la3
1609	大墓地東地区	完全で原位置? 革製マット?	1	1	0	0	0	la2-la3	la1-la3
1610	大墓地東地区	遺体状況不明。	1	0	0	1	0	lb1	lb1-lb2
1611	大墓地東地区	脊椎12点、腕1本分、その他遺体の一部が覆土から出土。	1	0	0	1	0	lb1	lb1-lb2
1612	大墓地東地区	完全で原位置。	1	0	0	1	0	?	?
1613	大墓地東地区	3体埋葬。東側遺体、遺体完全。西側遺体、やや乱れており、腕なし。その他は概ね原位置。子供の遺体は両埋葬の間から検出。乱れており、遺存状態は悪い、頭部なし。	3	0	0	1	1	lb1	lb1-lb2
1614	大墓地東地区	頭蓋骨と足?のみ乱れて出土。	2?	0	0	2	0	la2	la1-la3
1615	大墓地東地区	3体埋葬。2体の成人の埋葬と1体の子供の埋葬。	3	0	0	1	2	la3-lb1	?
1616	大墓地東地区	子供の墓。遺体状況不明。	1	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1617	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb2	lb1-lb2
1618	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	?	?
1619	大墓地東地区	脚部のみ出土。原位置。	1	0	0	1	0	lb1-I/II 前半	lb1-lb2
1620	大墓地東地区	完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1621	大墓地東地区	遺体に関する記載なし。	1	0	0	1	0	la2-la3	la1-la3
1622	大墓地東地区	頭蓋骨、腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	la1-la2	la1-la3
1623	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	la1-la3	la1-la3
1624	大墓地東地区	頭蓋骨、腕、脊椎なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1625	大墓地東地区	頭蓋骨、腕一部なし。足あり。原位置か不明。	1	0	0	1	0	la3	la1-la3
1626	大墓地東地区	腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	lb2	lb1-lb2
1627	大墓地東地区	わずかな骨のみ出土。	1?	0	0	0	1	la3-lb1	?
1628	大墓地東地区	遺体状況不明。	1	0	0	1	0	la3	la1-la3
1629	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1630	大墓地東地区	遺体残存せず?	不明	0	0	0	0	la3	la1-la3
1631	大墓地東地区	頭蓋骨なし。それ以外あり? 詳細不明。	不明	0	0	0	0	?	?
1632	大墓地東地区	頭蓋骨なし。それ以外あり? 詳細不明。	1	0	0	1	0	?	?
1633	大墓地東地区	遺体状況不明。	1	0	0	1	0	la1-la2	la1-la3
1634	大墓地東地区	遺体残存せず?	不明	0	0	0	0	la3-lb1	?
1635	大墓地東地区	脊椎と肋骨の一部のみ出土。原位置。	1?	0	0	0	1	?	?
1636	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。比較的きつい屈葬。	1	0	0	0	1	la3	la1-la3
1637	大墓地東地区	頭蓋骨、覆土から出土。	1	0	0	1	0	la3-lb1	?
1638	大墓地東地区	遺体のパーツはほぼ完全。ただし、骨盤以下と脊椎以上が分かれて検出。もともと分かれて埋葬? 詳細不明。	1?	0	0	0	1	la3	la1-la3
1639	大墓地東地区	遺体状況不明。	1	0	0	1	0	lb1	lb1-lb2
1640	大墓地東地区	大腿骨などあり。詳細不明。	1	0	0	1	0	la1	la1-la3
1641	大墓地東地区	2体埋葬? 籍骨が2体分。乱れて出土。	1	1	0	0	0	?	?
1642	大墓地東地区	小さな墓。遺体状況不明。	1	1	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1643	大墓地東地区	遺体は完全?	1	0	1	0	0	lb1	lb1-lb2
1644	大墓地東地区	腕部のみやや乱れる。そのほか、完全で概ね原位置。	1	1	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1645	大墓地東地区	若年者の遺体。頭蓋骨、墓坑南側の離れた場所から出土。腕部なし。そのほか、完全で概ね原位置。	1	1	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1646	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕あり、原位置から外れる。そのほか、完全で概ね原位置。	1	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1647	大墓地東地区	遺体状況不明。	1	0	1	0	0	?	?
1648	大墓地東地区	頭蓋骨のみ?	1?	0	0	0	1	la1	la1-la3
1649	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕散乱。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	I/II 後半	Ila1-Ila2
1650	大墓地東地区	遺体状況不明。	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1651	大墓地東地区	遺体通常のもの。	1	1	0	0	0	?	?
1652	大墓地東地区	2つの墓? 遺体状況不明。	2?	0	0	0	2	lb2	lb1-lb2
1653	大墓地東地区	遺体状況不明。	2?	0	0	1	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1654	大墓地東地区	2体埋葬。東側の遺体、頭蓋骨と腕の一部、背骨の一部のみ残存。原位置、マットの上。西側の遺体、頭蓋骨と腕のみ残存。原位置。	2	0	0	2	0	la3	la1-la3
1655	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	la2	la1-la3
1656	大墓地東地区	脚部のみ?	1	0	0	1	0	la1-la3 or lb1-lb2	?
1657	大墓地東地区	ステップ墓。頭蓋骨のみ残存(ステップ部)?	1	1	0	0	0	I/II 後半-Ila2	Ila1-Ila2
1658	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、腕部を除き、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1659	大墓地東地区	頭蓋骨なし。遺体は破片のみ。	1?	0	0	0	1	I/II 後半-Ila2	Ila1-Ila2
1660	大墓地東地区	2体埋葬。頭蓋骨散乱、そのほか状況不明。	2	0	0	0	2	?	?
1661	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。マットが遺体の下から出土。	1	0	0	1	0	la1-la2	la1-la3
1662	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb1-lb1	?
1663	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb1-I/II 後半	lb1-lb2
1664	大墓地東地区	頭蓋骨が離れて出土。脊椎下部以下、完全で原位置。ほかの部位なし。	1?	0	0	1	0	lb2-I/II 前半	lb1-lb2
1665	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、遺体状況不明。	1?	0	0	0	1	?	?
1666	大墓地東地区	頭蓋骨が離れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	lb2	lb1-lb2
1667	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1668	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕が離れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	?	?
1669	大墓地東地区	頭蓋骨が離れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	lb1	lb1-lb2
1670	大墓地東地区	腕が離れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	la3	la1-la3
1671	大墓地東地区	頭蓋骨、腕が離れて出土。そのほか、完全で原位置。	1?	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1672	大墓地東地区	骨盤以下、完全で原位置。そのほかの部位なし。	1	0	1	0	0	lb1	lb1-lb2
1673	大墓地東地区	若年者の遺体。完全で原位置。	3?	0	2	0	1	lb1-I/II 前半	lb1-lb2
1674	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、遺体状況不明。	1	0	0	1	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1675	大墓地東地区	腕が離れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	lb1-I/II 後半	lb1-lb2
1676	大墓地東地区	2体埋葬。遺体は乱れて出土。部位は揃っている。	2	1	0	0	1	la1	la1-la3
1677	大墓地東地区	頭蓋骨が離れて出土。そのほか、遺体状況不明。	1	1	0	0	0	la1-la2	la1-la3
1678	大墓地東地区	若年者の遺体。頭蓋骨なし。そのほか、遺体状況不明。	1?	0	0	0	1	la3-lb1	?
1679	大墓地東地区	遺体状況不明。マット出土。	1?	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1680	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半-Ila1	Ila1-Ila2
1681	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	la2	la1-la3
1682	大墓地東地区	頭蓋骨あり。そのほか、遺体状況不明。	1	1	0	0	0	la1	la1-la3
1683	大墓地東地区	完全で原位置。	1	1	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1684	大墓地東地区	腕か足の骨のみ出土。	1	1	0	0	0	I/II 前半-Ila1	Ila1-Ila2
1685	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	la3-lb1	?
1686	大墓地東地区	頭蓋骨が離れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	lb2	lb1-lb2
1687	大墓地東地区	2体埋葬。東西に並列して埋葬。骨盤以下、完全で原位置。そのほかの部位なし。	2	0	0	1	1	la3	la1-la3
1688	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb1-I/II 前半	lb1-lb2
1689	大墓地東地区	頭蓋骨が離れて出土。脛以下なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	la3-lb1	?
1690	大墓地東地区	頭蓋骨、腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	la2	la1-la3
1691	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	la2	la1-la3
1692	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕が離れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	?	?
1693	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1694	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1695	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1696	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	la3-lb1	?

墓番号	墓地	ノードに記載された遺体検出状況	被害者人数	男性	女性	不明	性別記録なし	細分段階	基本段階
1697	大墓地東地区	頭蓋骨、正常な位置。そのほか、恐らく完全で原位置。	1	0	0	0	1	I/II 後半	Ila1-Ila2
1698	大墓地東地区	遺体の保存状況不良。そのほか、遺体状況不明。	1?	0	0	0	1	?	?
1699	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	I/II 後半	Ila1-Ila2
1700	大墓地東地区	頭蓋骨、腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ib2	Ib1-Ib2
1701	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ila1	Ila1-Ila2
1702	大墓地東地区	頭蓋骨、腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ila1	Ila1-Ila2
1703	大墓地東地区	子供の埋葬? 腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ia2	Ia1-Ia3
1704	大墓地東地区	2体埋葬。東西に並列して埋葬。ともに頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。西側の遺体、腕なし。	2	0	0	0	2	Ib1-Ib2	Ib1-Ib2
1705	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ib2-I/II 前半	Ib1-Ib2
1706	大墓地東地区	完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ib1	Ib1-Ib2
1707	大墓地東地区	かなりの大型墓。遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	Ia1	Ia1-Ia3
1708	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	?	?
1709	大墓地東地区	大型墓。頭蓋骨のみ覆土から出土。	1	0	1	0	0	I/II 前半	Ib1-Ib2
1710	大墓地東地区	切り合った墓? 後期の墓と前期の墓。頭蓋骨、腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ib-IIIa2	?
1711	大墓地東地区	切り合った墓? 後期の墓と前期の墓。1710と類似。足のみ出土。恐らく完全で原位置。	1	0	0	0	1	?	?
1712	大墓地東地区	小型の子供の墓。頭蓋骨のみ覆土から出土。とても浅い。	1	0	0	0	1	Ib2-I/II 前半	Ib1-Ib2
1713	大墓地東地区	1710と1711に近接。遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	Ila1	Ila1-Ila2
1714	大墓地東地区	レンガ製側壁。1710, 1711, 1713と類似。遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	IIIb	IIIb
1715	大墓地東地区	後期の墓。遺体状況不明。	不明	0	1	0	0	IIIb	IIIb
1716	大墓地東地区	大型の墓。泥レンガ???highly skeptical 遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIIa2	IIIa1-IIIa2
1717	大墓地東地区	完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ib2	Ib1-Ib2
1718	大墓地東地区	頭蓋骨、腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	Ib1	Ib1-Ib2
1719	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ia1-Ib	?
1720	大墓地東地区	小型の墓。骨はほとんど残存せず。	1	0	0	1	0	Ib1-Ib2	Ib1-Ib2
1721	大墓地東地区	頭蓋骨、腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ib1	Ib1-Ib2
1722	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ib1-Ib2	Ib1-Ib2
1723	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ib2	Ib1-Ib2
1724	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ila1	Ila1-Ila2
1725	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ila1	Ila1-Ila2
1726	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ila1-Ila2	Ila1-Ila2
1727	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半	Ila1-Ila2
1728	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ib2-I/II 後半	Ib1-Ib2
1729	大墓地東地区	ステップ墓。遺体は下層から出土。頭蓋骨、覆土から出土。そのほか、完全で原位置。	2	1	1	0	0	Ib2	Ib1-Ib2
1730	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ib2	Ib1-Ib2
1731	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	?	?
1732	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ib1	Ib1-Ib2
1732 (2)	大墓地東地区	1732重複 / 遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
1733	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	Ib2-I/II 前半	Ib1-Ib2
1734	大墓地東地区	頭蓋骨、脊椎が乱れて出土。腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	Ib1	Ib1-Ib2
1735	大墓地東地区	腕が乱れて出土。骨盤以下、完全で原位置。	1	0	1	0	0	Ib1-Ib2	Ib1-Ib2
1736	大墓地東地区	ステップ墓。遺体は、中央墓坑内から出土。頭蓋骨、腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ib1	Ib1-Ib2
1737	大墓地東地区	頭蓋骨、正常な位置。そのほか、恐らく完全で原位置。	1	0	0	1	0	Ib1	Ib1-Ib2
1738	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕が覆土から出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	?	?
1739	大墓地東地区	2体埋葬。東西に並列して埋葬。西側の遺体は、頭蓋骨、腕が乱れて出土。ほか、完全で原位置。東側の遺体は、頭蓋骨、腕なし。そのほか、完全で原位置。	2	0	2	0	0	Ib1-Ib2	Ib1-Ib2
1740	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ib1-Ib2	Ib1-Ib2
1741	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	?	?
1742	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	Ib1-Ib2	Ib1-Ib2
1743	大墓地東地区	腕が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	Ia2	Ia1-Ia3
1744	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ib1	Ib1-Ib2
1745	大墓地東地区	頭蓋骨、顎骨、肩甲骨、腕、足の骨などが散乱して出土。	1	0	1	0	0	Ib1	Ib1-Ib2
1746	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ia1	Ia1-Ia3
1747	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ib1	Ib1-Ib2
1748	大墓地東地区	頭蓋骨あり。そのほか、恐らく完全で原位置。	1	1	0	0	0	Ib2	Ib1-Ib2
1749	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ib2-I/II 後半	Ib1-Ib2
1750	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ib2	Ib1-Ib2
1751	大墓地東地区	2体埋葬。東西に並列して埋葬。西側の遺体は、大腿骨がやや乱れて出土。そのほか、完全で原位置。東側の遺体は、腕なし。そのほか、完全で原位置。	2	0	2	0	0	Ila1	Ila1-Ila2
1752	大墓地東地区	腕なし。そのほか、完全で原位置。	1?	0	0	0	1	Ib2-I/II 前半?	Ib1-Ib2
1753	大墓地東地区	完全で原位置。	1	0	0	1	0	Ib1	Ib1-Ib2
1754	大墓地東地区	頭蓋骨、腕が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	Ib2	Ib1-Ib2
1755	大墓地東地区	腕が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	IIIb	IIIb
1756	大墓地東地区	ステップ墓。顎骨のみ覆土から出土。そのほかの部位なし。	1	0	0	1	0	Ila1	IIIa1-IIIa2
1757	大墓地東地区	護符などの土器内への一括埋葬。頭蓋骨なし。腕が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	?	?
1758	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	Ib1	Ib1-Ib2
1759	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ib1	Ib1-Ib2
1760	大墓地東地区	頭蓋骨なし。『移行期の墓』	1	0	0	0	1	Ib2-I/II 前半	Ib1-Ib2
1761	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ia3	Ia1-Ia3
1762	大墓地東地区	完全で原位置。	1	1	0	0	0	Ib1	Ib1-Ib2
1763	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ib1	Ib1-Ib2
1764	大墓地東地区	小型の墓。遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ib1	Ib1-Ib2
1765	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ia1-Ila2	Ia1-Ila2
1766	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ib1-Ib2	Ib1-Ib2
1767	大墓地東地区	小さな遺体。遺体状況不明。	1	0	0	0	1	Ib1	Ib1-Ib2
1768	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ib1	Ib1-Ib2
1769	大墓地東地区	完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ib1	Ib1-Ib2
1770	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ia1-Ila2	Ia1-Ila2
1771	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ib1	Ib1-Ib2
1772	大墓地東地区	頭蓋骨なし。脊椎16個以下、完全で原位置。遺体はマットに包まれる。	1	0	0	0	1	Ib1	Ib1-Ib2
1773	大墓地東地区	頭蓋骨のみ出土。	1	1	0	0	0	Ib1-Ia1	?
1774	大墓地東地区	頭蓋骨、墓坑南壁際から離れて出土。脊椎19個以下、完全で原位置。	1	0	1	0	0	Ia2-Ia3	Ia1-Ia3
1775	大墓地東地区	2体埋葬? 頭蓋骨2点から出土。胴体は1体分のみ。脊椎14個以下、完全で原位置。	1	1	0	0	0	I/II 後半-Ila2	Ila1-Ila2
1776	大墓地東地区	頭蓋骨なし。ほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ia1	Ia1-Ia3
1777	大墓地東地区	遺体の遺存状況は極めて悪い。	1?	0	0	0	1	I/II 前半-後半	?
1778	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ib2	Ib1-Ib2
1779	大墓地東地区	完全で原位置。	1	0	0	0	1	?	?
1780	大墓地東地区	肋骨、脊椎の下部、大腿骨のみ出土。	1	0	0	0	1	Ib1-Ib2	Ib1-Ib2
1781	大墓地東地区	腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	Ib1	Ib1-Ib2
1782	大墓地東地区	頭蓋骨2点のみ出土。	2	1	1	0	0	?	?
1783	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ia2	Ia1-Ia3
1784	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ib1-Ib2	Ib1-Ib2
1785	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	Ia2	Ia1-Ia3
1786	大墓地東地区	完全で原位置。	1	1	0	0	0	Ib1	Ib1-Ib2
1787	大墓地東地区	完全で原位置。	1	1	0	0	0	Ib1-Ib2	Ib1-Ib2
1788	大墓地東地区	子供の墓、完全で原位置。繊維片?	1	0	0	0	1	Ib1-Ib2	Ib1-Ib2
1789	大墓地東地区	遺体に閉する記載なし。	1	0	0	1	0	Ib1	Ib1-Ib2
1790	大墓地東地区	頭蓋骨、原位置から外れる。腕と足の骨が脊椎と骨盤近くに散乱。脊椎と骨盤は完全で原位置。	1	0	0	0	1	Ib1-Ib2	Ib1-Ib2
1791	大墓地東地区	全体的にやや乱れて出土。頭蓋骨なし。	1	0	0	0	1	Ia3-Ib1	?
1792	大墓地東地区	頭蓋骨、腕、肋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	?	?
1793	大墓地東地区	骨が散乱して出土。	1?	0	0	0	1	Ib1-Ib2	Ib1-Ib2
1794	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	Ia1	Ia1-Ia3
1795	大墓地東地区	2体埋葬。成人と子供の墓。いわゆる追葬墓か? 成人の墓、足の骨一部なし? そのほか、完全で原位置。皮膚は乾燥して残存。子供の墓、完全で原位置。	2	1	0	0	1	?	?



墓番号	墓地	ノートに記載された遺体検出状況	被害者人数	男性	女性	不明	性別記録なし	細分段階	基本段階
1796	大墓地東地区	完全で原位置?	1	1	0	0	0	?	?
1797	大墓地東地区	脊椎数点とそのほかの骨片のみ出土。	1?	0	0	0	1	lb2-1/II 前半	lb1-lb2
1798	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	lb2	lb1-lb2
1799	大墓地東地区	骨が散乱して出土したのみ。	1	0	1	0	0	la2	la1-la3
1800	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 前半-後半	?
1801	大墓地東地区	僅かな骨片が覆土から出土したのみ。	1?	0	0	0	1	I/II 後半-IIa1	IIa1-IIa2
1802	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
1803	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。マットに包まれる?	1	1	0	0	0	lb2	lb1-lb2
1804	大墓地東地区	遺体の保存状況良好。2点の頭蓋骨が出土。内1点は覆土から出土。そのほか、完全で原位置。	2	1	1	0	0	la1-la2	la1-la3
1805	大墓地東地区	頭蓋骨、脊椎の一部、腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1806	大墓地東地区	2連接墓(1806-1807)。完全で原位置。	1	1	0	0	0	?	?
1807	大墓地東地区		1	0	1	0	0	?	?
1808	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1809	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1810	大墓地東地区	頭蓋骨が覆土から出土したのみ。	1?	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1811	大墓地東地区	頭蓋骨が覆土から出土したのみ。	1?	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1812	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1813	大墓地東地区	腕、脊椎上部なし。頭部、墓坑南側から出土。脊椎下部以下、完全で原位置。	1	0	0	1	0	lb1	lb1-lb2
1814	大墓地東地区	脊椎10個のみ出土。腕なし。2体分の頭部が離れて出土。胴体は1体分のみ乱れて出土。	2	1	1	0	0	lb1	lb1-lb2
1815	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1816	大墓地東地区	完全で原位置。	1	0	1	0	0	lb1	lb1-lb2
1817	大墓地東地区	脊椎12個、腕、頭蓋骨のみ乱れて出土。そのほかの部位なし。頭部やや原位置から外れ、下顎骨は少し離れて出土。多量の小型土器が出土。	1	0	1	0	0	lb1	lb1-lb2
1818	大墓地東地区	頭蓋骨以外、ほぼ完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb2	lb1-lb2
1819	大墓地東地区	頭蓋骨のみ出土。	1?	0	0	0	1	la3-lb1	?
1820	大墓地東地区	3体分の遺体が出土。2体の床直遺体は両方ともに完全で原位置。1体は、右半身を下に埋葬。頭位は同じ。両者は向き合うように埋葬されている。もう1体は覆土から出土。	3	1	1	1	0	la1-la2	la1-la3
1821	大墓地東地区	腕、脊椎上部、頭部なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1822	大墓地東地区	2体分の遺体が出土。東側の遺体、腕なし。頭蓋骨はやや動き、脊椎上から発見。西側の遺体、脊椎のみ。子供の遺体?	2	0	0	0	2	?	?
1823	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	la3	la1-la3
1824	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕の骨がやや乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	?	?
1825	大墓地東地区	完全で原位置。	1	0	1	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1826	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半	IIa1-IIa2
1827	大墓地東地区	頭蓋骨のみ出土。	1	0	1	0	0	lb1	lb1-lb2
1828	大墓地東地区	頭蓋骨のみ出土。	1?	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1829	大墓地東地区	頭蓋骨、骨盤のみ完全で原位置。そのほかは乱れて出土。	1	0	0	0	1	la2-la3	la1-la3
1830	大墓地東地区	頭蓋骨のみ出土。	1?	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1831	大墓地東地区	完全で原位置。	1	0	0	0	1	la1-la2	la1-la3
1832	大墓地東地区	腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	lb2	lb1-lb2
1833	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	I/II 後半	IIa1-IIa2
1834	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	I/II 前半	lb1-lb2
1835	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1836	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1837	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	?	?
1838	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	I/II 前半-後半	?
1839	大墓地東地区	頭蓋骨、腕などが乱れて検出。そのほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	?	?
1840	大墓地東地区	頭蓋骨、前腕が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1841	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1842	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb2	lb1-lb2
1843	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1844	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1845	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb2	lb1-lb2
1846	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1847	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb2-1/II 前半?	lb1-lb2
1848	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb2-1/II 前半	lb1-lb2
1849	大墓地東地区	頭蓋骨が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1850	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1851	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1852	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1853	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1854	大墓地東地区	脊椎以下、完全で原位置。そのほかの部位なし。	1	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1855	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	?	?
1856	大墓地東地区	2体埋葬。脊椎以下大腿骨の一部まで、完全で原位置。大腿骨の一部と脛はやや乱れる。そのほかの部位なし。	2	1	0	1	0	lb2	lb1-lb2
1857	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	I/II 後半	IIa1-IIa2
1858	大墓地東地区	腕がやや乱れる。肋骨、脊椎以下、完全で原位置。そのほかの部位なし。	1	0	0	1	0	lb1	lb1-lb2
1859	大墓地東地区	ステップ墓。遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
1860	大墓地東地区	完全で原位置。	1	0	1	0	0	la3-lb1	?
1861	大墓地東地区	頭蓋骨と脊椎が覆土から出土。	1?	0	0	0	1	lb1-1/II 前半	lb1-lb2
1862	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	la3	la1-la3
1863	大墓地東地区	完全で原位置。	1	0	1	0	0	I/II 後半	IIa1-IIa2
1864	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1865	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	1	0	lb1	lb1-lb2
1866	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕がやや乱れる。そのほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	lb2-1/II 前半	lb1-lb2
1867	大墓地東地区	頭蓋骨がやや乱れる。そのほか、遺体状況不明。	1?	0	0	0	1	I/II 後半-IIa1	IIa1-IIa2
1868	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、遺体状況不明。	1?	0	0	0	1	lb2	lb1-lb2
1869	大墓地東地区	頭蓋骨、腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	IIb	IIb
1870	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1871	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb2	lb1-lb2
1872	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1873	大墓地東地区	頭蓋骨なし。ほか、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
1874	大墓地東地区	頭蓋骨、腕なし。ほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	?	?
1875	大墓地東地区	伸展葬。完全で原位置。頭位南。墓坑内の西側から出土。	1	1	0	0	0	lb1-1/II 後半	lb1-lb2
1876	大墓地東地区	遺体残存せず。	1	1	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1877	大墓地東地区	頭蓋骨が乱れて出土。頸骨は頭蓋骨からやや離れて出土。脊椎と肋骨のみ原位置。ほかの部位なし。	1	0	0	0	1	?	?
1878	大墓地東地区	完全で原位置。	2	1	1	0	0	lb1	lb1-lb2
1879	大墓地東地区	2層からなる埋葬。下層の遺体、完全で原位置。上層の遺体、腕がない以外は、完全で原位置。革製のマットが遺体の下に存在。	1	1	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
1880	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1881	大墓地東地区	遺体状況不明。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1882	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
1883	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-IIa1	?
1884	大墓地東地区	完全で原位置。	1	0	1	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1885	大墓地東地区	腕、足の骨が乱れて出土。ほかの部位なし。東西軸に長軸を持つ墓坑。	1	0	0	1	0	?	?
1886	大墓地東地区	僅かな骨が革製のマットとともに出土。	1?	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
1887	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1888	大墓地東地区	腕がやや乱れて出土した以外は、完全で原位置。	1	0	0	1	0	lb1	lb1-lb2
1889	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1890	大墓地東地区	完全で原位置。	1	1	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1891	大墓地東地区	頭蓋骨、脊椎がない以外は、完全で原位置。	1?	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
1892	大墓地東地区	頭蓋骨と頸骨が乱れて出土したのみ。	1	0	0	0	1	IIa2	IIa1-IIa2
1893	大墓地東地区	遺体に関する記載なし。	1	1	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1894	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1	lb1-lb2
1895	大墓地東地区	遺体残存せず。マットあり。	不明	0	0	0	0	?	?
1896	大墓地東地区	頭蓋骨と腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	?	?

墓番号	墓地	ノートに記載された遺体検出状況	被葬者人数	男性	女性	不明	性別記録なし	細分段階	基本段階
B897	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
B898	大墓地東地区	頭蓋骨と腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	?	?
B899	大墓地東地区	頭蓋骨と頸骨が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	lb2	lb1-lb2
B900	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb2	lb1-lb2
B901	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	0	1	0	?	?
B902	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	lla1-llb	?
B903	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
B904	大墓地東地区	頭蓋骨2点が覆土から出土したのみ。	2	2	0	0	0	llb	llb
B905	大墓地東地区	遺体残存せず。	1	0	0	1	0	lb2	lb1-lb2
B906	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb2-1/II 前半	lb1-lb2
B907	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
B908	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
B909	大墓地東地区	頭蓋骨なし。そのほか、完全で原位置。覆土から複数の骨片が出土。	1	0	0	1	0	?	?
B910	大墓地東地区	頭蓋骨1点が覆土から出土したのみ。	1	0	1	0	0	la1-la2	la1-la3
B911	大墓地東地区	頭蓋骨なし。腕が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1?	0	0	0	1	la2	la1-la3
B912	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
B913	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	1/II 後半	lla1-lla2
B914	大墓地東地区	下腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	lb2-1/II 前半	lb1-lb2
B915	大墓地東地区	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
B916	大墓地東地区	頭蓋骨、腕なし。そのほか、完全で原位置。	1?	0	0	0	1	?	?
B917	大墓地東地区	骨盤以下、完全で原位置。そのほかの部位なし。	1?	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
B918	大墓地東地区	頭蓋骨のみ残存。	1	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
B8	B墓地	頭蓋骨、肋骨なし。脊椎以下、完全で原位置。墓番号が隠れていてよく見えない。2体埋葬。1体は伸展葬の遺体。王朝時代? ほぼ完全。もう1体はバラバラで、頭蓋骨は無傷な1体の脇から出土。	2	1	0	1	0	lb2	lb1-lb2
B12	B墓地	ベッドのある埋葬。遺体はベッド上から出土。腕と頭蓋骨がベッドから落ちて出土した。ほか、完全で原位置。パピルス製のマットが足の下から出土。木材とマットは覆土からも出土。	1	0	1	0	0	1/II 後半	lla1-lla2
B15	B墓地	2体埋葬? 頭蓋骨? 2点。内1点は確実。腕、足の骨が散乱。	2	1	1	0	0	?	?
B16	B墓地	遺体に関する記載なし。	1	1	0	0	0	?	?
B17	B墓地	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lla1-lla2	lla1-lla2
B18	B墓地	頭蓋骨がずれて出土。腕なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	lla1	lla1-lla2
B19	B墓地	骨盤、大腿骨、腕などが散乱して出土。	1	1	0	0	0	1/II 前半	lb1-lb2
B20	B墓地	脊椎の一部と足首のみ出土。	1?	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
B21	B墓地	足以外の骨は墓坑南東側からまとまって出土。頭蓋骨は覆土から出土。	1	0	1	0	0	1/II 前半	lb1-lb2
B22	B墓地	足、腕がまとまって出土。脛の骨が離れて出土。	1	1	0	0	0	?	?
B23	B墓地	足が1本ない以外、完全でおそらく原位置。ゆるい屈葬。	2?	0	1	0	1	?	?
B24	B墓地	頭蓋骨4点出土。伸展葬の遺体1体。王朝時代? 頭蓋骨は西側の墓坑に沿って出土。	4	1	0	1	2	?	?
B25	B墓地	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lla1-lla2	lla1-lla2
B26	B墓地	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	1/II 後半	lla1-lla2
B27	B墓地	頭蓋骨や骨盤、腕、足などが散乱して出土。	1	0	0	1	0	lla1-lla2	lla1-lla2
B28	B墓地	腕と足の骨のみが南側でまとまって出土。	1?	0	0	0	1	lla1	lla1-lla2
B29	B墓地	腕と足の骨のみ出土。	1	0	0	1	0	lb1-lb2	lb1-lb2
B30	B墓地	B31と同一の墓坑。恐らく伸展葬の遺体。王朝時代? 頭蓋骨、腕、足、骨盤などが乱れて出土。	2?	1	0	0	1	?	?
B32	B墓地	B30と同一の墓坑。伸展葬の遺体。王朝時代? 頸のみ。腕1本乱れて出土。足の1本は膝から下なし。脊椎は複数に分かれて出土。	2?	1	0	0	1	?	?
B33	B墓地	足の骨のみ出土。	骨片	0	0	0	1	1/II 後半	lla1-lla2
B34	B墓地	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lla1-lla2	lla1-lla2
B35	B墓地	3体埋葬。頭蓋骨3点が出土。ほか、腕や足、骨盤が散乱して出土。	3	0	1	1	1	?	?
B36	B墓地	脊椎の一部と腕の一部が散乱して出土。脊椎下部以下、完全で原位置。	1	0	1	0	0	1/II 後半	lla1-lla2
B37	B墓地	頭蓋骨、腕の骨が墓坑の南側でまとまって出土。	1	1	0	0	0	lla1-lla2	lla1-lla2
B38	B墓地	頭蓋骨、骨盤、腕、足の骨が墓坑の南側でまとまって出土。	1	0	1	0	0	?	?
B39	B墓地	腕、足の骨が墓坑の南側でまとまって出土。骨盤の一部も離れて出土。脊椎と残りの骨盤、足が墓坑の北側から出土。	1	0	0	1	0	?	?
B40	B墓地	伸展葬? 王朝時代? 頭蓋骨なし。足の一部が乱れて出土した以外は、完全で原位置。	1	0	1	0	0	?	?
B41	B墓地	頭蓋骨なし。腕の骨、肋骨などが散乱して出土。そのほか、完全で原位置。	1?	0	0	0	1	lla1-lla2	lla1-lla2
B42	B墓地	僅かな骨が散乱して出土。	1?	0	0	0	1	?	?
B43	B墓地	遺体残存せず。	1	0	0	1	0	?	?
B44	B墓地	骨盤、腕、足、肋骨などの骨が散乱して出土。	1?	0	0	0	1	?	?
B45	B墓地	頭蓋骨なし。そのほか、ほぼ完全で原位置。	1?	0	0	1	0	lb1-lb2	lb1-lb2
B46	B墓地	僅かな骨が散乱して出土。	1?	0	0	0	1	?	?
B47	B墓地	頭蓋骨なし。骨盤、腕と足の骨のみ散乱して出土。	1?	0	0	0	1	?	?
B50	B墓地	腕と足の一部、骨、および4番目と5番目の脊椎の間に空間があることを除き、ほぼ完全で原位置。	3	0	2	0	1	lla1	lla1-lla2
B60	B墓地	頭蓋骨、腕の骨がない以外、完全で原位置。	1	0	0	0	1	?	?
B61	B墓地	骨盤、腕、足の骨が散乱して残存。	1	0	0	0	1	1/II 前半	lb1-lb2
B62	B墓地	主墓坑の北西側に小さな墓坑が存在する連接型の墓。両方の墓坑に遺体が存在。主墓坑の遺体。頭蓋骨は小さい墓坑から出土? 足が散乱。腕、肋骨、脊椎、骨盤は残存し、原位置。小さい墓坑の遺体は、子供の埋葬? 頭蓋骨、肋骨、脊椎、腕、足の骨が散乱。	2?	0	0	1	1	lb1	lb1-lb2
B63	B墓地	頭蓋骨のみ出土。	1?	0	0	0	1	?	?
B64	B墓地	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	1/II 後半-lla2	lla1-lla2
B65	B墓地	頭蓋骨・腕・足の骨のみが散乱して出土。	1?	0	0	0	1	?	?
B86	B墓地	遺体状況不明。	1	1	0	0	0	la3	la1-la3
B89	B墓地	頭蓋骨は離れて逆さまで出土。腕なし。そのほか、概ね完全で原位置。	1	0	0	0	1	1/II 後半	lla1-lla2
B91	B墓地	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	1/II 後半	lla1-lla2
B92	B墓地	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
B93	B墓地	頭蓋骨、腕、脊椎の一部がない以外、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lb1-lb2	lb1-lb2
B94	B墓地	頭蓋骨が離れて出土し、下顎は離れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	1/II 前半-後半	?
B95	B墓地	頭蓋骨、腕の一部がない以外、完全で原位置。	1	0	0	1	0	lla1-lla2	lla1-lla2
B96	B墓地	脊椎7点、骨盤、足のみ原位置。	1?	0	0	0	1	lb2	lb1-lb2
B97	B墓地	一部の骨が乱れて出土したのみ。	1	0	0	1	0	lla1-lla2	lla1-lla2
B98	B墓地	脊椎、骨盤、足の一部のみ原位置。木片、覆屋の一部?	1?	0	0	0	1	lla1-lla2	lla1-lla2
B99	B墓地	頭蓋骨、腕の一部がない以外、完全で原位置。	1?	0	0	0	1	lla1-lla2	lla1-lla2
B100	B墓地	肩甲骨、脊椎、骨盤のみ、原位置で出土。足の骨の一部は乱れて出土。	0	0	1	0	0	?	?
B101	B墓地	頭蓋骨がない以外、完全で原位置。	1	0	0	0	1	lla1-lla2	lla1-lla2
B102	B墓地	頭蓋骨、破片、腕の骨なし。そのほか、完全で原位置。	1?	0	0	0	1	lb1	lb1-lb2
B103	B墓地	子供の埋葬。足の骨のみ出土。	1?	0	0	0	1	?	?
B104	B墓地	一部の骨が出土したのみ。	1?	0	0	0	1	1/II 後半	lla1-lla2
B105	B墓地	2体埋葬。西側の遺体、骨盤と脚部のみ出土。原位置。東側の遺体、肋骨、脊椎、骨盤と脚部の一部のみ出土。	2	0	0	2	0	1/II 後半	lla1-lla2
B106	B墓地	頭蓋骨がやや離れて出土した以外、完全で原位置。	1	1	0	0	0	la2-lb1	?
B107	B墓地	北側墓坑: 頭蓋骨が乱れて出土し、腕の骨がない以外、完全で原位置。 南側墓坑: 頭蓋骨が乱れて出土した以外、完全で原位置。	2?	1	1	0	0	?	?
B108	B墓地	完全で原位置。まつい屈葬。	1	0	1	0	0	?	?
B109	B墓地	頭蓋骨、腕、足の骨などが乱れて出土したのみ。	1	0	1	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
B110	B墓地	多量の棒が遺体上から出土。頭蓋骨は遺体の上、棒の上から出土。そのほか、完全で原位置。	1	1	0	0	0	lb2	lb1-lb2
B111	B墓地	ステップ墓。4体埋葬。 矩形主体部: 足の骨のみ残存。 円形付属部: 真ん中の遺体は脊椎の一部、骨盤、足の骨が残存。この遺体の傍におそらく子供の骨。西側の遺体、頭蓋骨、脊椎の一部、骨盤、足の骨が残存。頭蓋骨は壊れた状態で離れて出土し、頸の骨は別に出土。すべての遺体は乾燥した肌を保つ。	4	0	1	0	3	?	?
B112	B墓地	頭蓋骨が離れて出土した以外、完全で原位置。	1	0	1	0	0	la2-la3	la1-la3
B113	B墓地	頭蓋骨が分離している以外、完全で原位置。	1	1	0	0	0	?	?

墓番号	墓地	ノートに記載された遺体検出状況	被害者人数	男性	女性	不明	性別記録なし	細分段階	基本段階
B114	B墓地	頭蓋骨がない以外、完全で原位置。	1	1	0	0	0	?	?
B115	B墓地	完全で原位置。	1	1	0	0	0	lb1	lb1-lb2
B116	B墓地	頭蓋骨がない以外、完全で原位置。きつい屈葬。	1	0	1	0	0	lb1	lb1-lb2
B117	B墓地	2体埋葬。西側の遺体、頭蓋骨、脊椎のみ残存。原位置。東側の遺体、腕の骨と足の骨の一部がない以外、完全で原位置。 ステップ墓。	2	0	1	0	1	I/II 前半-IIa2	IIa1-IIa2
B118	B墓地	矩形主体部：遺体なし。 円形付属部：頭蓋骨・腕の骨が離れて出土した以外、完全で原位置。 矩形主体部：頭蓋骨2点のみ出土。原位置ではない。	1	0	1	0	0	I/II 前半	lb1-lb2
B119	B墓地	円形付属部：さらに2つの墓坑。両方に遺体あり。中央の墓坑、頭蓋骨離れて出土。肋骨なし。そのほか、完全で原位置。北側の墓坑、完全で原位置。	4	1	2	1	0	lb2	lb1-lb2
B120	B墓地	ほぼ完全で原位置。頭蓋骨のみや離れて出土。	1	0	1	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
B121	B墓地	ほぼ完全で原位置。頭蓋骨のみや高い位置で出土。遺体全体がマットで包まれる。	1	1	0	0	0	la2	la1-la3
B122	B墓地	矩形主体部：頭蓋骨と脊椎のみ出土。原位置ではない？ 円形付属部：頭蓋骨なし。腕の骨、散乱。そのほか、完全で原位置。	2	1	0	0	1	?	?
B123	B墓地	頭蓋骨の破片のみ残存。	骨片	0	0	0	1	I/II 後半	IIa1-IIa2
B124	B墓地	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
B125	B墓地	頭蓋骨と腕のみ残存して出土。	1	0	1	0	0	?	?
B126	B墓地	2体埋葬。頭蓋骨は1つのみで離れて出土。どちらの遺体のものかは不明。西側の遺体、肋骨・腕なし。それ以外、完全で原位置。東側の遺体、若年者の遺体で頭蓋骨以外、完全で原位置。	2	0	0	0	2	IIa1	IIa1-IIa2
B127	B墓地	北側墓坑：肩甲骨が乱れて出土。骨盤・足、原位置。ほかなし。 南側墓坑：小さな骨片のみ出土。	2?	0	0	0	2	IIb	IIb
B128	B墓地	頭蓋骨なし。それ以外、完全で原位置。	1	0	1	0	0	?	?
B129	B墓地	頭蓋骨がずれて出土した以外、完全で原位置。	1	0	0	1	0	lb1-lb2	lb1-lb2
B130	B墓地	頭蓋骨、腕の骨なし。それ以外、完全で原位置。	1	0	1	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
B131	B墓地	腕の骨なし。それ以外、完全で原位置。	1	1	0	0	0	?	?
B132	B墓地	頭蓋骨、腕の骨の一部なし。それ以外、完全で原位置。	1	1	0	0	0	la2-lb1	?
B133	B墓地	2体埋葬。肋骨・脊椎以下完全で原位置。そのほかの部位なし。西側の遺体の骨盤が、東側の遺体の大腿骨に重なる。	2	0	0	1	1	lb1	lb1-lb2
B134	B墓地	骨盤以下完全で原位置。そのほかの部位なし。	1	0	0	1	0	I/II 前半-IIa2	IIa1-IIa2
T2	T墓地		1	0	0	1	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
T3	T墓地	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
T4	T墓地	バラバラの遺体。頭蓋骨6点（内2点は上層、残り4点は下層）。再埋葬？下層墓坑北側、骨盤2点と対になる足の骨、脛の骨などが散乱して出土。 バラバラの遺体。頭蓋骨6点。再埋葬？墓坑北側、腕の骨3点。墓坑北側中央に山状に積まれた骨（脊椎、肋骨など）。その上に腕の骨。墓坑西側中央にスネの骨数点。墓坑南西側に脛・腕の骨3点。墓坑南東側に脛の骨4点。頭蓋骨は、墓坑中央に5点で、墓坑南側に1点。レンガ。	6	3	3	0	0	lb2	lb1-lb2
T5	T墓地		6	1	4	1	0	I/II 後半	IIa1-IIa2
T6	T墓地	腕、骨盤、大腿骨が乱れて残存。	1	0	1	0	0	?	?
T7	T墓地	腕、骨盤、大腿骨がやや乱れて残存。	1	0	1	0	0	IIb	IIb
T8	T墓地	大腿骨と腕の骨のみ残存して残存。	1	0	1	0	0	IIIa1-IIIa2	IIIa1-IIIa2
T9	T墓地	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
T10	T墓地	3体埋葬。うち男性1体は、頭蓋骨、足の下部なし。腕がやや乱れる。そのほか、完全で原位置。そのほか、成人と子供の頭蓋骨が1点ずつ出土。	3	2	1	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
T11	T墓地	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	lb1-lb2	lb1-lb2
T12	T墓地	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
T14	T墓地	腕の骨が部分的に残存するのみ。牛の骨と一緒に並べられる。	1?	0	1	0	0	I/II 後半	IIa1-IIa2
T15	T墓地	5人分の遺体が出土。頭蓋骨5点。うち頭蓋骨以外の部位がある遺体は、北側と南側の遺体で北側は肋骨・腕の骨が残存。南側は腕か足の骨のみが残存。	6	2	1	3	0	IIa2	IIa1-IIa2
T16	T墓地	2体埋葬？うち1体は腕が乱れている以外は完全で原位置。もう1体は南側で骨盤のみ出土。	1	0	1	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
T17	T墓地	脊椎の一部以下、完全で原位置。	1	0	1	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
T18	T墓地	脊椎と骨盤のみ出土。原位置でない。	1	0	1	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
T19	T墓地	頭蓋骨、腕が離れて出土。脊椎の下部以下、完全で原位置。	1	1	0	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
T20	T墓地	頭蓋骨1点のみ出土。	2?	0	2	0	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
T21	T墓地	肋骨、腕、足の骨などが散乱して出土。	1	1	0	0	0	IIIa1	IIIa1-IIIa2
T22	T墓地	頭蓋骨なし？脊椎の上部、脊椎の下部以下、腕、肩甲骨などが乱れて出土。	1	0	0	0	1	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
T23	T墓地	頭蓋骨のみ残存して出土。	7	4	3	0	0	I/II 後半-IIa1	IIa1-IIa2
T25	T墓地	腕の骨が1本出土。ほかの部位なし。	1	0	0	1	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
T26	T墓地	腕の骨、脊椎、骨盤の一部が原位置で出土。ほかの部位なし。	1	1	0	0	0	IIa2	IIa1-IIa2
T27	T墓地	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
T28	T墓地	頭蓋骨のみ残存。	1?	0	0	0	1	IIa2	IIa1-IIa2
T29	T墓地	2体埋葬？頭蓋骨2点。ほか、骨数点。いずれも乱れて出土。	2	1	0	1	0	IIa1-IIa2	IIa1-IIa2
T30	T墓地	足の骨が南西角でまとまって出土したのみ。	1	1	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
T31	T墓地	腕の骨、骨盤などが散乱して出土したのみ。	1?	0	0	0	1	?	?
T32	T墓地	腕の骨が1点？出土したのみ。	1?	0	0	0	1	I/II 後半	IIa1-IIa2
T33	T墓地	腕、脛の骨のみが散乱して出土。	1?	0	0	0	1	IIIb	IIIb
T34	T墓地	遺体残存せず。	不明	0	0	0	0	?	?
T35	T墓地	腕、足の骨のみ残存。	1	1	0	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
T36	T墓地	頭蓋骨、頸骨が散乱して出土。	1	1	0	0	0	IIa2	IIIa1-IIIa2
T37	T墓地	頸骨、腕、骨盤などの僅かな骨が散乱して出土。	1	0	1	0	0	IIa1	IIIa1-IIIa2
T38	T墓地	腕、足の骨が散乱して出土。	1?	0	0	0	1	IIa2	IIIa1-IIIa2
T39	T墓地	頭蓋骨と腕？の一部のみ残存して出土。	1?	1	0	0	0	IIa2	IIIa1-IIIa2
T40	T墓地	脊椎の一部以下、完全で原位置。	1	1	0	0	0	IIIa2	IIIa1-IIIa2
T41	T墓地	遺体残存せず。	1	0	1	0	0	?	?
T42	T墓地	足の骨は北西角から、肋骨や腕の骨の一部、脊椎は北東角から、腕などは墓坑中央から出土。1体分？改葬墓？	1?	0	0	0	1	?	?
T51	T墓地	骨盤と足のみ出土。完全で原位置。	不明	0	0	0	0	?	?
T52	T墓地	骨盤と足が乱れて出土。背骨が著しく湾曲。くる病患者？	1	0	0	1	0	IIa1	IIa1-IIa2
T53	T墓地	足のみ出土。ほぼ原位置。	1?	0	0	0	1	IIa1-IIIb	?
T54	T墓地	頭蓋骨なし。腕が散乱して出土。脊椎、肋骨以下、完全で原位置。	1	0	1	0	0	IIa1	IIa1-IIa2
T55	T墓地	頭蓋骨、脊椎、肋骨なし。腕が散乱して出土。骨盤以下、完全で原位置。	1	0	1	0	0	IIa2	IIIa1-IIIa2
T56	T墓地	頭蓋骨、脊椎、肋骨、腕、足の骨のみ残存して出土。	1	0	1	0	0	?	?
T57	T墓地	頭蓋骨以外の部位は概ね揃う。やや乱れている部分もあるが概ね原位置。	1	1	0	0	0	IIa2	IIa1-IIa2
T58	T墓地	頭蓋骨、脊椎の一部、腕の骨なし。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	?	?
T59	T墓地	頭蓋骨、脊椎の一部なし。頸骨のみ残存して出土。腕の骨が乱れて出土。そのほか、完全で原位置。	1	0	1	0	0	?	?
G1	G墓地	頭蓋骨と脊椎、腕？の骨のみ出土。北向き埋葬？縦長な墓坑。	1?	0	1	0	0	IIb-IIIa2	?
G2	G墓地	頭蓋骨と脊椎のみ出土。縦長な墓坑。	1?	0	0	0	1	IIIa1-IIIa2	IIIa1-IIIa2
G5	G墓地	腕、足の骨などが散乱して出土。	1?	0	0	0	1	IIIa1-IIIa2	IIIa1-IIIa2
G6	G墓地	腕か足の骨が乱れて残存するのみ。	1?	0	1	0	0	IIIb	IIIb



#### 付編 4. クラスター構成墓の詳細

ここでは、クラスタリングの結果得られた各クラスターを構成する墓の番号を列記した。この番号は、2変数の場合と3変数の場合の両方を示したが、区別のため3変数の場合はイタリックで表記した。

#### 2変数によるクラスタリング

##### 大墓地東地区

##### 全時期 (対象墓総数 = 633)

- クラスター1 (対象墓数 = 163)  
508, 510, 514, 515, 516, 517, 531, 534, 536, 539,  
541, 542, 543, 544, 547, 548, 549, 550, 553, 554,  
555, 556, 560, 563, 568, 573, 594, 701, 705, 706,  
709, 710, 719, 720, 725, 726, 728, 729, 734, 735,  
736, 737, 738, 739, 740, 745, 750, 751, 752, 753,  
754, 755, 756, 1300, 1302, 1304, 1305, 1306, 1307,  
1308, 1315, 1318, 1320, 1321, 1322, 1323, 1324,  
1325, 1326, 1327, 1349, 1351, 1352, 1355, 1356,  
1357, 1361, 1363, 1365, 1366, 1367, 1377, 1451,  
1454, 1455, 1457, 1462, 1472, 1474, 1476, 1478,  
1479, 1481, 1492, 1541, 1544, 1548, 1559, 1566,  
1572, 1573, 1582, 1588, 1593, 1596, 1602, 1603,  
1604, 1605, 1607, 1616, 1618, 1623, 1632, 1637,  
1640, 1641, 1642, 1647, 1648, 1651, 1652, 1653,  
1659, 1662, 1663, 1665, 1666, 1673, 1682, 1691,  
1731, 1735, 1738, 1739, 1741, 1745, 1764, 1765,  
1767, 1769, 1771, 1777, 1778, 1779, 1792, 1793,  
1807, 1811, 1812, 1813, 1825, 1831, 1833, 1837,  
1855, 1872, 1877, 1896, 1898, 1902, 1909, 1916.
- クラスター2 (対象墓数 = 148)  
501, 503, 504, 507, 509, 520, 526, 528, 532, 551,

- 552, 566, 570, 601, 654, 704, 716, 724, 741, 747,  
748, 822, 827, 875, 1301, 1310, 1311, 1313, 1316,  
1317, 1319, 1354, 1358, 1359, 1362, 1388, 1410,  
1416, 1452, 1453, 1459, 1466, 1471, 1473, 1480,  
1491, 1537, 1538, 1542, 1543, 1545, 1549, 1551,  
1557, 1564, 1568, 1569, 1571, 1576, 1580, 1601,  
1608, 1609, 1612, 1627, 1634, 1635, 1639, 1644,  
1650, 1655, 1658, 1660, 1664, 1668, 1669, 1672,  
1679, 1686, 1689, 1692, 1696, 1698, 1699, 1704,  
1707, 1709, 1710, 1711, 1712, 1714, 1717, 1720,  
1726, 1732-2, 1740, 1742, 1752, 1755, 1756, 1760,  
1766, 1768, 1773, 1775, 1776, 1782, 1785, 1790,  
1791, 1806, 1808, 1810, 1814, 1818, 1819, 1822,  
1824, 1827, 1828, 1830, 1838, 1839, 1846, 1857,  
1861, 1862, 1867, 1868, 1874, 1883, 1885, 1889,  
1890, 1892, 1895, 1897, 1901, 1903, 1904, 1905,  
1907, 1908, 1910, 1911, 1912, 1915, 1918.
- クラスター3 (対象墓数 = 125)  
502, 505, 511, 521, 533, 535, 546, 557, 559, 565,  
567, 571, 572, 660, 703, 707, 708, 711, 712, 714,  
718, 732, 744, 749, 757, 800, 804, 824, 869, 880,  
1312, 1314, 1328, 1329, 1347, 1348, 1353, 1360,  
1364, 1415, 1418, 1437, 1456, 1461, 1463, 1467,  
1469, 1477, 1487, 1507, 1540, 1553, 1556, 1570,  
1574, 1583, 1584, 1594, 1597, 1610, 1614, 1619,  
1620, 1624, 1625, 1628, 1629, 1656, 1667, 1670,  
1674, 1678, 1681, 1688, 1694, 1703, 1708, 1713,  
1715, 1716, 1719, 1721, 1727, 1728, 1730, 1733,  
1737, 1743, 1746, 1748, 1749, 1753, 1763, 1774,  
1780, 1786, 1788, 1789, 1794, 1798, 1800, 1802,  
1804, 1805, 1815, 1816, 1820, 1823, 1826, 1840,  
1842, 1847, 1852, 1854, 1856, 1875, 1878, 1880,  
1881, 1882, 1887, 1888, 1913, 1914, 1917.

- クラスター4 (対象墓数 = 116)  
481, 506, 513, 523, 525, 530, 537, 540, 558, 559,  
562, 713, 717, 721, 722, 726-727, 730, 731, 733,  
746, 807, 1303, 1346, 1350, 1401, 1458, 1460,  
1468, 1475, 1488, 1490, 1535, 1536, 1550, 1555,  
1558, 1560, 1561, 1563, 1565, 1575, 1577, 1578,  
1579, 1581, 1585, 1590, 1591, 1598, 1600, 1615,  
1617, 1622, 1626, 1630, 1631, 1633, 1636, 1638,  
1645, 1646, 1649, 1671, 1675, 1677, 1680, 1683,  
1684, 1685, 1690, 1693, 1695, 1697, 1702, 1705,  
1718, 1722, 1725, 1732, 1744, 1747, 1751, 1758,  
1762, 1772, 1784, 1787, 1796, 1797, 1799, 1803,  
1809, 1821, 1829, 1832, 1834, 1836, 1841, 1843,  
1844, 1845, 1851, 1853, 1858, 1860, 1864, 1869,  
1870, 1876, 1884, 1886, 1891, 1893, 1894, 1900,  
1906.
  - クラスター5 (対象墓数 = 61)  
522, 524, 527, 529, 538, 564, 569, 723, 867, 1309,  
1345, 1411, 1417, 1419, 1426, 1450, 1464, 1485,  
1539, 1546, 1547, 1554, 1562, 1586, 1589, 1592,  
1595, 1599, 1606, 1611, 1621, 1643, 1657, 1661,  
1676, 1687, 1700, 1701, 1706, 1723, 1724, 1729,  
1736, 1750, 1754, 1757, 1761, 1770, 1781, 1795,  
1801, 1835, 1849, 1850, 1859, 1865, 1866, 1871,  
1873, 1879, 1899.
  - クラスター6 (対象墓数 = 20)  
512, 518, 519, 600, 702, 743, 836, 1465, 1470,  
1552, 1567, 1587, 1613, 1654, 1734, 1759, 1783,  
1817, 1848, 1863.
- Ia1-Ia3 段階 (対象墓総数 = 70)**
- クラスター1 (対象墓数 = 24)  
1455, 1471, 1473, 1476, 1478, 1538, 1557, 1572,

- 1573, 1608, 1609, 1623, 1640, 1648, 1655, 1682,  
1691, 1707, 1776, 1785, 1831, 1862, 1910, 1911.
- クラスター2 (対象墓数 = 32)  
1437, 1467, 1487, 1507, 1574, 1581, 1584, 1585,  
1590, 1591, 1597, 1614, 1622, 1625, 1628, 1630,  
1633, 1638, 1670, 1677, 1681, 1690, 1703, 1743,  
1746, 1774, 1794, 1799, 1804, 1820, 1823, 1829.
  - クラスター3 (対象墓数 = 11)  
1417, 1450, 1563, 1595, 1599, 1621, 1636, 1661,  
1676, 1687, 1761.
  - クラスター4 (対象墓数 = 3)  
1587, 1654, 1783.
- Ib1-Ib2 段階 (対象墓総数 = 285)**
- クラスター1 (対象墓数 = 95)  
504, 508, 548, 594, 654, 724, 739, 747, 751, 753,  
875, 1305, 1315, 1320, 1321, 1324, 1352, 1358,  
1359, 1361, 1363, 1365, 1366, 1367, 1452, 1454,  
1457, 1474, 1481, 1537, 1543, 1544, 1545, 1548,  
1551, 1559, 1566, 1568, 1569, 1576, 1582, 1588,  
1602, 1603, 1605, 1607, 1616, 1642, 1644, 1652,  
1653, 1663, 1664, 1666, 1673, 1709, 1720, 1735,  
1739, 1745, 1764, 1767, 1768, 1769, 1771, 1778,  
1793, 1810, 1811, 1812, 1813, 1818, 1825, 1830,  
1846, 1872, 1889, 1890, 1908, 1918.
  - クラスター2 (対象墓数 = 89)  
707, 712, 716, 744, 757, 824, 1317, 1329, 1347,  
1348, 1364, 1410, 1415, 1416, 1453, 1459, 1463,  
1477, 1480, 1491, 1540, 1549, 1553, 1556, 1564,  
1570, 1583, 1594, 1601, 1610, 1619, 1620, 1624,  
1629, 1639, 1650, 1658, 1667, 1669, 1672, 1674,  
1679, 1686, 1688, 1694, 1704, 1712, 1717, 1721,  
1728, 1730, 1733, 1737, 1740, 1742, 1748, 1749,

1752, 1753, 1760, 1763, 1766, 1780, 1786, 1788,  
1789, 1790, 1798, 1805, 1808, 1814, 1815, 1816,  
1827, 1828, 1840, 1842, 1847, 1852, 1861, 1868,  
1878, 1880, 1881, 1887, 1888, 1905, 1914, 1917.

- クラスタ-3 (対象墓数 = 60)  
506, 727, 746, 1346, 1460, 1468, 1475, 1490, 1535,  
1539, 1550, 1555, 1558, 1560, 1561, 1565, 1575,  
1577, 1598, 1600, 1617, 1626, 1645, 1646, 1671,  
1675, 1683, 1693, 1695, 1705, 1718, 1722, 1732,  
1744, 1747, 1758, 1762, 1772, 1784, 1787, 1797,  
1803, 1809, 1821, 1832, 1834, 1841, 1843, 1844,  
1845, 1856, 1858, 1864, 1875, 1876, 1891, 1893,  
1894, 1900, 1906.

- クラスタ-4 (対象墓数 = 31)  
524, 527, 1309, 1345, 1411, 1419, 1426, 1464,  
1485, 1546, 1547, 1554, 1586, 1589, 1606, 1611,  
1643, 1700, 1706, 1723, 1729, 1736, 1750, 1754,  
1781, 1865, 1866, 1871, 1873, 1879, 1899.

- クラスタ-5 (対象墓数 = 10)  
512, 1465, 1470, 1552, 1567, 1613, 1734, 1759,  
1817, 1848.

#### IIa1-IIa2 段階 (対象墓総数 = 132)

- クラスタ-1 (対象墓数 = 36)  
501, 509, 514, 536, 549, 552, 553, 563, 566, 573,  
710, 719, 725, 734, 735, 736, 738, 752, 1306, 1316,  
1322, 1325, 1326, 1327, 1356, 1377, 1388, 1596,  
1604, 1659, 1699, 1765, 1775, 1833, 1867, 1902.

- クラスタ-2 (対象墓数 = 33)  
503, 507, 511, 532, 533, 535, 565, 570, 571, 572,  
601, 714, 732, 741, 748, 749, 827, 880, 1301, 1310,  
1311, 1312, 1314, 1319, 1354, 1360, 1719, 1726,  
1727, 1826, 1857, 1892.

- クラスタ-3 (対象墓数 = 32)  
521, 523, 525, 537, 540, 558, 561, 703, 713, 717,  
721, 722, 730, 731, 733, 800, 807, 1303, 1458,  
1536, 1649, 1680, 1684, 1697, 1702, 1751, 1836,  
1851, 1853, 1870, 1884, 1886.

- クラスタ-4 (対象墓数 = 10)  
559, 708, 711, 804, 822, 869, 1461, 1713, 1854,  
1913.

- クラスタ-5 (対象墓数 = 17)  
513, 529, 538, 564, 569, 723, 867, 1657, 1701,  
1724, 1725, 1770, 1801, 1835, 1849, 1850, 1859.

- クラスタ-6 (対象墓数 = 5)  
522, 600, 702, 743, 1863.

#### IIIb 段階 (対象墓総数 = 5)

- クラスタ-1 (対象墓数 = 2)  
1755, 1904.

- クラスタ-2 (対象墓数 = 1)  
1869.

- クラスタ-3 (対象墓数 = 1)  
519.

- クラスタ-4 (対象墓数 = 1)  
556.

#### IIIa1-IIIa2 段階 (対象墓総数 = 5)

- クラスタ-1 (対象墓数 = 3)  
516, 1451, 1756.

- クラスタ-2 (対象墓数 = 1)  
1716.

- クラスタ-3 (対象墓数 = 1)  
481.

#### IIIb 段階 (対象墓総数 = 3)

- クラスター1 (対象墓数 = 2)

704, 1714.

- クラスター2 (対象墓数 = 1)

1715.

## 大墓地西地区

### 2 変数

#### 全時期 (対象墓総数 = 226)

- クラスター1 (対象墓数 = 93)

46, 57, 60, 61, 91, 97, 99, 101, 105, 106, 111, 116, 117, 118, 119, 120, 121, 125, 143, 148, 163, 166, 167, 170, 172, 176, 179, 180, 181, 182, 183, 186, 188, 190, 195, 196, 198, 199, 200, 203, 204, 205, 207, 208, 209, 211, 214, 215, 216, 217, 219, 220, 221, 222, 225, 227, 228, 229, 232, 236, 237, 243, 246, 248, 250, 251, 252, 253, 255, 256, 261, 262, 264, 272, 283, 286, 343, 355, 356, 362-363, 369, 401, 402, 438, 440, 442, 478, 483, 485, 486, 487, 488, 492.

- クラスター2 (対象墓数 = 73)

56, 58, 59, 92, 98, 102, 103, 107, 109, 110, 114, 115, 122, 141, 142, 146, 149, 173, 175, 184, 189, 193, 194, 197, 201, 202, 212, 223, 224, 233, 240, 242, 249, 254, 257, 258, 263, 273, 274, 275, 331, 346, 350, 400, 430, 436, 437, 439, 441, 443, 444, 445, 446, 447, 448, 462, 470, 474, 475, 476, 477, 479, 480, 482, 484, 489, 490, 491, 493, 495, 496, 1241, 1251.

- クラスター3 (対象墓数 = 29)

104, 145, 164, 165, 168, 171, 174, 185, 187, 218, 226, 231, 234, 235, 238, 239, 245, 247, 259, 260, 266, 267, 268, 449, 460, 461, 473, 494, 1248.

- クラスター4 (対象墓数 = 24)

93, 108, 112, 113, 124, 140, 144, 147, 160, 161, 169, 177, 178, 191, 206, 241, 270, 271, 414, 459, 471, 472, 1233, 1247.

- クラスター5 (対象墓数 = 6)

123, 162, 192, 210, 326, 421.

- クラスター6 (対象墓数 = 1)

1206.

#### Ia1-Ia3 段階 (対象墓総数 = 5)

- クラスター1 (対象墓数 = 4)

166, 196, 254, 479.

- クラスター2 (対象墓数 = 1)

108.

#### Ib1-Ib2 段階 (対象墓総数 = 47)

- クラスター1 (対象墓数 = 15)

99, 110, 116, 120, 170, 190, 203, 205, 211, 216, 217, 252, 286, 487, 488.

- クラスター2 (対象墓数 = 21)

109, 171, 175, 187, 194, 185, 223, 226, 235, 238, 245, 257, 259, 260, 267, 268, 273, 274, 275, 461, 1251.

- クラスター3 (対象墓数 = 10)

160, 169, 178, 191, 192, 206, 241, 271, 471, 472.

- クラスター4 (対象墓数 = 1)

1206.

#### IIa1-IIa2 段階 (対象墓総数 = 60)

- クラスター1 (対象墓数 = 23)

46, 57, 60, 117, 122, 125, 143, 167, 172, 176, 180, 186, 198, 207, 246, 255, 261, 264, 272, 343, 355, 430, 440.

- クラスター2 (対象墓数 = 24)



164, 165, 174, 193, 201, 202, 233, 234, 247, 249,  
258, 266, 346, 400, 449, 474, 475, 482, 484, 489,  
490, 495, 496, 1241.

- クラスタ-3 (対象墓数 = 8)

100, 147, 161, 177, 270, 414, 1233, 1247.

- クラスタ-4 (対象墓数 = 5)

123, 162, 210, 326, 421.

#### **IIb 段階 (対象墓総数 = 8)**

- クラスタ-1 (対象墓数 = 5)

121, 183, 208, 219, 478.

- クラスタ-2 (対象墓数 = 1)

114.

- クラスタ-3 (対象墓数 = 2)

140, 144.

#### **IIIa1-IIIa2 段階 (対象墓総数 = 8)**

- クラスタ-1 (対象墓数 = 4)

98, 103, 485, 491.

- クラスタ-2 (対象墓数 = 2)

168, 460.

- クラスタ-3 (対象墓数 = 2)

93, 112.

#### **IIIb 段階 (対象墓総数 = 2)**

- クラスタ-1 (対象墓数 = 1)

97.

- クラスタ-2 (対象墓数 = 1)

113.

#### **IIIc 段階 (対象墓総数 = 1)**

- クラスタ-1 (対象墓数 = 1)

92.

### **大墓地南地区**

#### **2 変数**

##### **全時期 (対象墓総数 = 48)**

- クラスタ-1 (対象墓数 = 16)

7, 8, 20, 23, 26, 27, 28, 29, 32, 37, 40, 47, 49, 50,  
52, 53.

- クラスタ-2 (対象墓数 = 14)

2, 11, 18, 19, 21, 22, 24, 25, 30, 36, 38, 41, 54, 55.

- クラスタ-3 (対象墓数 = 12)

1, 4, 6, 17, 31, 33, 34, 35, 39, 43, 44, 48.

- クラスタ-4 (対象墓数 = 5)

5, 9, 10, 42, 45.

- クラスタ-5 (対象墓数 = 1)

3.

##### **Ib1-Ib2 段階 (対象墓総数 = 1)**

- クラスタ-1 (対象墓数 = 1)

8.

##### **IIa1-IIa2 段階 (対象墓総数 = 14)**

- クラスタ-1 (対象墓数 = 5)

11, 21, 23, 25, 40.

- クラスタ-2 (対象墓数 = 7)

4, 6, 31, 33, 34, 39, 43.

- クラスタ-3 (対象墓数 = 1)

10.

- クラスタ-4 (対象墓数 = 1)

3.

##### **IIb 段階 (対象墓総数 = 4)**

- クラスタ-1 (対象墓数 = 1)

41.

- クラスター2 (対象墓数 = 3)  
1, 5, 45.

#### IIIa1-IIIa2 段階 (対象墓総数 = 4)

- クラスター1 (対象墓数 = 3)  
19, 29, 47.
- クラスター2 (対象墓数 = 1)  
17.

#### T 墓地

##### 全時期 (対象墓総数 = 48)

- クラスター1 (対象墓数 = 22)  
T3, T6, T7, T12, T13, T15, T20, T23, T26, T27,  
T30, T31, T34, T37, T38, T40, T41, T42, T53,  
T54, T55, T58, T59.
- クラスター2 (対象墓数 = 14)  
T2, T8, T14, T18, T19, T21, T22, T29, T33, T39,  
T51, T52, T56, T57.
- クラスター3 (対象墓数 = 8)  
T9, T10, T11, T17, T28, T32, T35, T36.
- クラスター4 (対象墓数 = 4)  
T4, T5, T16, T25.

##### Ib1-Ib2 段階 (対象墓総数 = 2)

- クラスター1 (対象墓数 = 1)  
T11.
- クラスター2 (対象墓数 = 1)  
T4.

##### IIa1-IIa2 段階 (対象墓総数 = 24)

- クラスター1 (対象墓数 = 8)  
T12, T15, T20, T23, T26, T30, T52, T54.
- クラスター2 (対象墓数 = 8)

T2, T14, T18, T19, T22, T28, T29, T57.

- クラスター3 (対象墓数 = 6)  
T9, T10, T17, T25, T32, T35.
- クラスター4 (対象墓数 = 2)  
T5, T16.

##### IIIb 段階 (対象墓総数 = 1)

- クラスター1 (対象墓数 = 1)  
T7.

##### IIIa1-IIIa2 段階 (対象墓総数 = 8)

- クラスター1 (対象墓数 = 5)  
T8, T37, T38, T40, T55.
- クラスター2 (対象墓数 = 3)  
T21, T36, T39.

##### IIIb 段階 (対象墓総数 = 1)

- クラスター1 (対象墓数 = 1)  
T33.

#### B 墓地

##### 2 変数

##### 全時期 (対象墓総数 = 87)

- クラスター1 (対象墓数 = 65)  
B8, B12, B14, B15, B16, B17, B18, B19, B20,  
B22, B23, B24, B26, B27, B29, B30, B34, B35,  
B36, B37, B38, B39, B40, B41, B42, B43, B44,  
B45, B46, B60, B62, B63, B64, B65, B86, B92,  
B97, B100, B103, B105, B106, B107, B108, B109,  
B110, B111, B112, B113, B114, B115, B116,  
B117, B118, B119, B120, B121, B122, B124,  
B125, B128, B129, B130, B131, B132, B134.
- クラスター2 (対象墓数 = 19)

B21, B28, B32, B33, B50, B61, B89, B93, B94,  
B95, B96, B98, B101, B102, B104, B123, B126,  
B127, B133.

- クラスター3 (対象墓数 = 3)

B25, B91, B99.

#### **Ia2-Ia3 段階 (対象墓総数 = 3)**

- クラスター1 (対象墓数 = 2)

B86, B112.

- クラスター2 (対象墓数 = 1)

B121.

#### **Ib1-Ib2 段階 (対象墓総数 = 22)**

- クラスター1 (対象墓数 = 5)

B8, B115, B116, B118, B130.

- クラスター2 (対象墓数 = 11)

B19, B20, B29, B44, B62, B109, B110, B119,

B120, B124, B129.

- クラスター3 (対象墓数 = 3)

B61, B93, B96.

- クラスター4 (対象墓数 = 3)

B21, B102, B133.

#### **IIa1-IIa2 段階 (対象墓総数 = 25)**

- クラスター1 (対象墓数 = 10)

B14, B17, B18, B27, B35, B36, B40, B97, B105,

B117.

- クラスター2 (対象墓数 = 8)

B26, B32, B33, B89, B95, B101, B104, B126.

- クラスター3 (対象墓数 = 4)

B28, B50, B98, B123.

- クラスター4 (対象墓数 = 3)

B25, B91, B99.

#### **IIb 段階 (対象墓総数 = 1)**

- クラスター1 (対象墓数 = 1)

B127.

#### **3変数によるクラスタリング**

##### **大墓地東地区**

##### **全時期 (対象墓総数 = 445)**

- クラスター1 (対象墓数 = 165)

501, 504, 508, 509, 510, 514, 515, 516, 517, 520,  
526, 528, 531, 534, 536, 539, 541, 542, 543, 544,  
547, 548, 552, 553, 554, 555, 556, 560, 563, 566,  
568, 573, 701, 719, 720, 724, 725, 726, 728, 729,  
734, 735, 737, 738, 739, 740, 745, 747, 750, 751,  
752, 753, 756, 1300, 1302, 1304, 1305, 1306, 1307,  
1308, 1310, 1313, 1315, 1316, 1318, 1320, 1321,  
1322, 1323, 1324, 1325, 1326, 1327, 1349, 1351,  
1352, 1355, 1356, 1357, 1361, 1362, 1363, 1365,  
1366, 1367, 1451, 1452, 1454, 1455, 1462, 1471,  
1472, 1474, 1476, 1478, 1479, 1481, 1492, 1551,  
1588, 1593, 1596, 1602, 1603, 1604, 1605, 1607,  
1616, 1618, 1623, 1632, 1635, 1637, 1640, 1641,  
1642, 1647, 1648, 1652, 1653, 1655, 1659, 1664,  
1665, 1666, 1668, 1673, 1689, 1691, 1699, 1709,  
1731, 1732-2, 1735, 1739, 1741, 1745, 1755, 1756,  
1782, 1785, 1791, 1792, 1793, 1833, 1837, 1838,  
1846, 1855, 1867, 1872, 1877, 1885, 1889, 1895,  
1896, 1898, 1902, 1903, 1904, 1908, 1909, 1911,  
1915, 1916.

- クラスター2 (対象墓数 = 124)

502, 503, 505, 507, 511, 532, 533, 557, 559, 565,  
570, 571, 572, 601, 711, 712, 716, 718, 732, 741,

744, 748, 749, 757, 1301, 1311, 1312, 1314, 1317,  
1319, 1328, 1329, 1347, 1348, 1353, 1354, 1358,  
1359, 1360, 1364, 1453, 1456, 1459, 1461, 1463,  
1466, 1467, 1469, 1473, 1491, 1553, 1557, 1594,  
1597, 1601, 1609, 1610, 1612, 1619, 1620, 1624,  
1625, 1627, 1628, 1634, 1639, 1644, 1650, 1656,  
1658, 1660, 1667, 1669, 1670, 1672, 1674, 1678,  
1694, 1696, 1698, 1710, 1711, 1714, 1715, 1730,  
1733, 1740, 1742, 1743, 1746, 1748, 1749, 1752,  
1753, 1780, 1786, 1788, 1789, 1790, 1794, 1798,  
1839, 1842, 1847, 1852, 1854, 1857, 1861, 1862,  
1868, 1874, 1878, 1880, 1881, 1883, 1887, 1892,  
1897, 1901, 1905, 1907, 1910, 1912, 1917.

- クラスター3 (対象墓数 = 94)  
481, 506, 521, 523, 525, 530, 537, 558, 561, 562,  
567, 713, 717, 721, 722, 730, 731, 733, 746, 800,  
1303, 1346, 1350, 1458, 1460, 1468, 1475, 1490,  
1550, 1555, 1556, 1558, 1590, 1591, 1598, 1600,  
1614, 1615, 1617, 1622, 1626, 1629, 1630, 1631,  
1633, 1636, 1638, 1645, 1649, 1671, 1675, 1680,  
1683, 1685, 1690, 1693, 1695, 1697, 1732, 1737,  
1744, 1747, 1751, 1758, 1784, 1787, 1796, 1797,  
1799, 1834, 1836, 1840, 1841, 1843, 1844, 1851,  
1853, 1856, 1858, 1860, 1864, 1870, 1875, 1876,  
1884, 1886, 1888, 1891, 1893, 1894, 1900, 1906,  
1913, 1914.

- クラスター4 (対象墓数 = 45)  
513, 522, 524, 527, 529, 538, 564, 569, 723, 1309,  
1345, 1450, 1464, 1554, 1586, 1589, 1592, 1595,  
1599, 1606, 1611, 1621, 1643, 1657, 1661, 1676,  
1687, 1736, 1750, 1754, 1757, 1781, 1795, 1835,  
1845, 1849, 1850, 1859, 1865, 1866, 1869, 1871,  
1873, 1879, 1899.

- クラスター5 (対象墓数 = 16)  
512, 518, 519, 600, 702, 1465, 1470, 1552, 1587,  
1613, 1654, 1734, 1759, 1783, 1848, 1863.

#### **Ia1-Ia3 段階 (対象墓総数 = 44)**

- クラスター1 (対象墓数 = 16)  
1455, 1471, 1473, 1476, 1478, 1557, 1609, 1623,  
1640, 1648, 1655, 1691, 1785, 1862, 1910, 1911.

- クラスター2 (対象墓数 = 17)  
1467, 1590, 1591, 1597, 1614, 1622, 1625, 1628,  
1630, 1633, 1638, 1670, 1690, 1743, 1746, 1794,  
1799.

- クラスター3 (対象墓数 = 7)  
1450, 1595, 1599, 1621, 1636, 1676, 1687.

- クラスター4 (対象墓数 = 3)  
1654, 1661, 1783.

- クラスター5 (対象墓数 = 1)  
1587.

#### **Ib1-Ib2 段階 (対象墓総数 = 178)**

- クラスター1 (対象墓数 = 45)  
504, 508, 548, 724, 739, 747, 751, 753, 1305, 1315,  
1320, 1321, 1324, 1352, 1361, 1363, 1365, 1366,  
1367, 1452, 1454, 1474, 1481, 1551, 1588, 1602,  
1603, 1605, 1607, 1616, 1642, 1652, 1653, 1664,  
1666, 1673, 1709, 1735, 1739, 1745, 1793, 1846,  
1872, 1889, 1908.

- クラスター2 (対象墓数 = 50)  
712, 716, 744, 757, 1317, 1329, 1347, 1348, 1358,  
1359, 1364, 1453, 1459, 1463, 1491, 1553, 1594,  
1601, 1610, 1619, 1620, 1624, 1639, 1644, 1650,  
1658, 1667, 1669, 1672, 1674, 1730, 1733, 1740,  
1742, 1748, 1749, 1752, 1753, 1780, 1786, 1790,

1798, 1842, 1852, 1861, 1868, 1880, 1881, 1887,  
1905.

- クラスター3 (対象墓数 = 26)

506, 746, 1346, 1490, 1550, 1555, 1598, 1617,  
1626, 1645, 1671, 1675, 1693, 1695, 1744, 1747,  
1784, 1797, 1834, 1843, 1844, 1845, 1864, 1876,  
1894, 1906.

- クラスター4 (対象墓数 = 28)

1460, 1468, 1475, 1556, 1558, 1600, 1629, 1683,  
1694, 1732, 1737, 1758, 1787, 1788, 1789, 1840,  
1841, 1847, 1856, 1858, 1875, 1878, 1888, 1891,  
1893, 1900, 1914, 1917.

- クラスター5 (対象墓数 = 21)

524, 527, 1309, 1345, 1464, 1554, 1586, 1589,  
1606, 1611, 1643, 1736, 1750, 1754, 1781, 1865,  
1866, 1871, 1873, 1879, 1899.

- クラスター6 (対象墓数 = 8)

512, 1465, 1470, 1552, 1613, 1734, 1759, 1848.

### **IIa1-IIa2 段階 (対象墓総数 = 80)**

- クラスター1 (クラスター数 = 20)

514, 536, 563, 573, 719, 725, 734, 735, 738, 1306,  
1310, 1316, 1325, 1356, 1596, 1604, 1659, 1699,  
1833, 1867.

- クラスター2 (クラスター数 = 22)

503, 507, 511, 532, 533, 559, 565, 570, 572, 711,  
732, 741, 748, 1301, 1311, 1312, 1314, 1319, 1461,  
1854, 1857, 1892.

- クラスター3 (クラスター数 = 23)

521, 523, 525, 537, 558, 561, 722, 730, 731, 733,  
1303, 1458, 1649, 1680, 1697, 1751, 1836, 1851,  
1853, 1870, 1884, 1886, 1913.

- クラスター4 (クラスター数 = 10)

513, 529, 538, 564, 569, 1657, 1835, 1849, 1850,  
1859.

- クラスター5 (クラスター数 = 2)

723, 1863.

- クラスター6 (クラスター数 = 3)

522, 600, 702.

### **IIb 段階 (対象墓総数 = 5)**

- クラスター1 (対象墓数 = 2)

1755, 1904.

- クラスター2 (対象墓数 = 1)

1869.

- クラスター3 (対象墓数 = 1)

519.

- クラスター4 (対象墓数 = 1)

556.

### **IIIa1-IIIa2 段階 (対象墓総数 = 4)**

- クラスター1 (対象墓数 = 3)

516, 1451, 1756.

- クラスター2 (対象墓数 = 1)

481.

### **IIIb 段階 (対象墓総数 = 2)**

- クラスター1 (対象墓数 = 1)

1714.

- クラスター2 (対象墓数 = 1)

1715.

### **大墓地西地区**

#### **全時期 (対象墓総数 = 162)**

- クラスター1 (対象墓総数 = 67)

46, 57, 91, 97, 101, 106, 111, 116, 117, 118, 119,

120, 121, 125, 148, 166, 167, 170, 179, 180, 181,  
183, 186, 188, 190, 196, 198, 199, 200, 203, 204,  
205, 211, 215, 216, 217, 221, 222, 225, 227, 228,  
229, 232, 237, 243, 246, 248, 250, 251, 253, 255,  
256, 261, 262, 264, 272, 402, 438, 440, 442, 478,  
483, 485, 486, 487, 488, 492.

- クラスター2 (対象墓数 = 57)  
58, 59, 92, 98, 102, 103, 107, 109, 114, 115, 122,  
149, 173, 175, 184, 189, 193, 194, 197, 201, 212,  
224, 240, 242, 249, 254, 257, 263, 273, 275, 400,  
436, 437, 439, 441, 443, 444, 445, 446, 447, 448,  
462, 470, 474, 475, 476, 477, 479, 480, 482, 484,  
489, 490, 491, 493, 495, 496.

- クラスター3 (対象墓総数 = 21)  
104, 164, 165, 168, 171, 174, 185, 218, 226, 235,  
238, 239, 245, 259, 266, 267, 268, 449, 461, 473,  
494.

- クラスター4 (対象墓総数 = 14)  
93, 108, 124, 140, 147, 160, 169, 177, 191, 241,  
270, 271, 471, 472.

- クラスター5 (対象墓数 = 3)  
123, 192, 210.

#### **Ia1-Ia3 段階 (対象墓総数 = 5)**

- クラスター1 (対象墓数 = 4)  
166, 196, 254, 479.
- クラスター2 (対象墓数 = 1)  
108.

#### **Ib1-Ib2 段階 (対象墓総数 = 37)**

- クラスター1 (対象墓数 = 12)  
116, 120, 170, 190, 203, 205, 211, 216, 217, 262,  
487, 488.

- クラスター2 (対象墓数 = 17)  
109, 171, 175, 185, 194, 212, 226, 235, 238, 245,  
257, 259, 267, 268, 273, 275, 461.

- クラスター3 (対象墓数 = 7)  
160, 169, 191, 241, 271, 471, 472.
- クラスター4 (対象墓数 = 1)  
192.

#### **IIa1-IIa2 段階 (対象墓総数 = 37)**

- クラスター1 (対象墓数 = 15)  
46, 57, 117, 122, 125, 167, 180, 186, 198, 246, 255,  
261, 264, 272, 440.

- クラスター2 (対象墓数 = 12)  
193, 201, 249, 400, 474, 475, 482, 484, 489, 490,  
495, 496.

- クラスター3 (対象墓数 = 5)  
164, 165, 174, 266, 449.

- クラスター4 (対象墓数 = 3)  
147, 177, 270.

- クラスター5 (対象墓数 = 2)  
123, 210.

#### **IIb 段階 (対象墓総数 = 5)**

- クラスター1 (対象墓数 = 3)  
121, 183, 478.

- クラスター2 (対象墓数 = 1)  
114.

- クラスター3 (対象墓数 = 1)  
140.

#### **IIIa1-IIIa2 段階 (対象墓総数 = 6)**

- クラスター1 (対象墓数 = 4)  
98, 103, 485, 491.

- クラスター2 (対象墓数 = 1)

168.

- クラスター3 (対象墓数 = 1)

93.

#### **IIIb 段階 (対象墓総数 = 1)**

- クラスター1 (対象墓数 = 1)

97.

#### **IIIc 段階 (対象墓総数 = 1)**

- クラスター1 (対象墓数 = 1)

92.

#### **大墓地南地区**

##### **全時期 (対象墓総数 = 39)**

- クラスター1 (対象墓総数 = 13)

8, 20, 23, 26, 27, 28, 29, 32, 37, 40, 47, 50, 53.

- クラスター2 (対象墓数 = 10)

18, 19, 21, 22, 24, 25, 30, 36, 38, 41.

- クラスター3 (対象墓数 = 15)

1, 4, 5, 6, 9, 10, 17, 31, 33, 34, 35, 39, 42, 45, 48.

- クラスター4 (対象墓数 = 1)

3.

##### **Ib1-Ib2 段階 (対象墓総数 = 1)**

- クラスター1 (対象墓数 = 1)

8.

##### **IIa1-IIa2 段階 (対象墓総数 = 12)**

- クラスター1 (対象墓総数 = 4)

21, 23, 25, 40.

- クラスター2 (対象墓数 = 6)

4, 6, 31, 33, 34, 39.

- クラスター3 (対象墓数 = 1)

10.

- クラスター4 (対象墓数 = 1)

3.

#### **IIb 段階 (対象墓総数 = 4)**

- クラスター1 (対象墓数 = 1)

41.

- クラスター2 (対象墓数 = 3)

1, 5, 45.

##### **IIIa1-IIIa2 段階 (対象墓総数 = 4)**

- クラスター1 (対象墓数 = 3)

19, 29, 47.

- クラスター2 (対象墓数 = 1)

17.

#### **T 墓地**

##### **全時期 (対象墓総数 = 35)**

- クラスター1 (対象墓数 = 17)

T6, T7, T12, T15, T20, T23, T26, T27, T34, T38, T40, T41, T53, T54, T55, T58, T59.

- クラスター2 (対象墓数 = 8)

T2, T14, T19, T21, T22, T39, T51, T56.

- クラスター3 (対象墓数 = 7)

T9, T10, T11, T17, T28, T32, T35.

- クラスター4 (対象墓数 = 3)

T4, T5, T16.

##### **Ib1-Ib2 段階 (対象墓総数 = 2)**

- クラスター1 (対象墓数 = 1)

T11.

- クラスター2 (対象墓数 = 1)

T4.

**IIa1-IIa2 段階 (対象墓総数 = 18)**

- クラスター1 (対象墓数 = 6)

T12, T15, T20, T23, T26, T54.

- クラスター2 (対象墓数 = 5)

T2, T14, T19, T22, T28.

- クラスター3 (対象墓数 = 5)

T9, T10, T17, T32, T35.

- クラスター4 (対象墓数 = 2)

T5, T16.

**IIb 段階 (対象墓総数 = 1)**

- クラスター1 (対象墓数 = 1)

T7.

**IIIa1-IIIa2 段階 (対象墓総数 = 5)**

- クラスター1 (対象墓数 = 3)

T38, T40, T55.

- クラスター2 (対象墓数 = 2)

T21, T39.

**IIIb 段階 (対象墓総数 = 0)**

該当墓なし.

**B 墓地**

**全時期 (対象墓総数 = 72)**

- クラスター1 (対象墓数 = 47)

B12, B14, B18, B19, B22, B23, B27, B34, B35,  
B36, B38, B40, B44, B45, B46, B60, B62, B63,  
B64, B65, B86, B92, B97, B100, B103, B105, B106,  
B107, B108, B109, B110, B111, B112, B113, B114,  
B115, B116, B120, B121, B122, B124, B125, B128,

B129, B130, B131, B132.

- クラスター2 (対象墓数 = 15)

B20, B21, B26, B32, B33, B89, B94, B95, B101,  
B104, B117, B126, B127, B133, B134.

- クラスター3 (対象墓数 = 7)

B28, B61, B93, B96, B98, B102, B123.

- クラスター4 (対象墓数 = 3)

B25, B91, B99.

**Ia2-Ia3 段階 (対象墓総数 = 3)**

- クラスター1 (対象墓数 = 1)

B112.

- クラスター2 (対象墓数 = 1)

B86.

- クラスター3 (対象墓数 = 1)

B121.

**Ib1-Ib2 段階 (対象墓総数 = 3)**

- クラスター1 (対象墓数 = 6)

B62, B115, B116, B124, B129, B130.

- クラスター2 (対象墓数 = 6)

B19, B20, B44, B109, B110, B120.

- クラスター3 (対象墓数 = 3)

B21, B102, B133.

- クラスター4 (対象墓数 = 3)

B61, B93, B96.

**IIa1-IIa2 段階 (対象墓総数 = 23)**

- クラスター1 (対象墓数 = 9)

B14, B18, B27, B35, B36, B40, B97, B105, B117.

- クラスター2 (対象墓数 = 8)

B26, B32, B33, B89, B95, B101, B104, B126.

- クラスター3 (対象墓数 = 3)



B28, B 98, B123.

- クラスター4 (対象墓数 = 3)

B25, B91, B99.

**IIb 段階 (対象墓総数 = 1)**

- クラスター1 (対象墓数 = 1)

B127.



付編 5. 博物館などで所蔵が確認できたナカダ遺跡出土遺物の墓別一覧

文献・オンラインカタログなどで確認できたナカダ遺跡出土資料を墓別に一覧で示した。この一覧は、先行研究 (Baumgartel 1970、Payne 1987) を基に、筆者が新たに確認した資料を加え、バラス遺跡出土資料などの混入を可能な限り廃した改訂版である。各資料には博物館所蔵番号を付した。所蔵機関は、付編 1 で記したコードで記した。土器の型式は、ピートリーの土器型式で記した。ここでは、第 1 期カタログとなる発掘報告書 (Petrie and Quibell 1896) に可能な限り則ったが、このカタログに収録されていない型式は第 2 期カタログ (Petrie 1921) に則った。土器にポットマークがある場合は、先行研究 (Baumgartel 1970) での記載方法を参照して M 番号を付した。M 番号は、発掘報告書 (Petrie and Quibell 1896: pls. LI-LVII) に記載されたものを適用した。土器型式の記載順は、ピートリーが提示した、B→P→F→C→N→W→D→R→L に準拠した。石製容器とパレットの型式名は、ピートリーによる概説 (Petrie 1920) に依った。型式表に類似した遺物は、最も近い型式名の後ろに先行研究 (Baumgartel 1970) に準じつつ「as」を付した。ビーズ・ペンダント類は玉を構成する原材料を記した。そのほかの遺物に関しては、種別と素材を記した。博物館所蔵遺物を確認できなかった墓は記載していない。なお LP 所蔵資料のうち、所蔵番号の後ろにアスタリスクがついた遺物は第 2 次世界大戦で失われた個体である。

大墓地南地区

- 1 号墓

石製容器

23, 蛇紋岩 (AM 1895.158)

パレット

89 (UC 4705)

そのほか

礫 (UC 4705)

- 2 号墓

そのほか

礫 (UC 35982)

- 3 号墓

土器

B53b (UC 5914)  
B53b (AM 1895.257)  
P22 (UC 5910)  
P86, M (BFA 97.99)  
F31d (UC 5909)  
W43 (AM 1895.544)  
W43 (BFA 97.113)  
W43 (MM 2374)  
R23b (UC 5912)

R23b (UC 5913)  
R34c (KN 4380)  
R69b (OIC E742)  
R78 (AM 1895.672)  
L7c (PhU E14393)  
L7c (MuM 1123)  
L7c (UC 5911)

ビーズ・ペンダント

カーネリアン, ファイアンス, 柘榴石 (UC 5908)

骨・牙製品

ヘアピン, 骨 (AM 1895.957)

そのほか

針, 銅 (Be 12868)  
針, 銅 (AM 1895.976A)  
針, 銅 (AM 1895.976B)  
針, 銅 (AM 1895.977A)  
針, 銅 (AM 1895.977B)  
針, 銅 (AM 1895.977C)  
針, 銅 (AM 1895.977D)  
針, 銅 (UC 5278)

- 4 号墓

土器

R66 (MM 10897)

- 5 号墓

土器

W43 (UC 5721)

- 6 号墓

土器

B68a (BX 3164/8)?  
B78c (BX 3164/5)?  
P 土器体部片, M432 (UC 36318)  
F43 (UC 5743)  
F 土器短頸壺, 全面黒色 (PhU E14829)  
詳細不明土器破片 (LP 177\*)

- 7 号墓

土器

L19a (UC 5905)

- 8 号墓

土器

B81 (UC 4412)  
F11b (AM 1895.359)

石製容器

59, 石灰岩 (UC 4413)

パレット

101T (UC 4414)  
不整形 (UC 4415)

- 10 号墓

土器

P22 (CB E.8746)  
R24 (UC 4519)  
R33 (KN 4378)

パレット

101R (UC 4518)

ビーズ・ペンダント

ペンダント, 光沢あり凍石, 黒色凍石, 貝

- (UC 4520)  
ペンダント, 貝, 破片 (UC 4521)  
ペンダント, 骨 (AM 1895.919)
- 石器  
ナイフ, フリント (UC 73298)
- そのほか  
マラカイト (UC 4521)  
レジン (UC 4521)
- 11号墓  
土器  
D27G (BoS 247)  
L34 (FW E46.1898)  
詳細不明土器片 (LP 58\*)
  - 13号墓  
ビーズ・ペンダント  
カーネリアン, ファイアンス (UC 5015)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5218)
  - 14号墓  
石器  
石刃, フリント (LC 56.20.46)
  - 16号墓  
パレット  
67N as (UC 4711)
  - 17号墓  
土器  
W61 (AM 1895.546)  
L30 (AM 1895.658)  
L30 (PhU E1640)  
詳細不明土器 (LP 121\*)  
骨・牙製品  
スプーン, 骨? (AM 1895.906)  
そのほか  
赤鉄鉱の塊 (UC 5083B)  
乾燥した果実: 4 (UC 5083C)  
リネン布の断片: 2 (UC 5083)  
球, 粘土 (UC 5083A)
  - 18号墓  
土器  
深鉢, M (PhU E17538)
  - 19号墓  
土器  
W61 (BoS 289)
  - 22号墓  
土器  
R24 (OIC E921)  
R24 (UC 5807)  
パレット  
94 (OIC E894)
  - 26号墓  
土器  
L56 (PhU E14435)
  - 29号墓  
土器  
L19P (Bo 1895.25:36)  
そのほか  
礫 (UC 5939)
  - 30号墓  
石製容器  
133, 凍石 (UC 4656)  
パレット  
不整形 (UC 4657)
  - 31号墓  
土器  
R1b (UC 5744)  
L21 (AM 1895.654)  
詳細不明土器 (LP 128\*)  
ビーズ・ペンダント  
ファイアンス (UC 5010)
  - 33号墓  
土器  
P23 (OIC E1728)
  - 34号墓  
土器  
B39a (BC 945.63)  
そのほか  
紡錘車, 石灰岩 (UC 5130)
  - 35号墓  
土器  
P93c (BoS 174)  
F58d (AM 1895.689)  
パレット  
46J (AM 1895.846)
  - 36号墓  
土器  
D27G (UC 5730)
  - 39号墓  
土器  
B38c (IM)  
P22 (OIC E1644)  
P95b (KN 4352)  
P95b (KN 4354)  
W19 (UC 5719)  
石器  
ナイフ, フリント (Be 12901)  
そのほか  
斧, 銅 (AM 1895.969)  
レジン (UC 5104)
  - 40号墓  
土器  
W19 (AM 1895.529)  
骨・牙製品  
筒, 骨 (AM 1895.913)  
そのほか  
礫 (UC 5940)

- 43号墓  
土器  
P40a (OIC E872)  
L96 (AM 1895.719)
- 44号墓  
パレット  
粗製平板, 泥岩 (AM 1895.839)  
そのほか  
礫 (RM)
- 45号墓  
土器  
P91 (AM 1895.801)  
R24 (UC 5780)
- 47号墓  
土器  
P44 (AM 1895.806)
- 49号墓  
土器  
無頸壺, 口縁部片, M48 (UC 36325)
- 50号墓  
土器  
無頸壺 (PhU E1499)  
石製容器  
32, 石灰岩 (UC 4982)
- 51号墓  
土器  
無頸壺, 口縁部片, M369 (UC 5901)  
P40a (PhU E14904)  
P98a (Be 12970)  
石器  
石刃, フリント (UC 4829)
- 52号墓  
ビーズ・ペンダント  
粘土 (UC 5016)
- 大墓地西地区**
- 57号墓  
土器  
P93d (BFA 97.103)  
R55 (Be 12950)
- 60号墓  
土器  
D77 (AM 1895.819)
- 63号墓  
土器  
R66 (AM 1895.725)  
そのほか  
ナイフ, 銅 (UC 4304)  
鏝, 銅 (UC 36150)  
針, 銀 (UC 36151)  
針, 銅 (UC 36152)
- 針, 銅 (UC 36153)  
針, 銅 (UC 36154)  
マラカイトの破片 (UC 4303)
- 64号墓  
土器  
L 土器短頸壺 (PhU E14901)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙 (UC 5222)  
ビーズ・ペンダント  
ペンダント, 貝 (UC 73106)
- 65号墓  
ビーズ・ペンダント  
ファイアンス (MM 1045)  
そのほか  
マラカイト, 破片 (UC 5105)
- 66号墓  
土器  
P22 (CNH 31458)  
P34a (OIC E918)  
石製容器  
40, 大理石 (AM 1895.159)
- 68号墓  
そのほか  
礫 (UC 35983)
- 69号墓  
土器  
P40e (PhU E14919)  
L33 (UC 6241)
- 71号墓  
土器  
W51 (MM 3142)
- 73号墓  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙(UC 5219)
- 74号墓  
土器  
D70 (AM 1895.618)  
石器  
石刃, フリント(UC 4942)  
石刃, 黒曜石 (AM 1895.1147)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 骨 (AM 1895.1211)  
そのほか  
礫, 赤鉄鉱 (UC 5106)  
マラカイト, 破片 (UC 5106)
- 76号墓  
土器  
R26 (PhU E15571)
- 79号墓  
ビーズ・ペンダント

- 柘榴石・瑪瑙・蛇紋岩・光沢凍石 (UC 5017)
- 80号墓  
パレット  
不整形 (UC 4701)
  - 81号墓  
パレット  
不整形 (UC 4712)
  - 83号墓  
土器  
33b (AM 1895.603)  
パレット  
40D (Be 12876)  
そのほか  
棒, 泥岩 (UC 5169)
  - 84号墓  
土器  
P93d (KN 4349)  
P95b (BoS 180)
  - 85号墓  
土器  
B53b (PhU E14848)  
P82L (BC 936.63)
  - 86号墓  
土器  
D79 as (AM 1895.746)  
R57c (OIC E840)  
骨・牙製品  
スプーンの把手, 象牙, 破片 (UC 5220)  
ヘアピン, 象牙 (UC 5221)
  - 87号墓  
土器  
W35 (AM 1895.817)  
L34 (KN 4374)
  - 88号墓  
土器  
L16b (Bo 1895.25:74)
  - 89号墓  
土器  
P81b (LP 138)  
P93a (AM 1895.562)  
P93a (UC 5889)  
石製容器  
アヒル形短頸壺, 蛇紋岩 (AM 1895.217)
  - 90号墓  
石器  
ナイフ, フリント (BMK E.1032)
  - 92号墓  
土器  
R39 (UC 5787)  
L33A (Bo 1895.25:75)  
L34a (Bo1895.25:63)
- L58 as (MM 4473)
- 93号墓  
土器  
L17 (AM 1895.459)  
L38 (AM 1895.652)  
L86 (PhU E1710)
  - 94号墓  
土器  
R23a (MuM 4937 T2123)
  - 95号墓  
土器  
N30 (AM 1895.499)  
D58 (CNH 31479)  
石製容器  
4V (UC 4704)  
45S (UC 4670)  
そのほか  
礫 (KN 4275)  
有機物 (UC 4669)
  - 96号墓  
土器  
R3 (UC 5755)
  - 97号墓  
土器  
L14? (PhU E1698)  
L30-33 (LP 118\*)
  - 98号墓  
土器  
P22? (LP 78\*)  
R83 (OIC E1803)  
R83 (PhU E1740)  
L36a (Bo 1895.25.69)
  - 100号墓  
土器  
P22 (OIC E1625)  
P95a (KN 4351)  
D31b (AM 1895.588)  
R69b (PhU E15832)  
L7b (AM 1895.786)  
7b (PhU E1696)  
7b (PhU E11517)  
石製容器  
34, 閃長岩 (UC 5408)  
37, 玄武岩 (UC 5408A)  
161, 大理石 (UC 5407)  
石器  
ナイフ, フリント (UC 5403)  
魚尾形ナイフ, フリント (UC 5405)  
魚尾形ナイフ, フリント (MM 2424)  
魚尾形ナイフ, フリント, 破片 (UC 5404)  
そのほか  
礫 (UC 5406)  
ゲーム駒, 石灰岩 (AM 1895.143-1)  
ゲーム駒, 石灰岩 (AM 1895.143-2)  
ゲーム駒, 石灰岩 (AM 1895.143-3)

- ゲーム駒, 石灰岩 (AM 1895.143-4)
- ゲーム駒, 石灰岩 (AM 1895.143-5)
- ゲーム駒, 石灰岩 (AM 1895.143-6)
- ゲーム駒, 角礫岩 (AM 1895.143-7)
- ゲーム駒, 角礫岩 (AM 1895.143-8)
- ゲーム駒, 角礫岩 (AM 1895.143-9)
  
- 101 号墓
  - 土器
    - W61 (CB E.901)
  
- 102 号墓
  - そのほか
    - 錐, 銅 (UC 5061)
  
- 103 号墓
  - 土器
    - W33 (AM 1895.816)
  - ビーズ・ペンダント
    - カーネリアン (UC 5012)
  
- 104 号墓
  - 骨・牙製品
    - スプーン, 象牙 (UC 5212)
  
- 107 号墓
  - そのほか
    - 重り, 石灰岩 (UC 80374)
  
- 108 号墓
  - 土器
    - P18 (AM 1895.398)
    - P28 (PhU E14775)
    - P43 (Be 13078)
    - P70 (PhU E1519)
    - F42a (AM 1895.393)
    - R34c (PhU E14790)
    - R34c (UC 4314)
  - 石器
    - エンドスクレイパー, フリント (UC 4315)
  - 骨・牙製品
    - タスク, 象牙 (UC 4317)
    - タスク, 象牙 (UC 4318)
  - そのほか
    - 貝 (UC 4316)
    - 礫 (UC 5941)
    - 礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1161)
    - 礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1162)
  
- 109 号墓
  - 土器
    - 短頸壺 (PhU E14921)
  
- 112 号墓
  - 土器
    - W62 (AM 1895.549)
    - L12c (AM 1895.1258)
    - L84b (AM 1895.665)
  - 石製容器
    - 46, アラバスター (AM 1895.201)
  - パレット
  
- 96G (MM 2381)
- 113 号墓
  - 土器
    - W71 (AM 1895.555)
    - W80 (AM 1895.554)
    - R28, 破片 (AM 1895.772)
    - L36a (PhU E1621)
    - L80 (AM 1895.769)
  - 石製容器
    - 23 (Be 12589)
    - 49, 玄武岩, 破片 (UC 4980)
    - 145 (Be 12929)
  - パレット
    - 95H (UC 6047)
    - 96M (Be 12891)
    - 98Q (UC 6046)
  - ビーズ・ペンダント
    - カーネリアン, ザクロ石 (UC 5013)
    - カーネリアン, ザクロ石, 赤鉄鉱 (UC 5014)
  - そのほか
    - 礫 (OIC E797)
  
- 114 号墓
  - 土器
    - F85 as (AM 1895.802)
    - R1b (PhU E14421)
    - L20 (AM 1895.653)
  - 骨・牙製品
    - ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5223)
    - ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5224)
    - ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5225)
  - そのほか
    - 礫 (Be 12918)
  
- 115 号墓
  - 土器
    - W62 (MAA Z16738E)
    - R 土器破片, 雄ヒツジ頭状意匠 (AM 1895.776)
  
- 117 号墓
  - 土器
    - L 土器壺 (OIC E739)
  
- 118 号墓
  - パレット
    - 長方形 (UC 4714)
  
- 119 号墓
  - 土器
    - 詳細不明皿 (LP 65\*)
  
- 120 号墓
  - 土器
    - B46 (OIC E855)
    - L12c (PhU E1685)
  
- 121 号墓
  - 土器
    - R65a (UC 66907)?

- 122 号墓
  - そのほか
  - 敲石, 珪岩 (AM 1895.1244)
  
- 123 号墓
  - 土器
  - B38c (PhU E14861)
  - 骨・牙製品
  - ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5217)
  - 棒, 象牙 (UC 5216)
  - そのほか
  - 礫 (OIC E794)
  
- 124 号墓
  - 土器
  - B74b as (CB E856)
  - D16 (AM 1895.599)
  - 石製容器
  - 101, 縞状白色・緑色の石 (AM 1895.181)
  - 石器
  - 石刃, フリント (UC 4832)
  - 骨・牙製品
  - ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5226)
  - ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5227)
  
- 125 号墓
  - 土器
  - R84 (UC 5793)
  
- 127 号墓
  - そのほか
  - 礫 (Be 12918)
  
- 128 号墓
  - 土器
  - P22 (FW E79.1896)
  - P22 (MAA Z16787B)
  - D 土器 (PhU E15733)
  - 骨・牙製品
  - 円筒形鉢, 象牙 (UC 5203)
  
- 129 号墓
  - 土器
  - B24a (UC 6206)
  - 石製容器
  - 9, 角礫岩 (AM 1895.154)
  - H6 石灰岩 (PhU E1345)
  - 石器
  - ナイフ, フリント (PhU E1106)
  
- 130 号墓
  - 土器
  - P22 (OIC E1710)
  
- 132 号墓
  - 土器
  - B74b (Bo 1929.25:22)
  - ビーズ・ペンダント
  - ペンダント, 骨(PhU E1174A)
  
- ペンダント, 骨(PhU E1174B)
  
- 133 号墓
  - バレット
  - 88D as (UC 4715)
  
- 135 号墓
  - 土器
  - R62 (BFA 97.100)
  - L 土器短頸壺 (PhU E1806)
  
- 138 号墓
  - 土器
  - B47 (個人蔵)
  - D66 (FW E.P.109)
  
- 140 号墓
  - 土器
  - P13 (OIC E1783)
  - W43 (FW E74.1896)
  - W43 (OIC E860)
  - R45 (MM 4464)
  - L12c (PhU E 14785)
  - L 土器長頸壺 (PhU E1645)
  - 骨・牙製品
  - ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5228)
  - ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5229)
  
- 143 号墓
  - 土器
  - R34b (UC 5770)
  
- 144 号墓
  - 土器
  - P74 (AM 1895.564)
  - 石器
  - 尖頭器, フリント (UC 4614)
  - 尖頭器, フリント (UC 4634)
  - 石刃, フリント (CB E.1359a)
  - 石刃, フリント (CB E.1359b)
  - 石刃, フリント (UC 4612)
  - 石刃, フリント (UC 4613)
  - 石刃, フリント (UC 4615)
  - 石刃, フリント (UC 4616)
  - 石刃, フリント (UC 4617)
  - 石刃, フリント (UC 4618)
  - 石刃, フリント (UC 4619)
  - 石刃, フリント (UC 4620)
  - 石刃, フリント (UC 4621)
  - 石刃, フリント (UC 4622)
  - 石刃, フリント (UC 4623)
  - 石刃, フリント (UC 4624)
  - 石刃, フリント (UC 4625)
  - 石刃, フリント (UC 4626)
  - 石刃, フリント (UC 4627)
  - 石刃, フリント (UC 4628)
  - 石刃, フリント (UC 4629)
  - 石刃, フリント (UC 4630)
  - 石刃, フリント (UC 4631)
  - 石刃, フリント (UC 4632)



石刃, フリント (UC 4633)

骨・牙製品

ピン, 象牙 (UC 4642)

ピン, 象牙 (UC 4644)

鈎, 象牙, 片 (CB E.1320)

ビーズ・ペンダント

石灰岩 (UC 4641)

ペンダント, 泥岩 (UC 4640)

そのほか

貝 (UC 4639)

礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1159)

礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1171)

小型礫 8 点 (UC 4638)

礫 (UC 5942)

礫 (MM 2384)

礫 (MM 2385)

礫 (MM 2388)

マラカイトの塊 (UC 4643)

• 145 号墓

土器

F58b (AM 1895.397)

• 146 号墓

そのほか

礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1164)

礫 (UC 5943)

• 147 号墓

土器

W24 (OIC E844)

L17a (BFA 97.134)

L68 (CB E.1753)

石製容器

23, 角礫岩 (OIC E935)

パレット

88D (AM 1895.836)

石器

石刃, フリント (UC 4833)

石刃, フリント (UC 4834)

骨・牙製品

櫛, 骨? (AM 1895.947)

櫛の歯, 象牙 (UC 4459)

ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 4460)

そのほか

礫 (AM 1895.1153)

礫 (KN 4278)

礫 (OIC E808)

礫 (UC 5944)

貝 (UC 4461)

• 148 号墓

土器

B63a (MM 3125)

R55b (PhU E1731)

• 149 号墓

パレット

42H (BoS 318)

骨・牙製品

櫛, 象牙 (UC 5610)

タグ, 象牙 (AM 1895.920)

タグ, 象牙 (AM 1895.921)

タグ, 象牙 (AM 1895.922)

• 150 号墓

土器

B57b (BMC P1783)?

石製容器

54, 石灰岩 (UC 4984)

そのほか

ナイフ, フリント (BMK E.1227 = UC 73291)

• 155 号墓

土器

F43a (AM 1895.793)

• 156 号墓

土器

R38 (PhU E14404)

• 157 号墓

土器

R94 (PhU E14395)

• 158 号墓

土器

B1b? (BFA 97.152)

そのほか

礫 (UC 35986)

• 159 号墓

そのほか

礫 (UC 35985)

• 160 号墓

土器

B11f (Be 12984)

B11f (MM 10902)

B47 (OIC E1770)

B57b (AM Loan 400C)

B57b (PhU E14858)

B57b as (MH 1909.3402.AES)

B57b (AM 1895.239)

B57b (AM 1895.293)

B57b (OIC E1808)

B72b (BMC P.1783)

P57b (AM 1895.419)

そのほか

礫 (UC 5945)

• 161 号墓

土器

P93b (個人蔵)

R65d (KN 4363)

L42 (BoS 246)

パレット

69D (UC 4706)

石器

石刃, フリント (UC 4835)

• 162号墓

土器

P56b? (LP 103\*)  
P82b (CB E861)  
P95a (KN 4355)  
R65b (BoS 256)  
L 土器長頸壺 (PhU E1730)

石器

スクレイパー, フリント (UC 4536)  
ナイフ, フリント (AM 1895.1021)  
石刃, フリント (UC 4534)  
石刃, フリント (UC 4539)  
石刃, フリント (UC 4540)  
石刃, フリント (UC 4541)  
石刃, フリント (UC 4542)  
石刃, フリント (UC 4543)  
石刃, フリント (UC 4538)  
剥片, フリント (UC 4535)  
剥片, フリント (UC 4537)

骨・牙製品

櫛, 象牙 (UC 4545)  
櫛, 象牙 (UC 4546)  
櫛, 象牙 (UC 4547)  
櫛, 象牙 (UC 4548)  
櫛, 象牙 (UC 4549)  
櫛, 象牙 (UC 4550)

その他

鑿, 銅 (UC 4298)  
錐, 銅 (UC 4299)  
錐, 銅 (UC 4300)  
ピン, 銅 (UC 4301)  
へら, 銅 (UC 4302)  
石灰岩片 (UC 4544)

• 164号墓

土器

P22 (KN 4331)  
N22 (PhU 1410)  
W3 (AM 1895.522)  
R62 (KN 4366)

パレット

67T (AM 1895.853)

その他

マラカイトの塊 (UC 5107)

• 165号墓

土器

P40a (UC 5873)

その他

礫 (UC 35987)

• 168号墓

土器

D27G as (MuM T1167)

その他

礫 (UC 35988)

• 169号墓

土器

B58a (OIC E792)

P22 (OIC E1616)

パレット

17G (MM 4600)

石器

石刃, フリント (UC 4862)  
石刃, フリント (UC 4863)

骨・牙製品

棒, 象牙 11点 (UC 6016)  
棒, 象牙 (UC 6017)

その他

礫 (UC 5946)

• 171号墓

土器

B57b (MM 4518)  
B62b (OIC E1786A + E1786B-D)

パレット

31D (UC 4690)  
92M as (MM 4591)

• 173号墓

土器

D43 as (AM 1895.606)  
R38 (PhU E14392)

• 174号墓

土器

P22 (PhU E14780)

• 175号墓

土器

B56 (PhU E1461)  
P47a (BMC P.1831)

• 176号墓

土器

P11c (UC 5836)  
R24 (KN 4376)

• 177号墓

土器

P22 (KN 4333)  
P40a (PhU E14918)  
W4 as (AM 1895.535)

石製容器

22 (Be 12925)

パレット

24D (MM 4595)  
45E (UC 4374)

石器

石刃, フリント (UC 4376)

骨・牙製品

櫛, 骨 (AM 1895.946)  
櫛, 象牙, 破片 (UC 4377)  
棒, 象牙, 破片 (UC 4378)

その他

紡錘車, 石灰岩 (UC 4375)  
礫 (UC 35989)

• 178号墓

土器

B57a (CB E832)

	N10 (AM 1895.501) D67a (AM 1895.627)	<u>そのほか</u> 礫 (UC 35991)
<u>石器</u>	斧, フリント (UC 4788) 尖頭器, フリント (UC 4785) エンドスクレイパー, フリント (UC 4784) 魚尾形ナイフ, フリント (Be 12893) ナイフ, フリント (MM 2427) 石刃, フリント (UC 4781) 石刃, フリント (UC 4783) 石刃, フリント (UC 4786) 剥片, フリント, ムステリアンの再利用? (UC 4787) 錐, フリント (UC 4782)	<ul style="list-style-type: none"> <li>187 号墓 <u>土器</u> B27d (RM 18.6) P58a (PhU E1766)</li> <li>188 号墓 <u>土器</u> P82a as (OIC E837)</li> <li>190 号墓 <u>土器</u> B41 (BoS 190) P22 (OIC E1769)</li> <li>191 号墓 <u>土器</u> B53a (AM 1895.264) B58b (OIC E1680) B62b (AM 1895.240) B62b (CNH 31490) P55 (AM 1895.791) D93b (AM 1895.625)</li> <li>192 号墓 <u>土器</u> B58a (OIC E1852) B62b (MM 3092) P22 (OIC E1617) P34b (FW E.75.1896) P34b (PhU E1801) P34b (PhU E14911) P56a (OIC E1960) P56a (PhU E1772)</li> </ul>
<u>そのほか</u>	礫 (UC 5947)	
• 179 号墓		
<u>石器</u>	石刃, フリント (UC 4864)	
<u>骨・牙製品</u>	棒, アラバスター (UC 5185)	
<u>そのほか</u>	礫 (AM 1895.1157) 礫 (UC 35990)	
• 181 号墓		
<u>石器</u>	石刃, フリント (UC 4865)	
<u>ビーズ・ペンダント</u>	カーネリアン (UC 35978)	
<u>そのほか</u>	メイスヘッド (MM 2437)	
• 182 号墓		
<u>パレット</u>	破片 (UC 4716)	
• 183 号墓		
<u>石器</u>	石刃, フリント (UC 4943)	
• 184 号墓		
<u>そのほか</u>	礫 (RM 18.1)	
• 185 号墓		
<u>土器</u>	B57a (AM 1895.284) P40e (UC 5875) N6 (AM 1895.497) L12b (PhU E1619)	
<u>パレット</u>	67D (UC 4697)	
<u>ビーズ・ペンダント</u>	粘土 (UC 5006)	
<u>そのほか</u>	礫 (Be 12918)	
• 186 号墓		
		<ul style="list-style-type: none"> <li>193 号墓 <u>土器</u> D78 (AM 1895.579)</li> <li>194 号墓 <u>土器</u> B57b (CB E.1764) B57b (PhU E14846)</li> <li>195 号墓 <u>土器</u> B27a (OIC E1816)</li> <li>196 号墓 <u>土器</u> B27a, M306 as (UCW 13488/3) F15 (OIC E1787)</li> <li>197 号墓 <u>石器</u> ナイフ, フリント (UC 4866)</li> <li>198 号墓 <u>土器</u> 無頸壺, 点描文, 搬入品? (UC 5894)</li> </ul>

- 201 号墓  
土器  
P22 (PhU E14768)
- 202 号墓  
土器  
P23a (PhU E15575)  
そのほか  
穿孔円盤, 焼成粘土 (AM 1895.644)  
穿孔円盤, 焼成粘土 (AM 1895.823)
- 203 号墓  
土器  
P22 (MuM 4664 T.1943)
- 206 号墓  
土器  
B25a (FW E74.1896)  
B35d (Be 12990)  
B62b (OIC E1959)  
B 土器破片 (Be 13017)  
P58b (Be 13068)  
P 土器体部片, M (UC 5821)  
P 土器体部片, M (UC 36052)  
F43b (AM 1895.388)
- 208 号墓  
土器  
P1 (UC 5835)  
L12 (OIC E1759)  
そのほか  
つまみ, 象牙 (UC 5673)  
つまみ, 象牙 (UC 5674)  
つまみ, 象牙 (UC 5675)  
つまみ, 象牙 (UC 5676)  
つまみ, 象牙 (UC 5677)
- 209 号墓  
石製容器  
121, 石灰岩 (AM 1895.180)
- 210 号墓  
土器  
P95a (FW E78.1896)  
W43 (Be 13375)  
R66 (AM 1895.698)  
R66 (MM 4469)  
R66 (BoS 242)  
R66 (PhU E1745)  
L 土器短頸壺 (PhU E12236)  
詳細不明壺 (LP 143\*)  
パレット  
魚形 (AM 1895.849)  
不整形 (UC 4707)  
石器  
鎌刃, フリント (UC 6238)  
石刃, フリント (UC 4836)
- 211 号墓  
土器  
P59 (Be 13070)

- 石器  
魚尾形ナイフ, フリント (UC 4527)  
魚尾形ナイフ, フリント (UC 4528)
- そのほか  
タグ, 砂岩 (UC 4529)  
礫, 方解石 (UC 4530A)
- 212 号墓  
土器  
B55b (個人蔵?)
- 214 号墓  
土器  
L17a (OIC E919)
- 215 号墓  
パレット  
57B (AM 1895.833)  
石器  
鎌刃, フリント (UC 4868)  
石刃, フリント (UC 4869)
- 217 号墓  
土器  
B27f (BFA 97.82)  
P37 (OIC E1805)  
パレット  
破片, 半楕円形 (MM 8368A)
- 218 号墓  
土器  
B 土器無頸壺, 口縁部片, M116 (UC 5417)  
P 土器体部片, M359 (UC 5818)  
石器  
魚尾形ナイフ, フリント (AM 1895.1023)  
石刃, フリント (UC 4870)  
そのほか  
錐, 銅 (MM 1051)  
礫 (UC 5948)
- 219 号墓  
石器  
尖頭器, フリント (UC 4871)
- 221 号墓  
土器  
F85 (AM 1895.656)
- 223 号墓  
土器  
B26c (AM 1895.312)  
B26c (OIC E773)  
B57b (FW E16.1896)  
C26 (AM 1895.480)  
石器  
魚尾形ナイフ, フリント (MM 5579)  
ナイフ, フリント, 破片 (MM 5580)  
石刃, フリント (UC 4777)
- 224 号墓

- 土器  
B74a (OIC E1846)  
B74a (PhU E14879)  
P53 (Bo 1895.25:28)  
P 土器体部片, M466 (UC 5819)  
R81, M (PhU E1671)
- 225 号墓  
土器  
R 土器体部片, M378 (UC 36067)
  - 226 号墓  
土器  
P57a (LP 87\*)  
P57a (OIC E920)
- パレット  
91E (UC 4693)
- 骨・牙製品  
タスク, カバ牙 (AM 1895.923)  
タスク, カバ牙 (AM 1895.924)
- 228 号墓  
土器  
B47 (CS JLS.21116)  
P48 (Be 12966)
  - 231 号墓  
石製容器  
121 as, 粗粒玄武岩 (AM 1895.178)  
142 (Be 13097)  
164 (Be 13094)  
170, アラバスター (Be 13093)  
180, 大理石 (AM 1895.198)  
182, アラバスター (Be 13092)
- 骨・牙製品  
脚台付鉢, 象牙 (UC 5204)  
腕輪, 象牙, 破片(UC 5205)  
象牙, 破片 (UC 5206)
- 233 号墓  
土器  
P22 (UC 5865)
  - 234 号墓  
土器  
R97 (PhU E1726)
- 石製容器  
116, 石灰岩 (AM 1895.176)  
129, アラバスター (UC 4981)
- その他  
メイスヘッド模造品, 円盤形, 白亜 (AM 1895.146)  
貝 (UC 5138)
- 235 号墓  
土器  
B25e (RP 1569)  
B25g? (RP 1570)  
B25g (RP 1571)  
B35a (UC 5692)  
B38c? (RP 1568)  
B57b (RP 1567)
- B72a (AM 1895.294)  
B72a (Be 12997)
- 236 号墓  
土器  
F62b (AM 1895.451)
  - 238 号墓  
土器  
B11f (FW E30.1896)  
P57b (CS. JLS.21119)
- その他  
護符, ラピスラズリ (UC 5430)  
護符, ラピスラズリ (UC 5431)
- 240 号墓  
土器  
P 土器鉢 (PhU E15576)
  - 241 号墓  
土器  
B 土器無頸壺, 口縁部片 + 体部片, M347 (UC 4244)  
B57b (Be 12995)  
B57b (BoS 186)  
B57b (個人蔵)  
P56a (PhU E14894)
- パレット  
4S (UC 4243)
- 骨・牙製品  
タグ, 骨 (AM 1895.897)
- 242 号墓  
土器  
B35d (AM 1961.258)  
P 土器鉢, 底部片 (UC 4682)
  - 243 号墓  
石製容器  
坏, 石灰岩 (AM 1895.225)
  - 244 号墓  
土器  
B57b (PhU E14867)
  - 245 号墓  
土器  
R69 (BoS 261)
- その他  
礫 (UC 35993)
- 246 号墓  
土器  
B13b (AM 1895.356)
- パレット  
40H (AM 1895.850)
- 249 号墓  
土器  
F52 as (AM 1895.690)
  - 252 号墓  
土器

	B27a (FW E34.1896) B47 (UC 5697)	R81 (OIC E915) 詳細不明土器片 (LP 174*)
<u>パレット</u>	45H (UC 4718)	
• 255 号墓		• 263 号墓
<u>土器</u>	R 土器小型壺 (MAA Z16811)?	<u>土器</u>
		P54 (AM 1895.413)
• 256 号墓		• 264 号墓
<u>土器</u>	L24 (OIC E1645)	<u>そのほか</u>
		容器, 銅 (UC 5062)
• 257 号墓		• 265 号墓
<u>土器</u>	P22 as (OIC E1605)	<u>土器</u>
<u>パレット</u>	87L (UC 4717)	L2a (AM 1895.717)
<u>石器</u>	石刃, フリント (UC 4872)	L2a (OIC E1748)
		L12c (OIC E1733)
		L12c (PhU E1694)
		L17a (UC 5794)
• 259 号墓		• 266 号墓
<u>土器</u>	F40 (AM 1895.394) N 2 (AM 1895.498) L36a (Bo 1895.25:68)	<u>土器</u>
<u>石製容器</u>	120, 玄武岩 (UC 4404) 147, アラバスター (Be 12926)	F90 (AM 1895.797)
<u>骨・牙製品</u>	ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 4399) 櫛, 象牙 (UC 4400) 櫛, 象牙 (UC 4401)	• 267 号墓
<u>そのほか</u>	雲母片岩, 破片 (UC 4402) レジン, 破片 (UC 4403)	<u>土器</u>
		B11f (OIC E1602)
• 260 号墓		B34, M176 as (AM 1895.302)
<u>土器</u>	B35a? (DO EG1568)	B 土器口縁部片 (KN 4400)
<u>石製容器</u>	把手付脚台壺, 石灰岩, 破片 (CS JLS.21110)	F14 (Bo 1899.44:55)
<u>石器</u>	魚尾形ナイフ, フリント, 破片 (UC 5369)	<u>そのほか</u>
<u>骨・牙製品</u>	櫛, 象牙 (UC 5370) 櫛, 骨 (AM 1895.940)	紡錘車, 大理石 (UC 5170)
<u>そのほか</u>	ニンニク模造品, 粘土 (UC 6054)	紡錘車, 大理石 (UC 5171)
		球 6 点, 赤鉄鉱 (UC 5172)
• 261 号墓		• 268 号墓
<u>土器</u>	R69b (AM 1895.729)	<u>土器</u>
<u>そのほか</u>	護符, 泥岩 (PhU E1234)	P87a (AM 1895.563)
		F51 as (AM 1895.346 + 1895.811)
• 262 号墓		F69a (AM 1895.395)
<u>土器</u>	P56a (BC 931.63) P 土器体部片, M602 (UC 5817)	<u>石製容器</u>
		129 as, アラバスター (KN 4292)
		<u>骨・牙製品</u>
		櫛, カバ牙 (AM 1895.939)
		<u>そのほか</u>
		タグ, アラバスター (UC 5186)
		礫 (KN 4286)
		• 270 号墓
		<u>土器</u>
		W19 (LP 127)
		<u>ビーズ・ペンダント</u>
		ザクロ石, 滑石 (UC 5009)
		• 271 号墓
		<u>土器</u>
		B57a (PhU E14815)
		B68b (PhU L-55-299)
		<u>石製容器</u>
		124, アラバスター (AM 1895.177)
		<u>パレット</u>
		9D (AM 1895.841)
		<u>石器</u>

- 魚尾形ナイフ, フリント (AM 1895.1000)
- ビーズ・ペンダント  
クダサンゴ (UC 4254)
- 骨・牙製品  
女性小像, カバ牙, 脚部 (AM 1895.129)  
小像, 象牙, 破片 (UC 4251)  
小像, 象牙, 破片 (UC 4252)  
小像, 象牙, 破片 (UC 4253)  
小像, カバ牙, 脚部 (AM 1895.135)  
タグ, カバ牙 (AM 1895.925)  
タグ, カバ牙 (AM 1895.926)
- そのほか  
タグ, 泥岩 (AM 1895.132)  
礫 (Be 12918)  
礫 (UC 5949)  
小像, 粘土 (AM 1895.128)  
マラカイト (UC 4250)
- 272 号墓  
土器  
P14 (UC 5858)
  - 石器  
ナイフ, フリント (KN 4251)
  - 骨・牙製品  
鈎, 骨 (Be 12859)
  - ビーズ・ペンダント  
額ペンダント, 貝 (AM 1895.981)
- 273 号墓  
土器  
B35a (PhU E1502)  
P15a (BoS 273)  
D72 (AM 1895.611)
  - 骨・牙製品  
女性小像, カバ牙, 脚部 (AM 1895.134)
  - そのほか  
礫 (UC 5155)  
果物 (UC 36097)  
木材 (UC 36097)
- 274 号墓  
土器  
B57b (KN 4313)  
P56a (Be 12971)
  - パレット  
38H (AM 1895.848)
- 275 号墓  
土器  
B27a (AM 1895.303)
- 276 号墓  
土器  
B57a (PhU E17537)  
B62b (CNH 31468)  
P 土器壺?, 体部片 (UC 4289)
  - パレット  
破片 (UC 4686)
  - 骨・牙製品  
小像, 骨 (UC 4290)
- 277 号墓  
土器  
B57b (個人蔵)
- 278 号墓  
土器  
B62b (UCW 128549 = SE EC97?)  
L64 (Bo 1895.25:80)
- 279 号墓  
土器  
P22, M598 (UC 4587)
  - パレット  
不整形, 破片 (UC 4588)
- 280 号墓  
土器  
F30 (AM 1895.807)  
R69c (AM 1895.726)
  - 石製容器  
101, 石灰石 (AM 1895.169)
- 281 号墓  
土器  
R 土器無頸壺, 口縁部片, M (UC 5827)  
L53J as (OIC E755)
- 283 号墓  
土器  
D27F (UC 5731)
  - パレット  
92T (UC 4687)
- 287 号墓  
土器  
B74a (OIC E884)  
B 土器壺, 体部片, M184 (UC 5823)
- 288 号墓  
土器  
B64d (UC 4228)  
B 土器破片, M132 (AM 1895.1221)
  - 石製容器  
173, アラバスター (UC 4227)
- 289 号墓  
土器  
B57b (MuM 1789)  
B 土器壺, 体部片, M504 (UC 5813)  
F81c (AM 1895.517)
  - 骨・牙製品  
櫛, 象牙 (UC 5619)
- 290 号墓  
石器  
石刃, フリント (UC 4873)
- 292 号墓  
土器  
R93 (BMC P.1837)

- 293 号墓  
土器  
B 土器体部片, M6 (UC 5904)  
B 土器体部片, M81 (UC 4526)  
B 土器口縁部片, M60 + 293 (UC 4525)  
B 土器口縁部片, M282 (UC 36068)  
詳細不明土器片 (LP 173\*)
- 骨・牙製品  
櫛, 象牙 (UC 4523)  
ピン, 象牙 (UC 4524)
- そのほか  
ピン, 銅 (UC 4522)
- 294 号墓  
土器  
B 土器体部片, M374 (UC 4470)  
P26b (PhU E14909)  
R85, M265 (Be 13014)
- パレット  
89 as (UC 4471)  
不整形, 破片 (UC 4472)
- 石器  
ナイフ, フリント (UC 4474)  
石刃, フリント (UC 4473)  
石刃, フリント (UC 4475)  
石刃, フリント (UC 4476)  
石刃, フリント (UC 4477)  
石刃, フリント (UC 4478)
- 骨・牙製品  
ヘアピン, 骨, 破片 (AM 1895.962)
- そのほか  
メイスヘッド (MM 2434)  
マラカイトの塊 (UC 4479)
- 295 号墓  
土器  
B35d (AM 1895.231)  
B47 (KN 4311)
- 石器  
石刃, フリント (UC 4874)
- 296 号墓  
ビーズ・ペンダント  
骨 (Be 12851)
- 297 号墓  
土器  
B35a (OIC E1809)
- そのほか  
棒状化粧道具, 銅 (UC 4239)
- 298 号墓  
土器  
B72a (FW E32.1896)
- 300 号墓  
土器  
B57b (個人蔵)
- そのほか
- マラカイトの塊 (UC 5109)
- 301 号墓  
土器  
B72a (MM 3093)  
P15b (CB E.886)  
R93b (CB E.1735)
- 302 号墓  
土器  
B53b (Be 13007)  
B53b (Be 13008)  
B53b (PhU E12243)  
P94c (PhU E1800)  
R81, M (OIC E829)  
L58 (PhU E1721)
- そのほか  
礫 (OIC E802)
- 306 号墓  
土器  
B11d (MuM T2117)
- 307 号墓  
石器  
石刃, フリント (UC 4875)
- 308 号墓  
土器  
B93b (BoS 183)  
P22 (Bo 1895.25:33)  
R81, M507 (PhU E1673)
- 309 号墓  
骨・牙製品  
櫛, 象牙 (UC 5618)
- そのほか  
メイスヘッド, M17, 泥岩 (AM 1895.222)
- 310 号墓  
土器  
L12b (Be 12983)
- パレット  
不定形 (KN 4265)
- 311 号墓  
土器  
B58a (UC 5709)
- パレット  
45S (KN 4261)
- 312 号墓  
土器  
P47a (PhU E1802)  
P 土器体部片 (KN 4400)  
W14 (CB E.1922a + b)  
R34b (OIC E1788)
- 313 号墓  
パレット  
95E (Bo 1896.44:11)
- 315 号墓



- 土器  
W43 (MM 3111)  
L53a (OIC E1797)
- 316 号墓  
土器  
W90 (AM 1895.629)
  - 317 号墓  
土器  
P93b (OIC E743)  
R45 (AM 1895.715)
  - 320 号墓  
土器  
B 土器深鉢, 口縁部片, M241 (UC 5811)  
P73 (AM 1895.418)  
そのほか  
礫 (UC 5950)  
礫 (UC 5951)
  - 321 号墓  
土器  
B57b (MM 5925)
  - 323 号墓  
そのほか  
貝 (UC 5139)
  - 324 号墓  
パレット  
91D (Bo 1896.44:10)
  - 325 号墓  
石製容器  
101H (MM 2378)  
170, 石灰岩 (UC 4426)  
石器  
鎌刃, フリント (UC 4427)  
骨・牙製品  
櫛, 象牙 (UC 4425)  
そのほか  
礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1152)  
礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1168)
  - 326 号墓  
土器  
P22 (OIC E1800)  
P23b (AM 1895.434)  
R23a (OIC E836)  
R23a as (HM D.1932.247)  
R66 (MM 10898)  
R 土器壺 (LP 80\*)  
詳細不明壺 (LP 82\*)  
石器  
石刃, フリント (UC 4789)
  - 327 号墓  
土器  
B24c (Be 13038)  
P22 (AM 1895.400)  
P22 (OIC E1727)
- P56a (UC 5879)
- 328 号墓  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙 (UC 5230)
  - 329 号墓  
土器  
P98a (UC 5890)  
F91D 垂直口縁 (UC 5926)  
D3 (AM 1895.565)
  - 330 号墓  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙 (UC 5235)  
そのほか  
礫 (UC 35996)
  - 331 号墓  
土器  
R1 (UC 5761)  
R69c (AM 1895.699)  
石器  
ナイフ, フリント (AM 1895.1022)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 骨 (CB E.1310A)  
ヘアピン, 骨 (CB E.1310C)  
ヘアピン, 骨 (CB E.1310-1)  
ヘアピン, 骨 (CB E.1310-2)
  - 332 号墓  
土器  
P22 (OIC E1768)  
P58b (AM 1895.1260)  
R69b (AM 1895.763)  
R 土器無頸壺, 口縁部片 (UC 5829)  
石器  
石刃, フリント (UC 4876)  
石刃, フリント (UC 4877)
  - 333 号墓  
土器  
P40e (OIC E1845)  
P81b (FW E72.1896)  
R67c (MM 4482)
  - 335 号墓  
土器  
小型粗製皿 (UC 5833)  
石器  
鎌刃, フリント (UC 4878)
  - 337 号墓  
土器  
B11d (MM 10901)  
B47 (PhU E14873)  
W80 (BM EA75156)  
W80 (CB E.1923)  
骨・牙製品  
スプーン, 象牙 (PhU E1178)
  - 338 号墓

土器

B58a (OIC E1648)  
B61a as (OIC E1671)

- 339 号墓

土器

B35a (Be 13013)  
P 土器, 破片, M21 (AM 1895.1218)

- 340 号墓

土器

B74a (EM CG2049)

- 341 号墓

土器

B47 (PhU E1527)  
B75b (OIC E1825)

- 343 号墓

土器

P40b (PhU E14916)  
P82b (Be 12954)

石製容器

108 as, 石灰岩 (AM 1895.172)

パレット

57B as (AM 1895.835)

ビーズ・ペンダント

ファイアンス (UC 5116)

骨・牙製品

棒, 象牙, 破片 (UC 6022)  
ヘアピン, 象牙 (UC 5099)  
ヘアピン, 象牙 (UC 5231)

そのほか

方鉛鉱の塊 6点 (UC 5117)  
マラカイトの塊 (UC 5099A)  
貝 (UC 5140)

- 344 号墓

土器

B58b (PhU E1508)  
P22 (KN 4347)

そのほか

礫 (UC 5952)

- 345 号墓

土器

B25f (PhU E1495)  
B75a as (OIC E851)  
B 土器, 体部片, M593 (UC 5815)  
P40c (Bo 1895.25:25)

石製容器

無頸壺 (PhU E1338)

- 346 号墓

土器

B75b (BoS 184)  
P34c (Be 13066)  
N22 (Be 13088)

石製容器

壺, 石灰岩 (CNH 31480)

石器

石刃, フリント (UC 4790)

そのほか

赤鉄鉱 (UC 4395)  
礫 (UC 4396)

- 347 号墓

土器

D17a (UCW 1752)  
L17b (CB E.8760)  
L17b (OIC E1743)

- 349 号墓

骨・牙製品

鋳, 骨 (PhU E1115)

- 350 号墓

パレット

破片 (UC 4511)

石器

斧, フリント, 破片 (UC 5605)

ビーズ・ペンダント

粘土, 穿孔された貝 (UC 4512)  
粘土, 穿孔された貝 (UC 4513)  
粘土, 穿孔された貝 (UC 4514)  
蛇紋岩, 貝, 方解石 (UC 4515)

骨・牙製品

ヘアピン, 骨 (AM 1895.953)  
ヘアピン, 骨 (AM 1895.954)  
腕輪, 象牙 (UC 4510)

- 353 号墓

土器

P11F (MuM 1133)  
P82b (FW E39.1896)  
F31d (AM 1895.372)

- 355 号墓

土器

B57b (OIC E1850)  
B62b (LP 104)  
B62b (OIC E1804)  
R24 (PhU E14787)  
L7c (PhU E14417)

- 356 号墓

ビーズ・ペンダント

方解石, カーネリアン (UC 5018)  
方解石, カーネリアン (UC 5019)

- 357 号墓

土器

D63c (MuM 4672 T 1458)

- 358 号墓

土器

P22 (PhU E14771)  
P81b (PhU E14433)  
R 土器, 体部片, M108 (UC 5826)

パレット

天然の平板 (AM 1895.840)

骨・牙製品

ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5232)

- そのほか 46M (MM 4602)
- 磔 (UC 35997)
- 359 号墓  
骨・牙製品  
ヘアピン, 骨, 破片 (AM 1895.961)
  - 362-363 号墓  
土器  
D67c (BMC P.5)  
パレット  
24M-P (UC 4719)
  - 364 号墓  
土器  
R69c (AM 1895.696)
  - 365 号墓  
石製容器  
129, 石灰岩 (AM 1895.179)  
パレット  
破片, 準円形 (MM 8368B)  
そのほか  
磔 (Be 12918)
  - 367 号墓  
土器  
P 土器無頸壺, 口縁部片, 植物状の浮彫?  
(UC 5737)  
D16 as, 体部片 (UC 5735)  
R82 (AM 1895.642)
  - 369 号墓  
パレット  
鳥形 (Be 12875)  
そのほか  
メイスヘッド, M12, 片麻岩 (AM 1895.224)
  - 370 号墓  
土器  
P22 (PhU E14773)  
P22 (UC 4409)  
P75 (AM 1895.403)  
P93c (UCW 21202A)  
R34c (MM 4462)  
石器  
ナイフ, フリント (UC 4408)
  - 372 号墓  
土器  
P82b (FW E80.1896)  
L7b (MuM 4907 T.2124)
  - 373 号墓  
土器  
B39c (OIC E842)  
B53b as (PhU E1453)  
P88 (Be 12957)  
R34b (UC 5801)  
R76? (Be 12934)  
パレット  
38H (BC 2843.64)
  - 374 号墓  
土器  
W55 (Be 13377)  
L54a (AM 1895.659)
  - 375 号墓  
土器  
D 土器短頸壺 (PhU E14823)  
石製容器  
H17, 石灰岩 (PhU E1333)  
そのほか  
磔 (Be 12918)  
磔 (UC 5953)
  - 376 号墓  
土器  
P 土器, 破片, M29 (AM 1895.813)  
P22 (PhU E1554)  
P93d (BoS 179)  
R75? (PhU 14438)  
R75, M539 (UC 4258)  
L 土器鉢 (PhU 1554)  
パレット  
82D (UC 4259)  
ビーズ・ペンダント  
ペンダント?, カーネリアン (UC 5166)  
骨・牙製品  
棒, 象牙, 破片 (UC 6020)  
そのほか  
磔 (KN 4289)
  - 377 号墓  
土器  
L3 (Bo 1895.25:73)
  - 378 号墓  
土器  
B37a (AM 1895.246)  
P11d (MuM T221)  
P22 (BC 935.63)  
P22 (PhU E14415)  
P40b, M157 (KN 4343)  
D67J as (BC L268; M5446K)  
骨・牙製品  
スプーン, 象牙 (MM 1017a)  
そのほか  
貝 (UC 5141)
  - 379 号墓  
土器  
B58a (PhU E12242)  
石器  
ナイフ, フリント (UC 4879)  
そのほか  
棒, アラバスター (UC 5173)  
球, 斑岩 (UC 5174)
  - 381 号墓  
土器  
P22 (OIC E929)

- L7b (PhU E15594)
- 382 号墓  
土器  
P16 (UC 5842)  
P22 (OIC E1720)  
P40c (Bo 1895.25:26)
  - 383 号墓  
石器  
石刃, フリント (UC 4880)
  - 384 号墓  
土器  
B69b (LC 56.20.893)
  - 385 号墓  
土器  
P46b (LP 94\*)
  - 386 号墓  
土器  
W55 (AM 1895.547)  
石製容器  
141, 石灰岩, 破片 (UC 6216)
  - 387 号墓  
土器  
B 土器皿 (PhU E1426)  
B58a? (PhU E1501)  
B58a (RM 18.5)  
R84 as, M117 + M122 (Be 13059)
  - 388 号墓  
土器  
W55 (MM 3143)  
L88e (BoS 243)  
L 土器鉢 (PhU E1551)  
パレット  
89 (KN 4266)  
ビーズ・ペンダント  
カーネリアン, 黒曜石, 松脂岩 (UC 4503)  
骨・牙製品  
腕輪, 象牙, 破片 (UC 4505)  
その他  
ワニの歯 (UC 4506)  
松脂岩の破片 (UC 4504)
  - 389 号墓  
土器  
L90 (AM 1895.742)  
骨・牙製品  
腕輪, 象牙, 破片 (UC 5627)
  - 390 号墓  
土器  
P40 (PhU E14917)  
P40c (GM A1722/1)  
D40 (AM 1895.605)  
パレット  
76 (Be 12883)  
その他
- 礫 (UC 5954)
- 391 号墓  
土器  
B 土器鉢 (PhU E1531)  
L53 (KN 4358)  
パレット  
91B (PhU E1245)  
その他  
礫 (UC 35998)
  - 392 号墓  
土器  
ピン, 銅 (UC 5064)
  - 393 号墓  
土器  
D67 as, 体部片 (HM D.1932.285)  
その他  
礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1158)  
礫 (UC 35999)
  - 394 号墓  
土器  
D36b (MM 3122)  
石器  
ナイフ, フリント, 破片 (UC 4881)
  - 396 号墓  
土器  
P92 (MuM 1108)
  - 398 号墓  
土器  
D36a (PhU E14824)  
パレット  
46M (RM 18.1)  
その他  
礫 (KN 4284)  
礫 (UC 5955)  
礫 (MM 2389)  
礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1156)
  - 399 号墓  
土器  
B25b as (OIC E1863)  
P46a (MF 1912.1977)  
石製容器  
21, 閃緑岩 (AM 1895.155)  
77, 石灰岩 (AM 1895.214)  
ビーズ・ペンダント  
凍石, トルコ石 (UC 5388)  
額ペンダント, 貝 (UC 5377)  
額ペンダント, 貝 (UC 5378)  
額ペンダント, 貝 (MM 1018a)  
その他  
タグ, 角礫岩 (UC 5379)  
タグ, 石灰岩 (UC 5380)  
泥岩 (UC 5381)  
泥岩 (UC 5382)

- 泥岩 (UC 5383)  
球, 斑岩 (UC 5384)  
球, 斑岩 (UC 5385)  
球, 斑岩 (UC 5386)  
赤鉄鉱の塊 (UC 5387)
- 400 号墓  
土器  
B22f (AM 1895.247)  
P16 (UC 5849)  
R26 (UC 5781)  
R62 (BoS 255)  
その他  
鑿, 銅 (MM 2430)
  - 401 号墓  
土器  
B35c (OIC E1819)  
D66 (OIC E734)  
L12c (OIC E819)  
詳細不明土器片 (LP 181\*)
  - 402 号墓  
土器  
P22 (PhU E14784)
  - 404 号墓  
パレット  
92P (UC 4721)
  - 406 号墓  
土器  
F15 (PhU E1691)
  - 407 号墓  
土器  
B 土器短頸壺 (PhU E14864)  
骨・牙製品  
櫛, 象牙 (MM 1015B)
  - 408 号墓  
パレット  
96M (CS JLS.21219)
  - 409 号墓  
土器  
D36d (AM 1895.585)
  - 411 号墓  
土器  
B11a (CNH 31454)
  - 413 号墓  
土器  
R66? (LP 136\*)  
L70? (PhU E1440)
  - 414 号墓  
土器  
B37a (OIC E1780)  
B37a (AM 1895.234)  
B58a (FW E35.1896)  
石製容器
- 48 as, 玄武岩 (MM 2401)  
石器  
ナイフ, 頂部片, フリント (AM 1895.1025)
- 415 号墓  
土器  
B11f (UC 5916)  
B39a (LP 158)  
B57a (UC 5915)
  - 416 号墓  
土器  
N30 (MM 3103)  
石製容器  
64, 石灰岩 (UC 4976)
  - 417 号墓  
土器  
B53a (AM 1895.277)  
B53a (UC 4685)  
石製容器  
鉢?, 石灰岩, 破片 (UC 4684)  
11, 粗粒玄武岩 (AM 1895.160)
  - 419 号墓  
石器  
魚尾形ナイフ, フリント (MM 2426)  
骨・牙製品  
腕輪, 貝 (PhU E1159)
  - 420 号墓  
土器  
L7b (AM 1895.718)
  - 421 号墓  
土器  
B39a (AM 1895.308)  
B66a (AM 1895.278)  
P22 (UC 4398)  
P40e (RM)  
P57a (RM 18.8)  
P57a (UC 4397)  
P95a (OIC E835)  
P95b (PhU E1786)  
F42b (AM 1895.392)  
F58a (AM 1895.396)  
N 鉢 (PhU E1627)  
R57c (OIC E746)  
石製容器  
51, 角礫岩 (MM 4521)  
短頸壺, 玄武岩 (MM 2397)
  - 422 号墓  
土器  
B27a (PhU E1480)  
P22 (PhU E18011)
  - 424 号墓  
土器  
B71b (Bo 1895.25:21)  
P58a (PhU E1771)  
パレット  
67N (UC 4720)

- 426 号墓  
土器  
W71 (BoS 166)  
D32 (PhU L-55-307)  
L17b (PhU E.15578)  
L17b (AM 1895.675)
- 427 号墓  
土器  
R94 (OIC E763)  
L12a (OIC E1736)
- 428 号墓  
土器  
L53K as (Be 12961)  
骨・牙製品  
櫛, 象牙 (CB E.1301)
- 429 号墓  
土器  
P40b (OIC E749)  
パレット  
船形 (UC 4699)
- 430 号墓  
土器  
B35b (PhU E1497)  
R36 (UC 5804)  
R36, M179 as (UC 5991)  
石製容器  
5, 角礫岩 (UC 4428)  
石器  
魚尾形ナイフ, フリント (UC 4429)
- 433 号墓  
パレット  
51H as (UC 4722)
- 434 号墓  
石器  
石刃, フリント (UC 4882)
- 435 号墓  
土器  
B25f (AM 1895.254)  
P40b (CNH 31461)
- 436 号墓  
土器  
R65c (AM 1895.765)  
石器  
石刃, フリント (UC 4883)
- 437 号墓  
土器  
L18c (OIC E817)  
骨・牙製品  
つまみ, 象牙 (UC 5678)  
つまみ, 象牙 (UC 5679)  
つまみ, 象牙 (UC 5680)
- 438 号墓  
土器  
R38 (OIC E764)
- 439 号墓  
土器  
D67b as (OIC E1737)
- 440 号墓  
土器  
D7a (FW E60.1896)  
R22a (KN 4399)  
パレット  
不整形, 破片 (UC 4723)
- 441 号墓  
パレット  
46 (IAL 51/209)
- 443 号墓  
石器  
ナイフ, 破片, フリント (AM 1895.1024)  
石刃, フリント (UC 4884)  
石刃, フリント (UC 4885)
- 444 号墓  
パレット  
54D (OIC E873)  
石器  
石刃, フリント (UC 4886)  
そのほか  
衣服の断片 (UC 5057)
- 445 号墓  
土器  
W54 as (Bo 1895.25:56)  
L19a (OIC E744)
- 447 号墓  
石製容器  
無頸壺, 閃緑岩 (PhU E1328)  
パレット  
45A (UC 4724)
- 449 号墓  
土器  
W19 (Bo 1895.25:42)  
L16 (LP 75\*)
- 450 号墓  
土器  
P40e (PhU E1760)  
P40e (PhU L-55-302)  
パレット  
46R (CB E424)  
石器  
石刃, フリント (UC 4888)  
石刃, フリント (UC 4889)  
そのほか  
礫 (Be 12918)  
礫 (KN 4277)

- 451 号墓  
土器  
P93b (Be 13071)  
R34c, M (PhU E14793)  
パレット  
天然の板 (AM 1895.838)
- 452 号墓  
石製容器  
口縁部片, 石灰岩, 破片 (UC 4985)  
石器  
ナイフ, フリント, 破片 (NC 1904.54.2)
- 453 号墓  
土器  
L39 (AM 1895.668)  
石製容器  
21 as, 石灰岩 (CNH 31481)  
そのほか  
礫 (UC 36000)
- 454 号墓  
土器  
B39a (AM 1895.266)  
B39a (AM 1895.311)  
B72a (FW E69.1896)  
P22 (FW E47.1896)  
P22 (PhU E1706)  
P22 (AM 1895.416)  
P40b (KN 4345)  
F65 (AM 1895.620)  
D45 (AM 1895.584)  
R 土器無頸壺, 口縁部片, M324 (UC 36316)  
そのほか  
礫 (UC 5957)  
礫 (UC 36009)  
紡錘車, 石灰岩 (MM 4543)
- 455 号墓  
土器  
P22 (OIC E1761)
- 456 号墓  
土器  
B53a (AM 1895.265)  
R81, M439 (AM 1895.688)  
L17b (OIC E909)  
石製容器  
玄武岩 (PhU E1367)  
石器  
ナイフ, フリント (AM 1895.1005)  
ナイフ, フリント (UC 4793)  
石刃, フリント (UC 4791)  
石刃, フリント (UC 4792)  
そのほか  
砂岩の塊, 削り痕有り (UC 4796A)
- 457 号墓  
土器  
B58a, M? (PhU E12228)  
石製容器
- 458 号墓  
石器  
スクレイパー, フリント (UC 4892)
- 459 号墓  
土器  
L53 (MM 2261)
- 460 号墓  
土器  
W62 (AM 1895.548)  
W62 (BoS 161)  
W62 (FW E.P.60)  
R26c (UC 5779)  
L17b (AM 1895.460)  
骨・牙製品  
スプーン, 骨? (AM 1895.903)  
そのほか  
貝 (UC 5148)  
貝 (UC 5149)  
礫 (UC 5958)
- 461 号墓  
土器  
B74a (CS. JLS.21138)  
B74a? (PhU E12247)  
P40 (BFA 97.92)  
P58a (BFA 97.111)  
パレット  
101F as (UC 5469A)  
石器  
石核, フリント (UC 5469)  
そのほか  
乳棒, 石灰岩 (AM 1895.1232)  
メイスヘッド, アラバスター (CS JLS.21098)  
重り, 石灰岩 (UC 80229)
- 462 号墓  
そのほか  
棒, 銅 (UC 5065)  
カタツムリ (UC 5114)
- 463 号墓  
土器  
B72b (OIC E1822)
- 464 号墓  
土器  
詳細不明鉢 (LP 63\*)
- 467 号墓  
土器  
B 土器無頸壺 (PhU E14881)
- 469 号墓  
土器  
L39 as (OIC E1662)
- 470 号墓

そのほか

礫 (UC 36010)

- 471 号墓

土器

B27a (OIC E790)  
B86a (MM 4436)  
P22 (PhU E12239)  
F85c as (AM 1895.518)

石製容器

189 as, 閃緑岩 (MM 4526)

石器

ナイフ, フリント (UC 4808)  
スクレイパー, フリント (UC 4794)  
石刃, フリント (UC 4796)  
石刃, フリント (UC 4797)  
石刃, フリント (UC 4798)  
石刃, フリント (UC 4799)  
石刃, フリント (UC 4800)  
石刃, フリント (UC 4801)  
石刃, フリント (UC 4802)  
石刃, フリント (UC 4803)  
石刃, フリント (UC 4804)  
石刃, フリント (UC 4805)  
石刃, フリント (UC 4806)  
石刃, フリント (UC 4807)  
錐, フリント (UC 4795)  
破片, フリント (UC 4809)

- 472 号墓

土器

B35d (BC L264)  
B54a?, M36 (MM 6257)  
B57b (OIC E1750)  
B57b (OIC E1953)  
B72a (BFA 97.72)  
P79 as (AM 1895.677)

石器

魚尾形ナイフ, フリント (KN 4255)  
石刃, フリント (UC 4810)  
石刃, フリント (UC 4811)

そのほか

球, ゲーム駒, 斑岩 (UC 5175)

- 473 号墓

土器

L26H (Bo 1895.25:60)  
L50a (Be 13060)

石器

石刃, フリント (UC 4887)  
石刃, フリント (UC 4893)

- 474 号墓

土器

P40a (FW E52.1896)

骨・牙製品

腕輪, 貝, 破片 (UC 5629)

- 479 号墓

土器

L 土器短頸壺 (PhU E14492)

そのほか

礫 (AM 1895.1175)

- 480 号墓

石器

石刃, フリント (UC 4894)

- 482 号墓

土器

P97 (UC 5886)

パレット

88M (KN 4267)

石器

石刃, フリント (UC 4895)  
石刃, フリント (UC 4896)

- 483 号墓

そのほか

メイスヘッド, 石灰岩 (UC 5131)

- 484 号墓

土器

F17a (OIC E905)

パレット

破片 (UC 5108)

骨・牙製品

ヘアピン, 骨 (CB E.1310)

- 485 号墓

土器

P22 (UC 5854)  
P88 (AM 1895.800)  
D20 (KN 4392)

石器

石刃, フリント (UC 4837)

そのほか

礫 (UC 5959)

- 486 号墓

パレット

不整形 (UC 4770)

- 487 号墓

土器

B11a (PhU E1425)

石器

鎌刃, フリント (Be 12911)

骨・牙製品

腕輪, 貝, 破片 (CB E.1298)

- 488 号墓

土器

B57b (個人蔵)

パレット

98N (Bo 1896.44:12)

- 489 号墓

土器

P40e (PhU E1816)  
L12 (PhU E1707)



石器

石刃, フリント (UC 4897)

石刃, フリント (UC 4898)

石刃, フリント (UC 4899)

- 490 号墓

そのほか

礫, 水晶 (UC 5956)

- 491 号墓

土器

W61 (Bo 1895.25:45)

D26 (AM 1895.617)

- 492 号墓

石器

石刃, フリント (UC 4900)

石刃, フリント (UC 4901)

石刃, フリント (UC 4902)

石刃, フリント (UC 4903)

そのほか

礫 (AM 1895.1167)

礫 (KN 4285)

- 493 号墓

パレット

69B (AM 1895.852)

- 494 号墓

土器

W19 (Bo 1895.25:38)

R 土器短頸壺 (PhU E1728)

石製容器

11, 角礫岩 (AM 1895.153)

ビーズ・ペンダント

トルコ石, ザクロ石, 玉髄, カーネリアン,  
光沢ありの凍石 (UC 4392)

トルコ石, ザクロ石, 玉髄, カーネリアン,  
光沢あり凍石 (UC 4393)

石器

石刃, フリント (UC 4812)

そのほか

マラカイト塊 (UC 4394)

- 495 号墓

土器

B53b (BC 947.63)

R81 (LP 83\*)

- 499 号墓

ビーズ・ペンダント

ファイアンス, 黒曜石 (UC 4266)

ファイアンス, 黒曜石 (UC 4267)

骨・牙製品

棒, 骨, 破片 (UC 6024)

- 1201 号墓

土器

P22 (OIC E1751)

P95a (UC 5888)

L12b (OIC E831)

そのほか

留め金, 銅 (UC 5067)

留め金, 銅 (UC 5068)

留め金, 銅 (UC 5069)

メイスヘッド, アラバスター (UC 5132)

腕輪, 貝, 破片 (UC 5633)

腕輪, 貝, 破片 (UC 5634)

- 1203 号墓

土器

B57a (OIC E887)

石製容器

91, 石灰岩 (NC 1919.58.41.2)

パレット

45Q (UC 4416)

石器

スクレイパー, フリント (UC 4423)

ナイフ, フリント (UC 4418)

ナイフ, フリント (UC 4419)

ナイフ, フリント (UC 4420)

石刃, フリント (UC 4422)

錐, フリント (UC 4421)

骨・牙製品

スプーン, 象牙 (UC 4424)

そのほか

貝 (UC 4417)

- 1204 号墓

土器

P95b (AM 1895.409)

- 1205 号墓

土器

B54a (OIC E1837)

D67c, 破片 (CB E.1928)

R81 (PhU E1678)

パレット

40G (OIC E880)

石器

ナイフ, フリント (AM 1895.1007)

石刃, フリント (UC 4817)

石刃, フリント (UC 4818)

石刃, フリント (UC 4819)

石刃, フリント (UC 4820A)

剥片, フリント (UC 4821A)

- 1206 号墓

土器

B1a (BM EA67426)

B19a (Be 13029)

B42a (CS JLS.21120)

P22 (EM CG2139)

P22 (MM 4507)

P22 (OIC E839)

P95a (AM 1895.561)

P95b (BX 1206=3164/5)

F58a (PhU E1543)

W47 (AM 1895.545)

L82 (AM 1895.638)

そのほか

- 貝 (UC 5935)
- 1207 号墓  
石製容器  
42, 玄武岩 (UC 6226)  
48, 玄武岩 (UC 4990)
- 1208 号墓  
土器  
D53a, 破片 (UC 4281)  
石器  
石刃, フリント (UC 4278)  
石刃, フリント (UC 4279)  
石刃, フリント (UC 4280)  
そのほか  
礫 (UC 5972)  
礫 (KN 4290)
- 1209 号墓  
土器  
P40a (PhU E14906)  
D47 (AM 1895.600)  
石器  
ナイフ, フリント (AM 1895.1004)
- 1211 号墓  
土器  
F58a (UC 5741)
- 1212 号墓  
土器  
R57c (OIC E933)  
R57c (PhU E1649)  
L75M (FW E10.1895)  
パレット  
46P (RM)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙 (UC 5236)  
ヘアピン, 象牙 (UC 5237)  
ヘアピン, 骨? (AM 1895.956)  
ヘアピン, 骨? (AM 1895.960)  
ヘアピン, 骨 (Be 13106)  
そのほか  
礫 (UC 5973)
- 1215 号墓  
石器  
ナイフ, フリント (NC 1904.54.1)  
石刃, フリント (UC 4820)  
骨・牙製品  
鋳, 骨 (UC 5208)  
鋳, 骨 (UC 5209)  
鋳, 骨 (UC 5210)  
鋳, 骨 (KN 4256)  
鋳, 骨 (KN 4257)  
鋳, 骨 (AM 1895.963)  
鋳, 骨 (AM 1895.964)  
鋳, 骨 (AM 1895.965)  
鋳, 骨 (AM 1895.966)

- 棒, 斑岩 (UC 5176)  
球, 斑岩 3 点 (UC 5177)  
球, 斑岩 (UC 5178)  
球, 角礫岩 (UC 5179)  
球, 大理石 (UC 5180)
- 1216 号墓  
土器  
L42 (KN 4357)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙 (UC 5238)
- 1217 号墓  
土器  
L 土器短頸壺 (PhU E1733)  
パレット  
23N (AM 1895.865)
- 1218 号墓  
土器  
B38c (OIC E1793)  
P40b (RM 18.7)
- 1219 号墓  
土器  
B35d (PhU E14850)  
P40a (MM 2260)
- 1220 号墓  
土器  
D16T (UC 5471)  
パレット  
97B (UC 5470)
- 1221 号墓  
土器  
P22 (BM EA65561)  
R53a? (Be 12945)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙 (UC 5239)  
ヘアピン, 象牙 (UC 5240)
- 1222 号墓  
土器  
P15a (MuM 1134)  
P31a (PhU E1795)  
P73 (CNH 31476)?  
P74 (CNH 31477)  
P74 (Be 13083)
- 1223 号墓  
土器  
P1a as (OIC E899)  
パレット  
89 (OIC E893)
- 1224 号墓  
骨・牙製品  
無頸壺, カバ切歯 (AM 1895.928)  
ヘアピン, 象牙 (UC 5241)  
ヘアピン, 象牙 (UC 5242)  
ヘアピン, 象牙 (UC 5243)  
ヘアピン, 象牙 (UC 5244)

ヘアピン, 象牙 (UC 5245)  
 ヘアピン, 象牙 (UC 5246)  
 ヘアピン, 象牙 (UC 5247)  
 ヘアピン, 象牙 (UC 73076a)  
 ヘアピン, 象牙 (MM 1022a)  
 ヘアピン, 象牙 (MM 1022b)  
 骨製品?, 破片 (Be 12865)

そのほか

礫 (UC 36026)

• 1225 号墓

土器

P47a (UCW 13535)

• 1229 号墓

土器

B38c (CB E.855)  
 D3 (BFA 97.88)  
 L40 (PhU E1451)

石製容器

31, 角礫岩 (UC 4383)  
 56, アラバスター (AM 1895.165)

石器

石刃, フリント (UC 4843)  
 石刃, フリント (UC 4843A)

骨・牙製品

棒, 象牙 (UC 6014)  
 棒, 象牙 (UC 6015)

そのほか

マラカイト塊 (UC 4384)

• 1230 号墓

骨・牙製品

ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5249)  
 櫛, 象牙, 破片 (UC 5248)

• 1231 号墓

土器

P74 (RM 18.9)

• 1233 号墓

土器

W25 (LP 130)

石器

魚尾形ナイフ, フリント (LC 56.20.43)  
 ナイフ, フリント (Be 12894)  
 石刃, フリント (UC 4844)  
 石刃, フリント (UC 4845)  
 石刃, フリント (UC 4846)  
 石刃, フリント (UC 4847)  
 石刃, フリント (UC 4848)  
 石刃, フリント (UC 4849)  
 石刃, フリント (UC 4850)  
 石刃, フリント (UC 4851)  
 石刃, フリント (UC 4852)  
 石刃, フリント (UC 4853)  
 石刃, フリント (UC 4854)  
 石刃, フリント (UC 4855)  
 石刃, フリント (UC 4856)

石刃, フリント (UC 4857)  
 石刃, フリント (UC 4858)  
 石刃, フリント (UC 4859)  
 石刃, フリント (UC 4860)  
 石刃, フリント (UC 4861)  
 石刃, フリント (UC 4932)

そのほか

鑿, 銅 (AM 1895.972)  
 錐, 銅 (AM 1895.973)

• 1234 号墓

ビーズ・ペンダント

粘土, カーネリアン, ザクロ石, カンラン  
 石, ファイアンス, 凍石, 角礫岩, 貝 (UC  
 36084)

石器

石刃, フリント (UC 4589)  
 石刃, フリント (UC 4590)  
 石刃, フリント (UC 4591)

骨・牙製品

スプーン, 象牙 (UC 4593)  
 棒, 象牙, 破片 (UC 6023)

そのほか

腕輪, 貝 (UC 4592)  
 赤鉄鉱の塊 (UC 4594)

• 1335 号墓

骨・牙製品

ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5250)  
 板, 穿孔, 骨 (AM 1895.909)

• 1236 号墓

土器

D61 (AM 1895.613)

パレット

89 (RM 18.1)

• 1237 号墓

土器

B53b (PhU E16136)  
 B68b (KN 4316)  
 P47b (UC 4339)  
 R34b (UCW 165180)

パレット

28N (UC 4338)  
 不整形 (UC 4337)

石器

石刃, フリント (UC 4340)

• 1238 号墓

土器

B24b (MaM EA6)  
 B43 (OIC E1794)  
 B53b (CB E819)  
 B53b (KN 4323)  
 P 土器体部片, M292 (UC 36070)

• 1239 号墓

石製容器

3, 角礫岩 (AM 1895.152)

<u>ビーズ・ペンダント</u>	角礫岩 (UC 5183)	貝, カーネリアン, ザクロ石, 岩石水晶, フェイアンス (UC 4507)
<u>そのほか</u>	球, 角礫岩 (UC 5182)	<u>そのほか</u>
• 1240 号墓		指輪, 銅 (UC 4508)
<u>土器</u>	B11a (RM)	腕輪, 象牙, 破片 (UC 4509A)
• 1241 号墓		腕輪, 象牙, 破片 (UC 4509B)
<u>土器</u>	P95a (KN 4353) F31a (AM 1895.682) F31a (BFA 97.76)	• 1249 号墓
<u>石製容器</u>	61, 石灰岩 (MM 2395) 137, 石灰岩 (MM 9440)	<u>土器</u>
<u>石器</u>	ダガー, フリント (UC 4389) ダガー, フリント (MM 2429)	76, 粗粒玄武岩 (AM 1895.174) 103 as, アラバスター (AM 1895.163)
<u>そのほか</u>	メイスヘッド, 角礫岩 (UC 4388)	<u>パレット</u>
• 1242 号墓		46D (MM 5475) 78M (AM 1895.851)
<u>パレット</u>	46N (UC 4732)	<u>そのほか</u>
<u>石器</u>	ナイフ, フリント (MM 5570) 石刃, フリント (UC 4933)	礫 (Be 12918)
• 1245 号墓		• 1250 号墓
<u>骨・牙製品</u>	棒, 象牙, 破片 (UC 6018)	<u>土器</u>
• 1246 号墓		P16 (CNH 31456) 16 (KH 1921.24) R81 (KN 4371) R81 (OIC E827)
<u>土器</u>	B53b (UC 5711) P75B (BoS 173) W2 as (PhU E1628)	<u>そのほか</u>
<u>石製容器</u>	41, 角礫岩, 破片 (UC 4989)	礫 (UC 5974) 礫 (UC 5975)
<u>そのほか</u>	洋ナシ形メイスヘッド (Be 12919) 球, 花崗岩 (UC 5181)	• 1251 号墓
• 1247 号墓		<u>土器</u>
<u>そのほか</u>	筒, ラピスラズリ + 金 (AM 1895.985)	B11d (RM) B47 (MM 3091) P11 (UC 5896) F41 (AM 1895.684)
• 1248 号墓		<u>パレット</u>
<u>土器</u>	L64 (AM 1895.406) L64 (MM 3119)	103D (AM 1895.868) 103D (AM 1895.869)
<u>石製容器</u>	3 アラバスター (AM 1895.194) 45 アラバスター (AM 1895.200) 51 アラバスター (AM 1895.199)	<u>骨・牙製品</u>
<u>パレット</u>	59D (AM 1895.831)	ヘアピン, 象牙 (UC 5255) 櫛, 象牙 (UC 5623) タグ, 骨 (AM 1895.901)
<u>ビーズ・ペンダント</u>		<u>そのほか</u>
		球, 粘土 (UC 5129)
		• 1252 号墓
		<u>土器</u>
		P11 (AM 1895.450)
		• 1253 号墓
		<u>土器</u>
		P40c as, M474 (Be 13076) P64 (AM 1895.401) F83 (AM 1895.515) R81 (Bo 1895.25:53)
		• 1255 号墓
		<u>パレット</u>
		86 as (AM 1895.834)
		• 1256 号墓
		<u>土器</u>
		P46b, M450 (AM 1895.812) L88u (BoS 245)

石製容器 141, 石灰岩 (AM 1895.202)

骨・牙製品  
 ヘアピン, 象牙 (UC 5251)  
 ヘアピン, 象牙 (UC 5252)  
 ヘアピン, 象牙 (UC 5253)  
 ヘアピン, 象牙 (UC 5254)

- 1257 号墓

土器  
 P63 (FW E81.1896)  
 P64? (PhU E1538)  
 F34a (MM 4451)  
 D52 (AM 1895.581)

石製容器  
 42, 粗粒玄武岩(AM 1895.167)  
 61, アラバスター (AM 1895.166)

パレット  
 40D (UC 4276)  
 65 (UC 4275)

ビーズ・ペンダント  
 玉髄 (AM E.E. 494)  
 銀 (AM 1895.987B)

その他  
 メイスヘッド, M9, 石灰岩 (AM 1895.988)  
 スプーン, 泥岩, 把手にビーズ (AM 1895.986)  
 蓋, 銀 (AM 1895.987A)  
 様々な鉱物 (UC 4277)

- 1258 号墓

その他  
 鏝, 銅 (Be 13099)

- 1259 号墓

石器  
 石刃, フリント (UC 4934)

- 1260 号墓

土器  
 B38c (UC 5425)  
 P62 (AM 1895.803)

石器  
 石刃, フリント (UC 5426)  
 石刃, 黒曜石 (UC 5427)

ビーズ・ペンダント  
 ファイアンス, 光沢凍石 (UC 5428)

その他  
 ワイヤー, 銅 (UC 5429)  
 メイスヘッド, M19, 石灰岩 (AM 1895.219)  
 礫 (UC 5976)

- 1262 号墓

石器  
 石刃, フリント (UC 4935)

その他  
 礫 (KN 4287)

- 1263 号墓

土器

P40a (KN 4308)

石製容器  
 158, 角礫岩 (UC 4405)

石器  
 ナイフ, フリント (Be 12907)  
 ナイフ, フリント (BoS 1263)  
 ナイフ, フリント (LC 56.20.28)  
 ナイフ, フリント (UC 4406)

その他  
 礫 (UC 36027)

- 1264 号墓

土器  
 L69 (AM 1895.733)

- 1268 号墓

土器  
 D43, 破片 (AM 1895.595)

ビーズ・ペンダント  
 ペンダント, 玉髄 (AM 1895.989)

- 1269 号墓

土器  
 D21 (AM 1895.619)  
 L2b (EM CG2140)

パレット  
 不整形 (UC 4709)

その他  
 礫 (UC 4709)

- 1270 号墓

パレット  
 82N as (Be 12881)

石器  
 錐, フリント (UC 4468)

その他  
 錐, 銅 (UC 4467)  
 ザクロ石の塊 (UC 4469)

- 1271 号墓

土器  
 P93b (KN 4350)

- 1272 号墓

土器  
 P75 (LP 107)  
 W43 (AM 1895.537)  
 D7b (AM 1895.601)

- 1273 号墓

土器  
 B24b (AM 1895.244)  
 B24b (AM 1895.797A)  
 P40c (PhU E14905)  
 F58a (MM 4505)

骨・牙製品  
 ヘアピン, 象牙 (UC 5256)

- 1274 号墓

土器  
 B57a (AM 1895.258)

- 1275 号墓  
土器  
L10 (AM 1895.407)
- 1277 号墓  
パレット  
破片 (UC 4764)
- 1279 号墓  
土器  
L10 (PhU E1701)  
L57 (AM 1895.640)
- 1281 号墓  
土器  
D21 (PhU E17534)  
L33 (PhU E1674)  
ビーズ・ペンダント  
カーネリアン, 瑪瑙 (UC 4500)  
骨・牙製品  
スプーン, 象牙, 破片 (UC 4501)  
ピン, 象牙, 破片 (UC 4502)
- 1282 号墓  
石製容器  
119, 玄武岩 (UC 4992)
- 1284 号墓  
パレット  
86 (BoS 323)
- 1286 号墓  
そのほか  
ザクロ石の塊 (UC 5121)
- 1287 号墓  
土器  
B53b as (AM 1895.1241)  
P40c (UC 5869)  
P40e (MAA 1898.70)  
W4 (PhU E1633)  
W8 (AM 1895.527)  
D50 (PhU E15733)  
そのほか  
礫 (KN 4279)
- 1288 号墓  
土器  
P22 (PhU E14769)
- 1289 号墓  
パレット  
97 (AM 1895.861)  
ビーズ・ペンダント  
ペンダント, カーネリアン (AM 1895.140)  
そのほか  
礫 (UC 5977)
- 1290 号墓  
土器  
L12b (OIC E916)
- 1291 号墓  
土器  
R96 (MuM 1079)  
石製容器  
109, アラバスター (AM 1895.188)  
パレット  
97E (AM 1895.860)  
不整形, 破片 (UC 4650)  
ビーズ・ペンダント  
カーネリアン, ビーズ (UC 4652)  
骨・牙製品  
スプーン, 骨? (AM 1895.905)  
そのほか  
礫 (UC 4651)  
礫 (UC 5978)
- 1292 号墓  
土器  
F80b as (UC 5893)  
L25b (AM 1895.750)  
パレット  
59B (MM 4593)  
88H as (RM 18.1)
- 1293 号墓  
ビーズ・ペンダント  
カーネリアン, ザクロ石, 凍石 (UC 5026)  
そのほか  
マラカイトの塊 (UC 5126)
- 1294 号墓  
土器  
R62 (AM 1895.558)
- 1295 号墓  
ビーズ・ペンダント  
瑪瑙 (UC 5027)
- 1296 号墓  
そのほか  
礫 (UC 36028)
- L17a (LP 66\*)  
L17a (AM 1895.453)  
L19b (AM 1895.458)  
石製容器  
162 as, アラバスター (AM 1895.205)  
パレット  
92P (KN 4264)  
ビーズ・ペンダント  
ファイアンス, 粘土, カーネリアン, ザクロ石, 黒色凍石, 光沢あり凍石 (UC 5413)  
カーネリアン (CB E.1516)  
骨・牙製品  
腕輪, 象牙, 破片 (UC 5414)  
そのほか  
腕輪, 銅 (UC 5412)  
球, 石灰岩 (UC 5416)  
礫 (UC 5415)

- 1299 号墓  
パレット  
94 (AM 95.863)
- 1337 号墓  
土器  
P46a (MuM 4645)  
パレット  
96U (BoS 313)
- 1338 号墓  
土器  
L55 (AM 1895.705)  
L80 (AM 1895.747)  
ビーズ・ペンダント  
ファイアンス, カーネリアン, 貝 (AM 1895.891)  
骨・牙製品  
腕輪, 亀甲, 破片 (UC 5636)
- 1339 号墓  
土器  
R2a (AM 1895.402)  
石製容器  
49, 花崗岩 (AM 1895.211)
- 1340 号墓  
土器  
L19 (OIC E821)  
石製容器  
坏, シルト岩 (AM 1895.1245)  
パレット  
16C as (Be 12892)
- 1341 号墓  
土器  
W80 (AM 1895.553)
- 1342 号墓  
土器  
L54b (AM 1895.671)  
L54b (AM 1895.673)
- 1343 号墓  
土器  
L34b (AM 1895.643)  
骨・牙製品  
腕輪, 象牙, 破片 (UC 5637)  
腕輪, 象牙, 破片 (UC 5638)
- 大墓地東地区**
- 431 号墓  
土器  
B23a (PhU E1489)  
P15a (UC 5840)  
F31d (KN 4360)
- 481 号墓  
土器  
L36a? (CNH 31483)  
L42 (AM 1895.655)
- 500 号墓  
石器  
石刃, フリント (UC 4904)
- 501 号墓  
土器  
F14 (PhU E14399)
- 504 号墓  
土器  
R90 (MM 4501)
- 505 号墓  
土器  
B 土器深鉢 (BFA 97.79)  
R 土器壺, 底部片, M438 (UC 5825)
- 506 号墓  
土器  
B36 (Be 12996)  
B47 (CNH 31474)  
B74a (UC 5703)  
R94 (OIC E758)
- 507 号墓  
土器  
R1b (MuM 1128)  
R1b (UC 5746)  
石器  
スクレイパー, フリント (UC 4944)
- 509 号墓  
土器  
L17c (BFA 97.126)
- 510 号墓  
土器  
F34a (AM 1895.386)
- 512 号墓  
土器  
W6 (AM 1895.568)  
D8d (MuM 1106)  
D57 (AM 1895.580)  
R23a (UC 4321)  
石製容器  
150/151, 角礫岩 (AM 1895.206)  
パレット  
23P (UC 4324)  
石器  
鎌刃, フリント (UC 4322)  
石刃, フリント (UC 4323)
- そのほか  
礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1172)  
礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1174)  
礫 (RM)  
礫 (Be 12918)  
貝, 破片 (UC 4325)  
木材, 破片 (UC 36098)
- 513 号墓  
土器

- R3c (UC 5749)  
パレット  
60 as (Bo 1896.44:6)
- 514 号墓  
土器  
P40a (AM 1895.1259)
  - 517 号墓  
そのほか  
礫 (UC 5960)
  - 518 号墓  
土器  
P22 (UC 5841)  
P22 (UC 5856)  
P22 (RM)  
P40a (UC 5872)  
P40b (OIC E1832)  
D67c (KN 4387)  
ビーズ・ペンダント  
粘土 (UC 5003)
  - 519 号墓  
土器  
R24 (UC 5768)  
L12c (AM 1895.748)  
パレット  
46W (UC 4726)
  - 521 号墓  
土器  
B39a (OIC E1812)  
P23b as (BM EA67413)  
R 土器無頸壺, 口縁部片, M536 (UC 36069)
  - 524 号墓  
土器  
B1b (OIC E1789)  
B56, M44 + M202 (AM 1895.321)  
D63a (AM 1895.583)  
D63a (PhU E1437)  
D75b (AM 1895.580A)  
L12 (PhU E14805)  
12c (UC 5855)  
パレット  
鳥形 (UC 4698)
  - 525 号墓  
そのほか  
礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1160)
  - 526 号墓  
石器  
石刃, フリント (UC 4906)  
石刃, フリント (UC 4907)  
石刃, フリント (UC 4908)  
石刃, フリント (UC 4909)  
石刃, フリント (UC 4910)
  - 527 号墓  
土器  
R23b (UC 5797)
- R23b (UC 5798)  
R23b (UC 5799)  
R23b (UC 5800)  
そのほか  
礫 (KN 4273)
- 529 号墓  
土器  
P22 (OIC E1609)  
P22 (Bo 1895.25:27)  
N32 (AM 1895.500)  
D67c (BFA 97.119)
  - 530 号墓  
土器  
R23b (KN 4377)  
そのほか  
マラカイト (UC73102)
  - 531 号墓  
そのほか  
礫 (UC 5961)  
礫 (UC 5962)
  - 532 号墓  
土器  
B68a (BFA 97.110)  
P14 (MM 3106)  
P14 (PhU E1687)
  - 533 号墓  
土器  
P46c (AM 1895.427)  
R23b (PhU E15592)  
パレット  
99M (MM 2379)  
そのほか  
礫 (UC 5963)
  - 534 号墓  
土器  
L53 (OIC E767)
  - 535 号墓  
土器  
R34c (OIC E902)
  - 536 号墓  
土器  
P40a (MM 4440)  
F32d as (FW E46.1896)
  - 538 号墓  
土器  
B58a (UC 5700)  
F31c (AM 1895.783)  
L7 (OIC E911)
  - 540 号墓  
土器  
R69b (Be 12963)  
R81, M120 (AM 1895.1242)
  - 545 号墓



- 土器 R67 (LP 134\*)
- 石器 石刃, フリント (UC 4911)
- 546 号墓  
土器 B37a (Bo 1895.25:9)  
P40c (OIC E1824)  
R68 (Be 13049)  
R68 (Be 13067)
  - 548 号墓  
土器 B13a (OIC E1693)
  - 550 号墓  
パレット 35H (Bo 1896.44:3)
  - 551 号墓  
土器 R69b (AM 1895.741)
  - 552 号墓  
土器 D63g, 体部片 (BM EA75157)
  - 554 号墓  
土器 L38 (OIC E828)
  - 555 号墓  
土器 R 土器短頸壺 (PhU E1727)  
そのほか 礫 (UC 5964)
  - 558 号墓  
土器 R34c (UC 5751)
  - 559 号墓  
土器 B74a (OIC E1859)  
D43, 体部片 (BM EA75155)  
L7 as (AM 1895.745)
  - 561 号墓  
土器 B40a (PhU E1545)  
P40a (PhU E1814)
  - 562 号墓  
土器 D43 (MM 11946)  
D59d (AM 1895.1235)
  - 564 号墓  
土器 P11d (OIC E928)  
P22 (UC 5866)  
F31d (AM 1895.370)
  - 565 号墓  
土器 B39a (UC 5694)  
P40a (CNH 31460)  
R38 (Be 13067)
  - 566 号墓  
土器 D59b (UC 5736)  
D80 (AM 1895.609)
  - 569 号墓  
土器 B1c (MM 4503)  
P75d (CB E.865)  
R4 (Be 12976)  
R4 (UC 4678)  
R34c (PhU E1366)  
R34c (PhU E1675)  
R34c (UC 4677)  
L12c (OIC E1745)  
パレット 69M (UC 4676)
  - 571 号墓  
土器 P22 (UC 5848)
  - 572 号墓  
土器 R23a (OIC E1760)
  - 575 号墓  
土器 P40a (AM 1895.447)  
D67c (Be 13047)  
石器 ナイフ, フリント (UC 4913)  
石刃, フリント (UC 4912)  
石刃, フリント (UC 4945)  
スクレイパー, フリント (PhU E1580.1)  
スクレイパー, フリント (PhU E1580.2)  
スクレイパー, フリント (PhU E1580.3)
  - 576 号墓  
土器 P93b (CS JLS.21112)  
N31 (AM 1895.1224)  
パレット 46p (BM EA67708)  
ビーズ・ペンダント 蛇紋岩 (UC 5389)  
ペンダント, 蛇紋岩 (UC 5390)  
蛇紋岩 (UC 5391)
  - 577 号墓  
土器 P40e (BFA 97.97)
  - 578 号墓  
土器 P22? (CB E.883)

- P22 (PhU E1708)
- 581 号墓  
骨・牙製品  
櫛, 象牙 (UC 5625)
  - 582 号墓  
土器  
B62b (AM 1895.1275)  
B62b (PhU E1513)  
P22, 破片 (Be 13016)  
D67c (FW E55.1896)  
パレット  
46M (UC 4725)
  - 583 号墓  
土器  
F15 (OIC E903)
  - 584 号墓  
土器  
P95a (BFA 97.104)  
R81, M77a (Be 13057)
  - 585 号墓  
そのほか  
礫 (UC 5965)
  - 586 号墓  
そのほか  
自然の角, 破片 (UC 5198)
  - 587 号墓  
土器  
P40a (BFA 97.67)
  - 588 号墓  
土器  
P98b (AM 1895.432)
  - 589 号墓  
土器  
D35b or 67c (CB E.1929)  
L16b (Be 12986)
  - 593 号墓  
土器  
P23a (UC 5852)
  - 594 号墓  
土器  
B58a (Bo 1895.25:1)
  - 597 号墓  
土器  
B42b (AM 1895.243)  
B53b (OIC E791)  
P11d (UC 5897)  
P22a (PhU E15572)  
P98a (PhU E1807)  
R22a (UC 5796)  
R81, M444 (Bo 1895.25:52A)
  - 598 号墓

- 土器  
B11f(LP 68\*)  
B 土器破片 (Be 13019)  
P58a (RM 18.8)  
P58a (EM CG2054)  
P85a (CB E.877)
- パレット  
45S (UC 4344)
- 石器  
剥片, フリント (UC 4343)
- 599 号墓  
土器  
B47 (PhU E14379)  
L72 (AM 1895.670)  
そのほか  
石製容器再生破片?, 石灰岩 (UC 36065)
  - 600 号墓  
土器  
P88 (Be 12953)
  - 601 号墓  
パレット  
不整形 (UC 4752)  
そのほか  
礫 (UC 5966)
  - 602 号墓  
石製容器  
H23, 角礫岩 (PhU E1334)  
ビーズ・ペンダント  
カーネリアン (UC 4663)  
ペンダント, カーネリアン (UC 4661)  
ペンダント, カーネリアン (UC 4662)  
そのほか  
重り, 骨 (UC 4660)
  - 603 号墓  
パレット  
46R as (Bo 1896.44:13)
  - 604 号墓  
パレット  
不整形 (CS JLS.21215)
  - 607 号墓  
パレット  
96U (UC 4756)
  - 608 号墓  
石製容器  
43 as, 斑岩 (PhU E1326)  
パレット  
96A (UC 4739A)
  - 609 号墓  
土器  
W43 (CB E.1775)  
L26 (Be 13063)

- 610 号墓  
土器  
D31, 土器片 (IAL 51/200)  
L12c (OIC E1764)  
パレット  
不整形 (UC 4696)
- 611 号墓  
土器  
B53b (AM 1895.253)  
B63b (PhU E14828)  
B74a (PhU E17533)  
L12 (PhU E1683)  
L12 (UC 6060)
- 614 号墓  
土器  
P30 (PhU E1665)  
P30 (PhU E1693)
- 615 号墓  
土器  
L2 (OIC E1763)
- 616 号墓  
土器  
R1b (BFA 97.151)
- 618 号墓  
土器  
P16 (OIC E1603)  
R 土器短頸壺 (PhU E1820)  
L 土器短頸壺 (PhU E1641)
- 619 号墓  
土器  
D81a (AM 1895.622)  
R66 (AM 1895.728)  
R66 (PhU E1681)
- 620 号墓  
土器  
L7b (OIC E1752)
- 624 号墓  
土器  
B11d as (PhU E1690)  
D67c (PhU E1439)  
R3a (UC 5757)  
L12c, M299 as (PhU E1703)  
ビーズ・ペンダント  
ラピスラズリ (UC 5011)  
骨・牙製品  
スプーン, 象牙 (PhU E1177)
- 625 号墓  
土器  
D7b as (CS JLS.21105)  
D8a (AM 1895.608)  
D11 (AM 1895.572)  
D18 (UC 4326)  
D61 (UC 4327)  
R34b (MuM 1129)  
R34c (UC 4328)
- R34c (UC 4329)  
R34c (UC 4330)  
R34c (UC 4331)  
R65 (Be 12930)  
L12b (UC 5993)  
L53a (Be 12944)
- パレット  
45D/E (BoS 336)
- そのほか  
マラカイト塊 (UC 4332)
- 626 号墓  
石器  
鎌刃, フリント (UC 4915)  
石刃, フリント (UC 4916)
- 630 号墓  
土器  
R23a (CNH 31452)  
ビーズ・ペンダント  
ファイアンス (UC 5020)
- 631 号墓  
土器  
B24a (PhU E1517)  
R24 (UC 5397)  
R62 (AM 1895.764)  
パレット  
95H (UC 5930)  
95H as (UC 5929)  
ビーズ・ペンダント  
焼成粘土, 粘土, 貝, シルト岩 (UC 5399)  
焼成粘土, 粘土, 貝, フリント, 雲母 (UC 5400)  
焼成粘土, 粘土, ファイアンス (UC 5401)  
焼成粘土, 土器, 粘土 (UC 5402)
- そのほか  
礫 (UC 5931)  
礫, 泥岩? (UC 5398)  
礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1173)  
礫 (MM 2386)
- 632 号墓  
土器  
D67C, 体部片 (IAL 51/199)  
ビーズ・ペンダント  
石灰岩, カーネリアン, 蛇紋岩 ハトホル頭  
部形 (UC 5100)
- そのほか  
石英岩の塊 (UC 5101)  
マラカイトの塊 (UC 5102)
- 634 号墓  
土器  
L30 (AM 1895.657)
- 636 号墓  
土器  
R22a as (MuM 1134)  
R81 (PhU E1672)
- 638 号墓

- 土器 R34c (CNH 31453)
- そのほか  
未焼成模造鉢, 粘土 (UC 5933)
- 639 号墓  
土器  
P40c (UC 6001)  
P93b (MM 4502)  
D1 (AM 1895.567)  
L 土器 (PhU E14772)
- 石製容器  
192 as, 角礫岩 (LC 1977.109.55)
- そのほか  
礫 (UC 5110)
- 640 号墓  
土器  
P40e (PhU E12231)
  - 642 号墓  
土器  
P22 (Bo 1899.44:37)  
R3a (Be 13086)  
R23a (MuM 1125)  
R23a (UC 5773)
  - 643 号墓  
土器  
D35a (UC 5728)  
D59b (AM 1895.612)  
D67c (LP 106)
- そのほか  
礫 (OIC E795)
- 644 号墓  
土器  
R1b (UC 5745)
- パレット  
61R (Bo 1896.44:5)
- 646 号墓  
土器  
D 土器壺, 体部片 (HM D.1932.287)  
R34c (PhU E1650)
- 石製容器  
模造壺, 石灰岩 (UC 4991)
- そのほか  
礫 (UC 5150)
- 647 号墓  
土器  
D67c, 破片 (PhU E1822)  
L17 (PhU E1722)
  - 648 号墓  
土器  
P40b (PhU E14907)  
P40P (BFA 97.96)  
R23a (OIC E897)
- パレット  
24P (Bo 1896.44:1)
- 649 号墓  
土器  
B66a (MM 4437)
  - 650 号墓  
土器  
N26 (AM 1895.503)
  - 651 号墓  
土器  
P40b (Be 13077)  
W43 (AM 1895.538)
  - 652 号墓  
土器  
R23b (LP 62\*)
  - 653 号墓  
土器  
D56b / 59c, 破片 (CB E.1925a)
- 石製容器  
壺?, シルト岩? (CNH 31451)
- 石器  
ナイフ, フリント, 破片 (UC 4813)
- 654 号墓  
土器  
F19b (AM 1895.365)  
N15 (UC 5724)
  - 655 号墓  
土器  
P11d (UC 5838)  
P47a (PhU E1768)  
P95b (OIC E843)  
P 土器壺, 底部片, M (UC 5822)  
R22a (UC 5752)
- 石器  
石刃, フリント (UC 4838)  
石刃, フリント (UC 4839)
- 656 号墓  
石製容器  
4, 花崗岩 (UC 4987)
  - 657 号墓  
土器  
P95a (個人蔵)  
D32?, 破片 (CB E.1925b)
- そのほか  
敲き石, 花崗岩 (MAA Z17358 B)
- 658 号墓  
土器  
W19 (MuM 1786)
- 石器  
石刃, フリント (UC 4917)
- 骨・牙製品  
腕輪, 亀甲 (UC 4562)  
象牙, 破片 (UC 4560)
- そのほか

- 方鉛鉱の塊 (UC 4561)  
礫 (UC 5967)  
礫 (UC 36013)
- 660 号墓  
石器  
石刃, フリント (UC 4905)  
そのほか  
マラカイトの塊 (UC 5111)
  - 661 号墓  
土器  
P1b (OIC E1709)  
ビーズ・ペンダント  
ファイアンス, カーネリアン, ピンク色石灰岩 (UC 5021)  
石器  
石刃, フリント (UC 4918)
  - 663 号墓  
土器  
P11d (AM 1895.457)  
石器  
魚尾形ナイフ, フリント (UC 4919)
  - 664 号墓  
土器  
B25a (MuM 1076)  
D 土器壺, 体部片 (HM D.1932.287)  
D59c (FW E57.1896)
  - 665 号墓  
土器  
D8d (AM 1895.569)  
R32b (UC 5774)  
L7 (AM 1895.650)  
L7 (PhU E15593)  
石器  
スクレイパー, フリント (UC 4920)  
剥片, フリント (UC 4921)
  - 666 号墓  
土器  
D23b (UC 5732)  
そのほか  
礫 (UC 36014)
  - 667 号墓  
土器  
P22 (OIC E1699)  
L17a (OIC E1734)  
ビーズ・ペンダント  
金, ラピスラズリ, 光沢あり凍石, ファイア  
ンス (UC 5432)  
ラピスラズリ, 斑岩, カーネリアン (UC  
5433 + 5434 + 5435)  
石器  
石刃, フリント (UC 35980)  
剥片, フリント (UC 4922)
  - 669 号墓
- 土器  
B62b (PhU E1466)  
B93B (RM)  
P22 (AM 1895.1257)  
R38 (PhU E1688)  
R75 (UC 5788)
- 673 号墓  
土器  
R1b (Be 13087)
  - 674 号墓  
石製容器  
アラバスター (PhU E1318)
  - 675 号墓  
土器  
R81, M395 (KN 4370)  
石器  
石刃, フリント (UC 4923)  
そのほか  
礫 (UC 36015)
  - 676 号墓  
土器  
B75b (FW E22.1896)  
R69c (BFA 97.105)
  - 677 号墓  
土器  
P75 (UC 5883)  
L28b (BFA 97.146)  
骨・牙製品  
象牙製品, 破片 (UC 5681)
  - 678 号墓  
土器  
B53a (EM CG2102)
  - 679 号墓  
土器  
P22 (MaM EA10)  
W19 (AM 1895.536)  
W43 (AM 1895.530)  
R23b (UC 6065)  
R34c (CNH 31455)  
R34c (UC 4668)  
R69b (MM 10899)  
L7b (OIC E1718)  
ブレットモールド (LP 145)  
バレット  
46N (LC 56.20.457B)  
動物形, 破片 (UC 4667)  
骨・牙製品  
ゲーム駒, 骨 (AM 1895.959)  
ゲーム駒, 骨 (AM 1895.144b-1)  
ゲーム駒, 骨 (AM 1895.144b-2)  
ゲーム駒, 骨 (AM 1895.144b-3)  
ゲーム駒, 骨 (AM 1895.144b-4)  
ゲーム駒, 骨 (AM 1895.144b-5)  
ゲーム駒, 骨 (AM 1895.144b-6)  
ゲーム駒, 骨 (AM 1895.144b-7)

- 棒, 象牙: 5 点 (UC 6021)
- L17a (OIC E1735)  
L17a (PhU E1697)
- 680 号墓
    - 土器
      - P40a (CS JLS.21118)
      - P57a (PhU E1764)
    - 石製容器
      - 15/19, アラバスター (AM 1895.204)
    - 石器
      - 石刃, フリント (UC 4926)
      - 剥片, フリント (UC 4924)
      - 剥片, フリント (UC 4925)
    - そのほか
      - 礫 (UC 36016)
  - 682 号墓
    - 土器
      - R26 (UC 5777)
  - 683 号墓
    - 土器
      - W23 (AM 1895.524)
      - W23 (CB E1793)
      - R1 (UC 5782)
      - R 土器蓋 (PhU E1719)
    - 石製容器
      - 46, 石灰岩 (LC 1977.109.60)
    - パレット
      - 38H (KN 4262)
      - 38H as (LI L.1091)
    - 石器
      - ナイフ形石器, フリント, 破片 (PhU E2011)
      - 石刃, フリント (UC 4927)
      - 錐, フリント (UC 4928)
  - 684 号墓
    - 土器
      - P40b, M2 (AM 1895.368)
      - P57a (AM. 1895.414)
      - P95B (CB E875)
      - F44 (AM 1895.509)
      - F80a (AM 1895.512)
      - D55, 体部片 (IAL 51/205)
    - 石器
      - 石刃, フリント (UC 4840)
      - 石刃, フリント (UC 4841)
      - 石刃, フリント (UC 4842)
    - そのほか
      - 礫, 赤鉄鉱 (UC 5164)
  - 685 号墓
    - 土器
      - B42b (UC 5696)
  - 686 号墓
    - 土器
      - R69b (OIC E750)
      - L7 (AM 1895.716)
  - 687 号墓
    - 土器
  - 688 号墓
    - 土器
      - P22? (PhU E14795)
      - D67c (NC 1919.58.41.1)
      - R3 (UC 5759)
      - R69b (KN 4367)
  - 689 号墓
    - 土器
      - P40b (FW E62. 1896)
      - P40b (LP 92)
      - L16, M192 as (AM 1895.756)
  - 690 号墓
    - 土器
      - D50 (AM 1895.593)
      - L12c (OIC E1635)
    - ビーズ・ペンダント
      - カーネリアン, 象牙, ラピスラズリ, 水晶, マラカイト (Be 12843)
      - ペンダント, アラバスター (UC 5393)
    - 骨・牙製品
      - 腕輪, 貝, 破片 (UC 5394)
      - 腕輪, 貝, 破片 (CB E.1296)
      - 腕輪, 亀甲, 破片 (UC 5395)
    - そのほか
      - メイスヘッド, 石灰岩 (UC 5392)
      - マラカイト (UC 5396)
  - 692 号墓
    - そのほか
      - 枝, 破片 (UC 36100)
      - 礫 (OIC E804)
  - 693 号墓
    - 土器
      - P22 (RM)
    - ビーズ・ペンダント
      - 貝 (CB E.1313)
  - 694 号墓
    - 土器
      - P95a (個人蔵)
    - 石器
      - 剥片, フリント (UC 4553)
      - 剥片, フリント (UC 4554)
    - ビーズ・ペンダント
      - クレオパトラ貝: 複数 (UC 4555)
  - 695 号墓
    - 土器
      - P22 (BMC P.1838)
      - P22 (UC 5847)
      - P40P (CB E.869)
      - R3a/b (LP 6170)
    - 石製容器
      - 197 as (CS JLS.21099)
      - カエル形短頸壺, 石灰岩 (AM 1895.216)
    - そのほか

- ダチョウの卵, 破片 (UC 5669)
- 696 号墓  
土器  
B58a (Be 13010)  
骨・牙製品  
櫛, 象牙製 (PhU E.1168)
  - 698 号墓  
土器  
B 土器短頸壺 (PhU E14923)  
石器  
石刃, フリント (UC 4576)  
骨・牙製品  
腕輪, 亀甲, 破片 (UC 4575)  
そのほか  
礫 (UC 4574)  
ダチョウの卵, 破片 (UC 4573)  
貝 (UC 36078)
  - 702 号墓  
土器  
P22 (OIC E1608)  
P22 (UC 5439)  
P42 (PhU E14897)  
R34c (UC 5438)  
R75 (AM 1895.647)  
L7a (Be 12978)  
L7b (OIC E822)  
L7b? (PhU E14791)  
L12c (Be 13053)  
そのほか  
斧, 銅 (UC 5437)
  - 703 号墓  
土器  
W14 (AM 1895.523)  
R85g (UC 5791)
  - 704 号墓  
ビーズ・ペンダント  
ファイアンス, 凍石, カーネリアン, 石灰岩 (UC 5022)
  - 706 号墓  
パレット  
87F (Be 12890)  
そのほか  
礫 (UC 36017)
  - 707 号墓  
土器  
L 長頸壺? (PhU E1632)
  - 710 号墓  
土器  
R69b (KN 4364)
  - 711 号墓  
そのほか  
衣服, 粉状の破片 (UC 5041)

- 712 号墓  
土器  
P58a (MM 3082)  
R44 as, M519 (UC 5786)
- 714 号墓  
土器  
P74 (Be 13082)  
W42 (AM 1895.519)
- 716 号墓  
土器  
P56a (LP 100\*)  
P56a (PhU E1751)  
L64 (Be 13069)
- 721 号墓  
土器  
D67c (MM 5932)  
そのほか  
小像, タカ, 石灰岩 (AM 1895.136)  
小像, タカ, 鉛, 破片 (AM 1895.137)  
小像, セト動物, 石灰岩 (AM 1895.138)  
小像, ライオン, 石灰岩 (AM 1895.144a)
- 722 号墓  
土器  
R23a (UC 5771)
- 723 号墓  
土器  
P16 (UC 5843)  
P40a (CB E.868)  
P93d (CB E.876)  
ビーズ・ペンダント  
粘土, 貝 (UC 4993)  
粘土, 貝 (UC 4994)  
粘土, 貝 (UC 4995)  
粘土, 貝 (UC 4996)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙 (UC 5215)  
そのほか  
糸, 金 (UC 5128)  
マラカイトの塊 (UC 4998)  
瑪瑙の塊 (UC 4998)  
貝: 2 (UC 4997)
- 724 号墓  
土器  
P73 (LP 108\*)  
そのほか  
把手?, カバ牙 (AM 1895.907)
- 726-727 号墓  
土器  
B75b (OIC E1854)  
D51 (PhU E1396)
- 730 号墓  
土器  
D62 (PhU E14825)  
R34c (UC 5754)

- R66 (AM 1895.737)  
L53K as (Be 12962)
- 731 号墓  
土器  
P23a (OIC E1973)  
P31b (PhU E1756)  
P57a (LP 101)  
R66 (AM 1895.695)
  - 732 号墓  
土器  
P22 (PhU E14794)  
パレット  
57H (OIC E892)
  - 733 号墓  
骨・牙製品  
ヘアピン, 骨 (CB E1305)
  - 734 号墓  
土器  
R69c (AM 1895.723)
  - 735 号墓  
土器  
P40c (BC 941.63)
  - 737 号墓  
土器  
B27a (FW E26.1896)
  - 739 号墓  
土器  
B58a (OIC E1955)
  - 741 号墓  
土器  
R66 (AM 1895.767)
  - 742 号墓  
土器  
D17a (MM 3754)
  - 743 号墓  
石製容器  
18, 石灰岩 (AM 1895.157)  
18, 石灰岩 (MM 1011)  
43, 石灰岩 (UC 4379)  
パレット  
魚形 (Be 12885)  
骨・牙製品  
スプーン, 骨 (UC 4380)  
石器  
ナイフ, 黒曜石 (UC 4385)  
そのほか  
マラカイト塊: 複数 (UC 4381)  
レジン (UC 36090)
  - 744 号墓  
土器  
P22 (PhU E1775)
  - 746 号墓  
土器  
B62b (PhU E14875)
  - 747 号墓  
土器  
B74b (CNH 31467)  
B74b (PhU E14856)
  - 749-750 号墓  
土器  
P81b (AM 1895.1236)  
L53 (Be 12974)  
L53 (KN 4383)
  - 751 号墓  
土器  
P11a (OIC E1691)
  - 753 号墓  
土器  
R90 (LP 96)  
石器  
ナイフ形石器 (PhU E1114)
  - 755 号墓  
そのほか  
礫 (UC 5151)
  - 758 号墓  
石製容器  
アラバスター, 皿 (CB E.1970)
  - 760 号墓  
石製容器  
38 as (CS JLS.21216.2)
  - 762 号墓  
土器  
P16 (UC 5850)
  - 767 号墓  
そのほか  
貝 (UC 36082)
  - 771 号墓  
そのほか  
礫 (UC 5157)
  - 773 号墓  
土器  
R23b (UC 5763)
  - 778 号墓  
パレット  
95H as (UC 4741)
  - 779 号墓  
土器  
L16N? (CB E.1762)  
石器



- ナイフ, フリント (UC 4946)  
ナイフ, フリント (UC 4947)
- 780 号墓  
土器  
L2a (OIC E1619)
  - 786 号墓  
石器  
石核 (OIC E859)
  - 789 号墓  
石製容器  
112 as (CS JLS.21100)
  - 791 号墓  
そのほか  
礫 (UC 36019)
  - 792 号墓  
土器  
B74 (UC 6067)
  - 793 号墓  
土器  
R3a (OIC E937)
  - 795 号墓  
土器  
B76 as (OIC E867)
  - 799 号墓  
土器  
L36a (OIC E824)  
パレット  
57O (UC 4728)
  - 800 号墓  
土器  
D8 (BoS 220)  
D67J, 土器片 (MTS)
  - 801 号墓  
土器  
P 土器壺 (PhU E1519)
  - 802 号墓  
石製容器  
破片 (IAL 51/208)?
  - 804 号墓  
土器  
D43 (UC 6069)  
D43 (UC 5922)  
R23b (UC 5923)  
L12d (CB E.1749)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙 (MM 1023a)  
ヘアピン, 象牙 (MM 1023b)  
そのほか  
方鉛鉱の塊 (UC 5084)  
マラカイトの塊 (UC 5084)
  - 805 号墓  
土器  
B 土器, 破片, M407 (AM 1895.1216)
  - 807 号墓  
土器  
D63a? (PhU E14759)  
R68 (CB E.889)  
R68 (KN 4368)  
R68 (PhU E14468)  
石器  
石刃, フリント (UC 4814)  
そのほか  
鑿, 銅 (UC 5073)  
ナイフ, 銅 (AM 1895.970)
  - 809 号墓  
そのほか  
礫 (UC 5968)
  - 810 号墓  
土器  
W19 (LP 129\*)  
D43 (CB E.1931)
  - 812 号墓  
土器  
P22 (UC 5859)  
W19 (PhU E1656)  
R74 (AM 1895.714)  
そのほか  
砥石, シルト岩 (UC 6223)
  - 813 号墓  
パレット  
14D as (PhU E1232)
  - 814 号墓  
土器  
D20 (AM 1895.614)  
L16 (UC 5808)  
そのほか  
礫 (PhU E1211A)  
礫 (PhU E1211B)
  - 815 号墓  
土器  
R22a (UC 5767)
  - 816 号墓  
土器  
R34c (PhU E14420)  
パレット  
14N (AM 1895.842)  
石器  
鎌刃, フリント (UC 6237)
  - 817 号墓  
土器  
L16 (PhU E1686)

- 818 号墓  
土器  
D4b (AM 1895.616)  
R1 (UC 5762)  
R1 (UC 5748)  
R1 (FW E12.1895)  
R3a (OIC E1631)  
その他  
礫 (UC 36020)?
- 820 号墓  
土器  
R69b (PhU E14455)  
R69b (OIC E748)  
皿, 土器 (LP 69\*)  
皿, 土器 (LP 70\*)  
石製容器  
49, 角礫岩 (UC 4977)
- 822 号墓  
土器  
R94 (AM 1895.703)  
ビーズ・ペンダント  
金, ラピスラズリ, カーネリアン, 凍石 (AM 1895.883)
- 823 号墓  
土器  
B46 (MM 4444)  
P95a (LP 141)  
R69c (AM 1895.730)
- 824 号墓  
土器  
B11f (OIC 924)  
R34a (UC 5776)  
ビーズ・ペンダント  
カーネリアン (UC 5024)  
骨・牙製品  
スプーン, 象牙, 破片 (CB E.1302)  
その他  
メイスヘッド模造品, 円盤形, 白亜 (AM 1895.147)  
礫 (UC 36021)
- 825 号墓  
土器  
P95a (個人蔵)  
その他  
礫 (UC 5969)
- 826 号墓  
土器  
P11a (MH 1909.23A)  
R23a (LP 6250)  
R23a (OIC E908)  
R23a (PhU E14789)  
R23a (UC 4646)  
パレット  
不整形 (UC 4645)
- 827 号墓
- 土器  
D8c (PhU E15731)  
R66 (Be 12939)  
R69b (AM 1895.722)  
L53a (PhU E1629)
- 828 号墓  
土器  
B11f (LP 71\*)  
R67c (個人蔵)
- 829 号墓  
土器  
F31c (AM 1895.369)  
D7a (PhU E14826)  
骨・牙製品  
腕輪, 象牙, 破片 (UC 5628)
- 830 号墓  
土器  
P 土器底部片 (AM 1895.1234)  
L17 (OIC E786)  
パレット  
88H (RM 18.1)
- 831 号墓  
土器  
B53b (PhU E17541)  
P22 (OIC E1719)
- 834 号墓  
パレット  
88D (UC 4703)
- 836 号墓  
パレット  
32S (MM 4592)  
ビーズ・ペンダント  
カーネリアン, 光沢凍石, ザクロ石, 水晶, 貝 (UC 5440)  
カーネリアン, 光沢凍石, ザクロ石, 水晶, 貝 (UC 5441)  
カーネリアン, 光沢凍石, ザクロ石, 水晶, 貝 (UC 5442)  
カーネリアン, 光沢凍石, ザクロ石, 水晶, 貝 (UC 5443)  
カーネリアン, トルコ石, ラピスラズリ, 方解石, ザクロ石, 蛇紋岩 (AM 1895.877)  
その他  
ナイフ, 銅 (AM 1895.968)  
ナイフ, 瑪瑙 (UC 5444)  
ナイフ, 瑪瑙 (UC 5445)  
ナイフ, 瑪瑙 (UC 5446)  
ナイフ, 瑪瑙 (UC 5447)  
ナイフ, 瑪瑙 (UC 5448)  
マラカイト・レジンの塊 (UC 5449)  
マラカイト・レジンの塊 (UC 5450)
- 839 号墓  
土器  
L 土器短頸壺 (PhU E1732)

- 840 号墓  
土器  
D43 (MM 3133)
- 841 号墓  
土器  
P75 (MAA Z16778 A)
- 842 号墓  
土器  
P22 (OIC E1762)  
D61 as (FW E.P.254)
- 843 号墓  
土器  
R66 (AM 1895.740)
- 844 号墓  
土器  
B57b (AM 1895.1237)  
P22 (UC 5860)  
P57a (KN 4339)  
P57a (LP 85)  
パレット  
88M (Bo 1896.44:7)
- 846 号墓  
ビーズ・ペンダント  
カーネリアン (UC 5025)
- 847 号墓  
パレット  
19 as (CS JLS.21214)
- 848 号墓  
パレット  
隅丸長方形 (UC 4761)
- 849 号墓  
その他  
礫 (UC 36022)
- 851 号墓  
土器  
P11 (UC 5837)  
W14 (UC 5717)  
W19 (UC 5718)  
R69a? (Be 12942)  
R69b (BoS 260)  
R69b (BoS 264)  
R69c? (KN 4365)
- 852 号墓  
土器  
D43 (CB E.1715)
- 854 号墓  
土器  
F31b as (UC 6064)  
R34c (OIC E898)
- 860 号墓  
土器
- 862 号墓  
土器  
P23a (AM 1895.678)  
P23a (OIC E1646)  
P82b (PhU E1763)  
W41 (AM 1895.532)
- 865 号墓  
土器  
R57c (OIC E752)
- 866 号墓  
土器  
P93b (KN 4356)
- 867 号墓  
土器  
R75 (LP 97)  
L16b (BMC P.1844)  
パレット  
82H (MM 4599)  
石器  
石刃, フリント (UC 4815)  
石刃, フリント (UC 4816)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 骨 (CB E.1310B)  
ヘアピン, 骨, 破片 (Be 12864)  
ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5233)  
その他  
ザクロ石の塊 (UC 5115)  
礫 (UC 5970)  
礫 (UC 5971)  
礫 (UC 36023)
- 868 号墓  
土器  
B35a (UC 5693)  
B47 (FW E27.1896)
- 869 号墓  
パレット  
57H (UC 4730)  
ビーズ・ペンダント  
ファイアンス (UC 4569)  
骨・牙製品  
指輪, 骨 (UC 4572)  
その他  
マラカイト, 破片 (UC 4570)  
礫 (UC 4571)  
角 (CB E.1318)
- 870 号墓  
土器  
P22 (PhU E1776)  
パレット  
67H as (Bo 1896.44:8)
- P46a (PhU E1805)  
パレット  
魚形, 破片 (UC 4729)

- 871 号墓  
パレット  
88M (OIC E889)  
骨・牙製品  
腕輪, 象牙, 破片 (UC 5631)  
腕輪, 貝 (UC 5630)
- 873 号墓  
土器  
R24a (MH 1909.17.A)
- 874 号墓  
土器  
F14 (AM 1895.679)
- 875 号墓  
土器  
B57b? (PhU E14854)  
B79a (MuM 1874)  
P85c as (AM 1895.648)
- 876 号墓  
そのほか  
メイスヘッド, 閃緑岩 (CNH 31550.7)
- 877 号墓  
石製容器  
102, 玄武岩, 破片 (UC 4986)
- 879 号墓  
土器  
B25h?, M12 (UC 5899)  
B41? (KN 4314)  
B72a (PhU E14924)
- 880 号墓  
土器  
B58c (MuM 1088)
- 881 号墓  
土器  
P22 (AM 1895.560)  
P22 (MAA 1898.73)
- 883 号墓  
そのほか  
敲き石, 玄武岩 (MAA Z17358 A)
- 884 号墓  
土器  
L34a as (OIC E847)  
パレット  
103N (UC 4738)
- 886 号墓  
パレット  
天然の板 (UC 4731)
- 887 号墓  
土器  
B47 as (BM EA67419)
- 891 号墓  
骨・牙製品  
腕輪, 象牙 (UC 5632)
- 906 号墓  
土器  
P8a (AM 1895.429)
- 920 号墓  
パレット  
46M, 破片 (OIC E875)
- 924 号墓  
パレット  
86 (UC 4750)
- 934 号墓  
パレット  
楕円形, 穿孔有り (UC 4753)
- 941 号墓  
土器  
P46a as (UC 5887)
- 961 号墓  
土器  
L 土器土器片 (PhU E1822)
- 964 号墓  
石器  
鎌刃, フリント (UC 4914)  
そのほか  
礫 (UC 36024)
- 973 号墓  
パレット  
不整形 (UC 4762)
- 989 号墓  
土器  
B56 as (OIC E1823)
- 1000 号墓  
土器  
P4? (AM 1895.804)
- 1001 号墓  
土器  
P93b (LP 140\*)  
L53a (AM 1895.784)
- 1002 号墓  
土器  
R75 (Be 13062)  
パレット  
57? (BoS 327)
- 1004 号墓  
土器  
W19 (BMC P.1794)?
- 1007 号墓

- 土器  
P98b (MM 3131)  
P 土器底部片, M448 (AM 1895.814)
- 石製容器  
26, 大理石 (Be 13095)  
59, 角礫岩 (OIC E934)
- ビーズ・ペンダント  
額ペンダント, 貝 (UC 5661)
- 1010 号墓  
土器  
P57a (MM 3115)  
P57a (OIC E772)  
R 土器短頸壺 (PhU E1637)
  - 1014 号墓  
土器  
F85a (UC 5937)  
D12H as (LP 115\*)
  - 1016 号墓  
土器  
P40e (BMC P.1790)
  - 1018 号墓  
土器  
P40e (BC 915.63)  
P40e (BoS 171)  
P95b (BC 2842.64)
- 石製容器  
91, アラバスター (KN 4294)
- 骨・牙製品  
腕輪, 象牙 (UC 5635)
- 1019 号墓  
土器  
F58a (MM 3114)  
F58a (UC 5742)
  - 1020 号墓  
土器  
D62 (UC 5734)
  - 1021 号墓  
土器  
P57b (AM 1895.422)
- 石製容器  
61, 石灰岩 (AM 1895.215)
- 1022 号墓  
土器  
P11a (FW E51.1896)
  - 1024 号墓  
土器  
B22d (OIC E9470)
  - 1025 号墓  
土器  
F31b (MM 3107)
- 石製容器  
36, 角礫岩 (UC 4979)
- パレット  
87P (UC 4708)
- 1027 号墓  
土器  
B25e as (OIC E9468)
  - 1028 号墓  
土器  
D17a? (KN 4391)
  - 1033 号墓  
土器  
L53a (AM 1895.662)
- 石製容器  
54, 角礫岩 (Be 12927)
- 1034 号墓  
石製容器  
61, 石灰岩 (UC 4988)  
破片, 石灰岩 (CB E664)
  - 1037 号墓  
土器  
P4 (BFA 97.131)
- ビーズ・ペンダント  
アメジスト (AM 1895.881)
- 骨・牙製品  
腕輪, 象牙, 破片 (UC 5085)
- 1038 号墓  
土器  
P40c (OIC E823)  
P40c (PhU E1750)  
F81b (AM 1895.516)
  - 1039 号墓  
パレット  
46R as (RM)
- 石器  
石刃, フリント (LC 56.20.25)  
石刃, フリント (MM 5571)  
石刃, フリント (UC 4929)
- 1040 号墓  
そのほか  
マラカイトの塊 (UC 5118)
  - 1041 号墓  
土器  
P22 (AM 1959.275)
- 石器  
石刃, フリント (UC 4930)  
石刃, フリント (UC 4931)
- 1047 号墓  
土器  
D43 (BoS 218)
  - 1048 号墓  
石器

- 剥片, フリント (UC 6239)
- 1049 号墓  
土器  
R47 (UC 5891)
  - 1065 号墓  
土器  
R85S, M95 (Be 13058)
  - 1080 号墓  
土器  
L 土器体部片 (BM EA66035)
  - 1083 号墓  
土器  
B78c (LC 57.178.134)
  - 1084 号墓  
そのほか  
礫 (OIC E806)
  - 1086 号墓  
そのほか  
礫 (MM 8365)
  - 1094 号墓  
土器  
B47 (MuM 1791)
  - 1099 号墓  
パレット  
84H (UC 5790)
  - 1101 号墓  
土器  
パレット  
P40b (PhU E14898)  
82H (MM 4599)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙 (UC 5234)  
そのほか  
マラカイトの塊 (UC 5124)
  - 1103 号墓  
土器  
骨・牙製品  
P1a as (AM 1895.805)  
ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5120)  
そのほか  
マラカイトの塊 (UC 5119)  
衣服, 破片 (UC 5042)
  - 1104 号墓  
そのほか  
礫 (Be 12918)
  - 1106 号墓  
土器  
R75 (PhU E14437)
  - 1108 号墓  
土器  
B 土器鉢 (PhU E14821)  
F58a (OIC E858)  
D17a (AM 1895.685)  
R55e as (MaM EA315)  
そのほか  
礫 (UC 5152)
  - 1112 号墓  
土器  
R69d as (UC 6066)  
パレット  
57B (UC 4743)
  - 1113 号墓  
パレット  
97B (UC 4758)
  - 1135 号墓  
土器  
礫 (UC 36025)
  - 1162 号墓  
石製容器  
33, 粗粒玄武岩 (AM 1895.168)
  - 1187 号墓  
石器  
スクレイパー, フリント (UC 4948)
  - 1195 号墓  
パレット  
不整形, 破片 (UC 4771)
  - 1298 号墓  
土器  
B53c (CNH 31482)  
P14 (PhU E12240)  
W2a (AM 1895.550)  
石製容器  
14, アラバスター (Be 13098)  
23, 蛇紋岩 (AM 1895.156)  
角礫岩, 破片 (IAL 51/206)  
石器  
ナイフ, フリント (UC 4821)  
そのほか  
斧, 銅 (Be 13099)
  - 1302 号墓  
石器  
石刃, フリント (UC 4936)
  - 1303 号墓  
土器  
B75b (BoS 189)  
P22? (LP 59\*)  
L7 (MF 1937.1977)  
L7 (MM 4483)  
石器  
石刃, フリント (UC 4937)

- 石刃, フリント (UC 4938)  
石刃, フリント (UC 4939)  
石刃, フリント (UC 4940)
- そのほか  
ヤギの角? (UC 5682)
- 1304 号墓  
そのほか  
貝 (UC 5143)
  - 1305 号墓  
土器  
B29a (KN 4310)
  - 1306 号墓  
パレット  
48 as (Be 12888)  
そのほか  
礫 (Be 12918)
  - 1307 号墓  
土器  
B47 (OIC E1773)
  - 1308 号墓  
そのほか  
頭蓋骨, 髪あり (UC 5043)
  - 1309 号墓  
土器  
P22 (PhU E14953)  
P54 (Be 12965)  
F24b (AM 1895.387)  
石器  
スクレイパー, フリント (UC 4823)  
搔器, フリント (AM 1895.1132)  
石刃, フリント (UC 4822)
  - 1310 号墓  
石器  
鎌刃, フリント (UC 5280)
  - 1311 号墓  
土器  
B 土器短頸壺 (PhU E1474)  
P23a (Be 13075)
  - 1312 号墓  
土器  
P82c (AM 1895.373)  
P93b (LP 142\*)
  - 1314 号墓  
そのほか  
礫 (UC 36029)
  - 1316 号墓  
石器  
石刃, フリント (UC 4941)
  - 1317 号墓
- 土器  
B35b (OIC E1779)  
B74a? (PhU E12245)  
B 土器, 破片, M515 (AM 1895.1222)
- 1318 号墓  
土器  
B58b (PhU E14817)
  - 1320 号墓  
土器  
B47 (AM 1895.289)
  - 1321 号墓  
土器  
B74a (PhU E12221)
  - 1322 号墓  
土器  
D31L as (FW E59.1896)  
パレット  
91R (AM 1895.830)
  - 1324 号墓  
土器  
B57b (PhU E14862)  
B57b (PhU E14925)
  - 1325 号墓  
土器  
R23a (AM 1895.755)
  - 1327 号墓  
土器  
P51 (AM 1895.408)
  - 1329 号墓  
土器  
B54b (Be 12958)  
P70 (BFA 97.68)  
パレット  
38H (UC 4734)  
骨・牙製品  
人形, カバ牙 (AM 1895.130)  
そのほか  
人形, アラバスター (AM 1895.131)
  - 1330 号墓  
ビーズ・ペンダント  
ファイアンス, カーネリアン (UC 5001)
  - 1332 号墓  
土器  
B11f (UC 5917)  
石器  
魚尾形ナイフ?の剥片, フリント (UC 5918)
  - 1333 号墓  
そのほか  
礫 (UC 5165)
  - 1334 号墓

ビーズ・ペンダント

額ペンダント, 貝 (Be 12862)

- 1335 号墓

土器

B74b (UC 5706)

そのほか

礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1169)

- 1336 号墓

土器

B37a (OIC E771)  
B78c (OIC E1802)

- 1345 号墓

土器

B35a (FW E25.1896)  
B35d (PhU E1471A)  
B35d? (PhU E1471B)

石器

ナイフ, フリント (UC 4235)  
ナイフ, フリント (UC 4236)

骨・牙製品

鈎, 骨 (UC 4234)

そのほか

ヘアピン, 銅 (UC 4237)  
鑿, 銅 (MM 1054)  
鑿, 銅 (MM 2431)  
鈎, 銅 (MM 2432)  
ヘアピン, 銅 (MM 1050)

そのほか

編み物 (UC 4238)

- 1347 号墓

土器

B63a, M (OIC E1841)

パレット

46R (UC 4735)

石器

ナイフ, フリント (LC 56.20.27)

- 1348 号墓

土器

B25g (PhU E14883)

石器

魚尾形ナイフ, フリント, 破片 (KN 4254)

骨・牙製品

タスク, 象牙 (UC 5199)  
腕輪, 象牙 (UC 5668)

- 1349 号墓

土器

P22? (OIC E870)

パレット

97B (UC 4757)

そのほか

筒, ラピスラズリ (AM 1895.985)

- 1351 号墓

土器

P69a (AM 1895.448)

- 1352 号墓

土器

P75 (UC 5884)

- 1353 号墓

パレット

亀形 (UC 6035)

ビーズ・ペンダント

凍石 (UC 5122)

そのほか

レジン (UC 5123)  
貝 (UC 5147)

- 1356 号墓

土器

B35b (CNH 31462)

- 1358 号墓

土器

B27c (PhU E16108)  
B62b (AM Loan 400A)  
P23c as (Bo 1895.25:31)  
P40b (UC 5871)

- 1359 号墓

土器

P15a (OIC E1690)  
P54 (UC 5877)  
F51a (PhU E1547)

- 1361 号墓

土器

P94a (PhU E1787)

そのほか

土製ポート (AM 1895.777)  
土製ポート (AM 1895.778)  
土製ポート (AM 1895.779)

- 1361 号墓

土器

P77 (AM 1895.789)

- 1364 号墓

土器

B74a (AM 1895.287)

- 1366 号墓

土器

P33 (AM 1895.425)  
R81 (Be 13006)

- 1367 号墓

土器

B74a (UC 5704)  
F19a (AM 1895.364)

- 1368 号墓

パレット

38H (OIC E882)

- 1369 号墓



- 土器  
B74a (PhU E14819)
- 1370 号墓  
土器  
B57a (CB E.1756)
  - 石器  
ダガー, フリント (UC 4949)
  - 1372 号墓  
土器  
B47 (AM 1895.238)
  - そのほか  
礫 (UC 36030)
  - 1373 号墓  
土器  
B11f (FW E38.1896)  
B56 (KN 4309)
  - 1374 号墓  
土器  
B75b (OIC E1833)  
B75b (AM 1895.291)  
P22 (PhU E14810)
  - 石器  
石刃, フリント (Be 12905)
  - 1375 号墓  
土器  
B57b (OIC E1952)
  - 1376 号墓  
土器  
B94b (MM 3102)
  - 石器  
石刃, フリント (UC 4824)
  - 1377 号墓  
土器  
D31a (KN 4389)  
R34a (UC 5775)
  - そのほか  
礫 (UC 36031)
  - 1378 号墓  
土器  
B74c (OIC E1655)  
D4a (Be 13055)
  - パレット  
不定形, 線刻装飾 (Be 12877)
  - そのほか  
礫 (UC 5153)
  - 1379 号墓  
土器  
B62b (AM 1895.300)  
B62b, M381 (AM 1895.1256)
  - 1380 号墓  
土器  
B 土器, 破片, M457 (AM 1895.1215)
  - 1381 号墓  
土器  
B38a (UC 4411)  
P40b (PhU E14895)
  - そのほか  
ピン, 銅 (UC 4410)
  - 1382 号墓  
土器  
B75a (PhU E14886)
  - 1384 号墓  
ビーズ・ペンダント  
額ペンダント, 貝 (UC 5663)
  - 1385 号墓  
土器  
F5a (UC 5921)
  - 石器  
ナイフ, フリント (MM 5572)  
ナイフ, フリント (UC 5919)  
ナイフ, フリント (UC 5920)
  - 1386 号墓  
そのほか  
礫 (Be 12918)
  - 1387 号墓  
土器  
B22 (BMC P.1839)
  - パレット  
95H (UC 4742)
  - そのほか  
礫 (KN 4283)  
礫 (UC 36032)
  - 1388 号墓  
土器  
B77d as (OIC E833)  
P40a (AM 1895.1263)
  - 石器  
魚尾形ナイフ, フリント (AM 1895.1001)
  - そのほか  
枝, 破片 (UC 36099)
  - 1389 号墓  
土器  
B53b, M47 (AM 1895.314)
  - 1391 号墓  
土器  
B12 (OIC E1707)
  - 1392 号墓  
土器  
P23c (BC 934.63)
  - 石製容器  
56, 玄武岩 (UC 4973)
  - 1394 号墓

土器

L12b (UC 5785)

- 1395 号墓

土器

B74c (BX 1395)  
C44 (AM 1895.492)

- 1396 号墓

土器

P40c (AM 1895.454)

- 1398 号墓

土器

B35d (OIC E1772)

- 1400 号墓

土器

B54b (PhU E14876)

- 1401 号墓

土器

P22c (OIC E1954)  
N6 as (AM 1895.496)  
R81 (AM 1895.712)

そのほか

メイスヘッド, 斑岩 (UC 4284)  
メイスヘッド, 角礫岩 (UC 4285)  
メイスヘッド, アラバスター (UC 4286)  
貝 (UC 5142)  
赤鉄鉱の塊 (UC 4283)

- 1403 号墓

土器

P22 (MF 1920.1977)

- 1404 号墓

土器

B74a (PhU E14880)

- 1405 号墓

土器

P11f (OIC E1694)  
P22 (UC 5863)

- 1406 号墓

土器

P58a (LP 102)

- 1407 号墓

土器

P56b (OIC E1723)

- 1409 号墓

土器

B25e (OIC E765)  
B25f (KN 4301)  
P63b (KN 4317)

パレット

90H (UC 4170)  
95H (BoS 317)

そのほか

礫 (UC 4171)  
礫 (UC 4172)  
礫 (UC 4173)

- 1410 号墓

土器

F12 (UC 5738)

石器

磨製石斧, フリント (AM 1895.1029)  
ダガー, フリント (AM 1895.1019)

そのほか

彩色棒, 木 (UC 5044)  
ナッツ (UC 36094)

- 1411 号墓

土器

B11f (UC 4305)  
B62b (個人蔵)  
B62b (PhU E1529)  
B67? (OIC E850)  
P36b (AM 1895.428)  
F61 (UC 4307)  
F 土器把手付き鉢 (UC 4306)  
R 土器壺 (Bo 1895.25:55)

パレット

91H (MM 4601)

骨・牙製品

高台付無頸壺, カバ切歯 (AM 1895.930)  
高台付無頸壺, カバ切歯?, 破片 (UC 4312)  
腕輪, 象牙 (UC 4310)  
腕輪, 骨, 破片 (UC 4311)  
櫛, 象牙 (UC 4308)  
櫛, 象牙 (UC 4309)  
櫛, 骨 (AM 1895.934)

そのほか

革で縛られた木材 (UC 5045)  
なわ (UC 36095)  
なわ (UC 36096)

- 1412 号墓

土器

B25h (OIC E906)

石器

魚尾形ナイフ, フリント (UC 4273)

骨・牙製品

脚台付鉢, 象牙 (UC 4272)

- 1413 号墓

ビーズ・ペンダント

カーネリアン, 凍石 (UC 4602)  
ファイアンス, ザクロ石, 芯に金箔 (UC 4603)

骨・牙製品

櫛, 象牙 (UC 4599)

そのほか

女性像, 植物質のペースト (UC 4600)  
小像, 植物質のペースト, 破片 (UC 4601)  
礫 (UC 36033)

- 1414号墓  
土器  
 B57b (OIC E1688)  
 B 土器口縁部片, M434 (UC 5902)  
パレット  
 38S (Be 12887)  
その他  
 メイスヘッド, 円盤形, 角礫岩 (Be 12913)  
 タグ, アラバスター (UC 5187)
- 1415号墓  
土器  
 P22, M154 as (PhU E15574)  
 R3a (UC 5783)
- 1416号墓  
土器  
 P4, M10 (UC 4223)  
その他  
 メイスヘッド, 石灰岩 (UC 4224)
- 1417号墓  
石器  
 魚尾形ナイフ, フリント (KN 4253)  
 石刃, フリント (UC 4434)  
 石刃, フリント (UC 4436)  
 剥片, フリント (UC 4435)  
骨・牙製品  
 櫛, 象牙 (UC 4432)  
 櫛, 骨 (Be 12854)  
その他  
 メイスヘッド模造品, 円盤形, 白亜 (AM 1895.145)  
 木材 (UC 4433)
- 1418号墓  
土器  
 B25h (BC 953.63)  
 P12 (AM 1895.452)  
その他  
 メイスヘッド模造品, 円盤形, 白亜 (AM 1895.148)  
 メイスヘッド模造品, 円盤形, 白亜 (AM 1895.151)
- 1419号墓  
土器  
 B11e (AM 1895.360)  
 B66a (KN 4315)  
 B66b (AM 1895.330)  
パレット  
 14T (MM 4598)  
 101H (AM 1895.864)  
 101H (UC 5368)  
骨・牙製品  
 タスク, 象牙 (UC 5364)  
 タスク, 象牙 (UC 5365)  
 タスク, 象牙 (CB E.1307)  
 タグ, 象牙 (UC 5366)  
 タグ, 象牙 (CB E.1304)  
 櫛, 象牙 (UC 5367)
- 1422号墓  
土器  
 B 土器, 破片 (Be 13018)  
パレット  
 87H (UC 4749)
- 1424号墓  
パレット  
 95H (UC 4744)
- 1425号墓  
土器  
 B57a (AM Loan 400B)  
パレット  
 不整形 (UC 4754)  
骨・牙製品  
 脚台付容器, 角 (UC 5081)
- 1426号墓  
土器  
 B19b (UC 4245)  
 B19b M387 as (UC 4247)  
 B35 (OIC E1814)  
 B57b (GM A1722/2)  
 B57b, M387 (UC 4246)  
 B58b, M385 (Be 12989)  
 B58b, M386 (Be 12994)  
 B64b, M425 (AM 1895.276)  
 B64b, M46 (AM 1895.320)  
 B64b (MM 3127)  
 B74c (AM 1895.275)  
 P95a (OIC E841)  
 D29 (AM 1895.610)  
骨・牙製品  
 タスク, 象牙 (UC 4248)  
 タスク, 象牙 (UC 4249)
- 1427号墓  
土器  
 B11f (PhU E1532)  
 B27c (PhU E1462)  
石製容器  
 84, 石灰岩 (AM 1895.218)
- 1428号墓  
土器  
 B53b (PhU E12225)  
 B53b, M452 (UC 5712)  
 P22 (PhU E14801)
- 1429号墓  
土器  
 P 土器小型皿 (UC 4531)  
骨・牙製品  
 腕輪, 貝, 破片 (UC 4532)  
その他  
 粘土 (UC 4533)
- 1430号墓  
その他  
 赤鉄鉱の塊 (UC 5086B)  
 鋳, 石灰岩 (UC 5086A)

- 1432 号墓  
そのほか  
タグ, 石灰岩 (UC 5190)
- 1433 号墓  
土器  
P40c (UC 5870)
- 1434 号墓  
土器  
B27f (PhU E14869)  
B49 (PhU E14874)  
B72a (FW E19.1896)  
P23a (PhU E14786)  
石器  
ナイフ, フリント (UC 4951)  
石刃, フリント (UC 4950)
- 1435 号墓  
土器  
B57b (RM)  
パレット  
不定形 (OIC E890)
- 1436 号墓  
土器  
P43 (BMC P.1785)  
P45c (PhU E1752)  
R41, M515 (AM 1895.636)  
パレット  
38M (UC 4240)  
そのほか  
礫 (KN 4288)  
礫 (UC 4241)
- 1437 号墓  
土器  
C77 (CB E.1932)  
石器  
ナイフ, フリント (AM 1895.1020)  
ナイフ, フリント (MM 2428)  
ナイフ, フリント (UC 4130)  
そのほか  
有機物 (UC 4131)  
有機物 (UC 4132)  
木材, 破片 (UC 4359)  
木材, 破片, 赤色 (UC 4360)  
革に縛られた木材 (UC 4362)  
ひも, 革 (UC 4361)  
メイスヘッド?, 土製 (UC 5133)
- 1440 号墓  
パレット  
パレット? (PhU E1228)  
骨・牙製品  
腕輪, 亀甲 (UC 5639)
- 1442 号墓  
土器  
P11a (CB E806)
- 1443 号墓  
土器  
B57b (OIC E1716)  
B 土器無頸壺, 口縁部片 (UC 4163)  
C1 (AM 1895.489)  
石器  
ナイフ, フリント (UC 4164)  
そのほか  
メイスヘッド模造品, 円盤形, 白亜 (AM 1895.149)  
メイスヘッド模造品, 円盤形, 白亜 (AM 1895.150)  
革で縛られた木材の破片 (UC 4165)  
乾燥したフルーツ (UC 4166)
- 1444 号墓  
土器  
B54a (MF 1913.1977)  
B94b (MM 4442)
- 1447 号墓  
土器  
P79 (Be 13084)
- 1449 号墓  
土器  
B17a (AM 1895.1214)  
B25h (BC 951.63)  
B27d, レリーフ (AM 1895.1220)  
B92b (UC 4129)  
F85a (AM 1895.514)
- 1450 号墓  
土器  
B23b (AM 1895.288)  
B35a (MM 3095)  
P69a (AM 1895.446)  
パレット  
92F (OIC E877)  
骨・牙製品  
高台付無頸壺, カバ切歯 (AM 1895.929)  
指輪, 象牙 (UC 5641)
- 1453 号墓  
土器  
B36 (LP 159\*)
- 1454 号墓  
土器  
B54a (LP 168\*)
- 1456 号墓  
そのほか  
礫 (MM 5587)
- 1457 号墓  
土器  
B56 (AM 1895.325)
- 1458 号墓  
土器  
P95b (AM 1895.1238)  
D49 as (AM 1895.598)

- 1460 号墓  
そのほか  
ピン, 銅 (UC 5071)
- 1461 号墓  
土器  
B74a (AM 1895.260)  
R66 (AM 1895.724)  
R69c? (PhU E1739)  
パレット  
腎臓形 (UC 4765)
- 1463 号墓  
土器  
B27e (AM 1895.1239)  
P22 (RM 18.10)
- 1464 号墓  
土器  
B19b (PhU E16203)  
B27a (UC 4262)  
B68a (BoS 195)  
B72a? (UC 4261)  
F11b (CB E.867)  
F91 as (AM 1895.751)
- 1465 号墓  
土器  
B 土器, 深鉢, M566 (UC 4373)  
B74c (BoS 192)  
B74c? (OIC E886)  
F14 (PhU E1423)  
F27 (AM 1895.367)  
パレット  
91B/L (BoS 322)  
ビーズ・ペンダント  
赤鉄鉱 (UC 4255)  
骨・牙製品  
櫛, 骨 (AM 1895.935)  
櫛, 象牙 (UC 4256)  
そのほか  
粘土塊, 籠圧痕 (UC 4257)  
レジン塊 (UC 4363)  
革ひも (UC 4364)  
木材, 破片 (UC 4365)  
土器片 (LP 176\*)  
マット, アシ, 破片 (UC 36101)
- 1466 号墓  
ビーズ・ペンダント  
ペンダント, アラバスター (UC 5028)
- 1467 号墓  
土器  
P75 (UC 5882)  
パレット  
不定形 (Be 12886)  
骨・牙製品  
櫛, 骨 (AM 1895.932)
- 1468 号墓

- 土器  
B11f (RM 18.2)  
B21b (FW E33.1896)  
B25f (OIC E1774)
- ビーズ・ペンダント  
凍石, サンゴ (UC 5029)
- 骨・牙製品  
腕輪, 亀甲, 破片 (UC 5029)
- そのほか  
木材 (UC 5046)  
髪 (UC 5047)
- 1469 号墓  
石製容器  
164 as, アラバスター (MM 2407)  
骨・牙製品  
タスク, カバ牙 (AM 1895.899)  
タスク, カバ牙 (AM 1895.900)  
タグ, アラバスター (UC 4577)  
そのほか  
棒, 銅 (UC 4578)  
礫 (KN 4282)
- 1470 号墓  
土器  
B25d (BMC P.1)  
B38d (FW E29.1896)  
B38d (Be 13041)  
B58b? (PhU E1510)  
B72c (PhU E14857)  
B72c (AM 1895.274)  
B92a (PhU E1429)  
P65 (AM 1895.441)  
F72c (AM 1895.463)  
F72c (AM 1895.464)  
D83 as (AM 1895.385)  
パレット  
88H (UC 4226)  
91B (UC 4225)
- 1471 号墓  
土器  
B23a (UC 5688)  
B25c, M9 + M27 (AM 1895.323)  
B26b (AM 1895.237)  
そのほか  
礫 (UC 5087)
- 1473 号墓  
土器  
B25b (AM 1895.269)
- 1474 号墓  
土器  
B75a (BM EA67417)
- 1475 号墓  
土器  
B11f (PhU E12248)  
B74a (PhU E14920)  
P26a (PhU E14928)  
そのほか  
小像, カバ, 石灰岩 (AM 1895.139)

- メイスヘッド, 石灰岩 (Be 12920)
- 1476 号墓  
土器  
B19b (KN 4305)  
B22h (UC 5715)
  - 1478 号墓  
土器  
B22c (UC 5687)  
B22c (UCW)
  - 1479 号墓  
そのほか  
礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1176)
  - 1480 号墓  
土器  
パレット  
P58b (Be 13079)  
ビーズ・ペンダント  
23K (AM 1895.856)  
ガラス, カーネリアン, 凍石, 黒い石, ファ  
イアンス (Be 12849)  
凍石 (AM 1895.978A)  
ペンダント, 骨 (Be 12849)
  - 骨・牙製品  
指輪, 象牙 (UC 5647)  
指輪, 象牙 (UC 5648)  
指輪, 象牙 (UC 5649)  
指輪, 象牙 (UC 5650)  
指輪, 象牙 (UC 5651)  
指輪, 象牙 (UC 5652)  
指輪, 象牙 (UC 5653)  
指輪, 象牙 (UC 5654)  
指輪, ライオン形意匠, 骨 (AM 1895.912)
  - そのほか  
指輪?, 銅 (AM 1895.978B)  
指輪?, 銅 (AM 1895.978C)  
指輪?, 銅 (AM 1895.978D)  
指輪?, 銅 (AM 1895.978E)  
卵, 線刻, ダチョウ (AM 1895.990)
  - 1481 号墓  
土器  
P23a (UC 5867)  
骨・牙製品  
鈹, 骨 (Be 12860)
  - 1483 号墓  
土器  
B57a (OIC E866)  
F61 as (UC 4221)  
パレット  
91L (UC 4222)  
そのほか  
紡錘車, 石灰岩 (UC 4220)
  - 1484 号墓  
土器  
B15 (AM 1895.353)  
B57b (UC 4229)  
B63a (PhU L-55-298)  
B68a, M363 (UC 4230)  
B72a (Be 13042)
  - 1485 号墓  
土器  
B27f (PhU E14380)  
B57b (CB E.1760)  
石器  
ナイフ, フリント (AM 1895.1008)  
そのほか  
ピン, 銅 (UC 5070)  
ピン, 銅, 破片 (UC 5089A)  
礫, 凍石 (UC 5088)  
球, 粘土 (UC 5089)
  - 1486 号墓  
土器  
B62b (PhU E12234)  
P22 (MM 4489)  
骨・牙製品  
タグ, 象牙 (UC 4482)  
タグ, 象牙 (UC 4483)  
そのほか  
タグ, 石灰岩 (UC 4484)  
貝 (UC 4480)  
礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1151)
  - 1487 号墓  
土器  
P36c (AM 1895.431)  
F51b (AM 1895.341)  
F96a, M (AM 1895.815A)  
C64 as (UC 6013)  
N20 (AM 1895.502)  
石製容器  
高台付鉢 (MM 2402)  
パレット  
17G, as (UC 4688)  
そのほか  
礫 (UC 5168)
  - 1488 号墓  
土器  
P11H (MTS)  
骨・牙製品  
タスク, 象牙 (UC 4517)  
そのほか  
土製女性小像 (AM 1895.1226)  
土製女性小像 (AM 1895.1227)  
コーン, 焼成粘土 + 革 (AM 1895.1228)  
コーン, 焼成粘土 + 革 (AM 1895.1229-1)  
布, リネン (AM 1895.1229-2)  
コーン, 焼成粘土 + 革 (AM 1895.1230)  
コーン, 焼成粘土 + 革 (AM 1895.1231)  
メイスヘッド, M4, 閃緑岩 (AM 1895.220)  
メイスヘッド, アラバスター (UC 4516)
  - 1489 号墓

<u>土器</u>	B22c, M578 as (UC 4264) B57b, M543 (UC 4263) F52 (AM 1895.466)	腕輪, 象牙, 破片 (UC 4116) 腕輪, 象牙, 破片 (UC 4117) 腕輪, 象牙, 破片 (UC 4118) 腕輪, 象牙, 破片 (UC 4119) 櫛の歯, 象牙 (UC 4120)
<u>骨・牙製品</u>	櫛, 象牙 (UC 4265) 櫛, 骨 (Be 12856)	
<u>そのほか</u>	磔 (UC 5982)	<u>そのほか</u> 木, 破片 (UC 4114) 磔 (RM)
• 1490 号墓		• 1498 号墓
<u>土器</u>	B25g (OIC E1957) F7 (AM 1895.389) C38 (OIC E1670) C61 (Be 13020)	<u>土器</u> B35a (Be 12993) B47 (AM 1895.296) B53b (BFA 97.78) B57b (AM 1895.236)
<u>そのほか</u>	ピン, 銅 (UC 4128)	• 1499 号墓
• 1491 号墓		<u>土器</u> B22h (KN 4302) B22h (PhU E14940)
<u>土器</u>	F68c (AM 1895.344)	• 1501 号墓
<u>石製容器</u>	111 as, 玄武岩 (MM 2415)	<u>土器</u> B27a (OIC E1817)
• 1492 号墓		• 1502 号墓
<u>土器</u>	B 土器鉢 (PhU E1534)	<u>土器</u> B27c (OIC E770) B27c (PhU E14813)
• 1493 号墓		<u>骨・牙製品</u> 櫛, カバ牙 (AM 1895.949)
<u>土器</u>	F53 (AM 1895.391)	• 1503 号墓
• 1495 号墓		<u>土器</u> B27b (FW E71.1896) P6 (PhU E1431) P6? (PhU E1790) F11b (AM 1895.352) F11b (UC 4174)
<u>パレット</u>	鳥形 (UC 4767)	<u>石製容器</u> 118, 玄武岩 (AM 1895.186)
• 1496 号墓		<u>ビーズ・ペンダント</u> 凍石, サンゴ (UC 4196) 凍石, サンゴ (UC 4197) 凍石, サンゴ (UC 4198) カーネリアン, 骨, 黒い石 (Be 12837)
<u>土器</u>	B72a (PhU E1523)	<u>骨・牙製品</u> ヘアピン, 骨 (AM 1895.950) ヘアピン, 象牙 (UC 4181) 櫛, 象牙 (UC 4178) 櫛, 象牙 (UC 4179) 櫛, 象牙 (UC 4180) 腕輪, 象牙 (Be 12871) 腕輪, 象牙 (Be 12871A) 腕輪, 象牙 (Be 12872) 腕輪, 象牙 (Be 12912) 腕輪, 象牙 (Be 12916) 腕輪, 象牙 (Be 12916A) 腕輪, 象牙 (Be 12935) 腕輪, 象牙 (UC 4182) 腕輪, 象牙 (UC 4183)
• 1497 号墓		
<u>土器</u>	B 土器土器片, M11 (AM 1895.327) B26b? (PhU E1492) P 土器, 体部片, M78 (UC 5820) C74 (AM 1895.479)	
<u>石製容器</u>	172, アラバスター (UC 4110)	
<u>パレット</u>	91U (AM 1895.854) 92D as (OIC E777) 不定形 (KN 4268)	
<u>ビーズ・ペンダント</u>	カーネリアン, 水晶, 凍石 (Be 12850) 櫛, カバ牙 (AM 1895.941)	
<u>骨・牙製品</u>	タスク, 象牙 (UC 4111) タスク, 象牙 (UC 4115) タグ, 象牙 (UC 4112) タグ, 象牙 (UC 4113)	

- 腕輪, 象牙 (UC 4184)  
腕輪, 象牙, 破片 (UC 4185)  
腕輪, 亀甲, 破片 (UC 4186)  
腕輪, 亀甲, 破片 (UC 4187)  
腕輪, 亀甲, 破片 (UC 4188)  
腕輪, 亀甲, 破片 (UC 4189)  
腕輪, 亀甲, 破片 (UC 4190)  
腕輪, 骨 (UC 4191)
- そのほか
- ピン, 銅 (UC 4176)  
女性像, 土製, 脚部 (AM 1895.1261)  
女性像, 土製, 破片 (UC 19629)  
骨, 破片 (UC 4193)  
骨, 破片 (UC 4194)  
球, 石灰岩 (UC 4177)  
ライオンのツメ (UC 4192)  
粘土, 破片 (UC 4195)  
木材, 革, アシ (UC 36102a)  
木材, 革, アシ (UC 36102b)  
木材, 革, アシ (UC 36102c)  
木材, 革, アシ (UC 36102d)  
貝 (UC 36074)
- 1504 号墓  
石製容器  
115, 粗粒玄武岩 (AM 1895.207)
  - 骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5090)  
櫛の歯, 象牙 (UC 5091)
  - そのほか  
乾燥フルーツ (UC 5092)  
革, 破片 (UC 5093)  
礫 (UC 5979)
  - 1505 号墓  
土器  
C11, 破片 (OIC E1796A + E1796B)
  - 骨・牙製品  
櫛, 象牙 (UC 4138)  
ピン, 象牙, 破片 (UC 4139)
  - 1506 号墓  
土器  
B11e (CB E.8750)  
P22 (UC 4584)  
P22 (UC 4585)
  - そのほか  
ピン, 銅 (UC 4586)
  - 1507 号墓  
土器  
P15a (OIC E1708)  
P66 (BFA 97.118)
  - 石製容器  
169, 石灰岩 (MM 2394)
  - ビーズ・ペンダント  
カーネリアン, サンゴ (CB E.1512)
  - 骨・牙製品  
櫛, 角 (UC 5612)
- 櫛, 角 (UC 5613)
- 1508 号墓  
土器  
B47 (LP 148\*)
  - 1509 号墓  
土器  
B11f (KN 4329)  
B62b (AM 1895.281)  
P58b (UC 5878)
  - 1513 号墓  
土器  
P22 (KN 4337)
  - 1514 号墓  
土器  
P36a (OIC E1801)
  - 1515 号墓  
土器  
B83b (PhU E14852)
  - パレット  
92D, M15A (AM 1895.825)
  - ビーズ・ペンダント  
瑪瑙, 赤鉄鉱, アラバスター  
(UC 5004)
  - 1516 号墓  
そのほか  
貝 (UC 5144)
  - 1517 号墓  
土器  
B57b (CS JLS.21121 + 21126)
  - パレット  
不整形 (UC 4773)
  - ビーズ・ペンダント  
貝 (UC 39197)?
  - 骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙 (UC 5259)  
ヘアピン, 象牙 (UC 5260)  
ヘアピン, 象牙 (UC 5261)  
ペンダント, 骨 (AM 1895.918)  
護符, 角 (UC 5262)
  - 1520 号墓  
土器  
D24 (Be 13054)
  - 1525 号墓  
土器  
B68b as (OIC E854)  
B77b (OIC E1778)  
B 土器短頸壺? (PhU E1475)
  - 1526 号墓  
土器  
B25h (MuM 1741)
  - 1527 号墓  
土器



- B11f (Be 13040)
- 1528 号墓  
土器  
B94a, M67 (AM 1895.273)  
P56a (PhU E1773)  
P58b (PhU E1818)  
石製容器  
178, アラバスター (UC 4319)
  - 1529 号墓  
土器  
B18d (UC 4333)  
パレット  
22A (UC 4336)  
隅丸長方形 (UC 4335)  
石器  
鎌刃, フリント (UC 4334)
  - 1530 号墓  
土器  
P25 (AM 1895.792)  
ビーズ・ペンダント  
凍石 (UC 4579)  
骨・牙製品  
腕輪, 象牙, 破片 (UC 4582)  
腕輪, 象牙, 破片 (UC 4583)  
そのほか  
小像, 粘土, 破片 (UC 4580)  
小像, 粘土, 破片 (UC 4581)
  - 1532 号墓  
土器  
B79a (OIC E832)
  - 1534 号墓  
土器  
B25h, M393 (PhU E17535)  
F15 (KN 4327)  
パレット  
不整形 (UC 4692)  
ビーズ・ペンダント  
カーネリアン (UC 36083)
  - 1536 号墓  
土器  
B 土器無頸壺, 口縁部片, M61 (UC 5809)  
B 土器体部片, M397 (UC 36071)  
D43 (Be 13051)  
骨・牙製品  
櫛, 象牙 (UC 5621)  
櫛, 角 (UC 5622)
  - 1537 号墓  
土器  
F14 (AM 1895.362)
  - 1539 号墓  
土器  
B21b (OIC E1950)  
B21b (PhU E17540)

- B35a (LP 153)  
B74a (CNH 31488)  
B74a?(PhU E14885)  
B79a (AM 1895.301)  
P58a, M511 (AM 1895.410)
- 骨・牙製品  
タスク, カバ牙 (AM 1895.927)  
タグ, 象牙 (UC 4295)  
鉢, 象牙 (UC 4296)
- そのほか  
貝 (UC 4297)
- 1540 号墓  
土器  
B58a (Be 13030)  
P35 (UC 5868)  
P35 (OIC E769)
  - 1542 号墓  
骨・牙製品  
タスク, 象牙 (UC 5200)
  - 1543 号墓  
石器  
石刃, フリント (UC 4952)
  - 1544 号墓  
土器  
B25f, M (CS. JLS.21123 + 21124)
  - 1545 号墓  
ビーズ・ペンダント  
凍石 (AM 1895.892)
  - 1546 号墓  
土器  
B17d (AM 1895.354)  
B25e (PhU E14847)  
B25f, M28 (AM 1895.324)  
B74c (FW E70.1896)  
B74c (PhU E1506)  
P1a (UC 5927)  
F15a (AM 1895.361)  
F70a (AM 1895.461)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5095)  
そのほか  
かつら, 粘土, 破片 (UC 5075)  
かつら, 粘土, 破片 (UC 5076)  
乾燥フルーツ (UC 5094)  
投げ糸 (UC 5096)
  - 1547 号墓  
土器  
B25a (Be 13025)  
B35a (AM 1895.304)  
B47, 破片, M51 (AM 1895.794)  
B53a (Be 13031)  
ビーズ・ペンダント  
銀, カーネリアン (UC 4999)  
そのほか  
礫 (UC 5980)

- 加工された木片 (UC 36093)
- 1550 号墓  
土器  
B63c as (IM)
  - 1551 号墓  
土器  
B75a (Be 12988)  
パレット  
57D (AM 1895.844)
  - 1552 号墓  
土器  
B57b (CS JLS.21111)  
B58a (FW E14.1896)  
B 土器無頸壺, 口縁部片 M522 (UC 36326)  
P11a (UC 5421)  
石製容器  
フタ (UC 5419)  
パレット  
97B (UC 5418)  
骨・牙製品  
タグ, 象牙 (UC 5422)  
そのほか  
指輪, 銅 (UC 5423)  
ピン, 銅 (UC 5424)  
礫 (UC 5420)
  - 1553 号墓  
土器  
B94b (AM 1895.295)  
P53 (AM 1895.438)  
そのほか  
礫 (UC 6240)
  - 1554 号墓  
土器  
B22a (UC 5713)  
B72b, M349 (AM 1895.279)  
B79c (OIC E1961)  
F22 (AM 1895.809)  
パレット  
57D (KN 4263)
  - 1556 号墓  
土器  
B78b (LC 56.22.658)  
C40 (MM 3110)  
そのほか  
礫 (UC 36038)
  - 1559 号墓  
土器  
B49 (BFA 97.94)
  - 1560 号墓  
土器  
B74c (Be 13026)  
P22 (UC 6058)
  - 1561 号墓
- 土器  
B94b as (OIC E1826)  
R 土器体部片, M601 (UC 5824)
- 骨・牙製品  
櫛, 骨 (AM 1895.1225)
- 1562 号墓  
土器  
B81 (KN 4326)  
パレット  
2 (AM 1895.855)  
骨・牙製品  
櫛, 骨 (AM 1895.933)  
指輪, 象牙 (UC 4557)  
そのほか  
コーン, 粘土製・革製 (UC 4556)  
貝 (UC 4558)  
マラカイト (UC 4559)  
礫 (UC 36034)
  - 1563 号墓  
土器  
P2a (AM 1895.377)  
C56 (AM 1895.476)  
C63 (Be 13044)  
骨・牙製品  
指輪, 象牙 (UC 5273)  
指輪, 象牙 (UC 5274)  
指輪, 象牙 (UC 5275)  
指輪, 象牙 (UC 5276)  
指輪, 象牙 (UC 5279)
  - 1564 号墓  
土器  
B57b? (KN 4322)
  - 1565 号墓  
そのほか  
礫 (UC 5981)
  - 1566 号墓  
土器  
B27a (FW E24.1896)
  - 1567 号墓  
土器  
D54 as (EM CG2103)  
石製容器  
蛇紋岩, 長石, ファイアンス, カンラン石,  
貝 (UC 4407)  
礫 (RM 18.1)
  - 1568 号墓  
土器  
B57a? (PhU L-55-301)  
石製容器  
118 as, 玄武岩 (KN 4291)
  - 1569 号墓  
石器

- ナイフ, フリント (UC 4825)  
魚尾形ナイフ, フリント (LC 56.20.45)
- 1570 号墓  
土器  
D81b (PhU E1436)
  - 1572 号墓  
土器  
B27d (AM 1895.322)
  - 1573 号墓  
石製容器  
173 as (MM 2393)  
パレット  
90D as (KN 4260)
  - 1574 号墓  
土器  
B22d (KN 4304)  
C7 (UC 5830)  
C12 (LP 60)  
C22 (LP 55\*)  
C46 (AM 1895.494)  
C75b (PhU E1416)
  - 1575 号墓  
土器  
B74c (AM 1895.297)  
骨・牙製品  
指輪, 象牙 (UC 5640)  
タグ, 象牙 (UC 5192)
  - 1576 号墓  
土器  
B56 (PhU E1509)
  - 1577 号墓  
土器  
P23a, M457 (PhU E14902)  
パレット  
23W (UC 4455)  
45N (UC 4457)  
92R (UC 4456)
  - 1578 号墓  
土器  
B18d (OIC E924)  
石器  
剥片, フリント (UC 4954)  
斧, フリント (UC 4953)
  - 1579 号墓  
土器  
P86a (FW E41.1896)  
パレット  
不整形 (UC 4774)  
ビーズ・ペンダント  
カーネリアン, ファイアンス (UC 4776)  
カーネリアン (AM 1895.875)  
その他  
穀物の模造品, 粘土 (UC 5097)
  - 1581 号墓  
土器  
B22h (MM 3098)
  - 1582 号墓  
土器  
B25f (PhU E1490)
  - 1583 号墓  
土器  
B18b (CB E817)  
B72b (PhU E1514)  
骨・牙製品  
タスク, 象牙 (UC 4604)  
タスク, 象牙 (UC 4605)  
小像, 象牙 (UC 4606)  
その他  
タグ, 砂岩 (UC 4607)  
タグ, アラバスター (AM 1895.898)
  - 1584 号墓  
土器  
C52 (AM 1895.483)  
C65 (AM 1895.477)
  - 1585 号墓  
ビーズ・ペンダント  
カーネリアン, 岩石水晶, 貝 (Be 12847)
  - 1586 号墓  
土器  
B22a (MaM EA11)  
小型短頸壺, 点描文 (UC 5895)  
骨・牙製品  
籥, 骨 (AM 1895.937)  
籥, 骨 (AM 1895.942)  
革, 破片 (UC 5048)  
磬 (RM)
  - 1587 号墓  
土器  
B18d (EM CG2047)  
B18d (PhU E14926)  
B27d (UCW 13488)  
C18 (KN 4396)  
C34 (AM 1895.490)  
C34 (UC 4146)  
C85 as (AM 1895.474)  
ビーズ・ペンダント  
凍石 (MAA 1947.2393A)  
骨・牙製品  
腕輪, 貝 (UC 4147)  
腕輪, 貝 (UC 4148)  
腕輪, 貝 (UC 4149)  
腕輪, 貝 (UC 4150)  
腕輪, 貝 (UC 4151)  
腕輪, 貝 (UC 4152)  
腕輪, 貝 (UC 4153)  
腕輪, 貝 (UC 4154)  
腕輪, 貝 (UC 4155)  
腕輪, 貝 (UC 4156)

腕輪, 貝 (UC 4157)  
腕輪, 貝 (CB E.1297)  
腕輪, 貝 (CB E.4272)  
腕輪, 象牙 (UC 4158)  
タスク, 象牙 (UC 4159)

そのほか

メイスヘッド, 石灰岩 (UC 4135)

コーン, 粘土・革 (UC 4366)  
コーン, 粘土・革 (UC 4367)  
コーン, 粘土・革 (UC 4368)  
コーン, 粘土・革 (UC 4369)  
コーン・革, 粘土, 破片 (UC 4370)  
コーン・革, 粘土, 破片 (UC 4371)  
コーン, 石 (Be 12923)  
コーン, 石 (Be 12924)  
バッグ, 革, 破片 (UC 4372)  
有機物 (UC 4371)

• 1588 号墓

土器

P26 (AM 1895.411)

パレット

不整形 (UC 4763)

そのほか

木材, 破片, 刻線 (UC 5049)  
木材, 破片, 刻線 (UC 5050)

• 1589 号墓

土器

F14 (KN 4328)

ビーズ・ペンダント

凍石 (UC 5002)

そのほか

革, 破片 (UC 5051)  
木材 (UC 36091)

• 1590 号墓

土器

B1H (AM 1895.366)  
B22f (AM 1895.235)  
C21 (Be 13021)

パレット

102N (UC 4121)  
破片 (UC 4122)

骨・牙製品

櫛, 象牙, 破片 (UC 4123)

そのほか

ダチョウの卵, 破片 (UC 4124)

• 1591 号墓

土器

B27d, M144 (BFA 97.81)  
P68b (Be 12987)  
C24 (AM 1895.493)  
C85a (AM 1895.471)  
C85a (LP 180\*)  
C85d (AM 1895.475)

そのほか

革製紐 (UC 5052)

• 1592 号墓

土器

B26a (MM 3121)  
C31 (OIC E940)

ビーズ・ペンダント

カーネリアン, 貝 (CB E.1311)

骨・牙製品

指輪, 突起あり, 象牙 (UC 5642)  
指輪, 象牙 (UC 5643)  
指輪, 象牙 (UC 5644)  
指輪, 突起あり, 象牙 (UC 5645)  
指輪, 象牙 (UC 5646)  
指輪, 骨 (Be 13105) (その 1)  
指輪, 骨 (Be 13105) (その 2)

そのほか

革製紐, レジン付着 (UC 5053)

• 1593 号墓

土器

R74a (UC 5789)

パレット

91H (KN 4258)

骨・牙製品

小像, 象牙 (MM 1014)

• 1594 号墓

土器

B25g (Be 13028)  
B68a (BM EA67424)  
B92a (PhU E1422)  
B92a (PhU E1535)  
B92a (PhU E14863)

• 1595 号墓

土器

B18d (PhU E12233)  
B22d (UC 4136)  
C12 (Be 13045)  
C16 (Be 13046)  
C76 (AM 1895.481)

骨・牙製品

櫛, 象牙 (UC 5609)  
腕輪, 骨 (UC 4137)

そのほか

革・籠細工 破片 (UC 5054)  
磔 (UC 5154)

• 1596 号墓

土器

B53b (LP 167)

• 1598 号墓

土器

B25f (FW E17.1896)

そのほか

動物の顎骨 (UC 5614)

• 1599 号墓

土器

B22a (UC 6201)  
P 土器, 体部片, M527 (UC 5816)

- C1a (Be 12982)  
C18 (PhU E1415)  
C79a (AM 1895.485)  
C85a (AM 1895.473)  
C85c (AM 1895.472)
- 1600 号墓  
石器  
石刃, フリント (UC 4439)  
そのほか  
ピン, 銅, 破片 (UC 4440)  
貝 (UC 4438)  
マラカイト塊 (UC 4440)
  - 1602 号墓  
土器  
B22c? (PhU E1484)  
B63a (OIC E1860)  
B72b (PhU E14893)  
R 土器無頸壺, 口縁部片, M (UC 5828)
  - 1603 号墓  
土器  
B27d (PhU E12224)  
B27d (PhU E15570)  
B74a (PhU E1486)  
R3a (UC 5806)
  - 1606 号墓  
土器  
B1a (AM 1895.363)  
B11b (OIC E914)  
B26c (Be 13034)  
B26c (LP 155)  
C36 (MM 3101)  
骨・牙製品  
タグ, 象牙 (UC 4141)  
タグ, 象牙 (UC 4142)  
タグ, 象牙 (UC 4143)  
そのほか  
貝 (UC 4140)
  - 1610 号墓  
土器  
B22, 破片, M75 (AM 1895.795)  
B63b, M443 (AM 1895.283)  
B63b (BoS 191)
  - 1611 号墓  
土器  
B27d (FW E18.1896)  
そのほか  
土製女性小像, 破片 (AM 1895.125)  
革つき木材 (UC 5056)  
革, 破片 (UC 5924)
  - 1613 号墓  
土器  
B27d (AM 1895.285)  
B80 (CB E.1750)  
P1a (LP 64\*)  
F91/93 as (AM 1895.770)  
C27N (as UC 4216)

C69 (AM 1895.467)  
C81 (AM 1895.343)  
C84 (Be 13023)  
R51 (UC 4217)

パレット  
90D (BoS 2001)  
ビーズ・ペンダント  
象牙, 粘土, 瑪瑙, 赤鉄鉱 (UC 4215)

骨・牙製品  
指輪, 象牙 (UC 4199)  
指輪, 象牙 (UC 4200)  
指輪, 象牙 (UC 4201)  
指輪, 象牙 (UC 4202)  
指輪, 象牙 (UC 4203)  
指輪, 象牙 (UC 4204)  
指輪, 象牙 (UC 4205)  
指輪, 象牙 (UC 4206)  
指輪, 象牙, つまみ部分有 (UC 4207)  
指輪, 象牙, つまみ部分有 (UC 4208)  
腕輪, 象牙 (UC 4210)  
腕輪, 象牙 (UC 4211)  
腕輪, 貝 (UC 4212)  
腕輪, 貝 (UC 4213)  
腕輪, 貝 (UC 4214)  
腕輪, 象牙, 破片 (UC 4209)

    - 1614 号墓  
土器  
B29d (Be 13033)  
P 土器片, M245 (AM 1895.1219)  
F76? (PhU E14796)  
パレット  
72D (RM)  
骨・牙製品  
櫛, 象牙 (UC 5626)
    - 1615 号墓  
土器  
B94a (AM 1895.280)  
F 土器無頸壺 (AM 1895.790)  
N12 (UC 5723)  
骨・牙製品  
櫛, 象牙 (Be 12857)
    - 1616 号墓  
土器  
B57b (CS JLS.21109)
    - 1617 号墓  
土器  
B19a (LP 166\*)
    - 1619 号墓  
土器  
P23a (OIC E1601)
    - 1620 号墓  
土器  
P11a (BC 933.63)
    - 1621 号墓

土器

C65 (PhU E1413)  
C65 (AM 1895.484)  
C67 (AM 1895.468)  
C67 (Be 13027)  
C67 (AM 1895.486)

ビーズ・ペンダント

ファイアンス (UC 5060)?

そのほか

円錐形装飾紡錘車 (PhU E1417)

- 1622 号墓

土器

B25h, M371 (KN 4296)  
B92a (OIC E783)

パレット

16M as (SE AB22)

- 1624 号墓

土器

B57b (PhU E1482)

- 1625 号墓

土器

B27d (AM 1895.256)  
B66a (AM 1895.333)

ビーズ・ペンダント

粘土, 貝 (UC 4453)  
粘土, 貝 (UC 4454)

そのほか

ポート状模造品, 土製, 破片 (UC 6217)  
貝 (UC 36080)

- 1626 号墓

土器

B18d (PhU E1500)  
B47 (PhU E1481)  
P56b, M134 (AM 1895.437)  
R1 (UC 5784)

- 1627 号墓

土器

R66 (CB E.874)

- 1628 号墓

土器

B11b (OIC E896)  
C78 (PhU E1419)

- 1629 号墓

土器

B57b (BFA 97.93)  
B63a (CB E829)  
B74a (OIC E1847)

- 1630 号墓

土器

B25c (AM 1895.310)

パレット

不整形 (UC 4746)

- 1633 号墓

土器

P59 (UC 5881)

そのほか

礫 (UC36035)

- 1636 号墓

土器

B25g (KN 4300)  
B74b (OIC E1829)  
B94a (LC 36.119.7)  
D16A (UC 4451)

ビーズ・ペンダント

カーネリアン (Be 12840)  
カーネリアン (UC 4450)

骨・牙製品

スプーン, 象牙 (UC 4449)

そのほか

ひも, 革 (UC 4452)  
ナッツ (UC 36092)

- 1637 号墓

土器

B22g, M (PhU E1476)  
F15G (MM 10900)

- 1638 号墓

土器

B35E as (Be 13012)  
P66 (PhU E1494)

- 1639 号墓

土器

D5a (AM 1895.586)

骨・牙製品

ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5257)  
ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5258)

- 1640 号墓

土器

B27c (BC L305)

- 1641 号墓

土器

P 土器短頸壺 (PhU 14914)

パレット

92D (RM 18.1)

そのほか

礫 (UC 5156)

- 1643 号墓

パレット

破片 (KN 4269)

骨・牙製品

ヘアピン, 象牙 (UC 5263)  
ヘアピン, 象牙 (UC 5264)  
ヘアピン, 骨? (AM 1895.955)

- 1644 号墓

土器

C93 (AM 1895.482)  
C93 (AM 1895.487)

- 1645 号墓

土器

D91b (AM 1895.630)

- 1646 号墓

土器

B74a (FW E20.1896)  
C65 (UC 4127)

パレット

103T (UC 4125)  
103T (UC 4126)

- 1647 号墓

骨・牙製品

櫛, 象牙 (UC 5616)

- 1648 号墓

土器

P22 (BoS 237)

そのほか

礫 (UC 36036)

- 1649 号墓

土器

B21c (LP 99\*)  
B71b (AM 1895.332)

パレット

45F (UC 6220)

骨・牙製品

櫛, 象牙 (UC 5615)  
フック, 貝 (AM 1895.910)

- 1650 号墓

土器

B47 (LP 6175)

- 1652 号墓

土器

B35a (AM 1895.262)  
B72b (OIC E1853)

- 1653 号墓

土器

B74a (PhU E14884)  
P24 (UC 5995)

- 1654 号墓

土器

B26a (LP 170\*)  
B75 as, 口縁部片 (IAL 51/211)  
P1a (OIC E1615)  
F72b (AM 1895.340)  
D54 as, 口縁部片 (BM EA66034)

石製容器

111, 玄武岩 (MM 2414)  
169 as, アラバスター (AM 1895.195)  
174, 大理石 (UC 4218)

骨・牙製品

ヘアピン, 象牙 (UC 5265)

そのほか

メイスヘッド, 円盤形, 石灰岩 (Be 12914)  
マラカイト (UC 4219)

- 1655 号墓

土器

B 土器, 体部片, M35 (UC 36317)

- 1656 号墓

土器

B11c (OIC E904)  
B25c (LP 156)

パレット

48 (OIC E881)  
89 (UC 4745)

そのほか

礫 (UC 4745)

- 1657 号墓

土器

D32 (AM 1895.587)  
D67c (EM CG2094)  
R3 (UC 5756)  
R3 (UC 5758)

- 1658 号墓

土器

B74a (Be 13009)

骨・牙製品

ヘアピン, 象牙 (UC 5266)

- 1659 号墓

土器

D67c (BoS 221)

- 1660 号墓

石製容器

166, アラバスター (UC 4563)

石器

ナイフ, フリント (KN 4252)  
魚尾形ナイフ, フリント, 破片 (UC 4564)  
魚尾形ナイフ, フリント, 破片 (UC 4955)

- 1661 号墓

土器

B21b (UC 4169)  
B23b (AM 1895.249)  
B23b (KN 4306)  
P68b (AM 1959.276)  
P68b (UC 36262)

石製容器

121, 玄武岩 (Be 12928)  
167, アラバスター (AM 1895.192)  
167, アラバスター (AM 1895.203)  
175, アラバスター (AM 1895.191)

パレット

90D (AM 1895.826)  
90D (Be 12889)

ビーズ・ペンダント

粘土 (UC 4168)

石器

ダガー, フリント (MM 5581A + 5581B)

骨・牙製品

櫛, 象牙 (UC 4167)  
櫛, 骨, 破片 (Be 12855)

- 1662 号墓  
土器  
P93d (BC M5446-H)
- 1663 号墓  
石器  
石刃, フリント (UC 4778)
- 1664 号墓  
土器  
P94c (PhU E1809)  
パレット  
90N (UC 4768)
- 1665 号墓  
その他  
礫 (UC 36037)
- 1666 号墓  
その他  
鉄の塊 3 点 (UC 5098)
- 1667 号墓  
土器  
B11f (AM 1895.357)
- 1669 号墓  
土器  
B66a (CS JLS.21140)  
B72a as (CNH 31471)  
パレット  
97H as (UC 4759)
- 1670 号墓  
土器  
B57b (OIC E1749)
- 1671 号墓  
石製容器  
123, アラバスター (UC 4274)
- 1672 号墓  
土器  
B72a (UC 5701)  
B74b (UC 5705)  
B 無頸壺, 口縁部片, M433 (UC 5903)  
P96 (LP 149)
- 1673 号墓  
土器  
B72b (OIC E1713)  
B74b (OIC E1714)
- 1674 号墓  
土器  
B25f (LP 161\*)  
B25f (OIC E1813)  
その他  
礫 (OIC E796)
- 1675 号墓  
パレット  
24J (UC 4689)
- 1676 号墓  
土器  
103Q (AM 1895.867)
- 1676 号墓  
土器  
C14 (KN 4394)  
C52 (Be 13022)  
C65 (OIC E864)  
石製容器  
120, 玄武岩 (AM 1895.185)  
石器  
魚尾形ナイフ, フリント (LC 56.20.44)  
魚尾形ナイフ, フリント (UC 4133)  
魚尾形ナイフ, フリント (UC 4133A)  
ダガー, フリント製 (Be 12896)  
石刃, フリント (UC 4134)
- 1677 号墓  
土器  
B21b, M355 as (OIC E883)  
骨・牙製品  
櫛, 象牙 (UC 4458)  
タスク, 象牙 (UC 4462)  
タスク, 象牙 (UC 4463)  
小像, 象牙, 破片 (UC 4464)  
指輪, 象牙, 破片 (UC 4465)  
その他  
小礫 20 点 (UC4466)
- 1678 号墓  
骨・牙製品  
櫛, 骨 (AM 1895.945)  
ヘアピン, 骨, 破片 (AM 1895.958)  
その他  
礫 (UC 5158)
- 1679 号墓  
石製容器  
164, アラバスター (KN 4293)  
パレット  
92H (AM 1895.828)
- 1680 号墓  
土器  
B11f (CB E835)  
D67c (AM 1895.578)  
D67c (AM 1895.604)  
石製容器  
65, 石灰岩 (UC 4975)
- 1681 号墓  
土器  
B25g (AM 1895.248)  
F11a (AM 1895.380)  
C86 as (AM 1895.342)  
その他  
敲き石, フリント (UC 4160)  
礫 (MM 2387)
- 1682 号墓  
土器  
B25f (AM 1895.263)



そのほか B25f (AM 1895.309)  
 コーン, 石灰岩 (AM 1895.226)  
 コーン, 石灰岩 (AM 1895.227)

• 1683 号墓  
土器 R26 (UC 5778)  
パレット 46R (OIC E874)  
石器 魚尾形ナイフ, フリント, 破片 (UC 36075)  
骨・牙製品 櫛, 象牙 (CB E.1299)  
そのほか 礫 (UC 5161)

• 1684 号墓  
土器 B25c (UC 5714)  
 P93c (AM 1895.444)  
そのほか 貝 (UC 36079)

• 1685 号墓  
土器 P40a (RM 18.7)  
 L17b (UC 5727)  
 L35b (Be 13050)  
石器 ナイフ, フリント (Be 12902)

• 1686 号墓  
土器 D4b (AM 1895.589)

• 1687 号墓  
土器 B29d (AM 1895.326)  
 P61 (AM 1895.421)  
 R1b (UC 5805)  
骨・牙製品 櫛, 骨 (AM 1895.943)  
そのほか 土製女性小像, 破片 (AM 1895.123)  
 礫 (Be 12918)

• 1688 号墓  
土器 B72a (AM 1895.241)  
 B74a (OIC E1962)

• 1689 号墓  
土器 P78 (AM 1895.799)  
石製容器 111, 粗粒玄武岩 (AM 1895.187)

• 1690 号墓  
土器 B22h, M86 as + M94 (AM 1895.338)  
 B29b (BX 3164/3)

そのほか B49? (PhU E14888)  
 マラカイト (UC 5103)  
 革製袋の破片 (UC 5103)

• 1691 号墓  
土器 B25f, M558 as (AM 1895.307)  
 B 土器, 体部片, M499 (UC 5814)  
そのほか ヘアピン, 象牙 (UC 5268)

• 1692 号墓  
石器 ナイフ, フリント (UC 4956)  
そのほか 貝 (UC 5145)

• 1693 号墓  
土器 B57b (KN 4298)  
 B57b (MaM EA7)  
 F81a (AM 1895.511)  
 D51?, 破片 (CB E.1924)

• 1694 号墓  
土器 B74b (LP 169\*)  
 B74b (OIC E1835)  
パレット 92F (UC 4775)  
そのほか 貝 (UC 5146)  
 礫 (UC 36039)

• 1695 号墓  
土器 P57b (UC 4680)  
 D35b (CNH 31472)  
骨・牙製品 針の収納筒, 骨 (UC 36421)

• 1696 号墓  
土器 B27d (PhU E14872)  
パレット 90 (Be 12882)

• 1697 号墓  
土器 P93b (AM 1895.1240)  
 R43 (AM 1895.773)  
骨・牙製品 タグ, 象牙 (UC 5201)  
そのほか 礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1170)

• 1698 号墓  
パレット 魚形 (UC 4681)

• 1700 号墓

- 土器  
B25d (AM 1895.334)  
B25d (Be 12992)  
F68b (AM 1895.626)  
D31b (LP 114\*)
- 石製容器  
144, アラバスター (UC 4974)
- 1701 号墓  
土器  
P22, M234 (UC 5996)  
D67, 口縁部片 (IAL 51/198)
  - 1703 号墓  
土器  
B18D, M45 (AM 1895.316)  
パレット  
90L, 破片 (UC 4551)  
骨・牙製品  
タスク, 象牙, 破片 (UC 4552)
  - 1705 号墓  
土器  
P76 (AM 1895.798)  
石製容器  
181, 蛇紋岩 (AM 1895.228)  
骨・牙製品  
鈎, 角 (UC 5362)  
その他  
小像, 粘土, 植物質ペースト, 破片 (UC 5363)  
コーン, 粘土・革 (UC 5361)  
タグ, 石灰岩, 革の付着物 (UC 5361A)  
タグ, 石灰岩, 革の付着物 (UC 5361B)
  - 1706 号墓  
土器  
B47 (IM)  
B76 (OIC E1861)
  - 1707 号墓  
骨・牙製品  
スプーン, 象牙 (UC 5211)  
その他  
礫 (UC 36040)
  - 1708 号墓  
骨・牙製品  
櫛, 象牙 (UC 5611)  
櫛, 象牙 (MM 1015c)
  - 1709 号墓  
土器  
P22 (KN 4338)
  - 1710 号墓  
土器  
P22 (OIC E1971)  
D27 (AM 1895.621)  
D66 (AM 1895.615)
  - 1712 号墓  
土器  
N6 (UC 5722)
  - 1713 号墓  
土器  
P40c (OIC E1843)  
石器  
石刃, フリント (UC 4957)
  - 1714 号墓  
パレット  
57N (BoS 315)
  - 1715 号墓  
土器  
W71 (MM 3146)
  - 1716 号墓  
土器  
L84b (AM 1895.663)  
石製容器  
172 as, 玄武岩 (MM 2405)  
その他  
革製紐 (UC 5058)
  - 1717 号墓  
土器  
D43 (PhU E1405)
  - 1720 号墓  
石製容器  
石灰岩 (UC 5030)
  - 1721 号墓  
土器  
B21b (PhU E14865)  
P11a (PhU E1781)
  - 1722 号墓  
土器  
B74a (OIC E1820)  
P82b (LP 137)
  - 1723 号墓  
土器  
B74a (RM 18.5)  
P11a (UC 5997)  
D35a (AM 1895.590)  
D35a, 破片 (UC 4291)  
ビーズ・ペンダント  
骨, アラバスター, 赤鉄鉱 (UC 4292)  
貝 (複数) (UC 4293)  
骨・牙製品  
腕輪, 亀甲 (UC 4294)
  - 1724 号墓  
土器  
P22 (OIC E1970)  
P40c (CB E864)  
パレット  
46N/P (BoS 337)

- 1725 号墓  
土器  
P98a (AM 1895.412)  
D19 (AM 1895.602)  
D63b as (CS JLS.1725)?  
パレット  
72D (MM 2380)  
そのほか  
礫 (UC 5983)
- 1726 号墓  
土器  
D48, 土器片 (AM 1895.594)  
D67c (LP 109\*)  
D68 (UC 5733)
- 1727 号墓  
土器  
P14 (OIC E913)  
P48 (PhU E1810)  
P93d (AM 1895.424)
- 1728 号墓  
土器  
P40b (MM 4459)  
パレット  
70 (BoS 395)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙 (UC 5214)  
櫛ピン, 骨 (UC 5213)
- 1729 号墓  
土器  
B27e (AM 1895.261)  
D7a (AM 1895.574)  
D35a (個人蔵)  
パレット  
57M (UC 4691)
- 1732 号墓  
土器  
B25a (LP 165\*)  
パレット  
不整形, 破片 (UC 4675)  
不整形, 破片 (UC 4700)  
骨・牙製品  
タスク, 象牙 (UC 4673)  
タスク, 象牙 (UC 4674)  
そのほか  
小型の籠 (UC 4653)
- 1733 号墓  
土器  
B54a? (PhU E14887)  
B57b (KN 4320)  
R 土器鉢 (UC 5670)
- 1734 号墓  
土器  
B74c (PhU E14849)  
F51a (AM 1895.390)  
D17b (LP 113\*)
- 石製容器  
40 as, 玄武岩 (MM 2399)  
51, 石灰岩 (UC 4320)
- 1736 号墓  
土器  
F64 (AM 1895.439)  
R72 (AM 1895.720)  
パレット  
不整形 (UC 4671)  
骨・牙製品  
タグ, 象牙 (UC 4672)  
そのほか  
礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1155)
- 1737 号墓  
土器  
B15 (BFA 97.71)  
パレット  
97B (UC 4760)
- 1738 号墓  
パレット  
9G (AM 1895.843)
- 1740 号墓  
土器  
D35b (AM 1895.573)  
パレット  
45D (AM 1895.847)  
45F (MM 2382)  
石製容器  
アラバスター, 水晶 (Be 12841)  
そのほか  
球, 金属 (UC 5127)
- 1742 号墓  
そのほか  
棒, 角 (UC 5684)  
角, 破片 (UC 5683)
- 1743 号墓  
土器  
B25g, M152 (AM 1895.252)  
そのほか  
結び目がある革 (UC 5925)
- 1744 号墓  
土器  
B 土器無頸壺 (PhU E1516)  
P22 (UC 5846)
- 1746 号墓  
土器  
B21b? (EM CG2050)  
P5b (UC 4145)  
パレット  
破片 (UC 4144)
- 1747 号墓

土器

B11b (MuM 1101)  
B79a (PhU E14820)

- 1748 号墓

土器

B25f (OIC E1775)  
B57b (PhU E14870)  
B78a (PhU E14859)  
P11d (CB E.8747)

- 1749 号墓

その他

礫 (UC 36018)

- 1750 号墓

土器

B21b, M366 (OIC E1821)  
B57a (Be 12999)  
F20 (PhU E1541)

- 1751 号墓

土器

B18c, M (AM 1895.272)  
B47? (PhU E14890)  
P56a (OIC E1827)

パレット

不整形 (UC 4694)

- 1752 号墓

土器

P16 (PhU E14777)

ビーズ・ペンダント

ファイアンス, 貝, 蛇紋岩, 凍石 (UC 5031)

- 1753 号墓

土器

B35a (Be 13037)  
B75a (AM 1895.292)  
B86b (AM 1895.331)

- 1754 号墓

土器

B47 (個人蔵)  
P24L (AM 1959.274)

パレット

46P (BoS 338)

その他

水晶, 破片 (UC 4659)  
貝 (UC 4658)

- 1755 号墓

土器

W53 (AM 1895.531)

パレット

53/54/55 (BoS 325)

- 1756 号墓

土器

W51 (AM 1895.552)

- 1757 号墓

骨・牙製品

象牙 (UC 5456)  
象牙 (UC 5457)  
象牙 (UC 5458)  
象牙 (UC 5459)  
象牙 (UC 5460)  
象牙 (UC 5461)  
象牙 (UC 5462)  
象牙 (UC 5463)  
象牙 (UC 5464)  
象牙 (UC 5465)  
象牙 (UC 5466)

ビーズ・ペンダント

カーネリアン (UC 5467)  
ペンダント, 泥岩 (UC 5451)  
ペンダント, 泥岩 (UC 5452)  
ペンダント, 泥岩 (UC 5453)  
ペンダント, 泥岩 (UC 5454)  
ペンダント, 象牙 (UC 5455)

その他

礫 (UC 36041)

- 1758 号墓

土器

B11f (AM 1895.355)

パレット

不定形, ライオン? (CB E.6155)

その他

礫 (UC 5159)  
礫 (UC 36042)

- 1759 号墓

土器

B11f, M (OIC E1975)  
B27d (KN 4299)  
P2b (LP 57)  
P17 (BFA 97.143)  
P66 (AM 1895.415)  
D92 (AM 1895.633)

骨・牙製品

脚台付鉢, 角 (UC 5082)

その他

ヘアピン?, 銅 (Be 12867)

- 1760 号墓

土器

B37a (OIC E1777)

- 1761 号墓

土器

B22a (AM 1895.305)  
B25g (UC 5472)  
P68b (AM 1895.435)  
P95b (PhU E14913)

骨・牙製品

スプーン, 象牙 (MM 1017b)  
ヘアピン, 象牙 (UC 5474)  
スプーン, 石灰岩 (UC 5473)

その他

指輪, 銅 (UC 5475)

- 指輪, 銅 (UC 5476)
- 1763 号墓  
土器  
B74c, M446 as (Be 13043)
  - 1764 号墓  
土器  
B11f(OIC E925)
  - 1765 号墓  
土器  
D4b (UC 5729)
  - 1766 号墓  
土器  
B11f(FW E36.1896)  
B25g (KN 4297)  
D15, 口縁部片 (IAL 51/200 + AM 1895.597)
  - 1767 号墓  
土器  
B27f(BMC P.1827)
  - 1768 号墓  
土器  
B25g, M214 (MM 4445)  
C10H or 10L (BoS 251)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙 (UC 5269)
  - 1769 号墓  
土器  
B47 (PhU E1483)  
D63c (AM 1895.607)
  - 1770 号墓  
土器  
P22 (UC 5851)  
D55 (BMC P.9)  
そのほか  
ペンダント, 銅 (AM 1895.979)
  - 1772 号墓  
土器  
B66a (PhU E14877)  
パレット  
17D (AM 1895.824)  
骨・牙製品  
タグ, 象牙 (UC 5194)  
タグ, 象牙 (UC 5195)  
タグ, 象牙 (UC 5196)
  - 1773 号墓  
土器  
B25f(LP 147)
  - 1774 号墓  
パレット  
90D (CNH 31446)  
ビーズ・ペンダント  
ペンダント, カンラン石 (UC 5032)  
骨・牙製品
- ヘアピン, 象牙 (UC 5267)  
ヘアピン, 骨 (AM 1895.952)
- そのほか  
小像, タカ, ファイアンス (AM 1895.142)  
貝 (UC 5671)
- 1775 号墓  
そのほか  
磔 (UC 35981)
  - 1780 号墓  
土器  
B74b? (OIC E793)  
P 土器, 体部片, M79 (UC 5810)
  - 1781 号墓  
土器  
B57b (KN 4319)  
D57 as (PhU E14426)  
骨・牙製品  
タグ, 象牙 (UC 5193)  
タグ, 象牙 (UC 5197)  
そのほか  
護符, 泥岩 (UC 5664)  
護符, 泥岩 (UC 5665)  
護符, 泥岩 (UC 5666)
  - 1782 号墓  
石製容器  
119, 玄武岩 (UC 5607)
  - 1783 号墓  
土器  
B11a (MM 3124)  
B22g (AM 1895.282)  
B27d, M114 (AM 1895.306)  
B27e, M247 + M495 (AM 1895.298)  
B72a (LP 150\*)  
P1a (FW E50.1896)  
P15a (PhU E12249)  
P40f (AM 1895.443)  
P66 (PhU E1791)  
F96b (AM 1895.508)  
石製容器  
130 as, 角礫岩 (MM 2396)  
ビーズ・ペンダント  
ファイアンス (AM 1895.880)
  - 1784 号墓  
土器  
B18a (BFA 97.70)  
B72a (UC 5702)  
B78b (CB E821)  
P40a (PhU E17547)
  - 1785 号墓  
土器  
B25c (AM 1895.232)  
B27c, M37 (AM 1895.318)
  - 1786 号墓  
土器

- B75b (AM 1895.250)  
P22 (BoS 254)
- パレット
- 34C as (MM 2376)
- ビーズ・ペンダント
- カーネリアン, 滑石, 瑪瑙, 貝, サンゴ  
(UC 5033)
- 石器
- 石刃, フリント (UC 4967)  
石刃, フリント (UC 4968)  
石刃, フリント (UC 4969)  
石刃, フリント (UC 4970)
- 1787 号墓
- 土器
- B27c (AM 1895.233)  
D87 (AM 1895.624)
- 骨・牙製品
- 櫛, 象牙 (UC 5624)
- 1788 号墓
- ビーズ・ペンダント
- 水晶, 蛇紋岩, カーネリアン (AM 1895.887)  
ペンダント, 象牙 (AM 1895.908)
- 骨・牙製品
- 護符, 象牙 (UC 6005)  
ヘアピン, 象牙 (UC 4430)  
ヘアピン, 象牙 (UC 4431)
- その他
- おもり, 赤鉄鉱 (UC 4431A)  
かつら, 粘土, 破片 (UC 5077)
- 1789 号墓
- ビーズ・ペンダント
- サンゴ (UC 5000)
- 骨・牙製品
- 櫛, 象牙 (UC 5620)  
タスク, 象牙, 破片 (UC 5202)  
腕輪, 象牙 (UC 5655)
- 1790 号墓
- 土器
- P34d (UC 5892)  
D61 (Be 13048)
- 1791 号墓
- 石器
- ナイフ, フリント (UC 4779)  
ナイフ, フリント (UC 4779A)  
ナイフ, フリント (LC 56.20.26)
- 骨・牙製品
- 櫛, 象牙 (UC 5617)
- 1792 号墓
- 土器
- B 土器, 体部片, M535 (UC 36315)
- 1794 号墓
- 土器

- B25f (CNH 31484)
- 1795 号墓
- 骨・牙製品
- ヘアピン, 骨 (AM 1895.944)
- 1796 号墓
- 土器
- D61A (Be 13048)
- 石器
- ナイフ, フリント (UC 4958)  
ナイフ, フリント (UC 4959)  
ナイフ, フリント (UC 4960)  
ナイフ, フリント (UC 4961)  
ナイフ, フリント (UC 4962)  
ナイフ, フリント (UC 4963)  
ナイフ, フリント (UC 4965)  
ナイフ, フリント (UC 4966)
- 骨・牙製品
- 無頸壺, カバ切歯 (AM 1895.931)
- 1797 号墓
- 土器
- B54a (PhU L-55-300)  
B81c (CB E825)
- 1800 号墓
- 土器
- C 土器皿, 底部片 (UC 5831)
- 1801 号墓
- 土器
- D8d (FW E58.1896)  
D35b (DO EG7001)
- 1802 号墓
- 土器
- 詳細不明壺 (LP 164\*)
- その他
- 土製男性小像, 破片 (AM 1895.821)
- 1803 号墓
- 土器
- B57a as (OIC E1974)  
P27 (AM 1895.430)  
P68b (PhU E14912)
- パレット
- 不整形 (UC 4755)
- 1804 号墓
- 土器
- B29c (OIC E1856)  
F68b as (PhU E1428)
- 1805 号墓
- 土器
- R67? (AM 1895.762)
- 骨・牙製品
- ヘアピン, 象牙 (UC 5270)

- 1808 号墓  
パレット  
24M (OIC E879)  
その他  
鋳, 銅 (UC 4386)
- 1809 号墓  
土器  
B11f (LP 73)
- 1810 号墓  
土器  
B21d (Be 13032)
- 1812 号墓  
土器  
D91a (AM 1895.631)
- 1814 号墓  
土器  
B75b (OIC E1948)  
P26b (PhU E1813)  
F68a (AM 1895.345)
- 1815 号墓  
骨・牙製品  
櫛, 骨 (AM 1895.936)
- 1816 号墓  
土器  
B29a? (KN 4324)
- 1817 号墓  
土器  
B19a (OIC E775)  
B58a (UC 5699)  
B72c (BM EA67422)  
B74c (MuM 1087)  
B87 (AM 1895.286)  
B94b as (AM 1895.335)  
P15 (UC 5740)  
P70a (AM 1895.462)  
R22a (UC 5750)  
石製容器  
高台付鉢, 玄武岩 (MM 2409)  
パレット  
14D (MM 2377)  
92H (AM 1895.827)  
その他  
木材, 破片 (UC 5055)  
礫 (UC 5160)
- 1818 号墓  
土器  
B72a (OIC E1715)  
P40e (AM 1895.445)
- 1819 号墓  
骨・牙製品  
タスク, カバ牙 (AM 1895.916)
- 1820 号墓  
石製容器  
172 as, 石灰岩 (MM 2404)
- パレット  
90L (AM 1895.829)
- 1821 号墓  
土器  
B11d (UC 4231)  
P16 (LP 77)  
パレット  
90H (UC 4232)  
骨・牙製品  
櫛, 象牙 (UC 4233)  
その他  
革 (UC 36103)
- 1822 号墓  
パレット  
90P (UC 4737)  
92D (BoS 316)  
ビーズ・ペンダント  
サンゴ (UC 5034)
- 1823 号墓  
土器  
B25e, M38 (AM 1968.1274)  
B25e, M54 (AM 1895.317)  
P17 (PhU E1784)  
C42 (AM 1895.491)  
C48 (FW E61.1896)  
C60 (PhU E1412)  
C75a (AM 1895.470)
- 1825 号墓  
土器  
B44b, M53 (AM 1895.319)  
B58a (OIC E1828)  
B76 (KN 4307)  
その他  
レジン (UC 5125)
- 1826 号墓  
土器  
B68b (OIC E1830)  
P22 (UC 5862)
- 1827 号墓  
土器  
F15 (UC 5739)  
ビーズ・ペンダント  
ペンダント, 粘土 (UC 5040)
- 1827 号墓  
土器  
C2 (AM 1895.488)
- 1830 号墓  
土器  
B11f (MAA 1898.69)  
パレット  
不整形, 破片 (UC 4766)
- 1831 号墓  
土器  
B29a (CB E820A + E820B)

- 1832 号墓  
土器  
B27c, M423 (KN 4325)  
B62a (AM 1895.1185)  
B74a? (PhU E17545)
- 1834 号墓  
土器  
P34e (PhU E1788)  
R 土器, 体部片, M (UC 36072)
- 1836 号墓  
土器  
D37 (MM 4456)
- 1838 号墓  
土器  
B47 (CB E823)  
パレット  
87N (UC 4747)
- 1839 号墓  
ビーズ・ペンダント  
銅 (UC 5066)
- 1840 号墓  
土器  
B35a (AM 1895.230)  
B74a (SE EC89)  
D31S (CB E.1791)  
そのほか  
メイスヘッド, M8, アラバスター (AM 1895.223)
- 1841 号墓  
土器  
D8c (BFA 97.122)  
D35b (CB E.1737)  
骨・牙製品  
腕輪, 象牙 (UC 5656)  
腕輪, 象牙 (UC 5657)  
そのほか  
礫 (UC 5162)
- 1842 号墓  
土器  
P58b (AM 1895.399)  
パレット  
28D (AM 1895.858)
- 1843 号墓  
土器  
B74c (BoS 198)  
F10 (AM 1895.382)
- 1845 号墓  
土器  
B3a (AM 1895.752)  
P45a (PhU E14899)  
P53 (UC 5876)  
F11a (FW E37.1896)
- 1846 号墓  
土器  
P40a (Be 13072)
- 1847 号墓  
土器  
N30 (PhU E1409)  
D41S (LP 117\*)  
R36 (UC 4485)  
ミニチュア土器 (UC 4487)  
ビーズ・ペンダント  
土製, 礫 (UC 4493)  
カーネリアン, 光沢のある滑石 (UC 4492)  
カーネリアン, 貝 (UC 4494)  
額ペンダント, 貝 (UC 4488)  
額ペンダント, 貝 (UC 4489)  
骨・牙製品  
ピン, 象牙, 破片 (UC 4490)  
スプーン, 象牙 (UC 4491)  
そのほか  
マラカイトの塊 (UC 4486)  
礫 (UC 36043)
- 1849 号墓  
土器  
D67c (AM 1895.575)  
石器  
ナイフ, フリント (Be 12906)  
ナイフ, フリント (AM 1895.1006)  
ナイフ, フリント (UC 6234a)  
ナイフ, フリント (UC 6234b)  
ナイフ, フリント (UC 6234c)  
ナイフ, フリント (UC 6235a)  
ナイフ, フリント (UC 6235b)
- 1850 号墓  
土器  
D17b (BFA 97.121)  
R 土器, 体部片, M (UC 36073)  
L12c (AM 1895.785)
- 1851 号墓  
土器  
B79a (BoS 196)  
P14 (PhU E1778)  
D68 (UC 4242)  
L7b (MM 4478)
- 1852 号墓  
土器  
B1b (AM 1895.349)  
D43 (AM 1895.571)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5271A)  
櫛, 骨 (AM 1895.938)
- 1853 号墓  
土器  
P40a (MaM EA9)



- D36a (MM 3108)
- 1854 号墓  
そのほか  
ピン, 銅 (UC 5072)  
磔 (UC 36044)
  - 1856 号墓  
土器  
L12b (OIC E931)  
石器  
魚尾形ナイフ, フリント (UC 4826)  
魚尾形ナイフ, フリント (UC 4827)  
そのほか  
ピン, 銅 (UC 5074)  
メイスヘッド, 閃緑岩 (MM 1027)  
磔 (UC 5167)  
磔 (UC 36045)
  - 1857 号墓  
土器  
40e (KN 4341)  
石器  
ナイフ, フリント (AM 1895.1026)
  - 1858 号墓  
土器  
18d (BM EA67421)  
19b (AM 1895.245)  
26b (Be 13011)  
ビーズ・ペンダント  
石, サンゴ, ザクロ石, 玉髄, カーネリアン (UC 4443)  
ペンダント, ラピスラズリ (UC 4442)  
骨・牙製品  
櫛, 象牙 (UC 4444)  
タスク?, 象牙 破片 (UC 4445)  
そのほか  
ワイヤー, 銅 (UC 4441)
  - 1859 号墓  
そのほか  
磔 (UC 36046)
  - 1860 号墓  
土器  
B26a (BoS 197)  
パレット  
91P (RM 18.1)  
そのほか  
タグ, アラバスター (UC 5188)  
タグ, アラバスター (UC 5189)
  - 1861 号墓  
そのほか  
タグ, 泥岩 (AM 1895.866)
  - 1862 号墓  
土器  
P7 (UC 5834)
  - 1863 号墓  
土器  
P22, M184 (KN 4334)  
P22 (FW E43.1896)  
P26b (BoS 177)  
P93d (OIC E838)  
P93d (PhU E1799)  
P95b (FW E42.1896)  
N24, 破片 (AM 1895.506 + UC 5376)  
石製容器  
151, 石灰岩 (UC 5375A)  
パレット  
24J, 破片 (OIC E876)  
57N (UC 5375)  
ビーズ・ペンダント  
カーネリアン, 珪岩 (UC 5005)  
骨・牙製品  
櫛, 象牙 (UC 5371)  
腕輪, 象牙 (UC 5372)  
腕輪, 象牙 (UC 5373)  
そのほか  
円筒印章 (UC 5374)
  - 1864 号墓  
土器  
B27a (BoS 187)  
P22 (BoS 253)
  - 1865 号墓  
土器  
B72c (UC 4348)  
B78b (UC 4349)  
パレット  
101G (UC 4345)  
石器  
鎌刃, フリント (AM 1895.1011)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙 (UC 4346)  
ヘアピン, 象牙 (UC 4347)
  - 1866 号墓  
土器  
B35a (AM 1895.313)  
B35d, M40 (AM 1895.1192)  
石製容器  
花崗岩 (UC 6225)?  
石器  
ナイフ, フリント (UC 4268)  
骨・牙製品  
タグ, 象牙, 破片 (UC 4269)  
タグ, 象牙, 破片 (UC 4270)  
タグ, 象牙, 破片 (UC 4271)
  - 1868 号墓  
土器  
B21c, M (PhU E1468)  
B57b (Be 12967)  
P11F (UCW 165212)  
93d (OIC E737)  
石器  
石刃, フリント, 破片 (UC 4971)

- 1869 号墓  
土器  
P 土器, 体部片 M235 (UC 5812)  
D67c (OIC E768)
  - 1870 号墓  
土器  
P22 (Be 12985)  
パレット  
100/101 (BoS 329)
  - 1871 号墓  
土器  
B47 (LP 152)  
P5c (AM 1895.384)  
D71 (AM 1895.339)  
パレット  
103J (UC 4495)  
103J (UC 4496)  
ビーズ・ペンダント  
凍石, カーネリアン (MAA 1947.2393B)  
ペンダント, 硬砂岩 (CB E1231)  
骨・牙製品  
タスク, 象牙 (UC 4497)  
タスク, 象牙 (UC 4498)  
タグ, 象牙 (UC 4499A)  
タグ, 象牙 (UC 4499B)  
そのほか  
礫 (OIC E798)
  - 1872 号墓  
土器  
B74b (CS. JLS.21133)
  - 1873 号墓  
土器  
D45 (AM 1895.577)  
D68 (AM 1895.582)  
骨・牙製品  
櫛, 象牙 (CB E.1303)
  - 1875 号墓  
土器  
D9g as (BM EA75158)  
パレット  
91H (KN 4259)  
不整形, 破片 (UC 4666)  
骨・牙製品  
指輪, 象牙 (UC 4665)  
棒, 象牙 (UC 4664)  
櫛, カバ牙 (AM 1895.948)  
そのほか  
礫 (UC 36047)
  - 1876 号墓  
土器  
B31 (UC 5695)
- そのほか  
礫 (UC 6231)
  - 1877 号墓  
パレット  
6 (AM 1895.859)
  - 1878 号墓  
土器  
B27c (GM A1722/3)  
B72b (UC 5898)  
B72b (UC 5900)
  - 1880 号墓  
土器  
F12 (AM 1895.358)  
骨・牙製品  
ヘアピン, 象牙 (UC 5271)
  - 1881 号墓  
土器  
B25h as (UC 36311)
  - 1883 号墓  
パレット  
92M (Be 12879)
  - 1884 号墓  
ビーズ・ペンダント  
粘土, 滑石, 貝 (UC 5008)
  - 1885 号墓  
骨・牙製品  
鉢, 象牙 (UC 5207)
  - 1886 号墓  
土器  
P22 (UC 5864)  
F58b (AM 1895.768)  
そのほか  
礫 (UC 36048)
  - 1887 号墓  
土器  
B27c (UC 5691)  
F91 (AM 1895.465)
  - 1888 号墓  
土器  
B27d (OIC E1849)  
P22 (UC 5861)  
D35b (AM 1895.591)
  - 1889 号墓  
土器  
B25h (CNH 31485)
  - 1890 号墓  
そのほか  
礫 (UC 36049)

- 1891 号墓  
パレット  
80P (UC 4769)
- 1893 号墓  
土器  
B11b (MuM 1098)  
B57b, M64 (AM 1895.315)  
石器  
石刃, フリント (UC 4972)  
骨・牙製品  
腕輪, 象牙 (UC 5658)  
腕輪, 象牙 (UC 5659)
- 1894 号墓  
土器  
P22 (MaM EA8)
- 1895 号墓  
土器  
11d (CB E.880)
- 1898 号墓  
石器  
石刃, フリント (Be 12900)  
ダガー, フリント (UC 4828)
- 1899 号墓  
土器  
P77 (Be 13015)  
石製容器  
137, 硬砂岩 (AM 1895.212)  
パレット  
破片 (KN 4270)  
ビーズ・ペンダント  
蛇紋岩, 方解石, 滑石, カーネリアン (AM 1895.873)  
石器  
魚尾形ナイフ, フリント (LC 56.20.42)  
骨・牙製品  
腕輪, 象牙 (UC 4447)  
腕輪, 象牙 (UC 4448)  
その他  
腕輪, アラバスター (UC 4446)
- 1900 号墓  
土器  
P68b (UC 4161)  
その他  
タグ, アラバスター (CB E.1308)  
タグ, アラバスター (UC 4162)
- 1903 号墓  
その他  
ピン, 銅 (UC 4598)  
貝 (UC 4597)
- 1904 号墓  
土器  
L38a (UC 5998)
- パレット  
91T (MM 2375)
- 1905 号墓  
土器  
F15 (AM 1895.351)  
その他  
メイスヘッド, 斑岩 (UC 5134)
- 1906 号墓  
土器  
B58a (PhU E14383)  
B63b (PhU E17531)  
R81, M1 (AM 1895.683)  
パレット  
92P (UC 4608)  
石器  
尖頭器, フリント (UC 4609)  
尖頭器, フリント (UC 4610)  
ナイフ, フリント (UC 4611)
- 1907 号墓  
パレット  
92D (BoS 320)  
その他  
コーン, 粘土 (UC 5078)  
コーン, 粘土 (UC 5080)
- 1908 号墓  
土器  
B3a (OIC E895)  
その他  
縄 (UC 5059)
- 1909 号墓  
石器  
魚尾形フリント製石器 タイプ I, 12 (Be 12898)
- 1911 号墓  
土器  
F11a (AM 1895.381)
- 1913 号墓  
土器  
B39a, M320 (Be 13039)
- 1914 号墓  
土器  
B56a (UC 5880)
- 1916 号墓  
ビーズ・ペンダント  
カーネリアン (MAA 1947.2391B)
- 1917 号墓  
土器  
詳細不明土器片 (LP 175\*)  
その他  
礫 (UC 36050)

- 1934 号墓?  
土器  
N63 (UC 5725)
- 1954 号墓?  
パレット  
98N (UC 4748)
- B 墓地**
- B2 号墓  
土器  
B18c (OIC E1947)
- B3 号墓  
土器  
P82b (AM 1895.420)
- B4 号墓  
土器  
P 土器 (PhU E14444)
- B8 号墓  
土器  
B74a (PhU E17542)
- B11 号墓  
そのほか  
礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1165)
- B15 号墓  
ビーズ・ペンダント  
ファイアンス (UC 34346)
- B17 号墓  
土器  
L16 (PhU E14758)
- B18 号墓  
土器  
P11b (BFA 97.130)  
P22 (UC 6063)
- B19 号墓  
土器  
N 土器, 体部片 (UC 4391)  
D41, 底部片 (IAL 51/197 + BM EA75154)  
L7b (OIC E1623)  
石器  
剥片, フリント (UC 4390)
- B20 号墓  
土器  
N30 (UC 5726)  
R94 (CB E.909)
- B25 号墓  
土器  
B25c (CS. JLS.21106)  
P95a (個人蔵)  
P95b (MM 3105)  
R69d (CS. JLS.21114)  
石製容器
- 2, アラバスター (UC 6213)
- B27 号墓  
土器  
W23 (LP 131)  
D8b (LP 116)  
R69b (PhU E1747)
- B29 号墓  
土器  
N28, 土器片 (AM 1895.504)
- B32 号墓  
土器  
R69c (MH 1909.20A)
- B33 号墓  
土器  
P22 (RM 18.3)
- B35 号墓  
土器  
R69c (AM 1895.727)  
L12 as (OIC E1755)
- B44 号墓  
土器  
B46 (PhU E14868)
- B50 号墓  
土器  
D43 (PhU E15259)  
D84 (AM 1895.628)  
D85 (AM 1895.632)  
ビーズ・ペンダント  
凍石, カーネリアン, 銅, 赤鉄鉱 (AM 1895.889)  
カーネリアン, ファイアンス, 凍石 (Be 12838 + 12839)?  
カーネリアン, 光沢のある石 (Be 12844)  
マラカイト (UC 73047)
- B51 号墓  
ビーズ・ペンダント  
カーネリアン, 銅, ファイアンス (UC 5007)
- B55 号墓  
土器  
B18K (UC 5686)
- B61 号墓  
土器  
D36a as (OIC E865)
- B62 号墓  
土器  
B27f (OIC E1799)
- B64 号墓  
土器  
W19?, 体部片 (UC 6207)
- B65 号墓

<u>土器</u>	B75a (EM CG2053)	D8c (BMC P.1782)? D10, 体部片 (IAL 51/204)
•	B68 号墓	• B95 号墓
<u>土器</u>	B66b as (CB E814)	<u>土器</u>
•	B70 号墓	P40a (UC 6003)
<u>土器</u>	B75 (PhU E12226)	• B96 号墓
•	B72 号墓	<u>土器</u>
<u>土器</u>	B27d (OIC E774) B27d (OIC E1798)	P22 (BoS 236)
<u>パレット</u>	103 (UC 4739)	• B98 号墓
•	B77 号墓	<u>土器</u>
<u>土器</u>	B81b-c (CB E.1730)	P98b (LP 98)
•	B78 号墓	• B99 号墓
<u>土器</u>	B82 (AM 1895.268) B82 (AM 1895.271) P56a (LP 86)	<u>土器</u>
•	B80 号墓	W23 (KN 4385) D67c, 破片 (CB E.1927) R69b (BoS 428)
<u>土器</u>	L53 as (PhU E14432)	<u>石製容器</u>
•	B81 号墓	99, 斑岩 (UC 4978)
<u>パレット</u>	不整形 (UC 4772)	<u>パレット</u>
•	B83 号墓	魚形 (LC 56.20.457A)
<u>土器</u>	B21c (Be 13035) B21c (UC 5690) B29c (AM 1895.270)	<u>石器</u>
•	B84 号墓	ナイフ, フリント (UC 4830)
<u>パレット</u>	14T as (OIC E891)	<u>ビーズ・ペンダント</u>
•	B86 号墓	額ペンダント, 貝 (AM 1895.980) 額ペンダント, 貝 (Be 12861)
<u>土器</u>	B22a (CB E852) B57b (KN 4312)	<u>そのほか</u>
•	B89 号墓	礫 (UC 5984)
<u>土器</u>	L12 (AM 1895.660)	• B100 号墓
<u>パレット</u>	38H (UC 4736)	<u>石製容器</u>
•	B91 号墓	38, 石灰岩 (AM 1895.164)
<u>土器</u>	B39a (RM 18.6) B 土器, 破片, M121 (AM 1895.329) P22 (BFA 97.138) P22 (UC 5988) W 25 (AM 1895.540)	• B101 号墓
		<u>土器</u>
		W14 (FW E73.1896) D2 (AM 1895.566)
		• B102 号墓
		<u>土器</u>
		L7 (AM 1895.383) L11d? (BFA 97.141) C54 (AM 1895.469) C86 (AM 1895.478) C91 (PhU E1418)
		• B104 号墓
		<u>土器</u>
		B53c (UC 5710)
		• B105 号墓
		<u>土器</u>
		B56 (MC 4438) P23a (PhU E14922)
		• B110 号墓
		<u>そのほか</u>
		メイスヘッド, M23, 石灰岩 (AM 1895.229)

- B115 号墓  
土器  
B64a (PhU E1465)
- B116 号墓  
土器  
B74a (PhU E14853)
- B117 号墓  
ビーズ・ペンダント  
瑪瑙, ザクロ石, 光沢あり水晶, 凍石 (UC 5035)  
骨・牙製品  
腕輪, 象牙 (UC 4565)  
腕輪, 象牙 (UC 4566)  
櫛, 象牙 (UC 4567)
- B120 号墓  
土器  
B23f (CB E.1728)  
P54 (CB E.873)  
D83 (MM 3109)  
石製容器  
74, 凍石 (UC 5606)
- B121 号墓  
土器  
B25b (UC 5685)  
B25b (UC 6000)  
パレット  
92D (Be 12884)
- B123 号墓  
土器  
B24b (MM 3090)  
P 土器鉢, 口縁部片, M (UC 5938)  
そのほか  
礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1163)
- B124 号墓  
そのほか  
穿孔円盤, 焼成粘土 (AM 1895.822)
- B126 号墓  
そのほか  
礫, 茶色碧玉 (AM 1895.1166)
- B129 号墓  
土器  
P22 (OIC E1969)  
F80 (AM 1895.510)
- B133 号墓  
土器  
B11f (RM 18.2)  
パレット  
65D (UC 4695)
- B137 号墓  
土器  
B23d (UC 5689)

## T 墓地

- T2 号墓  
土器  
R24 (CB E.8761)  
ビーズ・ペンダント  
櫛, 骨 (AM 1895.904)
- T3 号墓  
土器  
D17a as (CS JLS.21107)  
D43c, 体部片 (IAL 51/203)
- T4 号墓  
土器  
B11F, 破片 (AM 1895.1194B + 1895.1194C)  
B35c (AM 1895.1184)  
B47 (AM 1895.1188)  
B57b, 破片, M (AM 1895.1193 + 1895.1194A)  
B57b (AM 1895.1194A)  
B62a (AM 1895.1186)  
B72a (AM 1895.1187)  
B72a (AM 1895.1189)  
B74a (AM 1895.1191)  
B74b (AM 1895.1190)  
B 土器, 破片 (AM 1895.1194D + 1895.1194E + 1895.1194G)  
P22 (AM 1895.1194I)  
P22 (AM 1895.1197)  
P22, 土器片 (AM 1895.1194J)  
P56a (AM 1895.1195)  
P56a (AM 1895.1196)  
P 土器, 破片 (AM 1895.1194H)  
P 土器, 破片 (AM 1895.1194K)  
F14 (AM 1895.1202)  
R65-66 (Be 12937)  
R81 (AM 1895.711)  
R81 (AM 1895.1201)  
R91a (AM 1895.731)  
R91a (AM 1895.732)  
R91a (AM 1895.771)  
R91a (AM 1895.1200)  
R93a (AM 1895.1199)  
L36a (AM 1895.1198)  
詳細不明土器片 (AM 1895.1213)  
石製容器  
69, 大理石 (UC 6224)  
118, アラバスター (AM 1895.1183)  
125, 石灰岩 (AM 1895.1181)  
二連接坏, アラバスター (AM 1895.1182)  
パレット  
3D (AM 1895.1204)  
38N (AM 1895.1203)  
石器  
石刃, フリント (AM 1895.1209)  
骨・牙製品  
櫛, 骨 (AM 1895.1207)  
タスク, カバ牙 (AM 1895.1205)  
タスク, カバ牙 (AM 1895.1206)  
そのほか  
卵, ダチョウ (AM 1895.1208)  
貝 (UC 5137)  
赤鉄鉱, 破片 (AM 1895.1210)

- 礫 (UC 5135)  
 礫 (UC 5136)  
 礫 (UC 5985)
- T5 号墓  
土器  
 P22 (AM 1895.808)  
 P 土器, 破片 (AM 1895.1254)  
 F31b (AM 1895.371)  
 W19 (AM 1895.525)  
 W19 (AM 1895.526)  
 R1e (AM 1895.758)  
 R1e (AM 1895.759)  
 R4 (AM 1895.754)  
 R4 (AM 1895.760)  
 R4 (AM 1895.761)  
 R23b (OIC E1790)  
 R34c as (HM D.1932.248)  
 R67 (AM 1895.697)  
 R81 (AM 1895.694)  
 R81 (AM 1895.708)  
 R81, M251 as (AM 1895.701)  
 R81 (AM 1895.706)  
 R81 (AM 1895.702)  
 R81, 土器片 (AM 1895.1255)  
 R91a (AM 1895.721)  
 R91a (AM 1895.735)
- 石製容器  
 40, 粗粒玄武岩 (AM 1895.170)  
 48, 角礫岩 (AM E.2794)  
 51, 角礫岩 (AM 1895.171)  
 62, 粗粒玄武岩 (AM 1895.173)  
 62, 粗粒玄武岩 (AM 1895.175)  
 137, 粗粒玄武岩 (AM 1895.213)
- パレット  
 80B (AM 1895.832)
- ビーズ・ペンダント  
 カーネリアン, 玉髄, 金箔, ラピスラズリ (AM 1895.888)  
 カーネリアン, ザクロ石, 玉髄, ラピスラズリ, 金箔 (AM 1895.893)  
 額ペンダント, 角礫岩 (AM 1895.982)
- その他か  
 マラカイト (UC 5112)  
 方鉛鉱 (UC 5112)  
 礫 (UC 5163)
- T6 号墓  
土器  
 詳細不明土器片 (LP 67\*)
  - T8 号墓  
土器  
 L7c (PhU E14422)
  - T9 号墓  
土器  
 R1 (UC 5766)  
 R23b (UC 5765)  
 R23b (OIC E820)  
 R24 (UC 5764)  
 L7c (Be 12977)
- その他か
- 銛, 銅 (AM 1895.971)
- T10 号墓  
土器  
 B14 (OIC E930)  
 R23b (OIC E830)  
 R23b (OIC E927)  
 R66 (Be 12936)
- パレット  
 80H (MM 2383)
- その他か  
 棒, 角礫岩 (UC 5184)
- T11 号墓  
土器  
 P22 (FW E11.1895)  
 詳細不明土器片 (LP 74\*)
- 石器  
 石刃, フリント (UC 4780)
- T12 号墓  
土器  
 L7 (PhU E14419)
  - T14 号墓  
土器  
 B53a (PhU E14889)  
 58a (OIC E1792)  
 P23a (OIC E923)  
 P25c (BM EA67425)  
 R1b (AM 1895.753)  
 R34c (LP 76\*)
- パレット  
 46R as (RM)
- 骨・牙製品  
 ヘアピン, 象牙, 破片 (UC 5272)  
 ヘアピン, 象牙 (MM 1020)
- T15 号墓  
土器  
 R 土器短頸壺 (PhU E1737)
  - T16 号墓  
土器  
 P11d (UC 4352)  
 P82b (BFA 97.75)  
 P 土器, 体部片 (UC 6208)  
 P 土器, 体部片 (UC 6209a)  
 P 土器, 体部片 (UC 6209b)  
 R24 (AM 1895.743)  
 R67 (UC 4350)  
 R85 (AM 1895.709)  
 L7b (UC 4351)
- 石製容器  
 39, 閃長岩 (UC 4354)  
 55, 玄武岩 (UC 4356)  
 84, 蛇紋岩 (UC 4355)  
 149, 角礫岩 (UC 4353)
- パレット  
 57 (BoS 328)
- ビーズ・ペンダント

- カーネリアン, 光沢あり滑石 (UC 4358)  
額ペンダント, 貝 (UC 4357)
- そのほか
- 礫 (KN 4280)  
礫 (KN 4281)  
礫 (UC 5986)  
マラカイト片 (UC 6211)
- T17号墓  
土器  
P93a (CB E.1770)  
P95a (OIC E807)  
P土器, 体部片 (UC 36087)
- そのほか
- マラカイトの塊 (UC 5113)
- T18号墓  
土器  
P23a (OIC E1757)  
W41, 彩色, M (AM 1895.543)  
L28a (MM 3136)
- パレット
- 78D (UC 6037)
- T19号墓  
土器  
R1 (UC 5747)
- T20号墓  
土器  
R1b (UC 4647)  
R21b (UC 4648)
- 石製容器
- 15, 閃長岩 (UC 4649)  
壺?, 破片, アラバスター (UC 6210)
- T21号墓  
土器  
W31 (PhU E1647)
- パレット
- 26D (AM 1895.857)
- T22号墓  
石器  
魚尾形ナイフ, フリント (Be 12895)  
魚尾形ナイフ, フリント (Be 12899)
- そのほか
- 銅製角 (AM 1895.983)  
メイスヘッド, M1, 閃緑岩 (AM 1895.221)
- T23号墓  
土器  
D67? (LP 135\*)  
D69b (PhU E14465)
- 石製容器
- 1, 大理石 (UC 6215)
- T24号墓  
骨・牙製品  
タグ, 象牙 (AM 1895.917)  
タグ, 骨 (AM 1895.133)
- T25号墓  
土器  
P93c (BC 940.63)  
P93c (BoS 176)  
P98b (CNH 31478)  
W43 (AM 1895.520)  
R23a (UC 5760)  
R23a (UC 5772)
- ビーズ・ペンダント
- ペンダント?, 貝 (UC 73034)
- T26号墓  
土器  
W43 (MM 4429)  
L53r as (KN 4359)
- パレット
- 23T (BoS 331)
- T28号墓  
土器  
R66 (AM 1895.739)
- T29号墓  
そのほか  
粘土 (UC 5036)  
粘土 (UC 5037)  
粘土 (UC 5038)  
粘土 (UC 5039)  
ラピスラズリ (Be 12848)  
円筒印章, 石灰岩 (Be 12848)  
礫 (UC 5987)
- T31号墓  
石製容器  
25 as, 大理石 (AM 1895.161)
- T32号墓  
土器  
B37a (AM 1895.259)  
B37a (PhU E1432)  
P22 (AM 1895.456)  
P22 (CNH 31457)  
P22 (PhU E14794)  
P22 (OIC E1753)  
P73 (PhU E1789)  
P75 (AM 1895.440)  
P93b (PhU E1762)  
R66 (Be 12938)
- T33号墓  
土器  
W71 (AM 1895.556)
- パレット
- 17U (UC 4710)
- T35号墓  
土器  
B58a (FW E21.1896)  
L12b (OIC E939)
- T36号墓  
土器



P 土器短頸壺 (PhU E1811)  
F17 (AM 1895.374)  
F17 (PhU E1542)  
F34b (AM 1895.681)  
D21 (Be 13073)  
L52 (AM 1895.637)  
L52 (MM 2256)  
L86 (AM 1895.664)

石製容器

80, 蛇紋岩 (UC 5409)  
93, アラバスター (UC 5410)

- G6 号墓  
土器 L14b (AM 1895.646)

- T38 号墓

土器

R84 (UC 5928)

- T39 号墓

土器

W62 (DO EG1439)  
L7b (FW E77.1896)  
L17b (CB E.8751)  
L86 (MM 4446)

- T46 号墓

土器

R94 (OIC E738)

- T51 号墓

土器

R94 as (OIC 738)

- T52 号墓

土器

R85 (AM 1895.639)

- T53 号墓

土器

L53K as (Be 12960)

- T55 号墓

土器

B38c (AM 1895.337)  
W61 (BoS 162)

- T56 号墓

そのほか

礫 (RM 18.1)

- T57 号墓

土器

W43 (LP 132\*)

骨・牙製品

鏃, 骨 (AM 1895.967)

**G 墓地**

- G2 号墓

土器

W37 (AM 1895.559)

- G3 号墓

土器

L8 (AM 1895.405)

